

中山修一著作集 1 4

外輪山春雷秋月

はじめに——著作集 14 の公開に際して

二〇一三（平成二五）年の三月末日をもって私は、神戸大学を定年退職し、それ以降、南阿蘇（南郷谷）の小庵に蟄居し、執筆活動に専念することを決意しました。神戸大学在職中は、学術論文の執筆や講演活動などが研究上の主要な柱となっていました。定年後は、それに加えて、詩歌や小説、随筆などの創作表現のみならず、わが熊本の郷土人の紹介にも積極的に関心を広げ、取り組んでまいりました。

ここに公開する著作集 14 『外輪山春雷秋月』は、副題に示していますように、高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子といった火の国の女が、青鞥の女たち、とりわけ平塚らいてうと富本一枝と、どのような友愛を織りなしてきたのかを描いた、いわば「肥後烈女伝」ということになります。

もともと私は、著作集 12 『研究追記——記憶・回想・補遺』の第二部「わが肥後偉人点描」におきまして、高群逸枝と蔵原惟人をそれぞれに取り上げる予定にしていました。といいますのも、高群は熊本県の生まれであり、同じく蔵原の両親が熊本県出身であり、他方で、高群が女性史研究の道に進む際に発足した著作後援会に富本一枝が加わっていたことを、そしてまた、プロレタリア文化運動の中心的存在であった蔵原が官憲から追われているところをかくまったのが富本憲吉・一枝夫妻だったことを、これまでの自身の研究から気づいていたからです。しかし、実際に書くために資料を読み始めてゆきますと、高群は、富本一枝以上に青鞥の女であった平塚らいてうと深い交わりがあったことがわかってきました。すでにそのときまでに、「わが肥後偉人点描」において中村汀女と石牟礼道子を取り上げていましたので、あっという間に、私の脳裏にあって高群逸枝、中村汀女、そして石牟礼道子の三人の肥後人が、青鞥の平塚らいてうと富本一枝とに結び付き、この五人の女性たちのあいだには、百年余にわたって歴史的連珠が展開され、何か強い友愛のようなものがそこに横たわっていたのではないかという直感が、迫ってきました。それであれば、高群と蔵原を単独で取り上げるよりも、火の国の女たちと青鞥の女たちとが繰り広げる絵錦のなかにふたりを配した方が、よりその存在の意味が鮮明化するにちがいないと思い立ち、この「火の国の女たち——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞥の女たちとの友愛」が構想されてゆきました。

しかし私は、女性史の専門家でも、近代文学や古代史を専攻する者でもありません。したがって、書くには自ずと限界があります。それでも書きたいと思ったのは、先達の郷土人のもつ激しい情念の一端を知りたかったからにほかなりません。火の国とは、ご存知のとおり、東に大阿蘇を、西に不知火海を抱く、肥後の国の別称です。私もいまこの阿蘇の地に隠れるようにして住み、文をつくっています。大事な記憶が遠ざかる前に、「火の国の女たち」を自分自身の手で書くことによって、阿蘇の噴煙や不知火の蜃気楼に似た彼女たちの熱い思いに直接触れてみたいと考えます。自分の手慰みに書いた素人の文ではありますが、ご興味をもっていただけるようでしたら、熊本にゆかりの方々、そして、女性史をはじめとする関連諸学の専門家の方々に、今後ご批評をちょうだいできれば幸いに思います。

著作集 1 4 『外輪山春雷秋月』
はじめに——著作集 1 4 の公開に際して

二〇二四年四月二四日
陽春の阿蘇南郷谷の小さきわが庵にて
中山修一

著者について

中山修一（なかやま・しゅういち）

1948年12月、熊本市に生まれる。熊本県立熊本高等学校時代は、新聞部にて部活を楽しむ。東京教育大学農学部林学科に入学、木材工学を専攻する。学生運動の影響でほとんど授業は行なわれず、ヨット部に所属し館山と葉山で年間一〇〇日以上の中泊生活を送る。卒業に引き続き、東京教育大学大学院教育学研究科修士課程において美術学（工芸・工業デザイン）を専修する。その後、東京教育大学は移転し筑波大学となる。

1974年4月に神戸大学教育学部の助手に採用される。それ以降、講師、助教授、教授へ昇格。主としてプロダクト・デザインの実技とデザイン史の講義を担当する。組織としての教育学部は、職を得てしばらくしたのち発達科学部に改組され、さらに現在は、国際文化学部との合併により、国際人間科学部へと改称。

在職中、学内にあっては、神戸大学附属図書館副館長を務め、学外にあっては、大阪教育大学教育学部、長崎大学教育学部、国立高岡短期大学（現在の富山大学芸術文化学部）、および静岡文化芸術大学デザイン学部等で、非常勤講師として「デザイン史」の集中講義に長年従事する。また、海外においては、1995年に、ロンドンのウィリアム・モリス協会が本部を置く〈ケルムスコット・ハウス〉にて招待講演を行ない、さらに2010年には、上海の華東理工大学美術・デザイン・メディア学部に招かれて二日間の連続講演を行なう。

他方、1987-88年にブリティッシュ・カウンシル（British Council）のフェローとして、続いて1995-96年に文部省（現在の文部科学省）の長期在外研究員として渡英し、主として王立美術大学（Royal College of Art）とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）を利用して英国デザインの歴史研究に当たる。

1987年から2013年まで英国のデザイン史学会（Design History Society）の会員。2003-14年、ブライトン大学客員教授（Visiting Professor at the University of Brighton）。また、2008年に学術雑誌 *The Journal of Modern Craft*（Berg Publishers, Oxford）が創刊されたおりには、国際諮問委員会（International Advisory Board）の委員を務める。

2013年3月に定年により神戸大学を退職し、それ以降、阿蘇山中の庵に蟄居し、執筆活動に専念する。専門はデザイン史学。

現在、神戸大学名誉教授、博士（学術）。英国にあっては、王立芸術協会（Royal Society of Arts）の終身会員（Life Fellow）、およびウィリアム・モリス協会（William Morris Society）の終身会員（Life Member）。

訳書（共訳を含む）に、ノエル・キャリントン『英国のインダストリアル・デザイン』（晶文社、1983年）、ハワード・ヒバード『ミケランジェロ』（法政大学出版局、1986年）、ステュアート・マクドナルド『美術教育の歴史と哲学』（玉川大学出版部、1990年）、アヴリル・ブレイク編『デザイン論——ミッシャ・ブラックの世界』（法政大学出版局、1992年）、ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』（晶文社、1993年）、およびポール・グリーンハルジュ編『デザインのモダニズム』（鹿島出版会、1997年）。

中山修一著作集 1 4

外輪山春雷秋月

火の国の女たち

——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす

青鞥の女たちとの友愛

2024 年 4 月

著作集 14 『外輪山春雷秋月』
火の国の女たち
——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞥の女たちとの友愛
目次

中山修一著作集 14

外輪山春雷秋月

火の国の女たち

——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞥の女たちとの友愛

目次

緒言	三
第一章 高群逸枝と平塚らいてうの邂逅と『婦人戦線』の創刊	四
第二章 平塚らいてうと尾竹紅吉の「同性の恋」の顛末	一八
第三章 『女人藝術』からアナーキズム派が身を引く	三一
第四章 富本憲吉・一枝夫妻に蔵原惟人がかくまわれる	四五
第五章 高群逸枝の『婦人戦線』の廃刊と「森の家」での研究開始	六三
第六章 『大日本女性史 母系制の研究』の完成	八二
第七章 『青鞥』創刊以降の婦人運動家たちの「恋愛創生」	九九
第八章 中村汀女の句誌『風花』の誕生と青鞥の女たち	一一六
第九章 志村ふくみの染織家への道を支える富本憲吉・一枝夫妻	一二九
第一〇章 戦後の高群逸枝の女性史学確立の過程	一三七
第十一章 夫の姉妹からの援助、「望郷子守唄」の建碑、そして最期	一五二
第十二章 夫による『高群逸枝全集』の編集と石牟礼道子の高群継承の決意	一七三
第十三章 高群逸枝を顕彰する力とそれに水を差す力のはざままで	二〇九
第十四章 橋本憲三の死と遺された橋本静子と石牟礼道子	二五三
第十五章 志村ふくみ監修の能衣装による石牟礼道子の「沖宮」初演	三〇五
結言	三三一
索引	三三四

凡例

- 一. 本文中『 』は書名、雑誌名、新聞名を示し、「 」は論文や詩、記事等の表題を表わしている。また、強調すべき固有の事象についても「 」が用いられている。
- 一. 本文中《 》は作品名を示し、〈 〉は建物の名称を表わしている。
- 一. 本文中の【 】は図版の参照番号を指し示している。
- 一. 引用文および引用語句内の〔 〕は本著作集の著者による補足である。

緒言

ここで取り上げるのは、高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子の三人の熊本ゆかりの女たちです。そして、それを相結ぶ仲介役として、平塚らいてうと富本一枝のふたりの青鞞の女を登場させます。まずは参考までに、下にそれら五人の生没年を書き記します。

平塚らいてう	1886（明治 19）年 2 月 10 日生－1971（昭和 46）年 5 月 24 日没。
富本一枝	1893（明治 26）年 4 月 20 日生－1966（昭和 41）年 9 月 22 日没。
高群逸枝	1894（明治 27）年 1 月 18 日生－1964（昭和 39）年 6 月 7 日没。
中村汀女	1900（明治 33）年 4 月 11 日生－1988（昭和 63）年 9 月 20 日没。
石牟礼道子	1927（昭和 2）年 3 月 11 日生－2018（平成 30）年 2 月 10 日没。

この五人には、共通点が見受けられます。それは、それぞれがそれぞれの立場から、時代に苦しみ、批判に晒され、社会と闘ったという点です。しかし、「個」あるいは「孤」という存在のあり方から少し焦点を引いて、青鞞の女である平塚らいてうと富本一枝を縦糸に、肥後の女である高群逸枝と中村汀女、それに加えて石牟礼道子を横糸として編み込んでゆきますと、そこにはひとつの絵柄が浮き出てきます。この五人が織りなす世界には、明らかに女同士の強い友愛が存在し、それが美しい生き姿となって、ひとつの時空が構成されていたのです。

平塚らいてうが生まれたのが一八八六（明治一九）年、一番若い石牟礼道子が没するのが二〇一八（平成三〇）年です。このふたつの事象のあいだに、実に一三二年もの長い時間が流れました。私は、この間のこの五人の友愛に満ちた連珠の実態を、彼女たちがそれぞれに向き合った当時の社会情勢を背景に配置しながら、ここで描いてみたいと思います。そのなかには、らいてうのパートナーで美術家の奥村博（のちに「博史」名を使用）、一枝の夫で陶工の富本憲吉、さらには、熊本県出身の両親のもとに生まれた、プロレタリア文学の理論的指導者であった蔵原惟人、加えて、高群逸枝の夫で専属編集者の橋本憲三も、男性役として登場します。こうした男女の群像から、どのような錦織が出現するのでしょうか。そして、その絵図にあって、肥後の女、つまりは火の国の女に共通する何かがかくつきりと現像されることになるのでしょうか。それを私は、見定めてみたいと思います。そして、それとは別に、この歴史記述の副産物として、近現代の日本女性の史的様相の一端が明らかになれば、女性史を専門としない人間である私にあって、さらに望外の喜びが付加されることになるでしょう。それでは、高群逸枝の生い立ちから筆を起こしてゆきたいと思います。

第一章 高群逸枝と平塚らいてうの邂逅と『婦人戦線』の創刊

一. 高群逸枝の生い立ち

高群逸枝は、一八九四（明治二七）年一月一八日、熊本県下益城郡豊川村南豊崎（現在の宇城市松橋町）の地で、父高群勝太郎、母登代子の長女として生まれました。当時勝太郎は、幾田尋常小学校の校長を務めており、その後転任するたびに一家は、新しい赴任地に引っ越しを繰り返していました。

逸枝は、詩をつくるのが好きな少女だったらしく、守富村所在の北部高等小学校に在籍しているときに、『十三才集』と題された小冊子を手づくりしています。下の和歌は、その詩集に収められている一首で、一三歳（満年齢の一二歳）の秋に詠んだものです。

母様にしかられて泣く夕には
虫もかなしやころころと鳴く¹

一九〇九（明治四二）年四月に熊本県師範学校女子部に入学するも、脚気の病に伏し、翌年退学。一九一二（明治四五）年四月、私立熊本女学校四年に編入すると、翌年、四年を修業したところで自主退学し、熊本市内の鐘紡紡績工場に入社して女工員になります。その後逸枝は、一九一四（大正三）年四月に西砥用尋常高等小学校の代用教員の職につき、その仕事を辞したのは、それから三年後の一九一七（大正六）年一〇月のことでした。その二箇月前に、将来夫となる、同県球磨郡大村（現在の人吉市）の生まれで三歳年下の橋本憲三（本名は憲蔵）と出会っています。このとき逸枝は二三歳になっていました。

二. 「火の国の女詩人」誕生

一九一八（大正七）年六月から十一月まで、阿蘇を通過して豊予海峡を渡り、四国巡礼の旅に出ます。次は、そのときに詠んだ一首です。

火の國の
火の山にきて見渡せば
わが古里は花模様かな²

このころから逸枝の執筆は本格化し、「娘巡礼記」を『九州日日新聞』に連載し、翌年には『九州新聞』に「愛の黎明」を書きます。そしてこの年、逸枝は憲三と婚約し、同居生活に入るのでした。一九二〇（大正九）年、東京へ向けて出発。その後、都落ちと出京、そして東京での転居を試みながら、その一方で、詩集の刊行が続いてゆきます。

この時期の最初の作品が、『日月の上に』（叢文閣、一九二一年）です。これは、生い立ちからそれまでの身の上に起生した出来事を自伝的物語詩として綴ったものでした。『日月の上に』が単行本として世に出る前段の話として、逸枝は、このように書き記しています。

「民衆哲学」という論文を書いて生田長江さんに送った。生田先生は、わざわざこの遠い家まで、春陽堂の『新小説』の編集者といっしょにこられ、押し入れに投げ込んでいた『日月の上に』も、おもいがけなく日の目をみることになった。……生田先生は、この詩の載った『新小説』大正十年四月号に、「日月の上にの著者について」と題して、つぎのような推薦文を書いてくださった³。

生田長江の「『日月の上に』の著者に就て」は、逸枝を「天才者」として高く評価するものでした。

高群逸枝さんは、まだ二十歳にも満たない婦人です。最初にその『民衆哲學』と伝ふ論文原稿を拝見した私は、単にそれを拝見しただけでも少なからず驚かされました。現代の日本に於て、これだけしつかりした推理と、これだけ鋭い直観とをもった婦人が、果して幾人あらうかと思ひました。けれどもその後、彼女の長篇詩『日月の上に』を拝見するに及んで、私は彼女が単に婦人として稀有の人であるのみならず、あまねく文壇思想界に於ける殆んど如何なる人々に比べても些の遜色を見ないほどの天才者であることを知りました⁴。

さらに生田は、こうも付け加えます。「しかも、常に噴出の機会をねらつてゐる地の底に火熱に近いものを感じさせないではゐません」⁵。まさしくここに、「火の国の女詩人」高群逸枝が、誕生したのでした。

雑誌発表後、同年六月に叢文閣から『日月の上に』が公刊されました。この詩集は、長編詩の「日月の上に」のほか、「五月の雨」「虐待される歌」「妻歌う日没時に」「夕べの哀歌」、そして「月漸く昇れり」の計六編から構成されていました。最後の「月漸く昇れり」のなかから主たる詩語を断片的に拾い上げ、順に並べてみますと、次のようになります。「妾」の読みは、おそらく「わらわ（わたし）」でしょう。あるいは「しょう」と読ませる意図があったかもしれません。

妾が女詩人として／九州から出て來た時に／お前が妾に呉れたものは／不自由と不幸とであつた
云つて呉れるな／貴女の御本領は詩作ですなどと／なぜ我々は／詩作の爲めに苦しまねばならないのか……
乙女をして歌はしめよ／太古の山に住ましめよ／女郎花をして咲かしめよ／しら雲をして飛ばしめよ
俗悪な世の／俗悪な群衆が／斯くも妾を不快にし／斯くも妾を飛び去らしめる……
ああ解放されたる展望よ！／よろこばしくも寂みしく妾は思ふ！／（月漸く昇れり！）
／野邊なる月が／妾の心を照る時に⁶

ここに挙げた詩片が、詩人として立つ「火の国の女詩人」たる逸枝の、おそらく初心にして同時に宣言文であり、そしてまた、ここにおいて、この人の生涯にあつて通底するも止むことのない主旋律が生み出されていたように思われます。

確かにこのとき、生田長江は、逸枝の詩才の発掘という実に大きな役割を果たしたのでした。他方で、生田を驚かせた『民衆哲学』は、次の年（一九二二年）に京文社から公刊される『私の生活と藝術』に所収されることになります。

さかのぼって『青鞵』が世に出るときにも、生田は背後にあって貴重な役を演じていました。以下は、『青鞵』の創刊者である平塚らいてうの回想です。らいてうは、新しい雑誌の誌名にかかわって生田に相談します。

生田先生も熱心にあれこれと考えて下さって、思いつく名を挙げているうちに、はたと膝を打って、「いっそブルー・ストッキングはどうでしょう。こちらから先にそう名乗って出るのもいいかもしれませんね」ということになったのでした⁷。

「ブルー・ストッキング」とは、一八世紀半ばの英国のモンタギュー夫人のサロンに集まっては男と一緒に芸術や科学について論談していた婦人がはいていた青色の靴下のことで、黒色でないがために、普通と違ったことをする女をからかう場合に使われる言葉でした。こうして、この「ブルー・ストッキング」を訳して「青鞵」の造語が生まれました。女性によってこれからはなされようとする文芸雑誌をとおしての活動が、世間の揶揄の的になるのを先取りしたというわけです。

このように、らいてうの雑誌『青鞵』と逸枝の詩集『日月の上に』が、人の目に留まるようになるにあたっては、共通する陰の立役者として生田長江がいました。当時生田は、文芸評論家としてのみならず、ニーチェの翻訳家としてもすでに社会に認められる存在にありました。さらに一九一九（大正八）年には緑葉社から『資本論第一分冊』を翻訳出版し、当時、社会主義に対して関心を抱くとともに、女性の社会進出にも理解を示す文学者だったのでした。

『日月の上に』と同じ年（一九二一年）に、『放浪者の詩』（新潮社）が生まれ、翌年（一九二二年）になると、評論集『私の生活と藝術』（京文社）に加えて、『美想曲』（金星堂）と『妾薄命』（金尾文淵堂）のふたつの詩集と、『胸を痛めて』（京文社）と題された恋歌集が刊行されます。そして、一九二三（大正一二）年に憲三が平凡社編集部に入社するころから、逸枝は、本人にとって六番目の詩歌集となる『東京は熱病にかゝつてゐる』の筆を進め、一九二五（大正一四）年一月に萬生閣から上梓されるのでした。

逸枝によりますと、「あいかわらず詩壇人からは、黙殺された」⁸ようです。しかしながら、逸枝の詩を正当に評価する人もいました。そのひとりが、平凡社の創業者であり、日本教員組合啓明会の結成にも尽力していた下中彌三郎でした。次に挙げるのは、その詩集につけられた、下中の「読んで下さい——序にかへて」の一節です。

詩は精神だ。そして感情だ。そして本能だ。そうだ、生命だ。

藝術の眞のすがたは詩だ。詩こそ眞の哲學だ。詩こそ眞の文明批評だ。

この意味で逸枝さんの詩は、哲學であり、文明批評である。さうだ、逸枝さんは正しく詩人であり、哲學者であり、文明批評家だ。そして女であり、日本女であり、人であり、日本人であり、人間である。

（中略）

逸枝さんは近代人の悩みのすべてを悩んでをる。逸枝さんの胸には近代人のあらゆる悩みが悉くこびりついてをる。その意味において逸枝さんは、日本歴史が生んだ日本女性の最後の——今日までの歴史においての——一人だ。

詩人であり、哲學者であり、文明評論家である女性を日本史の上に求めるなら、神話のなかに須世理媛があり、奈良朝に額田王があり、平安朝に清少納言があり、徳川末期に野村望東尼があり、明治末期に与謝野晶子があり、大正の初期に高群逸枝がある。

(中略)

今の日本には、勿論すぐれた女性がたくさんある。平塚明子さん、山川菊栄さん、奥むめおさん、みなすぐれた人達である。たゞ詩人、哲學者、文明批評家をかねた種類の女性の中には今のところ私は逸枝さんをその最もすぐれた一人としてあげるに躊躇しない⁹。

この『東京は熱病にかゝつてゐる』に心を奪われたのは、下中彌三郎だけではありませんでした。下中が当代の優れた女性として名を挙げていた「平塚明子さん、山川菊栄さん、奥むめおさん」のなかのひとりであり、かつて『青鞨』を創刊していた平塚らいてう、その人もそうでした。逸枝より八歳年長でした。らいてうは、逸枝の詩集との出会いについて、このように記述しています。

わたくしが高群さんの存在を知ったのは遅く、大正十五年ごろかとおもいます。ふとした機会に、高群さんの詩集「東京は熱病にかかつてゐる」ほか、二、三の彼女の文章を読んだときから、わたくしの魂は、すっかりこのひとつにつかまえてしまいました。

初めて高群さんの著作にふれたとき、四、五日というものは、まるで恋人の姿や声やその言葉一つ一つが、たえず頭のなかを胸のなかを駆けまわるように、高群さんの詩句の断片で、わたくしの心は占められたかのようでした¹⁰。

『東京は熱病にかゝつてゐる』は、全二五節から構成される長編詩です。第十二節が「文士有島武郎」です。そのなかに、こうした詩句があります。

有島武郎

誰がよいのでも悪いのでもない。

善につれ、悪につれ、

それは運命。

わたし達は運命に率直であつたばかりです¹¹。

小説家の有島武郎と『中央公論』の記者で人妻の波多野秋子が、軽井沢の別荘で縊死するのは、一九二三（大正一二）年の六月でした。らいてうは、かつて自分が起こした心中未遂事件と重ね合わせるようにして、この一片を読んだかもしれません。一方で、逸枝が述べるところによれば、旧自然主義の芸術が小説を主とするものであったのに対して、新自然主義の芸術は詩を中心に置かれなければならない、いままさにその復興期に直面しているのです。らいてうは、芸術に対する、次のような逸枝の熱意に心を動かされたのかもしれません。

新自然主義の藝術は、普遍我の表現である。普遍我の、熱情の、無政府的爆發である。詩である¹²。

らいてうは、『東京は熱病にかゝつてゐる』を読むと、おそらく誰かに、逸枝に宛てた伝言を託したものと思われます。一九二六（大正一五）年の四月、それを受け取って感動した逸枝は、近刊の『戀愛創生』と一緒に、らいてうに一通の書簡を送りました。以下は、その一部です。

長い間今日を期待しておりました。あなたからのご伝言を承ることは私にとりまして当然なことでございます。私はあなたを母胎として生まれてきたものでございますし、私ほどあなたのために、激昂したり、泣いたりしたものがございましょうか¹³。

一九一一（明治四四）年に『青鞞』が創刊されたとき、逸枝はまだ一七歳の子どもでした。しかし、「新しい女」や「新しがる女」といった蔑称でもって世間から愚弄され、厳しく批判されることに触れた逸枝の魂は、怒りの炎に包まれていたのです。逸枝の書簡は、次のように続きます。

「人はみな悪人です。私が子供であつて、かたきをうつことの出来ないのをお許し下さい」と、私は早い頃、あなたに対していのっていました。それはもう早い昔、あなたが世間から憎まれていらっしゃる頃でした。

それから、事ごとに、あなたのために泣きました。それはもちろん私のためにでございます。私には、ひとの無知が、くるしかつたのです¹⁴。

この文から想像できることは、どのようなことでしょうか。らいてうの苦しみを自分の苦しみとして引き受け、「かたきをうつ」ために、そしてまた「ひとの無知」を瓦解させるために、その後の逸枝の、女性史研究という険しい学問への道は用意されたのではないか、そのようなことが想像できるのではないのでしょうか。つまり、この文が暗示しているのは、らいてうが『青鞞』の創刊の辞として発した「元始、女性は實に太陽であつた」という仮説を、学問としてはっきりと実証してみたいという、逸枝の胸に深く刻まれた思いではなかったのか、そのような気がします。そうであれば、このときすでに逸枝には、詩人から学者へと向かう己の必然的な道筋が明確に見えていたにちがひありません。逸枝は、こういいます。

私は学問が偏見を破る大きな武器であることを知った。……固定觀念や既成觀念への、火の国女性的なたたかいも、このへんからはじまつた¹⁵。

ここに、火の国の女がもつ正義感と義侠心が情動し、詩人としての熱い感性を携えて、学者固有の、冷徹なる知の産出へと向かう、逸枝の、その瞬間的契機を見るような思いがします。しかし、逸枝が描く「新コースに大きな番狂わせ」が、このとき生じたのでした。どのような「番狂わせ」だったのでしょくか。次に、そのことについて叙述することにします。

三. アナーキズムの道へ向かう

憲三と結婚した逸枝は、一九二二（大正一一）年に息子（憲平）の死産を経験し、一方で、夫婦のあり方に絶望することもしばしばあり、一九二五（大正一四）年には、憲三の友人で寄宿人でもあった男性と一緒に家出もしています。以下は、この年の六月二日の日記に記された文の一部です。

私の行くところはどこやら分かりません。別れたくないが別れるのがいい、心がそうささやきます。どうぞ私のいない後には、よい家庭を作ってください。私のような不具なもののみが、あなたのご機嫌をそこねます。私はまたの世には不具ではないものに生まれてきて、あなたのほんとうの妻になりとうございます¹⁶。

六月二七日の日記には、こうした文字も並びます。

きょうも夫が出て行けという。いくど夫はこの言葉を使うだろう。これはブルジョアがプロレタリアにたいして、その弱身につけこんでいう悪辣な言葉とおなじに悪辣である。こうした言葉は使って欲しくない¹⁷。

実際に逸枝が家を出たのは、九月一九日。置き手紙がありました。「旦那さま つらい逸枝」で書き出されます。「さよなら。さよなら。……金を少しく下さい。××さんに返します。そこまでいっしょに行き、わかれ、それからひとりになります。それから山の中のお寺を見つけ、恋愛論を書きますから……西国に行きます。死んだ坊やや母を弔いながら少し巡ります」¹⁸。おそらく無理心中の危険性があったのでしょう、捜索願が出されると、和歌山の新宮で無事保護され、東京にもどるのは、およそ半月ぶりのことでした。奥むめおは、このときのことを、こう回想します。

長女が生まれた翌年の九月、姑が亡くなり葬儀に帰った時のこと。新宮の警察から連絡が入り、ひとりの婦人を保護しているから引きとりにきてほしいという。婦人の名は高群逸枝、わたしを身元引受人として指定したのだそう。わたしは詳しい事情のみこめぬまま、すぐに警察に駆けつけたのである。……

久しぶりに見る高群さんはやつれ果てているように見えた。わたしたちは一緒に一晚を過ごし……翌日、橋本さんが高群さんを迎えにこられた¹⁹。

この家出中にも引き続き書いていたと思われます「恋愛論」は、次の年（一九二六年）に『戀愛創生』として萬生閣から出版されます。この本は、いっさい章や節に分節化されておらず、全体が流れゆく雲か川のように文字が書きつながられています。まさしくそれは、その後の逸枝の女性史研究にとっての礎石となる、意味ある構想ノートであったにちがひありません。そして、翌一九二七（昭和二）年に憲三は平凡社を退くこととなりますが、他方で、

そのころから逸枝は、婦人問題や恋愛論にかかわって、アナーキスト（無政府主義者）の立場から論陣を張るようになります。逸枝は、それへと至る経緯を、こう書き記します。

私がアナキズムにひかれたのは書物からではなく、大逆事件に私の故郷から無実と思われる犠牲者たちを出したことが火の国の娘の胸を打ったのが遠い動因の一つであり、また K が下中さんの教員組合啓明会の雑誌や出版物に加勢して自然に私にアナ系の思想を持ち込んだことが近い契機の一つとなったともいえよう²⁰。

大逆事件とは、捏造された「天皇暗殺計画」を理由に、社会主義者や無政府主義者の二六人が逮捕され、翌年の一九一一（明治四四）年一月、大審院は、逮捕者全員に有罪の判決を言い渡し、『平民新聞』を創刊した幸徳秋水を含む二人に対して、大逆罪での死刑が執行された一連の出来事を指します。このとき逸枝は一七歳、そしてまた、『青鞨』が創刊された年でもありました。死刑の犠牲者のなかに、逸枝と同郷の新美卯一郎と松尾卯一太がいました。ふたりとも、熊本県尋常中学校（現在の熊本県立済々黌高等学校）の卒業生で、一九〇七（明治四〇）年に『熊本評論』を創刊していました。この肥後人の非業の死が、まさしく「火の国の娘の胸を打った」のでした。また、「教員組合啓明会の雑誌や出版物に加勢して」いた「K」とは、夫の橋本憲三にちがいません。

逸枝の短編小説集『黒い女』が解放社から出版されたのが、一九三〇（昭和五）年の一月一〇日でした。前年の一九二九（昭和四）年一〇月にアメリカ合衆国で発生した世界恐慌が日本にも影響を及ぼしはじめた時期です。これより翌年にかけて、日本経済が危機的状況に陥ってゆきます。『黒い女』は、いわゆる「昭和恐慌」と呼ばれるこの時代に対する戦陣となって世に出るのです。次のような文言が、『黒い女』の広告文に並べられていました。

極左中の極左、女流中の女流——世を擧げてマルキシズム政治主義の流行を見るとき、獨りアナーキズムの陣營にあつて、プロレタリア・ネオ・ロマンチズムのために萬丈の氣を吐く著者の第一小説集である。

階級受難、女性受難、この二重の重厭下に、更らに醜怪なる強權主義者の間にあつて彼女はいかに闘ったか！！²¹。

他方、著者の逸枝は、自著をどう位置づけていたのでしょうか。熊本市立図書館に『黒い女』の初版本が所蔵されており、表紙裏の見返しに、逸枝が橋本静子に宛てた献呈の辞が自筆されています。日付は、亡くなる二年前の「一九六二年五月」、橋本静子は、夫憲三の妹です。「わかりがよい」という語句は、「わかりが早い」と読めなくもありません。

風がわりな小説です。散文詩的または寓話的小説とでもいえば、わかりがよいかもしれません。心理的には自叙伝ともいえましょう。私の愛の哲学が語られていると思います。ほんの芽生えにすぎませんが²²。

逸枝は、『黒い女』の刊行を控えた、一九二九（昭和四）年の年の瀬の動きについて、こう書きます。

私はここで雑文書きのかたわら、婦人論＝女性史、恋愛論＝婚姻史の研究に着手するはずだった。……年末に、私ははじめて印刷した年賀ハガキをつくり、前に述べた研究著述の計画を発表し、知人の援助をもとめた。……それを投函した直後の一二月三十日に前から話のあった解放社からの『婦人戦線』発行のことが決定したという通知があり、私の新コースに大きな番狂わせがもたらされることになってしまったのだった……はじめ私はこんな雑誌を出すことにも、私が主宰者になることにもひどく尻込みした。……だが K のすすめもあり、四囲の状況からも要請されるはめになって……火の国的熱烈さをもって不退転の献身を誓うことになる²³。

すでにこの時点で「婦人論＝女性史、恋愛論＝婚姻史」の構想ができていたようです。しかしここに来て、「大きな番狂わせ」が生じ、『婦人戦線』の創刊へと、逸枝の精力は注がれてゆくことになるのです。これは、詩人から学者へ向かう道筋にあって、単なる通りすがりの寄り道だったかもしれません。しかし、自分の思想的立ち位置をより明確にするいい機会であると捉えるならば、この寄り道も、逸枝にとって意味のあるものであったにちがいありません。

逸枝が述べる「火の国的熱烈さ」とは、大地を焦がす、あの大阿蘇の、炎のごとき熱情を指し示すのでしょう。こうして「番狂わせ」に火がついたのです。

『黒い女』の発刊と時を同じくして、一九三〇（昭和五）年一月二六日、無産婦人芸術連盟が結成され、同年三月に機関誌『婦人戦線』が創刊されました。第一巻第一号の奥付を見ますと、発行兼編集印刷人として、高群逸枝の名が明記され、発行所は「婦人戦線社」、その所在地は、逸枝の自宅住所である「上荻窪二六九」となっています。解放社が発売元です。

その号の「お知らせ」において、結成の経緯と構成員の名前が、次のように、明かされています。

新年早々から着々計画を進められてゐた無産婦人藝術聯盟は、一月二十六日、いよいよ目出たく結盟を了しました。往年、新女性の先驅者としていはゆる「青鞵」運動を率ゐられた平塚らいてう氏もお加はり下さつて、当日の出席者左記十四名、病床の人竹内てるよさん、その他地方在住者を合せ、正しく「青鞵」によつて個人的自覺の第一歩をふんだわれわれ女性は、更にこゝに社会的自覺に立つて、人類解放の究極の運動へと出発することになりました。

伊福部敬子、神谷静子、城しづか、住井すゑ子、高群逸枝、野副ますぐり、野村考子、平塚らいてう、二神英子、碧静江、松本正枝、望月百合子、八木秋子、鏑田貞子

そして我々は、こゝに外部闘争の機關として「婦人戦線」をもち、内部相互教育の機關として研究會をもつことになり、前者の經營はこれを當分解放社に委託し、後者は當分毎月第四日曜に聯盟事務所において開催することになりました²⁴。

無産婦人芸術連盟の会合や『婦人戦線』の編集作業は、逸枝の住まいの上荻窪の家で行なわれました。実に簡素な室内でした。らいてうの記憶によると、こうです。

長い年月にすっかり薄れてしまった記憶のなかで、どことなく殺風景な家の中の印象が消えずに残っています。いわゆる家財道具といったもの、箆^{ヘラ}、や茶箆^{チャヘラ}のようなものは見当たらず、人が住んでいるともおもえないほど、がらんとした家の中で、メリンスの赤い派手な柄の鏡台掛けにおおわれた鏡台唯一つが、異様に目立っていたことを覚えています²⁵。

家だけではなく、逸枝の化粧も、初対面のらいてうには異様に映ったようです。

異様といえば、初めてお会いした高群さんの印象のなかで、そのお化粧が、わたくしには理解にあまるものでした。高群さんのお顔は、生地そのままですごく輝く顔であって、白粉や紅の粉飾の似合うお顔ではないとおもわれる上に、それもあまり上手なお化粧ではありませんから、せつかくの生地をそこなっているとしかおもわれません。わたくしの目には、紅、白粉など洗い流したらどんなに美しいことかと映るのですが、しかし高群さんには、おそらくご自身独自の美的観念があつてのことだったのでしょう。身ごなし全体がのろいという感じで、靴をはくのもテキパキはけないような人でした²⁶。

しかし高群には、思想の内容は別にしても、らいてうを夢中にさせるだけの魅力が十分に備わっていました。らいてうは、このように語ります。

思想だけなら、他にいくらも求められるばかりでなく、必ずしもわたくしと、すべてが一致するものではないのでした。高群さんがわたくしを夢中にさせたのは、あの情熱、あの感情の動きと表現の自由さ、ユニークさ——それらを無限に内蔵している、高群さんという人間そのものの魅力でした²⁷。

創刊号（三月号）に高群は、「婦人戦線に立つ」を書きました。それは、婦人の「個人的自覚」から「社会的自覚」へと踏み出すことを強く訴える内容になっています。冒頭、高群は、こう書きます。

わが國における、婦人自覚史は、かの「青鞨」運動に、最初の頁を起した。それは、誰も知るやうに、婦人の「個人的自覚」によつたもので、その後、いく星霜かを経て、いま茲に、我々によつて、婦人の「社會的自覚」にもとづく、劃時代的の運動が、起こされようとするのだ²⁸。

高群によれば、労働者は労働者であることを「自覚」することにより、農民は農民であることを「自覚」することにより、そして、婦人は婦人であることを「自覚」することによって、それぞれに、自らの手になる「自治」を求める。いずれもそれらは、政治社会（強権社会あるいは専制社会）を完全に否定するし、同時に、「自治」への介入も拒む——。以下は、高群自身の言葉です。

……民衆は最早や、古い「政權運動」を捨て、新しく起つた「自治運動」、即ち労働者組合運動（職業者組合運動）及び、消費者組合運動、農民組合運動等によつて起つ。

これらの新しい組合運動は、ごく自然にそれぞれの役割（破壊的、または建設的）をもつが、歸するところは、自治コンミュンの聯合社會であり、ここを目がける種々の分野戦である。

實に、これらの諸組合運動こそは、近世特有の眞に新しき一大民衆運動の種々の相であるが、この運動を進める上に、古い「政權運動」が、いかに妨げとなるかは實例の示す通りである²⁹。

高群の主張は、創刊号に掲載されている「創刊宣言」または「綱領」と呼ぶにふさわしい以下の文言に端的に凝縮されています。これが、無産婦人芸術連盟の旗印となるものでした。

一 われらは強權主義を排し、自治社會の實現を期す。

標語 強權主義否定！

二 われらは男性専制の日常的事實の曝露清算を以て、一般婦人を社會的自覺にまで機縁するための現實的戦術とする。

標語 男性清算！

三 われらは新文化建設および新社會發展のために、女性の立場より新思想新問題を提出する義務を感じる。

標語 女性新生！³⁰

あえて以上の「創刊宣言」を図式化すれば、「強權主義＝資本主義＝家父長主義の否定」、対するは「自治主義＝組合主義＝母性中心主義の新生」となるでしょうか。

翌月の第二号（四月号）に、逸枝は「家庭否定論」を書きました。一枝は、文字の成り立ちからすると「家」という字は豚小屋を表わし、古来中国において常食としていた豚とともに生きる人のいる場所を意味し、「家財」は自分の所有物、すなわち妻子財産を指すことを明らかにし、その「自分」こそが「男」その人であるとの論理を展開します。つまり、「家」を支配し「財」を所有しているのが男性であり、女性はその「財」の一部でしかないというのが、逸枝の見解であり、それは、次のような主張へとつながります。

そこで目ざめた婦人は、「家庭をケトバス」ことが唯一の最上の手段であることを知つた。

家庭とは何か。元來それは豚小屋と刑務所を意味してゐるではないか³¹。

同じく第二号（四月号）に、らいてうは「婦人戦線に参加して」を寄稿しました。このなかでらいてうは、まず、婦人運動の近年の状況をこう描写します。

又是等の無産政黨所屬の無産婦人團體によつて、在來のブルジョア個人主義的婦人政治運動とは全然その立場を異にする無産階級的婦人政治運動もはじめて起こつて來ました。かうして無産者解放運動の全戦線があたかも政治戦線と化したかの觀を呈す

るようになりました。同時にこの運動理論としての社会主義研究、わけでもマルクス主義研究は殆ど流行的全盛の極に達し、マルクス思想やソウエトロシアに関する著書の洪水となり、マルクス主義の公式を暗誦したマルクスボーイやマルクスガルの横行となり、知識階級のマルクス主義男女は前衛をもつて自負し、ブルジョワ作家の左翼への轉換が流行しました³²。

次に、こうした現状のなかにあつて、自らのこれまでの歩みを見つめます。

新婦人協會創立時のわたくしは、婦人の立場からしきりに女性による社会改造を叫びながらも、それは結局男性と資本主義の横暴と貧欲に只いくぶんの制限を置くことによつて、婦人、母性、児童を保護しようとする程度のもので、言はゞ社会政策的及至は社会改良主義的立場以上のものではなかつたことは明白です³³。

そして、以下のような認識を示します。

しかしそのわたくしももうそうした局部的社会改善をもつて満足することは出来ないのでした。……しかしそれにも拘はらずマルクス主義社会運動は、第一その運動方法に於て、その戦術に於て、第二にさうした實現されるマルクス主義の社会組織形態に於て、わたくし自身の本性（わたくしの個性とわたくしがもつ女心或は母心）との間に到底相容れない或ものを感じさせ……わたくしの心はマルクス主義社会主義運動よりも同じく現代の資本主義組織に反抗する無産階級運動として……今や全世界にひろがり、次第に發展しつつある協同組合運動により多くひきつけられて行きました³⁴。

かくしてらいてうは、「婦人戦線に参加して」の一文を、こう結ぶのでした。

……母性主義の立場から、協同組織の経済的自治社会の建設を理想とするわたくしは、また當然無政府主義社会思想に、その理想社会の組織形態に興味と共感を見出さずにはゐられないわたくしです。……わたくしの精神的娘のやうにも感じられてゐた高群逸枝さんの主唱によつて無政府主義系の婦人を中心とする新たな聯盟が結ばれ、第二青鞥ともいふべき「婦人戦線」が生れ出たことは、わたくしには何としても大きなよろこびであります³⁵。

らいてうが、逸枝のことを「精神的娘」と語るのも、『婦人戦線』のことを「第二青鞥」と語るのも、とても印象的です。

『婦人戦線』の第三号（五月号）が発行された五月のその二八日に、無産婦人芸術連盟と全国農民芸術連盟との合同講演会が読売新聞社の講堂で開催され、逸枝が演壇に立ちました。「实际的、活動的といったいわゆる運動家的な肌合ひはみじんもなく、あくまでも創造的、天才的な詩人といった印象」³⁶を逸枝に抱いていたらいてうに、このとき、かすかな不安がよぎりました。

わたくしはこんな高群さんが演壇に立つことを、幾分あやぶむ気持で見守ったものですが、大勢の人前での演説などまったく不向きとおもわれるこのひとが、精一杯しゃべるのには、関心もし、安堵もしました。しかし、このときの「婦人戦線の事業」と題する高群さんの話は、臨監の警官の中止命令のため、おわりまで続けられませんでした³⁷。

らいてうの不安は杞憂に終わりましたが、別の不安が、会場全体を包み込みました。官憲による「弁士中止」という言論の封殺です。一九二五（大正一四）年に治安維持法が制定されると、表現の自由や結社の自由が一段と制限される時代が出現していたのです。『婦人戦線』も、そうした時節の空気のなかで、翌年（一九三一年）の六月号（通計一六号）をもって休刊となりました。事実上の廃刊です。しかし、これによって、らいてうの逸枝に寄せる思いが、途切れることはありませんでした。らいてうはいいます。

そのころ——いいえ、その後も終始、高群逸枝さんほど、わたくしを惹きつけたひとはありません。ただ、もう無性に好きなひとでした³⁸。

一方の逸枝にとっては、どうだったのでしょうか。「婦人論＝女性史、恋愛論＝婚姻史の研究に着手する」という自身の「新コースに大きな番狂わせ」が生じたにもかかわらず、無産婦人芸術連盟を発足させたことにより、らいてうと強いきずなを結ぶ現実的な場面が生み出され、その後の友愛にとっての土台がここに形成されたのでした。こうして、『婦人戦線』廃刊後も、ふたりが織りなす信頼は、のちの章において語るように、折に触れ、生涯にわたって確たるものとして続いてゆくのでした。

四．らいてうに去来する青鞞時代の「同性の恋」

実は、らいてうには、逸枝に先立ち、もうひとりの「無性に好きなひと」がいました。當時はすでに富本憲吉と結婚し、富本一枝（旧姓は尾竹）となっていました。青鞞社時代、らいてうが「私の少年」と呼び、一時期夢中になった女性です。そのころはまだ独身であった尾竹一枝は、「紅吉^{こうきち}」を名乗っていました。らいてうは、こう告白します。

高群さんを発見したよろこびのあまり、そのころわたくしが手紙形式で描いた文章——それは名前は出していませんが、宛名に富本一枝さんを想定したものでした——のなかで、こんなふうに言っています。

「わたしはまあなんと高群さんを知ることが遅すぎたのでせう。この国に、しかも同性の中にかういふ人がゐられたとは。わたしの心はまるで久しく求めて、求めて求め得なかった姉妹を今こそ見出したやうな大きな悦びに波打ってゐます。そしてそれはどうやら十数年前、あなたをはじめて知った時のわたしのあの悦びと好奇心とにどこか似通うもののあるのを感じます。……」³⁹。

逸枝のもつ人間としての情熱の豊かさ、感情表現の自由さに魅了されたらいてうは、青鞞

社時代の紅吉（尾竹一枝）がもっていたあの魅力、つまりは、いかなるものにも囚われることのない自由闊達な精神が繰り広げる奔放な言動を、このとき、鮮明にも脳裏に思い起こしたのです。それでは、らいてうが書く、「あなたをはじめて知った時のわたしのあの悦びと好奇心」とは、どのようなものだったのでしょうか。

一九歳の紅吉が青鞞社に身を置いた一九一二（明治四五／大正元）年の一年を彩ることになった、らいてうと紅吉の「同性の恋」の顛末について、およそ二〇年の歳月をさかのぼって、次の章で跡づけてみたいと思います。

注

（1）『高群逸枝』『高群逸枝を顕彰する会』発行、2014年、7頁。熊本県立図書館所蔵。

この冊子のなかでの記述によると、『十三才集』は「洋紙を二つ折りにして、散文、和歌、詩などを墨書し、イラストを入れ、黄色のレース糸で綴じてある」とのことです。

（2）高群逸枝『妾薄命』金尾文淵堂、1922年、107頁。

（3）『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1976年（第8刷）、187-188頁。

（4）生田長江『『日月の上に』の著者に就て』『新小説』1921年4月号、別〇 1頁。

（5）同『『日月の上に』の著者に就て』『新小説』、同頁。

（6）高群逸枝『日月の上に』叢文閣、1921年、248-252頁。

最後の詩編のタイトルは、目次においては「日漸く昇れり」となっており、これは「月」とするべきところの誤植ではないかと思われます。

（7）平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった①』大月書店、1992年、326頁。

（8）前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、197頁。

（9）高群逸枝『東京は熱病にかゝつてゐる』萬生閣、1925年、3-5頁。

（10）平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった③』大月書店、1992年、305頁。

（11）前掲『東京は熱病にかゝつてゐる』萬生閣、1925年、137-138頁。

（12）同『東京は熱病にかゝつてゐる』、28頁。

（13）『高群逸枝全集』第九巻／小説／随筆／日記、理論社、1966年（第1刷）、233頁。

（14）同『高群逸枝全集』第九巻、同頁。

（15）前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、62頁。

（16）前掲『高群逸枝全集』第九巻、223頁。

（17）同『高群逸枝全集』第九巻、226頁。

（18）同『高群逸枝全集』第九巻、228-229頁。

（19）奥むめお『奥むめお 野火あかあかと』日本図書センター、1997年、77-78頁。

（20）前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、236頁。

（21）『婦人戦線』第1巻第1号、1930年、婦人戦線社、1頁。

（22）高群逸枝『黒い女』解放社、1930年。

私が参照したこの本は、熊本市立図書館所蔵の高群逸枝から橋本静子へ宛てた献呈本です。この本の見返しに書かれてある献辞は、『高群逸枝全集』第九巻に所収の「黒い女」の

冒頭(10頁)に転用されています。ただし、ここでは「橋本静子様」の文字は、削除されています。

(23) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、232-234頁。

(24) 前掲『婦人戦線』第1巻第1号、16頁。

(25) 前掲『元始、女性は太陽であった③』、306-307頁。

(26) 同『元始、女性は太陽であった③』、307頁。

(27) 同『元始、女性は太陽であった③』、同頁。

(28) 高群逸枝「婦人戦線に立つ」『婦人戦線』第1巻第1号、1930年、婦人戦線社、8頁。

(29) 同「婦人戦線に立つ」『婦人戦線』、14頁。

(30) 前掲『婦人戦線』第1巻第1号、4頁。

橋本憲三・堀場清子『わが高群逸枝 下』(朝日新聞社、1981年)のなかの「高群逸枝著作年譜」には、「創刊宣言」という表記のもと、「橋本憲三起草、高群逸枝加筆」(386頁)であることが明示されています。しかし、高群逸枝本人は、「創刊宣言」ではなく「綱領」という語を使っています。これにつきましては、『高群逸枝全集』第一〇巻、234頁を参照してください。

(31) 高群逸枝「家庭否定論」『婦人戦線』第1巻第2号、1930年、婦人戦線社、22頁。

(32) らいてう「婦人戦線に参加して」『婦人戦線』第1巻第2号、1930年、婦人戦線社、37頁。

(33) 同「婦人戦線に参加して」『婦人戦線』、同頁。

(34) 同「婦人戦線に参加して」『婦人戦線』、37-38頁。

(35) 同「婦人戦線に参加して」『婦人戦線』、39頁。

(36) 前掲『元始、女性は太陽であった③』、307頁。

(37) 同『元始、女性は太陽であった③』、同頁。

(38) 同『元始、女性は太陽であった③』、305頁。

(39) 同『元始、女性は太陽であった③』、305-306頁。

第二章 平塚らいてうと尾竹紅吉の「同性の恋」の顛末

一. 紅吉（尾竹一枝）が青鞆社に登場する

尾竹一枝（のちの富本一枝）は、高群逸枝より一年早く、一八九三（明治二六）年の四月に、富山市において生を受けました。父親の熊太郎（雅号は越堂）は日本画家で、弟の竹坡と國観とともに、尾竹三兄弟としてその後の画壇において活躍してゆく人物です。士族の家系に育った母のウタは、一枝を頭に四人の娘に対して厳しい態度でしつけに臨みました。

学童期を東京と大阪で過ごし、夕陽丘高等女学校（現在の大阪府立夕陽丘高等学校）を卒業した一枝は、東京に住んでいた叔父の竹坡の勧めもあって、上京して女子美術学校（現在の女子美術大学）に入学します。しかし、寄宿舎の舎監と衝突し、退学する事態となりました。

こうして叔父（竹坡）宅の食客となった一枝ですが、あるとき、このようなことがありました。以下は、叔母（きく）の証言です。

一枝さんと一緒に上野の山へ行った時よ、その人マントをすらっと着ているものだから男と間違えられちゃってね、笑ったことがあるわよ……¹。

さらに、一九一一（明治四四）年の秋のある日、一枝にとって「天地振動」の出来事が起きます。

或る日の朝、表庭の掃除をしてみたら^{ママ}伯母宛の手紙が一通配達夫から渡された。……私はその一本の手紙がひどく氣にかかり、不思議に思はれて裏返してみたら、青鞆社と書かれて居た。……私の渡した手紙を伯母も不審らしく眺めていたが……封を切つてとり出したのが青鞆發刊の辞と青鞆社の規約であつた。伯母にとっては勿論それは一枚の印刷物に過ぎなかつたが、私にとっては天地振動そのものであつた。²

一九一一（明治四四）年九月一日に発行された『青鞆』第一巻第一号所収の「元始女性は太陽であつた。——青鞆發刊に際して——」は、次の言葉ではじまっていました。らいてうによる文です。

元始、女性は實に太陽であつた。真正の人であつた。

今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。

偕てこゝに「青鞆」は初聲を上げた。

現代の日本の女性の頭脳と手によつて始めて出來た「青鞆」は初聲を上げた。

女性のなすことは今は只嘲りの笑を招くばかりである。

私はよく知つている、嘲りの笑の下に隠れたる或ものを³。

「現代の日本の女性の頭脳と手によつて」編集される、日本ではじめての文芸雑誌『青鞆』を創刊に導いた中心人物が、らいてうでした。らいてうは、本名を平塚明^{はる}といい、一八八六（明治一九）年二月、三人姉妹の末娘として東京に生まれました。父親は明治政府の高級官吏で、平塚家は、裕福で教育熱心な家庭でした。東京女子高等師範学校の附属高等女学校（現在のお茶の水女子大学附属高等学校）に続いて、日本女子大学校（現在の日本女子大学）を卒業。語学の勉強のためにその後通っていた成美女子英語学校で森田草平と知り合い、恋に落ちたふたりは、一九〇八（明治四一）年三月に、塩原近くの雪の山中で心中未遂事件を起こし、世間の注目を浴びることになります。いわゆる「塩原事件」、あるいは「煤煙事件」とも呼ばれるものです。『青鞆』の創刊号が世に出たのは、それから三年半後のことで、らいてう、二五歳のときでした。

帰阪するや一枝は、同年（一九一一年）の一二月三〇日の夕方、さっそくらいてうに宛てて手紙を書きました。

『青鞆』の発行されたのは、東京にいた時分から知っていました。……

然し……私は入社せずに大阪の町に帰りました。私は只口惜しく思います。そしてその反動の様に心斎橋の難波の本屋迄毎日のように行って『青鞆』をさがしました。けれど……一冊も『青鞆』はありません。私は泣きたくなりました。

けれど来月号からは、私は本屋のおかみさんにかたく談じて、一番に私の家にまでとどける事を約束しました。……私は来月からいよいよ『青鞆』の読まれる、一人の女の子の仲間になりました。私はこれで入社ができたのですか？⁴

この手紙を受け取ったらいてうは、のちにこう回想します。当時紅吉は、文学を志す本人の意思とは別に、親の後を継ぐことを期待された閨秀画家でもありました。

ペンの正しい楷書で、上手なようでもあり、下手なようでもある一種独特な書風の、天衣無縫とも、子どもらしいともいいようのない手紙を受けとったわたくしは、この手紙に惹かれるものを覚えながらも、出さずにいました。……それから矢つぎばやによこしますが、自分の名前が手紙のたびごとにいろいろ変わり、これがいつの間にか『紅吉』^{こうきち}と自分呼び出しました。わたしはこの変わり者に入社承諾の返事を出し「あなたは絵を勉強してられるそうですが、一つ『青鞆』の素晴らしい表紙を描いてみる気はありませんか。いいものが出来れば、今のをいつでも取替えます」と書き添えました⁵。

年が明けた一九一二（明治四五）年の一月、念願かなって一枝は、青鞆社の一員に加わります。将来結婚することになる富本憲吉を奈良の安堵村の自宅にはじめて訪ねたのは、翌二月のことでした。洋行帰りの憲吉に会って話をすることが目的でした。

富本憲吉は、一八八六（明治一九）年六月に大和安堵村の旧家に生まれ、東京美術学校で図案（現在の用語法に従えばデザイン）を学び、一九世紀英国の詩人にしてデザイナーで、社会主義者でもあったウィリアム・モリスの思想と実践に魅了され、卒業を待たずして英国に渡ります。一九一〇（明治四三）年に帰国すると憲吉は、エイマ・ヴァランズの『ウィリ

アム・モリス——彼の芸術、彼の著作および彼の公的生活』を参照しながら「ウィリアム・モリスの話」を執筆。擱筆後それは、一九一二（明治四五）年の『美術新報』第一一巻第四号（二月号）および第五号（三月号）に分載されます。これが、憲吉にとっての帰朝報告であり、同時に、装飾芸術家モリスを日本に紹介する最初の評伝となるものでした。一枝が憲吉を訪問するのは、「ウィリアム・モリスの話」が発表される、ちょうどこの時期のことでした。

富本宅訪問から二箇月後の四月のはじめ、父の越堂は、娘の一枝を連れ立って東京に上り、下根岸に居を構えました。この間紅吉（一枝）は、『青鞞』三月号に「最終の霊の梵鐘に」を書き、続いて、四月号『青鞞』の表紙絵が、紅吉の《太陽と壺》に差し替えられていました。上京すると、さっそく四月二〇日の『多都美』（第六卷第八号）において、第一二回異画会絵画展覧会の「審査報告」が発表されます。一枝の二曲一双の屏風《陶器》が三等賞銅牌に輝き、越堂の作品は、その下の褒状一等に止まりました。

一方で紅吉は、青鞞社の事務所へ、そしてらいてうの自宅へと、足しげく現われるようになります。らいてうは、そのころの様子を、このように書いています。

久留米緋に袴、または、角帯に雪駄ばきという粋な男装で、風を切りながら歩き、いいたいことをいい、大きな声で歌ったり笑ったり、じつに自由な無軌道ぶりを発揮する紅吉。それが生まれながらに解放された人間といった感じで、眺めていて快いほどのものでした。他の社員たちからも……可愛がられるので、人にもてることの好きな紅吉は、幸福のやり場のないようなうれしそうな顔をして、得意然としてあちらこちらに出没していました⁶。

そうしたなか、異画会の審査結果の公表から一箇月と立たない五月一三日の夜、ひとつの大きな出来事が起こります。それをきっかけとして、らいてうと紅吉との「同性の恋」の幕が開くのでした。

二、「同性の恋」の展開

五月一三日、紅吉の自宅において青鞞社同人による会合が開かれました。以下は、そのとき紅吉が出した案内状の文面の一部です。

桃色のお酒の陰に、やるせない春の追憶を浮べて春の軟い酔を淡い悲しみで、それからそれに、覚めて行く様に、私達は新しい酒蔵から第二の壺を搬び出した。そして私達の仕事に異大な祝福の祈を捧げ乍ら青いお酒を汲み合ひたいと思ふ。来る十三日午後一時から紅吉の家で同人のミーチングを催します。紅吉は、黄色い日本のお酒とそして麥酒と洋酒の一〔、〕二種とすばしこやのサイダを抜いて待つて居る。……紅吉は、その日、その夜の来るのを、子供の様に數へて待つて居る。さよなら⁷。

この日の会合は泊まりがけになりました。そしてその日の夜、らいてうと紅吉とのあいだに烈しい愛の衝動が走るのです。そのことを紅吉は、「或る夜と、或る朝」のなかで、誰に

はばかりすることもなく、こう告白します。

私は、どうしたらいいのだろうか。抱擁接吻それら歡樂の小唄は、どんなになる事だろう！？。……私の心は、全く亂れてしまった、不意に飛出した年上の女の為に、私は、こんなに苦しい想を知り出した。少年の様に全く私は囚はれてしまった。……けれども……あゝ私は毒の有る花を慕つて、赤い花の咲く國を慕つて、暗い途を、どこ迄歩ませられよう。……DOREIになつても、いけにへとなつても、只 抱擁と接吻のみ消ゆることなく與えられたなら、満足して、満足して私は行かう⁸。

この「或る夜と、或る朝」に続いて、さらに波紋を呼ぶ一文が、次の七月号の「編輯室より」に掲載されます。

らいてう氏の左手でしてゐる戀の對象に就いては大分色々な面白い疑問を蒔いたらしい。或る秘密探偵の話によると、素晴らしい美少年ださうだ。其美少年は鴻の巣で五色のお酒を飲んで今夜も又氏の圓窓を訪れたとか⁹。

紅吉は、『青鞥』の広告をとるために、「メイゾン鴻の巣」というレストラン兼バーへ行き、そこで、「五色の酒」（色の異なる五種類の酒を順次比重の重いものから注ぎ足してできる、虹のような色彩豊かな一種のカクテル）を飲んだようです。そして、らいてうに愛されているという高揚した気持ちも手伝い、紅吉自らがこの文を書いたものと思われます。しかし、この文によって、美少年（紅吉）とらいてうの恋が、世間の注目を浴びることになるのです。

注目されてよいのは、紅吉は自身のことを「美少年」として認識している点です。前号（六月号）の『青鞥』にも、次のような文を読むことができます。紅吉が「編輯室」に送ったはがきの一節です。引用文中の「勝ちやん」というのは、同じ社員で、とくに親しくしていた小林哥津のことではないかと思われます。

私は悪い身體を無理に無理して、勝ちやんと出た、何處に、何處に、私は苦しい苦しい心の病氣を、少しでも慰めるために、十二階下にゐつた。銘酒やの女を見に行つた。…私は立派な男で有るかの様に、懷手したまゝぶらりぶらり、素足を歩まして、廻つて來た、その気持ちのいゝ事。あの女の一人でも私の自由に全くなつて來れたらなら…とあてのない楽しみで歸つて來た。私は元気だつた¹⁰。

このように、紅吉は「苦しい苦しい心の病氣」と表現しています。「紅吉」という男性名とおぼしい雅号、そして、らいてうが描写する「久留米緋に袴、または、角帯に雪駄ばきという粋な男装」、こうした性的表現と重ね合わせますと、紅吉は、生涯自分自身から明確に「カミング・アウト」することはありませんでしたが、性自認は「男」で、性的指向は「女」である、今日的用語を使うならば「トランスジェンダー男性」だったのではないかと思われます。

続いて、七月一三日の『國民新聞』が、こう書き立てました。

七月の『青鞥』には雷鳥が左手で戀してるとか美少年を何うしたとか云ふ妙な事がある
〔。〕其美少年と云ふのは夕暮に慶々白山邊を引張つて歩いて居るほんに可愛らしい學
生帽を冠つた十二三の子供だ〔。〕それは兎も角此間の夜雷鳥の明子と尾竹紅吉（數枝
子）中野初子の三人が中根岸の尾竹竹坡氏の家に集まつた時奇抜も奇抜一つ吉原へ繰
り込まうぢやないかと女だてらに三臺の車を連ねて勇しい車夫の掛聲と共に仲の町の
引手茶屋松本に横著けにし箱提灯で送らせて大文字樓へと押上り大に色里の氣分を味
つた¹¹。

この「吉原登樓」について、のちに紅吉（富本一枝）は、このように弁明しています。吉
原見学を勧めたのは、紅吉の叔父の尾竹竹坡でした。

おまえたち偉そうに婦人の解放とか何とかいつているが、吉原というところには非常
に氣の毒な——解放しなければならない女がたくさんいる、そこを知りもしないで偉
そうなことをいつているのはおかしい。平塚さんにぜひとも——今で申す見學をなさ
いませんか、ということで、平塚さんも見たことがないし、ぜひ行きたいということに
なつて、五、六人で参りました。このおじは……遊ぶことでも相黨だつたようです。そ
のおじの行きつけのお茶屋におじが話しておいてくれましたから、吉原でも一番格式
の高いうちに案内されて、たいへん丁重に扱われました¹²。

案内されたのは「大文字樓」という家で、相手をしたのは、栄山という花魁でした。単な
る見学だったのかもしれませんが、しかし、こうした一連の出来事に、社の内外から批判が起
こります。らいてうは、こう書きます。

「新しい女、五色の酒を飲む」「新しい女、吉原に遊ぶ」といった思いがけぬ噂が、
新聞に出て、しかもその張本人が紅吉だという、社内からの批判が起こったのです。

すでにわたくしたち「青鞥」に集う女の上には、「新しい女」という称号が与えられ
て、時のジャーナリズムはことあるごとに、わたくしたちの行動に目を光らせていたと
きでした¹³。

こうして紅吉は、窮地に立たされたのでした。

『國民新聞』が「吉原登樓」を記事にする三日前の一九一二（明治四五）年七月一〇日の
夜、らいてうは、寂しがりやで不意の訪問を喜ぶ紅吉の顔が見たくなり、下根岸の紅吉の家
を訪ねました。多くを語ったあと、上野広小路まで送ってきた紅吉は、別れる際に、「あし
た朝、行つてもいいでせう。其時見せます」¹⁴といって、左腕の包帯を押えます。そして翌
朝——。

「見せて、見せて、ね、見たい、見たい。」私の心は震へた。紅吉は戀の為に、只一
人を守らうとする戀の為に……我が柔かな肉を裂き、細い血管を破つたのだ。……長
い繃帯が一巻一巻と解けて行く。……腸^{はらわた}の動くのを努めて抑へた。そしてじつと傷口

を見詰めながら、眞直に燃える蠟燭の焰と、その薄暗い光を冷たく反対する鋭利な刃身と熱い血の色とを目に浮かべた¹⁵。

その日の午後、ふたりは万年山勝林寺にある青鞆社の事務所へ行きました。疲労を滲ませる紅吉は、大きな体を縁側に横たえていましたが、しばらくすると、ふと立ち上がって、黒板にこう書きました。

離別の詩

あたいの人形に火がついた

赤いおべべに火がついた

いとしや人形は火になつた

いとしや人形が火になつた

人形を買つて五十八日目の夕 紅吉

らいてう様¹⁶

「五十八日目の夕」とは——。するとらいてうは、五月一三日のミーティングのあの夜から数えて五八日目であることに気づきます。

私の心はまたもあのミーティングの夜の思ひ出に満たされた。紅吉を自分の世界の中なるものにしようとした私の抱擁と接吻がいかに烈しかつたか、私は知らぬ、知らぬ。けれどもあゝ迄忽に紅吉の心のすべてが燃え上らうとは、火にならうとは¹⁷。

しばらく沈黙が続いたあと、紅吉はふたつの心配事をらいてうに打ち明けるのです。ひとつは、「五色の酒」と「吉原登楼」の出来事のあとに、「新しい女」や青鞆社へ烈火のごとく浴びせられた非難や揶揄についてであり、もうひとつは、自分自身の健康状態についてでありました。

『國民〔新聞〕』に「所謂新〔ら〕しい〔き〕女」が掲載されだし事はこの日からのことだつた。紅吉は其記事に就いて眞面目に心配してゐるらしい。……私はあらゆるものを眞面目に考へることの出来る紅吉を、新聞の記事の虚偽を以て満されてゐるのを今更のやうに驚く紅吉を心に羨んだ。そして三〔、〕四年前の〔塩原事件（煤煙事件）のときの〕自分を目の前に見るやうな氣がした。……私は紅吉を咎めやうとはゆめさら思わない。……

「退社してお詫びします。」

「馬鹿」

私の少年よ。らいてうの少年をもつて自ら任ずるならば自分の思つたこと、考へたことを眞直に發表するのに何の顧慮を要しやう。みづからの心の欲するところはどこまでもやり通さねばならぬ。それがあなたを成長させる為めでもあり、同時にあなたがつながる青鞆社をも發展させる道なのだ¹⁸。

紅吉は、一箇月くらい前から消え入りそうな咳をし、よく頭痛で倒れもしました。また、ますます神経が過敏になるのを恐れてもいました。らいてうは、そのことを薄々感じ取っていたようです。肺の病かもしれない——。らいてうは、高田病院での診察を勧めます。「明日診察を受けるでせう……すると、どつちかに極るでせう、ね、どつちかに」¹⁹と、紅吉は怯えます。せめて医者宣告だけは直接紅吉に聞かせたくないと思ったらいてうは、「私も明日病院へ行く。院長に一度逢ひたいことがあるから」²⁰といいます。しかし紅吉は、入院となれば、今後らいてうに会えなくなることを恐れるのです。

「淋しい？ どうした。」と言ひざま私は両手を紅吉の首にかけて、胸と胸とを犇と押し付けて仕舞った。「いけない。いけない。」口の中で呟いて顔を背けたが、さりとて逃げやうとはしない²¹。

そして、らいてうは、「ね、いゝでせう。あなたが病氣になれば私^{わたし}もなる。そしてふたりで〔療養のために〕茅ヶ崎へ行く」²²と、紅吉の心情を温かく包み込みます。こうして万年山の事務所を出たふたりは、別れ際に、明日病院へ行く約束を交わしました。帰宅するとらいてうは、これまで紅吉から受け取った、あわせて六七通の手紙とはがきを読み返しながら、眠れぬまま、「同性の戀といふやうなことを頻りに考へて見た」²³のでした。

三. そして、その恋の破綻

肺結核と診断された紅吉は、茅ヶ崎の南湖院へ転地療養のため入院することになりました。しかしこの地でまた、さらに過酷な出来事に紅吉は遭遇することになるのです。出来事とは、紅吉とらいてうの「同性の恋」の破局であり、それは、らいてうと奥村博（のちに博史と改名）との偶然の「めぐりあい」によるものでした。らいてうは、自伝のなかで詳細にこのことについて書き残しています。これは、のちに夫となる男性との運命的な出会いの描写でもありました。概略は、以下のとおりです。

紅吉は茅ヶ崎の南湖院でしばらく療養生活を送ることになり、やがてわたくしも「青鞆」八月号の編集をすませて、紅吉を見舞いかたがた、茅ヶ崎へでかけました。……八月の半ばを過ぎたある日、わたくしたちは南湖院の応接間で、二人の未知の男客を迎えました。その一人は、〔今後の『青鞆』の発行と発売を委託する件で相談にやってきた〕当時文芸図書の出版社として有名な東雲堂の若主人で、詩人でもあった西村陽吉さんです。……〔もうひとり、たまたま藤沢駅で知り合い、西村さんに連れられてやってきた〕骨太で、図抜けた長身に、真黒な長髪をまん中からわけた面長の青白い顔が、異様なまでに印象的な青年で、奥村博と名乗りました。……なんの装飾もないがらんとした休日の病院の応接間で、〔青鞆社の社員で、いまだ南湖院との縁が切れず、東京と茅ヶ崎のあいだを行き来していた〕保持〔研子〕、紅吉、わたくしの三人が居並ぶテーブルをへだてて、最初に私を見、眼と眼があった瞬間、心臓を一突きに射ぬかれたようなせんりつが走り、青年になってはじめて、かつて覚えぬ想いで、ひとりの女性を見た——と、奥村はのちに述懐しました。わたくしもまたこの異様な、大きな赤ん坊のような、

よごれない青年に対して、かつてどんな異性にも覚えたことのない、つよい関心がその瞬間生まれたのでした²⁴。

そのとき紅吉は、らいてうの特別な感情の動きを敏感にも察知すると、すぐさま奥村へ手紙を書き送っていたことが、のちに奥村が上梓する自伝小説『めぐりあい』のなかに記されています。広岡昭子^{てろこ}がらいてうで、佐々しげりが紅吉であることは容易に想像がつきます。どのような経緯で初対面の浩（奥村博）の住所をしげり（紅吉）が聞き出していたのかなどの不明な点も残されていますが、前後の記述内容からして、この手紙の存在はほぼ間違いないもののように思われますので、ここに、そのまま浩に宛てたしげりの手紙の内容を引用しておきたいと思います。

不吉な予感が私を襲って、私は悲しい、恐ろしい、気遣わしいことに今ぶつかっているのです。それがはっきり安心のつくまであまり面白くもない生活を送らねばなりません。そして幾日かののちに私は生まれて来るのです。だがそれまでは私は淋しい、私は苦しい。

広岡 [らいてう] がぜひあなたに来るようにと、そして泊まりがけです。待っています、いらっしゃいまし。

八月十九日 しげり [紅吉] ²⁵

この手紙について、らいてうはこのように回想しています。「一度会ったばかりの奥村にこんな手紙を出したとはわたくしも保持さんもまったく知らないことでした。（知ったのは三十数年も後に奥村が『めぐりあい』という自伝小説を書いたときです。）手紙の最後には、あたかもわたくしからの伝言であるかのような一節があり、紅吉の病的な神経の動きの鋭さ、速さ、とくに嫉妬の場合の複雑さにわたくしは驚くよりほかありませんでした」²⁶。もし、らいてうからの伝言ではなかったとするならば、どのような意図があつて紅吉は、「[らいてうが] ぜひあなたに来るようにと、そして泊まりがけです。待っています」と、偽ってまで書かなければならなかったのでしょうか。いま一度両者を再会させることで、このふたりの愛が真実なものか、自分の目で確かめてみたかったのでしょうか。それは紅吉にとって、危険を伴う大きな賭けを意味していました。影に隠れたこのような伏線のなかで、実際に奥村は二度目の訪問をし、さらにその数日後、紅吉が恐れていたとおりに、このふたりは雷鳴のなか一夜をともに過ごすことになるのです。らいてうの回想するところによれば、こうです。

二、三日して写生の帰りだといって、スケッチ箱をもった奥村が、突然わたくしの宿を訪ねてきました。いま、[馬入川が海に流れ込む河口一帯の]「南郷」で描いたというスケッチ板の松林の絵を見せてもらいながら、わたくしはふと、『青鞨』一周年記念号の表紙をあらたに、この人にかいてもらいたい気になり、さっそく頼んだのでした。それから、二、三日した日の夕方近く、その表紙図案をもって見えました。わたくしは奥村を連れて、南湖院に行き紅吉と保持さんを誘って海岸に立ち並ぶ海気室に行き、蒼い海と美しい夕映え雲を眺めながら四人でしばらく話しました。紅吉が柳島に小舟を出

そう……といいだしたのがもとで、保持さんは親しい友だちの小野さんという入院患者の……元気な青年を誘って、五人いっしょに舟に乗り込みました。……月夜の馬入川の舟遊びはみんなに時を忘れさせるほどでした。そして奥村は藤沢へ帰る汽車にのりおくれてしまいました。歩いて帰るという奥村を保持さんはしきりと引きとめ、自分がいつも寝起きしている病院の松林の奥にぼつんと建った一軒家……に奥村を泊めることにし、保持さん自身は病院のだれかの部屋へ、紅吉は自分の部屋へ、そしてわたくしは自分の宿である獵師の家へ、それぞれ別れて引き上げて行きました。こうしてみんなが寝床についたころ……またたく間に烈しい雷鳴となって……とても眠れそうにありません。……すさまじい稲妻と雷鳴に怯えているであろう気の弱そうな若者を想うと……いよいよ寝るどころではありません。とうとう起き出したわたくしは、宿のおかみさんに提灯をもって付き添ってもらい……奥村を迎えにいきました。……その夜、大きな緑色の蚊帳のなかに寝床を並べて朝を迎えたときから、奥村に対するわたくしの関心は、しだいに関心以上のものへと、急速に高まってゆくのでした。蒸し暑い夏の夜のしばしのまどろみのあと、東の空の明るみははじめた海岸に出て、指をからませながら二人で寄りそって……浜辺を歩くとき……満ちあふれた生命の幸福感でいっぱいになっていました。こうして、奥村がわたくしの宿で一夜を過ごしたことは、夜明けを待ちかねてわたくしの宿の様子を窺いにきた紅吉のいちはやく知るところとなり、わたくしの愛の独占をのぞんでいた紅吉に、大きな衝撃を与えないではいませんでした²⁷。

九月になり、東京にもどっていたらいてうの手もとに、一通の手紙が届きました。奥村からのものでした。その手紙には、「池の中で二羽の水鳥たちが仲よく遊んでいたところへ、一羽の若い燕が飛んで来て池の水を濁し、騒ぎが起こった。この思いがけない結果に驚いた若い燕は、池の平和のために飛び去って行く」²⁸といった内容が書かれてありました。それに対してらいてうは、「燕ならばきっとまた、季節がくれば飛んでくることでしょう」²⁹との短い返事を書き送りました。そして、らいてうの予言どおりに、「若い燕」は一方の水鳥のもとへと帰ってゆくのでした。

こうして、らいてうと紅吉の「同性の恋」は終わりました。紅吉が退社を決意するのは、療養していた茅ヶ崎の南湖院を退院して、東京にもどったその年（一九一二年）の秋のことでした。紅吉の退社の弁を、『青鞥』十一月号に掲載された「群衆のなかに交つてから」のなかに見ることができます。

私は今、あらためて私を紹介します。私は偽と知らずに偽を知つてみた人間でした、正直だと思つて不正直なことをしてみた人間でした。まるつきり責任と云ふものを考へて見ない、人と云ふものを見もしない、僭越な、我儘な奴だつたので御座います。…それで今度拾一月號の編輯が終ると同時に私は青鞥社を退社致すことになりました。……この青鞥は私にとって最終の編輯にあたつたので御座います。……私は涙と光りでこの原稿をかき終へます。ぢや左様なら、私は今もう歸へつて行きます³⁰。

しかし、すぐにも青鞥社から身を引いたわけではありません。紅吉は、安堵村の富本憲吉を訪ね、『アダムとイヴ』の下絵を依頼し、それを紅吉が木版に彫り、一九一三（大正二）

年新年号の『青鞆』の表紙を飾ることになるのです。そして、七月の『中央公論』の臨時増刊婦人問題号のなかで、このように、らいてうについて告白するのです。

私はかつての私と平塚さんの間の感情や行為を思ひ出しますと、とてもこの原稿がかけません。平塚さんは、私達よりも、どれだけ涙もろかつたでせう。私はあらゆる我儘をしてゐたゞけ平塚さんを困らせたものです。今考えると全くお氣毒です。……なんだからばらばらになりましたが、私はこれより以上かくことを好みません。……この記事はかへつて平塚さんの今の位置なり、名譽なりを傷つけたかも知れませんが、しかしその邊のことはどうぞしかるべく御許し下さい。私がこの原稿をかくに對して、充分の好意をもつてゐることは、全く實際だと云ふことを信じてゐますから³¹。

この紅吉の「自叙傳を讀んで平塚さんに至る」が『中央公論』に發表された翌月の『青鞆』八月号は、「編輯室より」に次のような文を掲載しました。

尾竹紅吉氏がまだ本社の社員であるかのやうに思つてゐる方もあるやうですが、同氏が自分から退社を公言されたのは昨年の秋の末だつたかと思ひます。……同氏の特種な性格を知つて居ますから社は大抵は黙許して参りました。けれども今日はもう社とも、社員とも全然何の関係ありません。従つて同氏の言動に就ては……社にとつてもらいてうにとつても誠に迷惑なものであります³²。

これをもって、紅吉の青鞆社時代は完全に終幕したのでした。

四. その後のらいてうと紅吉

奥村博と出會つて二年後の一九一四（大正三）年の一月、らいてうは、家を出て、巢鴨にある植木屋の離れを借りて、博との協同生活に入ります。翌月の『青鞆』二月号（第四卷第二号）に、「獨立するに就いて両親に」と題した一文をらいてうは寄稿し、ふたりの関係を公表するのでした。このころから『青鞆』の発行部数が減少し、新生活による多忙さも加わり、翌年（一九一五年）の一月号（第五卷第一号）から、『青鞆』の編集権は、社員の伊藤野枝の手に渡されます。しかし、伊藤が、無政府主義者で妻のある大杉栄と関係をもつようになると、『青鞆』の編集にも影響を及ぼすようになり、最終的には、一九一六（大正五）年の第六卷第二号をもって休刊へと追い込まれてゆきました。そして、その年の十一月に、大杉を愛するもうひとりの女性で、かつて青鞆社の社員でもあつた神近市子が、葉山の旅館で、大杉を刺傷するという殺人未遂事件を起こしたのでした。いわゆる「日蔭茶屋事件」と呼ばれるものです。自由恋愛による「多角関係」がもたらした悲劇でした。その結果、神近は刑に服し、二年間、獄窓の人となります。一方の大杉栄と伊藤野枝は、その後、一九二三（大正一二）年九月の関東大震災からまもなくして憲兵隊に連行され、陸軍憲兵大尉の甘粕正彦によって殺害されるという、痛ましい事件に巻き込まれ、ともにその生涯を閉じるのでした。

らいてうは、「日蔭茶屋事件」について、こう書いています。

ここで、わたくしたちの「青鞵」は終わりました。そして「日蔭茶屋事件」が、好むと好まざるとにかかわらず、わたくしたちの「青鞵」の挽歌であったことも、いなみ得ないことです。

同時に、わたくし自身の青春も、このへんで終わったのではないかと思います³³。

『青鞵』の編集を伊藤に譲った一九一五（大正四）年の九月、らいてうのパートナーの博が、肺結核を患い、茅ヶ崎の南湖院に入院します。ここは、らいてうと博がはじめて出会った場所でもありました。そしてその年の暮れに、長女の曙生^{あけみ}を出産します。博が改名して「博史」を名乗るようになるのも、このころからのことでした。長男の敦史^{あつぶみ}が生まれるのは、一九一七（大正六）年九月ことで、らいてう、三十一歳のときでした。

この時期以降、らいてうの関心は、婦人による社会運動のための団体結成に向けられてゆきます。一九一九（大正八）年の十一月、新聞社主催による第一回の関西婦人大会が、大阪の中之島公会堂で開催され、招かれてらいてうは、「婦人の団結を望む」と題して、講演を行ないました。ちょうどそのとき、らいてうには「新婦人協会」結成の構想があり、起草された創立趣意書を発表する絶好の機会となりました。実際に新婦人協会が結成されたのは翌年のことで、市川房枝や奥むめおたちの協力のもと、『青鞵』の休刊後にあって、らいてうは、女性の諸権利を求めての新しい社会的、政治的運動へと身を投じてゆくのでした。

大阪で開かれた第一回関西婦人大会での講演の帰り道、らいてうは、かつて青鞵社時代に「同性の恋」を展開した相手方である紅吉を大和安堵村に訪ねました。

青鞵社を離れた紅吉は、長野、新潟、秋田を回る傷心の旅から帰ると、一九一四（大正三）年三月に文芸雑誌『番紅花^{さくらん}』を創刊します。『青鞵』に対抗する意図もあったものと思われる。六名の同人には、神近市子も加わっていました。そして、これを境にして、「紅吉」の雅号は姿を消し、本名の「尾竹一枝」が筆名に使用されるようになります。『番紅花』の挿し絵は、主に富本憲吉に依頼されました。こうして、一枝と憲吉は、愛する仲となり、一九一四（大正三）年一〇月、ふたりの華燭の典が日比谷大神宮で執り行なわれました。

しかしこのとき、両人の婚礼姿と両家の集合写真とともに、一枝のセクシュアリティに関する暴露記事が一二月一日発刊の『淑女畫報』に掲載されるのです。記事の題は、「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」というもので、紅吉の結婚の陰で泣く、ふたりの女性の存在が詳述されていました。また、この記事のなかには、「紅吉女史は女か男か」と題された一文も挿入され、紅吉の、男性と見まがう性的行動の一端が話題にされていたのでした。以下は、その一部です。

男のやうに女性を愛するところ、その女性の前に立つて男のやうに振舞ふところ、それは彼女が愛する女と楽しい食卓に就いた時のあらゆる態度で分ると云つた女がありました。甘い夜の眠りに入る前に男のやうに脱ぎ捨てた彼女の着物を、彼女の愛する女が、さながらいとしい女房のやうにいそいそと畳んだと云ふことを聞いたこともありました³⁴。

おそらく、こうした特異な一枝のセクシュアリティが要因となったのでしょう、結婚の一箇月前に「富本憲吉氏圖案事務所」を開設したばかりであったにもかかわらず、ふたりは突如東京をあとにし、翌年（一九一五年）の春、若くて美しい女性があまりいそうにない、奈良県安堵村の憲吉の実家に帰還し、この地に新居と窯を築くのでした。ここに、憲吉の陶工としての本格的な活動が開始されます。そしてまた、一九一五（大正四）年八月に長女の陽が、一九一七（大正六）年一月に次女の陶が誕生します。

らいてうの安堵村訪問は、曙生と陽が四歳に、敦史と陶が二歳になる年のことであり、若き母親同士の再会となりました。文通はあったものの、直接顔をあわせるのは、六年ぶりのことでした。らいてうは、こう書きます。

紅吉はむろんのことでしょうが、わたくし自身もかつては自分が女性であるということなど、まるで考えず、母となる日があろうとは、おもっても見ませんでした。あの大きな「だっ児」の紅吉が、富本一枝という、ひとりの妻、主婦、母に変わっていった、同じ歳月のもとでわたくしの辿る道も、同じように変わっていったのでした³⁵。

そして、らいてうは、こうも付け加えます。

青鞆社から身を引いたあと、一時、紅吉は、わたくしのことを、さんざんあることないこと悪口を言ったものですが、どんなに悪口を言われようと、わたくしには彼女の気持ちの方が分かり過ぎるほど分かっていたから、悪口を言うだけ辛いのだらうとおもって、そんなことはなんとも考えませんでした。

わたくしが奥村と結婚したあと、紅吉の同性愛的な振る舞いがなくなったのはむろんのことです³⁶。

かくして、らいてうと紅吉の青鞆社時代の関係は一新され、ふたりの間柄は、次の段階へと入ってゆくのでした。

注

- (1) 尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、247頁。
- (2) 富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、85頁。
- (3) りいてう「元始女性は太陽であつた。——青鞆發刊に際して——」『青鞆』第1巻第1号、1911年9月、37頁。
- (4) 平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であつた②』大月書店、1992年、24-25頁。
- (5) 同『元始、女性は太陽であつた②』、26-27頁。
- (6) 同『元始、女性は太陽であつた②』、29頁。
- (7) 「編輯室より」『青鞆』第2巻第6号、1912年6月、121-122頁。
- (8) 尾竹紅吉「或る夜と、或る朝」『青鞆』第2巻第6号、1912年6月、115-116頁。
- (9) 「編輯室より」『青鞆』第2巻第7号、1912年7月、110頁。
- (10) 「編輯室より」『青鞆』第2巻第6号、1912年6月、124頁。

(11) 「所謂新らしき女(二) 明子と美少年、紅吉と西洋酒」『國民新聞』、1912年7月13日、土曜日。

(12) 「『青鞞社』のころ」『世界』第122号、岩波書店、1956年2月、129頁。

(13) 前掲『元始、女性は太陽であった②』、32頁。

(14) らいてう「圓窓より」『青鞞』第2巻第8号、1912年8月、79頁。

(15) 同「圓窓より」『青鞞』、80頁。

(16) 同「圓窓より」『青鞞』、81-82頁。

(17) 同「圓窓より」『青鞞』、82-83頁。

(18) 同「圓窓より」『青鞞』、83-85頁。

(19) 同「圓窓より」『青鞞』、87頁。

(20) 同「圓窓より」『青鞞』、同頁。

(21) 同「圓窓より」『青鞞』、88頁。

(22) 同「圓窓より」『青鞞』、同頁。

(23) 同「圓窓より」『青鞞』、89頁。

(24) 前掲『元始、女性は太陽であった②』、43-48頁。

(25) 奥村博史『めぐりあい 運命序曲』現代社、1956年、35頁。

(26) 前掲『元始、女性は太陽であった②』、49頁。

(27) 同『元始、女性は太陽であった②』、49-52頁。

(28) 同『元始、女性は太陽であった②』、56頁。

(29) 同『元始、女性は太陽であった②』、57頁。

(30) 紅吉「群集のなかに交^{まじ}つてから」『青鞞』第2巻第11号、1912年11月、97-99頁。

(31) 尾竹紅吉「自叙傳を讀んで平塚さんに至る」『中央公論』臨時増刊婦人問題号、1913年7月、180-181頁。

(32) 「編輯室より」『青鞞』第3巻第8号、1913年8月、195頁。

(33) 前掲『元始、女性は太陽であった②』、288頁。

(34) 深草の人「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」『淑女畫報』第3巻第13号、1914年12月、35頁。

(35) 平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった③』大月書店、1992年、76頁。

(36) 同『元始、女性は太陽であった③』、77頁。

第三章 『女人藝術』からアナーキズム派が身を引く

一. 平塚らいてうと富本一枝の両家族の成城移転

前の章で書きましたように、平塚らいてうが、富本一枝を大和の安堵村に訪ね、再会したのは、一九一九（大正八）年の十一月のことでした。それを機に、しばらく途絶えていた交流が再開されます。しかし、地理的に離れていたこともあり、必ずしも日常的なものではありませんでした。らいてうは、翌年（一九二〇年）に新婦人協会を創設すると、ここを舞台に、婦人による婦人のための社会運動を新たに展開してゆきます。一方の一枝は、安堵村にあって、自分のセクシュアリティについての苦悩について書き、そしてまた、それをいやすかのように自然の美しさや子どもの純真さをたたえる文を書き、加えて小説「貧しき隣人」や「鮎」を執筆していました。ところが偶然にも、双方の家族は、成城の地に移り住むことになるのです。らいてうの転居の主たる理由は、子どもの教育と関係していましたが、一枝にとってのそれは、十数年前に東京から安堵村に移転したときの理由と同じく、背後にあって、自身のセクシュアリティにかかわる問題が存在していました。

一九二七（昭和二）年一月刊行の『婦人之友』（第二一卷第一号）を開くと、平塚らいてうの「砧村に建てた私たちの家」と富本一枝が書いた「東京に住む」が、あたかも示し合わせたかのように、一緒に掲載されています。

らいてうは、長女の曙生を一九二三（大正一二）年の春に、長男の敦史を翌年の春に、牛込原町の成城中学校の敷地内にあった成城小学校に入学させていました。校長が沢柳政太郎で、主事が小原国芳でした。その小学校が、一九二五（大正一四）年に牛込から砧^{きぬた}村に移ることになり、それにあわせて、らいてう一家は、この地に家を建てたのでした。らいてうはこう回想します。「当時の砧村は、高台一帯が赤松林と草っ原で、萩や芒や葛などが生い茂る、文字どおりの草分けの地でした。番地こそあっても、あたりは野原のなかの一軒家で、小田急の成城学園駅は……家の窓からプラット・ホームと改札口が一目で見渡せます」¹。

一方、一枝の娘の陽と陶も、成城学園へ転入しました。陽と同学年だった井上美子は、後年『私たちの成城物語』のなかで、このように振り返っています。「富本家は、昭和二年に小田急線が開通する一年近く前、郷里の大和安堵村から家族とともに上京、窯を祖師谷の丘に築く準備をされた。住居と窯ができ上るまでのしばらく、高田馬場の線路の近くに仮住居があった。長女陽、次女の陶の姉妹が成城学園に入学、目白に家があった私とは、毎日電車の時間を決めて一緒に通学していた」²。いよいよ新居が完成し、富本一家は、高田馬場の借家から千歳村へと引っ越しました。建築地は、「東京市外北多摩郡千歳村下祖師谷八三五」でした。井上美子の回想はさらに続きます。「小田急線開通の晩夏、昭和二年にわが家が建ったのと同じころ、富本家の新居と窯も完全に完成して北側の奥、成城田んぼの突き当たりの丘に移られた。その年生まれた壮吉君と、一家は五人に増えていた。陽ちゃんと私もこの年の三月小学校を卒業して女学校一年となった」³。

このように、この時期の成城地区は、雑木林と田畑に囲まれた武蔵野の面影がいまなお残る自然環境を背景として、成城学園の移転や小田急線の開設に伴いながら、新しい文化人村としてその姿を現わそうとしていたのです。

二. 長谷川時雨による『女人藝術』の創刊

両家族の新生活がはじまって一年が過ぎようとしていたころ、長谷川時雨は、自身が主宰する『女人藝術』の創刊に向けて、その準備をしていました。長谷川自身、かつて『青鞞』の賛助員であったことから、当時の青鞞社の社員にも協力を要請しました。そのひとりである神近市子は、こう振り返ります。

世田谷のボロ家に、ある日、長谷川時雨女史が生田花世女史を伴って来訪され、婦人が作品を発表するための文芸雑誌をつくりたいが協力してくれないか、といわれた。私には『青鞞』や『番紅花』の思い出や経験があり、一も二もなく賛成した⁴。

さらに続けて、神近は、次のように回想します。

『女人芸術』は、昭和三年七月に創刊された。編集会議は長谷川女史のお宅で開かれ、資金面は夫君の三上於菟吉氏がカバーしてくれた。当時の婦人文筆家で、この雑誌に執筆しない人はいないだろう。表紙も絵も女流画家に依頼し、創刊号の巻頭写真にはソ連に旅行中の中条（宮本）百合子の近影が選ばれた。私は山川菊栄女史といっしょに、主として評論を書いた。林芙美子が『放浪記』を連載して一躍流行作家の列に入り、上田（円地）文子が戯曲『晩春騒夜』を発表して小山内薫に認められたのもこの『女人芸術』である。この雑誌では、上記の人々のほかに生田花世、岡田禎子、板垣直子、大田洋子、中本たか子、矢田津世子、真杉静枝らが活躍した⁵。

こうして準備が整い、一九二八（昭和三）年七月、『女人藝術』の創刊号が世に出ました。

高群逸枝は、『青鞞』に連なる人間ではありませんでしたが、自身にとっての第六詩歌集となる『東京は熱病にかゝつてゐる』を、三年前の一九二五（大正一四）年一月に萬生閣から上梓し、すでに詩人としての高い評価を得ていました。たとえば、下中彌三郎は、この詩集の「読んで下さい——序にかへて」の一節のなかで、こう評していました。

今の日本には、勿論すぐれた女性がたくさんある。平塚明子さん、山川菊栄さん、奥むめおさん、みなすぐれた人達である。たゞ詩人、哲學者、文明批評家をかねた種類の女性の中には今のところ私は逸枝さんをその最もすぐれた一人としてあげるに躊躇しない⁶。

高群の長編詩「戀愛行進曲——月漸く昇れり」が『女人藝術』に掲載されるのは、年が明けた一九二九（昭和四）年の初春号においてでした。高群は、冒頭、このように宣します。

世の戀人たちに此の詩をおくる。私は此の詩で、戀愛を遊戲視する近代的青年に對する若き女性の悩みと心の動きを描かうと試みた⁷。

この「戀愛行進曲——月漸く昇れり」は、二頁から二一頁までを占める、初春号の巻頭を飾るにふさわしい長編詩でした。最後は、次の詩句で結ばれます。

夜の女王、満月が
正座して昇り行く

おゝ月とわが戀
漸く昇る

このとき妾はいふ
かの月とわが戀とは
高く昇るにしたがひ
輝きと冷たさを増すのであると⁸

他方で、まだ一歳半にしかならない小さな壮吉を抱えながらも、富本一枝もまた、この雑誌の刊行に協力しました。しかしながら、書く内容は、安堵村におけるそれとは大きく異なり、その時代の文学的潮流に沿おうとするものでした。

それでは、『女人藝術』が創刊された一九二八（昭和三）年ころは、文芸にとってどのような時代だったのでしょうか。この時期の日本を概観していえることは、社会運動のみならず政治や経済の分野においても、大きな変動期を迎え、同時に文芸もまた、そのことと無関係な存在としては成り立たなくなっていました。関連する重要な項目を幾つか拾ってみると、一九二〇年代において農民運動や労働運動が高揚し、一九二五（大正一四）年には普通選挙法が成立します。しかし同時に、その一方で治安維持法もまた成立し、一九二八（昭和三）年には最初の総選挙が実施されるも、このとき非合法の共産党の活動に衝撃を受けた政府は、治安維持法を適用して、共産黨員やその同調者を一斉に検挙します。いわゆる「三・一五事件」です。他方経済に目を向けると、その前年（一九二七年）には、多くの中小銀行の休業や倒産が相次ぎ、金融恐慌がはじまるなか、独占資本と金融資本が支配的な地位を占めるようになってゆきます。こうして社会主義と共産主義の思想がこの時期急速に広まり、文壇においてもその影響が表われ、プロレタリア文学の隆盛を見ることになるのです。

そうした動きのなかにあって、富本一枝の「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」が、『女人藝術』創刊一周年記念七月号に登場します。この夢物語の舞台設定は、こうです。

K、M、H、N、I、O、これらの諸氏はいづれも當代の人々で、みな私の親しく感じる友人である。唯、夢である。一九二九年六月、千歳村の夜明けのことであつた。……友人の幾人かが中央に置かれた卓の周圍に集まつてなにかしきりに話してゐる。……私が小説をかくと言ふことだが小説を書けるような人間だろうか。もし小説を書くといふことで相談をうけたら、それに賛成してよいかどうか、それをしきりと相談している⁹。

この夢のなかで繰り広げられる「小説をかくと言ふ」私（一枝と考えていいでしょう）を

巡っての論議に参加している「K、M、H、N、I、O」は、一体誰なのでしょう。イニシャルから連想して、神近、望月、松田、長谷川、平塚、平林、中本、今井、生田、大田などの名前を挙げることは可能かもしれませんが、実際はどうだったのか、正確にはわかりません。ズボンをはいていることに着目すれば、Kは男性であり、プロレタリア文学の理論的指導者の蔵原惟人であった可能性も排除できません。しかし、それはそれとして、これだけ多くの発言者が登場することを考えれば、内容は別にしても、直近に行なわれた座談会「女人藝術一年間批判會」の形式を、一枝はうまく借用したといえなくもありません。因みに、「女人藝術一年間批判會」の出席者は、平塚らいてう、富本一枝、今井邦子、新妻伊都子、生田花世、伊福部敬子、望月百合子、上田文子、中本たか子、平林たい子、林芙美子、八木秋子、熱田優子、素川絹子、小池みどりの面々でした。

「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」は、比較的に分量も多く、話題が多岐にわたり、展開にスピード感があります。そこで、代表的な発言内容や人物描写を少しずつ拾い上げながら、できる限り簡潔に、そのストーリーを跡づけてみたいと思います。それはおおよそ、次のようになります。

「小説を書く？それには先ず態度を決める必要がある。あなたがプロ派に属するか、必然的に崩壊の道程に現に置かれてゐるブル派に属して仕事を始めるか、この問題が肝心の点だと私は思いますが——本人はいつたいそのどちらを撰ぶつもりです！？」(M氏)。「百姓の生活描寫、工場に働くものゝ描寫、プロレタリア藝術は有産階級文學の如く墮落してはゐない。プロレタリア藝術は社會本位の思想にあつて價值を生じる。輕蔑すべき個人主義は我等にとつて明らかに過去の産物にすぎない」(K氏)。「流行兒マルクスのことでは食傷しきつてゐる。マルクスだつてエンゲルスだつて恐れるものですか！マルクスに藝術のことがわかると思ふのは馬鹿者である」(N夫人)。もしかすると、I氏は共産黨員で××[革命]政府の間者かもしれない——。I氏は和服に靴ばきである。

こうして論議は白熱し、延々と続く。私はH氏の家へ向かう。「もうすこし待てないものだらうか、私は今社會主義の誕生と發展の方向を調べてゐる最中でいそがしいし、その上Oが熱を出してゐるので一寸隙がないが——」(H氏)。O氏は純白の着物に着替えて、光った一本のメスを隠し持っている。「濡れてしまつたマッチが、とぼせると思ふのですか、君は？！」(O氏)。「Oさん！芝居ですか、本當に殺すつもりですか！？」。「血が出るのはいやだ！私は血がふき出すのがいやなんです！止して下さいたら！」。

場面は一三階建ての建物の最上階の部屋。外では、新しい生活の歴史の第一頁を歩み出した大群による夜明けの行進が続き、世界××[革命]とプロレタリアートの最終勝利を祝う歌が聞こえる。「あなたの右手に運命的なトランプをもち、左の手にはヤースナヤ、ポリヤーナの老爺さんの思想の生煮へをもつてゐる。……今、あなたは二つの毒素をこの窓から吹き散らしておしまひなさい。勇ましく！勇ましく！」(K氏)。そしてK氏は眼下の行進に対して敬礼するように私に求める。「何故、敬禮が出来ないのです！人間のために、人間の歴史のために、今日程敬意を表してよい特筆されるべき日に」(K氏)。

舞台は衣裳部屋へと移る。さらに多くの友人たちが加わり、誰しもみな、今着ている服を脱ぎ去ることもなく、その上に、真新しい服を重ね着しようとしている。

そして場面は會議室へ。私はKを呼ぶ。「會議は未だ續くのですか」。「まだ五六時間、そう、夜明まで續くでせうね！」(K氏)。「夜明？夜明？私の赤ん坊はどうなります。私は家

に歸へりたい。「それではかうなさい。私は友人としてあなたをこゝから無事に出してあげよう。だけどあなたは着物をきかへてからでなければ危険だ——」(K氏)。「きもの？私はこんな風に私の着物ちやんと持つてゐる。私はこのまゝで十分です」。「しかし、あなたが今着てゐる着物は個人のきものですよ。私の貸そうと云ふのはマルキシズムの着物なのだ。あなたは法則としてこの着物をきる義務がありますよ」(K氏)。私はKのズボンにほころびがあるのに気づき、「あなたこそ着物をおきかへなさいね」といつてみた。すると、「なに、私にはまだまだ着換へが澤山ある」と言い返し、Kは、風呂敷のなかから新しい色の着物を取り出した。「これはマルキストの衣服でせう。私はマルキストではない。マルクスの資本論だって読みかけなんです。赤面しますよ、これをきることは全く銜学の徒だ。私はいやだ！」。断わったにもかかわらず、Kは、私の背後に回って、この服に手を通させようとする。私は夢中でKの手を払いのけた。

それから私は、左の戸口に駆け寄り、把手を回した。そのとき、背後から一発の銃弾が放たれた。死に絶えた私は、こう口走った。「私が×[赤]色の服を着るでもなく着ないでもなく、實に曖昧にひつかけたことがいけなかつた。けれど、私はひつかけて置くより外、どうすることも知らなかつたのです。まあ、死んだことはよい経験でありました」。そこへひとりの影の男が現われて、「こいつの着物を見ろ！まだ着物に手を通してゐない！意思のない、バランスのとれない思想の借用に抵抗したことだけは確かだね——」といった。しかし多くの人びとは、「なんだ！成程この人間は着物に手を通してゐなかつた！着換へることが命のやりとりになるのを知つてゐたら、ピストルなんか飛んではこなかつたらうに！案外才智のない人間だつたとみえるね！」と言い放って、憐憫と冷笑とを私に浴びせた。この声を聞いたところで、私は夢から覚めた。以上が「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」の概略です。

ここからわかるように、この時期一枝は、ある種思想的混沌のなかに身を置いていました。この「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」は、マルクス主義へ足を踏み入れてみたいという誘惑に駆られながらも、躊躇して思いとどまる、そうした一枝の心的葛藤が、夢という舞台の上を率直に自由に駆け回っている作品といえそうです。時代が一枝に突き付けたものは、「小説を書く？それには先ず態度を決める必要がある。あなたがプロ派に属するか、必然的に崩壊の道程に現に置かれてゐるブル派に属して仕事を始めるか、この問題が肝心な点だと私は思います——本人はいつたいそのどちらを撰ぶつもりです！？」という、厳しい二者択一の問いでした。「マルキストの衣服」を本当に着ることができるのかどうか、その判断が求められたともいえます。しかしこの時点では、「着るでもなく着ないでもなく、[袖に手を通さずに]實に曖昧に[肩に]ひつかけた」程度の感触を味わったにすぎなかつたということでしょうか。マルクス主義はいまだ一枝にとって、着心地の悪い借り着の域を出るものではありませんでした。

三. 『女人藝術』内での「アナ・ボル論争」の開始

一枝にとってのこの時期の夢物語である「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」において使われている「プロ派」と「ブル派」とは、いうまでもなく、前者は、プロレタリアート（資本主義社会における賃金労働者階級、つまりは無産階級）に属する人を、後者は、

ブルジョワジー（労働者を雇用する側の資本家階級、つまりは有産階級）の立場にある人を指します。この時期、文学を志す人間には、「小説を書く？それには先ず態度を決める必要がある。あなたがプロ派に属するか、必然的に崩壊の道程に現に置かれてゐるブル派に属して仕事を始めるか、この問題が肝心の点」として、明確な立場の表明が求められていたのです。

他方、『女人藝術』内にあってこの時期、いわゆる「アナ・ボル論争」が展開されます。「アナ」とは、アナルコ・サンディカリスム派（アナ派、無政府主義、組合主義）を、「ボル」とは、ボルシェヴィズム派（ボル派、マルクス主義、レーニン主義）を指します。この両者間の論争は、社会運動や社会主義運動を巡る思想的、実践的対立として、一九二〇年代のはじめから展開されてきていました。たとえば、労働組合運動の組織論に関しては、アナ派は自由連合論を唱え、政党の指導を排除すべきであると主張しました。それに対してボル派は、中央集権的な組織論を展開していました。

これに関して注目されてよいのは、富本一枝の「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」が掲載された『女人藝術』（一九二九年七月号）において、「公開状」と題して、八木秋子が「藤森成吉氏へ」、松田解子が「小林多喜二氏へ」、熱田優子が「中川紀元氏へ」、そして伊福部敬子が「平塚明子氏へ」、最近の行動や仕事について、疑問を呈したり、質問を投げかけたりしていることです。こうして、『女人藝術』内での「アナ・ボル論争」が開始されてゆきました。

八木秋子の自由連合の社会観は、こうです。

眞の幸福な社会生活は人間の自發的創造的意思によつてのみ生れる——。マルキシズムの社会は國家の獨裁支配に第一步を始めるに反して、自由聯合の社会は不完全な個人の自由に發生し、爛漫と花咲く自由へと限りなく伸長して行く聯合社会で、國家では最初からあり得ない¹⁰。

熱田優子は、自己の芸術観を、こう述べます。

私は空想する。かゝる理想的社会が到來し得るならば——そこにはブルジョアもなくプロレタリアもない。恐ろしい闘争もなければ利己的な野心もないのどかな社会である——その無政府的な美しい社会に於てのみ眞の藝術の王國は榮え得るのではなからうか¹¹。

伊福部敬子が主張する婦人運動論は、このとおりです。

即ち、昨日の婦人運動は思想の自由を婦人に與へんためでありました。今日の婦人運動は、思想に従うて行動するの自由を得んためのそれであります。（中略）而してこの家庭的因習、家庭的緊縛より脱せしめて中産知識階級の男性と同等同列にまで並び、男性と同じ自由さ、同じ困難さにまで到達せしむるのが今日私のいふ新しき婦人運動であり、こゝに來て婦人運動はその使命を完全に果したと見るべきであります。

せう。かくして中産知識階級婦人は、無産運動に合流することが出来るのであると思ひます¹²。

この「公開状」を発端として、『女人藝術』の誌上における「アナ・ボル論争」は、翌年（一九三〇年）の一月号掲載の、中島幸子の「アナーキズムの顛落」と隅田龍子の「再びアナーキズムを駁す」まで続きます。そうした一連の思想的、政治的論争の流れにあつて、その最終的な結果として、『女人藝術』のなかのアナ派がそこから身を引き、一九三〇（昭和五）年の正月、高村逸枝を中心に、それに平塚らいてう、伊福部敬子、八木秋子、望月百合子らが加わり、アナーキズム派の文筆家による無産婦人芸術連盟が結成され、機関誌『婦人戦線』の発刊へと進んでゆくのでした。

四．「アナ・ボル論争」から無産婦人芸術連盟の創設まで

それでは、一九二九（昭和四）年七月号の『女人藝術』掲載の「公開状」に端を達した「アナ・ボル論争」は、その後、どのような論戦へと発展し、その結果、アナーキズム派の文筆家たちが『女人藝術』を離脱し、そこからどう、無産婦人芸術連盟が結成されるまでに至ったのか、その経緯につきまして、以下に短くまとめてみたいと思います。

『女人藝術』誌上における「アナ・ボル論争」には、その前史のようなものがありました。論争の中心人物は、山川菊栄と高群逸枝です。菊栄は社会運動家の山川均の妻で、いわゆる「科学的社会主義」の立場にあるボル派であるのに対して、逸枝はアナ派の立場にあり、その考えは、どちらかといえば「空想的社会主義」です。すでに、『東京は熱病にかゝつてゐる』（一九二五年）の第二十一節「アナとボルとの話」に、次のような詩片が現われます。

あれはアナとボルだ。

飛ばとばちるちる沫。

悲憤。もがく芽生え。風は吹く。吹く。

暗夜。星。木の根。彼方は明るい。

アナ行け。ボル退け。

時代も歴史も。

自由。悪夢。行け。行け。利己心。正義¹³。

『東京は熱病にかゝつてゐる』に続けて高群は、次の年（一九二六年）に『戀愛創生』を世に送ります。この本には、いっさい章も節もなく、全文書き流しです。本文に先立つ「巻頭に」において、本書執筆にかかわる要点を箇条書きにしています。それは、「婦人問題の経路」にかかわって八点、「戀愛の経路」にかかわって一〇点、そして「エレン・ケイの戀愛論」にかかわって一点、合計一九箇条で構成されています。以下に、「婦人問題の経路」から三点、そして「戀愛の経路」のなかから同じく三点を選んで、紹介します。

一、婦人問題の経路は、女権主義、女性主義、新女権主義、新女性主義。

一、新女権主義は、科學社會主義を信奉してゐる。新女性主義は、科學社會主義の彼方に、新たに個性を語る。

一、新女性主義こそ、西洋に對して日本婦人のする、最初の提唱であらう。私は豫想する。日本婦人の活動を。知的聡明を。新女性主義を、いま本書で説く。

＊

一、戀愛の経路は、精神主義、肉慾主義、靈肉一致主義、一體主義。

一、一體主義は、戀愛の究極を、一體と見る。一體と感じた戀愛において、生殖し、人類における男女両性の一體化、男女両性の消滅期へまで、子孫を一體的過程の上において維持する本能。

一、一體主義は、科學上の、地球の冷却説に順應して、人類の自然消滅を豫想するものである。一體主義を、いま本書で説く¹⁴。

新女性主義と一體主義、これが高群にとっての婦人論および恋愛論を支える基礎となる原理部分です。その上に立って高群は、マルクス主義を次のように見ます。

マルクス主義は、婦人問題に無関心である。婦人問題の根柢に理解を缺いてゐる。

彼等は、婦人が彼等の社會に所有されてゐるゆゑ、婦人に對して無関心である。

社會上のすべての問題は、婦人を踏臺にした上でのものであるといふ眞理に對して無関心である。

彼等は、婦人が踏臺にされてゐるといふことを忘れて、單なる經濟的争奪戦の現象を、全體としての現象であると見てゐる。

彼等は、甚だしい近視眼者で、社會の表面だけを見る皮相論者にすぎない¹⁵。

他方、サンディカリズムについては、以下のように書きます。

サンディカリズムは、議會主義を一笑に附し去り、無産階級の直接行動によつて、社會改造の目的を達成しようとする點で、修正派社會主義に正反對の地位に、その社會制度の内容を、生産階級の組合自治に委ねようとする點で、集産主義即ち國家社會主義と正反對の地位にある。

國家的權力を輕視する點では、無政府主義に類するけれども、組織の必要と、積極的闘争とを主張する點では、無政府主義と同じでない¹⁶。

加えて高群は、無政府共產主義者たちの理想について、こう述べます。

無政府共產主義者として數へらるゝものに、ブルードン、バクニン、クロポトキンがある。

ブルードンは、平等を強く主張した。境遇の平等、機會の平等等を。

ブルードンは、國家的支配を否定し、人間としての自由を熱望し、バクニンは、革命的無政府主義者として、革命の化身といはれ、人間平等の精神に立脚して、一切の特權制度に反對した。

彼の理想社会は、政府といふ組織を持たないばかりでなく、いかなる種類の制度をも持たなかった。

(中略)

クロボトキンの思想は、「パンの略取」「相互扶助」等では有名である¹⁷。

以上が、高群が『戀愛創生』のなかで言及していたマルクス主義とサンディカリズム、および無政府主義にかかわる描写箇所からの部分的抜粋になります。高群は、いかなる強権的制度からも自由であることを望みます。現行の結婚制度（一夫一婦制）は私有財産制度の一環であり、学校制度も、同じく特権支配制度のなかにあって機能している以上、母性の本能的見地に立って、強く廃止を求めるのでした。

舞台は、一九二八（昭和三）年の『婦人公論』の誌上です。まず、その五月号に逸枝は、「山川菊榮氏の恋愛観を難ず」を寄稿します。それに対して、次の六月号において菊榮は、「ドグマから出た幽霊——高群逸枝氏新発見の『マルクス主義社会』について——」を著わし反論します。

それでも、私は高群氏に対して直接にお答へする興味も義務も感じないのですが、しかし世間は広いものですから、数多くの読者の中には、天馬空をゆくにも似た高群氏の奔放な空想から生まれた『マルクス主義経済組織』——何といふ奇抜な新発見でせう！——なるものを、マルクスの社会学説と思ひ誤られる方もないには限られないと考へて、眞實のマルクス主義の一端を御紹介しておきたいと思ふのです¹⁸。

こう述べたうえで菊榮は、自身のマルクス主義に関する知見を本文において詳細に開陳し、恋愛観については、末尾において、短く、こう述べるのでした。

高群氏がその超論理的な文章の中に、取りとめもなく口走つて居られる美とか戀愛とかについての漫言も、一々本氣にとりあげて辨駁する必要はなさうに思ひます。たゞ私有財産の下においても、純粋な戀愛が絶対に存在しなかつたわけではない。しかし、それは私有制度と、それにもとづく不自然、不平等な両性関係のために虐げられ、歪曲せられて、一般的な原則としては存在しえなかつた。資本主義時代に至つて、それに対する反抗が起つたが、なほ一般的には、男女は自由な、純粋な戀愛を楽しむことはできない。それができるのは、未來の貧困もなく階級もない社会のみであるといふことを重ねて申しておけば足りると思ひます¹⁹。

これに対して逸枝は、「踏まれた犬が吠える——山川菊榮氏に——」と題した文をしたため、七月号の『婦人公論』に投稿します。「あなたの『ドグマから出た幽霊』を拝見すると、中心点には一切ふれないで、僅かな言葉尻をとらへて、したり顔にそれが即ち幽霊の正體でもあるやうに云はれる。甚だ不本意なことではあるけれど、それなら先づ其の問題から片づけて行きませう」²⁰と前置きし、「強権に対する自治の火は烈々と舉がつてゐる」²¹ことを詳述したあと、恋愛論にかかわって十分な返答をもらえなかつた逸枝は、最後に菊榮に、こう告げるのでした。

山川菊榮様

以上であなたの「ドクマから出た幽霊」の例證としてお挙げになつた諸點につき、全部お答へしたと思ひます。……

最後に申添へておきたいことは、あなたは唯、逆上なさるだけで、婦人の立場からの私の質問（母性の自由及び變愛の純粹性）について何一つ御返答なさり得ないといふことである。……今からでも晩くはない。眞正面からお答へ下さい²²。

その二箇月後、平林たい子が筆を執り、「ロマンチズムとリアリズム——山川菊榮・高群逸枝両氏の論争の批評——」を『婦人公論』九月号に寄せました。結論として、平林は、こう締めくくります。

山川氏は、十年前と今日とでは婦人の個人主義的な自覺の程度には、著しい相異があるにしても……経済的打算をはなれた純粹な變愛によつて女性が結婚するまでにはまだ十分な、否、質的な相異があることを云はれた。高群氏も山川氏と同様に現在の婦人の自覺の程度には不満を持たれてゐる。しかしながら、山川氏が今日の婦人の自覺の程度を一應認めて、その個人主義的自覺から、もう一步前進することを要求せられてゐるに反し、高群氏は婦人が封建的な變愛關係に、も一度逆戻りすることを要求される。そこには到底融和することの出来ない、あらゆる階級、層、集團の異なつた心理がかち合つてゐる²³。

解放された女性の姿と、その人がかかわる恋愛、結婚、家族のあり様とを、過去の一時期の、女性が中心であつたにちがいない社会に目を向けてそこから引用するのか、それとも、社会進化の必然的結果として出現するであろう近未来の世界に託すのか、平林は、逸枝と菊榮の論争を「ロマンチズムとリアリズム」の対立としてみなしたのでした。

以上が、一九二八（昭和三）年の『婦人公論』誌上における逸枝と菊榮のあいだで戦わされた「アナ・ボル論争」でした。その翌年（一九二九年）、この論争は舞台を変え、『婦人公論』から『女人藝術』へと持ち込まれてゆきます。

富本一枝の「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」が『女人藝術』（一九二九年七月号）に掲載されたころにはすでに、マルクス主義に信頼を寄せることができないでいた平塚らいてうが『女人藝術』から離れようとしていることに、富本一枝は気づかされていたにちがいありません。といいますのも、翌月の『女人藝術』八月号に、唐突にも一枝は、「平塚雷鳥氏の肖像——らいてう論の序に代へて——」と題した文を寄稿するからです。擱筆日は「一九二九年六月」となっています。その文は、らいてう讃美の言葉ですべてが塗り尽くされていました。以下は、その一例です。

「元始女性は太陽であつた！」

かくわれらに呼びかけて日本の女性のために、いな世界一面の女性のために目映ゆる黄金の大圓宮殿をこの國の東の水晶の山の上に營なもうとした一人の若き女性の昔日の面影を想ふとき、私は涙なくしては耐えきれないほど胸せまつてしまつた²⁴。

おそらく一枝は、らいてうを引きとめたかったのでしょう。しかし、その一方で、この『女人藝術』八月号には、先月号の「公開状」に答えるかたちで、藤森成吉の「公開状について一言、八木秋子氏へ」が掲載され、「アナ・ボル論争」に火をつけることになるのでした。「公開状について一言、八木秋子氏へ」は、「應接室」の題をもつ短いコラム記事で、そのなかで藤森は、「……『アナ』のあなたと論争する気はありません。ただ、あなたがもつと勉強され、小ブル的意識を抛棄される事を望みます。……」²⁵と書きました。それに対して八木は、次の九月号ですぐに反論しました。以下は、「簡単な質問（藤森成吉氏へ）」のなかの一節です。

非常に完全に小ブル的である危険があるから勉強せよ、とあなたは親切にもいはれる、しかも私は勉強することによつて残念ながら愈々マルキシズムに対する疑念と誤謬を拾い出して行かなければならないのです、私の知り得たことはすべてのマルキストがあまりにも本統のアナキズムを「知らなさすぎる」という一事でした。……

あなたがたの考へ方は非常に単純です。ブルジョアとプロレタリアの區別を単に生産機関を所有するものと、所有せずして自己の労働力を賣る事によつて生活の手段とする者、とに片づけてゐる。同じプロレタリアートの間にさへも相克しあふ関係のある複雑な社會の諸相をそれほど簡単に理解して、人間の自由とプロレタリアートの自由の相違を將來社會に結びつけやうとする²⁶。

同じくこの九月号には、逸枝の「小ブル藤村成吉に與ふ」も掲載され、論戦に加わります。一四頁に及ぶ長編です。「一．小ブルといふ言葉」「二．勉強せよとの仰せ」「三．『アナ』への言ひ分」「四．アナキズムの絶對性」「五．方法論的な睨み合ひ」「六．過程といふこと」「七．過程の經濟的基礎」の七節から構成されていました²⁷。

するとここで、隅田龍子が割って入って、十一月号に、「八木、高群両氏のアナキズムに對する駁論」を書きました。この論文もまた、「前がき」「一 氏等の云ふ自由と、我々の自由との根本的相異」「二 政治的行動を否定するアナキズムは反動的ユートピアである」「三 何故にプロレタリア獨裁は必要か」「四 プロレタリアートは如何に議會を利用するか」「五 過程とは何んであるか」「六 小ブルデョアは何人であるか」「七 機械の發達はプロレタリアをなくするか」「八 女人藝術十月號『凡人の抗議への若干の抗議』」からなる長編でした。内容は、タイトルのとおり、マルクス主義の立場からの、八木と高群へ向けられた数々の厳しい批判となっていました。その極みが、次の言葉でしょうか。

高群氏の一六頁から一七頁へかけてのあの冗漫なおしゃべりを見よ。我々はこんな馬鹿氣た論文を（いかに女人藝術がおとなしく取り入れたにせよ）堂々雑誌上に發表される氏の勇敢さには敬服してゐる²⁸。

これには逸枝も無言を通すことはできなかったのでしょう。次の一二月号で、「お出になさった」を發表します。この論文の副題は「一アナキストの宣言」です。このとき、逸枝は、はっきりと「アナキスト宣言」をしたうえで、きっぱりと『女人藝術』から離脱する

ことを決意したものと思われます。この文の最後は「さよなら」²⁹で結ばれています。そして同号（一二月号）に、八木秋子も「隅田の妄論を駁す」を寄稿しました。この論文のなかで八木は、このようなことを主張しました。「マルクス主義者が、ブルジョア教育によつて與へられた國家偶像觀の觀念を清算することが出來ず、ブルジョアジーと一緒になつてアナキズムを攻撃するのは、そして、その方便としてユートピア主義の烙印を捺さうとするのは、その根本的缺陷の暴露に他ならない」³⁰。

こうして、「アナ・ボル論争」は過熱し、頂点に達しました。編集人にとっては、これ以上の論戦は、単なる不毛の相互批判に陥るように思われたのでしょう。この号（一二月号）に、「社告」が掲載されました。それには、次の文字が並べられてありました。「アナキズムとコンミニズムのこの度の論争は次號にて打切る」³¹。

年が明け、一九三〇（昭和五）年の正月を迎えました。中島幸子の「アナキズムの顛落」と隅田龍子の「再びアナキズムを駁す」の二編の論文が、『女人藝術』の一月号を飾りました。『女人藝術』における「アナ・ボル論争」は、これで終幕です。常連執筆者や読者にとってアナキズムとマルキシズムの違いが明瞭になった、この半年間の論議でした。しかしながら、一方の当事者であった逸枝の筆力は、これをもって一段落したわけではありません。そのとき彼女は、無産婦人芸術連盟の創設という新しい動きのなかにありました。風雲急を告げる彼女の日記の一月の一部には、以下のようなことが記されています。「K」のイニシャルは、「憲三」のことでしょう。この結社の設立と機関誌の刊行には、夫である橋本憲三が深くかかわっていたのでした。

一月二日 はれ

『婦人戦線』準備会。(K)

一月十日 はれ

『黒い女』解放社から届ける。

一月二十六日 はれ

無産婦人芸術連盟成立。機関誌『婦人戦線』。出席者平塚らいてうさんら十四名。(K)

32

かくして、『女人藝術』内での「アナ・ボル論争」は、アナキズム派が離脱して、新しい団体を組織することにより、ひとまずの決着に至ります。一月二六日に結集した創設会員は、伊福部敬子、神谷静子、城しづか、住井すゑ子、高群逸枝、野副ますぐり、野村考子、平塚らいてう、二神英子、碧静江、松本正枝、望月百合子、八木秋子、鎌田貞子の一四人でした。続いて、機関誌『婦人戦線』が産声を上げるのが、この年（一九三〇年）の三月一日。「アナ・ボル論争」を経て、「アナキスト高群逸枝」の独自の舞台が、ここにこうして誕生したのでした。

注

- (1) 平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった③』大月書店、1992年、261頁。
- (2) 中江泰子・井上美子『私たちの成城物語』河出書房新社、1996年、61頁。
- (3) 同『私たちの成城物語』、62頁。
- (4) 神近市子『神近市子自伝——わが愛わが闘い』講談社、1972年、213頁。
- (5) 同『神近市子自伝——わが愛わが闘い』、214頁。
- (6) 高群逸枝『東京は熱病にかゝつてゐる』萬生閣、1925年、5頁。
- (7) 高群逸枝「戀愛行進曲——月漸く昇れり——」『女人藝術』第2巻第1号、1929年1月、2頁。
- 高群逸枝が『女人藝術』に寄稿した文はすべて、一九八六（昭和六一）年に龍溪書舎から刊行された復刻版からは、「著作権継承者の了解が得られませんでした」という理由により、削除されています。夫の橋本憲三は一九七六（昭和五一）年に死去しており、その後著作権は、遺言により憲三の妹の橋本静子に移っていました。どのような理由から復刻版における掲載が見送られたのかは、いまのところ特定できませんが、これも遺言により、『高群逸枝全集』以外の著述物は、いっさい世に出さないことが指示されていたのかもしれませんが。
- (8) 同「戀愛行進曲——月漸く昇れり——」『女人藝術』、21頁。
- (9) 富本一枝「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」『女人藝術』第2巻第7号、1929年7月、4頁。
- (10) 八木秋子「曇り日の獨白」『女人藝術』第2巻第7号、1929年7月、95-96頁。
- (11) 熱田優子「中川紀元氏に問う」『女人藝術』第2巻第7号、1929年7月、99頁。
- (12) 伊福部敬子「平塚明子様に」『女人藝術』第2巻第7号、1929年7月、100-101頁。
- (13) 前掲『東京は熱病にかゝつてゐる』、273頁。
- (14) 高群逸枝『戀愛創生』萬生閣、1926年、1-5頁。
- (15) 同『戀愛創生』、316-317頁。
- (16) 同『戀愛創生』、332-333頁。
- (17) 同『戀愛創生』、335-336頁。
- (18) 山川菊榮「ドグマから出た幽霊——高群逸枝氏新発見の『マルクス主義社会』について」『婦人公論』第13巻第6号、1928年6月、49頁。
- (19) 同「ドグマから出た幽霊——高群逸枝氏新発見の『マルクス主義社会』について」『婦人公論』、59頁。
- (20) 高群逸枝「踏まれた犬が吠える——ふたたび山川菊榮氏に——」『婦人公論』第13巻第7号、1928年7月、41頁。
- (21) 同「踏まれた犬が吠える——ふたたび山川菊榮氏に——」『婦人公論』、43頁。
- (22) 同「踏まれた犬が吠える——ふたたび山川菊榮氏に——」『婦人公論』、47頁。
- (23) 平林たい子「ロマンチズムとリアリズム——山川菊榮・高群逸枝両氏の論争の批評——」『婦人公論』第13巻第9号、1928年9月、35頁。
- (24) 富本一枝「平塚雷鳥氏の肖像——らいてう論の序に代へて」『女人藝術』第2巻第8号、1929年8月、55頁。

(25) 藤森成吉「公開状について一言、八木秋子氏へ」『女人藝術』第2巻第8号、1929年8月、48頁。

(26) 八木秋子「簡単な質問(藤森成吉氏へ)」『女人藝術』第2巻第9号、1929年9月、18頁。

(27) 高群逸枝「小ブル藤村成吉の與ふ」『女人藝術』第2巻第9号、1929年9月、4-17頁。

(28) 隅田龍子「八木、高群両氏へのアナーキズムに対する駁論」『女人藝術』第2巻第11号、1929年11月、12頁。

(29) 高群逸枝「お出になさつた——アナーキストの宣言——」『女人藝術』第2巻第12号、1929年12月、39頁。

(30) 八木秋子「隅田氏の妄論を駁す」『女人藝術』第2巻第12号、1929年12月、52頁。

(31) 「社告」『女人藝術』第2巻第12号、1929年12月、39頁。

(32) 『高群逸枝全集』第九巻／小説／随筆／日記、理論社、1966年(第1刷)、238-239頁。

第四章 富本憲吉・一枝夫妻に蔵原惟人がかくまわれる

一. マルクス主義文化運動家の蔵原惟人

一九二九（昭和四）年の七月の『女人藝術』（創刊一周年記念七月号）に、富本一枝は、「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」を寄稿しました。その内容の概略は、すでに、前章の『『女人藝術』からアナーキズム派が身を引く』のなかで言及しています。この夢物語の一文は、富本一枝というひとりの文筆家が、この時期マルクス主義とどう向き合っているのかを独白しているように読むことができますが、しかし他方で、『女人藝術』に集う主だった一人ひとりの当時の受け止め方を描写した、マルクス主義受容にかかわる女性文芸家の全体的な絵巻物として読むことも可能なように思われます。登場人物は、K、M、H、N、I、O のイニシャルをもつ人で、神近市子、窪川いね子（佐多稲子）、松田解子、村山簪子、望月百合子、長谷川時雨、平塚らいてう、平林たい子、中本たか子、野上弥生子、生田花世、今井邦子、大田洋子、岡田八千代などの名前がすぐさま頭に浮かびますが、どのイニシャルが誰かは明確にすることはできません。しかし、ズボンをはいていることに着目すれば、「K」は男性であり、私が推断するところによれば、おそらくプロレタリア文学の理論的指導者の蔵原^{これひと}惟人であるにちがいありません。といいますのも、その二年後の一九三一（昭和六）年の四月、官憲の手から逃れるために、一時期、蔵原は富本家に潜伏しているからです。すでにこのとき蔵原は、一枝と面識があったものと思われる。時期と場所はいまのところ特定できませんが、「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」の執筆の直前ではないかと推量されます。といいますのも、『女人藝術』に一枝が投稿するのは、この文が二作目で、第一作の「七月抄」（一九二八年九月号）は、夏の日々の田舎で体験した三日間の様子が日記形式で綴られた文だからです。「七月抄」と「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」では、形式、内容ともに、大きく異なり、この間にあって一枝は蔵原に会い、彼が主張するプロレタリア文学へ関心を示すようになったものと思われる。文芸雑誌『番紅花』の刊行に際しては森鷗外を、小説「鮎」を発表するときには島崎藤村を訪ねたように、マルクス主義的芸術論を学習するにあたっては、蔵原惟人に直接面会を求めた可能性があります。もっとも、同じ「K」のイニシャルをもつ、青鞨社時代に突然自宅に上がり込んだ大杉栄に同伴していた荒畑寒村や、安堵村時代に石垣綾子を紹介したことのある旧知の賀川豊彦のような社会主義者についてもその可能性を排除することはできませんが、目的がマルクス主義文学にかかわる理論学習であったという点に重きを置けば、蔵原以外、当時の一枝の周辺には、それにふさわしい人間は見当たらないような気がします。以上のことを完璧に実証する資料はこれまで見出せないながらも、「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」に登場する人物「K」を蔵原惟人とみなしたうえで、以下に、彼の生い立ちと当時の彼の文学理論について、短く紹介することにしたいと思います。

蔵原惟人^{これひと}は、一九〇二（明治三五）年一月二六日に東京にて生を受けます。父はその名を惟郭といい、肥後国阿蘇郡黒川村（現在の熊本県阿蘇郡阿蘇市）において、阿蘇神社の直系として生まれ、同志社英学校を卒業後、米国、次に英国に留学し、哲学と社会学を学び帰国すると、一八九二（明治二五）年から約三年間、熊本女学校の校長を務めます。この学校は、のちに高群逸枝が、一時期在籍することになる学校です。その後惟郭は、一九〇八（明治四

一) 年から二期八年間、衆議院議員の職にあり、労働運動と普選運動に力を注ぎます。妻は、同じ阿蘇郡の小国郷（現在の阿蘇郡小国町）の出身で、近代医学の発展に大きな功績を遺す北里柴三郎の妹のしう（終子）でした。

このように、惟郭としう（終子）の次男として生まれた惟人は、紛れもなく火の国正統派の男子でした。東京府立一中（現在の東京都立日比谷高等学校）を卒業すると東京外国語学校（現在の東京外国語大学）でロシア語を学び、一九二五（大正一四）年にロシア留学。翌一九二六（大正一五）年に帰国。それから二年後、蔵原は、全日本無産者芸術連盟（ナップ）の結成と機関誌『戦旗』の発刊へ向けて主導的役割を担うことになります。そして、一九二九（昭和四）年、この雑誌をとおして、小林多喜二の「蟹工船」と徳永直の「太陽のない街」が発表されると、プロレタリア文学の代表的作品として世の脚光を浴びることになるのでした。「蟹工船」は、蟹工船内の過酷で非人道的な労働の実態を描いたもので、「太陽のない街」は、自身が体験した共同印刷の労働争議を題材にしたものです。小林は秋田県に生まれ、北海道の小樽で育ち、一方の徳永は、熊本県飽託郡花園村（現在の熊本市西区）の生まれで、彼もまた蔵原惟人と同じく、まさに一徹不動の火の国男の気質を体現していたのでした。

その一方で、蔵原自身は、「マルクス主義文藝批評の基準」（一九二七年八月五日）、「生活組織としての藝術と無産階級」（一九二八年三月）、さらに加えて「プロレタリア・レアリズムへの道」（一九二八年四月八日）などのプロレタリア芸術運動の指針となるような論評を次々と発表してゆくのでした。おそらくこうした文が、『女人藝術』などの文芸雑誌に集う婦人文筆家たちの関心を引き、自己の理論構築のための秘かなるテキストとなったものと思われる。富本一枝が「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」の筆を起すのも、ちょうどこのときのことでした。

それでは、蔵原が書くプロレタリア文学の目的と内容とは、どのようなものだったのでしょうか。かいつまんで、以下に引用によって示します。

蔵原は、「マルクス主義文藝批評の基準」と題された評論文を、結論として次のような言葉で結んでいます。

我々の全行動はすべて、無産階級の政治的解放という唯一の目的によって規定される。したがって我々の文藝批評もまた単なる文藝批評として、文藝作品の批評として、それだけで完結したものであつてはならない。それは文藝作品の批評であると同時に、それ自身、つねに、プロレタリア・イデオロギーのプロパガンダであり、また階級闘争への大衆のアジテーションでなければならない。マルクス主義者批評家は文藝作品の批評に際して、つねにこのことを頭においておくことが必要である¹。

続けて「生活組織としての藝術と無産階級」において蔵原は、芸術の機能について、このように説きます。

藝術はなんらかの意味において生活の組織である。このことはブルジョア藝術についても、プロレタリア芸術についてもひとしくいいうる。ブルジョア藝術は、藝術家がそれを欲するといなどにかかわらず、その影響下にある読者、観客、聴衆等々を、ブルジョア的イデオロギーの方向へ組織してきたし、いままた組織しつつある。プロレタ

リア藝術は現在における被圧迫大衆の「感情と思想と意思とを結合し、それを高める」ことをその意識的目的としている²。

そして蔵原は、この評論文の最後を、「しからばこの我々のプロレタリア・レアリズムなもの、過去の藝術におけるレアリズムないしは自然主義なるものとはいかなる関係にあるのであるか？ここに我々の当面する最も重要な問題——藝術における階級性の問題にゆきあたる」³という文言で締めくくります。

それでは、蔵原が指摘する「プロレタリア・レアリズムなるもの」とは、どのようなものなのでしょうか。「プロレタリア・レアリズムへの道」という表題がつけられた、三つ目の評論において、蔵原は、それについて言及します。蔵原の考えを短く要約すれば、おおかたこのようになります。

近代文学におけるブルジョア・レアリズムは、抽象的な「人間の本性」から出発し、人間の個人的本能的生活を描くに止まっている。一方、小ブルジョア・レアリズムは、あらゆる生活の問題の解決を抽象的な正義や人道に求め、階級調和的な立場をとる。それに対して第三のレアリズム、つまりプロレタリア・レアリズムは、社会発展の推進力は階級と階級の調和にあるのではなく、公然たるその闘争にあるとの観点に立ち、プロレタリア前衛の「眼をもつて」この世界を見ようとする。そこでプロレタリア作家に求められなければならないのは、あくまでも、現在における唯一の客観的観点であるところの「階級的観点」であり、他方、描かれる「題材」については、「戦闘的プロレタリアート」のみに限定される必要はなく、労働者、農民、小市民、兵士、資本家等々、およそプロレタリアートの解放に何らかの関係を有するあらゆるものが描写の対象となりうる。

以上のような論点について蔵原は詳述したあと、この評論を終わるにあたって、次のように結論づけるのです。「すなわち、第一に、プロレタリア前衛の『眼をもつて』世界を見ること、第二に、厳正なるリアリストの態度をもつてそれを描くこと——これがプロレタリア・レアリズムへの唯一の道である」⁴。

一枝が書いた「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」は、こうした蔵原の論点をリトマス試験紙に使い、自身と、『女人藝術』に身を寄せる執筆陣との現状にかかわって、夢という形式に乗せて、その全体像を描写してみせた作品だったとみなすことができそうです。明らかにこの作品から、「ブル派」と「プロ派」の色分けが、さらには、「ボル派」と「アナ派」の対立が、避けがたく文芸には内在するものとして、この時点で作者に意識されはじめようとしていたことが読み手に伝わってきます。

一枝が、社会主義に触れるのは、このときがはじめてではありませんでした。また、夫の富本憲吉は、さらにそれよりも早く社会主義に関心をもっていました。そのふたりの家に、逃走中の蔵原惟人がかくまわれるのが、その二年後の一九三一（昭和六）年の春のことでした。それではここで、そこへ至るまでのこの夫婦の社会主義傾倒の道筋を、少しさかのぼって見てみたいと思います。

二．富本憲吉と富本一枝の社会主義への傾倒

亡くなる二年前の一九六一（昭和三六）年に、富本憲吉の「作陶五十年展」を記念して日

本橋の「ざくろ」で座談会が開かれました。そのなかで、「……[英国へ] 行く前からモリスを研究するつもりで」という、英国留学とモリス研究についての質問に答えて、富本はこう述べています。

そうです。私は友達に、中央公論の嶋中雄三がおり、嶋中がしよつちゆうそういうことを研究していたし、私も中学時代に平民新聞なんか読んでいた。それにモリスのものは美術学校時代に知っていたし、そこへもつてきていちばん親しかつた南薫造がイギリスにいたものですからフランスに行くとごまかしてイギリスに行った⁵。

この引用文中、富本は、「中央公論の嶋中雄三」といっていますが、中央公論社に一九一二（大正元）年に入社し、その後社長を務めることになるのは雄三の弟の嶋中雄作です。一八八七（明治二〇）年二月の生まれである雄作は、したがって一八八六（明治一九）年六月生まれの富本と同学年だった可能性があるものの、富本は郡山中学校、雄作は畝傍中学校に当時在籍しており、ふたりのあいだで、どのような交流があり、とりわけモリスがどのようなかたちで話題になっていたのかは、資料に乏しく、正確には再現することはできません。兄の雄三は、大正、昭和期の社会運動家で、のちに東京市議員などを務める人物です。雄作と富本が中学校時代を過ごした奈良県での週刊『平民新聞』の購読数は、おおよそ二四部でした⁶。当時富本家で購読されていたことを示す資料は見当たりません。したがって、富本が「中学時代に読んでいた」という『平民新聞』は、嶋中兄弟によって貸し与えられた可能性が残されます。

それでは、『平民新聞』を通じて富本が知るきっかけとなったウィリアム・モリスとは、どのような人物だったのでしょうか。

モリスは、一八三四年三月二四日にロンドン北東郊外のウォルサムストウにある〈エルム・ハウス〉において、父ウィリアム、母エマの三番目の子として生まれました。一八五三年にオクスフォード大学エクセター校に入学。当初は聖職者になることを考えていましたが、画家を志す学友のエドワード・バーン＝ジョウンズと親しくなったことにより、関心は建築とデザインへと移ってゆきました。一八五六年に、当時ゴシック様式の復興主義者のひとりであった G・E・ストリートの建築事務所に入所。しかし、ラファエル前派の中心的画家として活躍していたダンテ・ゲイブリエル・ロセッティからの強い影響を受けて、絵を描きはじめるようになります。翌年、ロセッティの呼びかけで、オクスフォード大学の学生会館の壁画製作に参加した際、モリスは、ロセッティのモデルをしていたジェイン・バーデンと顔見知りとなり、二年後の一八五九年に結婚。新居となる〈レッド・ハウス〉の設計が、ストリートの事務所で知り合ったフィリップ・ウェブに依頼され、他方で、家具、調度品の製作が、バーン＝ジョウンズやロセッティをはじめとする芸術家の友人たちの協力によって進められてゆきました。

こうした共同作業は、中世の職人組織であるギルドに倣うものであり、すぐさま新会社の設立を促し、一八六一年にロンドンのレッド・ライオン・スクウェアの地にモリス・マーシャル・フォークナー商会が誕生。それ以降その会社から、ステインド・グラスや家具、壁紙などのデザインと製作が生み出されます。一八七五年には、モリスを単独の経営者とするモリス商会へと改組され、一八八一年には、マートン・アビーに見つけた古い染織工場跡を賃

貸により借り受け、それよりのち、染織、織物、刺繍などを製作する工房として利用されます。亡くなる五年前の一八九一年には、私家版印刷工房であるケルムスコット・プレスを設立。ここから、いわゆる「理想の書物」が五十数点生み出されてゆくのでした。

一方で、物語詩『地上の楽園』の刊行が一八六八年からはじまると、モリスは、デザイナーとしてだけではなく、詩人としての名声もまた勝ちえてゆきます。その後の代表的な物語詩の刊行だけでも、一九七二年の『愛さえあれば』、そして一八七六年の『ヴォルスング族のシガード』を挙げることができます。

さらにこの時期のモリスは、芸術や労働、そして社会主義に関する講演や演説を英国の各地で頻繁に行なっています。代表的な講演として、一八七九年二月のバーミンガムでの「民衆の芸術」、一八八二年一月の同じくバーミンガムでの「生活の小芸術」、同年二月のロンドンでの「パタン・デザインングの歴史」などを列挙することができます。そして一八八二年には、第一講演集として『芸術への希望と不安』を、一八八八年には、第二講演集として『変革の兆し』を刊行するのです。

初期のモリスの政治的関与は、東方問題協会や古建築物保護協会を舞台に進められましたが、一八八三年には H・M・ハインドマンの率いる民主連盟（翌年に社会民主連盟に改称）に加わるも、意見の対立から翌年社会民主連盟を脱会。次の一八八五年にモリスは社会主義同盟を結成し、機関紙『ザ・コモンウィール』の創刊にも献身的に携わります。モリスは、この『ザ・コモンウィール』に、一八八六年から翌年にかけて、中世のワット・タイラーの乱を主題とした「ジョン・ボールの夢」を、一八九〇年には、革命後の理想社会を描いた「ユートピア便り」を連載します。そしてこの間、しばしば不況や失業にあえぐ労働者たちのデモの隊列に加わり、積極的に政治活動家としての役割を担います。モリスの政治信条は、自ら述べているように、「半ばアナキスト」としてのそれでした。詩人にしてデザイナーであり、社会主義の政治活動家であったモリスが死去するのは、一八九六年の一〇月三日、ハマスミスの自宅〈ケルムスコット・ハウス〉においてでした。

周知のように、週刊『平民新聞』とは、幸徳秋水や堺利彦らによって一九〇三（明治三六）年十一月一日に創刊号が刊行され、創刊一周年を記念して第五三号に「共産黨宣言」を記載すると、しばしば発行禁止にあい、一九〇五（明治三八年）一月二九日の第六四号をもって廃刊に追い込まれた、日本における社会主義運動の最初の機関紙的役割を果たした新聞です。発行所である平民社の編集室の「後ろの壁の正面にはエミール・ゾラ、右壁にはカール・マルクス、本棚の上にはウィリアム・モリス^{ママ}の肖像が飾られていた」⁷。この『平民新聞』においてはじめてモリスが紹介されるのは、「社会主義の詩人 ウィリアム・モリス」という表題がつけられた、一九〇三（明治三六）年十二月六日付の第四号の記事においてです。この記事は、一八九九（明治三二）年にすでに刊行されていた、村井知至の『社会主義』のなかのモリスに関する部分を転載したものでした⁸。おそらくその間、この本は発行禁止になっていたものと思われます。それに続いて、一九〇四（明治三七）年一月三日付の第八号から四月一七日付の第二三号までの連載をとおして、一八九〇年に社会主義同盟の機関紙『ザ・コモンウィール』に連載されたモリスの *News From Nowhere* が、はじめて日本に紹介されることになるのです。それは、枯川生（堺利彦）による抄訳で「理想郷」という題がつけられていました。今日では、「ユートピア便り」という訳題が一般的になっています。内容は、社会革命後の新世界を扱ったものでした。

この物語の語り手(主人公)は、モリスその人と考えて差し支えないでしょう。語り手は、革命後に生まれるであろう新しい社会像について社会主義同盟のなかで論議が戦わされた夜、疲れ果てて眠りにつき、翌朝目が覚めてみると、すでに遠い昔に革命は成功裏に終わり、理想的な共産主義の社会にいる自分を見出します。語り手が知っている一九世紀イギリスの搾取される労働、汚染される自然、苦痛にあえぐ生活からは想像もつかない、全く新しい世界がそこには広がり、労働と生の喜びを真に享受する老若男女が素朴にも生活を営んでいました。

おそらくこの「理想郷」を読んだであろう富本の目には、そのとき、モリスが描き出していた革命後の理想社会はどのようなものとして映じていたのでしょうか。富本は何も語っていません。しかし、社会が変化することの可能性、そして、それを成し遂げるにあたっての時代に抗う力の生成、さらにはその一方で、そうした行動や言論を弾圧しようとする国家権力の存在、これらについては、少なくとも理解できたものと思われます。こうして富本は、この時期、確かにモリスの社会主義の一端に触れることになるのです。それはちょうど、主戦論の前には週刊『平民新聞』の社会主義に基づく反戦論など、なすすべもなく、御前会議でロシアとの交渉が打ち切れ、対露軍事行動の開始が決定された時期であり、一七歳の青年富本が郡山中学校を卒業し、東京美術学校(現在の東京芸術大学)へ入学しようとする、まさにそのときのことでした。

こうして富本憲吉は、一九〇四(明治三七)年、東京美術学校の図案科(今日の用語法に従えば「デザイン科」)に入学し、卒業を待たずして、英国に渡ります。最晩年に富本は、自分の留学の経緯について、こう述べています。

留学の目的は室内装飾を勉強することだった。フランスを選ばず、ロンドンをめざしたのは、……在学中に、読んだ本から英国の画家フリスラーや図案家で社会主義者のウィリアム・モリスの思想に興味をいだき、モリスの実際の仕事を見たかったからでもある⁹。

ここで富本のいう「在学中に、読んだ本」とは、何だったのでしょうか。エイマ・ヴァランスの『ウィリアム・モリス——彼の芸術、彼の著作および彼の公的生活』だった可能性があります。といいますのも、留学から帰国したのち、一九一二(明治四五)年の『美術新報』第一巻第四号(二月号)および第五号(三月号)に分載された富本の「ウィリアム・モリスの話」は、明らかにヴァランスのその本が底本となって書かれてあるからです¹⁰。

もし富本が、この書物を渡航前の美術学校時代に実際に読んだとするならば、中学生のときにすでにモリスの「理想郷」を知っていた富本にとって、「図案家で社会主義者であるウィリアム・モリスの思想」は極めて鮮烈な衝撃となったものと推量されます。といいますのも、ヴァランスはその本の「第一章 社会主義」のなかで、次のようなことを述べていたからです。

モリスの考えによれば、自分の芸術と自分の社会主義は、一方が一方にとって不可欠なものとして結び付くものであった。いやむしろ、単にひとつの事柄のふたつの側面にしかすぎなかった¹¹。

モリスの考えるところによれば、芸術とは労働の喜びであり、したがって、社会主義を欠いた芸術もなければ、芸術を欠いた社会主義もなく、両者はまさしく、コインの裏表のような一体化された関係のうちに認められうる存在だったのでした。

またヴァランスは、同じくその本のなかで、『ジャスティス』の編集者の求めに応じて、モリスがこう書いていることを紹介していました。

さて、社会主義という言葉でもって私がいおうとしているのは、あるひとつの社会状況についてです。その社会にあっては、要するに、富める人と貧しい人が存在すべきではありませんし、また主人とその下僕も、怠け者と過度の働き者も、さらには、脳が病んでいる頭脳労働者と心が病んでいる手工従事者も、存在すべきではありません。その社会では、すべての人間が、平等なる状況のもとに生きていると思われまじし、物事は浪費されるようなことなく取り扱われていると思います。ひとりの人にとっての苦痛はすべての人にとっての苦痛を意味するであろうことを十分に意識しながら。つまりは、^{コモンウェルス}〈公共の幸福〉という言葉の意味の最終的な達成なのです¹²。

ヴァランスは何も注釈をつけていませんが、詳しくいえば、実はこれは、モリスが亡くなる二年前の一八九四年に社会民主連盟の機関紙『ジャスティス』に寄稿した「いかにして私は社会主義者になったか」の冒頭の一節でした。もちろん富本は、そうした背景を日本にいて知る由もなかったものと思われます。しかし、そうしたことが強い動機の一部となってイギリスの地に渡り、直接現地にあって、こうしたヴァランスが伝えるところの、デザイナーで社会主義者であったモリスの思想に直面することになったにちがいありません。晩年富本は、このときの滞在を振り返って、ロンドンでは「彼〔モリス〕の組合運動などを調べてきました」¹³と、はっきりと述べています。富本は「組合運動」という曖昧な言葉を使っていますが、これがモリスらによって展開された社会主義運動を指し示していることは、ほぼ間違いないものと思われます。しかし、帰朝後すぐにも、それを文にすることはためられました。

〔イギリスから〕帰ってきてモリスのことを書きたかつかんですけれども、当時はソシアリストとしてのモリスのことを書いたら、いっぺんにちょっと来いといわれるものだから、それは一切抜きにして美術に関することだけを書きましたけれども¹⁴。

富本がここで述べている「ちょっと来い」というのは、官憲による連行や検束、さらには検挙や投獄を意味します。渡航前には、『平民新聞』にモリスの「理想郷」を訳載した堺利彦がその直後に一時期獄窓の人になっていましたし、帰国後にあっては、大逆事件が起こり、『平民新聞』の主宰者である幸徳秋水とその内縁者の管野スガを含む社会主義者と無政府主義者の計一二名が、極刑台の露となっていたのでした。富本は、こうも書いています。

〔ロンドンから帰ってその〕後の話ですが岩村^{とある}透氏の美術新報に大和から原稿を送ったことがありました。それに美術家としてのモリスの評伝を訳して出しましたが、社会

主義者の方面は書きませんでした。あの当時もしも書けば私はとっくに獄死して、焼物を世に送ることはできなかったかもしれません¹⁵。

このとき富本は「獄死」を意識します。裏を返せば、それほどまでに、社会主義理解が深く進んでいたのでしょう。かくして富本は、社会主義者としてのモリスの側面は伏せ、もっぱらデザイナーとしてのモリスに焦点をあてて「ウィリアム・モリスの話」を書き、モリスのデザイン世界を扱った日本における最初の評伝というかたちをとって、世に送り出したのでした。

他方、富本憲吉と結婚する前の独身時代の尾竹紅吉（一枝）には、どのような社会主義受容の物語が潜んでいたのでしょうか。その物語は、日本において婦人問題への関心が萌芽する時期と明確に重なります。

一九一三（大正二）年の『中央公論』新年号を開いてみますと、「閨秀十五名家一人一題」という特集が組まれ、そのなかには、田村とし子の「同性の戀」や平塚らいてうの「新しい女」に加えて、尾竹紅吉の「藝娼妓の群に對して」が含まれていました。その論説文は、次のような言葉で最後を結びます。明らかに、「男尊女卑」から「男女同権」へと向かう展望が織り込まれています。

暗黒面の女性是要するに藝娼妓をさすべきものである。曾て吾人は暗黒面の女性と表面の女性を單に女性として彼の奇矯に瀕する男尊女卑論から打破し相互の人格を尊重し尊卑を排し優劣を以つて女性の標準を定めたいと思う、即ち赤裸な原始に歸り作られたる性格の本質にとつて尊重仕合いたいと考へる¹⁶。

『中央公論』新年号の特集とあたかも手を組むかのように、『青鞞』一月号は、「新しい女、婦人問題に就て」を「附録」として巻末に組み入れました。まさしく一九一三（大正二）年の正月は、日本における「婦人問題」への関心がスタートラインについた時期といえます。それはさらに加速し、その年の七月、再び『中央公論』は、「婦人問題号」と銘打って夏季臨時増刊を発行するに至るのでした。ここには、尾竹紅吉の「自叙傳を讀んで平塚さんに至る」が所収されています。こうした『中央公論』の婦人問題への関心が、『婦人公論』の発刊へとつながってゆきます。思いがけないことに、実にその立役者が、富本憲吉が『平民新聞』を読み、ウィリアム・モリスの思想に触れるきっかけをつくった、中学時代の友人の嶋中雄作だったのでした。『中央公論社七〇年史』は、こう書きます。

嶋中〔雄作〕は奈良縣三輪町の醫家に生れた。畝傍中學を経て早稻田大學哲學科に學び、この年〔大正元年〕の九月卒業したばかりである。學生時代には、島村抱月にもつとも傾倒し、したがって自然主義文學運動には深い興味を有つていたごとくであつた。當時聲名高かつた中央公論社であつたから、大きな期待をもつて入社したのであるが、入つてみるとその組織は家内企業を出ない程度のものであつたのでいささか驚いた。……明治末年一世を風靡した自然主義文學運動は、いくつかの對立的思想を生んで衰退して行つたが、大正期に入ると、澎湃として個人主義思想が擡頭してきた。特に婦人問題が重視せられて、婦人の自覺と解放が叫ばれた。これに刺戟されて起こつたのが平

塚雷鳥などの『青鞞社』の運動であった。嶋中はこの動きに注視し、[主幹に就任したばかりの瀧田] 樗陰に献言して『中央公論』夏季臨時増刊を発行せしめて、これを『婦人問題號』と名付けた（大正二年七月一五日發行）。これが反響を呼んだことも一の原因であろうが、新しい婦人雑誌の當然生るべき時代の趨勢たることを麻田社長に説いて、ついに容れられるところとなり、ここに『婦人公論』が創刊されることとなった。大正五年一月のことである¹⁷。

大正期に入り、台頭してきたのは、ただ個人主義思想だけではありませんでした。大杉栄と荒畑寒村の手によって、『近代思想』が創刊されるのも、この時期のことでした。

天皇の死とともに明治時代は終り、改元して大正となった。……大正元年[一九一二年]の十月一日にやっと初号を出した。誌名は『近代思想』……三十二ページ定価金十銭という薄っぺらなものであったが、とにかく大逆事件以降、沈黙雌伏を強いられていた社会主義者が運動史上の暗黒時代に、微かながら初めて公然とあげた声である¹⁸。

寒村の回想は、さらに続きます。

当時の文壇には、人生の無解決なんていう従来の自然主義説に代って、自我の解放とか個人の自由とかいう観念が、個人主義の哲学的な体系を整えないまでも、一つの新しい傾向として現われていた。たとえば、雑誌『青鞞』のいわゆる「新しい女」のグループは個性の完成を唱えていたし、『早稲田文学』の相馬御風君は自我の生命の燃焼を説いていた。「白樺」派の主張や作品にも、こういう傾向が明らかにうかがえたのである。大杉[栄]の主張には、こういう文壇の新しい思潮と共通するところが多く、私たちはこれらの傾向にもとより同情を惜しまなかった。しかしその反面、これらの文壇人が社会と個人との関係に深い認識を欠き、社会改革を度外視して個性の完成や自我の拡充を可能と考えるような、二元論的な個人主義の旧套を脱しない観念に、私たちは失望を禁じ得なかった¹⁹。

ちょうどそのころのことでしょうか、「ある時、私[荒畑寒村]と上野から根岸の方を散策した際、青鞞社同人の尾竹紅吉の家を見つけると、彼[大杉栄]はいつもの流儀で臆面もなくこの未知の女性を訪問した。そして画室に迎えられた彼は、空腹を訴えて飯のご馳走になった上、『あなたは知らぬ男にでも、空腹だといえば飯を出してくれるが、もし性欲に餓えていると言ったらどうしますか』と質問した。彼女が返答に困っていると、食欲も性欲も生理的には同じじゃないかと追及して、生まじめな紅吉女史をからかって面白がった」²⁰。こうしたことがきっかけとなって、それ以降、大杉は紅吉（一枝）の家をときどき訪ねてくるようになりました。のちに一枝は、大杉栄のことをこう書き記しています。

その頃大杉さんとおつきあいしていましたから大杉さんが尋ねてみえるたびに、無政府主義やクロボトキンのことをうかがったりしていました。大杉さんは私のぼんやりさをなんとかしてやりたいとされたようです。幸徳秋水の大逆事件のことも、大杉さん

からきいて……。そのとき、私たちの自由も、進歩も、それをはばんでいるものを取りのぞかない限りどうすることも出来ないのだときかされたことは、なんといつても、それからあとの自分の考えの基底となつてきているような気がします²¹。

一枝がこのように回顧しているところをみると、一枝の社会主義への初期の関心は、この時期に大杉によって植え付けられたことになります。

富本憲吉と尾竹一枝は、一九一四（大正三）年の秋に東京で結婚すると、すぐにも翌年の春に、憲吉の生まれ故郷である大和の安堵村に帰り、その地で住まいと窯とを築き、新しい生活に入ります。それでは、ふたりの安堵村生活にあつて、社会主義思想は、どのようなかたちで根を下ろしていたのでしょうか。

家庭運営は、革新的な原理によって成り立っていました。そこには、一九一七（大正六）年六月に開催された「富本憲吉氏夫妻陶器展覧會」の名称にもみられるように、生み出される陶器は夫婦共有の協同作品であるという認識が支配していました。そしてまた、家事の役割分担も固定されたものではありませんでした。以下は、一枝が『女性日本人』に寄稿した「私達の生活」のなかの一節です。題が「私の生活」ではなく「私達の生活」となっている点に、ふたりの思想が反映されているようにも思われます。

二三日雨が降りつゞいて洗濯物がたまる時がある。そんな時、私と女中が一生懸命で洗つても中々手が廻りかねる〔。〕それを富本がよく手傳つて、すすぎの水をポンプで上げてくれたり、干すものをクリップで止めてくれたりしてゐるのを見て百姓達はいつも冷笑した。「いゝとこの主人があんな女の子のやる事をする」といって可笑しがる。……可笑しいと云ふより、本當は危険視してゐたかも知れない。同じ村に住む自分達の親類になる人さへ、私達の生活は「過激派の生活だ」と言つて、自分の若い息子をこゝに遊びに寄すことをかたく禁じているのだ。私達が一緒に、一つの食卓をかこみ、同じ食物で食事をすまし、一緒に遊び、一緒に働くことが危険でたまらないのだ。私達は、その人達の考へこそ可成り危険だと思ふのに²²。

読んでのとおり、一枝は憲吉のことを、「旦那さま」とも「主人」とも呼ばず、「富本」と呼んでいます。他方憲吉は、家事のすべてを一枝に押し付けるのではなく、積極的に自らも参加します。こうした生活の実態こそが、ふたりにとっての、封建的な古い習俗から解放された、正直で、真実で、純粋な生き方であつたにちがひありませんし、一枝が『婦人公論』に書いた「結婚する前と結婚してから」のなかの、「夫は非常な熱心で常に私を指導してゐる。そして私達は、私達の全力を注いで幼児の教養と私達の仕事につき進んでゐる」²³という言葉の意味する、具体的な実践例だったのかもしれませんが、しかし、村人や親類はそうした生活や考えを危険視しました。それだけではなく、官憲の目にもまた、それは「過激派の生活」に映っていました。『近代の陶工・富本憲吉』の著者の辻本勇は、すでに英国に帰っていた親友で陶工のバーナード・リーチに宛てて出された憲吉の手紙のなかに、「日本や国家のことについては書かないで下さい。警察がぼくへの君の手紙を調べているようだ」とか、「手紙は陶器のことだけを書いて下さい、君の手紙は竜田郵便局からまず警察署へ送られ開封され読まれているようだ、君には考えられもしないことだろうが……これが近代日

本なのだ」²⁴とかいった文言が散見されると書いています。

かつて憲吉が「ウィリアム・モリスの話」を書いたことも、また、かつて一枝が青鞥社の社員であったことも、官憲の目からすれば、体制に抗う行為のひとつとして、受け止められていたのでしょうか。あるいは、当時の人的交流に疑いの目が向けられた可能性もあります。数例を挙げるならば、一九一七（大正六）年に憲吉と一枝は、幼子の陽を伴い、和歌山の新宮にある西村伊作邸を訪ね、そこに約一箇月間滞在しました。西村の叔父の大石誠之介は大逆事件に連座して死刑に処されていましたが、西村の友人には、美術家や文学者のみならず、社会主義者の賀川豊彦や堺利彦なども含まれていました。彼自身も、のちに、自由主義的な校風をもつ文化学院を創設します²⁵。

一九二三（大正一二）年には、自由学園の創設者の羽仁もと子が、卒業旅行として第一期生を率いて富本家の本宅に宿泊します。そのなかには、のちに社会運動家として活躍することになる石垣綾子や、童話作家で児童文学者となる村山^{かずこ}簫子が含まれていました。それからしばらくして、一枝は、川崎・三菱両造船所での労働争議の際に陣頭に立って指揮した賀川豊彦へ宛てて綾子を紹介する文を書いていますし²⁶、一方簫子は、富本一家が東京に移転したのちの一九三一（昭和六）年に、ロシアから帰国したプロレタリア文化運動の指導者である蔵原惟人を密かに連れてゆき、富本家にかくまわれるように手配を整えました。「蔵原惟人の富本家における潜伏生活」につきましては、このあとすぐに次節において、詳しく述べることにします。

さらに加えますと、当時しばしば安堵村の富本家に顔を出していた、奈良女子高等師範学校の学生だった丸岡秀子が記憶するところによれば、マルクス主義者の片山潜の娘が、日本を去る前に富本家に立ち寄っています²⁷。こうした人的な交流の影響もあってのことでしょうが、警察の監視下にあるような状態は、安堵村時代以降も、アジア・太平洋戦争が終結するまで連綿と続いてゆくのでした²⁸。

世界的には、一九一七（大正六）年のロシア革命、一九一八（大正七）年の第一次世界大戦の終結、国内では、一九一八（大正七）年の米騒動、一九二〇（大正九）年の第一回メーデーの開催、一九二一（大正一〇）年の川崎・三菱両造船所での労働争議、一九二二（大正一一）年の水平社の結成、同じく一九二二（大正一一）年の日本共産党の創設、他方、教育に目を向ければ、一九二一（大正一〇）年の文化学院や自由学園の創立にみられるような自由教育への関心の高まり——。憲吉と一枝が、旧い生活秩序を否定し、それに代わる新しい夫婦関係の構築に向けて、この安堵の地において奮闘していたこの時期は、変革を求める政治、社会、教育上の新しい動きの顕在化と明らかに重なります。

三．蔵原惟人の富本家における潜伏生活

一九六三（昭和三八）年六月の富本憲吉の死去の報を受けるとすぐにも蔵原惟人は筆を取り、『文化評論』に「富本憲吉さんのこと」と題した、一種の追悼文（あるいは思い出の記）を寄稿しました。これがいまのところ、富本家に蔵原がかくまわれた実態を知るうえでの唯一の一次資料となります。そこで、主としてこの資料から引用するかたちをとりながら、以下に、彼の潜伏生活の一端を再現したいと思います。

一九三〇（昭和五）年の七月に、共産党中央委員会の命令のもと非公然とソ連に渡り、モ

スクワで開かれたプロフィンテルン（労働組合国際組織）の第五回大会に出席したのち、蔵原惟人は、党の事情でそと翌年（一九三一年）二月に日本に帰ってきました。蔵原の回想によると、「しかし官憲のはげしい追及のなかで非合法の状態におかれて、地下深くもぐっていたその頃の党中央部と連絡することは、七カ月も日本をはなれていた私にとって、そう容易なことではなかった」²⁹。

帰国から二箇月が立った四月ははじめのある夜のことでした。村山^{かずこ}籌子の案内で、蔵原は、畑のなかの暗い道を通して密かに富本家を訪れます。蔵原を富本宅へ案内した籌子は、舞台芸術の演出家の村山知義の妻であり、当時童話作家で詩人として活躍していました。一九二九（昭和四）年の『女人藝術』（三月号）に「私を罵った夫に与ふる詩」を籌子は寄稿していますので、おそらくこの雑誌を通じて、一枝と籌子のふたりは親しくなっていたものと思われますし、そのような関係から、思うにすでに、一枝は蔵原と面識をもっていた可能性も推量されます。もっとも、籌子の最初の富本夫妻との出会いは、羽仁もと子が園長を務める自由学園高等科の一期生として一九二三（大正一二）年に関西へ卒業旅行に出かけたおりに、安堵村の富本家を訪問したときのことでした。以下は、村山籌子研究者のやまさきさとしが記述するところです。

大正十二年三月末から四月のはじめにかけて、卒業旅行と称して彼女たち一期生一行はミセス羽仁とともに（総勢二五名）横浜港発の欧州航路伏見丸の一等船客となり、「西洋」を勉強しつつ、神戸に上陸して奈良近辺の「東洋」を学んだが、奈良では全員、富本の屋敷に泊り、かれの案内で仏像をみて廻った。しかし籌子に衝撃を与えたのは憲吉のカマドであり、その夫人、一枝との対面であって、青鞨の流れを汲む富本一枝はその後籌子の受難時代にその胸を貸して終生の友人となったし、憲吉はのちに籌子の遺言によって墓碑銘を揮毫するのである³⁰。

籌子に連れ添われて富本家の闇の食客となった蔵原は、約一箇月間、その家にかくまわれました。蔵原は、「富本憲吉さんのこと」のなかで、こう回顧します。「富本さん夫婦は心よく私を迎え入れ、とくに私のためにお嬢さんの使っていた一室をあけて下さった。……私にあてがわれた小部屋はドアで明るい食堂につづいていて、食堂には主人の陶画や版画が飾られ、一隅にはこれも主人の手になるすばらしい白磁の瓶に薄紫のライラックがこぼれるようにいけてあった」³¹。さらに蔵原を驚かせたのは、富本家の近代的な生活様式でした。

〔夫婦と、陽、陶、壮吉の三人の子どもの〕そのほかに女中さんが一人、この女中さんは毎朝私の部屋をノックして、「今朝はお紅茶にいたしましょうか、おコーヒーにいたしましょうか」と聞いた。古い薄暗くだだっ広いお寺のような家で七人兄弟の雑然としたなかで育った私には、こんな明るい合理的な生活もあるものかと感心したことであった³²。

一枝は、「何ももっていない私のために私の下着類までも買って下さった……しかし、富本憲吉さんには私はただ『大事な人』ということになっていたようだ。しかし富本さんは

私が党のものだということは察していた」³³。ほとんど来客もなく、「私は腰をおちつけて、『プロレタリア芸術運動の組織問題——工場・農村の基礎としてのその再組織の必要——』という論文をそこで書きあげた」³⁴。

そうしたなか、帯刀貞代が「数日間この家に泊まっていた。……私は警戒する必要はなかった。しかし貞代さんは『あまり長居をすると御迷惑をかけるから』といって帰っていかれた」³⁵。滞在の目的は、闘争敗北の報告だったのでしょうか、あるいは、闘争後の心身の疲れを回復させるための滞在だったのかもしれませんが。帯刀は、一枝との出会いを次のように振り返ります。

私が富本さんにはじめておめにかかったのは、昭和のはじめだった。そのころ私は江東の亀戸で、女子労働者のためのささやかな塾をひらいていて、富本さんは神近市子さんを誘って、そこをみにこられたのだった。

そのつぎのあざやかな記憶は、昭和大恐慌のさなかで、塾にきていた女子労働者たちの六十日にわたる合理化・工場閉鎖とのたたかいが惨敗したあと、こんどは、こちらから富本さんをお訪ねしたときのことである。……まだそのころ丘の上にただ一軒しかなかった富本さんの家は、空気も樹木も、花の色もキラキラ輝いてみえた。それいご四十年ちかく、病弱な私は言葉につくせないお世話になった³⁶。

この間蔵原は、親しく憲吉と語らうことがありました。「富本憲吉さんのこと」のなかには、こうした蔵原の思い出も記述されています。

「実は私はほんとうに多くの人が平常使えるような実用的なものを作って安く売りたいのですが、まわりのものがそれをさせないのです。美術商などは、“先生、そんなに安く売られては困ります” というのですよ」ともいっていた。若い時ウィリアム・モリスの生活と芸術の結合の思想に傾倒していた富本さんは生涯その理想をすてなかったようだ³⁷。

この一文から推量すると、蔵原と憲吉の会話には、モリスが登場していた可能性があります。次のようなことも、話題になったかもしれません。

四年前の一九二七（昭和二）年のことになりますが、大熊信行の『社会思想家としてのラスキンとモリス』が新潮社から刊行されていました。おそらく兩人ともこの本を読んでいたことでしょう。憲吉は、自分の英国留学の目的が、モリスの思想を知り、その作品を見るためであったことを語ると、一方の蔵原は、著者の大熊信行は、小樽高等商業学校（現在の小樽商科大学）で教鞭を執っていたとき、小林多喜二を教えており、その小林の代表作が『戦旗』に掲載されている「蟹工船」であることを話したにちがいありません。そうした会話を楽しみながら、憲吉は、小林多喜二が社会思想家としてのモリスのことを大熊から聞かされていた可能性を知るとともに、「蟹工船」の執筆が、蔵原の文学理論に負っていることにも気づかされたものと思われます。

「党中央との連絡がなかなかとれず、はじめ一、二週間ぐらいのつもりだった私の滞在も一月になった。そのあいだ富本さんは私を家族の一員のように扱ってくれた。メーデーが過

ぎてやっと連絡がつき、非公然の党活動につくために、私は富本夫妻の親切なもてなしを感謝してこの家に別れを告げた。当時は非合法の共産党員をかくまったというだけで、治安維持法違反の罪にとわれる時代だった」³⁸。

その後も憲吉の共産党支持は、終生続きます。蔵原はこう明かします。「富本さんは戦後、日本芸術院会員、東京美術学校教授を辞任して、郷里である奈良県安堵村の旧宅に帰り、京都で陶業に従っていたが、そのあいだ京都府委員会の同志を通じて、わが共産党の活動にも協力して下さっていた」³⁹。

四．蔵原惟人の投獄と富本一枝の検挙

かくして一九三一（昭和六）年の五月、蔵原惟人は祖師谷の富本家をあとにしました。時代は暗雲に包まれていました。その一箇月後に刊行された六月号をもって、それ以降の継続がかなわず、高群逸枝が主宰する『婦人戦線』が廃刊になります。その一方で、一枝は、『女人藝術』七月号に「女人藝術よ、後れたる前衛になるな」を発表します。内容は、『女人藝術』という文芸雑誌の存在意義を論じるものでした。そのなかで一枝は、「マルクス主義の文藝批評の基準」において蔵原が書いている「プロレタリア・イデオロギーのプロパガンダであり、また階級闘争への大衆のアジテーション」という観点に立って、この雑誌の役割を強調するとともに、主宰者である長谷川時雨に注文をつけます。以下は、最後の締めくくの一節です。

大衆を××的階級闘争の精神から文化的に政治的に教育するための手段と方法が、この言論機関に於て最も効果的に精力的にはたされることを思ふとき、賢明なる長谷川時雨氏は必ずやプロレタリア運動が當面する客観的情勢の變化に従つて氏がそれを一つ一つ採りあげ、それに正しい論理的解決を與へながら、女人藝術を通じて婦人大衆を、眞に××的階級闘争の精神に於て、文化的に政治的に指導し發展させてゆかれようと思ふし、またそこまでゆかなければならないと強く思ふからだ。

女人藝術よ、後れたる前衛になんか決してなるな！⁴⁰。

伏せ字となっている「××」には、「革命」の二文字が想定されていると思われます。潜伏していた蔵原の影響を受けて書かれた文だったのかもしれませんが。

この年（一九三一年）の一二月、今度は、全日本無産者芸術連盟（ナップ）の機関誌『戦旗』が廃刊に追い込まれ、とうとう、年が変わった一九三二（昭和七）年の四月に蔵原が検挙される事態へと至ります。蔵原は、こう語ります。

それから一年たって私が検挙された時、私はその間にとまって歩いた住居についてきびしく追及された。……すでに「調書」の一部を勝手につくりあげて、私にその承認を強要した。そのなかには富本憲吉宅の名もあがっていた。党の中央部にいて党を裏切った男がそのことを売ったのである。私は頑強に抵抗し、そこから富本さんの名前を消さなければ、今後ともいっさい取調べに応じないと頑張った。警察ででっちあげられ、検察庁におくられた私についての簡単な「調書」からは富本さんの名は除かれていた⁴¹。

蔵原を富本家に誘導した村山篤子の夫である村山知義の二度目の収監が、一九三二（昭和七）年の二月で、その年の六月に『女人藝術』が休刊となり、蔵原惟人が獄窓の人になるのが、翌七月のことでした。そしてさらに、次の年（一九三三年）の二月二〇日に、今度は小林多喜二が逮捕され、同日、拷問により死亡するのです。プロレタリア文化運動にとって、最大の受難の時代でした。

官憲の目は、一枝にも向けられていました。小林多喜二の拷問死から半年が経過した一九三三（昭和八）年八月一三日の『週刊婦女新聞』は、「富本一枝女史檢舉——警視廳に留置、転向を誓ふ」という見出しをつけて、次のように報じました。

青鞨社時代の新婦人として尾竹紅吉の名で買った現在女流評論家であり美術陶器製作家富本憲吉氏夫人富本一枝女史は過日來夫君と軽井澤に避暑中の處、去る五日單身歸京した所を警視廳特高課野中警部に連行され留置取調べを受けてゐるが、女史は先週本欄報道の女流作家湯浅芳子氏と交流關係ある所から、湯浅女史を中心とする女流作家の左翼グループの一員として約百圓の資金を提供した事が暴露したもので、富本女史は野中警部の取調べに對して去る七日過去を清算轉向する事を誓つたと⁴²。

「過去を清算轉向する事を誓つた」一枝は、八月一八日、二週間ぶりに釈放されました。釈放から一週間が立った八月二五日、日比谷の東洋軒において、九月に上海で開催される世界反戦會議を支持するために、「極東平和の友の會」の発会式が執り行なわれました。「發企人は秋田雨雀、江口渙、長谷川如是閑他科學者文士等の百餘名であるが、婦人の側では野上彌生、市川房枝、長谷川時雨、林芙美子、望月百合子、平塚らいてう、坂本眞琴、窪川いね子、生田花世、神近市子、大田洋子、川崎ナツ、關鑑子の諸氏」⁴³でありました。昨年来、村山知義や蔵原惟人が投獄に処され、今年に入って小林多喜二が拷問死し、さらには、廃刊になっていたものの、『女人藝術』のかつての仲間である湯浅芳子が起訴により刑務所に送られ、同じ仲間の矢田津世子と富本一枝が檢舉、取り調べの末、釈放されたばかりでした。こうした最近の一連の出来事について、「極東平和の友の會」の発会式に参集した女性たちは、それをどう受け止め、どのように話題にしたのでしょうか。この年（一九三三年）のはじめのドイツにおけるアドルフ・ヒトラーの首相就任と共産党への弾圧について、誰かが、詳しい情報を提供したにちがいありません。しかし、日本におけるプロレタリア文化運動の余儀ない終焉については、あえて口にする者はいなかったかもしれません。

「極東平和の友の會」の女性側の顔ぶれを見ますと、かつての『婦人戦線』のアナ派と『女人藝術』のボル派が混在しています。それぞれの立場や思想を越えて、このとき女性たちは、「平和」運動に身を向けたようです。そうした女性たちの連帯は、さらに、高群逸枝の女性史研究への支援へと及んでゆきます。「高群逸枝著作後援会」が発足するのは、それから三年後の一九三六（昭和一一）年のことでした。これにつきましては、次の「高群逸枝の『婦人戦線』の廃刊と『森の家』での研究開始」に続く、第六章「『大日本女性史 母系制の研究』の完成」に譲ることにします。

注

(1) 蔵原惟人『藝術論』潮流社、1950年、13-14頁。

(2) 同『藝術論』、15頁。

(3) 同『藝術論』、29頁。

(4) 同『藝術論』、45頁。

(5) 富本憲吉、式場隆三郎、對島好武、中村精、座談会「富本憲吉の五十年」『民芸手帖』39号、1961年8月、6頁。

(6) 『平民新聞』第35号（明治37年7月10日）1面の「平民新聞直接讀者統計表」には、読者数が府県別に掲載されており、それによると、富本憲吉が暮らしていた奈良県は「八」と記されています。そしてこの統計表には、「右は直接の讀者のみです、この直接讀者に約二倍せる、各賣捌所よりの讀者は如何様に配布されて居るか本社でも取調が付きませぬ」との注意書きがつけられています。これから判断すると、奈良県は、直接の讀者が8名、売捌所を通じての讀者が約16名、合計約24名ということになります（『週刊平民新聞』近代史研究所叢刊1、湖北社、1982年、283頁）。

(7) 日本近代史研究会編『画報 日本の近代の歴史 6』三省堂、1979年、136-137頁。

(8) この記事は、二重かぎ括弧で括られており、記事のあとに、次のような注釈が加えられています。

「以上は吾人の同志村井知至君が其著『社會主義』中に記せし所を摘載せしもの也、以てウヰリアム、モリス氏が如何なる人物なりしかを知るに足らん」（『週刊平民新聞』近代史研究所叢刊1、湖北社、1982年、33頁）。

(9) 『私の履歴書』（文化人6）日本経済新聞社、1983年、198頁。〔初出は、1962年2月に日本経済新聞に掲載〕

富本は、美術学校在学中に関心をもった美術家としてフィスラー（現在における一般的表記は「ホイッスラー」）とウィリアム・モリスを挙げていますが、イギリスから帰国する前日にサウス・ケンジントンの本屋でホイッスラーに関する書物を買って求めているものの、学生時代にとくに強い関心をもった形跡を示す資料は現時点で見出されえず、したがって、実際上の富本の留学目的を、「図案家で社会主義者のウィリアム・モリスの思想に興味をいだき、モリスの実際の仕事を見たかったから」という一点に絞り込んだとしても、それほど大きな間違いはないものと考えられます。

(10) 富本憲吉が、1912（明治45）年の『美術新報』第11巻第4号および第5号に2回に分けて発表した「ウィリアム・モリスの話」の底本が、エイマ・ヴァランスの『ウィリアム・モリス——彼の芸術、彼の著作および彼の公的生活』であったことについては、以下の拙論のなかで詳しく論じています。

中山修一「富本憲吉の『ウィリアム・モリスの話』を再読する」『表現文化研究』第5巻第1号、神戸大学表現文化研究会、2005年、31-55頁。

(11) Aymer Vallance, *William Morris : His Art, his Writings and his Public Life*, George Bell and Sons, London, 1897, p. 305.

(12) Ibid., p. 310.

(13) 文化庁編集『色絵磁器〈富本憲吉〉』（無形文化財記録工芸技術編1）第一法規、1969年、72頁。口述されたのは、1956年。

(14) 前掲座談会「富本憲吉の五十年」『民芸手帖』、同頁。

(15) 前掲『色絵磁器〈富本憲吉〉』、同頁。

(16) 尾竹紅吉「藝娼妓の群に對して」『中央公論』1月号、中央公論社、1913年、186-189頁。

(17) 『中央公論社七〇年史』中央公論社、1955年、13-15頁。

(18) 荒畑寒村『寒村自伝』上巻、岩波書店、1975年、347頁。

(19) 同『寒村自伝』、349-350頁。

(20) 同『寒村自伝』、377頁。

(21) 「『青鞥社』のころ(二)」『世界』第123号、岩波書店、1956年3月、138-139頁。

(22) 富本一枝「私達の生活」『女性日本人』第1巻第2号、1920年、56-57頁。

(23) 富本一枝「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』第2巻、1917年1月号、76頁。

(24) 辻本勇『近代の陶工・富本憲吉』双葉社、1999年、121頁。

(25) 『我に益あり・西村伊作自伝』紀元社、1960年、271-274頁を参照のこと。

(26) 石垣綾子『我が愛 流れと足跡』新潮社、1982年、44頁を参照のこと。

(27) 丸岡秀子『ひとすじの道 第三部』偕成社、1983年、128頁を参照のこと。

同じく丸岡は、富本家の本棚に並べられた蔵書について、こう述べています。「その書架には、女高師という名の学校の図書館では見られない“禁じられた本”が並んでいた。トルストイ、ドストエフスキーからはじまって、ツルゲーネフ、ゴーリキーなどのロシアの作家のもの。そしてまた、バルザック、ユーゴー、デュマ、ゾラ、モーパッサン、ロマン・ローランなどのフランス文学者の名が背文字に並び、数え上げられないほどだった」(同『ひとすじの道 第三部』、111頁)。

(28) 詩人で作家の辻井喬は、このような言葉を残しています。「尾竹紅吉は私の同級生富本壮吉の母親であった。彼とは中学・高校・大学を通じて一緒だったが家に遊びに行くようになったのは敗戦後である。それまで富本の家は警察の監視下にあるような状態だったから、壮吉も私を家に誘いにくかったのである」(辻井喬「アウラを発する才女」『彷徨月刊』2月号(通巻185号)弘隆社、2001年、2頁)。

(29) 蔵原惟人「富本憲吉さんのこと」『文化評論』8、1963・NO. 21、57頁。

(30) やまさき・さとし「村山籐子解説」『日本児童文学大系 第二六巻』ほるぷ出版、1978年、565頁。

(31) 前掲「富本憲吉さんのこと」『文化評論』、同頁。

(32) 同「富本憲吉さんのこと」『文化評論』、57-58頁。

(33) 同「富本憲吉さんのこと」『文化評論』、58頁。

(34) 同「富本憲吉さんのこと」『文化評論』、同頁。

(35) 同「富本憲吉さんのこと」『文化評論』、同頁。

(36) 帯刀貞代「富本一枝さんのこと」『新婦人しんぶん』、1966年10月6日、3頁。

また、帯刀の『ある遍歴の自叙伝』(草土文化、一九八〇年)にも、働く女性の解放運動を支援する一枝の姿の一端が描かれています。

(37) 前掲「富本憲吉さんのこと」『文化評論』、同頁。

(38) 同「富本憲吉さんのこと」『文化評論』、59頁。

著作集 14 『外輪山春雷秋月』

火の国の女たち

——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞞の女たちとの友愛

第四章 富本憲吉・一枝夫妻に蔵原惟人がかくまわれる

(39) 同「富本憲吉さんのこと」『文化評論』、57 頁。

(40) 富本一枝「女人藝術よ、後れたる前衛になるな」『女人藝術』第4巻第7号、1931年7月号、68 頁。

(41) 前掲「富本憲吉さんのこと」『文化評論』、59-60 頁。

(42) 『週刊婦女新聞』、1933年8月13日、2 頁。

(43) 『週刊婦女新聞』、1933年8月27日、2 頁。

第五章 高群逸枝の『婦人戦線』の廃刊と「森の家」での研究開始

一. 『婦人戦線』廃刊へ

第三章の『『女人藝術』からアナーキズム派が身を引く』において詳述していますように、『『女人藝術』内での「アナ・ボル論争」は、アナーキズム派が離脱して、新しい団体を組織するという道を開きました。一九三〇（昭和五）年一月二六日、無産婦人芸術連盟の創設に向けて結集したのは、伊福部敬子、神谷静子、城しづか、住井すゑ子、高群逸枝、野副ますぐり、野村考子、平塚らいてう、二神英子、碧静江、松本正枝、望月百合子、八木秋子、鐘田貞子の計一四名でした。続いて、三月一日に『婦人戦線』が産声を上げます。こうして「アナキスト高群逸枝」の独自の舞台が、ここに誕生したのでした。

『婦人戦線』は、蔵原惟人らが唱道するマルクス主義系の雑誌である『戦旗』などに対抗する、アナーキズム系の機関誌でした。高群は、こう振り返ります。

『婦人戦線』は……当時のボル系の『戦旗』や『文芸戦線』等のはなやかさにくらべると、明治末年の大逆事件、大正十一年の労働組合総連合創立大会事件、震災直後の甘粕事件等以来、不運の過程をたどりつつあったアナ系のものとしてははなはだ微力なものだったが、時代を語る歴史的存在としては記憶されてよいものだろう¹。

それと同時に『婦人戦線』は、らいてうが「婦人戦線に参加して」（『婦人戦線』第二号）において述べているように『青鞞』を引き継ぐものでもありました。高群は、『青鞞』と『女人藝術』を比較して、こう回顧します。

明治末創刊の「青鞞」と昭和四年発刊の「女人芸術」とをくらべると、時代色のちがいははっきりする。前者にはもゆる情熱と理想へのあこがれがあり、後者にはニヒリズムやナンセンス、エロ、メカニズムが混在し、中心的性格がみとめられない²。

『婦人戦線』は月刊の雑誌で、各号それぞれに主題が設定されていました。この雑誌の編集上の輪郭を把握するために、以下に、創刊から廃刊までの通巻一六号の主題と、加えて高群自身の主な掲載文のタイトルを一覧にします。発行兼編集印刷人は、最初の二号は「高群逸枝」、次の第一巻第三号から翌年の第二巻第五号までが「橋本逸枝」、最終号になる第二巻第六号が「城夏子」です。

□一九三〇（昭和五）年

三月号（第一巻第一号）主題「創刊宣言」／高群「婦人戦線にたつ」

四月号（第一巻第二号）主題「家庭否定」／高群「家庭否定論」

五月号（第一巻第三号）主題「戦闘小説」／高群「女闘士殺さる（戯曲）」

六月号（第一巻第四号）主題「ブル・マル男をうつ」／高群「無政府主義の目標と戦術」

七月号（第一巻第五号）主題「性の処理」／高群「無政府主義と性の処理」

八月号（第一巻第六号）主題「女流糾弾」／高群「生田花世さんに私信がはり」

九月号（第一巻第七号）主題「無政府戀愛」／高群「無政府戀愛を描く」

一〇月号（第一巻第八号）主題「都會否定」／高群「美人論（都會否定論の一）」

十一月号（第一巻第九号）主題「無政府道德」／高群「階級道德と無政府道德」

一二月号（第一巻第一〇号）主題「無政府自傳」／高群「高群逸枝」

□一九三一（昭和六）年

一月号（第二巻第一号）主題「我等の婦人運動」／高群「我等の婦人運動」

二月号（第二巻第二号）主題「性の経済」／高群「新無政府主義問答（八）」

三月号（第二巻第三号）主題「一周年記念號」／高群「婦人戦線一年 婦人思想史」

四月号（第二巻第四号）主題なし／高群「随筆・夜を行く」

五月号（第二巻第五号）主題「男性物色」／高群「戀愛と性欲」

六月号（第二巻第六号）主題なし／高群「みぢめな白百合花の話」

これ以外に高群は、「吠えろ女性」を第一巻第四号から第二巻第一号までと、第二巻第四号に連載しています。これは、松井須磨子の人生を題材にした長編叙事詩で、第一章が「序曲」で、最後の第十六章の表題が「妻」です。そこから判断しますと、「吠えろ女性」は、連載誌廃刊に伴う未完の作品となった可能性もあります。

また、第一巻第六号の巻末や第一巻第八号の巻頭を見ますと、解放社から出版予定の高群逸枝著『強権に抗す』の広告が掲載されています。そのなかに「内容目次」が紹介されており、第一篇「無政府主義の思想と實行」、第二篇「無政府主義者宣言」、第三篇「無政府原理考」となっています。その説明によると、既発表の雑誌論文等を集めて一著に編集されたもののようで、この本は『黒い女』の姉妹編として位置づけられていました。広告の文面には、次のような文字が踊ります。

全人類を、民衆を、労働者農民を、婦人を、眞に開放し眞に導く思想は何か、無政府主義である！……醜怪なる強権マルキシズムの没落は既に時間の問題となり終わり、今や全民衆の認識と創造力はアナーキズムにおいて偉大なる飛躍を準備しつつある時、我等いかに生くべきか？ 何を為すべきか？ 本書は強くそれに應ゆるであらう。

しかし、この本については、調べた限りでは国立国会図書館にも所蔵がありませんので、出版されることなくお蔵入りしたのではないかと思います。当局によって「発禁」が命じられた可能性も否定できませんが、他方で、高群の側に何か個人的な問題が生じ、それにより原稿が取り下げられたことも考えられます。といいますのも、この時期高群は、「最大の夫婦の危機」に向かおうとしていたからです。憶測するに、そのような事情が背後にあったためなのでしょうか、『高群逸枝全集』第一〇巻の「火の国の女の日記」において、高群自身、この本については何も言及しておらず、いまになっては、その出版事情は闇に閉ざされたままとなっています。しかし、『強権に抗す』という書題、それに加えて、広告に示された「内容目次」から判断しますと、労働者に対する資本家の、農民に対する地主の、婦人に対する男性の、その強権と抑圧とを糾弾し、そこからの眞の解放を目指して、マルキシズムに備わる強権的専制主義を排除し、アナーキズムの絶対自由の思想内容が述べられていた

ものと思われ、『婦人戦線』の路線を強く背後で支える読み物となることが想定されていたにちがいありません。

二. アナーキズム的観点からの原始母系制への着眼

しかし高群は、この時点ではまだ十分にマルクス主義を理解していなかったようです。と
いいますのも、後年、こう告白しているからです。

アナキズムにたいしては、ほとんどそれ[大逆事件で落命した郷土の無政府主義者たち]
以上のことを知らず、したがってクロボトキンも、バクーニンも、プルードンも、ルク
リュも知らず、これらについては、昭和六年の六月に「婦人戦線」を廃刊（通巻一六）
して、郊外の森の中に退き、日本女性史研究に学究として専心するようになってから、
マルクス、レーニンらの学説をも含めて、はじめてようやく知りえたといえるくらいの
ものであった³。

しかし、この引用文の出典を示した末尾の注のなかにおいて具体的に述べていますよう
に、実際には、「郊外の森の中に退き、日本女性史研究に学究として専心する」もっと早い
段階において、疑いもなく高群は、マルクス主義を知り、海外のアナーキストたちの存在に
ついて承知していました。

それはそうであったとしても、この引用文に続いて高群は、アナーキズムの限界につ
いて、このように語るのです。

アナキズムの欠点は、必然論でなく、発展説ではないこと、したがって婦人解放史に学
的根拠を与えないことであるとおもう。またそれは同時に実践への弱点でもあると
いえる⁴。

『婦人戦線』廃刊までにあって、もしそのような理解に達していたのであれば、自身のア
ナーキストとしての取るべき道筋は何か、そう高群は自問したものと思われます。それは、
一口でいえば、平塚らいてうが『青鞥』の発刊に際して述べた「元始、女性は實に太陽であ
つた。真正の人であつた。今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病
人のやうな蒼白い顔の月である」⁵を、確かな史料に基づき学術的に実証することだったに
ちがいありません。より一般化するならば、その自問の結果は、「火の国の女詩人」であり
「アナーキスト高群逸枝」の義務と責任において、前人未踏のひとつの新しい学問として
「女性史学」を打ち立てて、かつて日本には、女性が中心となっていた時代があり、次にそ
れが後退し、女性にとって被圧迫の時代を迎え、いまやつとこの時代に至って、そこから立
ち上がろうとする女性の一群が出現しようとしているという認識と構想のもとに、まさしく
日本女性がどう生きてきたのか、古代から現代までの全史を自ら通覧し、それを叙述する
ことだったのではないのでしょうか。

過去の歴史に遡行して、そしてまた、ひとつのヴィジョンの先にある未来を展望して、い
まの自分ないしは自分たちの生存のあり方を確認しようとする、詩人にしてアナーキスト

がたどる、ある種宿命的な身のゆだね方を、一九世紀英国のウィリアム・モリスに求めることができます。といいますのも、いよいよ晩年に入るとモリスは、中世の農民反乱を扱った「ジョン・ボールの夢 (*A Dream of John Ball*)」(歴史小説)を、現在の社会主義者の政治的行動を素材にした「希望の巡礼者たち (*The Pilgrims of Hope*)」(物語詩)を、そして、革命後の人びとが生きる新世界を描写した「ユートピア便り (*News from Nowhere*)」(夢想的物語)を著わし、さらに加えて、最晩年のモリスは、アーニスト・ベルファット・ベクスとの共著による『社会主義——その成長と成果 (*Socialism: Its Growth and Outcome*)』を公刊し、そのなかで、過去から現在を経て未来へと進む社会主義とその運動の発展史を記述していたからです。こうしてモリスは、このときここに立つ詩人にしてデザイナーであり、はたまた社会主義者としていまに生きる自己を客観的歴史のなかに発見し、その存在の確かさを証明しようとしたのでした。

他方、高群はどうでしょうか。確かに高群は、モリスの「ユートピア便り」を読んでいました。わずかに一箇所ではありますが、『戀愛創生』のなかにおいて、それについて言及しています。このモリスのユートピアン・ロマンスは、すでに過去においては堺利彦によって「理想郷」の訳題のもとに抄訳され、『平民新聞』に連載されていたし、その後も、「芸術的社会主義」という名辞のもとにモリスの思想と実践に関する研究書や紹介書が絶えることなく続くなかにあって、高群が『戀愛創生』を発表する五箇月前の一九二五(大正一四)年の一月には、布施延雄が「無何有郷だより」という訳書題でもって、至上社から上梓していたのでした。

それでは以下に、高群の『戀愛創生』から、モリスに関連する記述の一部を引用します。

ウィリアム・モリスの「無何有郷だより」をみると、多くの子供達が、そこでは、自由な生活をして、森から丘へと遊び戯れてゐる。そこには學校といふものはない⁶。

このなかの「子供達」を「女性たち」に、そして「學校」を「家庭」に置き換えて読み直してみますと、こうなります。「多くの女性たちが、そこでは、自由な生活をして、森から丘へと遊び戯れてゐる。そこには家庭といふものはない」。このとき高群が発見した、モリスの描くユートピアは、自らの心に宿す理想世界と完全に一致したのではないのでしょうか。加えて、夫の橋本憲三は、生前の高群の言葉として、このようなことを書き記しています。

[すべてを書き終わったら]また出発しましょう。あたたかいところに行って、そこで私は『女性の歴史』で書けなかった未来像を叙事詩のかたちで描くでしょう。たぶん私の最後の叙事詩となるでしょう⁷。

この一文は、最晩年には、暖かい原郷であるあの熊本の「火の国」に帰還して、モリスに倣って「ユートピア便り」を書きたいという、見果てぬ夢を語っているようにも読めます。本人が述べていますように、その叙事詩が描く内容は、『女性の歴史』(上、中、下、および続の全四巻)で扱われた女性の過去と現在の姿に続く、解放のための闘争に立ち上がった女性たちのその後の未来社会になることが想定されていたようです。しかし、それが世に出ることは、残念ながら、ありませんでした。

しかし、モリスの場合もそうでしたが、高群のアナーキズム的詩編も、超現実的で夢想的で、非論理的なものとして、とりわけ「科学的社会主義」の立場に立つ論者から強い非難を浴びました。あるいは、一笑にふされることも、しばしばありました。高群は、自作について、このように論じます。

大正一〇〔年〕に生田長江の推せんで「新小説」に自叙伝的長篇詩「日月の上に」を発表し、ついで「放浪者の詩」、関東震災直前の陰鬱な時代相をえがいた長篇叙事詩「東京は熱病にかかっている」を出していた。いずれも自己に忠実な作風のものであって、またそれらは、山川菊栄がらいてうの「青鞨」を嘲笑していったいわゆる空想主義やセンチメンタル性が、もっとも極端につきつめられ、謳歌された、あるいは投げ出され、それらを通じて生きる道を知ろうとしていた必死的な身がまえをもった作品だったといえる⁸。

高群の一連の詩編は、蔵原惟人たちが主張していたプロレタリア文学と全く異なっていました。プロレタリア文学が、プロレタリア・イデオロギーのプロパガンダとして、主として小説という形式によって階級闘争の実相を描こうとするのに反して、高群の文学は、あたかもその昔の野生の小鳥の美しいさえずりに似て、自身の生まれながらの言葉を誰に遠慮することなく大声で発する詩歌の形式のなかに誕生しました。つまりこの文学は、理論の宣伝手段でも、理屈の強制支配でもなく、独り自身の解放を奏でる歌声だったのです。しかし、それに共鳴した女性たちが少なからずいました。そのひとりが、平塚らいてうでした。高群は、自分を客体化した表現を使って、こういいます。

らいてうは、こうした逸枝を東京の片隅で発見し、ある面での自己の後継者とみなしたのである。ただ、らいてうと逸枝とのちがいは、前者が高等教育をうけた高級官吏のお嬢さんであったのにたいして、後者はほとんど無教育とっていい山間の農家出身の貧しい小学教師の娘でしかなかった点であった⁹。

一方のらいてうは、高群についてこう書きます。

ともあれ、門外不出の研究生活に精進される高群さんとの文通は、そののちも折にふれて続けられ、「無性に好きなひと」として、高群さんの存在はいつもわたくしの心から消えることはないのです¹⁰。

らいてうと高群の相互には、深い友愛が存在していました。それは終生続くことになりません。

こうして、機関誌『婦人戦線』を廃刊にするや、一転して高群は、集団的婦人運動に幕を降ろし、婦人問題を考えるうえでの原点に遡るべく「女性の歴史」にかかわる孤高の学術研究へと突き進んでゆくのでした。

『婦人戦線』は、逸枝が思い描く「ユートピア」を発信する拠点となるものでした。しかし、その一方で、この拠点が置かれた橋本と高群の夫婦が住む「上荻窪二六九」の自宅には、

さまざまな人が吸い寄せられてきました。逸枝が回顧するところによれば、「筋ちがいの個人や団体の寄付勧誘者もあれば、家出した娘や妻、身の上相談の母や夫たちもくる。むろん、特高や憲兵も。……それに私は『婦人戦線』には別名、匿名までつかって四、五種の手稿を書かなければならない。それらの過労が編集の上にも影響をしないはずはなく、雑誌は生気を失ってきた。年を越したところから売れ行きががた落ちして、解放社から負担金を請求されるようになった」¹¹。そのころのことです、もともとは夫の憲三の主導ではじまった雑誌の刊行であったにもかかわらず、その夫が、消極的な態度を見せ始めます。なぜだったのでしょうか。アナーキズムに対する熱情が冷めてしまったという精神的変容が底辺に存在していたことは明らかであるとしましても、それに関連した具体的な要因も幾つか考えられそうです。たとえば、解放社に支払う負担金が重荷になっていたのではないか、特高や憲兵による連行を避けようとしたのではないか、あるいは、当初志していた女性史研究の道に妻を連れ戻そうとしたのではないか、はたまた、第一三章の「高群逸枝を顕彰する力とそれに棹さす力のはざま」において後述するような、夫婦のあいだに表に出すことがはばかれるような問題が発生し、そのことへの対応が迫られていたのではないか——おそらくは、何かひとつの要因によってというよりも、むしろ複合的な要因が絡み合っ、そのときの憲三の内なる思いは形成されていたのではなかろうかと推量されます。結果として逸枝は、意に反して、責任感と使命感を放棄して、一九三一（昭和六）年の六月号を最後に、『婦人戦線』の刊行を断念することになるのです。

三．「最大の夫婦の危機」到来

『婦人戦線』の刊行を断念することは、この夫婦にとって、分裂を回避し、夫婦の関係を何とか持続させるうえでの、残された唯一の道でした。その選択肢が、ふたりのなかでどう形づくられていったのか、以下は、それについてのひとつの素描ということになります。

このころ逸枝は、『婦人戦線』の月例研究会や、他組織との合同研究会等にしばしば出席していました。それは彼女にとって大いに裨益するものでした。しかしながら、それに対して夫が示した態度は、実に冷淡なものでした。それでは、妻の言葉に耳を傾けたいと思いません。

こうして私には研究集団も革命運動の一環たるべきことがようやく切実に自覚されてきた。私は革命者でなければならなかった。ところが私がこの転機に直面し、いわばウルトラの自分に良心の呵責を感じずようになってくるにつれて、それと反比例してKの興味は去っていくようだった。私は彼をともに会合に出るように誘ったが、彼は、「ひとりで行きなさい」と突き放した¹²。

なぜ憲三は、会合への出席に対して後ろ向きの態度をとったのでしょうか。その理由については、逸枝は直接何も明確に述べていませんが、その結果がどのようなことをもたらすかについては、十分に理解できていたようです。

こうなると彼が冷酷であることはかつて城内校で経験済みだった。しかし城内校の場合は織月城跡とか球磨川探訪等の問題にすぎなかったが、こんどはそれとちがい、私がひとりで私の目ざすコースをとることは、きょくたんにいえば彼と私とが、敵味方に分裂することだった。ここにきて私は最大の夫婦の危機感にさえ、見舞われる思いだった¹³。

「敵味方に分裂する」という言葉に着目すれば、「最大の夫婦の危機」とは、逸枝は、革命者であることを強く望み、一方の夫の憲三は、それへの情熱がすでに薄れ、日和見主義者へと後退した結果、そのことによってもたらされるであろう、夫婦間の亀裂ということになるのではないのでしょうか。こうして、ここに来て、アナーキズムに対する親密度の差が「最大の夫婦の危機」をもたらしたのでした。夫婦それぞれに言い分はあるでしょう。逸枝は、両者の言い分を、このようにまとめています。少し長くなりますが、この時期のふたりの立場をよりよく理解するうえで必要かと思われますので、以下にその箇所の全文を引用します。まず、自身の言い分について——。

私は最初から集団を組織する確信も、ましてその集団の主宰者となる自信もなかったが、それらのことをむしろ強くすすめたのはKではなかったか。それなのにKが途中で外れて私をひとりにすることは無責任ではないか。これが他のことなら私はこれまでやってきたようにKに曲従するだろう。しかし、この場合はそうした私的问题ではない。すでに引き受けたときに私の態度は決定している。私はこの責任を生命にかけても堅持しなければならないというのが、私のいい分だった¹⁴。

次に、夫の言い分について——。

彼のいい分は、彼は私に女性史研究をすすめておきながら、いっぽう偶然のことで『婦人戦線』を持ち込んで、こんな手違いになったことをあやまりたい。けれど前から懸案の研究所の場所も世田ヶ谷に物色中であるから、彼はそのほうを押し進めることにしよう。研究と運動とが両立しないわけでもなかろうというのだった¹⁵。

このように、『婦人戦線』と女性史研究を巡って、ふたりの見解が対立します。それぞれがそれぞれの立場を強く主張し譲らなければ、「最大の夫婦の危機」は現実のものとなり、夫婦の関係は崩壊します。そこで、逸枝が書くところによれば、「研究生活に入る前に私とKとはつぎのような話し合いをした」¹⁶のでした。いわば、「設立準備会合」です。

夫は妻に、このようなことを伝えます。

……そのくるしみのためによそ目には逆上して支離滅裂にさえなり手のつけようもなくなったようなあなたのなかに、あなたの本来の火の国的な炎のような個性や高貴な才能や、あなたの全面的に人をはっとさせる野性的な美貌——これらの抑圧されていたものが一時に輝き出たことはまさに驚嘆すべき現象だったと思う。……どんなことをしてもあなたを手ばなしたくなかったのです。しかし馴れてくると、あなたがやはり

従順なので、私もまた持ちまへの独裁者になったようだった。……もう私たちも三十歳をいくつか越した。ここらで根性をすえてかからねばならない。……私はあなたのもっとよい後援者になろうと思うのだ。……社会運動はロマンチズムではいけないと思う。また、各人にはそれぞれ長所がある。その長所をもって貢献すべきだと思う。あなたの長所と使命とは、長い年月、あなたのなかに蓄積せられてきた女性史の体系化だ。生活は私が保証する¹⁷。

すると、かつての「独裁者」から変容したこの夫の言葉に、妻は「感謝のあまりいつものくせで泣いてしまった」¹⁸のでした。そして妻は、こう応じます。

でも私には長所なんてものはないの。だから長所をもって貢献するという自信もないの。ただ私の希望を率直にいうなら、それは私が将来有名な学者になることではなく、生涯無名の一坑夫に終わることなの。これはもちろん一種のエゴイズムでしょう。……名声も収入もなく、だからただ貧困と病苦とだけが伴う。……それは、こんな私をただ一人で保護してくださるあなたをまでもたぶんまきこんでしまうことになるでしょう¹⁹。

それに対して夫は、「いいよ、二人でやろう」²⁰といて、笑ってうなずくのでした。

実に仲睦まじい会話内容です。かくして、「最大の夫婦の危機」はこれで消滅し、新しい夫婦の未来像が構築されてゆきました。逸枝は、次のごとくに、いいます。

こうして、私は夫のつよい心からのすすめもあって、意を決し、ここに過去いっさいの生活をふりきって、おそろしい未知の世界にはいっていったのであった²¹。

逸枝がこのとき振り捨てた「過去いっさいの生活」とは、具体的には何を指すのでしょうか。何も明示されていません。そしてまた、「火の国の女の日記」において逸枝が書く「最大の夫婦の危機」の内実と、「おそろしい未知の世界」に入る決意とのあいだには、明らかに大きな隔たりがかいま見られ、決して語り尽くされているとはいえません。それぞれの内面に存する、譲りがたい思いは、具体的にどのような観点に立って首尾よく整理がなされたのでしょうか。このときの話し合いの過程から構築されるに至ったであろう夫婦関係にかかわる新たな原理が、それ以降のこのふたりの言動を規定する重要な鍵となる部分ではないかと考えられます。裏を返せば、このときの話し合いの内容が明らかにされない限り、この夫婦が晩年に至るまで自身の人生とどう向き合おうとしたのか、その真実の姿についての理解は、自ずと散漫にならざるを得ないのではないかと思われるのです。しかしながら、本人たちはそれについて何も語っていません。いまや、それは推論するしかないのです。そこで、関連しそうな、残された部分的紙片を拾い上げながら、あくまでもひとつの参考的試論として、以下にその物語を組み立ててみたいと思います。

憲三と逸枝が合意した和平の姿は、一見すると、一年前に『婦人戦線』の第二号に逸枝が書いた「家庭否定論」からはとても想像できない夫婦像となっています。改めて該当箇所を引用します。そこには、こうした言説が並べられていました。

そこで目ざめた婦人は、「家庭をケトバス」ことが唯一の最上の手段であることを知った。

家庭とは何か。元來それは豚小屋と刑務所を意味してゐるではないか²²。

他方で、のちに逸枝は、「毎朝八時に K を送り出すと帰り夕方五時までは扉はすべて鍵をかけて仕事一すじに専念した」²³と回想しています。なぜ、「鍵をかけて」まで家のなかに閉じこもる必要があったのでしょうか。果たして、ふたりが合意した家庭とは、まさしく豚小屋か刑務所のような場となることが、想定されていたのでしょうか。

ここでどうしても思い起こしたいのが、第一章「高群逸枝と平塚らいてうの邂逅と『婦人戦線』の創刊」ですすでに触れています、逸枝の家出のくだりです。六年前の一九二五（大正一一）年の九月、次のような置き手紙を残して、逸枝は、当時自宅に寄宿していた憲三の友人男性と駆け落ちをします。「さよなら。さよなら。……金を少しく下さい。××さんに返します。そこまでいっしょに行き、わかれ、それからひとりになります」²⁴。このとき、憲三は、警察に保護された逸枝を迎えにゆき、東京に連れ戻します。このように、実際のところすでにこの夫婦は、先立って「最大の夫婦の危機」をこのとき経験していたのでした。しかし憲三は、妻のこの行為に耐え切れず、別居を切り出したり、離婚を迫ったりすることはありませんでした。なぜでしょうか。逸枝が亡くなったあと、憲三は「森の家」で石牟礼道子とおよそ五箇月間の同居生活をします。そのときの生活の様子を石牟礼はノートに書き留めていました。主としてその内容を綴った作品が「最後の人」で、そのなかに、憲三にとっての逸枝像が、こう描写されています。「最後の人」は、その後水俣に帰還した憲三が発行することになる『高群逸枝雑誌』に連載された、逸枝と憲三を扱った評伝です。

あのひとは、あのひとの心は、人類とともにいつもあって、僕はそれをおもう……彼女はやはり天才者だった……。彼女は三十七歳で研究にはいったが、僕はもっと早く準備をしてやれたらなおよかったと思う。もっと早く気づくべきだった……²⁵。

このように憲三は、妻の逸枝を「天才者」であることを認めているのです。それであれば、その「天才者」が決行した別の男性との逃避行も、自身の妻に対する日頃の言動に反省を促すことこそあれ、「天才者」のみに許される特権的行為として、相手を責めることもなく、容認へと向かったのではないのでしょうか。しかし、逸枝には、次のような恋愛感覚が、感性の一部に宿っていたことも事実でした。以下は、生田長江が逸枝を「天才者」と評したときの詩集「日月の上に」に現われている一節です。原郷「火の国」に伝わる、幼き日に見聞きした遺俗なのでしょう。逸枝は、原始母系制の残照をここに見出していたのかもしれませんが。

お祭の夜には
若い男女の
自由戀愛が許される
若い衆はくじ引をして
女をきめる

女は従順^{すなを}にお化粧をして
それを待つてゐる²⁶。

したがいまして、妻が家に男を招き入れないように、そしてまた、妻が男と家から出てゆかないように、「扉はすべて鍵をかけて」おくように夫が妻に命じたとも考えられますが、他方で、妻にしてみれば、「自由恋愛」は太古の昔の恋愛形式の名残であり、男の嫉妬心はその後に生まれた支配原理の一部である以上、大した罪の意識はなかったものと思われます。しかしながら、これから入る「おそろしい未知の世界」を前にして、もはや「自由恋愛」に興じる余裕などはないとはいえ、それをきっぱりと遮断し、執筆へ向けた不退転の決意を自分から形に表わそうとして、ひょっとしたら無意識のうちに、心の鍵のみならず、進んで「門外不出」の「鍵をかけて」籠城してしまったのかもしれません。妻は、こういいます。

だがもう賽は投げられていた。いまはだれに訴えることもできないし、さく衣をきせられた狂人のように、どんなにわめいてみたところで、一軒家のひとりぼっちの私の声は、けっしてどこにもとどかないだろう。けっきょく私は出発し、前進するほかなかったのだった²⁷。

それはそれとして、すでに上で紹介したように、憲三は、「彼女は三十七歳で研究にはいったが、僕はもっと早く準備をしてやれたらなおよかったと思う」と、漏らしています。もし、こうした憲三の後悔の言葉をこのとき直接聞かされていたとすれば、なぜそうしてくれなかったのか、逸枝は、涙ながらに訴えたかもしれません。といいますのも、その一〇年くらい前に、すでに逸枝はこう漏らしていたからです。

妾が女詩人として／九州から出て来た時に／お前が妾に呉れたものは／不自由と不幸であつた
云つて呉れるな／貴女の御本領は詩作ですなどと／なぜ我々は／詩作の爲めに苦しまねばならないのか²⁸

逸枝にとってのつらい日々は、上京して以来、続いていました。その延長として、駆け落ちもしました。もしそのころ、自分の気持ちを少しでもわかってくれていたら、何も、いがみ合う事態に陥ることはなかっただろうにという思いが、切々と逸枝の胸に込み上げてきたにちがいません。以下は「放浪者の詩」のなかの一節です。

ある日妾が浮氣をして
お嫁に行つて仕舞つたので
こんなに二人は仲が悪く
睨み合つて暮らしてゐるのだ²⁹

このふたりの話し合いのなかで、憲三は、妻に対する態度を変える必要性に気づかされたものと思われます。それは、それまでの憲三が無自覚のうちに身につけていた伝統的な男性

の存在様式に手を加えることでした。晩年に至って憲三は、同居中の石牟礼道子に、こうささやきます。かつて逸枝は、「家庭をケトバス」という表現を使いましたが、このときの憲三は、「家庭爆破」という言葉を用います。

ボクはね、男の一生を棒に振って女房につくした、という風におもわれているのですよ。僕は家庭爆破に、いささかの協力をしただけですよ。かといって僕たちはとくにボクは、家庭の遺制、つまり男権社会の遺制の中に育ったから、とくにボクはそれをひきずっていたから、一度これを爆破しなければ、女性は、全面的に生れ替えることはできない。それが自分の体験でよくわかるのです³⁰。

「家庭とは何か。元來それは豚小屋と刑務所を意味してゐる」——これが逸枝の認識でした。しかし、かくして「家庭爆破」により「豚小屋と刑務所」が、その姿を消した以上、それに代わる新しい何らかの空間が再建されなければなりません。それは、どのようなものだったのでしょうか。

それは、逸枝にとっては、憲三の要求を受け入れ、本来的に身に宿していた詩人である部分とアナーキストである部分を振り捨て、それに代わって、しっかりとした婦人解放の自覚のうえに立って、女性史の未出現の書き手としてその王道へと進み入ることであり、憲三にとっては、望むと望まざるとにかかわらず、いつしかしみついてしまっていた「男権社会の遺制」を意識的に振り払い、編集者としての職分をしっかりと自覚したうえで、「天才者」である書き手だけが含み持つ金色の才能を探り当てることだったのではないかと推量されます。

ここでいう「編集者としての職分」とは、出版社との事前の打ち合わせや契約、書き手の書く原稿の整理やとりまとめ、献本や寄贈本の送付、印税収入の管理、原稿用紙やインクなどの購入、図書館での調査、古書店などにおける史料等の発掘と入手、日々送られてくる雑誌や新聞や手紙類の整理整頓といった業務を含みます。その一方で、生活のためには、やむなく、いわゆる「売文」も書かなければならず、そのためには雑誌社や新聞社などとの交渉が欠かせません。そして、さらに重要なことは、日常的に書き手のよき相談相手になり、悩んでいるときなどには、執筆の方向性を与えたり、打開策を示したりする業務も加わるのです。先を読む力に裏打ちされた高度の管理能力が問われる仕事であるといわざるを得ません。まさに、平凡社での経験が生かされる場面です。当然ながら、編集者なくして書き手は存在できませんし、書き手なくして編集者は存在できません。それは、たとえば金魚鉢という空間における金魚と水の関係に似ています。「家庭をケトバス」ことで「家庭爆破」が起こったのちに再建が予定されていた夫婦の関係とは、そのような次元においてはじめて機能する新しい男女の関係だったのではないのでしょうか。これが、逸枝が『戀愛創生』で説いた一体主義の原像だったのかもしれません。石牟礼は、憲三のもつ美質をこう評価します。

事業家、経営者として、憲三がいかにすぐれた資質者であることか、『高群逸枝全集』を出現させてゆく過程をつぶさに見てゆくと『大日本女性人名辞典』は逸枝の名で出されたが、研究に着手した彼女のカードを整理して憲三が書いたものであった。これを出

版したときのパンフレットなどを読んでも隠されているその綿密な企画力、実行力、全過程への心配り、さらには事後処理の完璧さにおどろく³¹。

石牟礼は、この一節で憲三を「編集者」という言葉は使わず、「事業家、経営者」という用語で形容しています。「事業家、経営者」とは、「労働者」を賃金で雇い、強権的に支配する立場にある人を連想します。かつて逸枝は、苦しい日々を送っていたころの日記に、このような文でもって夫の強権ぶりを書き記していました。

きょうも夫が出て行けという。いくど夫はこの言葉を使うのだろう。これはブルジョアがプロレタリアートにたいして、その弱身につけこんでいう悪辣な言葉と同じように悪辣である。こうした言葉は使って欲しくない³²。

もし憲三が「編集者」の立場を逸脱し、今後、「事業家、経営者」としての顔を露わに見せるようになれば、逸枝は、再び単なる著述家プロレタリアートの位置におとしめられる可能性があります。それを考えると、逸枝にとって、「事業家、経営者」としての夫に、完全に身をゆだねるには、あまりの大きな危険が伴います。だからといって、「編集者」としての夫の優れた能力をこのまま見捨てるわけにもゆきません。さらに加えるならば、すでに上で引用していますように、家出をした際には、「金を少しください。××さんに返します」と、憲三に依頼しています。旅先の郵便局で受け取るつもりでいたのでしょうか、これは、日常の金銭的管理が逸枝自身の手によって自立的になされていなかったことを示唆します。さらに、第一章「高群逸枝と平塚らいてうの邂逅と『婦人戦線』の創刊」において示しているとおり、らいてうが観察するところでは、逸枝は、「身ごなし全体がのろいという感じで、靴をはくのもテキパキはけないような人でした」。このことは、身体的にひ弱であったことを表わします。加えて、憲三が石牟礼に語ったところによれば、逸枝は「洗濯がとても下手で、僕の方がずっと上手で……放浪は出来ても商売など出来る筈はない」³³女性でした。そうした諸々の事情を勘案すれば、もはやこの場に及んでは、夫を信じ、そこに身をゆだねるほかないのです。逸枝は、こう書いています。

この物すごいエゴイストは興味のない事柄や人物には冷淡だが、決意したことにはさりげない誓いのうちにも、私を心のずいから信頼させるものを持っていた。私はいまは遠慮なくそれに依存しようと思った³⁴。

逸枝が指摘するように、確かに憲三は、エゴイストなのでしょう。これは、本人の「本性」にかかわる部分で、「男権社会の遺制」とは別の相に属するにちががなく、自身の意思や判断によって容易に破棄することはできません。つまり、エゴイストに関しては、終生続くことが予想されます。しかし、一方の逸枝自身にも、将来の希望にかかわってエゴイズムが内在していました。いま一度、その箇所を引用します。

でも私には長所なんてものはないの。だから長所をもって貢献するという自信もないの。ただ私の希望を率直にいうなら、それは私が将来有名な学者になることではなく、生涯無名の一坑夫に終わることなの。これはもちろん一種のエゴイズムでしょう³⁵。

つまり、ここにあって、単なる夫婦の表層的愛を越えた、立場の異なるふたりの内から湧き出るエゴが向かい合っているのです。そして、そのエゴが互いに支え合って、つまり、うまく利用し合って、ふたりの関係が何とか安定的に保たれようとしているのです。どちらかの一方が、そのエゴを内にしまい込み、相手のエゴの批判に走れば、一瞬にしてその関係は瓦解する恐れがあります。この新たな最少人数によるプロフェッショナルな家内制生産工房には、こうした特殊な力が存在し作用していたのです。これが、古い「家庭」が崩壊し、その後に新たに生まれ出ようとする「職場」における、いわば「職務規定」となるものでした。文学的でもあり、経営学的でもある、この空間的構造を支える原理的力学をふたりは相互に認識することによって、「森の家」で操業を開始するにあたっての話し合いは、最終結論へと導かれていったのではないかと、思考する次第です。

以上を内容とする「設立準備会合」の結果、『婦人戦線』の継続について「私はこの責任を生命にかけても堅持しなければならない」という逸枝のひたむきな思いは退けられ、これまでと同じように夫の主張に、否、もはや夫ではなく編集者としての主張に、逸枝はやむなく従うこととなります。かくして、奥付に名が挙がる「発行兼編集印刷人」たる逸枝の頭を越えて、おそらく憲三の強力な主導のもとに解放社との協議が進められ、『婦人戦線』は廃刊へと至る一方で、同じ版元から出版が予定されていたアナーキズム論集である『強権に抗す』も、同じ運命をたどることになったものと思われます。

『女人藝術』が終刊するのが、翌年（一九三二年）で、その次の年（一九三三年）には、プロレタリア文学の旗手と目されていた小林多喜二が官憲の一方的強権により虐殺されます。その意味において、憲三の「編集者」あるいは「事業家、経営者」としての目は、まさしく「機を見るに敏」に、機能していたのです。

四、「森の家」での女性史研究の開始

こうして『婦人戦線』は姿を消しました。一方の逸枝のこのときの心情は、どうだったのでしょうか。一九三一（昭和六）年六月に発刊された『婦人戦線』の最終号（第二巻第六号）に、逸枝は、「みぢめな白百合花の話」と題された短編の寓意物語を寄稿しています。以下は、物語に入る前の冒頭の前言です。

これは童話といふよりも、幼な心の記録とでもいふべきものです。幼な心には色々な悲しみがあります。みぢめな境遇にある子供は、えてかうした頼りない心の悲しみを味はうものです。おお、わたしはほんとうにそんな子でした。そして今も³⁶。

これは、最後の「そして今も」の字句を巡って、両義的な解釈が可能な一文ではないかと推量されます。ひとつの解釈として、「そして今も」のあとに、「別のみぢめな境遇に私はあるのです」を補ってみます。すると、現在の「みぢめな境遇」が浮かび上がってきます。お

そらく、憲三との話し合いの結果は、必ずしも十分に自分の心を満たすものではなく、それによって、子どものときに味わったような「頼りない心の悲しみ」が逸枝の身を包んでいる——そのようなことが示唆されているのかもしれませんが。しかし、女性史を書きたいという自分の意思は事実であり、憲三の言い分にも事実が含まれ、それでも割り切れない部分が事実として残る。こうした真実の積み重ねのなかにあつて身動きがとれないむなしい自分の姿を、逸枝は「みぢめな白百合花」に例えて、自画像化しようとしたのではないのでしょうか。最終号を意識するなかにあつての、これがこのときの逸枝の偽らざる心情の一部だったにちがいありません。晩年、逸枝は、自分の性格について、こうしたことを漏らしています。

私は自分に自信がなく、ひとに対して依頼心と依存心があり、自分自身だけでは考えを
発展させることができないのをなんとかしよう。ここに私の夫への奴隷根性があるのだ
ろう³⁷。

そうであれば、逸枝の悲しみや苦しみは、部分的には、内在の「依頼心と依存心」とに起因する自己の「奴隷根性」から派生するところの、一種の自己憐憫の情だったのかもしれませんが。

他方で、もうひとつの解釈として、「そして今も」のあとに、「変わることなく私はそう思い続けているのです」という補助線を引いてみます。すると、現在もなお子ども時代の「みぢめな境遇」のことが頭から離れず、逸枝の身にのしかかっている姿が浮かび上がってきます。「頼りない心の悲しみ」のなかには、母と娘の精神的葛藤が含まれている可能性も排除できません。

「嫁入り婚」の時代にあつては「嫁と姑の問題」がつきまといますが、「婿取り婚」の場合は、「母と娘の問題」が介在します。それを前提に考えますと、原始母系制に関心を抱いた最初のころ、高群は実際の母親と自分との関係に思いが至ったのではないかと想像されます。まず母があつて、次に「婿取り婚」によって娘が生まれ、さらに次に、同じく「婿取り婚」によってまた娘が生まれる、こうした安定した継承が母系制の原理であるとするならば、自分自身の系譜にその遺俗は見当たらないか、そう思い高群は、身近な場所に目を向けた可能性はないのでしょうか。といいますのも、「母と娘」が生き生きとした関係でつながっていれば、そこに母系制の遺俗の残照をかき取ることができますし、逆に陰悪な関係で成り立っていれば、そこに母系制が終焉した要因を類推するきっかけを見出すことができるかもしれないからです。結果として見出した高群自身の「母と娘」の関係は、正確にはわかりません。しかし、六年前の一九二〇（大正九）年、高群が二六歳のときに、母親は亡くなりますが、立ち会えなかった娘に対して母親は、「世の中に貢献する仕事をするように草葉のかげからいつも祈っている」³⁸という言葉を残します。そのことから連想しますと、「意を決し、ここに過去いっさいの生活をふりきって、おそろしい未知の世界」である母系制研究に参入するにあたり、高群は、「みぢめな白百合花」を自分自身の手で母親の墓前に捧げようとした可能性もあながち否定できないように考えます。

それはそれとして、話し合いの結果を受けて、高群は、いよいよ女性史研究に向かうことを改めて決意します。それでは高群は、ここへと至るこの間、女性の置かれている状況をどう

う認識していたのでしょうか。いま一度『戀愛創生』に立ち戻りたいと思います。そのなかに、こうした一節があります。

婦人ほど、悲惨なものが、今日あろうか。彼女は暗黒、彼女は打ちひしがれてゐる。八方から叩かれてゐる。死滅しないのは、死滅する餘裕がないからである³⁹。

別の箇所では、このようにも述べます。

愛の女神を原始の森の中から連れてきて現在の家庭のなかにおしこめたならどうであらうか。彼女はきつと、遠い故郷にあこがれて涙の日を送るに違ひない。

(中略)

しかし、絶へてゐるということは、あきらめてゐるといふことではない。彼女は、積極的に、かの光明と、自由とへ、この家庭を推し進めて行かうとする意志と、行為とをもつて立つであらう。

このとき、彼女は社會に宣戦し社會に火蓋をきらねばならない⁴⁰。

ここにいう「愛の女神」とは、高群の化身であるにちがいありません。その彼女が、いままさに「社會に宣戦」を布告しようとしているのです。高群の信じるところによれば、結婚制度のはじまりとともに、自由で自然な「恋愛生活」も終わりを告げ、一夫一婦制のもと、妻は夫の私有財産の一部と化し、女たちにとっての耐えがたい屈辱の時代が幕を開けたのでした。屈辱から立ち上がり、「かの光明と、自由とへ」解き放された暁には、何が待っているのでしょうか。それは、高群の書物のタイトルにある「戀愛創生」の一語に凝縮されるところの新世界であるにちがいありません。つまりは、人類がすでに失ってしまい、いまや忘れ去られてしまった「恋愛」の創生（あるいは再生ないしは復活）がそこに待っているのです。それは、高群にとってみれば、一方で、私有財産と一夫一婦という強権制度の解体を、そしてもう一方で、理にかなったひとつの母性保護の創造を含意するものでした。

それでは、「愛の女神」がかつて住んでいた「原始の森の中」とは、どのような世界だったのでしょうか。それに相当する部分を拾い出してみます。

農耕の生活が安定するやうになると、ここに始めて人類は、経済的に最も安定した生活を送ることが出来た。それと共に、母系制度が確實な形をとつて現はれ、民族は財産共有の基礎の上に立てられた。即ち、それは共產主義的な社會の形式であつた。婦人はこの血族團體の指導者であり、支配者であつて、大いに尊敬せられ、彼女の意見は、家庭内におけると同様、種族の問題に関しても大いに尊重せられた。彼女は仲裁者であり、裁判官であり、神官として宗教的信仰の義務を盡していた⁴¹。

逸枝は、女を中心として成り立っていたであろうと思われる社會の根幹をなす「母系制度」に着目します。こうして、いまだ闇に閉ざされていた「女性の歴史」の発掘作業がはじまるのです。それは、男によってつくられた「歴史」を敵に回しての高群にとっての「聖戦」であつたにちがいありません。といいますのも、それは、婦人解放のための史的根拠の創出で

あり、解放戦線に使用する「武器」の製造を意味したからです。そのための場として、富農で援助者の軽部仙太郎・なみ夫妻が、間口一〇間、奥行き二四間の二百坪の土地を貸し与えました。一九三〇（昭和五）年一二月二日の日記に憲三は、「軽部仙太郎さんみえる。家屋新築の件」⁴²と書いています。すでにこのころから、『婦人戦線』からの撤退は考えられており、逸枝にとっての新たな転戦の場が設けられようとしていたのかもしれませんが。住所表示は「世田谷町満中在家五六二番地」で、小田急線の経堂駅から徒歩二〇分のところにあり、周りは森と雑木林が点在し、富士山を望むこともできました。そこに、六室からなる二階建てを新築し、その一室が逸枝の仕事部屋にあてられました。逸枝と憲三はこの家を「森の家」、のちには「女性史学研究所」と呼びました。「上荻窪二六九」の借家からこの新居にこの夫婦が引っ越したのは、『婦人戦線』の事実上の最終号が発刊された六月一日からちょうど一箇月後の一九三一（昭和六）年七月一日のことでした。

逸枝は、仕事初日のことにつきまして、晩年に至るまで忘れることなく、記憶していました。

仕事場はできたけれども、五坪の書斎のまんなか、三尺の机をぽつんと置き、『古事記伝』（本居宣長）を一冊のせて座ったとき、書架や書庫にはまだ何一つなく、金もなく、多難な前途がしみじみと思いやられた……⁴³。

他方で、この日逸枝は、刊行をまちかに控えた『婦人生活戦線』につける「序文——若き友に與ふ」を書きました。この「序文——若き友に與ふ」は、「これを書いてゐる今、窓の外はいちめん七月である」ではじまり、「昭和六年七月一日 世田ヶ谷の寓居にて 著者」で終わります。そして、四日後の七月五日に寶文館から世に出ました。この『婦人生活戦線』は、「第一 現代と婦人生活」「第二 婦人問題の發展」「第三 婦人運動の諸相」「第四 戀愛と結婚」の全四章から構成される、若い女性に向けて書かれた婦人論でした。印税収入は、当面の生活費と研究費にあてることが企図されていたものと思われます。こうして、逸枝の女性史研究がスタートしたのです。そのとき逸枝は、三七歳になっていました。

注

（1）『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1976年（第8刷）、236頁。

（2）高群逸枝『愛と孤独と』理論社、1958年、217頁。

（3）高群逸枝『女性の歴史』下巻、大日本雄辯會講談社、1958年、287頁。

しかしながら、この高群の言説は、明らかに虚偽といわなければなりません。といいますのも、高群が「森の家」において隠棲を開始するのは一九三一（昭和六）年の七月からですが、それより五年早く出版されていた『戀愛創生』（萬生閣、一九二六年）において、マルクス主義についても、無政府主義者についても、本人自らが言及しているからです。以下に、その一部を引用します。最初はマルクス主義に関しての部分です。

マルクス主義の理論は、その有名な唯物史観に根をもつてゐる。

唯物史観といふのは、人間の一切の生産様式は、物質的事情、経済関係の如何によつて決定する。人間の社会生活の外観は勿論、その精神生活、政治、法律、道德、宗教、文藝、科学、哲学等も、すべて、その時代の経済組織を中心として變化する。といふのである。

(中略)

この生産関係の総和が、社会経済の骨組みをするので、法律、政治など、上部構造を作り上げる、眞實の基礎。また、それに相應する、ある社会的自覺を生む基礎。(『戀愛創生』、303 頁)

次に、無政府主義者についての部分です。

無政府共產主義者として數へらるゝものに、ブルードン、バクニン、クロポトキンがある。

ブルードンは、平等を強く主張した。境遇の平等、機会の平等等を。

ブルードンは、國家的支配を否定し、人間としての自由を熱望し、バクニンは、革命的無政府主義者として、革命の化身といはれ、人間平等の精神に立脚して、一切の特権制度に反対した。

彼の理想社会は、政府といふ組織を持たないばかりでなく、いかなる種類の制度をも持たなかつた。

(中略)

クロポトキンの思想は、「パンの略取」「相互扶助」等で有名である。(『戀愛創生』、335-336 頁)

なにゆえに高群は、明らかに虚偽なる言説を、晩年の一九五八(昭和三三)年に刊行した『女性の歴史』(下巻)に盛り込んだのでしょうか。あえて憶測すれば、「森の家」において学究生活に入る以前の自身のアナーキストとしての姿に蓋をして、人目から遠ざけたかったからなのではないのでしょうか。しかし、たとえそうであつたとしても、実際には、本や雑誌に書いた文まで消し去ることはできず、そう思うと、高群のこの仕業は理解に苦しみますし、もしこれが、編集者たる憲三の指示によるであつたとすれば、さらに不信は深まります。

(4) 同『女性の歴史』下巻、同頁。

(5) らいてう「元始女性は太陽であつた。——青鞞發刊に際して——」『青鞞』第1巻第1号、1911年、37頁。

(6) 高群逸枝『戀愛創生』萬生閣、1926年、253-254頁。

(7) 橋本憲三「三つの言葉——後記にかえて」『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1976年(第8刷)、483頁。

(8) 前掲『女性の歴史』下巻、286頁。

(9) 同『女性の歴史』下巻、同頁。

(10) 平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であつた③』大月書店、1992年、310頁。

(11) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、237頁。

- (12) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、236-237 頁。
 - (13) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、237 頁。
 - (14) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
 - (15) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
 - (16) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、242 頁。
 - (17) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、241-242 頁。
 - (18) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、242 頁。
 - (19) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
 - (20) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
 - (21) 前掲『愛と孤独と』、10 頁。
 - (22) 高群逸枝「家庭否定論」『婦人戦線』第 1 巻第 2 号、1930 年、婦人戦線社、22 頁。
 - (23) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、250 頁。
 - (24) 『高群逸枝全集』第九巻／小説／随筆／日記、理論社、1966 年、228-229 頁。
 - (25) 石牟礼道子「最後の人 4 序章 森の家日記（四）」『高群逸枝雑誌』第 4 号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969 年 7 月 1 日、23 頁。
 - (26) 高群逸枝『日月の上に』叢文閣、1921 年、78 頁。
 - (27) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、244-245 頁。
 - (28) 前掲『日月の上に』、248-249 頁。
 - (29) 高群逸枝『放浪者の詩』新潮社、1921 年、31 頁。
 - (30) 石牟礼道子「最後の人 1 序章 森の家日記（一）」『高群逸枝雑誌』第 1 号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968 年 10 月 1 日、22 頁。
 - (31) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012 年、356 頁。初出は、石牟礼道子「『最後の人』覚え書き（二）——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第 15 号、1977 年春季号、52 頁。
- しかし、本文に使用しています『最後の人 詩人高群逸枝』からの引用文のなかの「『大日本女性人名辞典』は逸枝の名で出されたが、研究に着手した彼女のカードを整理して憲三が書いたものであった。これを出版したときのパンフレットなどを読んでも」という字句は、対応する初出にはありません。のちに加筆挿入されたものと思われます。
- (32) 前掲『高群逸枝全集』第九巻、226 頁。
 - (33) 石牟礼道子「最後の人 第十一回 第一章 残像 2」『高群逸枝雑誌』第 23 号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1974 年 4 月 1 日、28 頁。
 - (34) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、242 頁。
 - (35) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
 - (36) 高群逸枝「みぢめな白百合花の話」『婦人戦線』第 2 巻第 6 号、1931 年、婦人戦線社、36 頁。
 - (37) 高群逸枝『昨今の歌』講談社、1959 年、46 頁。
 - (38) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、185 頁。
 - (39) 前掲『戀愛創生』、113 頁。
 - (40) 同『戀愛創生』、278-279 頁。
 - (41) 同『戀愛創生』、44-45 頁。

著作集 14 『外輪山春雷秋月』

火の国の女たち

——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞞の女たちとの友愛

第五章 高群逸枝の『婦人戦線』の廃刊と「森の家」での研究開始

(42) 前掲『高群逸枝全集』第九巻、239 頁。

(43) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、244 頁。

第六章 『大日本女性史 母系制の研究』の完成

一. 『大日本女性人名辞書』の刊行と「高群逸枝著作後援会」の発足

『大日本女性史 母系制の研究』に入るに先立って、高群は、これまで日本においてどのように女性史研究が進められてきていたのか、先行研究の状況を調べたものと思われます。それについての高群の認識はこうでした。

外国には、たとえばエンゲルスの「家族私有財産および国家の起源」とか、ベーベルの「婦人論」などの、いわば女性解放の聖典ともいっていいものがあつたが、わが国にはそれらしい学問の名に値するものといつては一つもなかつた。

(中略)

もっとも、たとえば河田嗣郎の「家族制度の発達」(明治四二)「婦人問題」(同四三)とか、堺利彦の「男女争闘史」(大正九)とかは、主として前記の外国文献等によつた尊敬すべき編著であるが、その日本史ないしは日本女性史的観察となると幼稚というほかないものであつた¹。

そこで高群は、このように考えました。

日本では、女性解放の思想や運動は、明治以降顕著になつたが、女性自体の被圧迫史ないし生活史については、ほとんどなんらの研究努力もはられていなかった。歴史を無視して現実の把握ないし未来の展望が可能であらうか。私はそう考えた。

(中略)

そこで私は、日本女性史をテーマとし、「女性史」という新しい学問の一分野の開拓——つまり、女性史学の樹立というようなことをかんがえた²。

次に高群は、「新しい学問の一分野の開拓」に向かうにあたって、その全体像を構想したにちがいありません。これについて高群は、一九三八(昭和一三)年に発表する『大日本女性史 母系制の研究』の巻頭の「例言」のなかで、以下のように、それを全五巻で構成したい旨の抱負を述べています。驚くべきことに、このような早い段階において高群は、自身の「女性史学」の全構想を示したのでした。ここに「高群史学」の全貌が姿を現わすことになります。

一、私が書かんとする女性史は、若しすべての事情が之を許すならば、次の五巻としたい考へである。

- 1 母系制の研究
- 2 招婿婚の研究
- 3 通史古代 国初より大化迄
- 4 同 近代 改新より幕末迄
- 5 同 現代 維新より現在迄³

本人も語っていますように、前半の二著が特殊研究、後半の三つの書物が通史研究ということになるでしょうか。実に壮大な計画です。しかし、ほぼこのとおりに、執筆が進んでゆきました。以下は、その実際の刊行書籍の一覧です。

- (1) 高群逸枝『大日本女性史 母系制の研究』厚生閣、1938（昭和13）年6月。
- (2) 高群逸枝『招婿婚の研究』大日本雄辯會講談社、1953（昭和28）年1月。
- (3) 高群逸枝『女性の歴史』上巻、大日本雄辯會講談社、1954（昭和29）年4月。
- (4) 高群逸枝『女性の歴史』中巻、大日本雄辯會講談社、1955（昭和30）年5月。
- (5) 高群逸枝『女性の歴史』下巻、大日本雄辯會講談社、1958（昭和33）年6月。
- (6) 高群逸枝『女性の歴史』続巻、大日本雄辯會講談社、1958（昭和33）年7月。

最後の『女性の歴史』の続巻が刊行されるのが一九五八（昭和二三）年ですので、「森の家」での執筆開始から悠々二七年の歳月をかけて全巻完結することになります。

こうした「高群史学」の構想のもと、第一巻に相当する『大日本女性史 母系制の研究』の完成へ向けての第一歩が、ここに踏み出されたのでした。

「森の家」への引っ越しから五箇月が過ぎたこの年（一九三一年）の一二月、『大百科事典』の編集のために、招かれて憲三が平凡社に復帰します。しかし、四年後の一九三五（昭和一〇）年の一〇月、『大百科事典』は完成したものの、経営不振に陥った平凡社は、突如として社員全員に解雇を通告します。これにより夫は失職するのです。それは収入が途絶えることを意味し、ふたりにとって大きな打撃となりました。そのとき夫婦のあいだで、このような取り決めがなされました。

- 1 あと三年で『母系制の研究』を脱稿すること。
- 2 現在の所持金千円で二カ年の家計を賄うこと。
- 3 研究費用には当分私の雑文稿料をもって当てる。
- 4 とりあえず女性人名辞書をまとめる⁴。

家計逼迫のおり、おそらく憲三の発案であったものと思われますが、この夫婦は、『大日本女性史 母系制の研究』の刊行に先立って、取り急ぎ、『大日本女性人名辞書』を世に出すことを考えました。次の引用は、それについての、逸枝による後年の説明です。「Kの協力」がいかなるものであったのかは、具体的に述べられていませんが、「印税収入が期待される」ことは、間違いなかったようです。

年があけて昭和十一年になると、私は K の協力をえて『女性人名辞書』の成稿を急ぐことにした。私のこれまでの主たる作業は、江戸時代以前の一切の歴史文献を片はしから読破して、系譜および婚姻記事を抽出することが中心であったが、副次的に史上の女性人名をカードにとっていた。いまそれを拡張活用して人名辞書としてまとめたら、今後の長い自己の仕事にとっても何彼と便利であるし、何より出版による印税収入が期待されるのだった⁵。

こうして一九三六（昭和一一）年の一〇月、厚生閣により『大日本女性人名辞書』が上梓されました。古今の女性およそ一千八百名が収録された、重量感を漂わす、本文六二三頁からなる大著でした。

高群は、女性を五二の項目に分類しています。「皇祖」「御宇」「神話」にはじまり、「大奥女中」「遊女」「美人」などを挟み、最後は、「婚姻」「母系」の項目で終わります。なかに「社会運動」の項目があり、ここには、官憲の手で最近虐殺されたアナーキストの「伊藤野枝」も入っています。また、「記者」の項目には、有島武郎と無理心中を図った「波多野あき子」も収録されていました。生没年は、初代天皇である神武天皇が即位したとされる年を元年とする紀年法（つまり皇紀）によって表記されています。たとえば、「伊藤野枝」の場合は「二五五五―二五八三」、「波多野あき子」の生没年は「二五五四―二五八三」です。他方、分類索引で注目されてよいのは、明治末以来関心が高まっていた、当時の用語法に従えば「男女」や「おめ」（今日的表記によれば性的少数者）は、項目として採用されることはありませんでした。高群が使用した史料に、それを思わせる女性についての記述がなかったのか、あるいは、あったとしても、何らかの理由があって高群の関心がそれへと向かわなかったのか、それはわかりません。

巻末の「跋」は、「黨地に引籠りましてより足掛六年、其間専念致して参りました著述の一部を『大日本女性人名辞書』と題しまして、刊行の運びとなりました事に就きましては、勿論私一人の力の能する處では無く、内にありては家主の庇護、指導に基づく所多く、外にあつては先輩知友の御聲援、御教導に歸すべき事は申すまでも御座いませぬ」⁶という言葉ではじまります。そして高群は、再び最後に、「石川ふき、今井邦子、嘉悦孝子、金子しげり、久布白落實、新妻伊都子、平塚らいてう、守屋東、安井哲、與謝野晶子、吉岡彌生」の諸氏の実名を挙げて、謝辞を述べます。

「夫の庇護と指導」が念頭にあったことは十分にうかがわれますが、それにしても、なぜいきなり冒頭に夫への謝辞を書いたのか、最後にまとめてもよかったのではないかと、そう思うと、少し違和感がないわけではありませんが、それにもまして、夫の憲三のことを「家主」と呼んでいることに、注目すべきかもしれません。『婦人戦線』の「綱領」のひとつが、「われらは男性専制の日常的事實の曝露清算を以て、一般婦人を社会的自覺にまで機縁するための現実的戦術とする。標語 男性清算！」⁷であったことを想起するならば、そこには歴然とした溝が認められます。しかしながら、そうした「男性清算」にかかわる逸枝の思いは、もはや過去のものであり、いまや敬愛すべき「家主」の座に憲三がいることが、これにより明らかになるのです。単に時局にあわせた仮の姿として「良妻賢母」を演じて見せているとは考えにくく、夫に対する逸枝の真なる思いがそこには表現されていたものと推量されます。しかしながら、前章の「高群逸枝の『婦人戦線』の廃刊と『森の家』での研究開始」のなかでも引用していますように、石牟礼道子は、「『大日本女性人名辞典』は逸枝の名で出されたが、研究に着手した彼女のカードを整理して憲三が書いたものであった」⁸と、指摘しています。もし、本文のみならず、この跋文にも憲三の手が入っているとしたら、どうでしょう。これまでの記述はすべて、振り出しにもどることになります。

そうでないことを前提にすれば、この「跋」は次の語句で結ばれており、そこに、高群の思いがにじみ出ているとみなしてもいいかもしれません。

なほ此書の甚だ不備である事に就きましては、今後の補正のため大方の皆様の御示教、御援助を得たく、それと共に前記「大日本女性史」も第一巻として「日本母系制の研究」を支障なき限り近く脱稿の筈で御座いますゆゑ、これが刊行の上は何卒御併讀たまわらんことをも、序でを以て御願ひ申上げて置く次第で御座います⁹。

ここに、「母系制の研究」の発刊がまちかいことが予告されていました。この予告は、自分たちの出自と来歴を「歴史学」というかたちにおいてはじめて知ることになる胸躍る予感を、多くの女性たちに与えたにちがいありません。すでに、一九三一（昭和六）年に『婦人戦線』は廃刊となり、翌一九三二（昭和七）年には『女人藝術』も同じく廃刊となっていました。かつての「プロ派」と「ブル派」の対立も、「アナ派」と「ボル派」の抗争もおおかた姿を消していました。ここに、婦人解放運動にかかわる女性たちが一様に手を結び、ひとつになって立ち上がる時代的な契機が潜んでいたように思われます。つまり、対立や抗争の焦点が、時局により失われていたのです。

こうして「高群逸枝著作後援会」が発足しました。呼びかけたのは、平塚らいてうと『東京朝日新聞』の竹中繁子でした。高群は、こう書きます。「この会は事務所を竹中さんのところに置き寄付および著作の普及等を目的として昭和十二年一月に発足し、その後私はすくなくならぬ便宜をあたえられることになったのだった」¹⁰。

呼びかけに応じ、発起人となった人は、六五名でした。ここに、女性たちの麗しいきずなの力強さのようなものが現われているように感じられますので、少し長くなりますが、「後援会」発足から一年半後に発刊された『大日本女性史 母系制の研究』の「跋」から引用して、以下に再録しておきます。

本書の基礎的準備を終る頃、豫期しなかつた家主の失業に遭遇し、一時前途暗黒の狀態に立到つた時、圖らずも私の爲めに著作後援會を作つて、苦境を救けられたのは友人諸氏の高義である。會（高群逸枝著作後援會）には、

市川房枝氏 生田花世氏 今井邦子氏 石原清子氏 原信子氏 長谷川時雨氏
新妻伊都子氏 帆足みゆき氏 甫守ふみ氏 細川武子氏 星野愛氏 徳富猪一郎氏
富本一枝氏 岡田禎子氏 奥むめお氏 加藤タカ氏 嘉悦孝氏 河崎なつ氏
金子茂氏 神近市子氏 ガントレット恒子氏 吉岡彌生氏 横山美智子氏 高楠順次郎氏
高島平三郎氏 竹田菊氏 竹中繁氏 竹内茂代氏 中河幹子氏 武藤千世子氏
村上秀子氏 村岡花子氏 野上彌生子氏 窪川稲子氏 久布白落實氏 山川菊榮氏
山本杉氏 丸岡秀子氏 松岡久子氏 松田解子氏 深尾須磨子氏 福島四郎氏
福島貞子氏 藤田たき氏 高良富子氏 圓地文子氏 佐藤俊子氏 木田開氏
木内キヤウ氏 北川千代氏 三輪田元道氏 三谷民子氏 志垣寛氏 正田淑子氏
島中雄三氏 島中雄作氏 下田次郎氏 下中彌三郎氏 白井喬二氏 平林たい子氏
平田のぶ氏 平塚明氏 平井恒氏 守屋東氏 千本木道氏

の方々が發起人とおなり下さつた。本書の漸く成るを得たのも一にこれ等の方々とび會に芳志をお寄せ下さつた二百餘家の賜物であることを感謝し、なほ最後迄お見届け賜はらんことを冀ふ¹¹。

この「高群逸枝著作後援会」からの支援金と『大日本女性人名辞書』からの印税収入とが追い風となって、逸枝と憲三は何とか苦境を脱しました。それは、「森の家」での生活が安定することだけでなく、高群の女性史研究の第一巻に相当する『大日本女性史 母系制の研究』がいよいよ完成へと向かうことをも意味するのです。

二. 「母系制研究」の意義と「多祖現象」の発見

「森の家」において研究生活に入っところを回顧して、高群は、以下のように書いています。

この家に移り住んだ昭和六年ごろから、満州事変、犬養首相暗殺、労働者、社会主義者、学者の受難が相ついでいて、日本は反動亡国への道を一気に突き進みつつあったが、この事件〔二・二六事件〕で、それはもはや決定的なものとなった。

私はこのような祖国の危機、恩師の物故、Kの失業等を苦難の序幕としながらも、自分に与えられた女性史学樹立への一途を是が非でも進まねばならない、せっぱつまった境遇に置かれた¹²。

一方、執筆当時、「母系制」について高群は、このように考えていました。

母系制度というのは、家系が母方によって相続される制度で、原始社会が母系であったか父系であったかについては、久しく論議されたところであるが、こんにちでは母系説が学会で有力とみられている。マグレナン、モルガン等の説では、古代の雑婚時代には、人は母あることを知っても父あることは知らない。これが母系の淵源であるというのである。……そこで問題は、わが日本に母系制度の時代があったか否かということである。このことはこれまで男性史家の研究の手がまだまわりかねていて、女性史家のために未開拓のまま残されている処女地である¹³。

母系制を明確化する手立ては、どのように親から子へ継承がなされたか、その系譜を明らかにする研究と、婚姻がどのような制度として成り立っていたのか、その仕組みを明らかにする研究とから成り立つというのが、高群の考えるところでした。高群は、女性史研究の全構想（全五巻）のうち、第一巻の「母系制の研究」において日本における原始母系制の存在を発掘し、続く第二巻の「招婿婚の研究」において、そこにおける婚姻制の実態を解明しようとしたのです。もしそのことが、明確化されることになれば、日本の国家の成り立ちとその後の中央統制には、高群の言葉を借りれば、「女性の秘められた犠牲と奉仕」とが、その基盤として存在していたことになります。高群は、この自らが構築した仮説を自らの手で実証すべく、まずは初手として「母系制の研究」へと入ってゆくのです。

高群は、研究の過程であって、本人の言葉によれば、「天啓」に遭遇します。それは、古代系譜に残る多祖現象の発見でした。高群は、天からの啓示である「一瞬のひらめき」について、このように、回顧しています。

一瞬のひらめき——原始の母系共同体の女たちのもとに、招婿婚で他から男たちが妻問いして、そこに、多くの子が生まれて育ったとなると、その母系共同体には、同時に、またはつぎつぎに多くの他氏の子孫が生まれそだち、一方において父系認識がたかまってくると、氏称には固有母系を名乗りながら、父系である招婿出自によって多祖現象をおこすのであり、それは母系共同体解体の過程をあらわしているものではないかとする考えであった¹⁴。

こうして「母系制の研究」の核心部分が生み出されたのでした。

しかしその一方で、「高群逸枝著作後援会」からの温かい支援の手とは逆に、別の手が背後に存在し、強大な暗雲となって立ち込めていたのです。一九三八（昭和一三）年四月一〇日の日記に、こう記されています。

昨日、特高検閲からの出頭通知書を駐在お巡りさん伝達。きょう K が代わって世田谷警察署を訪ねると、警視庁の著述家調査ということで、代人ではいけないということだったが、K は当人は外出不可能だといい、けっきょく用件をすまして帰ってきたという。

これは学問、思想弾圧の深刻化を意味するものだろう。

この夜おそく、『母系制の研究』脱稿。表題を加えて千二百枚か¹⁵。

三. 『大日本女性史 母系制の研究』の刊行とその概要

それから二箇月後の一九三八（昭和一三）年六月に、『大日本女性史 母系制の研究』が、前書の『大日本女性人名辞書』と同じ書肆の厚生閣から世に出ました。副題の「母系制の研究」の背表紙の文字は、あたかも人目を避けるかのように、目立たぬ小さな文字で組まれています。一九四一（昭和一六）年七月刊行の再版は、初版と変わりありませんでしたが、戦争が終わってしばらく立った、一九四八（昭和二三）年十一月の訂版三版において、主題と副題が入れ替わり、『母系制の研究 大日本女性史第一巻』へと改題されるのでした。初版と再版の『大日本女性史 母系制の研究』の題簽は吉岡彌生の揮毫によるものでした。しかし、訂版三版の題字は活字で組まれ、しかも、副題の「大日本女性史第一巻」には、ほとんど目につかないほどの小さな活字が用いられました。戦前にあつては、「大日本女性史」が強調され、戦後にあつては、「母系制の研究」が前面に出ます。戦争を挟む前後の際立つ特徴をこの書題は担うことになったのです。

この著作も、前書と同じく、六四九頁に及ぶ浩瀚なものでした。高群は、「例言」のなかで、研究の方法、本書の構成、および研究の意義について述べます。ここに、その核心部分を抜き出してみます。

私の研究は、古文献に埋蔵されたる母系的遺産を發掘組織化し、これを系譜と婚姻の両面より觀察したものである。……私の取つた方法は、これを（一）多祖の研究、（二）複氏の研究、（三）諸姓の研究、（四）賜氏の研究に大別し得るが、一言に要約すれば、

すべてを多祖説とすることができる。この多祖説こそ、私が學界に問はんとするものである。……この研究は、次の三つの意義を含んである。其一は、上代における家族性の問題であり、他の一は、母系的遺習が國家の中央統制として、之を比較的平和裡に進捗せしめた隠れたる要因をなしている事實である。……このことは第三に、わが國民の血の歸一を物語るものである。女性史の第一歩において、すでに母系の犠牲と支持による國家の統制乃一家族化といふ必然の結論に達した私は、以後の發展において恐らくは女性の秘められた犠牲と奉仕との絶大なる貢獻を顕彰することが出来るであらう¹⁶。

ここに言及されている「多祖説」と「わが國民の血の歸一」とが、本書の主要な結論に相当します。この本は、「第一篇 緒論」「第二篇 本論」「第三篇 結論」から構成され、「第三篇 結論」も、「第一章 國作り氏作り部作り」「第二章 母系姓より父系姓への變化過程」、そして「第三章 吾等の收穫」の三つの章から組み立てられています。「第三章 吾等の收穫」のなかで、高群は、第一節で「多祖説」を、そして第二節で「血の歸一」を語ります。「血の歸一」について、その一部を引用して、以下に示します。高群の『大日本女性史 母系制の研究』の結論部分として、最も重要な箇所であると思われます。

此世のこと皆正し、母系より父系への推移は黨然の發展である。母系は保守的排他的な血族團體であり、父系は進歩的抱擁的婚姻團體である。社會の推移はすべて此線に沿つて流れるであらう。

ここに吾等は、偉大なる日本父系の進歩的態度——凡ゆる異族、蠻民等と進んで婚姻し、彼らを完全に自系下に結合し、國作り、氏作り、部作りをなしたこと、或いはまた、なさざるを得ない天與の事情にあつたことを限りなく喜ぶものである。

(中略)

氏姓の進化は云ひかへれば系譜の一姓化である。我國ではいかなる異族も歸化人も、その母系の犠牲と支持によつて系譜的に、明文的に、相率ゐて皇別化し、神別すを得た。すなはち、一姓化への方向に促進せられた。次に血の純化は前に述べた血の歸一をいふ。

これを要するに、系譜においては一姓化、血においては歸一、著者、これをもって、吾等の收穫の最後のものとする¹⁷。

このように高群は、本書の最後を結んでいますが、高群が没したのちに夫の憲三が編んだ『高群逸枝全集』の第一巻「母系制の研究」からは、この「第三章 吾等の收穫」は削除されており、もはや読むことはできません。憲三は、この巻の「解題／編者」のなかでこう書いています。

……この「母系制の研究」は最初の出版社厚生閣で三版まで重ね、後に講談社から厚生閣原版紙型による鉛版象嵌の手続きをもって新訂版（四版）が出た。

全集にはこの新訂版を収めた¹⁸。

この説明から判断しますと、一九五四（昭和二九）年に大日本雄辯會講談社から刊行された新訂版（四版）において、すでに「第三章 吾等の收穫」は削除されていたことになりま

す。事実、削除されていますし、さらに、奥付によりますと、本書は「新訂版（四版）」ではなく、「新版」という用語が使用されています。しかし、上の引用文の出典を示した注に続く次の注のなかにおいて具体的に述べていますように、実際には、一九五四（昭和二九）年に大日本雄弁会講談社から刊行された新訂版（四版）、すなわち新版に先立つ、戦後すぐの一九四八（昭和二三）年十一月に恒星社厚生閣から刊行された改訂三版において、すでに削除されていたのです。なぜ削除されなければならなかったのでしょうか。当時の高群の思想のすべてが、この部分に投影されており、戦後の価値観とは相容れない内容だったからではないかと推量されます。であれば、本書の真の結論、つまりは「吾等の収穫」というのは、一体何だったのかということになります。別の言葉に置き換えるならば、「多祖説」と「わが国民の血の歸一」を抜きにして、この『大日本女性史 母系制の研究』は、本論と結論のあいだで齟齬を来たすことなく、一貫した論理的安定性のもとに成立しうるのかという疑問が残るのです¹⁹。

『大日本女性史 母系制の研究』の序文は、高群にとって同郷人であり、「皇室中心以外には一億一心の団結はあり得ないとする信念」²⁰をもつ徳富蘇峰の手にゆだねられました。高群は回顧します。「徳富蘇峰の序文が、私の『母系制の研究』を発禁から護ってくれたことは疑いなかった」²¹。思いもよらず、結果的に「護ってくれた」のか、そうではなく、そうなることを期待して執筆の依頼が徳富になされたのか、これもまた、検討の余地を今後に残すのかもしれませんが。いずれにしましても、活字ではなく、毛筆の書になるこの序文も、最終的に、『高群逸枝全集』第一巻の「母系制の研究」から姿を消すことになるのです。

一方、巻末には、「紹介辞」が収録されました。これは、「高群逸枝著作後援会」作成の近刊案内にかかわる印刷物に寄せられていた推薦文を再録したものでした。執筆したのは、麻生正藏、市川房枝、尾崎行雄、金子しげり、下田次郎、下中彌三郎、高嶋米峰、竹内茂代、竹田菊、新妻伊都子、福島四郎、三木清、吉岡彌生、らいてうの各氏でした。

そのなかのひとりである下中彌三郎は、以下の引用のとおりに書いています。かつて平凡社時代に下中は、高群の長編詩『東京は熱病にかゝつてゐる』に、「読んで下さい——序に代へて」を寄稿しており、高群にとっても、また、平凡社での勤務歴のある夫の橋本にとっても、下中とは旧知の間柄でした。

高群さんを私はよく知っている。……不遇なる民間學徒の例に洩れず、貧しい中から研鑽を積まれるのは、想像以上に骨が折れることと思ふ。

此人の潑刺たる祖國認識と祖国愛は、かつての長篇詩や論文の何れの部分にも脈搏つてをる。高群さんが、日本女性史を作ることは黨然である²²。

哲学者である三木清の文は、このようなものでした。

久しく待望されてゐた日本女性史が愈々世に出ることになつたのは悦ばしい。これは日本の一女性が日本の全女性のために建てる記念碑である。

殊にその第一巻は母系制といふ最も興味深いテーマを取扱ひ、學界の宿題に解答を與へてゐる。

家族制度は今日思想上においても重要な問題になつてゐるのであるが、この篤學な著者の多年の苦心の研究に成る業績は凡ての人によつて顧みられねばならぬものと信ずる²³。

のちに高群は、唯一この三木の推薦文を、『高群逸枝全集』第一〇巻の「火の国の女の日記」のなかにおいて全文引用し、紹介することになります。晩年に至るまでこの一文は、高群の心を支えていたものと思われまゝ。

らいてうも、以下のような、全身から湧き出る讃美の言葉を、「畏友、高群逸枝」へ贈ります。

畏友、高群逸枝女史、久しき以前より我が國に眞の女性史なきを慨嘆し、昭和五年、大發願を起し、爾來その研究、編纂に全生活を没入し、獨力、奮勵、今日に至つたことは、すでに世に知られてゐます。一昨年、女性史に先立ち、その副産物「大日本女性人名辭書」を上梓、朝野を驚嘆させましたが、今回いよいよ、その本願である女性史、第一巻、出版の運びとなりましたことは、慶賀の極みで、女史を知り、女史の胸中を察しうるわたくしは、まことに感慨無量、言うべき辭を見出しません。

女性自身、女性の立場から書いた女性史が、いかに意義あるものであるか、今更言ふまでもありませんが、特に女性の中の女性、高群女史その人によつて書かれたことを一層のよろこびとし、こゝに二重の意義を見出すものであります²⁴。

らいてうは、これに続く、「早く、早く本の顔を見たく、その日が待たれます」の一語でもって、自身の「紹介辭」を結ぶのでした。この本が手もとに届くや、すぐにも目を通したことでしょう。そしておそらく、らいてうの頬には、感涙が伝わったにちがいありません。以下は、短いながらも、らいてうによる回想の一節です。

高群さんのこの研究〔「母系制の研究」「招婿婚の研究」その他〕によって、明治四四年「青鞞」の創刊に際して、わたくしの内部から噴きこぼれるようにして叫ばれた「元始、女性は太陽であつた」という言葉に学問的な実証が与えられることになったのです²⁵。

四. 学会のなかでの『大日本女性史 母系制の研究』

『大日本女性史 母系制の研究』は、あくまでの學術の書として書かれたものです。しかも、いまだ日本でなされることのなかった研究内容であるだけに、高群にとっては、学会からの反応が気になるころであつたものと思われまゝ。高群は、この研究を發表することによって、まさしく具体的に、學術世界と接点を結ぶようになりました。こう高群は書いています。

私はこの書の刊行によって、いわば直接的な若干の知己を恵まれることになった。穂積重遠博士（東大教授）、太田亮教授（立命館大）、柳田国男さん（民俗学）、喜田貞吉博士（東北大・京大）、穂積先生の紹介による、中川善之助教授（東北大）等がそれであ

り、ほかにも高島米峰（後の東洋大学長）、麻生正蔵（前日本女大校長）、相馬黒光（中村屋マダム）、尾崎行雄さん等の知遇をも受けることになった²⁶。

しかしながら、高群の研究には、喜田、太田、柳田らの学説や見解にとって相容れない部分が含まれていました。高群は、個々の学者について、以下のように書き記しています。

当初喜田貞吉は、本書を『歴史地理』に紹介する意向を示しながらも、それが実現しなかったのは、「私の招婿出自説……に対して、仮冒説を主旨とされる喜田博士が困惑されたからではないか」²⁷と、高群は推測しています。太田亮については、「単純に父系の視点から古系譜を解釈している」²⁸太田の研究と本書とのあいだには、対立する点が多くあったことを認めています。高群は、こう振り返ります。

これらのことは後進学徒として避けがたいことで、とくに未開拓の女性史学の視点から当然従来のあらゆる学説を破って独自の学説を樹立せねばならない必至的な宿命にある以上、諸先輩の学恩は学恩としても、自説は率直に表明されねばならない。幸いに喜田さんも、太田さんも、最後まで私の研究に好意を寄せられたことは感謝にたえない²⁹。

それでは、柳田国男については、どうだったのでしょうか。高群は、このときの柳田から送られてきた手紙を紹介します。「あなたのような筆の力の大きい方に近世日本女性の辛苦を世に紹介していただきたい希望は切です。私のもつ資料は何でも利用に供します」³⁰。しかし、招婿婚しょうせいこんに関する資料の問い合わせについての柳田からの回答は、「招婿婚という語は私は賛成しません。私の『聳入考』をご覧になりましたこのなかに私の意見かたっています」³¹というものでした。

ここで柳田がいつている「聳入考」とは、『母系制の研究』の刊行からさかのぼること九年前の一九二九（昭和四）年に岡書院から上梓されていた『三宅博士古希祝賀記念論文集』に所収されていた柳田の論文「聳入考——史學對民族學の一課題——」を指します。「聳」は「婿」の俗字です。「むこ」や「むすめの夫」を意味します。したがって、「聳入」は、聳に入る男性を主体とした用語で、「招婿」は、婿を招く女性を主体とした用語になります。立場が異なります。それについて、高群は、こう述べています。

お手紙のなかに、招婿婚の語に賛成できないとあるのは、柳田さんの母系制や母系婚を否定する考えかたから出ているもので、それは私とは根本的に異なる見解だった。だから後に私は『招婿婚の研究』で柳田学説を批判することになるが、これも学者としての私にとってはやむを得ないことだった³²。

他方で高群は、当時の民法の概念を穂積重遠の著書『親族法』から学び、穂積が紹介した中川善之助からも、家族についての法制度にかかわって多くを学びました。

こうして、在野研究者、あるいは独立研究者としての見事なデビューを果たすと、高群は、次の第二巻「招婿婚の研究」に着手します。そこには、膨大な資料が横たわっていました。

第一に江戸期以前の全文献を対象とし、第二に考古、民俗、法制その他の隣接諸学から先人の報告等を対象とするものだった。その蒐集と消化が先決だった³³。

そこで高群は、「以前からのやりかたに、さらに鉄のたがをはめた。自分に鉄の規律を課したのである。労働時間は一日平均十時間をくだらないこと。面会は原則として謝絶することが再確認された」³⁴。かくして高群は、「鉄の規律」で身を固め、次の目標である「招婿婚の研究」の完成に向けて再出発するのでした。

その一方で、「森の家」の外に耳を向けると、自由や学問から大きくかけ離れた、そして、高群の幻の本の題名であった「強権に抗す」ことなどもはや許されない、軍靴の轟音がありました。こうして、『大日本女性史 母系制の研究』の再版が世に出て五箇月後の、一九四一（昭和一六）年一二月、日本はアジア・太平洋戦争へ突入するのでした。

注

- (1) 高群逸枝『愛と孤独と』理論社、1958年、9-10頁。
- (2) 同『愛と孤独と』、9-10頁。
- (3) 高群逸枝『大日本女性史 母系制の研究』厚生閣、1938年、1-2頁。
- (4) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1976年（第8刷）、256-257頁。
- (5) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、257頁。
- (6) 高群逸枝『大日本女性人名辞書』厚生閣、1936年、「跋」の1頁。
- (7) 『婦人戦線』第1巻第1号、1930年、婦人戦線社、4頁。
- (8) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、356頁。
- (9) 前掲『大日本女性人名辞書』、「跋」の4頁。
- (10) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、261頁。
- (11) 前掲『大日本女性史 母系制の研究』、「跋」の2-3頁。
- (12) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、259頁。
- (13) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、263頁。
- (14) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、251頁。
- (15) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、271頁。
- (16) 前掲『大日本女性史 母系制の研究』厚生閣、1938年、2-3頁。
- (17) 同『大日本女性史 母系制の研究』、637-638頁。
- (18) 橋本憲三「解題／編者」『高群逸枝全集』第一巻／母系制の研究、理論社、1974年（第6刷）、1頁。
- (19) ここで指摘しています、私が抱く疑問につきましては、本文に書くには冗長に過ぎ、読み手の迷惑になることに思いを致し、この場を利用して、愚考を承知のうえでの私見として述べるに止めさせていただきたいと思います。

本文においてすでに記述していますように、実際に『大日本女性史 母系制の研究』の「第三章 吾等の収穫」が削除されたのは、一九五四（昭和二九）年に大日本雄辯會講談社から刊行された新訂版（四版）、すなわち新版に先立つ、戦後すぐの一九四八（昭和二三）年一

一月に恒星社厚生閣から刊行された改訂三版においてでした。このことについて高群は、この改訂三版の「例言」のなかのひとつの項目において、このように触れていますので、以下に引用します。

一、本書は昭和一三年六月四日初版第一刷、一六年七月二〇日再刷、今回は第三刷である。第三刷は、初版第三篇の第三章を除きたるほか全體にわたって若干の改訂を施したが、それは主として、たとへば「母系」といふ文字すらややもすれば伏字しなければならなかった初版発行当時の社會状況を顧慮するあまりなされた學術書にはふさわしくあらぬ贅語的表現を整理したのであつて、内容的變化はない。

高群は、ここにおいて、「初版第三篇の第三章を除きたる」事実については言及していますが、その理由については直接の明言を避け、「初版発行当時の社會状況」をほのめかすのでした。畢竟この示唆は、「第三篇 結論」の「第三章 吾等の収穫」は、自身の意に反して、「初版発行当時の社會状況」にやむなく身をゆだねて書いたまでのことであつて、ここで抹消しようと、それによって大きな「内容的變化はない」、ということを含意することになります。しかしながら、本文においても引用していますように、事実、『大日本女性史 母系制の研究』初版の「例言」のなかで、高群は、こう書いています。

私の研究は、古文献に埋蔵されたる母系的遺産を發掘組織化し、これを系譜と婚姻の両面より觀察したものである。……一言に要約すれば、すべてを多祖説とすることができる。この多祖説こそ、私が學界に問はんとするものである。……この研究は、次の三つの意義を含んでゐる。其一は、上代における家族性の問題であり、他の一は、母系的遺習が國家の中央統制として、之を比較的平和裡に進捗せしめた隠れたる要因をなしている事實である。……このことは第三に、わが國民の血の歸一を物語るものである。

ここから判断しますと、「第一節 多祖説」と「第二節 血の歸一」とから構成される「第三章 吾等の収穫」は、『大日本女性史 母系制の研究』（初版）の中心となる考察と結論の部分であり、同時に、本書最大の「収穫」の部分である以上、「初版発行当時の社會状況」に従つて不本意ながらも書いてしまったことを示唆する高群の言辭は、どうしても説得力を欠くものといわざるを得ません。裏を返せば、『大日本女性史 母系制の研究』（初版）を書いた戦前の高群は、「多祖説」と「血の歸一」を本心から信ずる歴史家であり思想家であつたのではないかということです。したがいまして、戦後すぐの一九四八（昭和二三）年十一月に恒星社厚生閣から刊行された改訂三版において「第三章 吾等の収穫」を削除せざるを得なかった高群は、歴史家として思想家として、大いなる敗北に見舞われたことになったものと思われまふ。

しかしこのとき味わた「苦杯」は、逆の見方に立てば、戦前思想から脱却し、戦後思想のなかでこれから生きてゆこうとする、高群にとっての内なる一種の契りを意味する、ささやかなる「祝杯」だったかもしれません。といいますのも、初版（一九三八年刊）および再版（一九四一年刊）にみられる『大日本女性史 母系制の研究』が、この改訂三版において、『母系制の研究 大日本女性史第一巻』に改題され、研究内容を直接言い表わした「母系制

の研究」を前面に出すことができたからです。初版と再版の「大日本女性史」の一文字に、おそらく高群は、「皇国女性の歴史」ないしは「大日本帝国女子の歴史」を含意させていたものと思われます。しかし改訂三版において、こうして完全に主題と副題が入れ替わるのです。もっとも、「大日本女性史」の文字はいまだ残されましたが、それは、もはや目立たぬ小さな活字で組まれていました。ここに高群の、戦前思想からの解放の一步を読み解くことができます。この改訂三版において、書名の変更、「第三章 吾等の収穫」の抹消、それだけではなく、巻頭の徳富蘇峰の「序文」、および巻末の「紹介辞」もまた、削除されたのでした。

そのことは、次のことを意味します。編集をした橋本憲三の説明に従うならば、『高群逸枝全集』第一巻の「母系制の研究」を上梓するに当たっては、一九五四（昭和二九）年に大日本雄辯會講談社から刊行された新版が使われました。したがって、『大日本女性史 母系制の研究』の初版ないしは再版に立ち返らない限り、本書の結論の一部である「吾等の収穫」も、徳富蘇峰の「序文」も、一四名の支持者たちが書いた「紹介辞」も、残念ながら、もはやこの「全集」第一巻からは、うかがい知ることができない状況が作り出されてしまったのでした。

他方、一九五四（昭和二九）年に大日本雄辯會講談社から刊行された新版の跋文には、従来のそれへの加除が認められます。加えて、改訂三版までの跋文においては「高群逸枝著作後援会」の発起人として六五名の名前が挙げられていましたが、新版の「跋」におきましては二〇八人の名が挙がっています。しかしながら、新版の跋文において、そうした加筆訂正への言及はありません。それどころか、執筆日が「昭和十三年春」となっており、初版と再版にみられた皇紀による表記である「二五九八年五月」、改訂三版にみられた元号による表記である「昭和十三年五月」と、表記の違いはあるものの、実質上同じ年月になっています。したがって、新版をはじめて手にする読者にあつては、新版の「跋」をもって初版の「跋」と思い違いをする人も多かったのではないかという危惧も残ります。

いずれにしても、初版（一九三八年、厚生閣刊）と再版（一九四一年、厚生閣刊）の『大日本女性史 母系制の研究』、続く戦後の改訂三版（一九四八年、恒星社厚生閣刊）の『母系制の研究 大日本女性史第一巻』——こうした先行するどの版のなかにも認められた「大日本女性史」という文字は、新版（一九五四年、大日本雄辯會講談社刊）に至って完全に消し去られ、新たに単独の『母系制の研究』という書名に変わったのでした。このときすでに、初版発行から戦争を挟み一六年の歳月が流れていました。かくして書名改変の道程をたどりながら、やっこの新版において高群の戦前思想の払拭は完結したものと推量されます。そして、この系譜の最後に、その恒久的とどめとして、夫の橋本憲三が『高群逸枝全集』第一巻「母系制の研究」（一九六六年、理論社）を編むことになるのです。もっとも、その巻の末尾に付された「解題／編者」において、書題が改変されてきたこの間の経緯についても、「第三篇 結論」のなかの「第三章 吾等の収穫」が削除されなければならなかった事情についても、沈黙が貫かれ、その真相が明かされることはありませんでした。書名改変の歴史的系譜の最前列に立ついま、あえてこの場に及んで過ぎた昔の事象に言及する必要もなく、編集者の立場からすれば当然の処置だったのかもしれない。「解題／編者」において、橋本は、こう書きます。

全集の収録にあたっては、全巻についていえることであるが、保存原稿やその後の著者の書き入れ等を通じて校正がなされた。ほとんど単純な誤記誤植の類で論旨にかかわるものではない。

しかしながら、著者や編集者の対極にある読者や研究者の側に立てば、その言辞は、高群と橋本の夫婦が宿しもつある種の不誠実さを例証するものでしかないように思われます。

こうして、かつて改訂三版において短い削除表明はなされていたというものの、新たに「全集」を編集するに当たってのいかなる経緯説明をも抜きにしたまま、「第三篇 結論」の「第三章 吾等の収穫」が抹消された『高群逸枝全集』第一巻「母系制の研究」が刊行されたことによって、隠されてしまった負の遺産がここに最終的に確定したのでした。皇国史観が強く支配する戦前と、生まれ変わった新生日本の戦後とを必死に生き抜いた一学徒と、それを支えた夫たる編集者のやむにやまれぬ現実的な対応の仕方であったであろうことは十分に推察されうるものの、それでもあえていえば、その編集手法は、「全集」が本来的に持ち合わせなければならない信頼性を結果的に毀損しかねない、できれば避けなければならない「禁じ手」だったのではないのでしょうか。

以上は、最初に初版を手にし、次に「全集」に目を向け、そこでふたつの版の齟齬に気づいた私は、再版、改訂三版、新版にたどり着き、その過程で個人的にもつに至った印象を書き綴ったものです。読者のみなさまにはわずらわしい、異例の長い注記になってしまいましたが、自身の記憶が遠ざかる前に、ここに忘備録として書き記しておくことにしました。なお、初版、再版、改訂三版、および「全集」は、熊本県立図書館に所蔵されているものを使い、新版につきましては、国立国会図書館のデジタルコレクション（個人送信）を閲覧いたしました。

最後の最後に、ここまで駄文を書き連ねたついでに、同郷のよしみという一方的な私の思いのもと、考えられうる最大の敬愛を込めて、逸枝さんと憲三さんに一筆啓上させていただきます。

逸枝さんに申し上げます。あなたの戦前思想の払拭の仕方は、決して適切ではなかったように、この私には感じられます。少しずつ書題や例言や跋文を書き換えていたり、何のはっきりとした断わりもなく途中で序文や結論や紹介文を削除したりする行為は、明らかに姑息としかいいようがありません。本来的になされなければならなかったことは、戦後すぐに恒星社厚生閣から出版の機会が得られたとき、その本を、初版および再版を引き継ぐ『大日本女性史 母系制の研究』の「改訂三版」とするのではなく、完全に書き改められた『母系制の研究』の「初版第一刷」とするべきであったと思います。つまり、内容的には、あなたが述べる「初版発行当時の社会状況を顧慮するあまりなされた学術書にはふさわしからぬ贅語的表現」を廃すると同時に、「第三篇 結論」のなかの「第三章 吾等の収穫」を抹消することはいうに及ばず、それらすべてに投影されていた戦前の思想とその寄って立つ立場を溶解せしめ、それに取って代わるところの新たな視点に全面的に依拠して緒論、本論、結論を論理的一貫性のもとに書き改め、真の意味での学術書にふさわしいものとし、そのうえで、たとえば「はじめに」において、明快な理由を付して、初版および再版を破棄することを宣すべきであったと考えます。当然ながら、ここには初版および再版に所収されていた徳富蘇峰の「序文」も、巻末に添付されていた「紹介辞」も「跋」も、もはやありません。

なぜ、こうした『母系制の研究』の「初版第一刷」が、このとき生まれなかったのか、私には悔やまれてなりません。といいますのも、これが、そのまま「全集」に収められていれば、今日に至るまで、これについてのいかなる疑義も挟まれる余地を残すことはなかったのではないかと思われるからです。

述べてきましたように、戦前思想の払拭という点において、あなたは「火の国の女」に似合わず、決然たる態度をおとりになりませんでした。それを私はとても残念に思います。しかし、もし仮に、これが憲三さんという編集者の意向に無批判に従った結果であったとすれば、どうでしょう。その場合、あなたは著作者としての自立性を自ら放棄したことになります。それは、「著述の死」を意味するものではありませんか。私は、あくまでも「著述の詩」を貫いてほしかったと思います。

次に、憲三さんに申し上げます。たとい妻であろうとも、著述家である逸枝さんの著作を「全集」として編集する際の、あなたのその手法は、適切ではなかったように私には感じられます。逸枝さんの生涯にわたる活動は、誰が見ても明らかなように、事の順番からいえば、最初に詩人としてのそれがあり、次にアナキストとしてのそれがあり、そして最後に、女性史研究者としてのそれがありました。それであれば、なぜ活動の編年的推移に従うかたちで、著述物を並べようとされなかったのでしょうか。いまの『高群逸枝全集』（全一〇巻）の構成を見るにつけ、女性史研究者としての業績が全面的に前に出て強調されるあまりに、逸枝さんの活動の年代記的な諸相が見えづらく、一目で逸枝さんの全体像を把握することが困難な状況になっているのです。

とりわけアナキストとしての逸枝さんの活動部分が、この「全集」からおおかた消えていることが気になります。もしそれが、意図的なものであったとすれば、「全集」に値しない、編集者の好みによる個人的「選集」ということになりかねません。たとえば、すでに『婦人戦線』誌上の解放社の広告において、近刊が公表されていた『強権に抗す』などは、逸枝さんがアナキズムをどう考えていたのか、その立場から何をどう論じていたのかを知る一級の資料になるはずです。内容目次も価格も予告されていたわけですから、仮に発売に至らなかったとしても、間違いなく原稿そのものは存在していたでしょう。そうであれば、なきものとして闇に葬らず、真実の逸枝さんに接したいという人たちの願望に答えて、ぜひとも「全集」に入れてほしかったと思います。といいますのも、ひとりの優れた著述家の「全集」というものは、最後には編集者の手を越えて、すべての人にとっての貴重な共通遺産として社会的に存在することになるにちがいないと、私自身信じているからです。

ところで私は、この「火の国の女たち」を書くに当たり、年代順に当時刊行された逸枝さんの著作に目を通し、そこから、必要に応じ自身の文に引用してきました。しかし、『日月の上に』にしても、『東京は熱病にかゝつてゐる』にしても、『戀愛創生』にしても、あるいは、それ以外のものにしても、多い少ないは別にして、初版原本とは異なり、「全集」にあっては、至る所で語列が入れ替わったり、文字が削除され、別の語が挿入されたりしていることに気づかされました。誤記誤植の修正や旧字体から新字体への変更を越えた手の入れ方です。いかなる積極的な理由があって、そうした加筆や改変がなされたのでしょうか。「解題／编者」を見ても、ほとんど何も言及されておらず、しばしば、首をかしげてしまいました。これでは、逸枝さんの作品を下敷きにした、憲三さんご自身の手になる新しい別形作品といわれても、仕方がないのではないのでしょうか。また、詩集でいえば、「全集」からは『戀

唄 胸を痛めて』が割愛されています。あなたは、第八巻の「解題／編者」において、この本について、このように書いています。「こんど本全集のために古書市場をはじめいろいろ心あたりを捜しても発見できなかった」。しかしいま私は、国立国会図書館のデジタルコレクションを利用して、あなた方の住まいである「森の家」ならぬ、火の国阿蘇の寓居にいながら、胸を痛めつつ、この『戀唄 胸を痛めて』を閲覧しているのです。

正直に申し上げて、やっこの、第六章『大日本女性史 母系制の研究』の完成」まで書いてきた時点にあって、私は、あなたが編集された「全集」への信頼喪失を余儀なくさせられました。しかし、擱筆まで、もう少し書き続けなければなりません。それには、とりわけ『高群逸枝全集』第一〇巻の「火の国の女の日記」は、欠かせない価値ある資料となります。その「解題／編者」には、「著者は、一九六三年九月五日、病床にあってこの筆をおこしたのであったが、脱稿にいたらず、最後の一部分をのこして、翌六四年六月七日に急逝した。この部分は彼女の希望によって彼女の夫が補結した」とあります。このように、この「火の国の女の日記」と題された自叙伝は、明らかに、未発表の書き下ろしの文です。したがってそのことは、自身の執筆に当たって、初版原本と突き合わせてその異同を確認するようなことなどできようもなく、ここに書かれてあるすべてを信用するしかないことを意味するのです。事実から離れた、いかなる編集者の恣意的手も加わっていないことを切に願いたいと思います。といいますのも、もしそのようなことがなされていれば、ひたすら虚像だけが残し、永遠に逸枝さんの真実の姿は、私たちの目から消えてしまうことになりかねないからです。

慣例を大きく逸脱してまでも、やむにやまれぬ思いでもって、「最後の最後」として書き連ねてきました超駄文を、これにて終わります。逸枝さんの『大日本女性史 母系制の研究』を巡る戦前思想の払拭行為の問題、憲三さんの『高群逸枝全集』を巡る編集手法の妥当性の問題につきましては、このあと第一二章の「夫による『高群逸枝全集』の編集と石牟礼道子の高群継承の決意」におきまして再び話題にしたいと思います。そのときまでに、ふたりを見る私の目も、全面的な嘆きから脱して、幾分かの共感に変わるかもしれません。それであればいいのですが。

(20) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、275 頁。

(21) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。

(22) 高群逸枝『大日本女性史 母系制の研究』厚生閣、1938 年、「紹介辞」の 4 頁。

(23) 同『大日本女性史 母系制の研究』、「紹介辞」の 8 頁。

(24) 同『大日本女性史 母系制の研究』、「紹介辞」の 10 頁。

(25) 平塚らいてう自伝『元始、女性に太陽であった③』大月書店、1992 年、309-310 頁。

(26) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、277 頁。

(27) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、279 頁。

(28) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。

(29) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、279-280 頁。

(30) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、280 頁。

(31) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。

(32) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。

(33) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、281 頁。

著作集 14 『外輪山春雷秋月』

火の国の女たち

——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞞の女たちとの友愛

第六章 『大日本女性史 母系制の研究』の完成

(34) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、281-282 頁。

第七章 『青鞵』創刊以降の婦人運動家たちの「恋愛創生」

一. 新聞や雑誌による「同性の愛」の発見

高群逸枝の『大日本女性史 母系制研究』が刊行された一九三八（昭和一三）年に、日本は、国家総動員法を制定し、二年後の一九四〇（昭和一五）年に大政翼賛会と大日本産業報国会を結成するに至ります。こうして、アジア・太平洋戦争に向けての戦時体制が形づくられてゆきました。

一方、この『大日本女性史 母系制研究』の出版に先立って、それを支援するために、「高群逸枝著作後援会」が結成されました。呼びかけ人は、平塚らいてうと『東京朝日新聞』の竹中繁子でした。そして、それに賛同した六五人の氏名が、『大日本女性史 母系制研究』の跋文のなかで、謝辞とともに公開されました。当時の婦人解放運動に直接参加していた人や、その運動を支持していた人たちが、壮観にもここに結集していました。平凡社の下中彌三郎、『婦人公論』の嶋中雄作、その兄で社会運動家の島中雄三など、少数の男性も含まれていましたが、そのほとんどは婦人でした。

そこで、その賛同者に名を連ねていた婦人のなかから、主として市川房枝、金子しげり（茂）、神近市子、窪川稲子（いね子）、佐藤（田村）俊子、富本一枝、野上弥生子（彌生）、丸岡秀子、長谷川時雨、平塚らいてう（雷鳥）の一〇名の女史に着目し、とりわけ富本一枝と平塚らいてうを中心に置きながら、こうした女性たちのセクシュアリティを巡る行動や言説、あるいは、その人が関係する隣人についての言及等を素材にして、高群逸枝が一九二六（大正一五）年に著わした『恋愛創生』（萬生閣）の書名に因んで、『青鞵』創刊のころから戦時体制へ至るこの三〇年間の、婦人解放運動の担い手であった彼女たちそれぞれの「恋愛創生」の一断面を、ここで描写しておきたいと思います。

それではまず、日本における「同性の愛」の発見の経緯から話を進めます。わが国において女性の特異なセクシュアリティについて公然と関心が集まったのは、明治末年のころではないかと思われます。

一九一一（明治四四）年八月一日の『婦女新聞』に掲載された第一頁の社説は、「同性の愛」という表題をつけて、女性間の「不可思議な」セクシュアリティについて論じています。以下は、その書き出しの部分です。『婦女新聞』は週刊新聞で、女学生などがその主な読者となっていました。

『女同士の情死』と題して、二人の女工が手を携へて投身したりし新聞紙に報せられたる事あり。最近に一博士の令嬢と、一官吏の令嬢とが共に高等女學校卒業の教育ある身にして、同じやうなる最期を遂げたるあり。新聞紙は之を同性の愛、世俗に所謂オメの関係なりとして審しまざる様子なるが、同性間に、果たして異性間の如き愛の成立し得るものなりや否や。容易に信じ難けれども、若し眞に成立し得るものとせば、娘持つ母及び女子教育家は、最愛なる子女の監督法に就て新なる警戒を加へざるべからず。かゝる問題は人生の機微に關し、紳士淑女の輕々しく口にすべき事にあらざれども、又それだけに重大な問題なるを以て、眞面目に研究する必要あり¹。

この社説では、女工の例と令嬢の例を、ともに「オメ」の関係とみなしながらも、前者については、女性相互の「熱烈な精神的友情」に基づく関係とし、後者については、男性的な女と女性間の「肉的墮落」との烙印を押します。社説は、二種類の「同性の愛」の内的違いを、このような文言を使って解説するのです。

後者の所謂オメなるものは、實に不可思議の現象にして、今日の生理學心理學にては殆んど説明しがたし。然り、説明はせられざれども、事實の存在は否定すべきにあらず。恐らくは是れ病的現象ならん。……前者に於ては、關係ある二人の境遇年齢性格等が相似たるを要するに反し、後者は、一人が必ず男性的性格境遇の女子にして、他を支配するを要す。前者は熱烈なる精神的友情に因て成立するに反し、後者は不可思議な肉の接觸を俟ちて成立するが如し。前者は死を共にするまで互い同情すれども、後者は、元來が肉的墮落なれば、さまでに双方の精神が一致せず。即ち一方的男性的の女は、常に巧なる一種の手段を弄して他を操縦するなり。されど、いかにしても不可思議なるは、操縦せらるゝ女が、全然對手の術中に陥りて、眞の戀愛狀態に陥ること、異性に對すると殆んど差違なき事なり²。

そしてこの社説は、結論として、次の点を指摘します。「後者のオメなるものは、前者の病的友愛なると同じく、病的肉慾とでも稱すべきものにして、生理學者も未だ鉤を入れざる未開墾地なれば、吾等はこゝに論斷を下す事能はざれども、不可思議なる事實の存在だけは如何にしても否むべからず。されば、娘持つ親達は、最愛の娘を他に托するに當りて、單に同性なるの故のみを以て安心すべきにあらざるなり」³。

同新聞の同日付けの第四頁には、「同性愛の研究」と題された特集が組まれ、「某醫師」「某宗教女學校卒業生」「某高等女學校校長」「某夫人」「某心理學者」「洋行歸りの某氏」および「某軍人」からの聞き取りの結果が公開されています。そのなかには、異性間の愛とまったく変わらない同性間の愛の事例や、男女の夫婦とまったく変わらない女夫婦の事例や、しつけのために預かっていた娘のもとへ夜な夜な訪ねてくる女の事例などが、赤裸々に、そして詳細に報告されていました。この「同性愛の研究」は、社説にいう「説明はせられざれども、事實の存在は否定すべきにあらず」を、具体的内容を挙げて、例証するものでした。

このときの『婦女新聞』の社説および特集の立ち位置は、見てきたとおり、良妻賢母主義や家父長制主義が異性愛によって成り立っている以上、同性愛はそれを否定しかねない反体制的行為であるがゆえに、即刻追撃しなければならないといったような政治的に過激なものではありませんでした。同性の愛という行為は、いまだ学説にない、知識を超えた実に「不可思議な」現象であるがゆえに「病的な」ものとして執筆するには映っており、その感染を避けるという観点から、年ごろの娘をもつ親や子女教育に携わる人たちに対して警鐘を鳴らすといった啓蒙的な論調が、ここにおいて展開されているのです。このようにして、この時期、女性間の「不可思議な」セクシュアリティが、「かゝる問題は人生の機微に關し、紳士淑女の輕々しく口にすべき事にあらざれども」、新聞というひとつのメディアをとおして、新たに社会的に「発見」されたのでした。

続く翌週（八月一八日）の『婦女新聞』は、島中雄三の「同性の戀と其實例」を掲載します。執筆者の島中雄三は嶋中雄作の兄ですが、弟の「嶋中」と区別するために、しばしば本

人は「島中」姓を名乗っていました。さて、そのなかで島中は、男子間の同性の恋（男色）も女子間の同性の恋も、結局のところ、その原因も、その実態も、その結果も、類似していることを指摘します。そのうえで、なぜそのような現象が起きるのか、次のように分析するのでした。

近來男色が少々衰へたのは、東洋的武士道的の克己道德、禁欲道德が廢れて男子の性欲が自然的方法によつて満足される機會が多くなつた結果である、それと反對に、女子の間に両性の戀が盛になつたのは、男子の誘惑が多くなり、社會の道德的制裁が弛み、印刷物其他によつて隠れたる社會の暗黒面が暴露され、其結果一般に淫靡なる空氣が深窓の中にも通ふと同時に、官能的刺激が著しく強くなつて性欲の發作年齢が以前よりは早くなつて居るに拘らず、結婚難てふ社會的現象と極端なる男女隔離主義とに依つて、精神的にも肉體的にも適當に性欲を満足するの機會に遠つた結果と見るべきものが大部分である⁴。

このように島中は、女性間の同性の恋は、以前に比べて性に目覚める年齢が早まるも、その性的欲求を満たす機會が彼女たちにとって遠のいていることに、おおかた起因していると説くのです。そして後段では、新橋の芸妓の中村時子の例を引き、「兎に角彼女は女を惹き着ける強い魔力を有つて居た……何の女も何の女も瘦せて衰へて蒼くなつて其れでも思ひ切れないで泣いたのである、無論時子は常に男装して居つた……然れども彼女は到底男ではない……但だ其の方法は絶対の秘密で、彼女及び彼女と關係した女以外は何人も知らない、又何人にも話さないのである」⁵と、男性的な女の事例を紹介します。

ここで言及されている時子は、性別表現のひとつの指標となる衣装に関して、「常に男装して居つた」ことから判断すると、体の性と異なり、心の性については「男」であることを自認していた可能性があります。また、「何人にも話さないのである」という表現から推測すると、時子が「カミング・アウト (coming out)」を拒否していた可能性も否定できません。島中は最後に、この評論文をこう結びます。「教育家、心理學者、生理學者などの大に研究して然るべき問題である、臭い物に蓋をするのは差支えないとしても、臭きを恐れて何時までも遁げて居つては教育の實は擧るまいと思ふ」⁶。

こうした『婦女新聞』の報道を受けるようなかたちで、『新公論』の九月号は「性慾論」と題して幾編かの論考を掲載します。そのなかには、内田魯庵の「性慾研究の必要を論ず」、桑谷定逸の「戦慄す可き女性間の顛倒性慾」が含まれていました。前者の論説は、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカなどの欧米諸国においてこの分野の研究がどのような状況にあるのかを、当該国で刊行された雑誌や書籍を紹介しながら、論じるものでした。一方、後者の論説では、多様な視点からこの「顛倒性慾」が論じられているため、一言で総括することはできないのですが、一般に「顛倒性慾」は、学校（女学生）、工場（女工）、病院（看護婦）、遊郭（遊女）などの女が集う場所では広く見受けられるものであることを指摘し、男装（異性装）については、このように書きます。「顛倒的な女には、出来ることなら男装し男職したいといふ強い傾向がある。此の場合の男装は便利の爲めでもなく、又た他の女に印象を與へる爲めでもなく、唯だ何となく夫れが自分の身體に適するやうに思ふからである」⁷。ここで表現されている「自分の身體に適するやうに思ふ」は、文脈的には「自分の気持ちに適

するやうに思ふ」と読み替える方がふさわしく、そうであれば、今日にいうところの、性自認（ジェンダー・アイデンティティ）に関する事柄が、すでにこの時期にあって、暗に言及されていたこととなります。そしてこの論説は、このようにもいいます。「顛倒性慾の豫防法に付ては、今日未だ確説はない。否、先天的に其ういふ素質を有つて居る者に對しては、人間の力では殆んど何うすることも出来ないのである」⁸。

以上に述べてきましたように、一九一一年（明治四四）年は、ふたりの女工に続く、さらにふたりの令嬢の情死をきっかけとして、「同性の愛」にかかわる関心が社会的に高まった年でした。くしくもこの年の九月、『青鞥』が平塚らいてうの手によって創刊され、それに吸い寄せられるようにして、年が明けると、尾竹一枝（雅号に「紅吉」を使い、結婚後は富本一枝）が青鞥社の社員となるのでした。

二.『青鞥』における「女性間の同性恋愛」への言及

らいてうと紅吉の「同性の恋」の実際につきましては、第二章「平塚らいてうと尾竹紅吉の『同性の恋』の顛末」において詳述していますので、ここでは繰り返しません。ここでは、婦人解放運動の文脈から少し触れることにします。

すでに言及しました『新公論』一九一一年（明治四四）年九月号に掲載の「性慾研究の必要を論ず」のなかで、著者の内田魯庵は、「Havelock Ellis の “Studies in the Psychology of Sex” といふは五冊物で性慾に関する各方面の研究を集めてある。之も一應寓目して置くべきものだ。此エリスは誰も知つて通り現代精神界の趨勢に隻眼を持つてゐる評論家であるだけ、文章も立派で……」⁹と、この本を高く評価しました。その一部分が日本語に訳され、「女性間の同性恋愛——エリス——」のタイトルで『青鞥』に掲載されたのは、一九一四（大正三）年の四月号（第四卷第四号）においてでした。巻頭に、らいてうの筆になる一文が端書きのように寄せられており、そのなかで、抄訳掲載の経緯が、次のように記されています。

女學校の寄宿舎などで同性恋愛といふやうなことが行はれてゐるやうなことを屢々耳にはいたしますけれど、私自身はさういう事實を實際目撃したこともなければ、自身経験したこともありませんでしたので半ば信じられないやうな氣もいたしました、全く何の興味もこの問題にもつことが出来ませんでした。ところが私の近い過去に於て出逢つた一婦人——殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人によつて私はこの問題に非常な興味をもつやうになりました。私はその婦人の愛の對象として大凡一年を過しました。そして色々のことを考へさせられました結果、いよいよこの問題に就いて、知りたくなりました¹⁰。

このときすでに紅吉は青鞥社を退社していましたが、ここでらいてうは、紅吉のことを「殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人」として公言したのでした。明らかにこれは、今日的な用語法に従えば、個人のセクシュアリティについて赤の他人が吹聴することを意味する「アウトイング（outing）」といえるにちがいありません。しかもらいてうは、「私はその婦人の愛の對象として大凡一年を過しました」と、素っ気なく他人事のように

にっています。本当にこの愛は、紅吉かららいてうへの一方的な愛だったのでしょうか。らいてう自身は、紅吉のことを「愛の対象として」全く何も考えていなかったのでしょうか。第二章の「平塚らいてうと尾竹紅吉の『同性の恋』の顛末」において述べていますように、事実は決してそうではありませんでした。他方、紅吉も、らいてうのセクシュアリティについて、自分のそれと絡めて、間接的ではありますが、その二年前に「アウティング」していました。以下は、『東京日日新聞』に掲載された、記者の小野賢一郎による尾竹紅吉へのインタビューです。

紅「煤煙を通じて平塚の性格をみますと或る微妙な點が私と似通つたところがあるのです、世間の人から見ると一寸不思議に思へるやうな興味を持つてゐるやうですから會つて見ると果たしてさうでした」

記「その興味といふのは例へばドンナものです」

紅「それは今は言へません、私は子供の時分から面白い氣分を持つてゐますが夫れは自ら獨り楽しむ氣分であつて決して口に出して話す氣分ではないのです、死ぬる時に遺言状の中には書くかしれませんが」¹¹

この記事で重要なのは、らいてうのセクシュアリティについては、「或る微妙な點が私と似通つたところがある」といい、自分のセクシュアリティについては、「死ぬる時に遺言状の中には書くかしれませんが」、それまでは、「カミング・アウト」しないといっている点ではないでしょうか。

第二章「平塚らいてうと尾竹紅吉の『同性の恋』の顛末」で触れていますように、らいてうは、紅吉のことを「私の少年」と呼び、一方で「同性の戀」について思いをめぐらせていたという事実があります。「私の少年」と呼ぶ以上は、らいてうは紅吉を「男」として認識していたのでしょうか。そして「同性の戀」という言葉を使う以上は、らいてうは紅吉を「女」と認識していたのでしょうか。「女性間の同性戀愛——エリス——」の端書きにおいて、らいてうは、すでに紹介していますように、「私の近い過去に於て出逢つた一婦人——殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人によつて私はこの問題に非常な興味をもつやうになりました」と書き綴っています。らいてうは、紅吉のセクシュアリティのうちに女性性と男性性との混成を見出し、そのことを根拠に、「殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人」という表現を使って「アウティング」したものと思われます。それでは、「女性間の同性戀愛——エリス——」に書かれてあつた内容は、実際はどのようなものだったのでしょうか。まず、「女性間の同性戀愛」の、陰に隠れた実態について、エリスはこう説明します。

婦人同士は、男子よりヨリ親密であることは習慣上吾々の頭にありふれたことであるので、彼等の間にこんなやうな異常な欲情が存在してゐやうとは一寸思ひ及ばぬことである。そして此原因と關係して吾人の注目すべきは、婦人が性的アブノーマルな表現に關して、甚だしきはその正則の場合すらも全く知らないで、絶對的沈黙を守ると云ふことである。婦人は同性にして非常に烈しい性的牽引を感じても、其愛情が性的變態であることに氣がつかぬ。そして一度之れを意識した時には譬へ之を發表すれば他人の

肩に載っている重荷を軽くしてやる事が出来ると知れてゐても、極力自己の内部経験の本性を暴露されないように努める¹²。

らいてうが「アウティング」したのは、ここでいわれている、「之を發表すれば他人の肩に載っている重荷を軽くしてやる事が出来る」に従ったのかもしれませんが。次にエリスは、性的に転倒した女たちにみられる特性を、次のように語ります。

彼等は常の服装の場合には大いに男性的單純さを表現してゐる、そして殆どあらゆる場合に、どんな些細でも化粧と云ふやうな事は忌み嫌ふのである。之れ等の事實が明に現はれない時でも、凡ての無意識になさるゝ身振りや習慣が、女の知り合に斯ういふ人は男に生るべき筈であつたのに、と云ふ考へえを起さしめる。粗暴な、エナージェティックな動作、腕の様子、愛想もない、ブツキラボーな言葉づかい、音聲の抑揚、男の様に率直で、名譽心に富む事、殊に男に對する羞しいと云ふやうな様子はなく、と云つて又殊更に大膽を装ふのでもない態度、凡て是等の事實は、鋭敏な觀察者に、底に潜んでゐる心理的變態を觀察せしむるには充分である¹³。

紅吉を指して「殆ど先天的の性的轉倒者とも思われるやうな一婦人」という以上は、紅吉の言動やしぐさや身なりのなかに、らいてうは、ここで述べられている婦人の「心理的變態」を觀察したのでしょう。また、エリスは、こうもいいます。「轉倒した婦女は女性美の熱心な賞讀者であるが、殊に肉體のしつかりした美をたゞへる。此點は普通の女の性的情緒の中には極僅少な美的感情しか交つてゐないのに比して異つてゐる點である」¹⁴。それでは、「性的轉倒」は何が原因で起こるのでしょうか。エリスの見立ては、こうです。

男子の獨立と、因習道德——譬へば女は家の中の陰氣な倉の内で嘆息しながら、決して來る事のない男を待たねばならないと云ふ様な舊い教へに對する嫌惡を教へられた女は、何處迄もこの獨立と發展^{ママ}として仕事のある所に愛を探さうとする所まで達する。私は敢て此等の近世の運動の慥かな影響が直接性的轉倒を惹起したとは云はないが、間接な原因は確かにあると思ふ¹⁵、

エリスが描写する、「女は家の中の陰氣な倉の内で嘆息しながら、決して來る事のない男を待たねばならないと云ふ様な舊い教へに對する嫌惡」——これが、女性の解放や獨立を叫ぶ、近代の婦人運動の原点となる思いであるにちがひありません。エリスはいみじくも、この近代運動が「間接な原因」となって「性的轉倒を惹起した」とみなすのです。であれば、近代日本の婦人運動の原点に位置づく青鞨社の運動には、これ自体に、「性的轉倒」を招来せしめる力が必然的に最初から内在していたことになります。そして、その歴史的主人公が、まさしく、紅吉、その人だったのです。もっとも、医学的觀點から、あるいは統計学的觀點から、女兒の誕生にあつては、性的指向が女へと向かうレズビアンや、FTM のトランスジェンダー男性が常に一定の割合で生まれることが実証されるならば、近代の婦人運動のイデオロギーとは直接關係なく、女学生や女工のような集団同様に、婦人運動という女の集団においても、避けがたく「同性の戀愛」が一定数発生する可能性は否定できません。しかし

ながら、らいてうの個人的事例にみられるように、「私の少年」や「同性の戀」という用語を使って自らの性愛について公然と語る一方で、「同性の戀愛」という現象に強い関心を持ち、外国の書を翻訳して雑誌に掲載しては、そこから積極的に学ぼうとしたのは、疑いもなく、先行する女学生や女工たちの集団ではなく、この時代に新しく胎動した婦人たちの集団のなかにおいてでありました。その意味においては、女性解放の近代運動の萌芽と、「同性の戀愛」へ向けられた知的なまなざしとは、相互に大きく関連していたといえるでしょう。そしてそれは、「新しい女」の内実ともかかわることでありました。紅吉が「新しい女」の前衛的実践の役割を気楽にも担い、他方、らいてうが後衛に陣取り、その理屈の枠組みを必死になって習得しようとしたと見ることも、可能かもしれません。

三. 富本一枝の悲痛と『變態性慾論』の刊行

青鞥社を離れた紅吉は、この雅号を捨て、戸籍名の尾竹一枝にもどります。一九一四（大正三）年の一〇月に富本憲吉と結婚すると、翌年の三月に、住むところを喧騒の都会から憲吉の実家がある奈良の安堵村へ移します。すると、ちょうどその年の六月、羽太鋭治と澤田順次郎の共著になる『變態性慾論』が春陽堂から出版されました。著者の肩書きは、羽太鋭治が「ドクトル、メヂチーネ」、そして澤田順次郎が「國家醫學會會員」となっており、総頁数七〇〇頁を超える大部なもので、主として同性愛と色情狂を扱っていました。明確な証拠は見出せませんが、おそらく憲吉と一枝は、この本を読み、ここから多くのことを学んだものと思われます。

この本の「第一編 顛倒的同性間性慾」の「第七章 女子に於ける先天的同性間性慾」が、内容的に、とりわけふたりの関心事になったにちがいありません。まず「緒論」のなかで、女性間性慾の海外での名称として、「サフヒズム」「レスビアン、ラブ」「レスビアニズム」などが使われていることが紹介され、一方わが国においては、異名として「といちはいち」「おめ」「でや」「おはからい」「お熱」「御親友」などの隠語があり、「おめ」とは「男女」を指すことも述べられていました。「緒論」に続いて、この第七章は、「第一節 女性間性慾の原因」「第二節 女性間性慾の行はるゝ社會の階級」「第三節 女性間性慾者の情死」「第四節 外國に於ける女性間性慾」「第五節 女子精神的色情半陰陽者」「第六節 女子同性色情者」「第七節 女性間同性色情と男子的女子との中間者」「第八節 男性的女子」「第九節 男性化又男化」の全九節で構成されています。そしてさらには、「第九章 顛倒的同性間性慾の利害及び其社會に及ぼす影響」の「第三節 矯正及び治療法」もまた、ふたりにとって興味のある箇所だったものと思われます。といいますのも、ここには、催眠術によって異性に対する性欲を回復させる「催眠療法」、運動、食物、精神の慰安による「攝養法」、そして、異性との正式な交接を招来する「結婚療法」が挙げられていたからです。

しかし、ここに挙げられていた「結婚療法」をもってしても、一枝に備わる「子供の時分から面白い氣分を持つてゐます」という実感を変更することは、そう容易なことではありませんでした。一枝は、「結婚する前と結婚してから」のなかで、自身の青鞥社時代を、こう振り返ります。

評判を悪くして心のうちで寂しく暮してみた事もあつた。可成り長く病氣で轉地し

てみた時もあつた。全く寂しく暮してみた時もあつた。どうにかして眞面目な人生に眼を醒ましたいと悶^も躁^がいてゐた。偽もつゐた。人を欺しもした。いちめもした。愛しもした¹⁶。

振り返って内省してみると、青鞥社員のときの自分が、寂しく、もがき、そして、うそをつき、人をだまし、またあるときは、人をいじめ、人を愛する——そのような人間であつたことへと思いが至ります。これこそが、数年前の自分の「新しい女」の内実だったのです。確たる信念があるわけではなく、確たる理想があるわけでもなく、おもしろおかしく、奔放に振る舞う「紅吉」がそこにあつたのです。

一枝は、この「結婚する前と結婚してから」のなかで、こうも書いています。「都會を出立して田舎に轉移した彼と私は彼の云ふ高い思想生活を私達の爲めに營むべく最もよい機會をここに見出したことに強い自信とはりつめた意志があつた」¹⁷。そしてさらには、「彼は、都會は、私を必ずや再び以前に歸すことを、再び私の落着のない心が誘起される事をよく知つてゐた」¹⁸。憲吉と一枝の夫婦は、結婚をひとつの好機ととらえ、一枝のいうところの「落着のない心」、つまり同性へ向かう性的指向が二度と誘発されることがないことを強く望みました。そのためには、都會を離れ、対象となるような若くて美しく才能あふれる女性と触れ合う機会がほとんどないこの大和の田舎へ移転し、高い精神性のもとに新しい生活をはじめることが、ふたりにとっては、どうしても必要だったのです。しかしながら、一枝の「落着のない心」は、「彼の云ふ高い思想生活」でもって解決することはなく、そこには大きな悲痛が横たわっていたのです。たとえば一枝は、「子供と私」と題したエッセイの冒頭において、このようなことを告白しています。

「子供と私」を書くについて、私は考へました。私は子供について書く資格が本當に有るだらうか。恥づかしくはなからうか。恐らく自分は子供について書けないのが本當で、書くのは間違つてゐるのだと。……しかし、また思い返してみると、書くのが本當のやうに思はれたのです。これを書く事は自分が子供にもつてゐる心なり態度を深く反省する機會にもなるし、或意味で正直に自分の態度を責めてもらへる事にもなると思つたのです。……最初に書いて置きます。私は子供にとって決して善い母親ではありません。親切な母親ではありません¹⁹。

なぜここまで、母親としての自分を責めるのでしょうか。一枝の性自認が「男」であつたとするならば、それに起因して、子どもを慈しむ母性のような母親固有の感情がどうしても湧いてこなく、それを自覚したうえで、「決して善い母親ではありません。親切な母親ではありません」と、いつているのかもしれませんが。

この「子供と私」が掲載されたのは、一九二一（大正一〇）年一月号の『婦人之友』においてでした。そして、その五箇月後に、高群逸枝が世に出る最初の詩集となる『日月の上に』が叢文閣から上梓されます。小説家の有島武郎と『中央公論』の記者で人妻の波多野秋子が、軽井沢の別荘で縊死するのは、それから二年後の一九二三（大正一二）年の六月のことでした。続いて、同年の九月に関東大震災が起ると、その半月後に、アナキストの大杉栄と伊藤野枝、加えて大杉の妹の男児が、陸軍憲兵大尉の甘粕正彦によって殺害されるという悲

惨な事件が発生しました。高群は、一九三六（昭和一一）年刊行の自身の『大日本女性人名辞書』のなかに、「波多野あき子」を「社会運動」の項目に、「伊藤野枝」を「記者」の項目に採録します。しかし、羽太鋭治と澤田順次郎の共著により一九一五（大正四）年に刊行されていた『變態性慾論』のなかにみられる「顛倒的同性間性慾」に該当する女性については、その項目を設けることはありませんでした。太古の昔から、こうした傾向をもつ女性が一定の割合で存在していたであろうことは想像に難くないのですが——。

こうしたなか、大正天皇の死去に伴い、一九二六（大正一五）年の年末に、元号が大正から昭和へと変わります。そのころになると、『青鞥』を源流とする日本の婦人運動に参加していた女性たちも、次第に円熟期に入ろうとしていました。

四．戦時体制へ向かう時期の婦人運動家たちの性と愛を巡る言動

一九三〇（昭和五）年、『婦人公論』の五月号は、「同棲愛の家庭訪問」を特集しました。この特集にあって、深尾須磨子と荻野綾子、吉屋信子と門馬千代子、金子しげりと市川房枝の三組のカップルの「同棲愛」家庭が紹介されます。深尾須磨子と荻野綾子のカップルを扱った「姉妹藝術の上に」の記事では、ふたりの住まいを訪ねた記者は、冒頭、このように書きます。「一枚の表札に『深尾』と『荻野』が仲よく並んでゐる。晝間なのに格子戸の鍵がかゝっているのは、女ばかりの住居の用心のためであろう。案内を乞ふ聲に應へて出て来たのはステージでお馴染みの荻野さんだ」²⁰。また、金子しげりと市川房枝のカップルが住む屋敷を訪問して「婦人運動の彼方」を執筆した記者は、こう書き出します。「あら、金子さんと市川さんが同性愛？……麗かな春の陽かげの一日、四谷仲町の二人のお住居を訪れた記者でした。市川房枝さん。婦人運動の第一線に立つ房枝さん。……金子さんは……わが國婦人参政運動の闘士であります」²¹。

この記事から推測しますと、もうこの時期になると、愛する女同士が一軒の家に住み、あたかも夫婦であるかのように生活するのは、さほど珍しいことではなくなっていた観があります。といいますのも、すでに紹介していますように、ほぼ二〇年前の一九一（明治四四）年八月一日の『婦女新聞』に掲載された、「同性の愛」という表題がつけられた第一頁の社説において、「生理學者も未だ鍬を入れざる未開墾地なれば、吾等はこゝに論斷を下す事能はざれども、不可思議なる事實の存在だけは如何にしても否むべからず。されば、娘持つ親達は、最愛の娘を他に托するに當りて、單に同性なるの故のみを以て安心すべきにあらざるなり」という主張がなされていたのに反して、この『婦人公論』の論調においては、そうした「不可思議なる事實」がことさら強調されることもなかったからです。

当時、ロシア文学者の湯浅芳子と小説家の中條百合子（のちの宮本百合子）も共同生活に入っていましたが、一九二七（昭和二）年一二月の出発から一九三〇（昭和五）年一月の帰国までふたりはソヴィエトに滞在し、ヨーロッパの各地を旅行していたため、この『婦人公論』の「同棲愛の家庭訪問」の取材対象からはやむなく外されたのかもしれませんが。しかしながら、ふたりが野上弥生子の家ではじめて会って一箇月と少しが過ぎた、一九二四（大正一三）年の五月二一日と二二日にまたがって書かれた湯浅から中條へ宛てて書かれた手紙には、このようなくだりがあります。

私の性格のかなり複雑なことはあなたも御存じですが、そのあなたのご存じよりももっとも私にはこみ入った矛盾だらけの不幸な生れつきがあるのです。生理的には一通り何の欠点もない女ですが、しかも女でいて女になりきれないというところ、（まだまだ言い足りないが）すべての不幸がまず一番ここにあるのではないかとおもいます。

人生にとって一番意義のある得難く尊いものは何ですか？あなたはなんだとおもいます。芸術ですか、愛ですか。

その何れにも見離された人間は何を目的に生きるのです。まして私は愛を知らないんじゃない！

もうやめ、やめ、こんなこと²²。

湯浅が告白（カミング・アウト）しているのは、明らかに、女が女になりきれない女性の心の性にかかわる精神的苦痛についてでしょう。トランスジェンダー（当時の用語に従えば「男女」あるいは「おめ」）を、のちになって「選択」したものではなく、生まれながらにして本人が備え持つ「本性」であるという立場に立つならば、これを自分の意思や努力によって変更したり、捨て去ったりすることはもはやできず、何を目的に生きればいいのかを、自問するも、答えはない。その苦しみを湯浅は率直に中條に訴えているのではないのでしょうか。そのことは、おそらく富本一枝にも、あてはまったものと思われます。

『女人藝術』を主宰し、引き続き『輝ク』の刊行に尽力した長谷川時雨が、一九四一（昭和一六）年八月に亡くなります。その後、近代文学研究者の尾形明子は、『女人藝術』を調査するうえから、この雑誌の編集に携わっていた熱田優子に聞き取りを行なう機会をもちました。以下は、尾形が聞き書きした、富本一枝に関する熱田の発話内容です。

すらっとしていたけれど筋肉質でしっかりした体型でね。芸術家の奥さんというより、富本さん自身が芸術家。着物をきりっと粋に着こなしていて、感性が鋭くて趣味もよかった。……女の人が好きで、横田文子がかわいがられていたわね。それで長谷川さん、私たちにひとりで祖師谷に行ってはいけないよって言っていたけど、大谷藤子さんも親しかったのではないかしら²³。

上の発話内容は、熱田と尾形のふたりが伝達者として中間に入っており、いわゆる「伝言ゲーム」の危険性が全くないわけではありません。それでも、もし長谷川が、「ひとりで〔一枝の自宅のある〕祖師谷に行ってはいけないよ」といって、生前に周囲の人間に注意を促していたことが本当に事実であるとするならば、一枝のセクシュアリティは、すでに「公然の秘密」となっていただけでなく、美貌と才能をもつ女性にとっては、「危険な存在」になっていた可能性さえ残ります。しかしその一方で、その発話内容は、一枝が女性にとって頼れる味方であることを示唆しているようにも読むことができます。事実一枝は、多くの女性の才能を発掘しては、それを誌上で発表し、彼女たちを勇気づけていたのです。たとえばこの時期、『婦人文藝』に「福田晴子さん」（一九三五年一月号）を、『中央公論』に「宇野千代の印象」（一九三六年二月号）を、『麵麴』に「仲町貞子の作品と印象 手紙」（一九三六年二月号）を、さらに『婦人公論』に「原節子の印象」（一九三七年四月号）を寄稿し、

彼女たちの美質なり作品なりを紹介するのですでした。

『婦人公論』の「同棲愛の家庭訪問」の記事から三年後、「共産党の検挙者に婦人が多い」という内容の『東京朝日新聞』の記事を受けて、「主義と貞操の問題」と題した特集を『婦人公論』（一九三三年三月号）が組みました。この特集のなかで、平塚雷鳥（らいてう）、野上彌生子、窪川いね子が自説を開陳します。

雷鳥の評論は「女性共産黨員とその性の利用」と題したもので、そのなかで雷鳥は、「共産党検挙のいつの場合も、必ず幾人かの女性をその中に見る。そしてそれらの女性は、又大方黨幹部の男性と性関係をもつ人たちです。……彼等自身は同志愛などと呼んでゐるものの……女性が道具とされているか、最上の場合が便宜上の性の相互利用といった程度の機械化され、物質化された性関係であつて、何等の新しい貞操観念も、性道徳の新思想も見出されません」²⁴と述べ、続けて、「社会組織がどんなに變らうとも、人間の創造性が性によらねばならず、人間を産み、育てるものが女性である限り、女性の『性』の社会に對し、種族、人類に對する使命を變へることは出来ません。して見れば、わたくしたち女性は、女性がこの使命に安心して生き、安心してその使命を果せるやうな社会を造ることに努むべきです」²⁵との持論を展開します。まさしく、「産み、育てる」女性の使命の安定的な遂行こそが、性にかかわる雷鳥にとっての普遍的な価値なのでしょう。

一方、野上の評論「平凡なことか」は、雷鳥の考えとは対照的に、ジャーナリズムの女性に対する興味本位の報道に苦言を呈したうえで、報道のごとき「事実」がもし仮に存在していたとしても、肯定的に受容すべく、理解を示します。「少なくともわたしは、婦人黨士のあるものが、資金獲得のために彼女の若さと美貌を利用したと云ふことが、果してどこまで××であるかは、疑問だと思つてゐる。かりに一步をゆづつて、ある程度の事實があつたとしても、べつに珍しいことでも、おどろくことでもない。史上の例によつて見ても、また小説戯曲の中においても、秘密な非合法的な團體運動ではそれはむしろ平凡な××であることをわれわれは見出さないであらうか。……また黨士らのあひだの戀愛問題についても、むしろ最も自然な現象と云ふべきであらう。共通の思想、共通の理解、共通の認識において、おなじ仕事にたづさはつてゐる若い男女の熱情が、すすんで戀愛にまで燃えあがることは……殆んど必然である」²⁶。

そして、「何れの矛盾か」の表題で寄稿した窪川は、この『婦人公論』の特集に先立ち、すでにこの主題にかかわって『東京朝日新聞』の婦人欄に「女共産黨員への抗議」と題する一文を書いていたらいてうの発言内容をとらえ、これをもって、「かつてのブルジョア民主主義に根底をおいた青鞥社の婦人解放論者であつた雷鳥女史の今日の立場」²⁷とみなしたうえで、「かつての性の平等を唱へた雷鳥女史にして、も早、今日のプロレタリア婦人の××な活動、婦人の大きな自覚と闘争力については、何ものも理解することができなくなつてゐるということは、何という皮肉なことであつたらう」²⁸と述べ、雷鳥の無理解と限界を指摘したのでした。

共産主義や共産党に対する、あるいは生殖や母性に対する認識や立ち位置の違いが、三者のあいだで鮮明になっています。『女人藝術』は、すでに前年（一九三二年）の六月に廃刊になっていましたが、この特集は、かつてこの雑誌のなかで展開された「アナ・ボル論争」を彷彿させるものでした。こうしてこの時期、女性のあいだで、政治と性にかかわる話題が再び焦点化されたのでした。

『婦人公論』が「主義と貞操の問題」と題した特集を組んだのは一九三三（昭和八）年の三月号でした。その少し前、ドイツではアドルフ・ヒトラーが首相に就任し、共産党への弾圧を強化します。一方で日本では、「蟹工船」を書いた小林多喜二が逮捕され、その日のうちに拷問によって虐殺されます。まさしく世界は、極めて強権的な政治が支配する時代へと足を踏み入れようとしていたのです。それからおよそ半年後の八月、富本一枝が検挙され、留置されます。『讀賣新聞』は、「富本一枝女史 検挙さる 某方面に資金提供」の見出しをつけて、次のように報じました。

澁谷區代々木山谷町一三一國畫會員としてわが國工藝美術界の巨匠（陶器藝術）富本憲吉氏の夫人で評論家の富本一枝女史（四一）は去る五日夕刻長野懸輕井澤の避暑地から歸宅したところを代々木署に連行そのまゝ留置され警視廳特高課野中警部補の取調べをうけてゐる、さきごろ起訴された湯淺芳子女史の指導によつて、某方面に百圓と富本氏制作の陶器を與へたことが暴露したものである、女史は青鞥社時代からの婦人運動家で女人藝術同人として犀利な筆を揮つたことがあり、最近では湯淺女史らと共にソヴェート友の會に關係左翼への關心を昂めてゐた²⁹。

このころ、平塚らいてうの夫の奥村博史は、指輪製作に精を出していました。らいてうは、こう振り返ります。「最初に作ったのは、時代のやや古い黒白のオニクスのカメオの指輪で、自分の小指にはめるものとしてでした。次には、富本憲吉さんが、インドから持ち帰った指輪を、一枝さんの指に見て、それを借りて同じものをわたくしのために、作ってくれました。……こうして奥村の指輪作りがはじまりましたが、自作の指輪を、はじめて世に発表したのは昭和八年のことです。これは奥村の指輪作りにたいへん興味をもっていられた富本憲吉さんのたつてのおすすめで、国画会工芸部に、持ち合わせたもの七点を出品したのですが、それが批評家筋にも好評で、意外の反響がありました」³⁰。

一九三三（昭和八）年七月三〇日の『週刊婦女新聞』は、「おしらせ」の欄で「奥村指輪の會」について触れています。「藝術的指輪を創始して好評を博してゐる洋畫家奥村博史氏を依囑して、深尾須磨子、武者小路實篤、富本憲吉、水谷八重子、柳原燐子、加藤武夫等文壇劇團の諸氏が發起で、『奥村指輪の會』と云ふのを組織し、會員を募集中である」³¹。會員を募って支援するという形態にあつては、このときの「奥村指輪の會」は、その四年後に発足する「高群逸枝著作後援会」の先駆けとなるものであつたかもしれません。

その翌年の一九三四（昭和九）年の秋季皇靈祭の日（現在の秋分の日）の午後、『婦人画報』の企画により、平塚らいてうの夫の奥村博史のアトリエを会場として、奥村家の家族（四名）と富本家の家族（五名）、それに、一枝の妹の福美（夫は洋画家の安宅安五郎）の娘の良子も加わり、「家族會議」が催されました。奥村家の長女の曙生と富本家の長女の陽は、成城学園の小学校で同学年でしたが、ともに成長し、曙生は「小學校は成城、女學校は自由学園、そして今は東洋英和の幼稚園師範科」³²に通い、陽は「小學校も女學校も成城、今は文化學院の高等部」³³に在籍していました。この日の「家族會議」は、「今日は曙生ちゃんや陽子ちゃんの職業や結婚に對するお考へをうかゞひその考へ方の基礎になつてゐる教育、學校教育や家庭教育も一應検討し、一方お父様お母様の御意見もうかゞひ度いと思います」³⁴という、記者からの導入の言葉ではじまりました。そのなかで、曙生は、結婚につい

ては、「明るさと、深さと、優しさと強さを持つている人、なぜかと云ふと、ふかさのある人はどうかすると暗いところがあるし、優しさを持つて居る人は強いところが缺け勝ちですから」³⁵と語り、職業については、「実際に幼稚園に働き乍らでも勉強は一生出来ると私考へますけど。唯だ机の上での學問より實際の生活を持つた勉強が本當だと思ひましたから——」³⁶と述べています。

一方陽は、結婚については、「條件としては特に退屈なんでなければ、餘り可愛がつて呉れない人の方がいいわ、いくら可愛がつて呉れたつてどうせさう長いこと可愛がつて呉れられるものぢやなし、それにさうなつたらうるさいわね。貧乏ぢやいやだわ。金持の人と云う譯でなく生活能力のある人よ」³⁷と語り、記者の「陽子ちゃんはどう云う職業に就て——何をやりたいと考へますか」という質問に対しては、「望みはないの、自分の考へて居ることも殆ど何が何だか分ないし、希望もないし、どこを見ても風みたいにふらふらして——だから曙生ちゃんの考へ方なんか私として羨しいと思ふわ」³⁸と答えています。これが、二〇歳前後の曙生と陽の結婚や職業についての思うところでした。「新しい女」の娘世代が、このようにして育っていました。しかし一方で、この「家族會議」で注目していいのは、以下の終幕の部分です。陶は、富本家の次女です。

富本夫人 お母さんなんか何時も自分は母親の資格がないと思つて——。

陶子 お母さんつたら何時もあんなことを云ふんだもの——。

陽 さう云はれたら子供はどうすればいいの——。

記者 ではこれで——どうも色々有難うございました³⁹。

何か締まりの悪い幕切れとなっていました。しかし、この発話内容が、一枝のセクシュアリティに起因する「母性」の実態だったのかもしれませんが。

さらにその翌年（一九三五年）の八月二八日の『讀賣新聞』に目を向けますと、そこに、「女の立場から」という欄を創設する旨の社告を見出すことができます。それによると、「朝刊婦人面に『女の立場から』なる題下に、女性ならではの説き盡し得ぬ鋭利にして繊細な社會批評と豊富な識見による女性のための時事解説とを九月二日付の紙面より連日掲載することとした」とあり、執筆者として、岡本かの子（月）、山川菊榮（火）、野上彌生（水）、富本一枝（木）、神近市子（金）、茅野雅子（土）が紹介されていました。いずれも当時のオピニオン・リーダーたちです。この企画から、社會問題にかかわって広く女性の意見を求めようとするメディアの姿勢の一端をうかがうことができます。

しかし、言論を封殺する動きも、一方で進んでいました。その典型的な事例が、一九三六（昭和一一）年二月に起きた、陸軍青年将校らによるクーデター未遂事件です。この「二・二六事件」の衝撃が冷めやらぬ三月、一八年に及ぶ海外生活を終えて、佐藤俊子がカナダから帰ってきました。佐藤俊子（かつての田村俊子）と富本一枝（かつての尾竹紅吉）は、青鞥社時代に平塚らいてうによって紹介されて以来の親しい友人同士でした。その俊子が、帰国したこの年の初夏のある日、憲吉の開黨に招かれて、千歳村を訪れました。この日一枝は、丸岡秀子も招待していました。丸岡は、奈良女子高等師範學校時代に、安堵村の富本夫妻をしばしば訪れており、それ以来続く、信頼を寄せ合う間柄でした。

俊子と秀子は、二〇歳ほどの年の差がありました。それでも秀子は「田村俊子」の名前を

憶えていました。「その名は明治の終りから大正にかけて、女の作家として、目立つ存在であった。……そして『女作家』、『木乃伊の口紅』、『炮烙の刑』などの代表作を一応は読んでもいたからである」⁴⁰。この日から俊子と秀子のあいだに深い友情が芽生えます。そして晩年の一九七三（昭和四八）年に、秀子は、「昭和十一年から十三年までの三年間の〔俊子からの〕手紙」⁴¹を基にした交友録『田村俊子とわたし』を中央公論社から上梓するのです。それによりますと、帰国後のこの三年は、俊子にとって、思うように作品が書けず、金銭の管理が甘いゆえに友だちを失い、窪川いね子（のちの佐多稲子）の夫である窪川鶴次郎との道ならぬ恋にも陥り、満たされぬ苦悶の歳月でした。俊子は、何かにつけて秀子を頼ります。秀子も悪い気はしません。いつも寄り添うように、俊子を支えます。秀子が一九三七（昭和一二）年に高陽書院から出した処女作『日本農村婦人問題』の書題は俊子の発案によるものでした。しかし、この濃密な交友にも終わりが来ます。最終的に俊子は、嶋中雄作の計らいにより、「中央公論社特派員」の肩書きで中国に渡るも、一九四五（昭和二〇）年四月、上海の地で客死するのです。

『女人藝術』の廃刊から二年後の一九三四（昭和九）年に、神近市子の手によって、女性のための新しい文芸雑誌である『婦人文芸』が創刊されていました。その経緯について、晩年、神近はこう述べています。

多くの女流作家・評論家・劇作家を輩出した『女人芸術』が、昭和七年に廃刊となってしまう。翌年、中心になっていた長谷川時雨氏は『輝ク』という新聞タイプのものを出したが、これも長くはつづかなかった。そこで私は、夫の鈴木〔厚〕とともに、新雑誌『婦人文芸』を出した。昭和十年のことである。『女人芸術』のころからの山川菊栄、林芙美子、円地文子氏や、平林たい子、宮本百合子氏などの参加もあり、また、壺井栄氏が処女作「月給日」を発表したのもこの雑誌であった。

しかしこの『婦人文芸』も、経済的理由や戦争気運の高まり、そのほかの理由で、三年ほどで休刊の止むなきに至ってしまった⁴²。

創刊から二年後の一九三六（昭和一一）年の『婦人文芸』一月号に、「時事批判座談会」の様子が掲載されます。出席者は、富本一枝、深尾須磨子、村岡花子、丸岡秀子、平林たい子、石本静江の六名で、それに加えて、この雑誌の主宰者である神近市子が司会進行役を務めます。座談会は、税制改革案について、上流婦人の問題、退職手当法について、公衆衛生のこと、婦人の虐待、産児の過剰、流行は制御できるかといった話題に及び、当時の婦人の社会的関心事にかかわって広く論議されるのでした。

以上ここまで述べてきました内容は、『青鞥』創刊以来、日本における婦人解放運動の先駆者たちが織りなしてきていた、性と愛にかかわる極めて断片的な描写にしかすぎませんが、そうした彼女たちそれぞれの「恋愛創生」を時代の後景としながら、いよいよ一九三八（昭和一三）年の六月、高群逸枝の『大日本女性史 母系制の研究』が堂々完成し、厚生閣から出版されたのでした。一九三一（昭和六）年七月に「森の家」に隠棲して以来、俗世との交渉をいっさい断ち、優に七年に及ぶ一意専心の結晶でした。以下は、同書末尾の「紹介辭」における市川房枝の文です。

弱い肉體と闘ひながら女性史第一巻「母系制の研究」の大冊を完成出版された女史、心からの敬意と感謝を捧げると同時に、廣く一般の方々——特に婦人の方々に對し、女性の手になるこの女性史を、是非とも書架に飾られんことをおすゝめします⁴³。

次に、金子しげりの文からの一節を引用します。

われわれは、われわれの歴史を知ることによつて、現在のわれわれの使命に最も正しく立つ事が出来るのではないだろうか。同時に日本の發展の爲には、男子も亦その伴侶たる女性について知るに吝かであつてはならない。

茲に女史の勞を深く犒ひ……續稿の爲に、女史の健康を念じてやまない⁴⁴。

そして同年の一一月に双雅房から『新装 きもの随筆』が発行されます。このエッセイ集には、高群が結成した無産婦人芸術連盟に連なる望月百合子や城夏子、他方で、「高群逸枝著作後援会」に連なる富本一枝、長谷川時雨、圓地文子、佐藤俊子といった人たちも寄稿していました。

こうして一九三八（昭和一三）年が終わると、一九三九（昭和一四）年の『婦人公論』新年号は、「第一線をゆく女性 青鞞社」と題された一枚の写真を掲載します。この写真は、生田花世、長谷川時雨、富本一枝、岡田八千代、平塚らいてう、神近市子の六名がひとつのテーブルを囲み、お茶を飲みながら談笑している場面です。写真には、平塚らいてうの筆名で、短文が添えられていました。

その昔、女も人間だといつて私たちが起ち上つたとき、人たちは眼をまんまるにして驚き、あやしんだ。……今日こゝに集まつた青鞞の人たちの頭にはもう白いものが幾すちも見え……我が子の話には、いつか孫の噂もまざるやうになつた。でも、今の時代のほんたうの理想に最も敏感に、そして勇敢に生き抜きたいとおもふ。これが青鞞魂なのだから⁴⁵。

この茶話会の様子が『婦人公論』に取り上げられたのは、日支事変（日中戦争）の勃発から数えて二度目となる新年号でした。新年を祝うこの号において、「今の時代のほんたうの理想」に言及したらいてうの脳裏には、あるいは、それぞれ一人ひとりの出席者の脳裏には、どのような「理想」が描かれていたのでしょうか。そしてそれは、いかなるかたちで達成できるのでしょうか。『大日本女性史 母系制の研究』を上梓するや、手を休めることなく、引き続き「森の家」に蟄居し一日一〇時間の労働をもって、次の著作となる「招婿婚の研究」の完成に向けて、全身全霊を傾けようとしていた高群逸枝も、かつて青鞞の女たちが抱いていた「理想」をしっかりと共有し、いまなお維持していたにちがいありません。満年齢にして、らいてう五二歳、一枝四五歳、そして逸枝四四歳の一九三九（昭和一四）年の初春でした。

しかし、実際には、もはや悠長に「理想」を語る余裕は残されておらず、まさしく「きもの」から「もんぺ」へと駆り立てようとする時勢が、このとき彼女たちを取り巻いていたのです。以下は、らいてうによる回想です。

日支事変の拡大以来、戦時国家への再編成は急速に進められ、市民に対する防空、防火心得の宣伝が行なわれるようになり、昭和一三年の四月には、燈火管制規則が実施されることになりました。……昭和一四年になると警防団がつくられ家庭防空・防火体制は一段と強化され、町内自治会は、もんぺの仕立講習会をひらいて、戦時下の家庭婦人がもんぺを着用する、国民精神総動員運動に協力しました⁴⁶。

かくして、ついに一九四一（昭和一六）年の一二月、日本はアジア・太平洋戦争へと突き進んでゆくのでした。

注

(1) 『婦女新聞』第 586 号、1911 年 8 月 11 日（金）、1 頁。（「婦女新聞 第 12 卷 明治 44 年」、不二出版、1983 年 3 月 15 日／復刻版発行、265 頁。）

(2) 同『婦女新聞』、同頁。（同上、同頁。）

(3) 同『婦女新聞』、同頁。（同上、同頁。）

(4) 『婦女新聞』第 587 号、1911 年 8 月 18 日（金）、4 頁。（「婦女新聞 第 12 卷 明治 44 年」、不二出版、1983 年 3 月 15 日／復刻版発行、276 頁。）

(5) 同『婦女新聞』、同頁。（同上、同頁。）

(6) 同『婦女新聞』、同頁。（同上、同頁。）

(7) 桑谷定逸「戦慄す可き女性間の顛倒性慾」『新公論』第 26 卷第 9 号、1911 年、38 頁。

(8) 同『新公論』、41 頁。

(9) 内田魯庵「性慾研究の必要を論ず」『新公論』第 26 卷第 9 号、1911 年、6 頁。

(10) 「女性間の同性戀愛——エリス——」『青鞞』第 4 卷第 4 号、1914 年 4 月、1 頁。

(11) 「東京觀（三二） 新らしがる女（三）」『東京日日新聞』、1912 年 10 月 27 日、日曜日。

(12) 前掲「女性間の同性戀愛——エリス——」『青鞞』、3 頁。

(13) 同「女性間の同性戀愛——エリス——」『青鞞』、17 頁。

(14) 同「女性間の同性戀愛——エリス——」『青鞞』、19 頁。

(15) 同「女性間の同性戀愛——エリス——」『青鞞』、21 頁。

(16) 富本一枝「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』第 2 卷、1917 年 1 月号、71 頁。

(17) 同「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』、72 頁。

(18) 同「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』、同頁。

(19) 富本一枝「子供と私」『婦人之友』1 月号、1921 年、55 頁。

(20) 「同棲愛の家庭訪問」『婦人公論』第 15 卷第 5 号、1930 年 5 月号、18 頁。

(21) 同『婦人公論』、22 頁。

(22) 黒澤亜里子（編）『往復書簡 宮本百合子と湯浅芳子』翰林書房、2008 年、41 頁。

(23) 尾形明子「富本一枝と『女人藝術』の時代」『彷徨月刊』2 月号（通巻 185 号）、弘隆社、2001 年、17-18 頁。

(24) 平塚雷鳥「女性共産黨員とその性の利用」『婦人公論』第18巻第3号、1933年3月、132頁。

(25) 同「女性共産黨員とその性の利用」『婦人公論』、133頁。

(26) 野上彌生子「平凡なことか」『婦人公論』第18巻第3号、1933年3月、138頁。

(27) 窪川いね子「何れの矛盾か」『婦人公論』第18巻第3号、1933年3月、142-143頁。

(28) 同「何れの矛盾か」『婦人公論』、143頁。

(29) 『讀賣新聞』、1933年8月9日夕刊、2頁。

(30) 平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった③』大月書店、1992年、283-284頁。

(31) 『週刊婦女新聞』、1934年7月30日、2頁。

(32) 「女性の教育と職業と結婚の問題を中心に 家族會議」『婦人画報』第357号、1934年11月号、83頁。

(33) 同「女性の教育と職業と結婚の問題を中心に 家族會議」『婦人画報』、同頁。

(34) 同「女性の教育と職業と結婚の問題を中心に 家族會議」『婦人画報』、80頁。

(35) 同「女性の教育と職業と結婚の問題を中心に 家族會議」『婦人画報』、83頁。

(36) 同「女性の教育と職業と結婚の問題を中心に 家族會議」『婦人画報』、同頁。

(37) 同「女性の教育と職業と結婚の問題を中心に 家族會議」『婦人画報』、82頁。

(38) 同「女性の教育と職業と結婚の問題を中心に 家族會議」『婦人画報』、84頁。

(39) 同「女性の教育と職業と結婚の問題を中心に 家族會議」『婦人画報』、88頁。

(40) 丸岡秀子『田村俊子とわたし』中央公論社、1973年、9頁。

(41) 同『田村俊子とわたし』、240頁。

(42) 神近市子『神近市子自伝——わが愛わが闘い』講談社、1972年、245頁。

(43) 高群逸枝『大日本女性史 母系制の研究』厚生閣、1938年、「紹介辭」の2頁。

(44) 同『大日本女性史 母系制の研究』、「紹介辭」の2-3頁。

(45) 平塚らいてう「第一線をゆく女性 青鞥社」『婦人公論』第24巻第1号、1939年1月号、10頁。

(46) 前掲『元始、女性は太陽であった③』、319頁。

第八章 中村汀女の句誌『風花』の誕生と青鞨の女たち

一. 女たちの疎開生活と連帯の醸成

アジア・太平洋戦争は、一九四一（昭和一六）年一二月八日、マレー半島への上陸とともに、ハワイの真珠湾攻撃にはじまり、その後日本軍の戦線は拡大し続けます。しかし、一九四二（昭和一九）年六月のミッドウェー海戦で大敗を喫すると、戦局は大きく傾き、南太平洋の日本軍は次々と壊滅の道をたどっていきました。神近市子は、米軍による本土空襲が近づく気配を感じていました。「昭和十八年にはいると、英軍がベルリンを夜間攻撃しはじめた。もはやドイツの敗色は濃厚であった。日本では学徒兵が動員され、国民兵の兵役が四十五歳まで延長されて、“決戦はこれからだ”と叫ばれていたが、私は早晚東京もベルリンのように絨毯爆撃の猛威にさらされると考えた」¹。疎開の開始です。神近の回想は続きます。

そんなとき、私の頭に浮かんだのが、旧知の中溝家のある府下（都制が敷かれたのが昭和十八年）の鶴川だった。そこには、富本憲吉氏が、「ひとりで静かに絵を描きたい」ということで一軒の茅葺き小屋を借りておられたが、氏は、その家をまだ見ていず、家賃の交渉もしていない段階だった。そこで私は富本氏にたのんで、その家を譲ってもらうことになった²。

こうして本郷の下宿間を出て、鶴川での神近の疎開生活がはじまったのでした。

詩人の深尾須磨子が祖師谷へ疎開するのも、富本一枝との縁によるものでした。その経緯から疎開生活中の一枝との交流までが、『わが青春・深尾須磨子』の第三章「祖師ヶ谷時代〔前期〕」のかなに描かれています。著者は高野芳子。高野は深尾との出会いを、こう回想します。「私がはじめて深尾須磨子に会ったのは、昭和十八年二月七日、太平洋戦争がはじまって間もない頃のことであった。誰からの紹介もなしに、おさげ髪の上にリボンを結んだ十七歳の少女は、期待と畏れに胸をはずませて、その扉をたたいた。九州の片田舎の女学校から、女子大に入ってまだ一年もたたない女の子にしては、いささか生意気に過ぎたであろうか」³。深尾は、詩人としてすでに社会に認められた存在でした。若くして深尾の詩に強い感動を経験していた高野は、この日をきっかけに、しばしば休日になると、高田馬場駅に近い「寂光荘」と呼ばれる深尾の家を訪れるようになりました。しかし、「いよいよ、東京空襲がはじまりそうだというので、誰もが疎開をしだした。……『神近市子が鶴川にしたらよいというんだけどねえ』など、考えあぐんでいううちに、耳よりな情報が入ってきた。富本一枝さん……が知らせてくれた。富本家のすぐ近くに手頃な小屋があいているというのである」⁴。この小屋には、入り口の引き戸を開けると土間があり、その土間を挟んだ右手に五畳半の和室、左手に八畳の和室がついていました。裏手には、錆びついた手押しポンプとほこりだらけのゴエモン風呂がありました。深尾は、一九四四（昭和一九）年の春もまだ浅いある日、この小屋に引っ越し、こうして疎開生活がはじまります。女子大の寮に住んでいた高野も、ほとんど週末にはここへ来て、深尾と一緒に過ごしました。

ここへ移ってきて最初のころの話です。ゴエモン風呂がまだ使えない。そこで深尾は、高野を連れて富本家に行き、お風呂を使わせてもらうことになりました。以下は、そのときの

富本家の人びとの様子についての、高野の観察です。

「ちょうどよい時にきて下さったわ、まあコーヒーでも」と一枝さんに案内されて通された広い洋風の居間には、古びたソファーにもたれた憲吉さん、誰かが床にすわりこんでいたり、椅子にかけていたり、何とも形容しがたいサロン風景に、私は一瞬とまどった。コーヒーの匂い（その頃は珍らしかった）とたばこの匂いがいりまじり、家族でありながら、ひとりひとりが全く別のことを考えているふうな、何かけだるいような、ぜいたくなような、きらびやかだが、重く沈んだ暗さの漂った雰囲気であった。ここには、買出しだ疎開だと戦争にふりまわされている一般庶民のくらしとはかけはなれた別世界の優雅（？）さがあった⁵。

憲吉は、湯上りのふたりを待っていました。「『どうぞ、これを』憲吉さんが手にとって差し出した白地の湯呑は藍で薊のもようがえがかれ、その中に踊るように、須磨子の文字が染付けられていた。……『これは、あなたに』憲吉さんはうすい藍色の美しい玉をひとつ、私の手にのせてくれた」⁶。

次の挿話も、疎開中の出来事についての高野の回想です。このときまでに高野は、深尾のことを「マダム」と呼ぶようになっていました。

「何か、たきつけにつかう紙くずないかしら」「いいものが、ある、ある」マダムは行李いっぱいにつめこまれた手紙類を持ちだしてきた。おどろいたことに、その殆んどが富本一枝さんからのものであった。私は、焚き口に手紙をポンポン投入して火をつけた。読んでみたい誘惑にかられた。胸をドキドキさせながら、文面に目をはしらせると、「どうじゃ、ようもえとるか」マダムがのぞきにきた。「そんなものを読んではいけない。いいか、封筒に入れたままもすんだ」私はワルサをみつけられた子供みたいに小さくなって、その上に枯枝をくべ、古い柱のきれっぱしをのせた。実によく燃えた。メラメラと燃えあがるほのおをみつめながら、私は、一枝さんの情熱がゴエモン風呂をわかしていることにあわれさを感じた⁷。

また、疎開生活のなかでは、こんなこともありました。深尾は高野芳子のことを「ヨシコ」と呼んでいました。

「深尾さん、まだ起きていらっしゃいます？ 一枝です、ちょっとここ あけて頂けないかしら」……白い着物をゾロリと着流して、一枝さんは素手に大きな魚を一匹、高々とかけげるようにぶらさげて立っていた。一枝さんの目は少しつりあがり、うるんでみえた。月の光に、青ぐろくヌメヌメと魚のうろこが光り、尾っぽをつかんだ手がこきざみにふるえている。……マダムは殊さらにとりすましたうけこたえをしているが、いっこうに手をだそうとはしない。素手で受けとるには、何やら気味がわるすぎるのだ。私はあかりをつけて急いで大皿を探した。皿にのせてもらった魚は、ずっしりと意外な重さで、なまぐさい匂いが立ちこめた。……「あの方、どうかなさったのかしら」「さっきから 魚をさげて じっとその辺に立っていたのかもしれないよ」「まさか」「ヨシコの

ことが気になって 気になってしょうがないのかもしれない」「どうして？ どうしてなの？」「そんなことは分らなくなっちゃいいんだよ。さあおやすみ」と言われても、おいそれと眠れるものではなかった⁸。

若いヨシコさえも、マダムと荻野綾子の関係を知っていました。このふたりの関係は、すでに多くの人が知るところとなっていました。といいますのも、第七章の「『青鞥』創刊以降の婦人運動家たちの『恋愛創生』」においてすでに紹介していますように、一九三〇（昭和五）年五月号の『婦人公論』に「同棲愛の家庭訪問」と題した記事が掲載されており、深尾須磨子と荻野綾子、吉屋信子と門馬千代子、金子しげりと市川房枝の三組のカップルの「同棲愛」家庭が紹介されていたからです。この雑誌が発売されたときは、ヨシコはまだ五歳前後の幼子だったことを勘案すれば、ヨシコがこのことに気づくきっかけは、長じてその後誰かに聞かされたことによるものだったのでしょう。

その出来事から一夜が明けました。ヨシコは、マダムから同性愛についての話を聞かされました。ヨシコの回想は、こう続きます。

翌日 女と女が愛しあう、いわゆる同性愛について、ギリシヤの女詩人サッフオあたりまでさかのぼって解説してもらえたのは、もうけものだったが、「ほら、以前同居していらした荻野綾子さん、あの方とはどうだったの？」「何が？」「何がって、その…今のおはなしみたいな…」と、ためらいがちに投げてみた質問も、「アホーやなあ、そんな噂を真にうけとったのか」と、軽くいなされた。そうであったのかみしれず、なかったのかみしれず、確証はない。だが、「何もびっくりするには及ばない。そんなこともあるというだけの話だよ。ゆうべのことだって…」といわれても、前夜のできごとが、それとどう結びつくのか、私には判じ難かった⁹。

マダムとヨシコの会話はさらに続きます。マダムは、憲吉の心情を察して、「憲吉さん、お気のどくだと思うだろう」と、ヨシコに問いかけてみました。

「憲吉さん、お気のどくだと思うだろう」と同意を求められても、何がどうお気のどくなのか見当もつかず、私には返事のしようがなかった。その大きな魚は、“もったいながりや”のマダムも、さすがに食べてみようとは言いださず、庭の隅のいちぢくの木の下に穴を掘って埋めてしまった¹⁰。

富本家につながる坂を上っていく女たちの姿が、この時期しばしば見受けられました。陽の息子の岱助も、一九四四（昭和一九）年の六月の誕生日で、満七歳にまで成長していました。ヨシコと岱助は、なかなかの仲よしでした。「女子大生といっても、一人娘でのんびり育った子供気分のぬけきらない私と、年にしてはオシャマなこの男の子はヘンに気があった」¹¹。あるときのことです。

岱ちゃんと畦道でもち草をつんでいると、富本邸へ上がっていく坂道に、小ぶとりの男の姿が見えた。「あの人ね、男みたいだけど、本当は女なんだよ。名前は、オモベ・ワ

ルコ」もどってから大真面目でマダムにその話をすると、彼女ははじけたように笑い出した。「バカだねえ、岱助にかつがれたりして、あれは、軽部清子なんだよ」と、この風変りな女性の話を一くさりきかされた。作家の大谷藤子さんも、しばしば富本邸への道を上っていった¹²。

一九三五（昭和一〇）年の『中央公論』一二月号の「新人傑作集」に所収されている「血縁」が、大谷藤子の作家としてデビュー作のひとつにちがいません。一九六三（昭和三八）年に憲吉が亡くなると、ただちに筆を執り、「失われた風景」と題するエッセイに仕上げ、富本家を訪問していた当時を懐かしみました。「私は戦争中から戦後にかけて、しげしげと富本家を訪ねた。陶芸家として第一人者である先生を訪ねたのではなく、夫人と親しくしていたからだった。ときどき泊まり込んだりした」¹³。大谷は、泊まり込んだ翌日のある朝のことを鮮明に記憶していました。

私はいまでも思い出すが、富本家に泊った翌朝早く、近くの雑木林を歩きまわったことがある。朝霧が丘にたなびいて、すがすがしい初夏の季節だった。私の着物は朝露にしっとり濡れ、みづみづしく照り映えた若葉の香りがあたりにたちこめていた。私はその香りをなつかしみ、ほっとひと息つくような思いだった。なんという静かな自然のたたずまいだろう。私は心のやすまるのをおぼえた。そのとき先生〔憲吉〕の仕事場になっている建物のあたりに人影が見えた。遠くから眼を凝らすと、それはたしか先生だった。こんなに朝早く、中止しているはずの仕事場に先生は入っていくのだろうか。邸から道を距てたところにある小づくりな建物が先生の仕事場になっていた。私が近づくと、先生はうつむいて、ろくろをまわしておられた¹⁴。

大谷の記憶はまた、当時の憲吉と一枝の研ぎ澄まされた神経のありようにも向かいます。

先生〔憲吉〕も夫人〔一枝〕も神経が鋭く、ハラハラするようなことがあった。二人は同質の神経をもっていて、不意に鋭く研ぎすまされてカチあうときがあると私には思われた。美を理解する高度の神経をもっている二人は、その点では類いなく似合いの夫婦だった。夫人は直観力の鋭さで、先生よりも或いは純粋な美の理解者であったかも知れない。夫人は心の芸術家だった。しかし先生は現実に仕事をしていて、美を表現するための苦しみをしているということで夫人とはちがっていた。……しかし二人の神経が研ぎすまされてカチあうのは、多くは愛情の問題だった。二人は少しも妥協しなかった。……二人はもとめすぎ、少しでも疑惑のある愛は許すことが出来なかった。それが疑心暗鬼でも神経が研ぎすまされた。美を追求する同じ神経の純粋さで、たち向かうのだった¹⁵。

大谷の観察するところによれば、憲吉と一枝が「カチあう」のは、憲吉の作品を巡る評価についてというよりは、むしろ「多くは愛情の問題」であり、ふたりとも「少しでも疑惑のある愛は許すことが出来なかった」。それでは、その「少しでも疑惑のある愛」とは、一体、何を指しているのでしょうか。それについて大谷は、具体的には何も語っていません。

B29 型長距離爆撃機による本土空襲が、一九四四（昭和一九）年六月の北九州爆撃からはじまり、十一月には、東京がはじめての爆撃に見舞われました。以下は、神近市子の回想です。

私の思ったとおり、翌一九四年六月、サイパン島の守備隊が玉碎し、そこを基地とした B29 が十一月から本土の爆撃を開始した。都市での食料事情も極度に悪化した。私は家の裏に七羽の鶏を飼ったが、そのわずかな卵さえ、買出しにやってきた富本一枝を狂喜させるような時代になってしまった。

「まあ、きょうは九つもある。二つは茹でて私が食べる。あとの七つは病気の息子に持って行ってやるわ」

彼女は入口の戸をガラリとあけるより早く、物置小屋の中をのぞいて甲高い声をあげるのだった¹⁶。

こうした一枝の買い出しに、しばしば大谷藤子も同伴しました。一枝の戦時スタイルがおしゃれだったことが、大谷の記憶に残っていましたし、何よりも一枝は、大谷にとって不思議な魅力をもつ存在でした。

私は夫人に誘われて食糧の買い出しに出かける日が多かった。電車で三十分ばかり乗り、それから一里の道を歩くのである。低い山々の間にある村の街道を、長身の夫人は網袋をしょって軽快な足どりで歩いて行った。私は夫人がそのころ人々の日用品になっていたリュックサックをしょっているのを見たことがない。麻のしゃれた網袋の中には食糧を包むための風呂敷や袋がいてあるのだった。……夫人は不思議な魅力があって、そばにいと私を仕合せな気持ちにさせた。「神近さんのところへ寄りますよ」¹⁷。

往復二里の買い出しの帰りに、ふたりして神近市子の家に立ち寄り、一休みすることもありました。『お茶だけでなく、何かお出しなさいよ』夫人は神近氏にこう言ったりして、のびのびとした。……『これいつあげましたか』夫人はそんなことを言いながら、お菓子皿をとりあげてつくづく眺めたりした。……その〔神近の住む〕農家も、後になって空襲で焼けた。……『ほんとうに丸焼けですよ』夫人は気の毒そうに言って、とりあえず衣類などを行李につめて届けるのだった¹⁸。

空襲が激しくなってくると、村々を訪ねて食料を調達するこうした買い出しの生活も限界に達し、米軍が投下する焼夷弾からいのちを守るために、富本家も、祖師谷の家を離れ、疎開を余儀なくされました。大谷は回想します。「富本さん、家中で秩父の私の実家に疎開してみえたりしました」¹⁹。

一九四五（昭和二〇）年に入ると、戦局はさらに悪化の一途をたどりました。三月一〇日、焼夷弾一九万個の投下により約十万人が焼死しました。東京大空襲です。続く四月、米軍、沖縄本土に上陸。八月、広島と長崎に原爆投下。そしてポツダム宣言を受諾し、日本は敗戦しました。八月一五日、終戦のこの日を東京美術学校の教授を務めていた憲吉は、作品の疎開先である岐阜県の飛騨高山で迎えました。一枝たちは、大谷の実家のある埼玉県秩父で

——。すべてが終わりました。神近市子五七歳、深尾須磨子五六歳、一枝五二歳、大谷藤子四三歳の暑い夏でした。

二. 中村汀女の主宰句誌『風花』の誕生

中村汀女もまた、戦時中の買い出し仲間でした。汀女は、当時をこう回顧して書いています。「作家の大谷藤子氏とは近所だから知り合い、そして紹介してもらったのが富本一枝氏である。さっそく買い出しに連れられた。小田急線の鶴川に住まっておられる神近市子氏を『たよる』というのであった。初対面、わが家にあったビールを二本おみやげにした」²⁰。

汀女（本名は破魔子）は、一九〇〇（明治三三）年四月一日に、斎藤平四郎と亭のひとり娘として熊本県飽託郡画図村（現在の熊本市東区）の地に生まれ、熊本県立高等女学校（現在の熊本県立第一高等学校）を卒業。一九二〇（大正九）年、二〇歳のとき、『ホトトギス』に初投句し、同じくこの年、同郷出身で税務官吏であった中村重喜と結婚。その後順調に句作を続け、一九四〇（昭和一五）年に『春雪』を発表。続けて、戦局厳しいなかであって、一九四四（昭和一九）年に、『汀女句集』を刊行します。汀女が富本一枝と知り合うのは、戦争末期の耐乏生活を強いられていた、ちょうどこの時期になります。

終戦の翌年（一九四六年）、『風花』創刊の話が持ち上がりました。汀女はこの年、盲腸炎を起こして、北沢の鶴沢病院に入院しました。「院長、生生子、ゆみ女の夫妻は俳句を作っておられ、やがて句会、私は二階の病室からその座敷に加わった。そこで『風花』発刊の話が出たのであった。発行は二十二年の四月、富本憲吉氏が表紙を描いて下さった」²¹。

汀女の直前の発病により、刊行が一箇月遅れ、『風花』創刊号が実際に発行されたのは、奥付によると、一九四七（昭和二二）年の五月一日のことでした。さらにこの創刊号の奥付には、編輯者に富本一枝、発行者に中村汀女の名前が記載され、発行所は風花書房で、所在地の住所は、汀女の自宅の「東京都世田谷区代田二ノ九六三」となっています。また、「本號特價十八圓」の文字も並びます。目次に目を移しますと、最初の行に「表紙・扉・カット」として富本憲吉の名前が明記されていました。

一枝は創刊号の「後記」にこう書きました。「中村さんも私も、出版事情が日に日に悪い時期に、雑誌を出すといふことがどんなに困難な仕事であるかと云ふことは充分計算にいられてゐましたが、さて仕事にかかってみると、豫期しない障害が次々にやつてきて、幾度か引き返したくなりました。それでもとにかく此處まで辿りつきました。それだけに嬉しさ格別です」²²。そして、次のように結びました。「『風花』を立派なものにするためには編輯者の責任重大であることは申すまでもありませんが、良き投句者と好意ある読者の御支援がなければ成しとげられないことです。……現代俳句として、自他共にゆるせる作品を送つてほしいものです」²³。それを受けて、次に汀女による「後記」の文が続きます。「私の部屋の外に女竹數本、朝、窓を開けると笹の先の一つ一つに露が光り、次々にばらばらとこぼれます。これは去年の夏にも綺麗だと見てゐましたが、今年はまた今年はじめて見つけたやうなうれしさです。その竹の間に、もう湧き立つ白い雲がかかり、雲をみると、ここの狭い空が無限にひろがつて、私をたのしくさせてくれます。『風花』の後記を書く日となり、あらたまつた思ひとなつて竹の空を眺めて居ります」²⁴。

創刊号には、武者小路實篤が「晝をかく事で」、室生犀星が「(俳句) 蔭の臺」、本多顕彰

が「一般文學論の適用」、河盛好蔵が「何を讀むべきか」を寄稿しました。汀女は、振り返ります。「いま思えば盲蛇に怖じずと言いたいお願いをして原稿をいただいているし……こうしたお願いなども編集をやって下さった富本一枝氏の配慮であった。諸先生にはほとんど稿料というものもさしあげ得なかった」²⁵。

一九四七（昭和二二）年一二月一日発行の『風花』（四・五合併号）の「後記」には、吟行についての汀女の短文が添えられています。「十一月風花句會は思ひ立つて、郊外吟行となり、祖師谷の富本邸に集りました。折からの小春日に、丘の孔楽紅葉美しく、稲架の並ぶあたゝかい畦道を歩いて、いゝ作品が集りました」²⁶。そしてこの合併号には、俳人の水原秋櫻子が「俳壇月評」を、民俗学者の柳田国男が「病める俳人への手紙」を寄稿していました。秋櫻子は、富本憲吉邸をよく訪れる客人で、「祖師谷の客間」と題したエッセイのなかで、その客間（居間）の様子について、「畳ならば四、五十畳も敷けやうといふ板の間に絨毯が敷かれ、二三脚の卓とそれをかこむ椅子とが適当に配置されてゐる」²⁷と、描写しています。同じく成城の加藤武雄邸では、毎月連句の会が催されており、そこには柳田国男も参加していました。汀女は「連句の会」と題したエッセイを『定本 柳田國男集』の「月報2」に寄稿し、一九四九（昭和二四）年三月の「五吟歌仙 峡深くの巻」を紹介したあと、文末に、「先生から『芭蕉の恋の句』や『病める俳人への手紙』などの貴重な長い原稿をいただいて居り、読み返すたびに勿体ない気がする」²⁸と、謝辞を述べています。

ちょうどその二〇年前、この成城地区は、雑木林と田畑に囲まれた武蔵野の面影がいまなお残る自然環境を背景として、成城学園の移転や小田急線の開設に伴いながら、新しい文化人村としてその姿を現わそうとしていました。中江百合子、平塚らいてう、富本一枝のそれぞれの家族が、新興住宅地であるこの地区への第一弾の新築移住民となっていました。同じくそのころ、民俗学者の柳田国男の家族も成城へ引っ越してきました。柳田国男を祖父にもち、のちに南薫造の孫の南建と結婚することになる八枝子は、自著の『洋画家南薫造 交友関係の研究』のなかで、興味深い話を披露しています。八枝子の父親は柳田為正といい、一九二七（昭和二）年に為正は、「牛込から転校のために、父親柳田国男と書生二人と共に、新築した家に急ぎ移り住んだ」²⁹。

富本憲吉は、東京美術学校の先輩の南薫造を頼って英国へ留学しています。また、「中江百合子は、南とは一番町教会、後には富士見町教会での直接の縁もあつてか、既に明治四四年の富士見町教会での南の個展で絵を買っている」³⁰間柄でした。おそらくこうした経緯から南は、関西の実業家中江家に嫁いだ百合子を、安堵村に住む憲吉と一枝に紹介していたものと思われます。成城への転居以前の話です。

それぞれの家族が成城に移り住んだ一九二七（昭和二）年のころ、中江百合子の三男の昭男、柳田国男の長男の為正、平塚らいてうの長女の曙生、富本一枝の長女の陽が、小学校の同級生となりました。一方で、らいてうの長男の敦史と一枝の次女の陶が、同じ一九一七（大正六）年の生まれで、彼らより二歳年下でした。

そうした地域住民としての新たな人間関係が生まれて以来、いまや、およそ二〇年の歳月が流れました。平塚らいてうの自伝のなかに、成城地区の婦人仲間の句会について、次のような回想を読むことができます。

知人の料理研究家中江百合子さんのさそいかけで、成城に住む婦人仲間の句会が、一九

四六年十一月から、中村汀女さんをむかえてひらかれていました。わたくしがそれに加わったのは、四八年のはじめごろかと思います。……中江さんにごく親しいあいだからの富本一枝さんも、ときには顔を見せますが、句作にはまったく加わりたくしません。……彼女の句というものは、ついぞ目にしたことがありません。……句会の日は……まだ物の不足していたころですから中江さんが手ずからつくってくれる、蒸し寿司やお雑煮をいただくことが、また楽しみの一つでした。……『風花』は、四七年に創刊されましたが、わたくしはその三号から出句しています³¹。

らいてうは、『青鞨』創刊以前の日本女子大学校の学生のころから俳句をたしなんでいましたし、中江百合子は、憲吉の陶器に季節の料理を盛り付けることをことのほか喜びとしていました。以下の二句は、一九四八（昭和二三）年一二月一日発行の『風花』（第一〇号）のなかの中村汀女選「風花集」からの抜粋で、前者が平塚明子（らいてう）、後者が中江百合（百合子）の作です。

大利根の堤はてなき月の人
十五夜の次郎丸まだ青うして

この句会は長く続きました。陽と同級生だった井上美子はこのように回想します。「中江邸の句会は進駐軍の将校宿舎に接收され、その後南側の私の家に移り、つづけられた。以後昭和五十四年、先生八十歳の春まで三十三年間毎月一回句会指導に来ていただいた」³²。

他方で汀女は、郷土をととても大事にし、愛します。『風花』創刊からちょうど一年を経た一九四八（昭和二三）年の五月五日、汀女は、熊本駅に降り立ちました。以下は、そのときの汀女の、生まれ故郷に寄せる思いです。

九州線混む、深夜の汽車に虫聞ゆ。二時熊本駅着、人々に交じって東京に手紙を書く、夜風が少し寒い。ようやく明け放れた町の彼方から始発の市電が来た。まだ覚めない町の軒並に青い菖蒲が葎いてある。水前寺駅は広い道路のまん中で、しつとりとまだ朝靄が漂う。何かしら誰にも知られないで母の家に着きたいと思う。いよいよ江津の堤、靄晴つつ、真っ青な岸草に包まれて流れゆく水。私が思い描いて来たのはこの水のこんなに流れゆく姿であった。右に展^{ひら}く野の麦やや黄ばみ遥かに父上の墓地³³。

一九六一（昭和三六）年元旦の『熊本日日新聞』（新年号三部四面）を見ると、熊本を離れて久しい、中村汀女、江上トミ、高群逸枝の肥後の著名女性による新春鼎談が企画されていました。江上トミは、当時NHKテレビの「きょうの料理」で人気を博していた料理研究家です。高群逸枝は、対面出席はせず、紙上参加をしています。話題は、家のこと、学校のこと、郷土料理のこと、風土のこと、方言のことなど、多岐にわたりました。各人の発言からそれぞれふたつほど選び出して、以下にまとめます。

中村汀女は、「いまは家が並んでいます、水前寺から味噌天神まで家はございませんでした。阿蘇のスロープがみえてとても感じがよかった」と回想し、郷土料理の思い出を尋ねられると、「私も『イキナリダゴ』『ダngo』ではダメダゴ。それにダゴ汁ね」と、答

えます。この鼎談は、「しかし何といっても暖かい日の光の中の故郷を持っているということとは幸福ですね」という汀女の言葉でもって締めくくられます。

江上トミは、母の厳しさについて問われると、「そりゃとても。しかられるときは『武士のこどもというものは』とか『おちぶれたりとはいえどもあんたは江上安太の孫でございますよ』といわれて育ったことを披露し、熊本の風土としては、「私は阿蘇の観光ホテルからながめたあの辺一体の景色が好きですの」と、振り返ります。

高群逸枝は、思い出に残る郷土料理を聞かれると、「私はお客があると酒のさかなに『ヒトモジのぐるぐる』をよく作りました」と応じ、熊本弁については、『『行かす』とか『言わす』とか『さるかす』とかいうように、さ行の敬語を語尾にした熊本言葉は、純粋な古語ですよ。簡明でもあるし、このまま長く保存したいものですね』と、希望を伝えます。

この鼎談で中村汀女と高群逸枝は直接対面することはありませんでしたが、『母系制の研究 大日本女性史第一巻』（改訂三版、一九四八年、恒星社厚生閣刊）の末尾の跋文のなかにある高群逸枝の著作出版の支援者リストに中村汀女の名は挙げられていました。

それではここで、代表的な身近な句碑を、自伝『汀女自画像』（日本図書センター、一九七四年）の巻末にある「年譜」から抜粋して、紹介しておきたいと思います。

夏雲の湧きてさだまる心あり

（一九八二年五月に、母校である熊本県立第一高等学校の校庭に建立）

とどまればあたりにふゆる蜻蛉かな

（一九八五年一〇月に、生地である熊本市の水前寺公園に建立）

三．「第二藝術」そして「台所俳句」という蔑視

『風花』創刊の半年前の一九四六（昭和二一）年の十一月、桑原武夫の「第二藝術——現代俳句について——」が『世界』に掲載されました。論旨を損なわないようにするために、少し長くなりますがそのまま、以下に、その結論部分を引用します。

近代藝術は全人格をかけての、つまり一つの作品をつくること、その作者を成長させるか、墮落させるか、いずれかとなるごとき、厳しい仕事であるといふ観念のないところに、藝術的な何ものも生まれない。また俳句を若干つくることによつて創作體驗ありと考へるやうな藝術に對する安易な態度の存するかぎり、ヨーロッパの偉大な近代藝術のごときは何時になつても正しく理解されぬであらう。

そこで、私の希望するところは、成年者が俳句をたしなむのはもとより自由として、國民學校、中等學校の教育からは、江戸音曲と同じやうに、俳諧的なものをしめ出してもらひたい、といふことである。俳句の自然觀察を何か自然科学への手引きのごとく考へてゐる人もあるが、それは近代科學の性格を全く知らないからである。自然または人間社會にひそむ法則性のごときものを忘れ、それをただスナップ・ショット的にとらへんとする俳諧精神と今日の科學精神ほど背反するものはないのである³⁴。

これは俳壇に大きな波紋を投げかけました。一九四七（昭和二二）年五月一日刊行の『風花』創刊号の「後記」におきまして、編集者の富本一枝も、そのことに言及します。

桑原武夫氏が昨年十一月の「世界」で「第二藝術」を愛表された後、俳壇に對し俳句に就いて各方面から色々と意見が出て、ことに俳句誌はそのため色めいたやうに見受けられました。ところで、先達、桑原氏を訪ねてきたといふ人からこんな話をきゝました。

桑原氏は、あの第二藝術論のために、俳壇人があゝまで大騒ぎしやうとは意外であつた。俳壇といふところは、あんなことぐらゐで騒ぎ出すやうなものを内にも外にももつてゐたのだつたのかと、かへつて自分の方が驚いたほどだといはれたといふことです。なかなか面白い話だと私は思ひました。とにかく問題といふものは、持ち廻つてゐると、論議のための論議になる危険性があります。要は、作者の自覺と見識にかかわつてゐることで、ここに俳人の反省の餘地があると思はれます。動じない態度といふものは、立派な仕事をするために、精魂をかたむけきつてゐる人だけに見られるもののやうです³⁵。

「台所俳句」という蔑称については、汀女自身が、こう晩年に回顧しています。

ひところ、立子さんや私の作るものは台所俳句といわれ、凡俗な道を歩むものだという事になった。「台所俳句」とは女流の句をけなすのに、大変重宝らしく、あらゆる人が使った気がするし、現在に至るまで尾をひいている。私はちっとも気にしなかった。私たち普通の女性の職場ともいえるのは、家庭であるし、仕事の中心は台所である。そこからの取材がどうしていけないのか。ひとりの女の明け暮れに、感じ浮かぶ想いを、ひとりだけの言葉にのせ文字にする、それだけでよろしいのではあるまいか。俳句第二藝術論もやかましかったが、そんなむずかしいことは考えないで、自分の浮かび来るものを作るしかなかった³⁶。

俳句は「第二藝術」とさげすまれ、女のつくる句は「台所俳句」とやゆされる。汀女自身、二重の差別に、一時期身を潜めていたのかもしれない。

井上美子は、『私たちの成城物語』のなかの「中村汀女と成城」の章を結ぶに当たって、次の言葉でもって恩師の偉業を偲びます。「日本の四季をこよなく愛し、春、秋はもとより寒中の厳しさ、炎昼の煌めき、人間とともに生きるすべての動植物を佳しとしうべな諾った汀女師の心を心とし、今は残された月日、平成の世を平和の裡に生きつづけたいと希うのである」³⁷。

四. 『風花』の継承——現代の母系制か

一九八七（昭和六二）年四月、『風花』創刊四〇周年と米寿を祝う会が、ホテルオークラにて華やかに開催されました。そして、その翌年の九月二〇日に、呼吸不全のため、作句と選句に捧げた八八年の中村汀女の生涯が幕を閉じました。

述べてきましたように、句誌『風花』の誕生には、成城という文化人や資産家が集う新しい住宅地が舞台として存在していました。そして、その舞台に、戦時下において買い出しや疎開を通じて交流を深めていた女性たちが、新たな主役となって躍り出ようとしていました。そうした状況下において『風花』は、一九四七（昭和二二）年五月一日、戦後すぐのいまだ物資が乏しい困苦の時代に産声を上げたのでした。

周知のように、女性が主宰する文芸雑誌には、輝かしい歴史があります。一九一（明治四四）年創刊の平塚らいてうの『青鞞』、一九一四（大正三）年創刊の尾竹一枝（のちの富本一枝）の『番紅花』、一九二八（昭和三）年創刊の長谷川時雨の『女人藝術』、一九三〇（昭和五）年創刊の高群逸枝の『婦人戦線』、そして一九三五（昭和一〇）年創刊の神近市子の『婦人文芸』がその好例となります。そのような意味で『風花』の発刊は、女性による主宰誌の燦然たる歴史を、戦後の新時代へ向けて架橋する、生命力に満ちた画期的な出来事であったといえるでしょう。加えて『風花』を特徴づけるのは、戦前の諸雑誌がどれも短命であったことに比べて、いまなお長命を堅持していることです。

主宰者は、中村汀女から娘の小川濤美子へ、そしてその娘の小川晴子へと引き継がれてゆきます。創刊からしばらくのあいだ一枝が編集を担当した汀女の句誌『風花』は、その後長く愛読され続けるも、惜しまれて二〇一七（平成二九）年の一〇月号（七七四号）をもって終刊します。最終号に「終刊のごあいさつ」を寄稿した汀女の孫の小川晴子は、そのなかで、創刊号の「後記」に一枝が書いていた言葉を引用して、こう記しました。

『風花』創刊号の後記に富本一枝氏が記された「風花を立派なものにするためには編集者の責任が重大であることは申すまでもありませんが、良き投句者と好意ある読者のご支援がなければ成し遂げられないことです。」との文章があります。「風花」の七十年の歴史は、まさにこれを築き上げてくださった会員の皆様の、俳句を詠む喜びと、結社を愛する深い情熱と、弛まない精進の結晶であります。『風花』は私共の心の支えであり、大きな誇りでもあります³⁸。

こうして『風花』自体は、第七七四号を最後に七〇年という永久の歴史に幕を閉じ、翌月号（通算七七五号）からは誌名を一新し、『今日の花』へと生まれ変わりました。「今日の花」は、汀女が自戒の言葉としていた「今日の風、今日の花」に因むといえます。「今日には今日の風が吹き、今日には今日の花が咲く、自然に抗わず、それに身を任せよ」といった汀女の自然観がこちらへと伝わってくるようです。ここに「母系制」の原理の一端を見る思いがします。

翌月号（二〇一七年一月号）から、句誌名が『風花』から『今日の花』へと変更され、主宰者も、汀女の娘の小川濤美子から、その娘の小川晴子に引き継がれ、その創刊第一号（通巻七七五号）が、新たに世に出てゆきました。『今日の花』の表紙を飾るイラストには、『風花』創刊号の表紙のために一枝の夫で陶工の憲吉が描いたイラストがアレンジされて、再利用されました。こうして、創刊号の「後記」において一枝が記した精神と、創刊号の表紙のために憲吉が創案したイラストが、悠々七〇年もの時空を超えて、いまなお生き続けようとしているのです。

注

- (1) 神近市子『神近市子自伝』講談社、1972年、224頁。
- (2) 同『神近市子自伝』、同頁。
- (3) 高野芳子『わが青春・深尾須磨子』無限、1976年、15頁。
- (4) 同『わが青春・深尾須磨子』、36頁。
- (5) 同『わが青春・深尾須磨子』、47頁。
- (6) 同『わが青春・深尾須磨子』、48頁。
- (7) 同『わが青春・深尾須磨子』、49頁。
- (8) 同『わが青春・深尾須磨子』、50-51頁。
- (9) 同『わが青春・深尾須磨子』、51頁。
- (10) 同『わが青春・深尾須磨子』、52頁。
- (11) 同『わが青春・深尾須磨子』、46頁。
- (12) 同『わが青春・深尾須磨子』、52頁。
- (13) 大谷藤子「失われた風景」『學鐙』第60巻第12号、1963年12月号、42頁。
- (14) 同「失われた風景」『學鐙』、44頁。
- (15) 同「失われた風景」『學鐙』、同頁。
- (16) 前掲『神近市子自伝』、225頁。
- (17) 前掲「失われた風景」『學鐙』、42-43頁。
- (18) 同「失われた風景」『學鐙』、43-44頁。
- (19) 尾形明子『『女人芸術』の世界——長谷川時雨とその周辺』ドメス出版、1980年、134頁。
- (20) 中村汀女『汀女自画像』日本図書センター、1974年、92頁。
- (21) 同『汀女自画像』、97頁。
- (22) 富本一枝「後記」『風花』創刊号、風花書房、1947年、44頁。
- (23) 同「後記」『風花』創刊号、45頁。
- (24) 中村汀女「後記」『風花』創刊号、風花書房、1947年、45頁。
- (25) 前掲『汀女自画像』、101-102頁。
- (26) 中村汀女「後記」『風花』四・五合併号、風花書房、1947年、48頁。
- (27) 水原秋櫻子「祖師谷の客間」『陶説』36号、1956年、77頁。
- (28) 中村汀女「連句の会」『月報合本資料第一』（定本柳田國男集付録）筑摩書房、1981年、16頁。
- (29) 南八枝子『洋画家南薫造 交友関係の研究』杉並けやき出版、2011年、56頁。
- (30) 同『洋画家南薫造 交友関係の研究』、同頁。
- (31) 平塚らいてう自伝『元始、女性には太陽であった④』大月書店、1992年、79-80頁。
- (32) 中江泰子・井上美子『私たちの成城物語』河出書房新社、1996年、157頁。
- (33) 前掲『汀女自画像』、109頁。
- (34) 桑原武夫「第二藝術——現代俳句について——」『世界』岩波書店、1946年、63頁。
- (35) 富本一枝「後記」『風花』創刊号、風花書房、1947年、44頁。

著作集 14 『外輪山春雷秋月』

火の国の女たち

——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞞の女たちとの友愛

第八章 中村汀女の句誌『風花』の誕生と青鞞の女たち

(36) 前掲『汀女自画像』、72 頁。

(37) 前掲『私たちの成城物語』、同頁。

(38) 小川晴子「終刊のごあいさつ」『風花』終刊号（第 774 号）、2017 年、3 頁。

第九章 志村ふくみの染織家への道を支える富本憲吉・一枝夫妻

一．実母の織物への情熱と挫折

晩年志村ふくみは、自著の『伝書 しむらのいろ』の巻末に掲載されている「結、しむらのいろ 三代をとおして」のなかで、一代目に相当する、実母の小野豊^{とよ}について、こう書いています。

大阪の商家に生まれ、夕陽丘女学校を卒業して、十九歳で医家に嫁ぎ五人の子供を産んだ母・豊は、女学校時代の友人富本（尾竹）一枝によって大きく運命が展開した¹。

尾竹一枝の妹の福美もこの女学校に通っていました。そのときの福美の同級生に小野豊がいました。年の近い三人は、よく一緒になって遊びました。志村「ふくみ」の名は、一枝の妹の福美からとられているといえます。

志村の別のエッセイに、「母との出会い・織機との出会い」と題された一文があり、そのなかで、実母の豊が、若き日に大和（奈良）の安堵村に一枝を訪ねていたことを紹介しています。

やがて三児の母となった或る日、阪急電車の中で、音信の絶えて久しい尾竹一枝さんにばったり出会った。その時は既に結婚され、富本憲吉夫人になっていたのであるが、偶然の再会を喜び合い、その時より終生の深い友情で結ばれることになった。母はいまも小篭に一枝夫人の手紙を大切にしまっているが、巻紙にあふれるような豊かな筆致で、率直すぎるほどに母を戒め、いたわり、なかには三メートルに及ぶほどの手紙もある。先日、それをみせてもらっていると、はからずも再会の日の手紙が出てきた²。

一枝からのその手紙には、こう記されていました。

あんまり突然でまだ嘘だったと思えるのです。私はうれしく思えます。このごろにないうれしさです。あなたは昔のようにいい方でした。善良さにあふれていました。……きのうはいい日でした。近い中に是非安堵村にいらして下さい³。

一枝は、女学校を卒業すると、しばらく絵の勉強をするも、一九一（明治四四）年九月に平塚らいてうによって創刊された『青鞞』に魅了されると、さっそくその社員に加わり、退社したのちは、英国の地で、デザイナーで詩人にして社会主義者でもあったウィリアム・モリスの思想と実践を学び、帰朝したばかりの富本憲吉と結ばれ、翌年の一九一五（大正四）年三月に東京を離れ、夫の生地である安堵村に移ると、憲吉は製陶の道へ歩みはじめ、一方の一枝は、『婦人公論』や『婦人之友』などへの常連寄稿者として自らの活路を見出そうとしていたのです。

阪急電車のなかでの最初の再会からしばらくして、豊のもとへ一枝からの電報が届きました。「カマヒラク アスコラレタシ」。志村は、そのときの母の様子をこう記します。

「見るもの見るもの新鮮で、美しいて、世界が違うてみえた」

貧乏しても、美しい物を創るために打ち込んでいる二人、夫が窯から出してきた壺を、宝物のように讃える夫人、明治から大正、昭和と、はじめて封建社会の厚い壁を突き破り、女性解放の実践に入った女性の吹き上げるような生活があった⁴。

豊は、安堵村での一枝の生活に、このように驚きました。そしてまた、次のように、目を見張りました。

「女かて、自分の思いを貫いて生きている人がいる」

母は心を揺さぶられて帰ってきた。その日から夫人の死に至るまで、五十余年、「富本さんから受けた恩は語りつくせるものではない」と常々語っている⁵。

豊と一枝が阪急電車の車内で偶然にも遭遇したときには、まだ、第四子であるふくみは生まれていません。ふくみが生まれるのは、一九二四（大正一三）年九月三〇日のこと。しかし、二歳のときにふくみは、実父母である小野元澄と豊の手から離れ、元澄の実弟で日本郵船会社に勤務する志村哲・日出夫妻の養女に出されます。そして養父母に連れられて、東京吉祥寺に移り住むことになるのです。

一方、その出来事の前後にあって豊は、富本夫妻を通じて柳宗悦の知遇を得、民芸の世界に接することになります。民芸作家のなかに、青田五良という機織りをする青年がいました。ふくみは、「母との出会い・織機との出会い」のなかで、さらにこう綴ります。

その頃、上賀茂の社家の一隅では、陶器、木工、金工、染織と新しい民芸運動がはじまっていた。その中に青田五良という青年がいて……青田さんは貧乏のどん底で、糸を紡ぎ、染め織り、体がボロボロになるまで苦闘して、遂に夭折してしまった。母が青田さんに織物を習ったのはその時期わずかであったが……「まだこの道は暗く、人のかよわぬ道だが、いずれは誰かが歩いてくるだろう。私はその踏台になる」といつていたという⁶。

豊は、本心から織物を続けたかったのでしょうか。しかし、家庭婦人にはそれは限度を超える望みだったにちがいありません。断念しました。そして、納屋に機道具がそのままにして残されたのでした。

二. 実母との出会いと織機の発見

一九二六（大正一五）年の秋、富本憲吉一家も、安堵村から東京の祖師谷へと移住します。どういう経緯でふくみが、一枝の家を訪問したのかは定かではありませんが、訪れた時期は、文化学院に転入学することになる一九四〇（昭和一五）年の年が明けたころだったのではないかと思います。ふくみは、一枝にはじめて会ったときのことを、こう回想します。

一、二月の寒い季節で、夫人は白磁の大壺に蠟梅を活けていられた。その頃、十七、八だった初対面の私をみるなり、「まあ、お母様そっくり」と声をあげられて、まず驚いたのは私だった。なぜなら夫人は、私の母にまだ一度も会ったことはなかったからである。夫人の知っている実の母がいるということまで、とっさに私は気づかなかったもので、ぼんやりしている間に夫人はあわてて何やらまぎらわしてしまわれた。このことがあってはからずも私は自分の出生を知ることになったが、やはり夫人は私にとって、出会うべきわずかの貴重な存在の方であった⁷。

このときの訪問は、ふくみにとって、まさしく天地動乱に匹敵する、人生最大の過酷な事件であったにちがいありませんでした。

さらに後年、ふくみは、「富本憲吉と西村伊作の文化生活——暮らしをデザインする」展の図録に一文を寄稿し、そのなかで文化学院入学と一枝について触れ、このように述べるようになります。

その頃、昭和十六年は大東亜戦争がはじまった年だった。午後三時、お茶の水駅に花が降るといわれたほど、文化学院の生徒はお洒落で華やかだった。……偶然にも私を文化学院に導いて下さったのは富本憲吉夫人の一枝さんだった⁸。

文化学院は一九二一（大正一〇）年に西村伊作によって開学された学校で、『我に益あり・西村伊作自伝』（紀元社、一九六〇年）に記述されているように、その学校は、決して権力に屈することのない真の自由と、それに基づく文化の創造を標榜していました。富本夫妻が、新宮の西村家をはじめて訪問したのは、一九一七（大正六）年のことで、それ以降も、一九三二（昭和七）年の座談会「今と昔の先端婦人」（『婦人画報』八月号）では、一枝は、伊作の娘の西村アヤと同席していますし、一九三五（昭和一〇）年の「家を嫌ふ娘を語る座談会」（『婦人公論』五月号）では、文化学院院長の伊作本人と直接言葉を交わしています。また、自分の娘の陽も、一枝は文化学院に入れていました。こうした西村伊作との親交の継続が背景にあって、当時長崎に住んでいたふくみの養父の漢口への転任に際して、日本に独り残すふくみの勉学の場について、おそらく豊に相談を受けた一枝は、長崎の活水女学校から東京の文化学院への転入学を斡旋したものと推測されます。文化学院の自由教育は、ふくみの感性を見事なまでに育みました。ふくみは、文化学院での生活をのちに顧みて、「ほんとに短い期間なのに、その一年が自分の生き方に強烈な影響を与えています」⁹と、鶴見和子に語っています。

しかしその一方で、一枝との最初の出会以降、この間のふくみの胸中は、出生の不安で張り裂けんばかりの状態にありました。文化学院在学中の一九四一（昭和一六）年の正月、ふくみは、近江八幡の小野家で、はじめて元澄と豊が、自分の実の両親であることを知られるのです。そしてそのとき、一台の織機がふくみの目に止まりました。これこそが、豊が安堵村で受けた感動の一条の糸が、さまざまな出来事に翻弄されながらも、その後、実の娘のふくみへと、しっかりとつなぎ渡されてゆく、まさにその端緒となる瞬間でもあったのでした。

三．染織家としての旅立ち

戦争が終わり、志村は、一九四九（昭和二四）年に結婚し、洋子と潤子のふたりの子どもをもうけるも、結婚生活に悩みます。そのとき一枝は、ふくみにこう助言しました。

その後、私が家庭を捨てて、現在の織の道に入る時、自分の体験を通して、最も適切な助言をあたえて下さったのも一枝夫人であった。

「家庭を捨てるなら思い切って捨てよ。出たり、入ったりして、夫や子供に未練を残してはならない。あともふりむかずに仕事に没頭しなさい。私はそれが出来なかった。あなたはやりとおしなさいよ。本当に捨てたものは、また別の形で必ずかえって来る」と痛切な思いで言われた¹⁰。

志村は、夫と別れ、東京の養父母に二児を預けたまま、近江八幡の実家へ帰ります。そこから、志村の織物への道が始まるのです。志村、三一歳の転機でした。そのときの気持ちを、後年志村はこのように書きます。

二歳の時、志村家の養女となった私は、三十代の頃、二人の子をかかえて生きて行かねばならぬ帰路に立った時、何を糧にして生きてゆけばよいのかもわからず藁をもすがる思いで織物をはじめた。無一文、機も糸も買うすべさえなく心ははやるもののすべてが一からの出発だった¹¹。

そうしたふくみの心を支えたのが、実母の豊でした。しかし、「母は織物に対する智識はまことに幼稚で専門の技術などまったく知らなかったから暗中模索の日々であり、失敗の連続だった」¹²。それでも「母以外に師はなく、平織を植物染料からなる色彩だけを唯一たよりにして、前人のいない道を歩いていった。しかし私の中には柳宗悦著の、『工藝の道』が深く根づき一すじの道を指し示していた」¹³。

この道に入って三年が過ぎました。一九五八（昭和二三）年に、志村は、日本伝統工芸展に紬織着物《秋霞譜》を出品して、奨励賞を受賞しました。しかし、これが柳宗悦の逆鱗に触れることになるのです。

それが賞をとったでしょう。そしたら柳先生に呼ばれて、名前を出したって。そして伝統工芸展なんかで賞を受けるなんてとんでもない、これは「名なき仕事」を、なぜあなたは自分だけの名誉にしたのか、もう民芸から破門だと、私を¹⁴。

柳の工芸論は、無署名性（アノニマス・デザイン）にひたすら価値を見出し、作家の個性や独創性に重きを置くものではありませんでした。柳の見解は、次の一文にもよく表われています。

想うに個性の表現が藝術の目的の如く解され、個性美が最高の美の様に想はれるのは個人主義の惰性による。……「俺達は個性があるのだ」などゝ高飛車に出ても、頼り

ないひ草である。つまり個性、奇態な個性、そんなものが如何にこの世には多いことか¹⁵。

こうして志村は、私淑する柳から「破門」を宣告され、途方に暮れるも、「個人作家」という、すでに胎内に宿した「近代的な自我」を捨て去ることもできず、自然と民芸から離れてゆくことになるのです。ちょうどそのころのことであろうと思われますが、一枝が柳邸を訪れています。柳は病床にありました。以下は、応対した妻の兼子の、そのときの記憶です。

柳が倒れたときに、偶然赤いバラの花を持って見舞いにいらっしゃったの、久し振りで、一人で。それで、柳がこれこれだと。そのとき柳は倒れちゃって何もわからなかったの、そのままお帰りになって¹⁶。

これが、単なる病氣見舞いであつたのか、それとも、ふくみが「破門」されたことを知った豊からの連絡を受けて、一枝がそれについての事情を聞くために柳に会いに行ったのか、それはいまとなっては確かめようがありませんが、いずれにしても、前途を失いかけたふくみを気遣う豊と一枝が、その陰にあって存在していたことは間違いなさそうです。

他方で、いっさいの模倣も骨董趣味も否定し、「模様より模様を造る可からず」を揺るがない信念とする富本憲吉は、すでに柳とは対極の考えをもつようになっており、国画会を一度脱会した民芸派の人たちが、戦後ただちに復帰を計ろうとしたときは、富本は、民芸派の工芸観のみならず、その理不尽なる振る舞いにも耐えかねて、長年にわたって自分が産み育ててきた国画会工芸部を自ら出て、新たに新匠美術工芸会（のちに新匠会に改称）をつくるに至っていました。後年富本は次のように語ります。

民芸は他力本願の芸術を説くが、私は自力本願ですよ。梅原（龍三郎氏）を仲介に入れて柳（故宗悦氏）と一晩けんかをしたが、合うはずがない。それで国展を飛び出して戦後に新匠会を結成した¹⁷。

志村が、新匠会に出品するのは、この「破門」に先立つ一年前からでした。

志村の書いたもののなかに、「富本先生にいただいたことば」という題のエッセイがあります。以下はその挿話です。憲吉は、終戦の翌年に家族を残したまま独り祖師谷の家を出て、京都の地で作陶に励んでいました。

或る年の夏の終り……先生から一寸話したいことがあるから、京に出たついでに立寄ってほしいとの葉書をいただいた。

そんな事ははじめてであるし、私は何事であろうと、おそろおそろ烏丸頭町の御宅に伺った。露地を曲ると、「富本」とかいた軒灯が見え、こじんまりした御住居は秋も近い宵のせいか、しっとり水を打った前庭に、鈴虫が降るように啼き、香の薫りの漂っていたのを今も思い出す。

先生はくつろいだ夏衣の姿で入ってこられるなり、何の前ぶれもなし、こう話された。

「工芸の仕事をするものが陶器なら陶器、織物なら織物と、その事だけに一しんにな

ればそれでよいが、必ずゆきづまりが来る。何でもいい、何か別のことを勉強しなさい。その事がいいなかった」¹⁸。

そして、憲吉は、続けてふくみにこう諭しました。

あなたは何が好きか。文学ならば、国文学でも仏文学でも何でもよい。勉強しなさい。私はこれから数学をやりたいと思っている。若い頃英国に留学した時、建築をやりたいと勉強したが、それが今大いに役立っていると思う¹⁹。

一瞬の出来事でした。志村はいいます。「私は全く予期していなかったせいか、あっと思ひ、いきなり心の中に何かを呑み込んだ感じであった。後で考えればまことに分かり切った事であるが、わざわざ私を呼んで『これが云いたかった。』と率直な口調で云われた事が、実に鮮明な印象としてのこった」²⁰。

憲吉は、本格的な製陶の世界に入るに先立って、ウィリアム・モリスの例に倣い、さまざまな工芸の実践に手を染めています。織物の試作も、そのひとつでした。そのときのインスピレーションの源泉となったものは、存命中に父豊吉が残していた推古布と呼ばれる標本でした。

實は私の父が生存中に集めておいた二十種ばかりの推古ざれと云ふ標本を持つて居ります、此れで見ると小さい一寸四方形のきれが語る當時の支那印度遠くは中央亞細亞の文明、それが長時間に美しくされた植物や礦物の染料、模様の形式の面白み、私は或日獨り畫室に坐りこむで自分で織物を始めようと云ふ決心を此れを見て致しました²¹。

さっそく行動へと移されました。

先づ倉へ行つて曾祖母が使つたと云う最もプリミティブな「手ばた」と云ふのに糸をのべて最初の試作をしました、只今は研究中で何むとも申し上げられませむ、此の「手ばた」と云ふのはモー私の地方の百姓の手から亡むで仕舞つたもので、隨分器機の方から申せば馬鹿げたものです²²。

バーナード・リーチとの出会いがなければ、憲吉は陶工ではなく、織工として身を立てていたかもしれないのです。おそらく本人たちの誰も気づかなかつたでありましょうし、また、特段強調する必要もないのですが、実はここに、豊、ふくみ、洋子の三代にわたる織り姫たちの前に立って先導するかのような、憲吉の後ろ姿がありました。まさしくそれは、^{えにし}縁と呼ぶにふさわしい糸で織りなされた、いまでも歴史のなかにあつて密かに息づく人間模様なのです。

志村は、一枝の辛辣な作品評にも耳を傾け、他方、憲吉を自ら進んで師と仰ぎました。

織物の道に志した時、まず一枝さんに受けた助言は鮮烈で、厳しいものだった。その

後、京都に住んでから唯一の師は富本憲吉だった。折にふれ先生の住所をたずね、作品をみていただいた。陶芸と染織の道はことなるが、私は富本憲吉の弟子だとかたく思っている²³。

一九六三（昭和三八）年に憲吉が、続いて一九六六（昭和四一）年に一枝が、この世を去りました。これにより、染織家としての志村の揺籃期は終わり、成熟期へ向けて新たな旅につくことになります。「何でもいい、何か別のことを勉強しなさい」——この言葉は、憲吉からふくみへの遺言だったのかもしれませんが。その後ふくみは、日本の伝統色を研究し、ゲーテの色彩論を学び、独自の理論世界を展開しながら、究極の「しむらのいろ」へと到達してゆきます。一九八一（昭和五六）年には、娘の洋子も、ふくみを師として染織の道に入り、かくして「しむらのいろ 織女三代記」が幕を開け、その八年後には、都機工房を設立。そしてふくみは、あたかも師の受賞歴を追うかのように、一九九〇（平成二）年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定され、二〇一五（平成二七）年に文化勲章を受章するのです。

四. 石牟礼道子の新作能「沖宮」の衣装製作へ向けて

述べてきましたように、志村ふくみの染織家としての原風景には、富本憲吉と一枝の存在が大きな位置を占めていました。志村の実父母が小野元澄と豊、そして養父母が志村哲と日出でした。そうすれば、志村にとっての憲吉と一枝は、製作するうえでの、あるいは生きるうえでの見習うべき手本としての第三の両親ということになるかもしれません。一枝は、青鞵の時代、よくも悪くも、「同性の恋」や「五色の酒」そして「吉原登楼」といった話題をさらって、「新しい女」の一面を社会に見せつけました。一方憲吉は、結婚に際して一枝に、「例へ法律とか概観で、そうでないにしても尾竹にも富本にも未だ属しない、ひとつの新しい家出来るわけである。そう考へて居て貰ひたい」²⁴と告げています。つまりそこには、良妻賢母思想の古い生き方も、家父長的な旧い家制度も否定され、新しい女性の生き方や新しい家族のあり方が展望されているのです。工芸も美術も、同じくこの観点に立って、「視覚の制度」も「製作の制度」も、旧来の価値が刷新されなければならなかったのです。ここに、広くモダニズム（近代主義）の内実がありました。師の憲吉が、ウィリアム・モリスと尾形乾山（初代）をもって父と母としたように、志村の場合は、こうしたふたりを人生の父母としながら、大成の染織家へ向けて、その揺籃期を過ごしたのでした。

そうした原風景を揺籃期にもつ志村のもとに、そののち歳月が流れ、新作能「沖宮」の原作者である石牟礼道子から、天草四郎の能衣装に使う「みはなだ色（天青の色）」と、あやの能衣装に使う「緋の色（紅花の色）」の依頼が舞い込みました。果たして、どのような思いを込めて志村は、染め抜いてゆくことになるのでしょうか。石牟礼没後の二〇一八（平成三〇）年一〇月六日、水前寺成趣園能楽殿において「沖宮」はその初演を迎えます。この物語のハイライトは、島原・天草の乱で落命した総大将の天草四郎と、雨乞いの人柱となって沖へ流される幼子のあやの、このふたつの魂による、いのちたちの母である大妣君^{おおははぎみ}が住む海底の沖宮へと向かう道行きです。それにつきましては、第一章「志村ふくみ監修の能衣装による石牟礼道子の『沖宮』初演」において詳述することにします。

注

- (1) 志村ふくみ『伝書 しむらのいろ』求龍堂、2012年、188頁。
- (2) 志村ふくみ「母との出会い・機織との出会い」、原ひろこ編『母たちの時代』駸々堂、1980年、25-26頁。
- (3) 同「母との出会い・機織との出会い」、原ひろこ編『母たちの時代』、26頁。
- (4) 同「母との出会い・機織との出会い」、原ひろこ編『母たちの時代』、同頁。
- (5) 同「母との出会い・機織との出会い」、原ひろこ編『母たちの時代』、同頁。
- (6) 同「母との出会い・機織との出会い」、原ひろこ編『母たちの時代』、31-32頁。
- (7) 志村ふくみ『一色一生』求龍堂、1982年、197-198頁。
- (8) 志村ふくみ「香り高き芸術家——西村伊作と富本憲吉」『富本憲吉と西村伊作の文化生活——暮らしをデザインする』（展覧会図録、ルヴァン美術館）、2008年、3頁。
- (9) 志村ふくみ・鶴見和子『いのちを纏う 色・織・きものの思想』藤原書店、2006年、71頁。
- (10) 前掲『一色一生』、198頁。
- (11) 前掲『伝書 しむらのいろ』、189-190頁。
- (12) 同『伝書 しむらのいろ』、190頁。
- (13) 同『伝書 しむらのいろ』、191頁。
- (14) 前掲『いのちを纏う 色・織・きものの思想』、72頁。
- (15) 『柳宗悦全集』（第一四巻）筑摩書房、1982年、6頁。
- (16) 水尾比呂志『評伝柳宗悦』筑摩書房、2004年、588頁。
- (17) 「文化勲章の人々（5） 富本憲吉氏 つらぬく反骨精神」『朝日新聞』、1961年10月25日、9頁。
- (18) 志村ふくみ「富本先生からいただいたことば」『富本憲吉陶芸作品集』美術出版社、1974年、229頁。
- (19) 同「富本先生からいただいたことば」『富本憲吉陶芸作品集』、同頁。
- (20) 同「富本先生からいただいたことば」『富本憲吉陶芸作品集』、同頁。
- (21) 富本憲吉「工藝品に関する手記より（上）」『美術新報』第11巻第6号、1912年、12頁。
- (22) 同「工藝品に関する手記より（上）」『美術新報』、12-13頁。
- (23) 前掲「香り高き芸術家——西村伊作と富本憲吉」『富本憲吉と西村伊作の文化生活——暮らしをデザインする』、同頁。
- (24) 山本茂雄「富本憲吉・青春の軌跡——出会い・求婚・結婚までの書簡集」『陶芸四季』第5号、画文堂、1981年、75頁。

第一〇章 戦後の高群逸枝の女性史学確立の過程

一. 高群逸枝の戦時中の学究生活

一九三八（昭和一三）年四月、女性史研究の第一巻に相当する『大日本女性史 母系制の研究』を脱稿するや、高群逸枝は手を休めることなく、引き続き「森の家」に蟄居し、面会を断って一日一〇時間、次の第二巻となる「招婿婚研究」の完成に向けて、筆を執りました。しかし日本の前途は、自由な研究を許すほどに、明るいものではありませんでした。前年（一九三七年）七月の盧溝橋事件に端を発し日支事変（日中戦争）が起こると、その拡大とともに、言論や思想が一段と制約される一方で、物資や食料もさらに統制され、戦時国家に向けた体制再編がいよいよ急速に進み、ついに日本は、一九四一（昭和一六）年一二月に、アジア・太平洋戦争へと突入してゆくのでした。この時期を振り返って高群は、「『招婿婚の研究』着手後の約三年半、つまりは、昭和一三年四月から一六年末までの時期は、私の長い研究生活の上でも一種特別の意味をもつものだった」¹と、書き記しています。戦争へと向かう、そうした時世に身を置きながら、他方で高群は、研究上の「自信と不安」を抱えて執筆に明け暮れていました。

私はたえず研究の上に自信と不安とを交互にくりかえさねばならなかった。それは朝は希望をもって起き上がるが、夜は絶望におちいって眠りにつくというようなきびしい試練の毎日だった²。

それでは、その「自信と不安」を構成する内実とは、どのようなものだったのでしょうか。そのひとつに、著名な民俗学者の柳田国男が主張していた「贅入」という婚姻形態との対峙がありました。その学説によれば、男ははじめ女の家に入赘するも、その後、数年のうちに、必ずや妻子を連れて男の家に戻るとされており、高群の研究は、それに真っ向から異を唱えようとするものでした。高群が想定している「招婿婚」が史料に基づき揺るぎないものとして実証されることになれば、女性が自由で自立していた女系時代（母系共同体）がかつて日本に存在していたことが白日のもとに晒されることになります。そうなれば、男性を主役に置き、男性の研究者たちによって叙述されてきた、これまでの日本の婚姻の歴史、あるいは恋愛の歴史は、大きく塗り替えられることが予想されるのです。しかし、その実証作業には幾多の困難が伴ったようで、本人の言葉を借りるならば、「自信と不安とを交互にくりかえさねばならなかった」のでした。

その一方で、幸運がもたらされました。高群は、こう書きます。

この悲惨な時期に、ただ一つの幸運といえることは、服部報公会ならびに啓明会の二つの学術研究助成財団からの研究助成金が与えられたことだった。このことは学界の孤児である私にとって二つの意義をもつものだった。一はこれによって資料獲得に成功したことであり、二はこれによっていわばはじめて学者としての地位が保証されたことだった³。

服部報公会への紹介者は東京大学教授の穂積重遠で、助成金は、昭和一四年度と昭和一五年度、加えて昭和二三年度の三度にわたって交付されました。啓明会を紹介したのは、のちに東洋大学の学長に就任する高島米峰でした。助成金が採択されたのは、昭和一六年度でした。当時こうした研究助成金は、大学や研究機関に所属する学者で占められ、民間の独立研究者への配分は極めて稀で、さらに女性がこの恩恵にあずかることは、ほとんどなかったようです。高群は、こう回顧します。

たとえば服部報公会では十四年度決定百三十七件中、女性は私一人といったぐあいだった。また啓明会でも十六年度決定七件中の女性は私一人だったのである。いかにその頃女性のこの方面における機会不均等がはなはだしいものであったかがわかれう⁴。

こうして研究上の財政基盤が整いました。「両助成金および著作後援会寄金（このなかには相馬黒光さんの三千円を含む）等を合しての一万数千円の金額は当時としては大金であり、私はこれによって『招婿婚の研究』に要する大部分の資料を蒐集することができたのだった」⁵。しかし、四千冊にも及ぶ資料がそろい、文献の読破が進むと、「ある理解に到達したために、これまでししとしてメモしてきた約一万のカード類がそのままでは役に立たなくなり、再びとり直さねばならないという重大な事態に直面したのだった」⁶。「ある理解」とは、一九四〇（昭和一五）年三月二六日の高群の日記によると、こうなります。「今夜茫然自失。……コノ二年ノ勉強ニヨッテ、招婿婚ノ性質、種類、経過等ガ、タドタドシク理解サレタガ、トクニソレガ、今夜ニナッテ完全ニ全面的、体系的ニ把握サレタノdeal」⁷。高群は、このときの様子を、さらに次のように描写します。

招婿婚にたいして本質的な理解と体系的な見通しとを得たことは、私にはひじょうなよろこびだったが、同時にこれまで読んだ文献をここでまた読みなおさねばならないということが、それがあまり多量なのでなんとしても心気が沈んだ。だが私に与えられた道は不退転の道だ⁸。

その「不退転の道」に光明が差す日が来ました。

その後、ある日私は、採集した婚姻語のカードをみて、ツマドリ、ムコトリ、という婚姻語が日本古代の婚姻語の代表語であることを知り、この婚姻語の推移が、すなわち大まかには婚姻形態の推移をものがたっている——つまり、この二語がそのまま古代婚姻史の時代区分を反映している、ということを知った。そこで必然的にヨメトリ、という婚姻語の追求がこれにつづくことになる。

このことは、かつて『母系制の研究』で、「多祖」現象を発見したときとおなじ一つの天啓的なひらめきというべきものだった。このとき私は、

「わがこと成れり！」

と招婿婚研究への勝利感を覚えたのだった⁹。

しかし、机に向かい服の片袖だけが日に焼けて変色するほどの日々の長時間労働は、極度

の疲労をもたらし、そのうえに栄養失調が重なり、目に異常をきたすと、天眼鏡で文字を拾うようになりました。また、本人が書くところによれば、「鼻から経血が逆出したり」¹⁰する生理的異変に見舞われることもありました。他方で、戦時体制へ向けての組織づくりが進み、「隣組」もこのとき発足します。生活物資の配給も「隣組」単位で行なわれ、運営は、各世帯の交代による輪番制でした。こうした常会へは、本人の記憶によれば、「この頃私は脚氣ぎみで、歩行が自由を欠き、Kに杖をつくってもらって出勤した」のでした¹¹。

こうしたなか、一九四一（昭和一六）年一二月、日本は開戦を迎えます。翌年（一九四二年）の二月には、既存の愛国婦人会と大日本連合婦人会と大日本国防婦人会の三団体が統合され、大日本婦人会が発足します。これにより、国家総力戦へ向けてすべての女性を動員する体制がつくられ、機関誌『日本婦人』も発刊されるに至ります。高群も、これに寄稿し、この団体の活動に協力します。『高群逸枝全集』第一〇巻の「火の国の女の日記」（逸枝自叙伝）は、戦中戦後の記述から夫の橋本憲三に引き継がれますが、それには、逸枝が行なったこの機関誌への寄稿について、こう記されています。

この『日本婦人』の寄稿（一五枚）は二十年終戦直前の廃刊までつづき、私たちの家計はその間この毎月の稿料百五〇円でほぼまかなわれ、他の雑文も書かないですみ、研究に停滞をもたらさなかったことは思いがけない幸運だったとしないといけないだろう¹²。

一九四五（昭和二〇）年八月、日本は終戦を迎えました。以下は、八月一六日の日記に書かれている一文です。

昨日正午戦争終結の天皇放送！

ふかい痛苦をひしひしと胸に感じて 泣き哭くのみ

ただ泣き哭くのみ

夜はねむりてさめて 泣き哭くのみ 朝も泣くのみ

しばらくも涙やまず

苦しき涙なり

涙なき涙なり

色なき涙なり

これは何を意味する痛苦か われらいまだこれを知らず

ただ苦しむ 四六時苦しむ¹³

この時期の日記は、逸枝と夫の憲三とによる夫婦の「共用日記」です。八月二一日の日記には、「逸枝立ち直り新仕事場にはいって勉強をはじめた」¹⁴、続く二七日の日記には、「階上の書齋を整理、模様がえした」¹⁵の文字が並びます。こうして、戦後の研究生活がはじまったのでした。

二. 『招婿婚の研究』の公刊と前著『母系制の研究』の改訂

終戦から二年が過ぎた一九四七（昭和二二）年一〇月、眞日本社から『日本女性社会史』が世に出ました。この「序」のなかに、高群のこれまでの研究の総括と、戦後の再出発にあたっての決意のようなものを読み取ることができます。少し長くなりますが、以下に引用します。

著者は、昭和五年一月一日に志をたて、女性史研究に半生をささげる決心をした。爾來十七年、下界と断つてくる日もくる日もただ机を友としているが、十三年に女性史第一巻として「母系制の研究」を世に送つたのみで、業は遅々として進まない。第二巻「招婿婚の研究」は、昨今ようやく準備がおわつて整理の段階に入つたが、まだいつ筆が起せるか豫想ができない。このときこの小著が求められた。この種の執筆を求められたことは、これまでいくたびかあつたが、著者は自己の研究が中途にあるため、辞するを常とした。しかるに終戦後、女性の上にも畫期的變革がもたらされることとなり、新しき日のために、ふるき生活の反省が絶對の要請になった。われわれは、現在の自己の歴史的位置をたしかめることによって、賢明な明日をもたなければならない。ここに同時代人としての義務心から、あえて求めに應じてこれを書いたのであるが、當然不完全はまぬがれないであろう。ねがわくば、読者の高教と助言によつて、今後補正するところありたい¹⁶。

終戦後、「女性の上にも畫期的變革がもたらされること」になった大きな要因のひとつは、新憲法の第二十四条が謳う婚姻に関する規定だったにちがいありません。といたしますのも、その一項には、「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない」と述べられており、旧来の封建的で家父長的な制度のもとでの婚姻とは、大きく異なる「畫期的變革」の思想が示されていたのでした。しかしながら、いまだアカデミズムの歴史学は、「女性史」自体を問題意識の外に置いていました。高群がどうしても終戦直後のこの時期に、目下着手中の「招婿婚の研究」を横に置いてまで、『日本女性社会史』を上梓しなければならなかったのは、まさしく本人が書くように、「同時代人としての義務心」によるものだったに相違ありません。

高群は、『日本女性社会史』と題されたこの本において、女性の婚姻や家族生活のあり様を主題に、「群時代（女性の自由時代）」「氏族時代（自由時代）」「氏族崩壊時代（半自由時代）」「家族時代（被壓迫時代）」「家族崩壊時代（半解放時代）」の五つの時代に区分して、通史的に記述しました。そして、「ねがわくば、読者の高教と助言」とを要請しました。これに応じたのが、当時の東京高等師範学校（二年後の一九四九年に東京教育大学として改組され、現在はすでに筑波大学へと再編）の日本史の教授の家永三郎でした。高群は、続けて同年翌月（一九四七年十一月）に鹿水館より『女性史学に立つ』を上梓しており、したがって、「わざわざするモルガンの色眼鏡」と題された家永の書評は、この二著を念頭に書かれたものでした。「モルガン」とは、一九世紀アメリカの古代史研究者であるルイス・ヘンリー・モーガンのことです。家永は、こう前置きします。「高群女史が『大日本女性史第一巻』『大日本女性人名辞書』等の著者として有名な女性史の専門研究家であることは私が紹介するまでもない」。そして、自分が女性史を専門とする研究者でないことを断わったうえで、一歴史家としての見解を開陳します。その最も重要な指摘は、次にみられる箇所です。

た。

……大化改新以前を「氏族制」の時代と考えることは到底不可能であり、況んやその時代を母系制とするに至つては、モルガンの古代社会論の色眼鏡を通して見た附会の説としか受け取れないのである¹⁷。

さらに続けて家永は、「モルガンの色眼鏡から出た誤解の最も典型的一例」として、高群がその本のなかで示していた「大化元年の男女の法」についての所見を取り上げて、批判したのでした。

これに対して、さっそく高群は、「家永三郎氏の書評に答う」と題して反論します。高群は、「小著について家永教授の書評を頂いたことは感謝に絶えない。……十分反省の資としたいが、読者の誤解をまねく点が考えられるので、その点を明らかにさせて頂きたい」¹⁸と、前置きしたうえで、次のように、本論に入ってゆくのでした。

氏は「日本女性社会史」の時代区分に関し、大化以前を氏族時代としたことの無理、またそれを母系とすることの一層無理なことを指摘、大化元年の男女の法に著者が重大な意味をもたせているのを例にとられて、総じてこれらをモルガンの色眼鏡とされている。私はモルガンの方法を女性史の立場から肯定するものであるが、史実をわい曲するものではない。

男女の法は、私はこれを当時の氏姓の大紛乱に帰結を與えたものと考えており、このことは別著「母系制の研究」に詳述している¹⁹。

そして、この反論は、さらにこう続きます。

わが國には招婿婚という婿入形式の婚姻が太古から室町初期ごろまでも存続しているが、この事実は國文学や公卿日記等で人の知つてのことであるにかかわらず、これに深い驚きを示した人がなく、史家のメスからほとんど除外されている。この存続の根底に何があるかに私は長く関心し、そこに家族制と相容れない族制やその遺存があることの確信に到達した。

前記「母系制の研究」は系譜面からのその考察であり、目下着手中の「招婿婚の研究」は婚姻面からのものである。氏の指摘は私のこれらの研究の根本に関係あるものであるから、私としては私の研究を全的に理解して頂きたいことが希われてならない²⁰。

「私の研究を全的に理解して頂きたい」と、ここに書いた以上は、「昨今ようやく準備がおわつて整理の段階に入つたが、まだいつ筆が起こせるか豫想ができない」状況にあった「招婿婚の研究」でしたが、その脱稿が、一刻も早く急がれる事態となったのでした。

脱稿を間近に控えた一九五二（昭和二七）年一月、『母系制の研究』のときと同じように、友人たちが集まり、出版へ向けて、どのような便宜を講じることができるのか、相談の会がもたれました。憲三は、このように記します。

……平塚らいてう、竹内茂代、市川房枝、山高しげり、志垣寛、鑓田研一さんらが婦選会館に集まって、出版社の選定および刊行後援会の組織が決定されて、実行に移された。その結果、本は講談社から出版されることになり、刊行後援会（高群逸枝著作刊行後援会）は発起人二百名の賛同のもとに発足した。²¹。

その一年後の一九五三（昭和二八）年の一月に、無事予定どおりに、大日本雄弁會講談社から『招婿婚の研究』が公にされました。家永から批判を受けた『日本女性社會史』の出版から五年三箇月の歳月が流れていました。高群は、巻頭の「例言」において、こう書きます。「この研究は、昭和一三年四月に着手、同二六年一二月に完了した。一三年九ヵ月、平均して一日一〇時間をくだらない労働であつた」²²。そして、その研究内容の意義に触れて、次のように書きます。少し長くなりますが、高群が寄って立つ学的地平が明確に現われていますので、引用します。

主題の招婿婚（婿取式）は、最古の典籍「記紀」「風土記」等から見えているものであるが、特に「萬葉」「伊勢」「大和」「落窪」「宇津保」「枕」「源氏」「榮花」「大鏡」「今昔」「源平盛衰記」「増鏡」等一聯の文學の上にあざやかにそのすがたをとどめていることは周知のとおりであり、さらにこれを確實に立證するものとして平安「小右記」から室町「言繼卿記」におよぶ六〇〇年間一貫した數十部にのぼる膨大な諸家日乗の存するがあり、また現に全国各地になお遺制を見ることもできるのである。すなわち招婿婚は、太古から室町期にあつて娶嫁婚（嫁取式）にその席をゆずるまでの時間においての支配的婚姻形態である。このように、この婚制は極めて長期間に亘る経過をもつ大きな歴史的事実として、單り女性史の問題にとどまらないことはいうまでもなく、その研究は、ひろく學界——歴史學・國文學・民俗學・社會學・人類學等——でも要望されているが、まだ、その本質、形態、變遷（發生・推移・終焉）等本格的探究において缺けている憾みがある。私の研究は、これらの點を明らかにしようとしたものである²³。

三. 『招婿婚の研究』への家永書評と『大日本女性史 母系制の研究』の改訂

『招婿婚の研究』が公刊されると、さっそく家永三郎が筆を執りました。戦後の新しい大学制度に従い、東京高等師範学校は東京教育大学へ移管されたため、このときの家永の肩書は、東京教育大学文学部教授となっていました。他方で家永は、さかのぼる三年前の一九五〇（昭和二五）年に、学位論文「主として文献に拠る上代倭絵の文化史的研究」で、東京大学より文学博士を取得し、のちには、自身が執筆した高校用の日本史の教科書が検定により不合格になったことを受けて、高群死去の一年後の一九六五（昭和四〇）年に、国を相手に提訴します。いわゆる「家永教科書裁判」と呼ばれるものです。

さて、今回の書評は、『日本女性社會史』のときとは違い、大いなる称讃の言葉で彩られました。しかも、長文となっています。以下は、その書評の冒頭の一節です。高群学説の衝撃に触れた箇所でもありますので、これも引用文としてはやや長くなりますが、そのまま紹

介することにします。

五十二字詰十八行組千二百頁の書下し論文が公刊されるといふことは、学界に於いても、ざらに見られることではない。高群女史の大著の公刊は、さういふ点からも稀有な大事業として刮目に値する。しかも著者はこの大著「招婿婚の研究」のほか、その所論の基礎づけとして「平安鎌倉室町家族の研究」「日本古代婚姻例集」二千八百枚の稿本をすでに完成されてゐるのであつて、これだけの大きな仕事を完成されるに至るまでの著者のたゆみなき精進を思ふとき、片々たる短文を書くより能のない評者など、たゞたゞ頭の下る思ひあるのみである。さきに昭和二十二年、著者が「日本女性社会史」を発表されたとき、著者の所謂「群時代」「氏族時代」といふ様なモルガン直訳の史的範疇によつて叙述せられてゐる部分については多大の危惧を感じざるを得なかつた評者であつたが、「夫婦別居から同居制へ」「招婿婚」等の各部に示された招婿婚に関する著者の見解には深く心を惹きつけられ、それらの見解が具体的に立証されるのをひそかに期待してゐたのである。五年後の今日その期待を裏切られず、この尨大な力作となつて我々の前に出現したことは、学界の慶事たるは云はずもがな、何よりもまづ評者個人の大きなよろこびであつた。必ずしも本書を批評する資格ありとも考へられぬ評者が敢てこの書評を買つて出たのは、近年家族道德史の諸問題に興味を覚えてゐる処にも由るが、「日本女性社会史」を閲読して以来鶴首してゐた本書の出現に対する限り無い歡喜が進んで書評の筆をとらせる動機となつた次第である²⁴。

これが、高群学説の家永三郎に与えた学問的衝撃の實際でした。この書き出しのあと家永は、詳細な研究内容の紹介と分析を開始してゆきます。

この家永の評論を目にした高群は、前回の『日本女性社会史』のときと同様に、素早く応答しました。それは「家永博士の批評を読んで」と題された一文で、その内容は、家永が指摘していた、婚姻制度と生産関係の問題や農民の婚姻生活の実態に関する記述の不備に依つての、弁明であり補足となるものでした。しかし、その指摘は、高群にとってありがたいものであつたにちがひなく、次の文言がそれを表わします。「家永博士が、私の『招婿婚の研究』について、貴重な御批評をなさつてくださったことを、私は著者として心から感謝する。御批評は、教えられることの多いもので、今後の糧とさせていただきたいと思う」²⁵。これは単なる社交辞令ではなく、着実に次の研究に反映されてゆくのでした。

一方この間、戦前に刊行した前著の『大日本女性史 母系制の研究』の改訂が進行してゐました。その推移を、戦後すぐの一九四八（昭和二三）年一月に恒星社厚生閣から刊行された改訂三版『母系制の研究 大日本女性史第一巻』の「例言」に求めることができます。そこにはこう記されてゐました。

一、本書は昭和一三年六月四日初版第一刷、一六年七月二〇日再刷、今回は第三刷である。第三刷は、初版第三篇の第三章を除きたるほか全體にわたつて若干の改訂を施したが、それは主として、たとへば「母系」といふ文字すらややもすれば伏字しなければならなかつた初版發行當時の社會状況を顧慮するあまりなされた學術書にはふさわしからぬ贅語的表現を整理したのであつて、内容的變化はない²⁶。

高群は、ここにおいて、「初版第三篇の第三章を除きたる」事実については言及してはいますが、その理由については直接の明言を避け、「初版発行当時の社会状況」をほのめかすに止めました。こうして、戦前の初版および再版に所収されていた「第三篇 結論」のなかの「第三章 吾等の収穫」は、「初版発行当時の社会状況」に起因する文であり、したがって抹消されようとも大きな「内容的変化はない」ことを示唆しながら、完全に闇に葬られてゆきました。

続いて一九五四（昭和二九）年に大日本雄辯會講談社から新版が登場します。順番からいえば、第四版に相当します。この版においては、もはや「第三篇 結論」の「第三章 吾等の収穫」の削除についてはいっさい触れられることはありませんでした。しかも、第三版にはかすかに小さい文字で残っていた「大日本女性史第一巻」の副題も完全に消え去り、書題は、単純で明快な『母系制の研究』という表現に一新されました。内容と書題にかかわるこの一連の改変をとおして高群の戦前思想は清算され、一九五二（昭和二七）年の『招婿婚の研究』（初版、大日本雄辯會講談社）と、遅れて二年後の一九五四（昭和二九）年の『母系制の研究』（新版／改訂四版、大日本雄辯會講談社）の、このふたつの大作によって、この時期、高群女性史学の土台となる基礎部分が、鮮明に造形されていったのでした。

四．高群女性史学の完結とアカデミズム歴史学への批判

高群は、一九三八（昭和一三）年六月に厚生閣より刊行した『大日本女性史 母系制の研究』の巻頭の「例言」のなかで、以下のように、自分の女性史研究を全五巻で構成したいとの抱負を述べていました。

一、私が書かんとする女性史は、若しすべての事情が之を許すならば、次の五巻としたい考へである。

- 1 母系制の研究
- 2 招婿婚の研究
- 3 通史古代 国初より大化迄
- 4 同 近代 改新より幕末迄
- 5 同 現代 維新より現在迄²⁷

ついにここに、前半の特殊研究である「母系制の研究」と「招婿婚の研究」が完成し、いよいよ後半の通史研究へと高群は入ってゆくことになります。その成果は、次のような年月を費やし、世に出てゆきました。

高群逸枝『女性の歴史』上巻、大日本雄辯會講談社、1954（昭和 29）年 4 月。

高群逸枝『女性の歴史』中巻、大日本雄辯會講談社、1955（昭和 30）年 5 月。

高群逸枝『女性の歴史』下巻、大日本雄辯會講談社、1958（昭和 33）年 6 月。

高群逸枝『女性の歴史』続巻、大日本雄辯會講談社、1958（昭和 33）年 7 月。

最後の『女性の歴史』の続巻が刊行されるのが、逸枝六四歳と六箇月の一九五八（昭和三十三年）七月ですので、一九三一（昭和六年）七月の「森の家」での執筆開始から悠々二七年の歳月をかけての全巻完成でした。構想力の明晰さと実行力の厳格さに、人はみな、一様に驚くのではないのでしょうか。

それでは少し、全巻をとおしての『女性の歴史』の特徴を見てみたいと思います。この『女性の歴史』シリーズは、巻ごとではなく通巻において章と節が設定されていることが、大きな特徴となっています。そこで以下に、各巻から章と節を抜き出し、その全体像をここに示します。

第一章 女性を中心となっていた時代（上巻）

- 一. 日本列島のもつ原始性
- 二. 家庭を知らなかった社会
- 三. 無痛分娩の母たち
- 四. 族母卑彌呼
- 五. 女性中心の文化

第二章 女性の地歩はどんなぐあいに後退したか（上巻）

- 一. 文明の開幕
- 二. 私有財産がうまれた
- 三. 氏族がこわれた
- 四. 国家ができた
- 五. 女性文化がくずれた

第三章 女性の屈辱時代（中巻）

- 一. 世界史の基本法則からみた日本女性史
- 二. 市民社会が出現した
- 三. 「家」が形づくられた
- 四. 封建権力が天下をとった
- 五. いわゆる庶民文化

第四章 女性はいま立ち上がりつつある（一）（下巻）

- 一. 開国とゲイシャガール
- 二. 明治政権と女性
- 三. 家父長制の再編
- 四. 近代恋愛の発生と挫折

第五章 女性はいま立ち上がりつつある（二）（下巻）

- 一. 婦人問題の展開
- 二. 女性の自覚と運動

第六章 女性はいま立ち上がりつつある（三）（続巻）

- 一. 労働婦人のあゆみ
- 二. 婦人労働の諸問題

第七章 女性はいま立ち上がりつつある（四）（続巻）

- 一. 第二次大戦の前後

二. 危機の文化と女性

第八章 平和と愛の世紀へ（続巻）

一. 平和運動

二. 愛の世紀

このように連続させて章と節をつなげますと、高群女性史学の全体像が鮮明に現像されます。それでは、本稿「火の国の女たち——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞞の女たちとの友愛」をここまで書き進めるなかにあつて、私が取り上げてきた幾つかの話題に関連して、以下に検討を加えます。

まず、家永三郎の指摘との関連においてです。家永は、『日本女性社会史』の書評において、高群が用いていた「群時代」「氏族時代」「氏族崩壊時代」「家族時代」「家族崩壊時代」といった時代区分について難色を示していました。その指摘を、おそらく取り入れたものと思われそうですが、時代区分の名称、つまり各章題名を柔らかい表現に置き換えています。もっとも、書き手が女性であること、そして読者の多くが女性であることを踏まえると、必然的にこうした表現へとたどり着いたのかもしれませんが。表現の男性化から女性化がここに認められるのです。

また、家永は、『招婿婚の研究』の書評において、婚姻制度と生産関係の問題や農民の婚姻生活の実態に関する記述の不備を指摘していました。おそらくその指摘への対応でしょうが、第一章第二節の「家庭を知らなかった社会」において、「いわゆる上部にあらわれる一部の文化物と、内部や下部にわだかまる生産関係や構造」²⁸について言及し、第三章第五節の「いわゆる庶民文化」において、「女のなかでも、もっとも下積みの女であるとされた江戸封建期の子守娘たち」²⁹を取り上げ、高群の原郷である肥後国に伝わる「五木の子守歌」へ言及します。

一方、平塚らいてう、山川菊栄、市川房枝については、どのように言及しているのでしょうか。それを、第五章第二節の「女性の自覚と運動」に読み取ることができます。この節は、「黎明期の女性たち」「先駆者平塚らいてう」「共産主義と山川菊栄」「普選運動と市川房枝」の四項で構成されています。以下にそのなかから、三者それぞれを要約した人物評を拾い出してみます。『青鞞』の出現は、わが国女性の自覚史上、はじめておおきな時代を画したものであった。……創刊号にのせられたらいてうによる『元始女性は太陽であった』という宣言こそは、まさに日本における『女権の宣言』の第一声であった³⁰。「山川菊栄がもつ女性史的意義は、らいてうに代表されたいわゆる中産階級的婦人解放運動を克服崩壊させ、その廃墟のうえに無産階級的婦人運動のヘゲモニーを打ち立てた一点にあった」³¹。「平塚らいてうを信念の人、山川菊栄を言論の人とするならば、市川房枝においては実践が先行し、そのうえに言論がめばえ、信念が固められるとってよい行動過程がみられる」³²。「房枝は、自己の能力と、運動の究極的必然性（社会主義）と、現段階での可能面とをふまえて『実践』する実践者であった。そして、その実践には、つねにつよく『貫徹』が期された」³³。

実は、第五章第二節の「女性の自覚と運動」において「先駆者平塚らいてう」を取り上げたことには、高群にとって大きな意味が込められていました。一九二六（大正一五）年の四月、高群は、らいてうからもらった伝言に応じて、返信を書きました。これがらいてうに宛てて出された最初の高群の手紙です。以下は、その一節です。

あなたの伝記を書くことのできる、たった一人の存在が、私であることさえも、私はかたく信じています。私はもしかしたなら、あなたご自身よりも、もっとあなたをいい現わすことができるかも知れません。なぜなら、私はあなたの娘ですもの。あなたの血の純粋な塊が私ですもの³⁴。

それから三一年の歳月が流れます。一九五七（昭和三二）年一二月、逸枝は、らいてうに宛てた手紙で、こう書くのでした。『女性の歴史』（下巻）のなかの「先駆者平塚らいてう」の項（四百字詰め原稿用紙で八八枚）を書き終えたときのことです。

らいてう伝を書くことは、私の年来の願いでしたが、いまこれを著書のなかで果たすことができました。思い切ってページを割り、心に祈って公平と的確を歸し、全力をあげて歴史的意義づけを試み、あなたに献ずる私の彰徳表を書きました。私はいまひどく嬉しい気持ちです³⁵。

さっそく、らいてうから応答文が届きました。らいてうもまた、逸枝と同じく、このとき「ひどく嬉しい気持ち」に浸っていたにちがいありません。

「先駆者平塚らいてう」が所収された下巻に続けて、さらに高群は、『女性の歴史』の最終巻となる続巻を書きます。そして、その「はしがき」をこうした言葉で締めくくりました。

「女性の歴史」はこれでおわる。

「女性の歴史」四巻は、探求の書であって、もとより政治的イデオロギーの宣伝の書でも、希望的観測の書でもない。

これは、「母系制の研究」と「招婿婚の研究」に、根拠と出発点をもつ、私のあたらしい学説をつらぬいた日本女性全史であるが、独自の学説ゆえに、日本史批判とも、世界史・人類史への提言ともなっている。

これは、三〇年ちかく「われらはいかに生くべきか」をひとすじに探求してきた一女性学究の、同時代の友人やのちにくる人々にささげる、ただ一つの貧しい花束である。

私の齢はすでに傾ており、したがって私はこの書をはじめから遺書のつもりで、いうべきこと、いいたいことを書いた。そして、いまいくらか満足して筆をおくことをできたことをよろこぶ。

脱稿の日世田谷の草屋で

著者³⁶

こうして、『女性の歴史』の上巻、中巻、下巻、続巻の計四巻が、一九五八（昭和三三）年の七月に完結しました。他方で、家永三郎の「歴史家のみた日本文化」の連載が、一九六一（昭和三六）年新年号を第一回として、『群像』誌上ではじまりました。その第四回が「古代人の結婚生活と性道徳」の題名をもつ論文でした。そのなかでまず家永は、「私たちの常識となっている結婚形態が正統の結婚形式となったのは、長い日本の歴史の上ではひじょうに新しいことなのであり……決して古代以来の伝統的な観念ではなく、ごく新しい時代

に固定された歴史的産物にすぎない」³⁷ことを強調し、「私たちが現行の結婚形態や性道德とはまったく違った結婚形態や性道德の存在したことを忘れ去ってしまった原因」³⁸を、太古以来のものであるという「思いこんだ錯覚が、明治以来の天皇制國家主義教育の徹底によつてもたらされた結果」³⁹に求めます。しかし原因はそれだけではありませんでした。家永は、こうも指摘します。先に引用しました高群の「はしがき」のなかに「日本史批判」という文字を見ることができますが、その「批判」の内実にかかわる、男性歴史学者の家永三郎自身の反省を込めた認識箇所です。少し長くなりますが、そのまま引用します。

しかし、國民の錯覺を助長したのは、教育政策ばかりの罪とはいえなかつた。日本人の生活の變遷を客觀的に復原するのを任務とするはずの歴史學者もまた、その點で眞實を明らかにする義務を果たそうとしなかつた。アカデミズムの歴史學者は、天皇や貴族や武將などの權力者としての活動にばかり興味をもち、人民大衆の日常の生活を明らかにしようなどという興味をほとんどもつていながつた。たとえ人民大衆の日常生活に興味をもたずとも、天皇や貴族や武將の生活をくまなく追求していけば、當然現行結婚形態とまったく違った結婚形態につき當らなければならなかつたはずであるにもかかわらず、かれらの狹隘な史眼にはそれさえ映じなかつたのである。しかし、その點では、いわゆる「進歩的な」歴史家も、五十歩百歩であつた。國家主義に無批判的であつたアカデミズムの歴史家が、「家族制度」に對し肯定的であつたのに對し、「進歩的な」歴史家が否定的であつたという違いはあつたけれども、「家族制度」以前の、「家族制度」とまるで違った別の家族制度を具體的に紹介する點では、かれらもそれほど大きな功績があつたといえないのではあるまいか⁴⁰。

「天皇や貴族や武將などの權力者としての活動にばかり興味をもち、人民大衆の日常の生活を明らかにしようなどという興味をほとんどもつていながつた」アカデミズムの歴史学者の対極に位置したのが、民間の独立研究者で女性の高群逸枝であり、「人民大衆の日常の生活」、とりわけ日本女性の恋愛と結婚と暮らしの全体像を史的に明らかにしたものが、『女性の歴史』全四巻でした。一方、『家族制度』以前の、『家族制度』とまるで違った別の家族制度を具體的に紹介したものが、『母系制の研究』と『招婿婚の研究』でした。そうした事実を踏まえて、家永は、こう高群の業績に言及します。

モルガンの「古代社會」やエンゲルスの「家族、私有財産及び國家の起源」を必讀書としているはずの進歩的歴史家さえが、現行結婚形態の普遍化が豫想外に新しい近年の現象であることを看破できなかったのは、「進歩的な」歴史家もやはり男性であるかぎり、男性中心の先入見から脱却できなかつた、という理由によるものだつたのかもしれない。日本の婚姻生活について、常識を打破する劃期的な研究が、女性である高群逸枝女史の手により大成されたのは、その意味で特筆に値しよう⁴¹。

この家永三郎の「古代人の結婚生活と性道德——歴史家のみた日本文化（四）」が掲載された一九六一（昭和三六）年四月号の『群像』が、講談社の『群像』編集者の中島和夫から高群のもとに送られてきました。中島は、かつて同社の学芸部にいて『招婿婚の研究』の編

集を担当した人物でした。便りには、「先生のことに触れられてあり、私としても大変うれしくなつかしく思いました」⁴²と、書かれてありました。うれしく思ったのは、高群も同じでした。『女性の歴史』全四巻の追加巻に相当する『日本婚姻史』が、一九六三（昭和三八）年五月に至文堂から上梓されたおり、「序説 日本婚姻史の体系」のなかで高群は、上で私が『群像』掲載の家永論文から引いた一連の箇所とほぼ同じ箇所を引用し、そのうえで、次のように述べるのでした。

私は全く同感であるとともに、私のささいな仕事に言及されたことをふかく感謝し、自己の学者としての責任をさらに一段と痛感するものである⁴³。

その一方で、この一節に続けて、再び柳田国男の学説である「聳入」という考えを取り上げ、こう切り捨てるのでした。

……今日までこのようなみごとな方法論をもった業績はみあたらないが、ただそれらの民俗の側面に原始婚からの遺習をみるとする解釈を拒否し、家父長制下の嫁取婚の原理での解釈で一貫しているのみか、鎌倉、平安、奈良、おそらくそれ以前にも遡及し、日本の全婚姻史にその意味での体系を与え得たとしたらしいその自負には、大きな誤謬があったのである⁴⁴。

以上のように、『日本婚姻史』の「序説」の第一節「婚姻史研究と著者」において、改めて柳田国男の学説のもつ誤謬を指摘する一方で、「自己の学者としての責任をさらに一段と痛感する」と書いた高群でした。しかし、高群の女性史学者としての研究成果は、『日本婚姻史』をもって最後となりました。『日本婚姻史』が刊行されるころには、さらに体力が弱っており、最期が迫っているのを自覚したのかもしれませんが。これ以降、結局は途中絶筆の無念に帰されることになりますが、高群の筆は、自叙伝「火の国の女の日記」へ向かうのでした。

注

- (1) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1976年（第8刷）、286頁。
- (2) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、286-287頁。
- (3) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、287頁。
- (4) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
- (5) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
- (6) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、288頁。
- (7) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
- (8) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、289頁。
- (9) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、290頁。
- (10) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
- (11) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、292頁。

(12) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、306 頁。

『高群逸枝全集』第一〇巻の「火の国の女の日記」は、第三部の戦前までが、高群逸枝本人の自筆による「自叙伝」ですが、一九六四（昭和三九）年の死去に伴い、これをもって絶筆となり、戦中戦後を扱った第四部以降は夫の橋本憲三が、自叙伝メモや書簡類、それらに加えてふたりの「共用日記」を参考にして、継続執筆したものです。したがって、これよりのち、『高群逸枝全集』第一〇巻の「火の国の女の日記」から引用する文は、憲三によって書き記されたものとなります。

(13) 『高群逸枝全集』第九巻／小説／随筆／日記、理論社、1966 年（第 1 刷）、259 頁。

この巻の巻末に付けられた、編者で夫の橋本憲三による「解題／編者」には、「昭和二〇年以降は完全に夫との共同日記になっている」と、記されています。したがって、この注(13)をはじめとして、これより以降に引用する日記は、逸枝の単独の日記ではもはやなく、逸枝と憲三との共同日記となるものです。

(14) 同『高群逸枝全集』第九巻、同頁。

(15) 同『高群逸枝全集』第九巻、同頁。

(16) 高群逸枝『日本女性社会史』眞日本社、1947（昭和 22）年 10 月 20 日。

(17) 家永三郎「わざわざするモルガンの色眼鏡」『日本読書新聞』第 425 号、1948 年 1 月 21 日（縮刷版の 361 頁）。

(18) 高群逸枝「家永三郎氏の書評に答う」『日本読書新聞』第 427 号、1948 年 2 月 4 日（縮刷版の 365 頁）。

(19) 同「家永三郎氏の書評に答う」。

(20) 同「家永三郎氏の書評に答う」。

(21) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、369 頁。

(22) 高群逸枝『招婿婚の研究』大日本雄弁会講談社、1953（昭和 28）年 1 月、4 頁。

(23) 同『招婿婚の研究』、1-2 頁。

(24) 家永三郎「高群逸枝著『招婿婚の研究』」、史学会編『史学雑誌』第 62 編第 7 号、1953 年 7 月、76-77 頁。

(25) 高群逸枝「家永博士の批評を読んで」、史学会編『史学雑誌』第 62 編第 10 号、1953 年 10 月、75 頁。

(26) 高群逸枝『母系制の研究 大日本女性史第一巻』恒星社厚生閣、1948 年 11 月、3-4 頁。

(27) 高群逸枝『大日本女性史 母系制の研究』厚生閣、1938 年、1-2 頁。

(28) 高群逸枝『女性の歴史』上巻、大日本雄弁会講談社、1954 年、32 頁。

(29) 高群逸枝『女性の歴史』中巻、大日本雄弁会講談社、1955 年、319 頁。

(30) 高群逸枝『女性の歴史』下巻、大日本雄辯会講談社、1958 年、257 頁

(31) 同『女性の歴史』下巻、294 頁。

(32) 同『女性の歴史』下巻、314 頁。

(33) 同『女性の歴史』下巻、316 頁。

(34) 前掲『高群逸枝全集』第九巻、234 頁。

(35) 同『高群逸枝全集』第九巻、442 頁。

(36) 高群逸枝『女性の歴史』続巻、大日本雄辯会講談社、1958 年、ノンブルなし。

(37) 家永三郎「古代人の結婚生活と性道德——歴史家のみた日本文化(四)」『群像』第16巻第4号、1961年、226頁。

(38) 同「古代人の結婚生活と性道德——歴史家のみた日本文化(四)——」『群像』、同頁。

(39) 同「古代人の結婚生活と性道德——歴史家のみた日本文化(四)——」『群像』、同頁。

(40) 同「古代人の結婚生活と性道德——歴史家のみた日本文化(四)——」『群像』、227頁。

(41) 同「古代人の結婚生活と性道德——歴史家のみた日本文化(四)——」『群像』、228頁。

(42) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、431頁。

(43) 高群逸枝『日本婚姻史』至文堂、1963年、4頁。

(44) 同『日本婚姻史』、同頁。

第一章 夫の姉妹からの援助、「望郷子守唄」の建碑、そして最期

一. 水俣の橋本憲三姉妹による生活支援

一九二〇（大正九）年に離郷して以来、長く東京で生活する高群逸枝は、それでも自叙伝のタイトルを「火の国の女の日記」としたように、故郷「火の国」を心から愛する女でした。一方その間、夫の橋本憲三の姉妹である藤野と静子が、一途な「火の国の女」にふさわしく、生国を出て東京の「森の家」で清貧にして学問に生きる逸枝と憲三のふたりを物心両面からしっかりと支えました。

堀場清子の『高群逸枝の生涯 年譜と著作』（ドメス出版、二〇〇九年）によりますと、橋本辰次・ミキ夫妻の長女藤野（本名フジノ）は、一八九四（明治二七）年一月一七日に肥後国八代郡日置村に生まれています。高群勝太郎・登代子の長女として逸枝（本名イツエ）が生まれるのは、次の日の一月一八日です。したがって、藤野と逸枝は全くの同世代人になります。このふたりの誕生からちょうど三年後の一八九七（明治三〇）年一月一〇日、肥後国球磨郡大村において藤野の弟憲三（本名は憲蔵）が生を受けます。憲三の妹静子（本名シズコ）は、肥後国球磨郡一勝地村を生地にもつ一九一（明治四四）年七月二五日の生まれで、兄の憲三とは一四歳、年が離れていました。

藤野と静子が「橋本商店」を開いたのは、一九三三（昭和八）年の秋のことでした。そのことについて堀場清子は、『高群逸枝の生涯 年譜と著作』のなかで、次のように書いています。堀場は、逸枝亡きあと水俣に帰還した憲三のもとを、夫である日本近代史を専攻する早稲田大学教授の鹿野政直とともにしばしば訪ね、精力的に聞き取り調査をした詩人にして女性史を専門とする研究者です。

九月二七日、藤野協議離婚して復籍。自立をめざし、橋本一家の一丸となった応援によって、早くも一〇月一日には水俣町古賀町に「橋本商店」の看板を揚げた。店主橋本藤野、事務員は静子だった。米・炭・雑貨・ミカンや梨などの果実類・酒・食品などしだいに商品をふやし、買い手や取引相手の信用を得て繁昌した（その後橋本商店は、栄町、浜町と転々しながら発展し、現在は水俣市幸町にある）¹。

また、堀場は、こうも書いています。その翌年（一九三四年）のことです。

五月一四日、橋本藤野は分家して、妹静子を養女とする。六月一九日、西村英雄を婿養子とし、静子との婚姻を届け出た。静子は結婚後も、軍人だった夫の任地熊本と、水俣の間を往来して、店の事務と経理を仕切った。大八車を引いて働き、店を大きくしたと、聞いたこともある²。

この年（一九三四年）の一月に藤野は四〇歳に、静子は七月に二三歳になりました。一方、このころの逸枝は、一九三一（昭和六）年七月に「森の家」に隠棲して以来、客の来訪をいっさい固辞し、一日に一〇時間近く仕事部屋にこもり、夫の献身を受けて「母系制の研究」に没入していました。

開戦が近づいてきました。次は、一九四〇（昭和一五）年の四月二九日に、逸枝が静子宛てに書いた手紙の一節です。

おたよりありがたく拝見、お写真なつかしくなつかしく。先日は英雄さまこまごまお手紙まことにうれしく存じました。……

私が年にとって動けなくなったらあなたが養ってくださるってありがたい。感謝します。

あと十五年——私たちもそうすればよばよばになることでしょう。喜んで静子さんのところへ帰りたと思っています³。

この手紙から二年後の一九四二（昭和一七）年一月二二日の日記には、こう記されています。「鉄道便で小荷物到着。二七キロ」⁴。小荷物のなかには、みかん大粒（三〇）、ネーブル（八）、レモン（四）、自然薯（二）、里芋、馬鈴薯、小豆、大豆、椎茸、砂糖ザラメ、同黒、小麦粉、干しえび・いわし、ちりめんじゃこ、石けん（二）、味の素（二）、歯ブラシ（二）、スモカ、ヘアネット（二）、丸餅（四〇）、梅干し（一缶）が入っていました。また、その年の一〇月一五日の日記には、「水俣から小包。——栗、ざこ、その他」⁵の文字が並びます。

終戦を経て、一九五一（昭和二六）年一二月に、ついに逸枝は「招婿婚の研究」を脱稿しました。そこで、「この機会に、化け物屋敷と呼ばれている森の家は、水俣の義姉が出てきて修理してくれることになった」⁶のでした。修理工事は、翌年（一九五二年）の夏に行なわれました。このときの「森の家」の修繕について、堀場は、こう付言します。

七月三日藤野が上京し、二三日まで滞在して応援した。家の修理費として姉妹から一〇万円、姉から夫妻の歯の治療代として一万五千円、逸枝のオーバー代として一万円を贈られる⁷。

水俣の橋本家の近くで内科医院を営む医師に、佐藤千里がいました。のちに、憲三と藤野の主治医となる人物です。偶然にも、佐藤の実家の母親の坂崎かおる（本名カオル）が逸枝の幼少期の友だちでした。のちに逸枝は、かおるについてこう書いています。「久具時代の一級下の友坂崎かおるが師範に入学したので、これと友だちになったのである。のちに彼女はよい夫と子供にめぐまれ、いまもたっしやで故郷の天草に幸福な日を送っている。私はずっと仲よくしており、いまもたよりをかわしあっている」⁸。

「森の家」の改修工事のさなか、その家に滞在していた藤野は、そのとき目にした様子を佐藤千里にこう語っています。

ほんに、あん人達ときたら、一勝地の母が昔使ったこまか（小さい）鍋釜で、ままごとのごたる暮しばしとらした。鶏達も、逸枝さんには甘えてなあ。研究の邪魔になると憲さんが逸枝さんの書斎から追い出すと、鶏達はふてくされて外で砂浴びなどしよった⁹。

逸枝は、飼っていた鶏のトン子について、こう描写しています。

トン子は扉がしまっていると、大いそぎで玄関に出かけていく。そこもしまっていると、また大いそぎで勝手口にまわって侵入し書斎へくる。

私の書斎は、終戦の放送日をさかいにして、階下に移っていた。トン子は、雛の時からおもしろい子で、いちはやく家のぐるりを探検して、私のところをかぎあてた¹⁰。

一九五四（昭和二九）年の一月一八日に、逸枝は還暦（六〇歳）を迎えました。そのとき、小さな宴が、友だち二人が加わって自宅で行なわれました。その祝い膳には、「森の家」でかわいがられていた三羽の鶏も参加しました。「もちろんトンコ、タロコ、ジロコもお相伴し、ご馳走をたべ、あまざけをすすり、逸枝が与える葡萄酒まで飲んで、上きげんだった」¹¹。

そのころの家の経済事情を憲三は、こう振り返ります。

私たちのくらし——生活費——は、彼女の資料費には事欠くことが少なくなかったとはいえ、明日の米塩にこまるということはほとんどなかった。一、二度窮境に落ちたこともないではなかったが、非常手段をとれば打開できる程度のもので、質屋利用を知らず、使用済みとなった資料の売却なども考えになく、最低の生活はつねに保障されていた¹²。

憲三がいう「非常手段」とは、たとえば「森の家」の修理費用を姉の藤野に出してもらったように、水俣の姉妹からの援助のことが念頭にあったのかもしれませんが。石牟礼道子は、憲三の姉の藤野について、こう書いています。

森の家の夫婦は学者と編集者であるから、実収入はたいそう低額でぎりぎりの生活であった。それを知ってお姉さまの方は、

「憲三夫婦はお国のために勉強しているのだから、わたしたちが養うてやらねばならん」とおっしゃって、水俣の店の収入を存分に森の家に送金しておられた由である。

¹³。

もっとも憲三は、こうもいいます。「ただ、世間にはジャーナリズムにあやまれて、彼女ないし私たちの貧乏という点については伝説的にさえ信じられているものがあるのではないかと思われたが、彼女も K もあえてこれを訂正しようという努力はしなかった」¹⁴。

二．熊本大水害から「望郷子守唄」の歌碑建立まで

当時、逸枝の思いは、家で飼う身近な愛鶏のみならず、遠く離れた、生まれ故郷にも向けられていました。「森の家」の修理からおよそ一年が立った一九五三（昭和二八）年の六月二六日、降り続く大雨で阿蘇から有明海に流れる白川が氾濫し、熊本市内は洪水に見舞われました。そのときの思いを逸枝は、熊本で『日本談義』を主宰する荒木精之に宛てた手紙で、以下のように、綴っています。

最初にラジオで、熊本の全市民に花岡山に避難命令が出たときいたときは、自分の耳をうたがったほどびっくりしました。朝日の東京版で、在京熊本県人連合会で、こちらにいる県民をはじめ一般都民に義捐をよびかけているとの異例の記事をみていよいよ驚きをふかくしました。私もさっそく郵便にたくして貧者の一灯をささげました¹⁵。

そして、この手紙は次のように続きます。

来る一月十八日は、私の還暦にあたります。そんな話を夫として寝に就いた一夜、夢の中でしきりに望郷のおもいを五木の子守唄に擬して作っていました¹⁶。

その一夜とは、熊本の大水害からほぼ四箇月が過ぎた、一九五三（昭和二八）年十一月四日の夜のことで、夢のなかで、次の一首が浮かんできました。参考までに、それに対応する「五木の子守唄」の原詩を角括弧のなかに入れておきます。

おどま帰ろ帰ろ熊本に帰ろ

恥も外聞もち忘れて¹⁷

〔おどま盆ぎり盆ぎり 盆から先やおらんと 盆が早よ来りや 早よ戻る〕

そして、目が覚めた翌朝、続けて一〇首をつくりました。そのうちの最初の二連を紹介します。

おどんが帰ったちゅうて誰がきてくりゆか

益城木原山風ばかり

〔おどんが打っ死んだちゅうて 誰が泣いてくりよか 裏の松山 蟬が鳴く〕

風じゃござらぬ汽笛でござる

汽笛なるなよ思い出す

〔蟬じゃござらんせん 妹でござる 妹泣くなよ 気にかかる〕

「五木の子守唄」のゆっくりとした三拍子の旋律に乗せた替え歌になります。こうして、一首からなる「望郷子守唄」が、一気に完成したのでした。のちに逸枝は、幼年時代を思い出して、こう書いています。

私は熊本の生まれなので、母親のうたう五木の子守歌をきいてそだった。自分も子守の群にまじって、肥後の大平野をあかあかと染めている夕焼けのなかで、よくこの歌をうたったものであった。

この歌の曲には、一定の型はあるが、時や所や歌い手の気分によって、調子は自在にかえられる。歌詞も自由に改作されたり、新作されたりする¹⁸。

一方、「望郷子守唄」が生まれたころ、逸枝は、『女性の歴史』の構想と執筆に明け暮れて

いました。その中巻が刊行されるのが一九五五（昭和三〇）年五月ですが、そのなかの第三章「女性の屈辱時代」の第五節「いわゆる庶民文化」に、肥後国の民間説話についての記述がみられます。

民間説話の種類は多い。これも私の故郷のことになるが、私の故郷は南国であたたかく、家ごとにザボンになる。北東の山岳地帯に阿蘇のけむり、南西の有明一八代の海に不知火がもえ、古来ひとよんで火の国といった。……

「あとはどうなときやあなろたい。」

という南国型の女性も私の故郷の百姓女である。

このように、この火の国は、民間説話の宝庫ともいえる国であるが、それは荒木精之氏の名著「肥後民話集」をみてもうかがわれよう¹⁹。

このように、熊本が大洪水に見舞われたこの時期、逸枝の望郷の念は、一段と高まりをみせたのでした。

しかしその一方で、この時期、逸枝の心も同じように、あたかも大水に襲われるがごとくに、苦しんでいました。以下は、一九五三（昭和二八）年一二月八日の「共用日記」に逸枝が書き記した落書き風の短文の冒頭の部分です。

私は破綻している。心に矛盾が多い。これが私の情熱やエネルギーの隠れた源泉となっている。私には自己反省の材料がかぎりなくある。私は人格の完成をもとめてさまよっている²⁰。

次は、翌年（一九五四年）一月一四日に書かれた短文の一部です。

けさは夫をこまらせた。彼がいうには、私には、意識しないでひとをばかにしているところがあると。これに私は承服しなかった。なぜなら、それどころか私にはもっといけない奴隷根性があることをひそかに考えたからだ。けれども、奴隷根性の半面こそ夫のいうとおりのものではなかろうか、ともいまはおもう²¹。

そうした内面の葛藤を抱えながらも、楽しい出来事もありました。一九五五（昭和三〇）年四月一日の日記には、こう記されています。「球磨、水俣、福岡から憲三兄弟一行到着。トンコ、タロコ、ジロコ、人みしりして妙におとなしくしている。午後、兄弟会、水俣の姉に感謝状」²²。このとき作成された感謝状を、姉の藤野は亡くなるまでとても大事に飾っていました。主治医の佐藤千里が、このように書いています。

ふじのの病室の壁には、逸枝の筆になる一枚の感謝状が額に入れてかけられていた。

感謝状

橋本ふじの様

あなたは、終始父母のために計

りその老後を楽しませること
につとめられました。
また私ども兄弟にも絶えず
愛情を頒たれました
ここに兄弟会東京開催
にあたり記念品を贈り感謝します。

昭和三十年四月十一日 兄弟会

球磨村 橋本秀吉

東京都 橋本憲三

福岡市 橋本武雄

人吉市 橋本袈義

水俣市 橋本静子

この、毛筆で丁寧に書かれた感謝状を見る度に、私は優しさとかっけいさの交じり合った奇妙な思いに浸されるのであるが、真面目であればある程童女めいてくる逸枝を好ましく思う²³。

東京での兄弟会の熱気がまだ冷めやらぬ翌一九五六（昭和三一）年の八月一日、水俣では静子が筆を執り、憲三宛てに手紙を書きました。内容を部分的に引用します。

店の近くに広い土地つきの頑丈で古風な大きな二階作り……の家があるのを求めました。……兄さん達が年をとられて寄り添って暮らしたいと思われるとき、いつでも来ていただいてよいために。いつでも行って暮らしてもよい処があると思われるだけで今安心してお仕事なさっていいわけです。

兄さん達も含めて、老後の暮らしがたつように設計をたてています。（静かな、樹木のあるよい処です）……

いつでもお出になってください。それまでは、ただおしごとだけを、と思っています。

借金をしましたが、それはちゃんとした目あてがあるのですから心配はいりません。しばらくは苦労しますが、兄さん達のためと、私達のために頑張ります²⁴。

しかしながら、まだまだ、逸枝の仕事に終わりは見えませんでした。その手紙から三年後の一九五九（昭和三四）年一月四日から四月一三日まで、一〇〇回にわたって地元紙である『熊本日日新聞（熊日）』に随筆を連載します。そして七月に、講談社より単行本となって発売されます。この『今昔の歌』は、前年（一八五八年）に刊行された『孤独と愛と 学びの細道』（理論社）に続く、逸枝にとってこの時期の二冊目の自伝的エッセイ集となるものでした。

『熊日』紙上の「今昔の歌」の連載が終わった翌日（四月一四日）は、逸枝と憲三にとっての結婚四〇周年の記念の日でした。「私たちは、高群・橋本両家の人びとへのささやかなおくりものを三越（百貨店）に注文し、当日はくつろいで自祝のテーブルにつき、タロコにも不二家の菓子をつるまったが、そこへ奥村博史さんがみえて貧しいわれわれの催しに加

わってもらったのは思いがけない仕合わせだった。奥村さんは自作の青い美しい指輪を夫妻の名でおくってください」²⁵。

『孤独と愛と 学びの細道』と『今昔の歌』に先立ち、一九五八（昭和三三）年七月に発刊された『女性の歴史』の続巻をもって、四巻からなる逸枝の「女性の歴史」は完結しました。前代未聞の偉業として世に讃えられました。そうした燦然と輝く評価を受けて、「望郷子守唄」の詩作から八年と二箇月が立った、逸枝の六八歳の誕生日でもある、一九六二（昭和三七）年一月一日に、逸枝ゆかりの地において歌碑の除幕式が執り行なわれました。以下は、翌日の『熊日』朝刊（七面）の記事からの抜粋です。

熊本が生んだ日本女性史研究家高群逸枝女史＝東京在住＝が故郷をしのんでうたった「望郷子守唄」の歌碑除幕式は、女史の六十八回目の誕生日にあたる十八日午前十時すぎから、女史が幼年時代を過ごしたゆかりの地、下益城郡松橋町久具の寄田神社境内（寄田校跡）の碑前で盛大に行なわれた。式場には沢田副知事、小崎熊日社長、福田令寿県社会福祉協議会長、黒田ハマ県婦連会長ら来賓と地元側から中山寧人松橋町長ら関係者、それに東京から女史の代理として奥村博史氏（平塚らいてう女史夫君、洋画家）浜田糸衛氏（童話作家）高良真木氏（洋画家）アメリカから帰国中の駒井哲氏（元映画俳優）らなど約三百人が参列した。

式は荒木精之氏（日本談義主宰）の司会で進められ、松橋町西部中ブラスバンドの奏楽のうちに同町曲野、坂本洋子ちゃん（七つ）＝当尾小一年・女史の弟高群元男氏（故人）の孫＝の手で除幕、同時に数十羽のハトが放たれ、小崎熊日社長が碑に刻まれた「望郷子守唄」を朗読した。

松橋町久具寄田の地で、逸枝は四歳から九歳までの幼少期を過ごしています。式典では、数百の参列者が見守るなか、松橋町長の中山寧人が式辞を述べました。参列者のなかには、高群逸枝の弟の清人、静子の夫の橋本英雄の姿もありました。逸枝はこの日、参加することはできませんでしたが、その代わりに、挨拶文を送りました。以下はそれからの抜粋です。

今日ここに、望郷子守唄の碑の式典をお挙げいただきまして、無上の光栄でございます。……

私は明治二十七年一月十八日、当松橋町に生まれ、大正九年心ならずも故郷火の国を遠く離れて、たゞいま東京に住んでいます。

他郷に出ている者にとって、故郷は母のふところであります。思い出のゆりかごの地であります。……

私の望郷子守唄は、直接的には昭和二十八年の熊本大水害に触発されてなったものでありますが、同時に私自身が内外の苦難に当面していたところから生れたものであります。……

故郷のみなさまが、おろかな私をとがめずかつ私の望郷子守唄を愛してくださって、この美しい碑をゆかりの地寄田にお建てくださったことを深く感謝し、この碑の精神が作者を超えて永遠ならんことを願つてやみません²⁶。

この式典には、平塚らいてうも、体調かなわず、参列できませんでした。そこで、教育長の白木満義が、らいてうからの長文の挨拶文を代読しました。それは、このような言葉ではじまります。

高群逸枝さんを生んだ、この松橋町——ことに、四歳から九歳までのもつとも大切な性格形成期を過ごしたと思われる、この寄田神社の境内に、地元青年方の純真な願いから出た御企画で、地元有力者の方々のご協力により高群さんの歌碑が建ちましたことは、ふるさとの自然と人々とを限りなく愛していられる高群さん御自身はもとより、高群さんを敬愛しております友人達も、よろこびと感謝にたえない次第でございます²⁷。

らいてうは、逸枝の『母系制の研究』と『招婿婚の研究』の業績に触れます。

女性史学と云うのは、高群さんの言に従えば、「女性の立場による歴史研究の学問」ですが、日本に於ける母系制の存在と、その父系制への推移の過程を資料によって観察し研究したこの二大著述は、婦人を圧迫しその人格を無視してきた家父長制度が、決して太古から日本に存在した絶対的なものでないことを、実証したものであります²⁸。

それから、かつて自身が発刊した『青鞥』へと話題をつなげます。

これによつて、わたくしが五十年前婦人雑誌「青鞥」の創刊に際し、「元始女性は太陽であつた、今女性は月である」と訴えたあの詩的表現に、はじめて科学的な裏付けが与えられたわけでございます²⁹。

さらに続けて、高群史学の金字塔となる『女性の歴史』全四巻がすでに完成し、いま、その追加の仕事として「続招婿婚の研究」に従事していることを紹介します。そしてらいてうは、次の言葉で、この挨拶文を締めくくるのでした。

ある評論家は、この建碑の話をきいて「火の女、火の国へ帰る」といゝました。永遠の生命——火の女である高群さんが、残されたお仕事を完成され、愛するふるさとに——火の国の土をしつかりと踏みしめて、この碑の前に立たれます日を、わたくしは今心に描いています³⁰。

この日らいてうが祝辞のなかで言及した、「火の女である高群さんが、残されたお仕事」は無事完成し、『日本婚姻史』という書題となって、その翌年（一九六三年）の五月に至文堂から公刊されました。しかしながら、逸枝が母と仰ぐらいてうがこのとき祈念した、「火の国の土をしつかりと踏みしめて、この碑の前に立たれます日」は、とうとう来ることはありませんでした。もっとも、奥村博史がカメラに収めて持ち帰った幾多のカラー写真が、妻のらいてうを喜ばせ、他方で、写真を見た当事者である高群逸枝と夫の橋本憲三の胸に、生国への熱い思いが燃え盛って蘇ったものと想像されます。「おどま帰ろ帰ろ 熊本に帰ろ

「おどま盆ぎり盆ぎり 盆から先やおらんと」の詩句を口ずさみながら。

その一方で、水俣に住む憲三の姉の藤野の思いは、また別のところにありました。『熊日』の「望郷子守唄」除幕式の記事には三葉の写真が掲載されたのですが、そのなかの逸枝と憲三が熊本の方角に向かって正座して謝意を表わす写真の、あまりにもみすばらしい普段着の姿に驚いたのです。藤野は、間を置かず妹の静子に筆を執らせませす。次は、一月二三日に静子を書いた文面です。

除幕式には英雄さんが出席させていただきました。盛会でたいへんきれいな会であったと申しています。……

熊日に出された写真が老いられていて、近い期限で私たちといっしょに暮される方がよいと思います。きびしい生活を続けられたのですから、もうホッとされてよい日が必要です。いつでもお迎えに参ります。

田舎は静かで不安ありません。研究のお金がいればうちの姉さんが送るからと申しています。いってやって下さい。少しでも早く片づくとうい申しています³¹。

写真に写っていた老いの様相は、紛れもなくこのときの逸枝の実際の姿でした。疲労が蓄積し、運動不足もあり、目がかすむようになるとともに、まさしく心身が衰弱していたのです。

三．高群逸枝の最期

歌碑が建立された一九六二（昭和三七）年ころから、逸枝は、自分の最期が近づいていることを察知したのでしょうか、これから書こうとする自叙伝「火の国の女の日記」のための準備に取りかかります。『日本婚姻史』と同時並行しての仕事でした。『日本婚姻史』の方は、翌年（一九六三年）の五月に見事に刊行にこぎつけることができましたが、体調は好ましくなく、結果的に『日本婚姻史』が、逸枝にとっての最後の研究書となりました。その出版から一箇月後の六月一日の「共用日記」には、「逸枝、左脇腹の痛みを訴える。固疾化（二月一三日夜廊下に倒れたときさらに痛めたらしく）していたところ。医師の来診をもとめようといえ、しばらくようすをみてからという」³²と、書き記されています。このころ逸枝は、夫に次のようなことを伝えます。頑として医者拒む逸枝の言葉です。

もし私に、ほんとうに医者が必要なきはかならず自分からそういいますから、それまであなたは安心していてください。あまりやかましくいわれるとそれだけでかえって病気になるのよ³³。

それでは以下に、この日から、自叙伝「火の国の女の日記」の執筆に取り組みながらも、高群逸枝の最後のいのちの灯が消える翌一九六四（昭和三九）年六月七日までの約一年間を、「共用日記」のなかの記述内容、およびそれについての憲三の付記から重要と思われる箇所を部分的に拾い集め、短くまとめてみたいと思います。注記がない限り、以下に用いる引用文はすべて、『高群逸枝全集』第一〇巻の第六部「翼うばわれし天使・一九六三年（六九歳）

——一九六四年（七〇歳）からの抜粋です。

八月九日「この朝も静養のこと、夜も具体案など話して病院静養をすすめたが、いまのままのほうがよく、かならず克服できるという。騒ぐのがいちばん自分には悪いという」。

九月五日『「火の国の女の日記」』（自叙伝）起筆。しかしすぐ疲れて一行でとどめる」。

九月十八日「自叙伝書きつぐ。二、三枚で大事をとって筆をおく」。

「その後逸枝の自叙伝は、自記や口述でかなり順調にすすみ、十一月二十八日には、『第一部しらたま乙女』三四〇枚を脱稿した」。

一二月一日「逸枝、貧血めまい症状、発熱」。

一二月二日「市川〔房枝〕さん、何かでご病気とのことをみたと見舞いにみえ憲三応接。当人に知らせず竹内博士にれんらく」。

「同五日に〔竹内博士〕来診、その処方箋とともに次の手紙を八日にもらった」。「想像したほどの御病気ではなく安心しました。しかし長就床のため運動不足の衰弱は認められます。すこし運動なさったがよいでしょう」。

このとき病氣見舞いに「森の家」を訪れた市川房枝と、その三日後に往診に訪れた竹内茂代は、これまで逸枝の執筆活動を親身となって全面的に支えてきた後援者でした。市川は、戦後の公職追放の身から解き放されると、一九五三（昭和二八）年の第三回参議院議員選挙に東京地方区から立候補し、当選を果たしていました。一方の竹内は、新宿に開業する医師であり、それと同時に、市川と同じ志をもつ社会運動家でもありました。このふたりが、いかに逸枝を支えたのかは、一九五三（昭和二八）年に刊行された『招婿婚の研究』の跋文によく表われています。そこには、次のような竹内と市川に対する逸枝の感謝の言葉が記されていました。

竹内茂代博士は、この種のしごとには、多くの資料と、生活の安定と、健康との三者が必要であるが、著者がそのいずれをも缺いているというのであわれまれ、親身のお力添えをたまわった。市川房枝氏は著者が基礎調査をおわつて、いよいよ執筆に入るときに、執筆二年間の生計の保障を、竹内氏とともにとりはからってくださった³⁴。

また、このようなこともありました。「共用日記」に目を移しますと、『熊日』紙上での「今昔の歌」の連載が終わって一箇月と少々が過ぎた一九五九（昭和三四）年五月二四日の午後、「市川みさをさんみえる。市川さん当落（参院選）線上にあると。鈴蘭をもらう」と記されています。房枝にとって二期目の選挙戦の時期でした。市川ミサオは、未婚である房枝の養女で、房枝が大きな信頼を寄せていた女性です。さらに、九月一二日の箇所には、次の記載があります。「竹内、市川（参議当選）、みさをさんみえる。診断——どこもわるいところはないと」。これ以外にも「共用日記」には、市川本人、あるいは使いの者が、長期にわたり、しばしば「森の家」を訪れ、金品の差し入れをしたことが記述されています。

それでは再び、「共用日記」の一九六三（昭和三八）年の部分にもどります。

一二月三〇日「逸枝病みて憲三さびし年のくれ」。

一二月三十一日「逸枝病氣、憲三ひとり内外のそうじその他。かたのごとくふるめし。除夜のかね」。

年が改まり、一九六四（昭和三九）年の元旦を迎えました。天気は晴れ。「早起き——逸

枝も元気で起きる。とそとぞうにいつものごとく。年賀一四八」。次は、この日の日記に唯一自筆された逸枝の即興歌です。「火の国の 女の日記 五百枚 書いて新年を 迎えけるかも」。

一月二日「逸枝終日起きている。水俣の姉から見舞い金」。

一月五日「軽部なみ夫人年始に。故郷から——もち、鰯節、田舎きなこ、白魚、にぼし、したけなどいろいろ。午後逸枝吐瀉」。

「彼女の吐瀉は若いときからの習慣であるが、ひとりでに出るのではなく、自分から吐くのである。そうすると気分がよくなり、一、二回の絶食で体の調子をとりのどした。一月十日の K の誕生いわいも欠かさずすまし、十八日には彼女の満七十歳を迎えて古希の祝いをした」。

一月十八日「逸枝古希七十歳。朝起床、祝膳につく。あと就床。『火の国の女の日記』口述。この日、『第二部恋愛と結婚の苦悩』を終えて、『第三部与えられた道』にすすむ」。

一月二十九日「松橋町長さんから年賀。(三越、毛布)」

二月十九日「朝刊で奥村博史さんの逝去を知る。一八日朝五時、関東中央病院で、享年七十二歳。再生不能性貧血症と。弔電」。

二月二一日「朝から小雪舞う。午後一一二時、奥村さん成城で告別式。一時十分、両人口述筆記をとめて遥拝」。

二月二三日「午前〇時すぎ、逸枝ベッドをはなれ、原稿を焼くといって重い綴じ込みをもって階段を下り、庭に持ち出そうとする。焼くのはしばらくやめて、再検討または改稿の資料にしたがよくはないかととめて、ベッドにみちびく」。

「彼女は原稿が気に染まなくなると惜し気もなく反古にするのがつねだった。こんどの場合、彼女の最大の懸念は、原稿のなかの多くの登場者のいちいちについて、尊敬を欠いたりまたはその立場を誤って傷つけるものがないか、自己修飾あるいは弁護におちいるものがないかという点で、自叙伝のもつその限界ないし可能性について悩んだのである。この原稿は危いところで焼却をまぬかれて、彼女によって丹念に推敲された」。

二月二十九日「入浴のしたくをしたが逸枝気分わるく取りやめる。眼がかすみ新聞がよめない。……三時すぎ胸のどうき強く、発熱、四時かいふく」。

三月一八日「逸枝、日中離床。『火の国』、母系制の研究のところまで進む。七〇八枚」。

三月二四日「このまま目がみえなくなったら病院に行って手術なども考えましょうという」。

三月二五日「はじめて活字が読めるという」。

四月五日「中ソ論争表面化。ゆくとこまでゆくだろう。……有色人の文明 自給生産共同体 白人の文明 商品生産個人主義」。

四月八日「逸枝ちょっと起きてまた就床。床上で『火の国』昭和一五年帰省の章を書く。らいてうさんからたより」。

「五日の日記は二人の共用日記の、八日の『帰省』は『火の国の女の日記』の、ともに絶筆となったものである」。

こうして逸枝の筆が、口述筆記も含めて完全に止まりました。このときの主な病状は、神経痛による激しい痛みと顔面の発疹でした。ついに逸枝も近所の開業医の K さんによる往診を承諾し、四月一三日の夜の受診を最初として、診療がはじまりました。K 医師の見立て

によると、顔面の発疹はヘルペスにちがいでなく、精神的肉体的疲労が主因と考えられ、その症状に神経痛が伴うのは一般的であるとのことでした。しかし、およそ一箇月が立とうとしていましたが、病状は膠着状態で、いっこうに回復の兆しが見えませんでした。次は、「共用日記」のなかの憲三の付記です。

「K、五月十日の夜明けとともに五時三十分 K 医師の来診をもとめて友人たちにも電話。十時三十五分竹内博士。その結果、病院入りを納得させられる」。

五月一日「二時市川〔房枝〕さんらみえる。竹内〔茂代〕さんの選択、市川さんの厚生省を通じての配慮で、国立東京第二病院に決定。K、市川さんらと病院に出かけ、帰家四時三〇分、逸枝は〔市川〕みさをさんにつきそわれて今朝よりぐっとよくなっている。奇跡とよろこぶ」。しかし、「逸枝は、共同室ときくといやがり、ぜひ個室にしてほしいという」。

五月一二日「九時十分救急車で出発。特別室ながら二人室に入る」。

憲三は、個室でないことが気になっていました。加えて、この病院が「完全看護制」で、自分が付添人として逸枝のそばにすることができないことを知ったときは、「彼女の不運の姿が目につかび椅子にかかったまま失神した」のでした。これまで、「森の家」では他人の訪問を断わり、長いあいだ、夫婦ふたりだけの水入らずの暮らしをしてきた憲三にとっては、予想だにしない、不測の事態に遭遇したのでした。一方、何年も家から一步も出ることなく書斎の机に向かっていた逸枝にとっては、救急車というまでもなく、病院も病室も、全くなじみのない異質の空間だったにちがいません。それでも、付添婦だけは、何とか病院側から提供されることになりました。入院初日のこの日は、時間が来ると握手を交わし、夜のことを付添婦によく頼んで、やむなく病院をあとにしました。

五月一三日「逸枝は眠れなかったろう。さびしかつたろう。いまごろ熱心に待っていることだろう。しばらく待っていてください。まだふらつく頭をかかえて口上書をまとめる。八時四十五分できる。これから飛んでいく。……口上書（個室あっせん依頼）を面会室で友人たちに手渡してたのむ」。

「個室については入院前日の病院あいさつの帰途、K が病人の要求をきくまでもなく逸早く市川さんにそのあっせんを依頼した。病院費用については自宅ですでに用意がある旨を通じてあった。そして、あらためて入院翌日文書でもって依頼するとともに、K 自身も庶務課長、婦長、主治医に頼んだ。……幸い可及的早く南側の明るい静かなもつともよい場所の一人室に移ることができてうれしかった」。

「主治医は病名ないし病状について K がたずねても、はっきりしたことは何もあかしてくれなかったが、K は百科事典の『腹水』の項目からあれこれとたどって行って、重大な覚悟を要することを察知し、できうるかぎり現在の患者をまず安静させ、体力を維持して、療養を長期にみちびくことを考え、あまり友人たちの面会が多くて、しかも病人が自分を殺してげんきよく応対につとめて疲れるので、主治医に話して『面会謝絶——主治医』の標札を病室の入口に掲示してもらった。むろん主治医の方でもそれを必要としたのだろう」。

「重大な覚悟を要することを察知」した憲三と、市川房枝の関係者たちは、そのことを、憲三の妹で、水俣に住む橋本静子に連絡しました。以下は、静子の文からの引用です。

前に、姉と私ども夫婦の水俣の居宅にお越しいただいている浜田糸衛様、高良真木様のお知らせと、兄憲三のお知らせも届き、姉逸枝の急病を知りました。夫と私は羽田に着

き、旧知の高良様のご運転のお車のご供与をいただきました。

同乗のかたから、「普通の人ではすぐに入院することができないのを、市川先生の国会議員の肩書きで入院することが出来た」とうけたまわりました³⁵。

しかし、その車が向かったのは、逸枝が入院している国立東京第二病院ではなく、市川の執務室のある婦選会館でした。当然ながら、静子は、落ち着きませんでした。「世事に才覚のない兄憲三に、入院ごとのお手助けを感謝申し上げましたが、早く病体をみきわめて、なんとしてでも早急に全快させねばと気負っていて、兄夫婦に早く会いたいと念願してばかりいました」³⁶。病院に連れていってもらえたのは、やっとその後のことでした。面会を終え、その足で、「森の家」にたどり着きます。

兄と夫と私とで食事もしないで善後策を話し合い、早急に態勢をととのえました。姉フジノが当座用にと持たせて寄越した百萬円を兄に渡し、「いつでも、いくらでも、要るだけ送るから言ってよこせ」との伝言も伝えました」³⁷。

六月七日「病院の廊下で[日曜日のため昼間自宅に帰ろうとしていた]付添いさんにあい、午前八時入室。逸枝の寝顔のあまり美しさに、さめるまで立ったままみとれていた。また呼吸のやすらかさ。彼女は神だ」。

「十時、主治医みえる。そんなに食べられないなら、注射するかも知れないと告知される。昼食には病院の流動食はたべたくないといい、牛乳とアイスクリームを、二人でわけあってたべた。……私は立ったり、椅子にかけたりして、一日彼女と接近して看護した。胸から頸部にかけて鈍痛。ときどき後頭部と額の鈍痛」。

この日の夕刻、逸枝と憲三が交わした最後の会話の場面を、以下に再現します。

私「私はあなたによって救われてここまでできました。無にひとしい私をよく愛してくれました。感謝します」。

彼女「われわれはほんとうにしあわせでしたね」。

私「われわれはほんとうにしあわせでした」。力を入れてこたえ、さらに顔を近づけて私が「……」というと、彼女ははっきりうなずいて、「そうです」といった。

彼女は心からそれをゆるし、そしてよろこんでいるのだった。いまこそわれわれは一心になったのだ。

七時十分に付添いさんが帰室したのちも九時までいたが、いよいよかえりのあいさつのとき、逸枝はかたく私の手をにぎり、「あしたはきつときてください」とつよいことばでいった。

これまでにない異様なショックを受けた。しかし、とどまることがゆるされない。……私は、祈り祈り帰家。

——病院からのれんらくで十一時につけつけた。そのとき、もう彼女の偉大な魂は一生の尊い使命を終え、永遠のねむりにはいつていた。

最後に憲三が逸枝に伝えた「……」という伏せ字になっている箇所は、「すぐに自分もそ

っちに行くからね」という言葉に近い何かではなかったかと推量されます。死亡時刻は、一九六四（昭和三九）年六月七日の午後一〇時四五分、病名は、ガン性腹膜炎でした。かくして「彼女のなきがらは翌日らいてうさん、主治医の見送りのなかに病院を出て、軽部夫人らの待つ森の家に帰った」のでした。

六月八日および九日にかけて、主要な新聞紙上において、高群逸枝の死亡記事が掲載されました。地元紙の『熊日』も九日の朝刊九面で報じました。記事に加えられた逸枝の写真は、黒の罫線で囲まれていました。次の引用は、その記事からの抜き書きです。「高群逸枝さん（本名橋本イツエ、女性史研究家、評論家）は東京・目黒の国立第二病院入院中、七日午後十時四五分ガン性腹膜炎のため死去、七十歳。……十日午前十時から自宅で密葬。本葬は熊本で行なう予定。日時その他は未定」。しかしながら、本葬を熊本で行なうことについては、何かの事情により変更せざるを得なかったようです。二日後に出される死亡広告がそのことを物語ります。『熊日』においては、死亡広告は一日朝刊四面に掲載されました。「夫 橋本憲三 親戚代表 橋本英雄 高群晃 友人代表 家永三郎 志垣寛」の連名によるもので、「告別式」を自宅で行なうことが、以下のように告知されたのでした。

高群逸枝（橋本イツエ）こと六月七日午後十時四十五分永眠いたしました 茲に生前のご厚誼を深謝しご通知いたします 追て来る六月一五日午後三時より五時まで自宅にて仏式により告別式を相営みます

友人代表を務めたのは、東京教育大学文学部の日本史の教授の家永三郎と、同郷熊本県出身で教育評論家の志垣寛のふたりでした。平塚らいてうの名も、市川房枝の名も、ここにはありません。この死亡広告を見て、なぜ、予定どおりに熊本で本葬を行なわないのか、そして、「望郷子守唄」の除幕式に際しての挨拶文にみられたように、これまで一心に逸枝を支えてきていたと思われるらいてうが友人代表になっていないのはなぜなのか、不自然さを感じた『熊日』購読者も多かったのではないかと考えられます。

他方で、こうした死亡広告は、かつて逸枝の母親の登代子が亡くなったときも、夫の勝太郎によって出されており、憲三はそれをしっかりと踏襲したといえます。逸枝は、そのことについて、こう書いています。「母が死んだとき父は九州日日と九州の両新聞に家族連名の死亡広告を出して、有縁の人たちに知らせることを忘れなかったが、またこれは母への最後の父の敬意でもあったろう」³⁸。戦後、『九州日日新聞』と『九州新聞』が合併して『熊本日日新聞（熊日）』が生まれます。この引用文の一節は、五年前に『熊日』に連載された「今昔の歌」のなかにおいて逸枝が披露したものです。したがって、この死亡広告を見て、親子二代にわたる死亡時対応の継承にかかわって何か深い思いに駆られた『熊日』購読者も、少なからずいたにちがいありません。

病院から帰宅したひつぎは、書斎につくられた祭壇に安置されました。それから一五日の告別式までの様子を、憲三は、『高群逸枝全集』第一〇巻のなかで、次のように記しています。

Kと静子とで美しく化粧し、『招婿婚の研究』一本、『恋愛論』原稿に、詩集を添え、長年の愛用——彼女の指にペンだこをつくった——万年筆にインキ壺、研究カード・原稿

用紙・ノート・便箋、眼鏡等を棺内の枕元におさめ、憲平ちゃんのかたみ、愛鶏を抱いた彼女と K の写真、それに K の言葉を胸に置き、庭の花ばなをいっぱい加えて、八日九日の通夜の後、十日夫と橋本高群両家の近親、竹内茂代さんら少数のものがみまもってだびに付し（代々幡葬祭場）、十五日森の家で葬儀（導師豪徳寺）と告別式を営んだ。

告別式の様子は、六月一六日の『熊日』でも「弔歌に故人しのんで 高群逸枝さんの告別式」（七面、写真入り）という見出し記事で取り上げられました。「式には故人の郷里下益城郡松橋町から上京した中山町長をはじめ平塚雷鳥さん（評論家）人吉円吉氏（昭和女大教授）住井すえさん（作家）志垣寛氏、島田磬也氏、伊豆熊日社長代理井内同東京支社長ら多数が参列した。中山松橋町長の弔辞のあと、荒木精之氏からおくられた弔歌の朗読（島田磬也氏）寺本知事、伊豆熊日社長らの弔電披露があり、女性史研究に一生をささげた故人をしのぶにふさわしい盛儀だった」。

四．葬儀後の残照

告別式から四日後の六月一九日、『サンケイ新聞』は、和歌森太郎執筆の追悼文「高群逸枝さんの業績 女性の目で、日本女性史をくみだてる」（七面）を掲載しました。

それにしても「招婿婚の研究」など、たいしたものである。妻問い婚、つまり男が女のもとにかよいながら夫婦関係を結んだ段階から、妻方にあって夫婦が共同生活をする段階へ、そして夫方のほうに妻を迎え入れる嫁取り婚の段階へと変わってきた過程は、従来民俗学もよく説いてきたところであるが、これを、原始・古代・中世・近世にわたる膨大な史料を基礎に、みごとに筋みちつけられた。民族資料も、よく批判的に摂取され、その論旨を具体的にたずけている。

和歌森太郎は、『招婿婚の研究』が出版されるときに結成された「高群逸枝著作刊行後援会」にも、その名を連ねていました。逸枝の死亡広告において友人代表のひとりとなっていた家永三郎と同じく、和歌森も東京教育大学文学部の教授で、日本史（史学方法論／民俗学）が専門でした。

続く六月二二日に、婦選会館で高群逸枝を追悼する会が催されました。『婦人展望』は、その様子を、短くこのように伝えています。

去る六月七日死去した女性史研究家高群逸枝の追悼会が六月二十二日午後二時～五時婦選会館においてひらかれ、次の諸氏が出席、故人をしのんだ。市川房枝、鏑田貞子、浜田糸衛、稲津もと、高良真木、中島和子、近藤真柄、児玉勝子、武石まさ子、市川ミサオ、両沢葉子³⁹。

このなかの浜田糸衛と高良真木は、逸枝の「望郷子守唄」の建碑に際して、らいてうの提案により、東京での募金活動に奔走する一方、除幕式参列のあと、憲三の姉妹の住む水俣に足を運んだおりには、湯の児温泉の三笠屋旅館での一泊の接遇も受けていました。しかし、

この追悼会は、逸枝をしのぶ場というよりは、憲三への悪口を並び立てる場と化したのではないかと想像されます。といいますのも、この追悼会に出席した人たちは、一週間前の一日に「森の家」で举行された告別式に参加していなかった可能性があるからです。なぜ、彼女たちは告別式への参列を見送ったのでしょうか。どうやら、逸枝が入院した際、憲三が病院側に要求した「個室と面会謝絶」が原因となっており、市川房枝とその周囲の人たちに不快感を生じさせたようです。憲三は、『高群逸枝全集』第一〇巻のなかで、このように書きます。

個室と面会謝絶の件は、思いがけなく、一部にまさつをおこした。Kは、生命の尊厳と、ひたすら彼女の心にしがった。それを知った逸枝は「私たちは自分たちのこれまでの流儀を押し通しましょう」といった。

「でもそれは感謝とか友情とかの問題とはべつですね」

「そうですとも」

すでに書いていますように、市川房枝は、戦前の『母系制の研究』発刊のころから今日まで、親身になって逸枝を支えてきた後援者のひとりでした。おそらく市川は、逸枝に最良の医療を施すために、善意をもって参議院議員という立場から厚生省に働きかけ、国立東京第二病院への入院の斡旋をしたのでしょう。そして、時間の許す限り病室を訪れ、手を握りしめながら、思い出を語り、感謝の言葉をお互い交わし合っており、最後の日を迎えたかったものと想像されます。市川を取り巻くほかの女性たちも、おそらくこれと同じ心情だったにちがいありません。しかし、個室にかくまい、他者の面会を拒絶しようとする憲三の行為は、そうした人たちの願いを踏みにじるものであり、それが「まさつ」となって、両者に修復しがたい溝が形成され、告別式から一週間を置いての追悼集会の開催という分派行動となって現われたものと推量されます。

しかし一方で、夫である憲三には、妻に対する固有の別の感情がありました。つまりそれは、残り少ない時間にあって多くの後援者たちが見舞いに押しかけ、それに無理をして応対する状況が続けば、妻の心身の衰弱は一気に進行するにちがいないという懸念でした。他方で、そもそも三十余年ものあいだ「森の家」に引きこもり、来客を断ち、机を友に生活してきた逸枝でしたので、個室と面会謝絶を強く望んだのは、むしろ逸枝の方だったのかもしれない。

さらにそれらに加えて、完全看護という医療制度も、常にこの間、憲三を脅かしていたものと考えられます。のちに憲三は、石牟礼道子にこう語ることになるのです。

完全看護制などということがわかっていれば、入院などさせなかったのです。ここで、彼女が求め続けていた森の家でのいとなみを終わることができたのに、僕がうかつにも気付かなかったから、彼女のいとなみを断ってしまった……⁴⁰。

完全看護制を敷くこの病院は、憲三にとって、決められた短い時間以外はもはや自分が入り込むことができない、いままでに経験のなかった、ふたりを分かつ異界でしかありませんでした。あくまでも憲三は、ふたりして長く暮らしてきた自宅で、逸枝をしっかりと胸に抱き、最後の別れの言葉を交わしたかったのではないかと思います。実際にそれができな

ったことは、まさしく「慙愧の極み」として、その後終生憲三を苦しめ、そうした後悔の弁が、上記引用のごとく、身近な石牟礼へ向けられたのではないかと推察されます。

しかし、市川房枝たちと憲三のあいだに生じた不信感、個室と面会謝絶の問題だけに止まりませんでした。それは、金銭に関する問題でした。以下に、それにかかわる、憲三の妹の静子が兄の口述を筆記した市川房枝に宛てた手紙の写しが公開されていますので、長くなりますが、ここに全文紹介します。

拝啓

故高群逸枝こと、国立東京第二病院入院につきましてはご高配をたまわりましてまことにありがとうございました。そのせつ、金参万円也と記入されたご封筒を手わたされ、お見舞い金と思いがいをいたしました。

そのとき療養費についておたずねになり、当座用にはとりあえず五〇万、その他充分の用意があることをお答えいたしました。

死亡いたしまして霊安室での通夜の席において、みなさまの前であの金は返して欲しい旨を申し入れられ恐縮いたしました。

葬儀を完了いたしまして、せいりにとりかかりましたので本日書留郵便をもってご返金申し上げます。お受け取り下さい。故人は参万円のことについてはなにも知りませんでした。旧来からの御厚情、深くお礼申し上げます。

昭和三十九年六月十七日 橋本憲三

市川房枝様⁴¹

この手紙が公開されているのは、「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」と題された文においてですが、さらにそのなかで、筆者である憲三は、市川からの金は「入院前日の五月一日に自宅で受け取った……貳万円返金すべきところをあやまって参万円にしてしまった」⁴²と、書き加えています。

それでは、市川が憲三に渡した金がお見舞金でなかったすれば、市川は何の目的で、貳万円を差し出したのでしょうか。自分の知る無一文に近い憲三を哀れみ、今後支払いに窮するにちがいない入院費用の一部に充ててもらうことが念頭に置かれていたものと考えられます。しかし憲三が、それなりの資金を用意していることを知るや、それまでしばしば折に触れては金品を援助してきていたことも含め、自分の厚意が無にされたと思い込み、返金を求める行為に走ったのでしょうか。憲三や、その話を聞いた静子の目には、その行為はどう映ったのでしょうか。おそらく大人気無い、失笑を誘う行為として映ったにちがいません。また同時に、言い出す場所がそれにふさわしい場であったのかどうか、それを思うと何か虚しい怒りに近い感情が湧き出てきたかもしれません。しかしながら、その一方で、後援者としての市川の自尊心なり自負心なりは大きく傷つき、そのとき市川は、一時的に適切な判断ができない、冷静さを喪失した状況に陥ってしまったのではないかと、あるいはまた、生涯許すことができないとの強い決断にまで到達してしまったのではないかとも思われます。それについての市川本人の言葉は残されていないようですので、推断するしかありません。ただらいてうは、逸枝の死を心から悼む「高群逸枝さんの訃報」と題された文のなかで、憲三と市川たちとの亀裂についてはいっさい何も触れていませんが、わずかながら、

こう付け加えています。「高群さんが最後の病床をおくった国立東京第二病院への入院については、つねづね高群さんの研究生生活を励ましてこられた、古くからの友人市川房枝さんや竹内茂代さんらの配慮、尽力があったのです」⁴³。逸枝の死後も、憲三とらいてうの友情は、これまでどおり終生続きます。しかし、市川との交流は、これをもって、残念ながら途切れることになるのでした。葬儀の際に、年来の盟友であるらいてうが友人代表に名を連ねなかったのは、こうした背景が遠因となっていたのかもしれない。

それにしても、臨終に立ち会うことができず、最後の言葉も交わすことなく、手さえ握りしめてあげることもかなわず、ひとり逸枝を旅立たせてしまった憲三の無念は、いかほどであったでしょうか。さらにそれに加えて、あれほど強い望郷の念を抱く逸枝のなきがらを、思いどおりに火の国に持ち帰り、そこで本葬ができなかったことの無念は、これもまた、いかほどであったでしょうか。この時期、喪主たる憲三は、打ちひしがれ、その敗北感に必死に耐えようとしていたにちがいありません。しかしながら、葬送の儀というものは、あくまでも遺族を主体とする見送りの営みである以上、逸枝の亡き姿を、市川を含む一部の女性グループの思いのままにさせずにすんだことは、せめてもの慰めになったものと推量されます。

東京の婦選会館で高群逸枝の追悼会が開かれて一箇月と数日が立ちました。今度は熊本で、荒木精之が主宰する『日本談義』の八月号で「高群逸枝女史追悼」の特集が組まれました。特集は、橋本憲三、福田令寿、島田馨也を含む九人の執筆陣で構成されました。そのなかに、志垣寛の「高群さんと橋本君」という一文があります。志垣の妻が、熊本県師範学校女子部で逸枝と同級であり、志垣自身は、かつて憲三を平凡社に入社の斡旋をしたことがあり、今回の告別式に当たっては葬儀委員長を務めており、逸枝とも憲三とも昔からの親しい間柄でした。その志垣が、追悼文「高群さんと橋本君」のなかで、逸枝が亡くなった日の病院の霊安室での通夜的一幕に触れています。これも少し長くなりますが、正確を期すために、断片化することなく、その該当箇所すべてを、ここに書き記しておきたいと思います。

六月七日、国立第二病院の死亡者室に横たえられた亡き人の枕頭には、従来長い間彼女のためにあらゆる協力と奉仕をいとわなかつた数々の名流婦人があつた。彼女たちに囲まれたたゞ一人の故人の骨肉者は夫憲三君一人であつた。橋本夫妻がいかに貧乏であつたかは、彼女たちがよく知つていた。だからこそ彼女たちは年々逸枝さんの研究費を扶け、治療費を扶け、そして今は死後の葬式まで心配していた。

しかし橋本君にしてみれば、せめて葬儀位は亭主たる自分の手で、自分の心ゆくまゝにとり行いたいと念願した。そのかげには憲三君をこの上なくいたわしく感じていた憲三君の妹さん（水俣在）があつた。妹さんは逸枝さんの臨終には居合せなかつたが、亡くなる数日前に訪ねて、治療費として百万円をおいて行つた。橋本君は今こそその金で逸枝を自分の思う通りに葬りたいと思つていた。

名流婦人たちは、橋本君の意中を察せず葬式万端、自分たちの手でとり行ふべくすでに枕頭には葬儀やが呼ばれていた。初め橋本君は彼女たちからののがれたくて、葬儀は熊本でとり行ふといつて彼女たちをおどろかせた。しかしせめて「告別式」だけはとのたつての要望から、橋本君も折れて、葬儀やが招かれたわけだ。その席上、橋本君は最高葬儀を注文し、彼女たちの眼の前で即金を渡した。これには流石名流婦人たちがびつく

りしてしまつた。貧乏をうりものにする似而非ものであると怒つた。橋本さんがあんなお金持ちとは夢さえ思わなかつた。そんなにお金があるなら、先刻さしあげた「見舞金」は返してほしいといった名流婦人もあつた。もちろんその金は返した。わたくしが現われたのはそれらの事件のあとであつた。

名流婦人たちは死亡広告に名を連ねる事を拒み、葬式にも列せず、僅かに平塚雷鳥、守屋東、伊福部敬子、住井すえ等々の数女史にすぎなかつた。

故人は原始女性は太陽であつたという平塚女史の言葉を実証すべく一生の研究を続けた。しかし女性解放は男性を奴隷化することとはいわなかつた。男も認め、女も認むることが故人の心ではなかつたろうか⁴⁴。

志垣寛は憲三の友人ですので、その観点から偏って書いているかもしれません。では、一方の「名流婦人たち」は、この一件をどう見ていたのでしょうか。しかし、少なくとも市川房枝の随想集『だいこんの花』（一九七九年、新宿書房）と、市川ミサオの回想記『市川房枝おもいで話』（一九九二年、NHK出版）とを見る限りにおいては、そのことについてはいっさい触れられていません。くしくも志垣は、「女性解放は男性を奴隷化することとはいわなかつた。男も認め、女も認むることが故人の心ではなかつたろうか」という文言で、「高群さんと橋本君」を結びました。ところが、驚くべきことに、第一三章「高群逸枝を顕彰する力とそれに水を差す力のはざままで」において詳述しますが、それから一〇年もの歳月が流れたのち、この逸枝の入院および臨終時に発生した反目が、ひとつは、小説という、事実を超えた創作形式をとりながら、いまひとつは、評論という、一方的な視点に立った論述形式をとりながら、一度ならずも蒸し返され、憲三があたかも金の亡者で女を抑圧する風采の上まらない男であるかのように、心ない女性の書き手たちによって描かれることになるのです。

しかし、その一方で、「高群逸枝女史追悼特集」を所収した『日本談義』が刊行されるおよそ一箇月前の七月三日の『熊日』（六面）に目を移動しますと、そこに石牟礼道子の「高群逸枝さんを追慕する」という追悼文に出くわします。これは、石牟礼が『苦海浄土』の作者として名を成す少し前の文です。それでは以下に、「高群逸枝さんを追慕する」のなかの一節を引用します。

高群逸枝氏が、その女性史の中で、まれな密度とリリースムをこめて、ほかに使いようもないことばで「日本の村」と書き、「火の国」と書き、「百姓女」と書き、「女が動くときは山が動く」と書いたとき、彼女みずからが、古代母系社会からよみがえりつづけている妣（ひ）であるにちがいない。（注＝妣は母）

末尾の括弧書き「注＝妣は母」の文字は、石牟礼のもともとの原稿にあったのか、編集作業中に付け加えられたものなのかはわかりませんが、これをきっかけに、石牟礼の内面にあつて、高群逸枝をもって自分の妣／母とみなす慕情の念が徐々に醸成されてゆきます。こうしてこの時期、石牟礼は、憲三に寄り添いながら逸枝の志を継ぎたいとする願望を固く胸に秘めるのでした。逸枝亡きあとの、新たな物語が、ここに開幕します。その物語が、これよりのち、どう展開してゆくのかは、次の第一二章「夫による『高群逸枝全集』の編集と石牟

礼道子の高群継承の決意」を含む、以降の章で詳しく述べてみたいと思います。

注

- (1) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、68頁。
- (2) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、69頁。
- (3) 『高群逸枝全集』第九巻／小説／随筆／日記、理論社、1966年、251頁。
- (4) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1976年（第8刷）、307頁。
- (5) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
- (6) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、370頁。
- (7) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、111頁。
- (8) 高群逸枝『今昔の歌』講談社、1959年、127-128頁。
- (9) 佐藤千里「高群逸枝・橋本憲三を支えた人 その（一） 橋本ふじの（藤野）」『詩と眞實』通巻第350号 8月号、1978年7月、47頁。
- (10) 高群逸枝『愛と孤独と 学びの細道』理論社、1958年、175頁。
- (11) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、386頁。
- (12) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、418頁。
- (13) 『石牟礼道子全集』別巻、藤原書店、2014年、275頁。
- (14) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
- (15) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、381-382頁。
- (16) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、382頁。
- (17) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、381頁。
- (18) 前掲『愛と孤独と 学びの細道』、211頁。
- (19) 高群逸枝『女性の歴史』（中巻）大日本雄弁会講談社、1955年、315頁。
- (20) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、384頁。
- (21) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、385頁。
- (22) 前掲『高群逸枝全集』第九巻、372頁。
- (23) 前掲「高群逸枝・橋本憲三を支えた人 その（一） 橋本ふじの（藤野）」『詩と眞實』、同頁。
- (24) 前掲『高群逸枝全集』第九巻、434頁。
- (25) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、418頁。
- (26) 『高群逸枝』「高群逸枝を顕彰する会」発行、2014年、10頁。熊本県立図書館所蔵。
- (27) 同『高群逸枝』、11頁。
- (28) 同『高群逸枝』、同頁。
- (29) 同『高群逸枝』、同頁。
- (30) 同『高群逸枝』、同頁。
- (31) 前掲『高群逸枝全集』第一〇巻、442頁。
- (32) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、461頁。
- (33) 同『高群逸枝全集』第一〇巻、同頁。
- (34) 高群逸枝『招婿婚の研究』大日本雄弁会講談社、1953（昭和28）年1月、「跋」の

2 頁。

(35) 橋本静子「もろさわようこ様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、4頁。

(36) 同「もろさわようこ様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、5頁。

(37) 同「もろさわようこ様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、同頁。

(38) 前掲『今昔の歌』、236頁。

(39) 月刊『婦人展望』、1964年7月号、3頁。

(40) 石牟礼道子「最後の人 第九回 序章 森の家日記9」『高群逸枝雑誌』第18号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1973年1月1日、27頁。

(41) 橋本憲三「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、36-37頁。

(42) 同「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」、36頁。

(43) 平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった④』大月書店、1992年、306-307頁。

(44) 志垣寛「高群さんと橋本君」『日本談義』日本談義社、1964年8月、57-58頁。

第一章 夫による『高群逸枝全集』の編集と石牟礼道子の高群継承の決意

一. 橋本憲三による「火の国の女の日記」の補筆と『高群逸枝全集』の編集

一九六四（昭和三九）年六月七日の午後一〇時四五分、ガン性腹膜炎により、高群逸枝は、国立東京第二病院において息を引き取りました。病院からの急変の知らせを受けた夫の橋本憲三は、自宅を出て病院へと向かう途中にあり、残念ながら、臨終に際して妻の手を握ることも、言葉をかけることもできませんでした。しかしながら、最期の病床にあって逸枝は、次のようなことを、憲三に託していました。

私とあなたの愛が火の国（自叙伝）でこそよくわかるだろう。火の国はもうあなたにあとを委せてよいと思う。もう筋道はできているのだし、あなたは私の何もかもをよく知っているのだから、しまいまで書いて置いてください。ほんとうに私たちは一体になりました¹。

すでにそのときまでにあつて、「火の国の女の日記」は、第一部「しらたま乙女」、第二部「恋愛と結婚の苦悩」、そして第三部「与えられた道」が完結していました。憲三に託されたのは、第四部「光にむかって」、第五部「実り」、そして最後の第六部「翼うばわれし天使」の三部でした。第四部と第五部は、戦争が終わり、女性史学者として逸枝が世に認められてゆく時期の描写となり、第六部は、最期の病床の様子を扱う内容になることが想定されていました。執筆中、憲三は、自身の胸の内を明かすかのように、『「火の国の女の日記」 高群逸枝の自叙伝について』の表題のもと『熊本日日新聞』に寄稿します。掲載されたのは、一九六五（昭和四〇）年二月五日の朝刊八面でした。その一部を、以下に引用します。

私は告別が終わった翌日から今日につづく医者がよいをしながら、彼女のいなくなった廃屋同様の一室にひとりむなしく残って「日記」の整理をした。同じ年に奥村画伯を失われたらいてう夫人は、「涙の中で、墓を建てるよりさきに、故人が望んでいたデッサン集を作らねばならないと決心した」という意味を書いておられるが、私も形の上でそっくりそのようになった。「奥村博史素描集」は一周忌を前にしてすでに刊行されたが、「火の国の女の日記」もそうなるであろう。

この文からも読み取れますように、『火の国の女の日記』の刊行には、逸枝の一周忌に際して霊前に捧げようとする意図が含まれていました。いまその本を手にとると、「はしがき」には、以下にみられる逸枝の言葉が、添えられています。

どこからあたしゃ来たのやら

どこへ帰っていく身やら…

『沈鐘』（ハウプトマン）の森の姫のこの歌はさながら私自身の歌でもありはしないのだろうか。人生の峠に立って長かった道程をふりかえってみると、私は人の子であり、

妻であり、また同時に詩人で、歴史学者だった。そしてもちろん人類の一員だった²。

また、奥付には、こう記されています。「高群逸枝 火の国の女の日記 1965年6月・第1刷発行 著者／高群逸枝 橋本憲三補 発行者／小宮山量平 発行所 株式会社理論社」³。

この時期の憲三の動向は、「共用日記」によく表われています。以下は、「共用日記」が断片的に所収されている堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』からの引用です。

五月三十一日 小宮山さん四時前内容見本届けられる。／豪徳寺からお骨をだいてくる。

軽部夫妻の墓に詣で、別辞。憲平ちゃんの土をもち帰る。

六月二日 静子はやぶさ10時5分ー11時着。

六月五日 『火の国の女の日記』小宮山さん一時に持参。

六月六日 はやぶさ（10時5分東京駅着）で英雄さん⁴。

預けていた豪徳寺から逸枝の遺骨をもらい受ける一方で、予定どおりに『火の国の女の日記』が出版され、そして、英雄と静子の妹夫妻が、西鹿児島駅発東京行きの寝台特急列車（ブルートレイン）の「はやぶさ」で、水俣から上京してきました。かくして六月七日、遺族は、ここ「森の家」で逸枝の一周忌を迎えたのでした。以下の引用は、六月七日の「共用日記」に残されている文言です。

五月三十一日より逸枝をベッドにやすませ、毎夜をともにした。明朝この家を出て46年余の東京滞留に終止符をうち、故山にともなう。らいてうさん献花。お桃さん。村上信彦さんから電報。徳永夫人⁵。

翌六月八日、喪主の憲三は、遺骨を胸に抱き、迎えにきた妹夫婦に付き添われて、故郷の水俣にもどっていきました。しかし憲三は、遺骨を預けると一六日には折り返し「森の家」に帰ります。『高群逸枝全集』（全一〇巻）の編集に本格的に取り組むためだったものと思われまふ。この時期の憲三は、心身に不調をきたし、苦悩のなかにありました。七月二三日と二四日の「共用日記」からの引用です。

七月二三日 昨日から「火の日記」よみかえし、校正をしているが、十分もすると涙がでて、字がみえなくなり、頭いたむ。

七月二四日 昨夜頭痛、胃痛、に不安感。残務ー著作集ー遂行まで生命がもつかなど思う⁶。

しかし、勇気づけられる出来事もありました。発刊から一箇月が過ぎたこの時期、『火の国の女の日記』の書評や紹介文が、雑誌や新聞で取り上げられはじめたのです。そのなかにあつて、橋本万平が『週刊読書人』の「読書人の言葉」に寄稿した「比類のない自叙伝 高群逸枝火の国の女の日記を読む」は、憲三にとって「比類のない紹介文」となりました。その末尾の一節を次に引用します。姫路市在住の執筆者の肩書は「大学助教授」となっていま

すので、神戸大学に勤務していた物理学者の橋本万平だった可能性もあります。いずれにせよ、「高群女性史学」の熱烈な信奉者だったにちがいありません。

菊版で全四九一ページ、二段組の膨大な本である。人によってこの本から得る所は様々であり、興味を覚える所もちがうであろう。この本は千五百円の高価な本であるが十分その金額に相当する内容のある本である。「日本女性史」の開明に一生を捧げた女史が、一人非凡な「日本女性の生活史」を身をもって綴ったこの本を、是非読んでもらいたいと私は声を大きくして世に叫びたい⁷。

続いて、八月一六日には、『熊日』の「東京サロン」という囲み記事において、理論社社長の小宮山量平へのインタビューが掲載されます。以下は、「人間高群の再認識が必要なわけですね」という聞き手の問いに対しての小宮山の返答です。

世間では高群さんのことを、生活を投げうって学問に貢献した女として、いわば神格化して考えがちです。ほんとうは彼女ほど“人間的”な学問をした人はいない。……思想的には彼女はほんとうの意味でのアナーキズムを経過していると思う。常に右せず左せず、子どものような素朴な態度で幸福とは何か、平和とは何かと問い続けてきた。……年とるにつけてアカデミックになり枯淡の境に入るのが日本の学者の常ですが、彼女はついに最後まで若々しく、童女のような心情を失わなかった。根っからの詩人であり、学問を詩の営みとして行なった、まれな学者であったと思うのです⁸。

そしてこの欄は、以下のような『高群逸枝全集』の刊行予告でもって、結ばれます。

小宮山氏は「日記」出版に続いて「高群逸枝全集」出版の計画を練っている。全十巻。具体的にはまだ発表の段階ではないが「こればかりは、出版人としての僕の義務と考え、採算を度外視して必ず出します」と強く言い切った⁹。

必ずしも万全の体調ではありませんでしたが、こうしていよいよ憲三の手は、多くの労苦を伴う全集の編集作業へと向かいます。年が明けると、いよいよ『高群逸枝全集』の配本がはじまりました。第一回の配本は『高群逸枝全集第四巻 女性の歴史一』で、一九六六（昭和四一）年二月に刊行されました。それとほぼ同じ時期に『高群逸枝全集第一〇巻 火の国の女の日記』も発刊されたものと思われます。この巻は、内容的にも体裁的にも、すでに世に出ている『火の国の女の日記』の完全な流用であり、発行年月もそのまま、変わりはありません。つまり、書題と表紙だけが差し替えられた、『火の国の女の日記』の増刷版といった感じのものでした。そして、最終回の配本が、翌年の一九六七（昭和四二）年二月刊行の『高群逸枝全集第七巻 評論集・恋愛創生』でした。これをもって『高群逸枝全集』全一〇巻は完結します。

この全集の特徴的なことは、どの巻の奥付にも、「著者 高群逸枝」と並んで「編者 橋本憲三」の名が記載されていることです。すでに紹介しています、逸枝が最期のベッドで言い残した夫婦の「一心」、あるいは著者と編者の「一体」が、ここに表われているようにも

感じ取ることができます。

一九六四（昭和三九）年六月逸枝の死去から一九六七（昭和四二）年二月の全集の完結まで、およそ三年の歳月が費やされました。その間、憲三は、「森の家」の「廃屋同様の一室にひとりむなしく残って」、執筆と編集の作業に当たりました。そして、その最初のおよそ二年間は、水俣に住む妹の静子がしばしば訪れては、憲三の身の回りの世話と仕事の手伝いをしました。このように憲三は書いています。

東京第二病院にあなたを見舞いに航空機で飛んできてくれた夫妻、とりわけあなたが愛した静子。あなたの没後、医者通いをしながら自伝「火の国の女の日記」を整理したり、書き継いだりしているひとりぼっちの私をみかねて、二た月のうちの二週間ずつ十回ぐらいやってきて何彼と援助してくれた静子¹⁰。

また、静子も、そのときの事情を、以下のように書き記します。

兄が、『火の国の女の日記』を書き継いで、理論社社長小宮山量平氏の御見識で出版をお採り上げくださり、同じく小宮山量平様の御厚志の『高群逸枝全集』の校正などで東京を離れなかった間を、私は加勢に上京していました¹¹。

一方で静子は、「森の家」の庭の様子を、実に情感豊かな文で書き表わしてもいます。以下は、その一部です。

通称「森の家」の四季を見た訳ですけど、野鳥が運んだ糞の中の種子の植物がいろいろの種類で自生していました。鳥たちはどこからとんで来るのか、群をなして幾群かで一日中を訪ねていました。

栗の実を拾い、むかごを採り、ポポの木は大きくなってしまって、もうたべきれない程、胡蝶の木もあって、リスだか野ねずみだか見たことがあります。柿の実は固く熟して甘く、二階の窓からも採れました。ゆすら梅の甘ずっぱい赤い実、姉が書斎にしていたところの前にはぶどう棚があって、いっぱい実りました。少しくリーム色の入った白のバラは、お葬式の時の写真にもあざやかに写っています。木戸の入口から玄関までのフェルト草履の感覚、あれは、何十年だか住んでいたあいだ中の落葉がかき集められて作られたのだそうです¹²。

このあとも、静子の細やかな自然観察が、清楚な文となってさらに続いてゆきます。こうした静子の文筆の巧みさは、兄も認めるどころでした。次は、石牟礼道子が聞き取った憲三の静子評です。『高群逸枝全集』が完結したのちの「別巻」（写真集）刊行を構想するときのことでした。「静子にも書かせる。アイツは凄い文を書くんだから。子守りしながらヒョイヒョイあんな葉書でも書いてよこす」¹³。また憲三は、石牟礼にこのようなこともいっています。「あいつは編集者になるとよかったがな。逸枝の仕事を高く評価してくれて、仕送りのしがいがあると言っていましたよ」¹⁴。

静子の水俣からの送金は、収入のない憲三の生活を助けるためのものだったにちがいない

りません。そして、すでに引用で示していますように、自身も、「二た月のうちの二週間ずつ十回ぐらい」の頻度で、つまり、おおかた二年間にわたって「森の家」を訪問しては、『高群逸枝全集』の編集に精を出す憲三の手伝いをしていたのです。そのあと、通常では考えにくいことですが、途中水俣への一時帰省を挟んでの約五箇月のあいだ、静子と入れ替わるかのように、今度は石牟礼道子が、「森の家」に滞在することになるのです。それに至るまでには、どのような事情が隠されていたのでしょうか。断片的な資料しか残されていませんが、可能な限りそれらを積み上げ、これよりのち、その実際的一端を再現してみたいと思います。

二. 石牟礼道子が高群逸枝の存在を知る

石牟礼道子（旧姓吉田）は、一九二七（昭和二）年三月一日、白石亀太郎を父とし、吉田ハルノを母として、亀太郎が当時建設事業に携わっていた熊本県天草郡宮野河内において出生しました。それから数箇月後、一家は、八代海（不知火海）を挟む対岸の水俣町に帰ってゆきました。亀太郎は吉田家の婿養子でした。ハルノの両親が松太郎とモカで、道子が物心ついたときのモカは、すでに精神に異常をきたしていました。石工である松太郎には、「おかねさん」と呼ばれる妾があり、そのことが主な誘因となって発症したようです。道子は、母のハルノよりも、祖母のモカの膝に抱かれて育ちます。

彼女は、私をひざの上にのせて頭をさすりながら、しわぶくようなやさしい声で、
どまぐれまんじゅにや泥かけろ
松太郎どんな地獄ばん（ばい）
おかねがまんじゅにや墓たてろ
どこさねいたても地獄ばん
こっちも地獄
そっちも地獄
と呟いていました¹⁵。

続けて道子は、さらに自分の家の複雑さについて、こう語ります。

おさな心にも祖母のうたの意は心にしみてわかりましたし、松太郎とはわたしの祖父、おかねさんは祖父の権妻だと近所の小母さん達が教えますし、松太郎と祖母の間にわたしの母と（母）の妹、松太郎とおかねさんの間に母の異母妹、弟とがいてこのような家のムコになった父とがみんな同居しているありさまはちょっとした人間図絵でした¹⁶。

道子はのちの文においては、「おかね」ではなく、「おきや」という呼び名に置き換えて使っているのですが、その「おきやさま」について触れた箇所がありますので、以下に引用します。

祖父とその妾おきやさまとの間に生まれたみすずと兼人の二人だが、まるでこの世に來たことを申しわけないとでも思っているかのような生前であった。わたしの両親は、いわば胎ちがいの妹と弟とを何くれとなく氣にかけて面倒をみていた。本妻が狂女であったことに氣を兼ねていたのだろうか、この二人はそれとなくへり下っている様子があって、それがいじらしかったのかかもしれない¹⁷。

このころ吉田家は、石屋として水俣の栄町通りに居を構えていました。『石牟礼道子全集』別巻に所収されている「わたしの栄町通り」（石牟礼道子自筆絵地図）によると、この通りには、風呂屋、髪結い、豆腐屋、飲食店、米屋、仕立て屋、遊郭、染物屋、鍛冶屋などが並んでいました。橋本憲三の姉の藤野と妹の静子が経営する商店も、この通りにあり、道子の家とは目と鼻の近さでした。「橋本家は食品をまかなう卸問屋で、お酒や炭俵、米麦、砂糖などを扱っておられた。小さい時には、お使いで黒砂糖などを買いに行っていたものだ」¹⁸と、道子は振り返ります。

藤野と静子が最初に店を開くのは、一九三三（昭和八）年の秋、水俣町古賀町においてでした。店は繁盛し、その後栄町に移ります。したがって、栄町通りで静子と道子が顔をあわせるようになったのは、静子が二三歳、道子が六歳のころのことだったのではないかと思います。そのころ高群逸枝は、夫の橋本憲三の助けを受けて、東京の「森の家」で女性史研究の緒につきます。そのようなわけで、まだこのときの道子にあっては、藤野と静子が、高群逸枝の義理の姉妹であることなど、知る由もありませんでした。

道子の祖母のモカは、「おもかさま」と呼ばれ、父の亀太郎がとくにそうであったように、周りから大事にされていました。しかし、道子が回想するところによると、「どういう気持ちで徘徊するのかわかりかねるが、おもかさまは時々、人さまの家の前に立って、ひとり言をいう癖があった」¹⁹。ひょっとしたら、橋本商店の前に立って、何やらぶつぶつと口走る「おもかさま」の姿があったかもしれません。そうした「おもかさま」を引き取りにゆくのは、亀太郎やハルノだけではなく、幼い道子に課せられた大事な仕事でもありました。「氣狂いのばばしゃまのお守りは、私がやっていたのです。ばばしゃまは私のお守りをしてくれていました。……ばばしゃまは雪のふる晩はとくに外に出たがり、疲れはてた母たちが寝ると、私はばばしゃまを探しに出ます」²⁰。道子はまた、こうも書きます。「私も栄町の表通りを、裏返しにした着物を着て、裸足でよその家の前に立って、何か呟いている祖母を連れ帰しに行ったことがたびたびあった」²¹。

栄町には、「末広」という遊郭がありました。遊女たちは「おもかさま」をやさしく扱っていました。あるとき、「末広」でひとつの事件が起きました。以下は、道子の回想です。

末広はじまって以来の器量よしのぼん太さんが殺されたというので、起きぬけに飛んでゆくと、半畳位血のしみこんだ畳が、夕方になると首白粉を塗って彼女が腰かけていた番台に、立てかけてありました。……

番台に並んでいる淫売のひとたちは、並はずれてみんなやさしく陽気そうで、私も大きくなったら淫売になってやろうと思っていました²²。

道子にとって栄町での生活は、そう長くは続きませんでした。八歳ころのときでした、祖

父の松太郎が事業に失敗したことにより家が傾き、「差し押さえ」という苦難に遭遇したのです。そこで家族は、水俣川の河口にある当時「とんとん村」と呼ばれていた集落へと住まいを移します。粗末な小屋のような家でした。渚に出て魚介類や海藻といった海の幸に親しむことはできたものの、近くには火葬場や伝染病を扱う病院もあり、ここは、住むには決していい環境ではありませんでした。

道子の父の亀太郎は、精神を病み目が不自由な義理の母親である「おもかさま」には、とても愛情を示す人でしたし、そののちに道子が結婚したおりには、自力で家を建て与えています。道子は、こう回顧します。父親は、「水俣川が氾濫するたびに集めておいた流木や、この町で一番先に乳牛を飼っていた人からゆずられたという材木を持ってきて、掘っ立て小屋まがいの新居を手作りで建ててくれたりした」²³。

しかし亀太郎は、家族からは恐れられる一面ももっていました。

父は酒乱な上、泣き上戸でしたが、栗飯と茶碗が飛び散って、母が裸足で外に飛び出たあと、こわれた火鉢に「ちょく」という焼酎瓶を据え、「ミッチン、^{われや}汝、このお父ちゃんにつきあうか」といって、冷たい盃をぶるぶるこぼしながらつきつける。私は……好かん、と思いながら、フーンと鼻で返事して、その盃を何べんも受けました。夜市で見たこわい「地獄、極楽」の中のやせた「餓鬼」たちが青い舌をたらんと出している、それを思い出し、父に似ていると思ったのです²⁴。

精神錯乱の母に酒乱の夫——道子の母親のハルノは、「大変な苦労をしながら、没落した家を天性の明るさで支えてきた」²⁵と、道子は語ります。後年のことになりますが、亡くなる一週間くらい前、道子がそれに触れると、ハルノは、悲痛な表情になり、こう答えました。

なんの苦労じゃろか。あたいが十歳時分の頃じゃった、おもか様があのようにならいましたのは²⁶。

そしてしばらく無言が続き、そのあとハルノは、こうつなぎました。

子供の頃は遊びにも行かず、泣き狂うて^{さまよ}彷徨うおっ母さまの手を取りながら、あたの方が親にならんばと思ひよった。^{はた}機織りの名人と言われよったがなあ²⁷。

道子は、このようにいいます。「こういう家庭の中で育った私にも、狂気の血が伝わっているに違いない」²⁸。

一九四五（昭和二〇）年八月、日本は終戦を迎えます。そのとき一八歳の道子は、小学校の代用教員をしていました。そして二年後、結婚話が持ち込まれます。そのときのことを、次のように道子は、述懐します。「結婚はまとまった。……家にいると弟たちの邪魔になりはすまいか、また口減らしをしなければ、という思いもあり、弟の友人というのが何よりありがたくて、ゆく気になった。……いまひとつ思ったのは、吉田姓であるよりも石牟礼姓を名乗った方が、ペンネームのようで面白い。……父は並々ならず石を尊敬していたから、石牟礼弘という弟の友人と式を挙げることになった」²⁹。嫁入りに際して、父親の亀太郎は、

道子にこう言い渡しました。「おなごは三界に家なし、というたもんぞ。いったん嫁にいったならば、二度とわが家に戻ってくると思うな」³⁰。これを聞いた道子は、「わたしは強い衝撃を受けた」³¹とも、「わたしは大混乱に陥った」³²とも、書いています。「おなごは三界に家なし」を、「子ども時代には親に従い、嫁いだあとの生活では夫に従い、夫を看取り年老いたのちは成人した子に従う」という意味に解すれば、女には安住の地はどこにもなく、現世は地獄、死したのちにやっと極楽にたどり着くことになります。このとき、女の生涯とは何なのかと、道子が疑問と怒りを感じたとしても、無理のないことでした。

そうしたこともあって、道子にとって結婚は、決して胸躍る出来事ではありませんでした。このように道子は述べています。

いわば私ははじめから妻というものになる気持ちはなく、その相手方を主人というものにする気もなかったようです。多分私は、かの女性ホルモン欠乏症愛情疾患の第二期的病状を呈していたのだと思うのです。愛情って何よと、私はうわごとをいいつづけました³³。

それでは道子は、弘のことをどう呼んでいたのでしょうか。「十二年間一緒に暮らしている男の人のことをほかの人に、私はちかごろうちの先生は、というようです。ためらいためらい、そういつてみるのです。その前はあの子のお父さんがとか、万やむを得ない場合はごくまれには「あの、シュジンが」といってしまいますが、いった直後、顔から火の出る思いがいたします」³⁴。道子の夫の弘は学校の教師をしており、結婚翌年の一九四八（昭和二三）年に、長男の道生を道子は出産していました。「うちの先生」と呼ぶ自身の夫について、道子は、このようにも描写します。亀太郎が娘夫婦のために新居として小屋をつくるとき、弘も手伝っていたようです。

……若い父親は流木などを拾い集めて、三人の小屋をたて、もともと貧乏な私はその小屋を……ひそかに気に入ってもいたのです。でも小屋の中の生活はそういう訳にはゆきません。自分の目ざしているモラルと、彼の目ざしているモラルがなかなか接近しません。両方のモラルが接近しないというより、私は自分のモラルを満たしてくれない相手を憎みはじめていました³⁵。

この時期、道子の苦悩は深刻でした。「田舎の嫁の一人としての疑問から始まって、代用教員を体験したり、化粧品や靴下を売ったり……そういうことをしながら思っていたことは、自分が今の世に合わないということだった。近代とは何か、という大テーマがわたしの中に根付きつつあった」³⁶。

一九五二（昭和二七）年、熊本市で蒲池正紀が主宰する歌誌『南風』の会員になります。次の一首は、そのころ投稿した道子の作品です。

狂えばかの祖母のごとく縁先より
けり落とさるるならんかわれも

この自作について道子は、このように解説します。

この祖母が青竹をもって全身をふるわせて叫びだす時、祖父はおどり出して行って祖母をけり落とすのです。祖母は如何にも悲痛に、チクショウになれ、チクショウになれえとしぼるようにいうのです。私はそれで、人間が一番呪われた状態になるのは、チクショウというものになるのだとおそろしく思ったものです³⁷。

別の箇所では道子は、この作品について、次のようにもいっています。「これは私の二十代はじめのころの一連の作品で、この一連をちいさな短歌同人誌に出したとき、同人達はなんだかぎょっとして、批評の対象外の作品と思っただけで沈黙した」³⁸。そして、こう続けます。「日常的風詠が出されているサロン風の場所に、このような歌を持ちこんだのは……ゆき場がなくて……魂が吐血した状態だったにちがいない」³⁹。さらに言葉が展開します。「この祖母も祖母の怨恨の元凶であった祖父の臨終もわたしが看取り、暫くするとこんどは弟が、精神病院から帰ってすぐに、汽車にひかれて死んだ。私の家系には狂死が多いのである」⁴⁰。亀太郎とハルノの夫婦は、道子を長女として、そのあとに三人の息子とひとりの娘を設けますが、このとき鉄道事故でいのちを落としたのは、道子にとってはひとつ違いの弟の**はじめ**でした。一には、三歳に満たない幼子がいました。そのときその童女は、「霜の立ちこめる枕木の間をかがみかがみ……文字どおり紅葉の掌に、死んだばかりの父の足の**おゆび**小指を拾いあげ、ちいさなエプロンのポケットに大切そうにおさめた」⁴¹。痛ましい弟の自死は、水俣湾の周辺の漁村で多くのネコ（猫）が死に、原因が不明のまま中枢神経疾患の患者が散見されるようになる年からおよそ五年が立った一九五八（昭和三三）年の晩秋のことでした。道子は書きます。

……おなじく前後して自殺したふたりの友人たちや、わが家系につらなってくるものたちの、かなしい微笑が浮かんでは通る。

後年、凄惨きわまる図絵がくりひろげられる水俣病事件史の中をゆくことになった。その経過の中で窮死した父を含めて、このものたちの微笑に、わたしは導かれていた。その生と死とをふたたび生き直しながら、自分の中に狂気の持続があることを、むしろ救いにも感じていた⁴²。

一方で、水俣病の事件が社会に認知されるようになるなかで「窮死した父」の胸の内を、その娘は、次のように、なぞってみせます。

彼は自分の足がふるえる時ふと汽車にひかれて死んだ息子の、千切れた足を思い浮かべる。忘れかけていた娘のことを想い出す。親不孝者どもめ。彼は娘は嫁にやっていたアカがかってきて、奇病のことなんかを書いているらしい長女のことを思う。親はどげん世間のせまかか。……呉れた娘に、白石亀太郎は、野垂れ死しても、世話にはならんぞ。会社に弓ひたりなんのして⁴³。

引用文中の「アカがかってきて」というのは、道子の日本共産党への接近を意味するので

しょう。入党は一九五九（昭和三四）年です。しかし、翌年には離党します。「奇病」は水俣病を指し、「会社」は、水俣病の原因企業とされる、新日本窒素肥料株式会社を示します。

弟の死は、道子にとって大きな衝撃だったにちがいありません。しかし、自身もこれまでに、未遂に終わりはしましたが、一度ならずもその経験がありました。三度目は、結婚直後のことでした。『評伝石牟礼道子——渚に立つひと』の著者の米本浩二は、「八八歳の道子に三度の自殺未遂について聞いた」⁴⁴。それに対する返答は、次のようなものでした。

死にたかった。虚無的な気持ちが小さい頃からありました。なぜ死にたいか。ひとつには、この世が嫌いでね。今も嫌いですけど。よく我慢して生きてきたなと思う。悲しい。苦しい。それを背負ってゆくのが人間だと思う。嫌でたまらないから、ものを書かずにいられないのでしょうか⁴⁵。

すでに引用で示していますように、「自分が今の世に合わない」という思いが、道子の心の底にうごめいていました。自殺への誘惑も、そのことにおそらく起因していたのでしょう。しかし、まだ生きている。それでは何を力としてこれから先、生きてゆけばよいのか——道子はそう自問したにちがいありません。そしてその問いは、「ものを書かずにいられない」という、強い衝動を道子にもたらしたものと思われます。かくして道子は、自分の悲しみや苦しみを全身から吐き捨てるかのように、他方でその気持ちを、他者の同じ状況に柔らかく重ね合わせるかのように、ものを書く作業に入ってゆくのでした。いわば、「我慢して生きる」ことの代償行為としての文筆活動が、ここにはじまるのです。しかし、死の誘いから生の延伸へとうまく接合させるには、どうしても必要なものがありました。それは、「生まれ変わり」あるいは「生き直し」にとって必要不可欠な、生存能力の再獲得のための祭儀としての装置でした。道子にとってのその祭祀舞台は、どこからもたらされ、どのようなかたちをとりながら構築されていったのでしょうか。これから述べるように、見る限り、高群逸枝との衝撃的なこの時期の出会いと、「森の家」での橋本憲三とのおよそ五箇月に及ぶ生活とが、まさしくそれに相当するものであったのではないかと、理解することができるのです。では、高群逸枝との石牟礼道子の衝撃的な出会いの場面から描写をはじめてみたいと思います。

水俣病の出現と拡大、『サークル村』の創刊と参加、弟の死、日本共産党への入党と離党——これが、おおまかな一九五〇年代後半における道子の足取りです。労働者をつなぐ「表現」の場として、炭坑のある筑豊の地で谷川雁や上野英信、森崎和江らによって創刊された文芸雑誌が『サークル村』でした。谷川雁も同じ水俣の出身でした。この雑誌の創刊は、一九五八（昭和二三）年九月で、その二箇月後の十一月に弟を鉄道事故で亡くします。道子は、自分が置かれているこのころの状況について、こう書きます。

サークル村に参加することと、入党することは、いまだ書かれざる近代思想史がどうであれ、私にとっては突然湧いてきた美学でした。いえ、すべて混沌の内部にいつもいて引き裂け、つぎなる混沌を生みだす民衆のひとりとして私はそこにいました⁴⁶。

道子はさらに、こうも書いています。

私はサークル村に入っててちょっと書いたり、谷川雁さんがやっておられた大正行動隊に行ってみたりしていました。短歌をやめかかっていたので、別な表現を獲得したかったです。そのころ、自分を言い表せるものが何にもないと思って、いろいろ悩んでいました。結婚とは何ぞやとか。そして表現とは何かと⁴⁷。

そこで、石牟礼の足は、図書館へ向かうようになりました。水俣には、^{きすい}淇水文庫と呼ばれる、徳富蘇峰が寄贈した図書館がありました。館長の中野普は、本や文献といったものにまるで知識がなかった一家庭婦人に、噛んで含めるように、一から十までを教示しました。最初は郷土史についての古い文献に関心をもつ道子でしたが、しばしば通ってくる道子に対して館長は、特殊資料室の書物を自由に閲覧できるように便宜を図りました。ここに、まさしくひとつの大きな出来事が待ち受けていたのです。石牟礼は、そのときの衝撃を、このように文字にしています。少し長くなりますが、省略することなく、書き写します。

それまでの家庭生活にくらべてあまりに世界がちがうのに圧倒され、特殊資料室の大書架に誘われてたたずむうちに、ふと夕日の射している一隅の、古びた、さして厚味のない本の背表紙を見たのである。「女性の歴史・上巻・高群逸枝」とある。われながら説明のつかぬ不可思議な経験というよりほかないが、夏の黄昏のこの大書架の一隅の、背表紙の文字をひと目見ただけで、書物の内容については何の予備知識もないのに、その書物がそのとき光輪を帯びたように感じられた。つよい電流のようなものが身内をつらぬいたのを覚えている。そのため、しばらくその書物を手にとることがためられた。ややあって、なにかに操られるような気持ちでそれを手にとるとかすかな埃が立った⁴⁸。

時は「夏の黄昏」という。高群逸枝が亡くなるのが一九六四（昭和三九）年の六月です。であれば、このときの『女性の歴史』（上巻）との出会いは、逸枝が亡くなる前年の、つまりは一九六三（昭和三八）年の夏の出来事ということになります。「ハットして読みふけりましたが、興奮しましてね。かねてから私が思っていることに全部答えてある。それですぐ高群逸枝さんに手紙を書きました。そしたら逸枝さんは一カ月くらいして亡くなられました」⁴⁹。

道子が逸枝に宛てて手紙を書いたのが、逸枝が亡くなる一箇月ほど前であるとしますと、一九六四（昭和三九）年の四月か五月ころになり、道子は三七歳になっていました。逸枝が、「森の家」に入居し、女性史研究に着手するのも、三七歳のときでした。ふたりの女性の再出発の時期が、偶然でしょうが、重なります。道子の文に、このようなものがあります。

一九六^{ママ}三年冬、私は三十七歳でした。

ようやくひとつの象徴化を遂げ終えようとしていました。

象徴化、というのは、——なんと、わたしこそはひとつの混沌体である——という重たい認識に達したのです。いまや私を産みおとした“世界”は痕跡そのものであり、かかる幽愁をみごもっている私のおなかこそは地球の深遠というべきでした⁵⁰。

この一文を、地球の起源に由来する、いまだ混沌体として現存する自分を含めての人間、とりわけ性を司る族母、そして混沌世界を描く文筆家——このことへの道子の自覚の第一歩として読むことも可能かもしれません。逸枝宛ての道子の手紙は、それを象徴するものであったはずなのですが、残念ながら、残されていないようです。後年、本人は、このような内容のものであったと回想します。「とにかく私のふだん思っていること、一番悩んでいること、一番つらいことに、逸枝さんのこの本は全部答えてくださっています、感謝しましたとか……まだお尋ねしたいことがいろいろあるとか、こんな本を読んだのは生まれてはじめて、と書いたと思います」⁵¹。石牟礼が記憶するところによれば、橋本憲三は「逸枝と二人で、あなたの話を、ちょこちょこしておりました」⁵²という。これは、このとき出された手紙のことだったかもしれませんが、『詩と眞實』（通巻第百六十四号）に掲載された石牟礼の「石の花」のことだったかもしれません。「石の花」は、「テレビ劇のための試作」という副題がつけられていて、筑豊のボタ山に生きる人たちを扱ったものです。発行日は、一九六二（昭和三七）年一二月二五日です。「石の花」について、石牟礼は、このように書いています。「同じ時期、この夫妻は、ある同人雑誌にはじめて書いて『石の花』と題してのせた、まるでなっていない戯曲のつものものを読んで話題にしていられたということだった。その雑誌はわたしがお送りしたものではなく、たぶんその雑誌の発行者が同郷の先人に敬意を表して、森の家に定期的に送っていたものだった」⁵³。

以下の文を読むと、図書館での偶然の邂逅が、いかに強い心的衝撃を石牟礼にもたらしたかがわかります。

そのような出遭いが、水俣病問題とほぼ同じ時期におとづれて、わたしは、自分自身で名状しがたい何ものかに、突然変異を遂げつつあるのではないかという予感がしてこの頃内心異様な戦慄に襲われ続けていたのである。必然の時期が訪れたのだと言えなくもないのだった⁵⁴。

高群逸枝の書物に遭遇したことは、決して単なる偶然ではなく、石牟礼の生きづらさを感じる深刻な苦悩が引き寄せた結果だったのかもしれませんが。であれば、確かに石牟礼にとって、生まれ変わって生き直すための、このときが「必然の時期」だったということになるでしょう。それ以降、異様な戦慄を覚えながら石牟礼は、自身が名状しがたい何か別物に大きく変貌するにちがいないという予感を抱き続け、煩悶の時を過ごすのでした。

逸枝の死去ののち、東京の「森の家」では、『火の国の女の日記』の後半部分が憲三の手によって書き進められていました。一九六五（昭和四〇）年六月の逸枝の一周忌にあわせて、この自伝が刊行されると、迎えに来た静子と英雄の夫妻に付き添われて憲三は、遺骨をもって水俣に一時帰省します。そして、すぐにも東京にもどるや今度は、『高群逸枝全集』（全一〇巻）の編集に全力を注ぐのでした。第一回の配本は第四巻の『女の歴史一』で、一九六六（昭和四一）年二月に刊行されました。およそこの二年間、静子は、二箇月に一度、二週間くらいの滞在予定で「森の家」に行き、憲三の編集作業の手伝いに当たります。

その間道子は、しばしば憲三に宛てて手紙を書き、自身の苦悩と逸枝への追慕の念を伝えたものと思われます。それについての、わずかな証拠が残っています。『火の国の女の日記』

を執筆した時期、憲三は道子に手紙を書いています。「——もう二カ月も、誰とも、ひとことも対話しない日々が続いています。ただ姿なき彼女と——」⁵⁵。前後が省略されています。ここに何が書かれてあったのか、興味がもたれるところです。もし、そうした手紙類が現存するならば、この時期の憲三と道子の関係は、いっきに明確になるのですが——。

加えて想像するに、水俣にあって道子は、静子を訪ね、自分が宿す苦境の実際を同じく告白したにちがいありません。さらにそれを受けて、「森の家」で静子と憲三が、道子のことを話題に取り上げていた可能性も決して否定することはできないでしょう。現在のところ、逸枝の死去（一九六四年六月）から三回忌（一九六六年六月）までの二年間の憲三、静子、道子をつなぐ交流の軌跡は、一次資料（エヴィデンス）にあってどうしても十全に確認することができない、全くの空白部分となっています。しかしながら、この期間が三者にとって、濃密な関係構築の時期となっていたことは、その後に続く出来事から判断して明らかなように推量されます。

さて一方の石牟礼は、逸枝が亡くなると、さっそく筆を執り、「高群逸枝さんを追慕する」という追悼文を七月三日の『熊本日日新聞』（六面）に寄稿します。以下は、その一節です。

高群逸枝氏が、その女性史の中で、まれな密度とリリズムをこめて、ほかに使いうもないことばで「日本の村」と書き、「火の国」と書き、「百姓女」と書き、「女が動くときは山が動く」と書いたとき、彼女みずからが、古代母系社会からよみがえりつづけている妣（ひ）であるに違いない。（注＝妣は母）

石牟礼は、『女性の歴史』以外の高群逸枝の著作について、「ほかの作品は『森の家』に行ってから徐々に読ませていただいたんです」⁵⁶と、述懐しています。しかし、この一著からの知識と感動のみをもってして新聞に追悼文を書き寄せるに至ったとは到底考えにくく、実際その文面を読む限りにおいても、洪水文庫で『女性の歴史』（上巻）を手にして以来、逸枝への関心は持続し、「高群逸枝さんを追慕する」を執筆するまでの約一年間、石牟礼は、『女性の歴史』以外にも、入手可能な限りの逸枝の書物に目を通していたのではないかと推察されます。分量もあり、学術的な内容をもつ難解な部分もあります。石牟礼にとって、自分の再生を賭した必死の読書だったにちがいありません。しかしその結果、このときまでに、すでに石牟礼の内面には、逸枝をもって自分の妣／母とみなす慕情の念が、醸成されようとしていたのです。換言すればそれは、逸枝を妣／母として、いま一度生まれ変わりたいという強い願望の発露だったにほかなりません。石牟礼の暗部に、ほのかな希望の閃光が射した瞬間でした。

続く一九六五（昭和四〇）年六月、逸枝の一周忌にあわせて『火の国の女の日記』が出版されると、道子はそれを読み、逸枝にとって憲三という夫の存在がどのようなものであったのか、その真の姿にはじめて接し、強い感銘を受けたものと思われます。しかしそれに先立って、実際には道子は、「全集に組まれる前の『火の国の女の日記』の初稿ゲラ刷を読んでいる」⁵⁷のです。これは、明らかに憲三が、道子の求めに応じて「森の家」から送ったものであると思われます。こうした交流を背景に、すでにこの時期、憲三に会ってみたいという情感が道子に湧き上がっていたとしても、それはそれとして、決して不自然なことではなかったのではないのでしょうか。

他方で、渡辺京二が『熊本風土記』を創刊すると、石牟礼は、「海と空のあいだに」の連載を開始します。第一回が創刊号（一九六五年十一月）に、そして第五回が通巻七号（一九六六年六月号）に掲載され、最終的には第八回（通巻第一号、一九六六年十一月号）まで続きます。これが、『苦海浄土 わが水俣病』（講談社、一九六九年）のおおかたの部分構成する、事実上の元原稿となるものでした。

明らかにこの時期、石牟礼は、死に傾く自身を生へと蘇らせる術をひたすら逸枝の著作に見出そうとしていました。憲三との手紙のやり取りもしていました。そしてまた、原因不明の奇病が体を麻痺させ、それによりいのちを落とす人間の悲惨な姿に、血筋として自分が宿しているかもしれない狂死の発現を折り重ねるかのようにして、これまた必死になって、この病気と向き合っていたのでした。

そうしたふたりを取り巻く状況のなかにあって、いよいよ憲三と道子が巡り会う日が訪れました。憲三の「共用日記」には、次のような記述が残されています。時は、一九六六（昭和四一）年の五月と六月です。逸枝の三回忌（二周年）にあわせて、憲三が水俣に帰ってきたときのことでした。それは、道子の「海と空のあいだに」の第五回が『熊本風土記』に掲載された時期でもありました。

五月一六日 静子と石牟礼さん訪問。

六月七日 二周年。……石牟礼さんお花。／ささやかな法事。読経。

六月八日 午後石牟礼さん。世田谷にいきたいといわれる。ごいっしょしていいとはなす。

六月二九日 15じ11分きりしまで出発、一週二週で帰水の予定。石牟礼さん同道。帰りはべつべつか⁵⁸。

五月一六日に、憲三と静子が石牟礼宅を訪れると、今度は、六月七日の逸枝の三回忌に、道子が花をもって憲三と静子を訪ね、翌八日に再び訪問して、「森の家」に行きたい旨を伝えます。それから三週間後の六月二九日、ふたりはそろって、西鹿児島発東京行きの急行「霧島」の一等車に国鉄水俣駅から乗り込むのです。この一箇月半のあいだ、三者でどのような会話が取り交わされたのか、そして、どのような取り決めがなされたのか、それを明らかにするための証拠となる一次資料は残されていません。その後に起こる出来事から推量するしかないのです。

それにしても、子どももある既婚女性が単身、遠路東京まで行って、妻を二年前に亡くした寡夫である男性と一週間ないしは二週間を過ごすに当たっては、それなりの覚悟と目的があったものと思われます。その一方で、初見に近い人妻に東京へ連れて行ってほしいと懇請された場合、思慮ある男性であれば、二つ返事でその申し出に同意するとはにわかに信じがたく、それであればそれは、わずか一箇月半という短時間のうちにまとめられた計画ではなく、この約二年間の三者の交流のなかにあって熟慮が重ねられた結果の成案であり、この三回忌にあわせて、実際に三人が顔をあわせて気持ちを確かめあい、そのうえで、外部の人間からすれば無分別にも見えそうなこの計画が三者のあいだで共有されるに至った——この場合は、そう考えるのが妥当ではないかと、思量されます。

五月一六日に、憲三は静子と一緒に道子の家に行きました。憲三にとって道子に会うのは、

これがはじめてだったのではないかと思います。しかし、すでに紹介していますように、静子の方は、栄町にいたころの子ども時分の道子を知っていました。道子は、こうも書き記しています。

橋本憲三氏の妹の静子さんという人をわたしは幼い頃から知っていた。というのも、水俣川の河口へうつる前に住んでいた栄町に、憲三氏の姉妹のお店がわたしの家の四、五軒先にあったのだ。食品の卸問屋をしておられた⁵⁹。

道子はまた、次のように、静子のことを書いています。「静さんは、わたしがどういう育ち方をしたか十分にご存知でいらしたにちがいない。祖母が街中をさまよっていた姿などもしょっちゅうごらんになっていただろう」⁶⁰。それだけではなく、精神病院を出るや鉄道事故で死亡した道子の弟のことや、道子自身の自殺未遂のことも、静子は知っていたにちがいありません。しかし、静子は、そうしたことを理由に道子を避けるようなことは決してなく、むしろ温かく包み込むような、理解ある態度で接しました。次は、道子による静子についての人物評です。「妹の静さんは、たいそうのびやかな見かけの美女で、頭脳明晰な人だった。時々お手紙を頂いたけれども、切れ味のある名文である」⁶¹。

六月八日の午後、道子は憲三に、「森の家」がある「世田谷にいきたい」と懇願します。しかし、その理由や目的については何も書かれてありません。この間の状況から判断すれば、おおよそ道子は、次のようなことを憲三と静子に伝えたのではないのでしょうか。「尊敬する逸枝先生を慕いながら、再び自分は逸枝先生を妣として『森の家』で生まれ変わり、これからの後半生を憲三先生の後添いとなって、逸枝先生とともに過ごしてゆきたい、静子さんを立会人として——」。そのように推測する理由のひとつには、道子が「森の家」で書いた日記の冒頭に、次のような文字が並んでいるからです。

わたしは 彼女を
なんと たたえてよいか
ことばを選びすぐっているが
気に入った言葉が見つからないのに 罪悪感さえ感じる
……
わたしは彼女をみごもり
彼女はわたしをみごもり
つまりわたしは 母系の森の中の 産室にいるようなものだ⁶²。

別の箇所では、こうも書いています。

私には帰ってゆくべきところがありませんでした。帰らねばならない。どこへ、発祥へ。はるか私のなかへ。もういちどそこで産まねばならない。私自身を。それが私の出発でした⁶³。

こうした文面を読むにつけ、産室としての「森の家」で、敬愛する妣なる逸枝の子宮に一

度帰着し、そこから再び自分が生まれ落ちる——そのことへの道子の避けがたい衝動を、そこから感じ取ることができます。自分の出自、育った家庭環境、そしていまの結婚生活、そのすべてを産湯に洗い流し、別のもうひとりの「石牟礼道子」としてこの世に再誕生、つまりは再生を成し遂げる——何にもましてそのことを、道子は無心に願望していたのでした。

上京する前日の六月二八日、道子は、最後の行動に出ます。「橋本家へあいさつに行った。『うちのセンセイ』をつれていったのはひとまず進行したといえる」⁶⁴。道子は夫の弘に、今回の東京行きをどう説明したかはわかりません。おそらくは本心を隠し、弘をあまり傷つけないように、水俣病の調査のためとか、それに類するもっともらしい理由をつけて説得したものと考えられます。

六月二九日、一五時一分、水俣駅のホーム。その時が来ました。「いよいよ東京行き霧島に乗る。厳粛な気持ち。はじめて夜汽車に乗ることになった。瀬戸内海見えず。関門トンネルに気づかない。憲三氏とつい話しこんでしまったので」⁶⁵。ふたりは、どのようなことを話題にしたのでしょうか。想像するしかほかに手立てはありません。逸枝のこと、「森の家」のこと、全集刊行のこと、水俣病のこと、さらには、連載中の「海と空のあいだに」のこと、そして、ふたりの今後のこと——。翌日の午後東京駅に着くまでのおよそ二五時間、ふたりの会話が途切れることはなかったでしょう。実にこうして、六九歳の憲三と三九歳の道子の一昼夜にわたる、生まれ変わりへ向けての厳粛なる道行きが、進んでいったのでした。

三. 石牟礼道子が「森の家」で橋本憲三と後半生を契る

道子は、憲三について、こう吐露します。

ほとんど宿命的にかかえこんでしまった故郷水俣の出来事についても、同郷のよしみで直感的に把握していられた。その上突如としてこの森にかけこみをした盲目的衝動をも、たぶん理解されていたのだっただろう。静と動との極点を、わたしはゆきつもどりつせねばならなかった⁶⁶。

水俣病との対峙、そして逸枝と憲三への恭順、このふたつが、道子の内面を駆け巡っていました。まさしくこの時期に形成された両要素が動力となって、こののちの道子の生涯を先導することになるのです。道子は、それについて、以下のように分析しています。

水俣のことも、高群ご夫妻のことも、一本の大綱を寄り合わせるかのごとき質の仕事であった。二本の荒縄をよじり合わせて一本の綱を作る。人間いかに生きるべきかというテーマを、二つのできごとと呼びかけていた⁶⁷。

ここに引用した文は、そののちの道子の生涯を規定する極めて重要な言説であるように思われます。といいますのも、人間のいのちと暮らしについての無自覚な生後体験から、民衆へ寄せる私的かつ詩的な独自のまなざしへの昇華、——そしてその、まさしく着床された土着的魂に導かれて描かれる普遍的な人類族母の史的再生。これが、その後の石牟礼文学を通底する「人間いかに生きるべきかというテーマ」の原像ではないかと考えるからです。

「産室」となる「森の家」でのふたりの生活がはじまりました。七月三日の日記に、「昨夜、というより今晚（一時）憲三氏（以下 K 氏と書く）より、ノートの御許し出る」⁶⁸とあります。これは、尊敬してやまない憲三と逸枝を主人公とする伝記執筆のためのノートを意味します。この伝記は、水俣へ帰郷後、まず「最後の人」と題されて『高群逸枝雑誌』に連載され、そして最終的に、道子が八五歳のときに、『最後の人 詩人高群逸枝』として書籍化されます。それを思うと、まさしく道子の生涯は、これよりのち、「最後の人」とともに歩んでゆくことになるのでした。

同じく七月三日のノート（東京日記あるいは森の家日記）には、こう書かれています。

今夜更に高群夫妻とそして自分とに、後半生について誓った。それは橋本静子氏に対する手紙の形で（つまり、静子氏を立会人として）あらわした。午前三時これを書き上げる⁶⁹。

その手紙は、次のように書き出されます。

深い感謝の気持でこの手紙を書きます。このたびの上京について、私自身にとっては破天荒なことであり、はためにはずいぶんづかづかとしたお願いを、みなさまによっておききとどけ下さいましたことに、貴女さまの御配慮が全面的に動いて下さいましたことを、その経緯の積み重ねがありましたことを、私は肝にめいじているつもりでございます⁷⁰。

「高群夫妻とそして自分とに、後半生について誓った」という語句や「静子氏を立会人として」手紙を執筆していることから推測しますと、このとき道子は、女としての自身が寄って立とうとする立場を明確に「誓った」のではないかと思量されます。この手紙には、世俗的な「後添い」や「後妻」といった言葉はいっさい使われていませんが、配慮の「経緯の積み重ねがありました」という字句に目を向けますと、およそこの二年間にあって、しばしば道子は静子に会っては、そのことにかかわって暗に意思表示をしていたのではないかという推断の道が開きます。こうした「積み重ね」が、すでに引用で示しています、「突如としてこの森にかけこみをした盲目的衝動」となって、ここに顕在化したものと思われるのです。しかし、「静子氏を立会人として、高群夫妻と自分に対して、後半生について誓った」というわずか一語だけに頼って、本当にそれが「後妻」になるという意味を招来する、と即断していいものかどうか——。残されている資料のなかから、この疑問の解消に資するであろうと思われる事例を拾い上げ、以下五点について言及したいと思います。といたしますのも、このことをこの時点で明確化することによって、これ以降の道子の人生と作品とを適切に理解するうえでの極めて重要な判断材料が入手できるものと考えからです。

一点目。「森の家」に滞在中の道子の書くもののなかに、「われわれの森はと云えばそれらの中にそびえ立ち、その夕闇の一瞬を司る」⁷¹という表現があります。また、別の箇所では、自身の外出からの帰りを「二時、わが家へ。化粧部屋で着替え」⁷²と表現しています。もし、道子と憲三が明白な他人同士であれば、決して「われわれの森」とか、「わが家」とかいった表現は使わず、それぞれにおいて、事実即して「憲三氏の森はと云えば……」、

そして、「二時、憲三氏の家へ。……」という言葉遣いに、止めるのではないのでしょうか。「われわれの」という所有格の表現は、これ以外にも散見されます。

また、憲三と自分を主語として書くに当たって道子は、数箇所「わたくしたちは」という表現を使っています。たとえば、「秋から冬に入ってゆく空の重さを心に抱いて、わたくしたちは馬事公苑へゆく」⁷³という箇所が、その例に相当します。単なる一介の滞在者であるならば、「憲三氏と私は」と書くのが通例でしょう。「わたくしたちは」と書く以上は、ふたりがすでに極めて親密な関係になっていたことを例証します。

二点目。その年（一九六六年）の十一月二四日、ひと足先に道子は、「森の家」をあとにして水俣に帰ります。しかし、そこでの生活が懐かしく思い出され、憲三に手紙を書きます。以下はその一節です。日付は一二月二〇日。「森の家」の処分がすべて終わり、すでに憲三も水俣に帰っていました。

お話がしたいと思います。お話に飢えています。……わたくしはよく逃げ出していました。トンコたちのように。

おもえばまるでわたくしはあの鶏たちとよく似ていました。……結構お二人にいたわられて、愛されさえして、（実際それは本当でしたから）うつくしくしあわせに暮らせていただきました。まるで窓から飛びこむように、彼女の書斎にもお茶の間にも寝室にさえ飛び込んでいたのですから⁷⁴。

この文にみられる「愛されさえして」「寝室にさえ飛び込んでいた」といった字句に注目するならば、道子は単なるひとりの食客として過ごしたのではなく、この言葉は、明らかに「森の家」での同居中、憲三と道子のあいだに性的関係があったことを示唆します。

三つ目。一九七六（昭和五一）年五月二三日、憲三が死去します。それに際して、主治医が、憲三に死期が迫っていることを告げたのは、静子ではなく、道子に対してでした。

最後の逸枝雑誌、三十一号の編集が終ってしばらくした頃、主治医の佐藤千里氏から、私は、もうあまりお互いの持ち時間がないことを具体的に知らされていた。つらいことだったが実妹の静子さんにその状態を理解してもらわなければならなかった⁷⁵。

医師はその倫理において、人の生死を安易に他人に口外することはありません。それでは、なぜ佐藤は、肉親である静子に先立って、他人であるはずの道子にまず一番に伝えたのでしょうか。それは佐藤が、戸籍上はどうであれ、また、たとえ同居はしていなくとも、道子が実質上の憲三の内縁の妻であることを、これまでの付き合いを通して、すでに知っていたからにほかなりません。「もうあまりお互いの持ち時間がない」という表現に、そのことが十全に凝縮しているように感じられます。

四つ目。憲三が亡くなって四年が過ぎた一九八〇（昭和五五）年のこと、『高群逸枝雑誌』の終刊号が発行されます。道子は、「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」を表題にもつ一文を寄稿します。そのなかで道子は、次のように語ります。

……本稿は『高群逸枝雑誌』の発刊と終刊に立ち会いながら、ただただ無力でしかなか

ったひとりの同人として、森の家と橋本憲三氏の晩年について、いまだに続いている服喪の気持の中から報告し、読者の方々への義務を果したい⁷⁶。

道子は、没後四年が立ったいまも、喪に服しています。これは、仕事上の限定された仲間関係の域を超えるものではないでしょうか。「森の家」での生活から憲三を看取るまでの一〇年間、道子は、水俣病闘争へ身を投じているさなかにあっても、心は途切れることなく憲三に添い続けました。「喪主」であるとの隠された自覚は、次の最後の五番目の事例にみられるように、おそらく、その後引き続き最晩年に至るまで道子の心情の海底を支配していたにちがいありません。ここは、「高群夫妻とそして自分とに、後半生について誓った」という道子の言葉が、決して偽りではないことを信じたいと思います。

また、「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」のなかには、「わたしたちの逸枝はしかし、詩人としての出発に当ってまことよい理解者にめぐまれたといわねばならない」⁷⁷という一文があります。注目すべきは「わたしたちの逸枝」という表現です。つまり逸枝は、単に「憲三の逸枝」ではなく、もはや「憲三と道子にとっての逸枝」という位置づけがなされているのです。理由は何でしょうか。のちほど詳述しますが、逸枝は『變愛論』のなかで「寂滅」という用語を使っています。本人によれば、その語が含意するところは、「他の新生命への発展」です。「森の家」を離れるとき、「寂滅（□□）の言葉はゆうべたしかめあった」⁷⁸と、道子は書きます。つまり、この時点で、逸枝と憲三と道子の三つの巴はすでに一体化しており、そうした共有化された認識があったればこそ、「わたしたちの逸枝」という表現がここで現前化したものと考えられます。

いよいよ最後に五点目として。「最後の人」の初回が、『高群逸枝雑誌』の創刊号に掲載されたのは、一九六八（昭和四三）年のことでした。それから数えて四四年後の二〇一二（平成二四）年、藤原書店から単行本となって世に出ます。この『最後の人 詩人高群逸枝』の巻末には、藤原良雄による「高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」と題されたインタビュー記事が収められています。

——憲三さんから逸枝さんのことをお聞きになって、憲三さんの姿もそばで見ておられて、[憲三さんのことを] そう思われたのですね。

はい。憲三さんのような人、見たことないです。純粹で、清潔で、情熱的で、一瞬一瞬が新鮮でした。おっしゃることも、しぐさも、何かをうやむやにしてごまかすというところが感じられない。言いたいことははっきりおっしゃる。

——「最後の人」というのはどういう思いで。

こういう男の人は出てこないだろうと。

——憲三さんのことを。

はい。高群逸枝さんの夫が、「最後の人」でした⁷⁹。

このインタビューのとき、道子はすでに八五歳になっています。亡くなる五年と数箇月前のことです。「最後の人」という題を道子が考えついたのは、「森の家」滞在中の一九六六（昭和四一）年の秋でした。

たぶんこのような一文を草せねばならぬ日が確実におとづれるのを予感しながら、あの「森の家」の一室で、ノートの表題を「最後の人」と名づけたのだった。「最後の人としたのですか。なるほど、うん。よい題だなあ」⁸⁰。

このとき憲三は、道子にとっての「最後の人」が自分であることを十分に理解していたことでしょう。それから時が流れ、道子にも最期が近づいてきていました。『最後の人 詩人高群逸枝』の出版とほぼ同じ時期、道子は、新作能「沖宮」を書きます。描かれているのは、天草四郎とあやの、海底に沈む「沖宮」への道行きです。事実上の絶筆となるこの虚構空間において、おそらく道子は、自覚された死期が近づくまさしくこの時期に、四郎に憲三を託し、あやを自分自身に見立て、現世で果たせなかった実相を、悲しくも美しい幻想世界に置き換えて、誰にはばかることもなく、そのすべてを表出したのではないかと愚考します。かくして、逸枝、藤野、静子といった敬愛する妣たちが住む死界の「沖宮」へ向けて、読経がとどろき渡るなか道子は、最愛の「最後の人」である憲三に導かれて旅立つのでした。

以上に述べてきました五点を根拠としたうえで、「森の家」での同居生活にはじまり、それに続く憲三と道子の親密な交わりを、男女関係のあり様にかかわる、現実世界に規定されるところの特殊なひとつの愛の形態としてみなし、その視点をもって、これよりの私の私の叙述の前提としたいと思います。

「森の家」に入って一週間が立ちました。七月六日の道子の日記に、「桑原史成さんと渋谷で会う。……東大都市工学衛生工学研究室宇井純さんを訪ねる。留守」⁸¹との記述があります。桑原は、フリーの写真家で、そのとき二九歳でした。三四歳の宇井は、下水道を専門とする研究者で、東大の助手をしていました。ふたりは、ともに水俣病に関心をもつ旧知の仲で、水俣へも足を運んでいました。道子は、三人で会って水俣病に関して意見を交換したかったものと思われます。さらに、桑原には、頼みたいことがありました。「逸枝先生の写真集のこと道子話す。喜んで撮りたいとのこと」⁸²。しかしこの日は、何か事情があってふたりに反目が生じ、道子は「森の家」を飛び出してきていたようです。続いて日記には、こう記されています。「やっぱり世田谷に帰りたくなった。小雨。十一時十分帰宅、九八〇円取られた。残念。先生の部屋ドンドン叩く。締め出されていた。大騒動して窓から侵入。ニクラシ。おとなり徳永夫妻起き出し御協力、先生オヤスミ。起きない」⁸³。

次の日(七月七日)の日記。「九時きっかりに桑原さんみえる。六時彼と渋谷で落ち合い、東大技術史研究会。沛然たる雨、本郷三丁目ウイジュンサン……十一時帰宅。締め出しなし」⁸⁴。

それから二日後の七月九日、道子は憲三に連れられて、平塚らいてう宅を訪問しました。以下は、そのときの道子の印象です。

らいてう氏はやはり飛びぬけた女性。うしろ姿に優雅さの衰えぬ人である。「ベトナムが、ああいうことになりまして」という御挨拶。水の流れの中に水があるように、すいと自分の使命感を前に押し出す、するとみんなも流れていくという風である⁸⁵。

憲三はらいてうに、道子をどう紹介したのでしょうか。興味がもたれるところですが、残念ながら調べる限り、資料には残されていないようです。

翌七月一〇日——「先生おやすみ。桑原さん来る。書斎にて彼に説明。桑原さん撮影大車輪（九時半頃から）。まず化粧部屋から、階段、避暑室、階下、書斎。庭で先生。ボヤージュとお写りになったらよろしいと思いますと進言。彼を囲んで昼食の用意。お寿司、カキフライ、きゅうり、ビールなど。揚げとしいたけのおつゆ。先生楽しそう。桑原さんの笑う目が美しいとおっしゃる」⁸⁶。そのあと、「明日、帰水の予定。ならば滞京予定を終了したものとして、二階で休息。深く熱い充足感」⁸⁷。「深く熱い充足感」とは何でしょう。想像にゆだねるほかない意味深長な言い回しです。

その日の夕方、詩人の渋谷定輔がやって来ました。逸枝の『東京は熱病にかゝつてゐる』は、一九二五（大正一四）年一一月に萬生閣から上梓され、渋谷の『野良に叫ぶ』も同じ版元から翌年の七月に出版されています。萬生閣は實際上の平凡社で、両書ともに、発行者である下中彌三郎が、巻頭に「推薦文」を書いています。当時憲三は、下中を創業者とする平凡社に編集者として勤務していましたので、おそらく『野良に叫ぶ』の出版をきっかけに、下中の紹介により渋谷と知り合ったのでないかと思われます。

道子は、桜通りに出て、「ウィスキー小瓶、ビール小一本、鶏もつ、桃などを買う。いよいよ祝祭気分」⁸⁸。こうして祝宴がはじまりました。「渋谷さんのプレゼント、開けてみようということでリボンをとる。美しい寒暖計。思わず歓声を上げる。うれしかった」⁸⁹。寒暖計は、寒い日も暖かい日も、動じることなく常にひとつの場所を占めます。そこから、このプレゼントの意味を読み解くならば、ほぼ間違いなく寒暖計は、「婚約祝」あるいは「結婚祝」としての贈り物だったものと思われます。祝いの膳も佳境に入ります。「逸枝評憲三評、渋谷氏から熱っぽく出ると、やはり実体に迫っている感じがしてくる」⁹⁰。では、「実体に迫っている感じ」とは、何を意味しているのでしょうか。いまや憲三の後添いとして逸枝とともにここに生きていることの真の実際感といったものでしょうか。渋谷は八時ころ家を出ました。続けて道子は、こう書きます。「厳粛なる夜。聖なる夜であるとも——」⁹¹。この一語から、この日が、憲三と道子が体を重ねて結ばれた最初の夜だったことが連想されます。

神秘に包まれた聖夜が明け、帰郷する七月一日の朝が来ました。以下も、道子の日記からの引用です。

六時目覚め。

木立の中の深い霧。

私の感情も霧の中に包まれてしまう。しかしそれは激烈で沈潜の極にあるものだ。

沐浴。

今朝の私は非常に美しい、貴女は聖女だ、鏡を見よと先生おっしゃる。悲母観音の顔になったと見とれる⁹²。

「九時半、逸枝先生にお別れつづる。彼女は私の内部に帰る。切ない。玄関を出る」⁹³。こうして道子は「産室」を出たのでした。

それよりおよそ三箇月半後の一〇月三〇日の道子の日記に、「おなじ女をわけあえば兄弟分になるという後代の俗」⁹⁴という文字が書き込まれています。この遺俗を念頭に置いて道子の場合を考えれば、「おなじ男をわけあえば姉妹分になる」ということになります。お

そらくこうして道子は、この「産室」において逸枝の「妹」として生まれ変わったのかもしれませんが。他方で、すでに引用しています「わたしは彼女をみごもり／彼女はわたしをみごもり／つまりわたしは／母系の森の中の／産室にいるようなものだ」という道子の文から推量すれば、あるいは、「森の家」の「産室」で逸枝が道子をみごもるという神秘的な觀念の幽玄世界に、道子は日々浸っていたのかもしれませんが。「森の家」を発つに当たって、上のように道子は「彼女は私の内部に帰る」と書いています。これこそが、ここにおいて道子が逸枝をみごもり、逸枝が晩年を過ごす地として望んでいた暖かい火の国に持ち帰り、再生なった道子の新たな生き方のなかで、これよりのち生涯にわたって「作品」というかたちをとって産み落としてゆくという、秘められた道子の強固な意思表示として受け止めることができる箇所であるにちがいありません。換言すれば、「彼女は私の内部に帰る」は、逸枝の詩学と学問の全き後継者としての、あるいは、揺るぎない再生産者としての、道子の宣誓の言葉だった可能性さえあるのです。

こうして、道子の「突如としてこの森にかけこみをした盲目的衝動」は終わりました。改めて、六月二九日から七月一日までの約二週間は、六九歳の憲三と三九歳の道子にとって何を意味するものだったのでしょうか。この短い同棲期間は、道子にとっては「生命の復活」を意味し、ふたりにとっては「後半生を契る祝言」を含意するものであったにちがいありません。このときこの森は、さながら生命誕生の小宇宙と化していたのです。おそらく、立会人である静子に、つまりは事実上の産婆役であるその人に、その神聖なる一連の出来事を報告するためだったのでしょうか、この日兩人は「森の家」をあとにして、原郷の水俣へと帰ってゆくのでした。

四．橋本憲三と石牟礼道子の再度の「森の家」生活

道子は、「七月十二日、熊本平野に入ってはれ。壮大な空。炎のような風」⁹⁵、そして「九月二十五日夕、ふたたび世田谷森の家着」⁹⁶と書いていますが、そのあいだの動静については、何ひとつ記述がありません。一方の憲三の「共用日記」には、九月一五日「出発」⁹⁷、九月二五日「石牟礼さんくれ方ごろに見える」⁹⁸とあるのみです。つまり、別々に上京したことはわかりますが、七月一二日に憲三と道子が到着してから九月一五日に憲三が出立するまでのあいだ、水俣でふたりが、どのような暮らしをしていたのが全く空白になっているのです。ほかに、そのことを実証するに足る資料（エヴィデンス）も見当たりません。そこで、次のように想像してみたいと思います。この間、事の経緯からして道子は、夫の弘に離婚を申し出たのではないのでしょうか。しかし、それが受け入れられず、また、息子の道生の反対にも直面し、道子は完全に居場所を失い、途方に暮れる日々を送っていたものと推測してみます。おそらく、そうした道子の置かれている状態を見かねたのでしょう、憲三と静子が、道子の家を訪ねてきました。その家は、「実家のとなりにあった、にわとり小屋を、かろうじて人間が住めるように父がしてくれた掘っ立て小屋」⁹⁹でした。以下は、このときの来訪について、道子本人が記述するところです。

その後憲三先生が再度私のところに見えたのは昭和四十一年秋で、家族の理解をとりつけてご一緒することになった¹⁰⁰。

また別の箇所では、道子はこのような描写も試んでいます。

その橋本憲三氏と、妹の静子さんが突然我が家にやってこられたのは、秋晴れの美しい日であった。東京の「森の家」、つまりは逸枝さんの研究所の跡を見ておいてくれな
いかとのことだった。

突然お見えになられ、いきなりそうおっしゃられて、私は仰天した¹⁰¹。

上のふたつの引用文を合成しますと、おおよそ次のようになります。「約四箇月前の五月一六日の最初の来訪から数えて二度目に当たる、一九六六（昭和四一）年の美しい秋晴れのある日、突然、橋本憲三氏と妹の静子さんがわが家にいらっしゃって、妻の逸枝さんと長年暮らされた東京の森の家をこれから解体するので、その様子を見ておいてほしい旨のことを申し出られた。私は仰天したが、家族の理解をとりつけて、同道することにした」。もしこの推断が正しいとしますと、ここにはふたつの考慮に入れるべき問題点が介在することになります。ひとつは、「私は仰天した」という語句についてであり、もうひとつは、「家族の理解をとりつけて」という文言に関するものです。そこで、以下に、少し検討しておきたいと思います。

「私は仰天した」という語句には、大事なことが抜け落ちています。実際には、「私はあまりにもうれしくて仰天した」というのが、真実に近いのではないかと推量されます。とい
いますのも、さらに別のところで、以下のように道子は、書いているからです。

私事を書かせて頂けば、処女作「苦海浄土」のかなりの部分は東京世田谷の朽ち果てて
ゆく森の家で、お励ましにうながされて書き進められた。当時そこしか、わたしの身を
置く場所はなかった。逸枝の霊に導かれている気持であった。チッソ東京本社座りこみ
の心の諸準備も森の家でなされた。はじめていうことである¹⁰²。

このなかの、「当時そこしか、わたしの身を置く場所はなかった」という一語に注目すれ
ば、道子にとって、いかにこのときの憲三の申し出が自分の意を満たすものであったかがわ
かります。まさに渡りに船、天の慈雨だったのでした。

次に、道子は、本当に「家族の理解をとりつけて」出京したのか、という点です。息子の
道生が後年書いたものに、「母のことそして父のこと」と題された回想文がありますが、次
は、そのなかの一節です。

惜しみなく愛情を注いでくれた幼い日々が過ぎ、私が高校を卒業しこれから進学と
言う頃に母は家を出た。目の前で起きている現実を凝視して激しく突き動かされる想
いを、言葉に託して伝えたい。次々に寄せ来る感情のたぎりを文章で書き記しておきた
い。集中して書ける場所をと言い出した。その衝動と決意は父も私も到底とめられるこ
とではなかった¹⁰³。

最後の、「集中して書ける場所をと言い出した。その衝動と決意は父も私も到底とめられ

ることではなかった」という語句に目を向けますと、必ずしも円満に「家族の理解をとりつけて」東京行きが決行されたのではなく、どちらかといえば、家族の思いを一方的に断ち切って家を出た構図が浮き上がって見えてきます。憲三と道子の上京の日がずれるのは、せめてもの家族への配慮だったのかもしれませんが。

こうしていよいよ、憲三は九月一五日に、道子は遅れて九月二四日に水俣を立て、再び「森の家」へと向かうのでした。

「森の家」へ帰ると憲三は、再び『高群逸枝全集』（全一〇巻）の編集作業にとりかかります。奥付から判断しますと、配本は、以下のように進んでいました。憲三の「森の家」帰着は、九月一六日ですので、おそらくはこのときまでに、第一巻の「母系制の研究」と第九巻の「小説／随筆／日記」の印刷原稿はすでに出版社に渡されており、したがって残る作業は、第六巻「日本婚姻史／恋愛論」と第七巻「評論集・恋愛創生」の原稿の整理と「解題／編者」の執筆だったものと考えられます。

第四巻 女性の歴史一 一九六六年二月

第五巻 女性の歴史二 一九六六年三月

第一〇巻 火の国の女の日記 一九六六年三月か（ただし、奥付は一九六五年六月）

第二巻 招婿婚の研究一 一九六六年五月

第三巻 招婿婚の研究二 一九六六年六月

第八巻 全詩集・日月の上に 一九六六年七月

第一巻 母系制の研究 一九六六年九月

第九巻 小説／随筆／日記 一九六六年一〇月

第六巻 日本婚姻史／恋愛論 一九六七年一月

第七巻 評論集・恋愛創生 一九六七年二月

それではこれより、憲三の編集作業の様子を、道子の文から拾い出してみます。九月二五日に、道子が「森の家」に帰った日、「K氏は全集最終巻の編纂を抱えたまま風邪をひいて、二階書斎のベッドで仰臥のまま、その仕事を続行中である」¹⁰⁴。そのことから判断すると、第六巻の「日本婚姻史／恋愛論」については、すでにこのときまでに原稿の整理が終わっていたものと考えられます。それから一週間過ぎた一〇月三日の夕方、全集最終巻の第七巻「評論集・恋愛創生」の「解題／編者」の下書きができあがりました。憲三は道子に、それを読むようにと、手渡しました。

しばらく手が出ない。さしのぞくことは越権ではないか。再度の仰せによって読ませていただく。短文であるが、その言葉の深さ（彼女への愛）格調（その心）の高さに胸うたる。どっとかなしくなる。おさびしそうな先生。曇りの空をみる。秋色の庭。時間とは何であるか¹⁰⁵。

さらに、この引用文は、次のように続いてゆきます。

夜、先生ニンニク食べられて下書きお清書。御苦心の様子。わたしは『美想曲』を読

み進む。切々と時間が進む。端正な姿で書いていらっしゃる先生。左の目に左手をあてて。左の目は失明している方の目である¹⁰⁶。

憲三は、自らの不注意により、誤って小さいころ失明していました。道子の目もまた、このころすでに視力の低下がはじまっていました。「このときたまたま私の左眼の視力が、非常に衰えてしまっているのを氏に発見されるということがあったりした」¹⁰⁷のでした。

翌日の一〇月四日、道子は、「静子さんに解題を書かれていること報告の手紙書く」¹⁰⁸と、六日に、最終配本予定の第七巻「評論集・恋愛創生」の「解題／編者」が整い、ついにここに全集編集のすべての作業が完了したのでした。「比類ない愛の書完成。廃屋、老残、というお言葉がある。むべなるかなと思い、言葉なし。果実酒を黙って献じる。そして彼女の霊前には二粒の栗¹⁰⁹。ちょうどそのころ、第九巻の「小説／随筆／日記」が公刊され、一〇月一日に理論社の編集者が献本五冊を持参。「K氏はそのとき最終回（第七巻）原稿——編者のことばだけをのこして——を渡されたのであった」¹¹⁰。

それから二日後の一〇月一三日、今度は道子の「空と海のあいだに」の第八回原稿が完成しました。すでに述べていますように、「空と海のあいだに」は、『熊本風土記』の連載文でした。一九六五年十一月の創刊号に第一回が、最初に憲三と静子が道子の家を訪ねた一九六六（昭和四一）年五月一六日からおよそ二週間後に刊行された六月号（通巻第七号）に第五回が掲載され、その以降、七月号（通巻第八号）に第六回が、八月号（通巻第九号）に第七回が続いていました。今回書き上げた第八回は、「海底の神々 その二」の副題をもち、一九六六年十一月号（通巻第一号）のためのもので、結果的に、この第八回が連載最後の文となりました。その後、八回にわたる「空と海のあいだに」と、その他の原稿が組み合わせられて、一九六九（昭和四四）年に講談社より『苦海浄土 わが水俣病』となって、世に問われることになるのです。

「空と海のあいだに」の第八回原稿ができたころについて、道子は、こう書き留めています。

……森の家の一室をあたえられて、わたしは『苦海浄土』の“海石”の一節を執筆中であり、出来上がったものを読んでいただき、その後批評をうかがって、世田谷桜四丁目の郵便局から、「熊本風土記」の編集者に送っていたのである¹¹¹。

『苦海浄土』の“海石”は、『苦海浄土』第四章「天の魚」の第二節に相当する「海石」に対応します。

また、別の箇所では、このときのことを、次のような表現を使って、回想します。

そのとき私は「苦海浄土」の第一稿（原題「空と海のあいだに」）を渡辺京二氏の『熊本風土記』に連載していて、その原稿も「椿の海の記」の半分くらいは憲三先生がまず目を通され、森の家から送ったことが忘れられない¹¹²。

『椿の海の記』は、一九七六（昭和五一）年の十一月に朝日新聞社から発刊されます。憲三が亡くなって半年後のことであり、この本を憲三が手にすることはありませんでした。

他方、この時期について、道子は、このような回顧もしています。

……あの「森の家」の一室で、ノートの標題を「最後の人」と名付けたのだった。

「最後の人としたのですか。なるほど、うん。よい題だな」……

顔を拭いたタオルを首に巻きつけたまま……橋本憲三氏は、自分で立てた朝のコーヒーを啜られる。……十月も末のある朝だった¹¹³。

そして憲三は、道子にこういいました。「その、僕が生きている間に、書きあげて、読ませて下さると、ありがたいのですがね」¹¹⁴。道子は、返事に窮し、内心こう思いました。

この夫妻に関して、これまでわたしが知っていることといえば、昭和二十九年に講談社から出されていた『女性の歴史』上巻……と、全集に組まれる前の『火の国の女の日記』の初稿ゲラ刷を読んでいるだけである。気の遠くなるような勉強が前途に待っている。この師のご存命中にはとても間に合うまい……¹¹⁵。

道子は、「森の家」を処分して水俣に帰った憲三を助けて『高群逸枝雑誌』の創刊に加わり、その雑誌に「最後の人」を連載します。しかし、それが単行本としてまとめられ、世に出るのは、「森の家」滞在から四六年が経過した二〇一二（平成二四）年のことでした。「この師のご存命中にはとても間に合うまい」という予感が的中したともいえますし、この間、最後まで「最後の人」に一心不乱に寄り添ったともいえるかもしれません。

九月二五日に道子が「森の家」に帰ってから、ほぼ一箇月が立とうとしていました。水俣に残してきた夫と息子は、道子のことを心配していたでしょうし、道子も、ふたりのことが気になっていたにちがいありません。道子の日記から、以下に、拾い上げてみます。まず、息子の道生に関連して――。

一〇月三十一日「帰途ふいに胸騒ぎする。道生にか弘にか、先生にか何かありはせぬか。何もないように祈って帰る」

一〇月一日「道生に逢いたいこと切なり」

一〇月八日「道子、下のバアチャン、道生に手紙」

一〇月一三日「道生から速達、成長した手紙」

一〇月一五日「道生へ手紙、よく考えて書く。婚約したという。道生十八歳。昔なら二十歳か。大学卒業したら結婚するという。いやはやしかし、びっくりした。彼の純情をほめて激励の手紙」

一〇月一六日「道生にどうしても逢いたいし。泣けてくる」

一〇月一七日「道生の手紙また読む」

一〇月一八日「道生どうしているかしら」

一〇月二十日「道生に逢いたいし、東京に受験に来るのかしら」¹¹⁶

断片的な記述ではありますが、それでも、息子に寄せる母親の切々たる思いが伝わってきます。他方、夫の弘に関しては、記載の量が少なく、次の三点です。

一〇月二五日「石牟礼からお金」

一〇月二八日「道子午前中、弘に手紙」

一一月六日「弘より手紙、ガックリ」¹¹⁷

これだけからは、道子の夫への気持ちは十分に伝わってきませんが、弘が生活費を送金していることから判断しますと、弘は道子を見捨てているわけではないことがわかりますし、受け取った手紙の内容に道子が「ガックリ」と失望しているところから推量しますと、離婚話に弘の態度が否定的だったという状況があったのかもしれませんが。

道生の文のなかに、家についてと両親について記述した箇所がありますので、ここで紹介します。家については、「祖父の白石亀太郎が主になって造ってくれた家で雨が降ればあちらこちらで漏れてくる暮らしだったが絶えず人が集まる楽しい暮らしだった。小学校の頃まで溺愛されて育ったことを鮮明に覚えている」¹¹⁸と、述べています。両親については、こう書いています。

母は父の求める妻としては早くにその役目を放棄していた。母と父との思いの違い。両親のそれぞれの葛藤は物心ついたころから目の当たりにしていた。静かで優しい父は黙認するしかなかった。

ものを思うと取り憑かれたように書き始める母。何を言おうと通じない。囲碁や釣りや庭いじりを好み知人や親戚の面倒や相談にのり人柄の良い学校の先生だった普通で穏やかな父だった。そんな母に距離を置きながらも資金的援助を怠ってはいなかった。¹¹⁹

弘は教師として小学校に勤務し、道生は大学受験を控えた高校三年生でした。道子が「森の家」に滞在していたとき、ふたりは水俣でどのような暮らしをしていたのか、調べる限りでは資料に残されておらず、再現することはできませんが、憲三の体調が優れなかったこともあり、「森の家」での炊事洗濯などの家事全般は、ほとんど道子が担っていたようです。それは、書き残されている日記から明らかで、たとえば、一〇月一三日の日記には、こうした一文を見ることができます。

今朝は牛乳にしましょう。そうしましょう。そして、二度食^{じき}でよい。僕はあまり食べたくありません。あなた風邪はなおりましたか。なおったの。そりゃよかったなあ——
そこで私は、とんとんと二階をおりて、非常に簡単に充分に栄養的な二度食^{じき}のための食事をつくりにゆくのである¹²⁰。

読む限り、おそらくどこにでもありそうな夫婦の朝の会話です。献立は、次のようなものでした。

朝食、味噌汁（豚肉、カボチャ、油揚げ、葱、ラーメンスープ入り）、先生 牛乳、麦飯、ウニ、白菜漬け、フクミ（先生名付ける）昆布、梅干。先生、牛乳。夜、バター卵

とじ（人参、葱）、麦飯、牛乳、蜜柑二個ずつ、ウニ、昆布¹²¹。

憲三が、最終配本予定の第七巻「評論集・恋愛創生」の原稿の整理を終え、それを理論社の編集者の藤井良に渡し、一方道子が、第八回の「空と海のあいだに」を脱稿し、それを『熊本風土記』の編集者の渡辺京二に郵送すると、いよいよ、「森の家」解体へ向けての本格的な作業がはじまりました。まずは、本の整理です。一〇月一七日、三社のなかで事前に二〇〇万円の最高値をつけていた古賀書店が来訪し、打ち合わせ。さっそくその日から、ふたりは本の整理に取りかかりました。執筆の際に逸枝が参考にした膨大な量の書籍が「森の家」の本棚を埋め尽くしていました。道子は、このように書いています。

私は世田谷の森の家の内観の威容を感動を持って思い起こすが、そこは見たこともない一大書庫で、水俣の淇水文庫より更に充実した内容のように私にはおもわれた。……正規の書斎、（応接間）、茶の間はいうにおよばず、湯殿の横の小部屋といわず、化粧部屋といわず、二階書斎（寝室を兼ねる）も張り出しのおどり場も、壁面という壁面はすべて天井までとどく書誌類でことごとく埋まり、書架のしつらえ方の機能的、合理的であることはおどろくべきもので、すべて憲三氏の設計になる手づくり（カンナは大工さんがかけた）であった。

……書物はここでは生き物であり、世俗を断ったこの夫婦の対話者としてそこに居並んでいた¹²²。

それでは、どのような書物が「そこに居並んでいた」のでしょうか。道子は、実に克明に記録していました。長くなりますが、貴重な逸枝の蔵書リストですので、以下に再録します。

古事記伝二巻、古事類苑、古事記大成、国史大系（五十三巻）史料大成（四十二巻）群書類従（二十二巻）故実叢書（三十二巻）日本文学大系（二十三巻）大日本古文書（一卷）大日本古記録、後二条師通記（上・下）世界史（ソビエト科学アカデミー版十巻）親族法（穂積重遠）図説日本文化史体系（九巻）日本庶民生活史（三巻）日本歴史大辞典（二十巻）大百科事典（二十七巻）日本文化史体系（四巻）日本風俗史講座（二十六巻）未開家族の論理と心理（マリノウスキー）御湯殿の上の日記（十巻）六国史（十一巻）国文学講座（十巻）モルガン古代社会（上・下）ミクロネシア民族誌、支那古代社会研究、支那古代経済思想及制度、小右記（小野宮実資）権記（藤原行成）春記（藤原資房）中右記（藤原宗忠）玉葉（藤原兼実）明月記（藤原定家）兵範記（平信範）言継卿記（山科言継）神話伝説体系（十一巻）古琉球、琉球神道記、日本古代共同体の研究、社会思想全集（二十四巻）古典劇体系（十巻）寺領荘園の研究、南方民族の婚姻、新日本歴史講座（五十冊）歴史学研究、日本農業史、大鏡活援、紫式部日記正解、支那原始社会形態、日本上代における社会組織の研究（大田亮）支那の家族制、朝鮮の姓史と同族部落、日本婚姻史論、日本荘園史概説、三宅博士古希祝賀記念論文集（柳田国男、簗入考収録）キュウリー夫人伝、ゴッホ伝、国学院雑誌……¹²³。

逸枝の一大蔵書を前にして、道子は、これまでいかに無学であったかに気づくとともに、

これからの無限の勉学をあと押しするかのような、大いなる力をそこから感じ取ります。

いまの中学校程度の学力も持たなかった私にはこれらはまったく想像もつかぬ未知の世界だった。

……私が生まれてこの方、おそすぎる覚醒がおとずれた三十七歳までの無学の時間をすっぽり、この夫妻は系統的な勉強に当て続けていたのだという実感が、取り囲まれている大書架から伝わって来た。……私は、絶望感よりも、この一大書庫に、無限の天地のようなものが広がってゆくを感じた。……死ぬまで勉強というものをしてよいのだというような啓示と、この天地へのいいようもない慕わしさを感じたのである¹²⁴。

おそらく、勉学心にかかわるこの無限の感覚が、「森の家」滞在の最大の成果であり、この後の道子の作家としての原動力となるものであったにちがいません。別の箇所で道子は、以下のように語っています。

勉強しよう！ とひとつのせんりつに貫かれながらわたくしはおもう。勉強というものを、晴れてやったことのなかったわたくしにとって、森は、うつつにみる必然である。わたくしは、きっと、はためには突然変異を起し、世紀の大脱走を企て、まぼろしの森に逃げこんだのにちがいない。

いや、森が宿したのがまぼろしであるのかもしれないのである。この関係性こそ不思議なことであった。余命いくばくもない森が宿している関係性のたまごに対して、わたくしはふかい興味をもつ¹²⁵。

「私を宿したのが幻の森」なのか「森を宿したのが幻の私」なのか、道子は反問しながら、深く煩悶します。しかしそのとき、その旋律は、「勉強しよう！」という深い戦慄となって、道子の心を射抜いたようです。こうして明らかに、道子と森は相互に受胎し、森の聖霊を宿して道子は再生なり、他方で、道子の老残を胚胎した森は死滅の運命をたどるのでした。このことを、さらに別の言葉に置き換えるならば、こうして道子は逸枝の死霊の相続人として復活を遂げ、その一方で、蘇った道子がこれから歩みゆくことになる新たな聖地への道行き同伴者としての役割を必然的に担って、憲三もまた、森の死とともに、生まれ変わったということになるでしょう。したがって、道子が「高群夫妻とそして自分とに、後半生について誓った」という語句は、「後妻」とか「後添い」とかいう現世の俗言を超えたところに見出される、三つの巴が美しく組み合わせられた合体模様を象徴する聖なる予言として受け止めることができるにちがいません。その意味で、まさに「森の家」は、それを生み出すにふさわしい産所であり霊地だったのです。道子を選んだ巡礼の地「森の家」を出て再び還俗するに当たって、道子は、「寂滅（□□）の言葉はゆうべたしかめあった」¹²⁶とも書いています。□□にいかなる文字が隠されているのか、それは、憲三と道子のふたりだけが知ることであり、当然ながら、誰にもわかりません。しかしながら、逸枝自身、自著の『變愛論』のなかで、確かに「寂滅」という語を使っていました。参考のために、以下に、その用例を引用します。

くりかえしいえば、變愛は合體（もしくは自己解消）を理想とするものであり、これにたいして生殖は分裂（もしくは自己保存）を意味するものである。これはアミーバの昔から不變の原則なのである。

では、この兩者の關係は、究極なにを指向するかといえ、……それは人類の無限の増殖よりは、人類の完全な合體——無性化、そして人類の寂滅（もしくはさらに他の新生命への發展）なのであろう¹²⁷。

もし、憲三と道子が、この逸枝の「寂滅」にかかわる言説を前提として、道子が東京を發つ前日の十一月二三日の「ゆうべたしかめあった」のであれば、「生殖」を超えて、「新生命への發展」を確認し合ったことになるのではないのでしょうか。こうして憲三と道子のふたりは、最終的に逸枝の予言に従って、新たな生命体としてここに蘇ったのでした。

以下は、「ゆうべたしかめあった」翌日の道子の離京までの足取りです。本の整理にふたりは一週間を費やしました。一〇月二四日、庭に出て憲三は、不要となった雑誌や新聞などを焼きました。一方書籍類は、引き取りにきた古賀書店のトラックに運び込まれました。道子は、そのときの様子を、このように描写します。

昼間の森の中の火と煙と先生の後姿一生忘れがたし。本を積んだトラックが角をまがって行ったとき先生見たら、先生は古賀さんの後姿にいていねいにおじぎをされていた。道子門にかけこみ、泪湧く。大型トラック一ぱいの本。競りに出されるとか。

先生、貴女がいて下さって助かりました、とおっしゃる。握手。おいたわしい¹²⁸。

本の送り出しは、憲三にとっては、俗世を断って森に生きる孤高の学者だった妻逸枝と、その著述を長年編集者として献身的に支えてきた夫である自分とに、別れを告げる瞬間でした。一方、道子にとっては、新たな生を得て復活した文筆家としてこれから立つうえでの勇氣と展望とを、逸枝と憲三から確実に相続する一瞬でもありました。このとき、憲三は、見送る愛蔵書に深々と頭を下げ、道子の目からは涙がこぼれ落ち、それからふたりはしっかりと手を握りしめて、互いに互いの存在を重ね合わせるのでした。

分身としての蔵書と別れたあと、次に憲三は、「森の家」そのものと別れなければなりません。以前から世田谷区役所とのあいだで、「森の家」は解体し、公園へと造成することで話が進められていました。十一月一四日、譲渡仮契約書に調印する日が来ました。午後二時ころ、「世田谷区役所公園課長、用地課長、公園課員、桜町会長、杉本哲次（軽部家分家、杉本造園株式会社の社長）」¹²⁹が訪ねてきました。

時々、例の先生の高い笑い声、こんな声の時はあまり正常ではない。失調症のようにきこえる。

いよいよ定まりましたよ、道子さん、印鑑をつかねばなりません。そう言ってタンスの上の紙箱から印鑑を出された。四時頃人々帰り、下りてゆくと、ああ、もういよいよこの家もなくなります。一二月一五日に引きあげですよ。……（彼女の遺影に向かって）……（うん、）いっしょにかえろうね¹³⁰。

同じくこの日、憲三と道子は、水俣に建造する予定の逸枝の墓廟について語り合いました。ヒントになったのは、先日ふたりで訪れていた馬事公苑で見かけた記念碑でした。以下は、そのときの憲三と道子の会話です。

「三メートルは大きいかな。物々しいかな。しかし小さければ中途半端なものになる。」

「……石積みは三メートル四方になっても自然の山に入ればそれほど大きくもないと思います。この立方体を石の壁と考えて屋根をおいた形を考えると、つまり石の小屋、お二人と憲平ちゃんの永久のお住いの小屋と考えると、決して大きくありません。

「そうですね！ いやそれはすばらしい。石の小屋と考えると実にいいな、そうきました。」¹³¹

道子は、この墓廟について、晩年に執筆した自伝のなかで、以下のように触れています。

ちょうど高群逸枝さんのご夫君、橋本憲三先生が、水俣のご姉妹の所に帰っておられ、お墓というか、記念碑のことを考え中であったので、わたしは、かの祖父の愛弟子さんのことを話した。こうして今、逸枝さんの面影の刻み込まれた石碑が、水俣市役所のすぐ上に遺されている。憲三先生に申しつかって、在京の彫刻家、朝倉響子氏に、「目立たなくともよいが、後世に残るような」特別の墓碑のデザインをお願いしに往った。快く引き受けて下さって、石工の吉田一二三さんに頼み、現在の形の石碑がある¹³²。

本を売却し、土地と屋敷を譲渡し、墓碑についての案もほぼ確定し、いよいよ水俣へ帰還する日が近づいてきました。十一月一六日のことでした、熱心に新聞を読んでいた憲三が、「突然、道子さんがかわいそうだとおっしゃる。時々先生の顔はキリストのようにみえる時がある。人間は全部カワイソウですね、と申し上げる」¹³³。

二日後の一八日から、道子の「森の家」を離れる準備がはじまりました。二三日、離京前日。「道子獅子奮迅の働き、おそうじ。彼女の書斎、便所、階段、茶の間。それから下着洗濯。……形見のお写真いただく。裏にはなむけの毛筆の（前代未聞とのこと）お言葉。胸せまる。明朝、お見送り辞退申し上げます。特別晚餐、食前酒、散らし寿司（マグロ、シイタケ、金糸卵、人参、生姜）お吸物（春菊、卵、チリメンジャコ）」¹³⁴。

そして、当日の二四日を迎えました。

先生御玄関からお見送り、（その前お茶を——おしまいのお茶——立てて下さる、八時）ていねいにおじぎをする。落葉の道を歩き出す。玄関をしめる音。立ち止まる、二階に上がっていらっしゃる音、やがて窓にお顔が出る。……振り返る。神秘的な青い空。……

音のない時間がどっと私のめぐりを流れ出す。さよなら、森の家よ。寂滅（□□）の言葉はゆうべたしかめあった。先生さようなら。角を曲がる。……八重洲口へ。……霧島乗りこみ、十二時¹³⁵。

帰水後、道子が「橋本静子さんをたずねる」¹³⁶のは、一月三〇日のことでした。この間の出来事を静子に報告したものとされます。「静子さんの全身に漂う詩情。彼女の目美し」¹³⁷。そして翌日、道子は「憲三氏に手紙書き。速達で出す」¹³⁸のでした。

堀場清子の『高群逸枝の生涯 年譜と著作』に断片的に記載されている憲三の「共用日記」に目を向けると、その後の足取りは、おおよそ次のようになります。一二月二日、引っ越し作業の手伝いのため、静子、水俣を出発。翌日の「11時—12時のあいだに静子来」。次の日の「早朝から荷まとめの作業に従事」、七日に「通運から荷物の下見に加藤雄宏さん」が来て、打ち合わせ。翌八日、「荷積みを加藤さんにたのみおき、2時50分この家を捨てる。はやぶさ（特急）に乗る」。一夜が明け、「瀬戸内海が見えてきたころ」に食堂車へ行き、そこで朝食、そして「14時53分水俣着」¹³⁹。かくして一九六六（昭和四一）年一二月九日、六九歳の憲三は、すべての作業を終え、肥後火の国の南西部に位置する水俣の地に帰還したのでした。

思い起こすと、最初に逸枝が出京したのは、一九二〇（大正九）年で、その地で逸枝と憲三の結婚生活がはじまります。二年前にすでに逸枝は亡くなり、ふたりで生活をともにした思い出の「森の家」も、いまや憲三の手で閉じられました。一方で、憲三が編集した『高群逸枝全集』（全一〇巻）の配本が続いています。憲三は、実の姉妹が住む家に寄寓します。この土地には、ひと足先に帰郷した道子もいます。こうしたなかであって、憲三の新しい生活の幕が開くのでした。その様子は、次の第一章「高群逸枝を顕彰する力とそれに水を差す力のはざままで」において詳述したいと思います。

注

- (1) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1976年（第8刷）、479頁。
- (2) 高群逸枝・橋本憲三補『火の国の女の日記』理論社、1965年（第1刷）、1頁。
- (3) 同『火の国の女の日記』、奥付。
- (4) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、148-149頁。
- (5) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、149頁。
- (6) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、149-150頁。
- (7) 橋本万平「比類のない自叙伝 高群逸枝の火の国の女の日記を読む」『週刊読書人』第586号、1965年8月2日、7頁。
- (8) 「高群逸枝全集を出す小宮山量平氏」『熊本日日新聞』（「東京サロン」欄）、1965（昭和40）年8月16日（夕刊三面）。
- (9) 同「高群逸枝全集を出す小宮山量平氏」『熊本日日新聞』。
- (10) 橋本憲三「題未定——わが終末期 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970年7月1日、25頁。
- (11) 橋本静子「もろさわようこ様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、13頁。
- (12) 同「もろさわようこ様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、13-14頁。
- (13) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、310頁。
- (14) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014年、275頁。

(15) 石牟礼道子「高群逸枝との対話のために(2) まだ覚書の『最後の人・ノート』から」『無名通信』No. 5、1968年3月、5頁。

(16) 同「高群逸枝との対話のために(2) まだ覚書の『最後の人・ノート』から」『無名通信』No. 5、同頁。

なお、その後この文が所収される、石牟礼道子『潮の日録 石牟礼道子初期散文』(葦書房、1974年、216頁)においても、また石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』(藤原書店、2012年、432-433頁)においても、松太郎の権妻つまり妾の名は、「おかね」ではなく「おきや」に置き換えられています。

(17) 『石牟礼道子全集・不知火』第六巻／常世の樹・あやはべるの島へほか、藤原書店、2006年、592頁。

(18) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻、297頁。

(19) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻、59頁。

(20) 石牟礼道子『潮の日録 石牟礼道子初期散文』葦書房、1974年、51頁。

(21) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻、305頁。

(22) 前掲『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、68-69頁。

(23) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻、211-212頁。

(24) 前掲『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、71頁。

(25) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻、304頁。

(26) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻、同頁。

(27) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻、304-305頁。

(28) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻、305頁。

(29) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻、208-209頁。

(30) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻、210頁。

(31) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻、同頁。

(32) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻、同頁。

(33) 前掲『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、54頁。

(34) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、47頁。

(35) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、55-56頁。

(36) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻、259頁。

(37) 前掲『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、63頁。

(38) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、255頁。

(39) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、同頁。

(40) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、同頁。

(41) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、256頁。

(42) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、257頁。

(43) 同『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、82頁。

(44) 米本浩二『評伝石牟礼道子——渚に立つひと』新潮社、2017年、68頁。

(45) 同『評伝石牟礼道子——渚に立つひと』、同頁。

(46) 石牟礼道子「高群逸枝との対話のために(1) まだ覚え書の『最後の人・ノート』から」『無名通信』No. 3、1967年9月、2頁。

- (47) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、436-437 頁。
- (48) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第 14 号、1977 年冬季号、12 頁。
- (49) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、439 頁。
- (50) 前掲「高群逸枝との対話のために（1）まだ覚え書の『最後の人・ノート』から」『無名通信』No. 3、1 頁。
- (51) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、440 頁。
- (52) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、439 頁。
- (53) 前掲「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、13 頁。
- (54) 同「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、同頁。
- (55) 石牟礼道子「最後の人 2 序章 森の家日記（二）」『高群逸枝雑誌』第 2 号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969 年 1 月 1 日、9 頁。
- (56) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、444 頁。
- (57) 前掲「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、11 頁。
- (58) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、153 頁。
- (59) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻、274-275 頁。
- (60) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻、275 頁。
- (61) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻、同頁。
- (62) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、244-245 頁。
- (63) 前掲「高群逸枝との対話のために（1）——まだ覚え書の『最後の人・ノート』から」『無名通信』No. 3、1 頁。
- (64) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、246 頁。
- (65) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (66) 前掲「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、12 頁。
- (67) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻、287 頁。
- (68) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、247 頁。
- (69) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (70) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (71) 前掲「最後の人 2 序章 森の家日記（二）」『高群逸枝雑誌』第 2 号、5 頁。
- (72) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、271 頁。
- (73) 石牟礼道子「最後の人 第九回 序章 森の家日記 9」『高群逸枝雑誌』第 18 号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1973 年 1 月 1 日、24 頁。
- (74) 前掲『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、219 頁。
- (75) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第 15 号、1977 年春季号、56 頁。
- (76) 石牟礼道子「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980 年 12 月 25 日、78 頁。
- (77) 同「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、84 頁。
- (78) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、327 頁。

- (79) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、453-454 頁。
- (80) 前掲『「最後の人」覚え書——橋本憲三氏の死——』、8 頁。
- (81) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、258 頁。
- (82) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、258-259 頁。
- (83) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、259 頁。
- (84) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (85) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、261 頁。
- (86) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、264 頁。
- (87) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、265 頁。
- (88) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (89) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (90) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (91) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (92) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。
- (93) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、266 頁。
- (94) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、297 頁。
- (95) 石牟礼道子「最後の人1 序章 森の家日記(一)」『高群逸枝雑誌』第1号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968年10月1日、31 頁。
- (96) 前掲「最後の人2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、4 頁。
- (97) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、154 頁。
- (98) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (99) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、464 頁。
- (100) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、463 頁。
- (101) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻、271-272 頁。
- (102) 前掲「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、94 頁。
- (103) 石牟礼道子「母のことそして父のこと」『魂うつれ』第73号、2018年5月、36 頁。
- (104) 前掲「最後の人2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、5 頁。
- (105) 同「最後の人2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、9 頁。
- (106) 同「最後の人2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、同頁。
- (107) 前掲「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」、55 頁。
- (108) 前掲「最後の人2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、9 頁。
- (109) 同「最後の人2 序章 森の家日記(二)」『高群逸枝雑誌』第2号、10 頁。
- (110) 石牟礼道子「最後の人3 序章 森の家日記(三)」『高群逸枝雑誌』第3号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年4月1日、27 頁。
- (111) 前掲「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、12 頁。
- (112) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、463 頁。
- (113) 前掲「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、8 頁。
- (114) 同「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、10 頁。

(115) 同「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」、11 頁。

(116) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、298、301、307、312、317、318、320、321、322 頁。

(117) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、290、294、305 頁。

(118) 前掲「母のことそして父のこと」『魂うつれ』、35 頁。

(119) 同「母のことそして父のこと」『魂うつれ』、36 頁。

(120) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、283 頁。

(121) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。

(122) 前掲「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」、53-54 頁。

(123) 同「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」、54 頁。

(124) 同「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」、54-55 頁。

(125) 石牟礼道子「最後の人 第八回 序章 森の家日記 8」『高群逸枝雑誌』第 14 号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1972 年 1 月 1 日、35 頁。

(126) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、327 頁。

(127) 高群逸枝『變愛論』沙羅書房、1948 年、9 頁。

(128) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、290 頁。

(129) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、313 頁。

(130) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。

(131) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、315 頁。

(132) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』別巻、12-13 頁。

(133) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、318 頁。

(134) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、325-326 頁。

(135) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、327 頁。

(136) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、328 頁。

(137) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。

(138) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、329 頁。

(139) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、155 頁。

第一章 高群逸枝を顕彰する力とそれに水を差す力のはざままで

一. 『高群逸枝雑誌』の創刊と「高群逸枝記念碑」の建立

橋本憲三が水俣に帰ると、年が明けた一九六七（昭和四二）年の一月、『高群逸枝全集』の第六巻「日本婚姻史／恋愛論」が出版され、翌二月、最終配本となる第七巻の「評論集・恋愛創生」が世に出ます。この「評論集・恋愛創生」の巻末にあります「解題／編者」において、憲三は、こう書きました。

あとにして思えば、死の当日、彼女はおそらく眼前の死の自覚なくて、はしなくも後事を私に託する発言をした。彼女を失っていまは廃屋と化した二階の一室、彼女が三十余年前に机上ただ一冊「古事記伝」を置き、「女性史学事始」をなしたその一室に、私はひとり老残を横たえて、未完のままのこされた彼女の自伝「火の国の女の日記」の整理にしがたい、その刊行について理論社社長小宮山量平氏の然諾および前述のように全集発行の申し入れを受けるにいたる。かくて「火の国の女の日記」は一九六五年六月に刊行、その書をも含む「高群逸枝全集」は一九六六年二月第一回刊行、同六七年二月最終回刊行をみる。彼女に負う私の義務もここに終わるのである¹。

この文を含む「解題／編者」の末尾には、「遺影のもとで一九六七年一月一日橋本憲三しるす」とあります。この日、おそらく憲三の胸は、万感の思いで満たされていたにちがいありません。

この「解題／編者」を書き終わると、憲三の関心は、逸枝の墓廟の建立に向かいます。逸枝の生地は、現在の宇城市松橋町で、そこには弟の清人が住んでいました。また、憲三自身も、水俣市の出身ではなく、必ずしも、なじみの土地というわけではありませんでした。そこで憲三は、墓をどこに建てるか、少し迷ったようです。

建墓の場所について、第一に私の頭に浮かんできたのは、弘川の彼女の両親の墓側だった。……高群家の当主清人氏にこのことをつげてその意向をたざしたところ、たぶん自分を最後として弘川には後継者がなくなるだろうし、またここはあまりに遠い。……むしろ帰住の地をすすめたいということだった。けっきょく、水俣になったのだった。

正直に言えば、私は水俣をついのすみかとは考えていないらしい。心はいつも世田谷の森の家から彼女が死んだ病院のあの一七号室にはせている。……ただ、骨だけは故山に埋めねばならない。故山は東京よりも彼女が愛したから。

墓所はぜひ私の居室からながめられるところをとのぞんだ。幸いにこののぞみはきかれて……秋葉山の小丘に九九坪の土地を恵まれた。

……眼下段々畑のつきるところに市役所と図書館と第一小学校が麓と川の間に別天地をなし、全市街とそれを囲む山々と、海と、天草島を一望におさめる。もちろん私の小さな家もみられる。私の家から歩いて一五分の地点²。

墓廟の形状は、「幅および奥行き各三・八メートル、高さ二・三メートル」³の石積みで、

製作は、大塚石材に発注されていました。一月二〇日の「共用日記」には、「大塚さん——昨々日から山口に石を注文に出かけ今朝帰ってきたと。雪のため、山元では三月はじめごろ出荷のみこみと、……明後日から墓所の整地はじめを依頼」⁴と、あります。そして、五月二二日、墓廟は完成し、逸枝の霊骨を入れる段取りが整いました。

夕ぐれ時、お骨を骨座にいれる。その他に、全集と愛用の万年筆。憲平の土。愛鶏たちのお骨。白ばら。静子と二人で。故人も安心しなはったろう。自分の家に入って。と病床の姉がいう⁵。

こうして六月七日の逸枝没後三年目の命日を前にして、無事納骨が終わりました。

墓廟の正面左手には、彫刻家の朝倉響子に依頼した、「高さ八五センチ、幅七〇センチ」⁶の逸枝の等身大胸像のレリーフがはめ込まれることになっていました。完成したレリーフが到着したのは、翌年（一九六八年）の八月一日でした。次は八月九日の「共用日記」からの引用です。「6時起床。静子をたのみレリーフを山下まで運ぶ。8時まえ上山、献花。大塚さんすでにあり、レリーフも上げあり。8時仕事はじめ」⁷。続く翌日、「8時上山、献花と昼べんとう。午後3時施工終了。下山」⁸。そして、次の一日に、「午前清掃。ひとりで除幕式」⁹を執り行ないました。こうして旧盆に間に合ったことに、憲三はきっと安堵したことでしょう。

全集の完結、墓廟の建造に続く、三番目の憲三の大きな仕事は、『高群逸枝雑誌』の刊行でした。憲三は、この季刊誌に、逸枝に関する若手研究者の最新の成果や新たに発掘された関連資料などを掲載することにより、日本における女性史学の樹立者である妻の業績を顕彰しようと考えたのでした。一九六八（昭和四三）年九月三日の「共用日記」には、「Mさん10時ごろ。高群雑誌の原稿『最後の人1』持参」¹⁰と記されています。「Mさん」が石牟礼道子であることは、いうまでもありません。道子は、こう書きます。

そのお仕事は氏の晩年の日々の、せめてもの慰めであつた。『高群逸枝雑誌』はそのような意図を秘めて出され始めた。同人は先生と弟子の私のふたりであつた¹¹。

一〇月一日、『高群逸枝雑誌』の第一号が発刊されました。この号の誌面は、橋本憲三「『火の国の女の日記』の後」、高群逸枝「《拾遺》額田王」、石牟礼道子「最後の人1 序章 森の家日記（一）」、加えて「たより」欄から構成されました。「たより」には、四箇月前の六月七日の逸枝の命日に平塚らいてうから届いていた電文も転載されています。「本日、逸枝さんの五回忌をおむかえして、ご冥福のますますゆたかならんことを心からお祈りいたします。合掌」¹²。らいてうと逸枝夫妻との変わらぬ友情を、ここからも読み取ることができます。

他紙に先駆け、地元の『熊本日日新聞』が、一九六八（昭和四三）年一〇月四日、『高群逸枝雑誌』が創刊されたことを伝えました。とりわけ石牟礼道子の「最後の人」に、関心が向けられています。以下は、「高群逸枝雑誌の創刊」（八面）という見出し語をもつ囲み記事のなかの一節です。

「最後の人」は長編評伝の第一回。「序章 森の家日記（一）」で、一九六六年夏、逸枝なきあと東京・世田谷の森に家を取りこわされる前に一度見ておきたいと上京した石牟礼氏が、残務整理もすませていよいよ、憲三氏とともに森の家をあとにするところから始まる。憲三氏は「瞑目したまま軽く呟くように、『逸っぺごろ、また水俣にゆきますよ』と熊本なまりでそういわれた」——それは逸枝自身が帰省のために森を出た昭和十五年八月の朝へと連想をさそい、さらに連想はさかのぼって招婿婚の研究当時の逸枝の日常へと連なったりする。逸枝の日記、憲三氏の談話ノートなどを随所に混じえながら、ある時は伝記風に、ある時は日記風に、書き進めていく。逸枝と著者との自由な対話といった趣のすべり出しである。

そして続けて、以下のように、今後の成果に期待を寄せるのでした。

雑誌は季刊の建て前をとり、研究論文、エッセー、評伝、創作など表現形式は自由、同人以外の寄稿も歓迎する。特定の学者一個人の研究を目的とする雑誌が、しかも地方で定期的に発行されるという例はきわめてまれであるが、この雑誌が息長く刊行され、成果をあげることを期待したい。

この創刊号の裏表紙の見返しには、『高群逸枝全集』を推薦する「高群全集に思う」と題された道子の文が掲載されています。そのなかで、憲三に言及した箇所を、次に引用します。

このような大事業をなして彼女が現世に得たものは名声にあらず富にあらず地位にあらずむしろその逆のものであったが、この事業の生涯の協力者であった夫憲三の至純の愛ひとつを抱きえた事は涙あふるる思いがする¹³。

こうして『高群逸枝雑誌』は、高群女性史学にとっての継続的な砦となることを目指して、水俣という小さな地方都市から産声を上げました。

年が明けて一九六九（昭和四四）年一月一日、『高群逸枝雑誌』の第二号が発行されました。この号には、石牟礼道子「最後の人2 序章 森の家日記（二）」と並んで、息子の石牟礼道生の「母への手紙」も掲載されました。大学生になっていた道生が、この時期、母親をどのように見ていたのか、その一端が、この文の末尾の詩片に現われていますので、その箇所を引用します。

なにもかも
あなたがしっているところのものは
すべて超越して
そんなことをさりげなく話すあなた
そしてときには
まだなんにも知らない
幼い少女の澄みきった心のように
でも恥じらいながら知ろうとして

またためらう娘のように¹⁴。

続く一九六九（昭和四四）年四月一日発刊の『高群逸枝雑誌』第三号の「たより」の欄には、らいてうからの手紙が掲載されています。前年の一二月三〇日に書かれたその手紙には、このようなことが記されていました。

いよいよ年も暮れようとしております、心ならずもご無沙汰申し上げましたが、あなた様のお心づくしで高群逸枝研究の雑誌が出ますことを心からうれしくおよろこびいたします。……

お立派なお墓が出来上がりましたことを知りうれしくおもいます。

この夏頃でしたが、やっとの思いで、お住いの跡——桜児童遊園を訪れました。……あの告別式の日の森のお家の印象はどこにも見出せません。

……お二方さまのお住いの跡であることも、あのコウカンな女性史をおかきになったところであることも何一つの表示もないのを、また近所の人たちも全く何も知らないらしいのをたいへんさびしく感じました¹⁵。

おそらくこのとき、「高群逸枝記念碑」のようなものをこの公園に建立する思いが、らいてうの頭をよぎったようです。しかし、「その後私の健康がすぐれない日のみ多く病院のご厄介になったりしおりました心ならずも年末を迎えてしまいました。この冬を何とか無事に乗り越えまして、春とともに元気を出したく念じております」¹⁶。そして、この手紙は、「お妹さまにも、今ちょっとお名前が浮びませんが御地の高群さん研究家のあのご婦人にもよろしくお伝え下さいませ」¹⁷という言葉でもって結ばれています。「お妹さま」が静子で、「あのご婦人」が石牟礼道子であることは、明らかです。少なくとも逸枝の「森の家」での葬儀の際に、静子とらいてうは顔をあわせていますし、道子は、「森の家」滞在中に憲三に連れられて、らいてう宅を訪れています。

らいてうの体調がすぐれないなかにあっても、「高群逸枝記念碑」の建立の準備は進められてゆき、逸枝の没後五周年に当たる一九六九（昭和四四）年六月七日に、「高群逸枝記念碑」の除幕式が挙行されました。式典では、建碑世話人として一五名の名前が読み上げられました。そのなかには、平塚らいてうや渋谷定輔に加えて、熊本出身の俳人である中村汀女の名前もありました。健康がすぐれず上京できなかった憲三に代わって、渋谷が遺族の挨拶文を読み上げました。碑の表には、逸枝自筆の詩章が刻印され、裏には、渋谷が原案を起草した、次のような由来記がはめ込まれています。

高群逸枝住居跡の碑

歴史学者詩人高群逸枝は深く武蔵野の森を愛し出世作「日月の上に」は一九二〇年この森の中で書かれました。そして一九三一年研究所を設け定住し女性史の研究に献身して先駆的な不滅の業績をうちたて。一九六四年六月七日ここに偉大な生涯を終えられました。

一九六九年春¹⁸

この除幕式については、「高群逸枝さんの記念碑 東京の旧居跡に完成」という見出しで、六月九日の『熊日』（三面）において取り上げられました。以下は、その一節です。

碑は「萬成」といわれる明るい茶色の自然石で、表面に「時のかそけさ春ゆくときの
そのとき [時] の時のか [ひ] そけさ花ちるときその時の」と高群さんの詩が刻まれている。橋本さんは病身のため除幕式に出席できず、手紙を送って「ありし日のかたみをとどめられることは故人の光栄はもとより、唯一人の家族である私にとっても感激です」と喜びの言葉を送ってきた。

二. 石牟礼道子の水俣病闘争への参加と「最後の人」の執筆中断

「高群逸枝記念碑」の除幕式からさかのぼる半年前の一九六九（昭和四四）年一月二八日、石牟礼道子の出世作となる『苦海浄土 わが水俣病』が講談社から刊行されました。道子は、その「あとがき」に、こう書きました。

ここにして、補償交渉のゼロ地点にとじこめられ、市民たちの形なき迫害と無視のなかで、死につつある患者たちの吐く言葉となるのである。

「銭は一銭もいらん。そのかわり、会社のえらか衆の、上から順々に、水銀母液ば飲んでもらおう。……上から順々に、四十二人死んでもらおう。奥さんがたにも飲んでもらう。胎児性の生まれるように。そのあと順々に六十九人、水俣病になつてもらう。あと百人ぐらい潜在患者になつてもらう。それでよか」

もはやそれは、死霊であり、生霊たちの言葉というべきである¹⁹。

死をもって死をあがなうことを望む、この「死霊であり、生霊たちの言葉」は、膠着状態にあった水俣病患者の補償問題を巡る、まさしく宣戦布告となるものでした。四月、水俣病患者家庭互助会は一任派と訴訟派に分裂します。一任派とは、厚生省（現在の厚生労働省）が誘導する、第三者機関による裁定に「白紙委任」をもって身をゆだねようとする人たちを指します。しかしこれでは、原因企業であるチッソ株式会社（一九六五年に新日本窒素肥料株式会社からチッソ株式会社に社名変更）の責任を白日の下に晒すことはできません。一方、訴訟派は、法廷の場において責任の所在を明確にしたうえで、前例なり法的規範なりのなかにあつて賠償を勝ち取ろうとしました。六月、水俣病患者および家族のうちの一二人は、チッソ株式会社を相手取り、損害賠償請求訴訟を熊本地方裁判所に起こします。いわゆる「第一次訴訟」と呼ばれるものです。

そうしたなか、熊本日日新聞社は、『苦海浄土 わが水俣病』に対して熊日文学賞を石牟礼道子に授与します。しかし道子は、これを辞退します。一二月一四日の『熊日』の一五面を開くと、「『水俣病』にかかわること 熊日文学賞の辞退について」という見出しの道子の寄稿文が目に入ります。読んでも、辞退についての具体的な理由は何も書かれてありません。「水俣病市民会議会員」という所属名のもと、書き手としてのいまの心境が幾分詩的に綴られているのみです。以下は、この文の末尾の一節です。

ものを書くなどということは、本来処世の道とは外れ、度しがたい世界にかかわることだと、私にはおもえる。まして、余生を生きている命でもって水俣病にかかわり、ひとたびは死んだ祖たちやはらからたちを生む、産親にならねばなどと、こいねがうなどは。

なんと、夜とも昼とも、おどろおどろして定めがたい心象風景の中をのみ、さすらっていることであろう。

つつしんで熊日文学賞をご辞退申上げるゆえんである。

年が変わり、一九七〇（昭和四五）年が訪れました。一月二〇日の憲三の日記に、こう記されています。「Mさん、妙子さん（妹）、久木野日当野ゆき。居室の前の県道（旧国道）から窓べに立っている私をみて自動車をおりてあいさつ。きょうから山の家びらきとのこと」²⁰。この日道子は、訪問者を謝絶して一日一〇時間、執筆に専心した逸枝の「森の家」に倣うかのように、白浜町（通称日当猿郷）にある自宅の書斎を出て、「山の家」に設けた仕事場へ移ったようです。憲三は次の日、この「山の家」を訪ねました。

私は翌朝家の前からバスに乗って久木野に向かい、竹下橋下車、近道をとって急坂を登っていった。……その戸をたたいた。たたきながら「しまった」と独語した。自分はいま明らかに不時の闖入者だ。これは世田谷の森の生活の鉄則を忘却した行為だ。私は深く恥じた²¹。

新しく設けられたこの「山の家」の仕事場で書かれた可能性もある、「亡命」と題された短文を、道子は『熊日』に寄稿します。次は、四月二九日の六面に掲載されたその文の書き出しの部分です。

故あって、この春は逃亡行の春だった。

合間に「水俣病に対する企業の責任——チッソの不法行為」というむずかしい論文を、学者さんたちと共同執筆するための研究会や、「水俣病を告発する会」の例会や、「高群逸枝雑誌」の二人会議に出没していたから、シッポを出して歩く狸のようなものである。

『熊日』に「亡命」が掲載された翌月の五月二〇日、道子は、憲三に手紙を書きます。緊迫した様子が、そこには綴られていました。このときの道子の心情がよく表われています。長くなりますが、断片的に以下に、引用します。

体力も気力も限界にきています。……毎晩徹夜で人の相手をしたり手紙をかいたり。水俣病がひとつの極点にきているので、もう私も、自分では手のつけられないモノに化身してしまって……母がねむらない私をオロオロしてみにきます。……

急速に歯車がまわり出し、すべての小状況、大状況に対して、無限の違和感を重くひきずっていますが（人間関係、）、自分の感懐を点検するゆとりはいま皆無です。……無名の人々の魂魄に立ちあうには、自分も一無名者にならねばならぬとだけおもい

ます。私にいま出来るのは皆さんの雑用だけです。……

ご遺言状のことで(裁判のきめ手)、また、東京基地をつくるため仲間と出京します。

二十五日ごろ「補償処理委員会」の結論が出されるでしょう。

……どうかおねがいですから、逸枝雑誌は、村上さんと河野さんのお原稿でお出し下さるようおねがいたします。(この度は、)東京に行ったら、どのようになるか判断つきかね、期限のお約束、安易にできませんのです。あるいは、告発の会の巻きぞえでタイホ、などありえますのです。……

……森の家のまぼろしをみながら、出発いたします。……²²

この手紙を書き終えた道子は、前年に渡辺京二が呼びかけて熊本市内に発足していた「水俣病を告発する会」のメンバーや水俣病の患者らとともに、厚生省の補償処理委員会の会場へ乗り込むために、逮捕されることを覚悟のうえで、東京に向かいました。道子は、その「処理」の様子を、こう書きます。

昭和四五年五月末〈水俣病補償処理委員会〉(座長・千種達夫)は、厚生省に患者代表とチッソ首脳を呼び、死者最高四百万円(実質は三百万前後)で、公式に認定されている患者たちの大半を、文字どおり、〈処理〉し去った²³。

道子の上京により、創刊号(一九六八年一〇月)に第一回を掲載して以来、休むことなく連載されてきていた「最後の人」が、第七号(一九七〇年四月)掲載の第七回を最後に途切れます。第八号(一九七〇年七月)は、村上信彦の「高群逸枝の柳田国男5」と河野信子の「現代の喪失『女性の歴史』覚書2」で構成され、加えて、道子の穴を埋めるかのように、憲三の「題未定——わが終末期」の第一回が登場するのです。

東京から帰ると、ただちに道子は、憲三を訪ねたものと思われます。七月五日の憲三の「共用日記」には、次のようなことが書き込まれています。

10時—12時 Mさんと話す。非常な仕合せであった。高群雑誌についてある了解。朝から原稿書き(さびしい風の日です)²⁴。

「仕合せであった」理由も、「ある了解」についても、不明です。しかしこのとき、憲三の体調がさらに衰えを見せ、自死さえ考えていたことは確かですので、そのことと、何か関係があったのかもしれませんが。憲三は、道子が訪れる数日前に発刊された『高群逸枝雑誌』第八号に掲載された「題未定——わが終末期」のなかで、このようなことを書いています。

「私は昨年の三月から感冒のため臥床がちとなり、そのうちかぜはとれたが全身の神経炎らしい極度の不快感を覚え、その日の天候によって心身の乱調が顕著に知覚されるようになった」²⁵。そして、こうも告白するのです。

私はできるだけ長生きしたいと希望しているのではないのだ。売薬を利用したり病院にいったりするの、当面の“肉体的苦痛”からのがれたいためである。じつをいえば私はいつも死を欲しているのである。それもはっきりいえば自然死ではなくて自死

なのだ。私一個にのこされた仕事があるから、つまり「まだ生きている」のだ²⁶。

一方、らいてうの体調も芳しくなく、このような内容の手紙が、憲三のもとに届きました。「……まだ自伝もなかなか書き上がりませんが、老齢のため手術は出来ないものらしく、気長に治療をする覚悟をしております。〈渋谷区千駄ヶ谷 代々木病院より〉」²⁷。それに対して憲三は、一二月一二日に、「平塚さんにおみまい状（代々木病院三階病棟）」²⁸を書いています。そして、年が明けた一九七一年（昭和四六）年五月二四日、らいてうはその人生に幕を閉じます。次は、二日後の二六日の「共用日記」からの引用です。

平塚らいてうさん逝去。24日午後10時36分。本日の朝日新聞で妹よりつたえられ驚く。故人の霊前に報告とともに霊位をまつり白いバラを捧げ冥福を祈る。／弔電のあと、弔文を敦史明生〔曙生〕さんあてに書き、香奠をおくる。山上²⁹。

続く、五月三〇日の「共用日記」には、「らいてうさん葬送の日。遙拝」³⁰の文字が記されています。かくして平塚らいてうが亡くなったことにより、すでに先立って富本一枝も黄泉の客となっており、本論で扱っている火の国の女たち（高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子）と、青鞨の女たち（平塚らいてうや富本一枝ら）との友愛は、実質的にここに終焉したのでした。

この間、一九七〇（昭和四五）年四月一日刊行の『高群逸枝雑誌』第七号に掲載された「最後の人 第七回 序章 森の家日記7」を最後に、道子の「最後の人」の執筆が止まりました。次は、一九七一年（昭和四六）年一〇月二七日の憲三の「共用日記」からの引用です。

午後Mさんみえる。一昨日東京から帰ったと。信州そばにゆく。／『苦海浄土』第二部のこと。／自叙伝のこと。その他。／高群評伝のために、これから定期的に私の聞書をテープにとること。談話——ニュース多岐にわたる。十五日までに高群雑誌原稿を書く³¹。

「十五日までに高群雑誌原稿を書く」というのは、翌年（一九七二年）一月一日発刊予定の『高群逸枝雑誌』第一四号に掲載する「最後の人 第八回 序章 森の家日記8」の原稿を「一十一月一五日までに」書くという意味でしょう。これは、「最後の人」の執筆再開を意味します。しかし、「最後の人 第八回 序章 森の家日記8」を書き上げるや、再び、執筆が止まります。続く「最後の人 第九回 序章 森の家日記9」が『高群逸枝雑誌』に登場するのは、一九七三年（昭和四七）年一月一日刊行の第一八号です。この間道子は、再び水俣病闘争に身を投じることになるのです。

二度にわたる「最後の人」の休載と、道子にとっての水俣病闘争は、完全に時期的に重なります。一九六九年一月の『苦海浄土 わが水俣病』の刊行から一九七〇年五月の「補償処理委員会」の粉砕を目指しての上京までを第一幕としますと、第二幕は、新認定患者の川本輝夫らがチッソとの自主交渉闘争を開始する、この年（一九七一年）の一〇月から、水俣病裁判にかかわって熊本地裁で判決が下される一九七三年（昭和四八）年三月までということになります。

人口約五万人の水俣で、およそその一割以上がチッソの従業員であつたり関係者であつたりする、いわゆる企業城下町にあって、事を荒立てることなく、政府の示す調停案を受け入れようとする一任派の存在もありました。その一方で、加害企業の責任を問い、被害者の救済と補償を、司法の判断にゆだねて希望をつなごうとする訴訟派の人たちもいました。しかし、また別のグループの動きもありました。すでに亡くなった人たちや、いま生きて死者のごとき存在にある人たちは、自分の口で自分の苦しみや悲しみを訴えることはできません。もとより法廷はこうした吐血した魂魄の表現の場ではなく、たとえ裁判において勝訴したとしても、この無念さは、誰の胸に伝わることもなく、血と地に埋もれて残ることになります。その心を代弁して、責任企業であるチッソの経営者に直接訴えかけ、誠意ある謝罪と補償を引き出そうとする活動家やそれを支援する義人はいないのか——。さらには、死者の霊を慰めるために文を書く文学者や、映画や写真でもってそれを表現する映像作家はいないのか——。加えて、この病は、単に一企業の犯罪的行為がもたらした結果というだけに止まらず、日本の近代化の過程に忌まわしくも宿る、生産至上主義や利益至上主義の副産物でもあり、それを問おうとする批評家や学者はいないのか——。水俣病の病理は深く、こうした設問に対しての納得ゆく解答がない限り、この事件に幕を引くことはできない——。一方の裁判闘争に期待を寄せながらも、他方で、こうした独自の考えのもとに、ある種衝動的に、そして衝撃的に立ち上がったのが、自主交渉闘争に参加した患者や文化人たちであり、そして、多くのその支援者たちでした。石牟礼道子の姿も、この集団のなかにありました。

一九七一（昭和四六）年一〇月六日、熊本県は、川本輝夫ら一六名を水俣病患者に認定します。十一月一日、「いよいよ新認定患者（以後川本派、ないし、自主交渉派とよばれる）グループ一八世帯、チッソ水俣工場正門前（鹿児島本線水俣駅前）座り込み」³²。しかし、当事者能力のない工場を相手では真の交渉とはなりえず、一二月六日、自主交渉派は、東京の丸の内にあるチッソ本社前に陣取りました。それより二日後の八日、社長との会談が実現します。直接社長に自分たちの要求を認めさせようとする自主交渉派と、政府の中央公害審議会の指示に従おうとする会社側とのあいだには、大きな立場の開きがありました。以下は、川本輝夫と社長が交わした、そのときの会話の一部です。

川本 ……わしゃ今日は、血書書こうとおもうて、カミソリもって来た。

社長 （息をひくようなかすかな声） え？

川本 血書を書く、血書を。要求書の血書を。

社長 ！……

川本 あんたはそして、わしの小指を切んなっせ、ほら。

社長 ……

川本 その返答はわしが……あんた、社長の指もわしが切る、いっしょに。

社長 いや、それはごかんべんを³³。

日はとつくに暮れていました。十数時間に及ぶ話し合いも、患者側の要求は受け入れられず、社長は担架で運ばれる結末となりました。以降、年越しの座り込みが続きます。道子はそれを、こう描写します。

遠くところに昏れる雪景色をふり払い、わたくしは起きて、ふたたび路上に寝ているものたちの姿をまじまじとみる。

「こうなればもう、東京乞食じゃなあ」

なぜそのようにいうとき、こうもはればれと互いの顔がまぶしいのか。

……よろばいいでここに辿りきたったものたちと、これに相寄り殉ずる無名者たちの集団。……そのような景色の上に照る一九七一年大晦日から一九七二年への、まだ明けやらぬ元旦東都の月。

丸の内東京ビル、チッソ本社前。……あまねく全身をうち晒してその底にねむるものたちが、こころの中の渚に打ちあがり、ひくひくと地の霊のごときものに化身しようとして、元旦の満月とまみえていた³⁴。

こうして川本派による自主交渉闘争は、次の一九七二（昭和四七）年へと持ち越されてゆきました。そうしたなか、道子の視力低下は、限界にまで達していたようです。この年の六月二二日の「共用日記」には、「石牟礼さんから手術直前のたより。15日。あと2年生きるために手術と（順天堂病院眼科）」³⁵と、書かれてあります。道子の祖母の「おもかさま」も失明していました。道子も、そうなる不安を抱き、手術に臨んだものと思われます。おそらく手術はうまくゆき、何とかそれ以上の進行を食い止めることができたにちがいありません。それから四箇月の月日が流れ、今度は水俣病の闘いにとっての、大きな朗報がもたらされました。一〇月一五日の『熊日』の朝刊は、一面トップで、こう伝えたのでした。

四大公害訴訟をしめくくる水俣病裁判は十四日結審、来年三月に予定されている判決を待つばかりとなった。公害の恐ろしさと悲惨さを法廷で思い切り訴え、チッソへの恨みをぶつけた原告の患者家族、全国の支援団体の人たちは「これからが公害追放の真の闘いだ」と決意を新たにしている。患者たちは近く東京のチッソ本社に出向き、「即刻、原告の要求に応ぜよ」と迫る一方、水俣病裁判の報告キャラバンやチッソ糾弾の署名運動を全国的に展開する。判決での完全勝訴を目ざすのはもちろん、公害の原点だった“ミナマタ”を、公害絶滅の原点にしようという決意も高まった。

この日の紙面の九面に目を移しますと、道子の寄稿文「魚に曳かれて」が掲載されています。そのなかで道子は、末尾の一節を、このように締めくくりました。

窓の外に秋がかなしくて頭の芯がうずいた。ずうっと前に、この夫婦とこんな話をした。

「なして、水俣の茂道あたりにおいでなりました？」

「わしゃ熊本近辺の人間で料理屋しよったけん、水俣の魚がおいしゅうして、水俣の魚に曳かれて、魚食いにな」

爺さまがそういうと、婆さまがにこにこっとさしうつむき、ちいさな声でこう言ったのだ。

「なんの、わたしが昔、あんまりよかおなごだったけん、わたしにひかれて来なはっ

たとばい」

次の年（一九七三年）の三月、熊本地裁で水俣病訴訟（第一次訴訟）に判決が下り、原告が勝訴します。その後、訴訟派と自主交渉派は合流し「水俣病東京交渉団」を結成すると、東京本社でチッソとの交渉を開始し、七月、「補償協定書」に調印するに至り、この時期激化した水俣病闘争が、事実上の終焉を迎えました。こうして、道子にとっての水俣病闘争第二幕も、ここにその幕を降ろすのでした。次の一節は、道子の「まだ灯らぬ闇の中から」から引いたものです。

水俣病裁判の判決が出たあとの訴訟派と、それを待機していたチッソ本社内の自主交渉派が合同して行った東京チッソ本社での交渉が、最後のつめにはいったときからわたしは帰郷し、ほとんど外に出なくなった。

高群逸枝さんの故事にならい、積極的な意思で外部を遮断し、残された仕事を仕上げるためでもある。予定の仕事と残りの命をくらべると、人いちばいスローモーションの私は、世間との義理もおつきあいもひたすらごじたいして、だれにも逢わずにとじこもってしまっても、仕事を残したまんま、死んでしまうことになる³⁶。

このときの道子は、おそらく、「世間との義理もおつきあいもひたすらごじたいして」執筆に専念した結果でしょうか、実に多産な仕事ぶりを発揮します。闘争資金の捻出のために企画された、道子を編著者とする『水俣病闘争 わが死民』（現代評論社、一九七二年四月）に続いてこの時期、闘争にかかわる初出原稿を集成した『流民の都』（大和書房、一九七三年三月）、『苦海浄土』の第三部となる『天の魚』（筑摩書房、一九七四年一〇月）、さらに加えて、自身の過酷な出自と育ちを語った論集である『潮の日録 石牟礼道子初期散文』（葦書房、一九七四年一二月）を上梓するのです。

またこのとき、道子は、雑誌の刊行にも乗り出します。一九七三（昭和四八）年の秋、水俣病闘争の同志であった松浦豊俊と渡辺京二とともに編集兼発行人となって季刊誌『暗河』を創刊するのです。この号の「編集後記」に、このような道子の言葉があります。

＊このような異常世界が、日常と化してしまつては、わたくしたちがついこのあいだまで、たしかに持っていた筈の、あの当たり前の「日常」というものの原型はもう、見ることが出来なくなるのかもしれませんが。……お月さまの光の下、山野の吐く息づかいのような雑誌になれば、と思っています³⁷。

また、渡辺京二は、こう書き記します。

創刊号の執筆者は石牟礼・赤崎・石本の三氏が水俣市、三原氏が福岡市に在住する以外はみな熊本市の住人である。……私は七年前に「熊本風土記」という雑誌を出して十二号にして休刊にいたらしめた前科者である。……ただ私は、「風土記」の中心的な書き手であった石牟礼・松浦・上村の各兄弟の力作が「暗河」創刊号の誌面の中心となっていることに、やや心なぐさめられる思いがする³⁸。

かくして道子は、水俣病訴訟の判決言い渡しを境として、一九七三（昭和四七）年以降、新たな文筆活動の道へと入ってゆくのでした。

三. 石牟礼道子の「最後の人」の執筆再開と橋本憲三の健康悪化

それでは、この時期の道子の暮らしと仕事のありようは、どのようなものだったのでしょうか。道子は、このように書いています。

いま自分の家と、秘密の仕事場の間を往き来するばかり、活字だけでわずかにこの世への片道通信を発しているわたしのことを、家のものたちは、半ばあわれがり、

「おるげのもぐら殿」

とか、「もぐら女」などという。じっさい、おてんとうさまに当たると、光やかな風がまぶしすぎて、水晶体のないまなこがくらみ、心臓がいかれてしまい、掘り出されたオケラのようなあんばいである³⁹。

それでは、仕事の方は、どうでしょうか。

もっとくだいていえば、この世に不幸福感を持っている魂の歴史を自分のものにして、自分もそのなかにいま生きている意味を、納得したい、というのが、そろそろ、ものを書き出した十代の頃からの気持ちだった⁴⁰。

この初心が、一九七三（昭和四八）年に、一気に開花してゆきます。この年、「椿の海の記」の第一回を『文芸展望』の創刊号に、そして「西南役伝説」の第一回を『暗河』の創刊号に発表し、連載がはじまるのです。両作品ともに、「この世に不幸福感を持っている魂の歴史」を叙述するもので、前者は自分自身の、後者は下層の人びとの魂を扱っていました。そしてこのとき、もうひとつ、道子の胸を占めている、強い思いがありました。

水俣病問題にかかわっていて、おくれた主要なテーマはいまひとつあり、それは、わが国だけでなく、世界のなかでも今までかえりみられなかった「女性の歴史」をはじめて書いた詩人高群逸枝の評伝を書きたいことである。……

彼女へのわたしの関心は、その業績にふれるには、あまりに無学、晩学で、これから勉強しなければならないけれど、水俣病にかかわっているうち、最初の予定にはなかった左眼の失明や、残りの視力もおぼつかないので、それには触れられそうもない。それより彼女の仕事に一貫しているこの世への愛や、その裏にある深い孤独や、詩人の魂ともいうべきものに、近づきたいと思っている。とはいえ、私の視力は時間の問題なので……本当は書ける日があるのかどうかおぼつかない⁴¹。

「本当は書ける日があるのかどうかおぼつかない」と語る道子でしたが、「この世への愛や、その裏にある深い孤独や、詩人の魂ともいうべきものに、近づきたい」という思い

が、道子の背中を強く押したのでしょうか、途絶えていた「最後の人」の執筆再開がここにはじまります。一九七三（昭和四八）年一月一日刊行の『高群逸枝雑誌』の第一八号に「最後の人 第九回 序章 森の家日記9」が登場し、ちょうど一年後の第二二号に「最後の人 第十回 第一章 残像1」が掲載されると、それ以降、「『恋愛論』解説 高群逸枝のまなざし」を掲載した第三〇号を除いて、憲三が亡くなる年（一九七六年）に発刊される第三一号の「最後の人 第十八回 第四章 川霧1」まで、休むことなく連載は続いてゆくことになるのです。事実上、これで『高群逸枝雑誌』は廃刊となります。

一方の憲三は、その間、どのような生活を送っていたのでしょうか。妹の静子は、こう回想しています。

憲三は東京の仕事の後片付けをすませ、水俣の姉妹のところへ引き越して来ましたが、窮鳥を待ち構えた姉フジノの懐へは入らず、自分の家を売却した金の一部で姉の屋敷内に二階建を造り、一階と二階半分を姉の店の倉庫に貸し、家賃と自分の食事代を相殺させてけじめをつけました⁴²。

おそらく「森の家」の本や屋敷を処分した代金は、水俣で憲三が住む二階建ての家の建設と、逸枝の墓廟の造営と、加えて『高群逸枝雑誌』の刊行の費用に使われたものと思われます。外国旅行はおろか国内旅行さえも楽しむわけではなく、かといって美酒や美食に打ち興じるわけでもなく、極めてつましい生活ぶりだったようです。この二階半分の居室で憲三は、ときには道子を加えて『高群逸枝雑誌』の編集作業を行ない、窓から見える、秋葉山の中腹に建立した妻の墓碑に手をあわせては、日々、ありし日の逸枝の面影に心を寄せていたにちがいません。

建物の外回りの階段や、母屋と建物のあいだに茂る庭木については、道子がこう語ります。

東京の森の家とくらべたら、寝るだけの部屋の、卒然たるリアリズムなんですよ。地上からこの二階に通じる露台というか、階段が建物の外にあります。……森の家の樹木群には及ぶべくもありませんが、あの森の樹々のたたずまいをいたく恋いしたっている静子が、それを再現すべく願望して、心をくだいていて、松や梅や榎の間に、もちの木、いすの木、百日紅、楓、寒椿、八つ手、ゆすらうめ、南天、すすき、すずらん、バラ、彼岸花などが育っています⁴³。

加えて、この時期の憲三の執筆と健康の状態についても見てみたいと思います。道子の「最後の人」の連載再開とあたかも入れ替わるかのように、これまで『高群逸枝雑誌』に連載されてきた憲三の「題未定——わが終末記」は、一九七二（昭和四七）年七月一日刊行の第一六号に掲載された第九回をもって休載となります。連載開始の時期から比べて、さらに体力や気力が衰えてきたようです。その号の巻末の「編集室メモ」に、そのことがよく現われています。

私は前号の終末期の原稿をベッドの上で書いているとき鼻から血を出した。はじめ気

分が悪くなり、次の瞬間、「ふいに思考がふっ切られ、目が見えなくなり、頭の中にモヤのようなものが立ちこめ、鼻から赤い血がぽたぽたと紙の上に落ちてきた」のである。……こういった中で、15号はかなりの編集ミスをおかした。発送は他の援助にあずかった。現在は小康状態⁴⁴。

それから一年が立った一九七三（昭和四八）年八月三日の「共用日記」には、「突然、尿の排出がわるくなり、下腹部張る。午後5時ころ上田病院に静子とゆく。前立腺肥大にて手術（入院を要す）」⁴⁵との記述があります。八月七日「市立病院にゆく。（上田病院の紹介をもって）。静子と」⁴⁶。続く八月一三日「市立病院に入院。精密検査はじまる」⁴⁷。半月後の八月二八日、「十時すぎ一時退院で帰宅。21号編集にかかり、早速第一便原稿を下田印刷に送る。夜になり、あとのもの全部おわり、投函する」⁴⁸。

四．高群逸枝巡礼者たちの水俣訪問と橋本憲三の最晩年の失意

憲三が「森の家」を離れ、帰郷した水俣の地で『高群逸枝雑誌』を発刊すると、美しい花に引き寄せられるチョウのように、多くのたよりが舞い込み、一方で、大学の学生や教員たちがしばしば訪ねてくるようになりました。しかし、必ずしも、歓迎されるべき訪問者たちばかりではありませんでした。この手術を挟んで、その前年から亡くなるまでの約四年間、憲三は、身体的のみならず、精神的にも大きな困苦を抱えてゆきます。主としてそれは、この時期の外部からの高群逸枝巡礼者たちによってもたらされました。

連載最後となる「題未定——わが終末記 第九回」が掲載された『高群逸枝雑誌』（第一六号）の発行から四箇月が立った、一九七二（昭和四七）年十一月一日、詩人の秋山清が、自宅を訪ねてきました。このことにつきましては、次の年（一九七三年）の六月に思想の科学社から上梓されます、秋山の『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』に詳しく、そこからの引用をもって、構成したいと思います。

「橋本さんはいますか」

「どなたですか、身体がわるくてあまり人と会わんようにしているのだが——」

と機嫌のよくなさそうな返事の後で、彼は部屋の中の寝台から起き上がる気配だった。私が名をいって紹介状を差し出すと、彼の気むずかしい顔もいくらか和らぐかに見えた⁴⁹。

憲三は、以前秋山が『日本読書新聞』に書いていた自叙伝「小組のへそ」を読んでおり、そのことや渋谷定輔の『農民哀史』のことなどが話題になり、いよいよ本題に入ります。秋山は「『高群逸枝全集』から何故に、アナキズムの立場から書いた多くの論説が脱落させられたか、それを敢えてしたのは、本人の意思か、本屋の要求か、橋本憲三自身の意向によるものか」⁵⁰を、遠慮することなく憲三に問いました。それに対して憲三は、概略このように答えました。「あれらを書いた時期、まだ彼女は未熟だった。本人も自分のその頃書いたものをそのように見ていたらしく思う。それらしいことが『火の国の女の日記』にも書かれてあったと思う。要するにそれから以降の研究が主ですから」⁵¹。この返

事は、「現在高群逸枝に集まっている強い注目の中には、あの頃の論説を重く見ているところからのもの」⁵²に起因しているものもあるのではないかと確信する秋山を必ずしも満足させるものではなく、さらに秋山の質問が続きます。「『婦人戦線』の諸論文、『女人芸術』誌上のマルキシズムとの文学論争、さらにはそれ以前の、たとえば『婦人公論』誌上で山川菊栄ととり交わした恋愛論争などを、単行本として刊行するか、全集の別冊としてでも出すことはどうか。私はそれをすすめますよ」⁵³。この提案に対して憲三の反応はこうでした。「いや、私は肥後モッコスですから、一度きめたことは——」⁵⁴。「何が肥後モッコスだ！」——出そうになった言葉を自身で引き取りました。秋山の真意は、「昭和三、四、五、六年ごろ、アナキズムを抛りどころとして展開した高群逸枝の論争、主張、啓蒙などの活動が、未熟な時期であった、という主観的な判断から、その人の生涯の業績の中でオミットされていいものか、ということ」⁵⁵でした。帰り際、憲三は秋山に、『高群逸枝雑誌』に何か寄稿するように示唆したようです。それを受けて、翌年（一九七三年）の二月一七日、秋山は、憲三に宛てた手紙という形式をとり、採否は一任するとしうえで、「全集の編集にたいする私の不審や疑問について、率直に問いただす文章を送った」⁵⁶のでした。長文です。一言に要約するとその内容は、「全集」と称しながら、なにゆえに、とりわけ逸枝自身が編集者として責任をもつ『婦人戦線』に書いたアナキズムを抛り所とした彼女の論文が、未熟な時期に書かれたものであったという理由から削除されたのか、その正当性を全集の編集者である憲三に直接問い、それら一連の論考のもつ歴史的重要性を指摘するものでした。さっそく憲三は、二月二一日にその返信をしたためます。

お原稿一読しました。結論から申しまして、これは取捨をおまかせくださった寛大なお心にあまえてご指示どおり急ぎ返送させていただきたいと思います。

原稿には私と見解を異にするとところがあまりに多く、私が責任者となっている雑誌に掲載することでお説を私が認めたと誤解されることをさけないのです。ご了承をお願いします⁵⁷。

それでは、この返信のなかで憲三が書いている「私と見解」とは、どのようなものだったのでしょうか。さかのぼること七年前の一九六六（昭和四一）年、「森の家」で全集の編集と校正に精を出していたとき、同居していた道子に、憲三はこう自身の考えを開陳しています。

全集とは何でしょうね。全集をどう規定するか。選集という形もあるでしょう。ある基準でいえば、彼女の全集はこの二倍でも足りないくらいです。全集を出す意味について僕は彼女と対話するのです。

つまり彼女のみていた真理、この真理でもって、彼女は孤絶したこの家の外の世界に貢献したといえはいえる。それに到達するまでの、彼女にいわせれば紙クズ。彼女によって否定されたものを全集にとりあげることは、彼女をはずかしめ、僕もはずかしめを受ける。これは僕の法治主義です⁵⁸。

憲三の立場に立てば、女性史学という学問の存在にかかわる啓示に先導されて、つまりは、すべからく人類が到達しなければならないひとつの大きな真理に導かれて、自身の大衆運動の戦線に幕を閉じ、いっさいの来客を断って「森の家」の書斎に独り恒久に蟄居した、まさしくそのときこそが、高群逸枝が学者として蘇生復活する瞬間であり、それ以前に彼女の身辺にみられたものは、そのために必要とされた、いわば産湯の残り湯であり、使用済みの布切れであり、これを全集に所収することは、清が濁によって、つまりは、清書された玉稿が書き散らされただけの紙クズによって混濁させられることを意味し、それを認めれば、「彼女をはずかしめ、僕もはずかしめを受ける」ということになるのでしょう。これが、編集者としての高群逸枝の業績についての評価であり、全集編集の方針となるものでした。しかし、そうした思いは、アナキズムに関する論考が全集から欠落していることに不満を示す秋山には理解してもらえず、その手紙から四箇月後の六月、秋山の『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』が世に出るのでした。それをおそらく見たであろう憲三が、そのとき、いかなる心的状況に立ち入ったのかは、裏づける資料もなく、想像するしかありません。

秋山清に続いて、水俣の憲三を訪ねてきたのは、作家の瀬戸内晴美でした。憲三の「共用日記」によりますと、この年（一九七三年）の二月一日、「午後八時三十分ー10時50分、瀬戸内さん、村上彩子さん（筑摩書房）とみえる。石牟礼さん同道」⁵⁹。翌二日、「午前一一時、瀬戸内さん村上さん、Mさん。瀬戸内さんお墓まいりしてくださった。紅梅白梅がさいていたと。室にいらず、そのまま水俣駅へ（庭で静子あう）」⁶⁰。瀬戸内は、そのときはじめて会った憲三の印象にかかわって、このように書いています。

水俣の静子さんのお宅の片隅の倉庫の二階に独り棲いをしていられた憲三氏は、想像していたより若々しく、写真で見るとよりスマートで、どこことなく粹でハイカラな老人であった。

物静かだが愛想がよく、どんな不躰な質問にも積極的に答えてくれた。

……私が望むなら、どこまでも私の取材に協力しようという姿勢を見せて下さった

⁶¹。

この一文に続けて瀬戸内は、「私はまだ逸枝の伝記を書くまでの準備は出来ていないし、憲三氏と逸枝の愛のかたちを知りたかったので、憲三氏の好意にあふれた申し出にも、すぐに飛びついていかなかった」⁶²と、書きます。もしそうであれば、瀬戸内の水俣訪問の目的は、一体何だったのでしょ。うか。このとき筑摩書房の村上彩子が同伴していることや、その五箇月後に「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」が筑摩書房発刊の文芸雑誌である『文芸展望』に登場することから推し量れば、やはりこのときの訪問は、逸枝と憲三の伝記を書くに当たっての事前の了解をとるためだったのではないかと思われる。実際のところ、ちょうどこのとき、季刊誌となる『文芸展望』の創刊が迫っていました。四月の創刊号には、石牟礼道子の「椿の海の記」の第一回が掲載されて、連載がはじまります。そして、次の七月刊行の第二号に、瀬戸内晴美の「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」が掲載され、これまた連載が進んでゆくのです。このようにして、これからはばらぐのあいだ、道子の「椿の海の記」と瀬戸内の「日月ふたり」のふたつの作品

が、『文芸展望』を舞台にして共演することになるのです。

続く「日月ふたり（第二回）——高群逸枝・橋本憲三——」は、一〇月発売の第三号にその姿を現わし、第四号は休載となりました。問題が起こったのは、年が変わった一九七四（昭和四九）年の三月のことでした。「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」が掲載された、四月に発売予定の第五号の見本誌が、筑摩書房の村上彩子から事前に送られてきたとき、それを見るや、ついに憲三の堪忍袋の緒が切れてしまったのです。一九七四（昭和四九）年の憲三の「共用日記」には、このように書かれています。

三月二六日「文芸展望5、村上彩子さんからとどく（筑摩書房）。瀬戸内氏『日月ふたり』3、掲載」。

三月二八日「瀬戸内氏にははじめて手紙をかく」⁶³。

「日月ふたり」の第三回を読んだ憲三は、このときはじめて瀬戸内に手紙を書きました。前年夏の手術以降も、相変わらず憲三の体調はすぐれなかったようです。おそらくこの時期、ベッドに臥すことが多い日々を送っていたにちがいありません。「この写しはあなたに参考にしていただこうと、氣息えんえんながら起きて書いたものです。雑誌にいつかのせる気になるかも知れないとの潜在意識もあったらしくて」⁶⁴と書き添えて、憲三は、この手紙のコピーを道子に託します。疑うことなくこれは、憲三から道子に手渡された遺言書に近いものでした。実際この手紙は、『高群雑誌』終刊号（第三二号）において公開されます。『高群逸枝雑誌』は、憲三の死去に伴い第三一号をもって自動的に事実上の廃刊となっていたのですが、この『高群雑誌』終刊号（第三二号）は、万やむを得ず、没後四年が立った一九八〇年一二月に発刊され、「もろさわよう子様へ」と「瀬戸内晴美様への手紙」と題されたふたつの手紙文を含むことになります。「もろさわよう子様へ」は、静子を書いたもので、全体としてその文は、もろさわようこが執筆した「高群逸枝」（集英社刊の『近代日本の女性史』に所収）に対して幾多の誤認を指摘する内容となっています。一方の「瀬戸内晴美様への手紙」は、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」にかかわる誤謬が憲三本人の手によって詳細に指摘されたもので、生前道子が憲三から預かっていた瀬戸内宛ての手紙の写しです。まさに『高群雑誌』終刊号（第三二号）は、無念の思いでもって橋本静子と石牟礼道子が編著者となって公刊した、逸枝と憲三の名誉を毀損するこれまでに発表された文章に対しての遺族側からの反論ないしは抗議の場となっていたのです。

それではまず、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」には、どのようなことが書かれてあったのかを見てみたいと思います。憲三の瀬戸内宛ての反駁の手紙は、手紙としては実に長大なもので、そのなかで、「……というのはちがいます」「……混同ではないでしょうか」「……といったおぼえはありません」「……のことは私はしりません」「……全く考えられないことです」などといった表現を使って、幾つもの誤謬を指摘するのですが、そのうちの最大の核心部分は、『婦人戦線』のころの同人であった松本正枝が、逸枝の恋人が自分の夫の延島英一であったことを、聞き手の瀬戸内晴美に語る、次の場面でした。

逸枝の印象を訊くと、

「そうですねえ」

と、ちょっと遠い所を見る目つきをして、

「とにかく変わった人でしたから」

といい、口辺に微笑とも苦笑ともとれる笑いを浮かべながら、

「あの人はアナーキストでしたからね……恋愛もアナーキーに実践なさいましたよ」

という。

「ということは、橋本さんの他に恋人がいたということでしょうか」

「ええ、アナーキーな恋ですから」

「その頃の恋の相手の方を御存じでいらっしゃいますか」

正枝さんは、小さな肩をちょっと落とすようにして、ふっと座を立つと部屋を出ていった。玄関のつきあたりにあった炊事場でお湯をわかしてきた薬かんをさげてほどなく部屋にもどってきた人は、白い柔和な表情で、またふっと軽く微笑して坐りながらさりりといつてのけた。

「存じておりますとも」

さっきの話のつづきのつもりらしい。

「うちの主人でしたから」⁶⁵

逸枝を中心とする無産婦人芸術連盟が結成されたのは、一九三〇（昭和五）年の一月でした。構成員は、伊福部敬子、神谷静子、城しづか、住井すゑ子、高群逸枝、野副ますぐり、野村考子、平塚らいてう、二神英子、碧静江、松本正枝、望月百合子、八木秋子、鑑田貞子の一四名。そして、続く三月に、この結社の機関誌となる『婦人戦線』が創刊され、それは、翌年（一九三一年）六月刊行の第二巻第六号まで続きます。この間、松本正枝もこの雑誌に論考を寄稿しますが、瀬戸内に宛てた手紙のなかで憲三は、「松本さんの『婦人戦線』論文はほとんど（あるいは全部）延島さんの代筆。たぶん住井すゑさんはご存知でしょう」⁶⁶と書いていますので、松本正枝はこの雑誌の活動にほとんど加わっておらず、実質的には、夫の延島英一が関与していたことになります。これが、『婦人戦線』を巡るおおかたの環境でした。そして四〇年以上が経過したこの時期に至って、松本正枝は、逸枝と自分の夫の延島がその当時恋人関係にあったことを瀬戸内に暴露したのです。

それでは次に、それに対して憲三は、手紙のなかで、どう反論したのでしょうか、それを見てみたいと思います。「あの人はアナーキストでしたからね……恋愛もアナーキーに実践なさいましたよ」という語句については、「事実は全く正反対。恋愛論においても。実践において」⁶⁷と主張し、「ということは、橋本さんの他に恋人がいたということでしょうか」という発語については、「現在の私、次号を読まない私には、『恋人』の語は適当とは思われません。強いて考えれば、表層的擬恋の状況とでもいうものではないかと思われるのです」⁶⁸と、切り返します。逸枝と延島は、『婦人戦線』を通して、ともにアナーキストとして思想的に共感しあう間柄でした。瀬戸内の問いかけに、松本はそれを「アナーキーな恋」と表現し、一方の憲三は、「表層的擬恋の状況」という言葉で表わします。

さてそれでは、本当のところ、逸枝と英一の関係はどのようなものだったのでしょうか。それを解き明かす証拠となる一次資料、たとえば、双方の当時の日記や書簡類が残されてい

ないようですので、断定することはできません。それにしてもなぜ、どのような事情があつて松本正枝という女性は、真偽は別として、かくも簡単に自分の夫の過去の品行を他人に打ち明けたのでしょうか⁶⁹。他方、それにしてもなぜ、どのような判断があつて瀬戸内晴美という作家は、必ずしも真実とは限らない正枝の発話をそのまま信じて、自分の文にやすやすと取り入れたのでしょうか⁷⁰。

瀬戸内自身、正枝をこう評価していますので、以下に引用します。

正枝さんの話し方は決して逸枝さんと夫との情事を非難しているふうではなく、過去の事実として語っているという感じを受けたし、高群逸枝という天才女人の多面的な性格の説明にはなっても、逸枝の人格の瑕瑾として感じるような話し方ではなかった。

ユーモラスで皮肉なことを、全く飄々として顔でいつてのけるのは、この人の天性のものか、晩年身につけたものかわからなかったが、私には好感が持てた⁷¹。

瀬戸内は、はっきりと、ここで「情事」という言葉を使って、逸枝と延島を断定しています。明らかに瀬戸内は、事前に憲三に確かめることも、何か別の資料に当たることもなく、ひたすら正枝の語りに好感を寄せているのです。つまり、伝記執筆に必要とされる、事象にかかわるクロス・チェックがなされていないのです。一方、憲三にとって、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」は、自分の認識とは程遠い記述が至る所で散見される内容となっており、憲三はこの文を、ペンが剣に変貌した一種の凶器として、心身が震える思いで受け止めたのではないかと推量されます。事実、瀬戸内に宛てたこの手紙のなかで憲三は、「このところ、雪が舞ったり、冷雨にみまわれたり、不注意で血圧が一四〇～八〇の正常からいっぺんに一八五～九六に上昇、気分がわるく、体力気力……がおとろえ、頭がふらふらしているけれども、とにかくベッドで（仰向けになつて）」⁷²書いていることを告白するのです。

その後「日月ふたり」は、第四回が、一〇月発刊の『文芸展望』第七号に掲載され、翌年（一九七五）年一月の第八号に掲載された最終回をもって、この連載は終了するのでした。この時点で終了することになった経緯について、瀬戸内はこう明かします。

「日月ふたり」を書きはじめると、憲三氏はたいそう喜ばれ、毎月懇切な批評や、誤りの訂正をして下さった。こまごましたお手紙で私にはすべて有難かった。

しかし、話が逸枝と延島英一の恋愛のことに進むと、俄然神経質になられて異常なほどしつこく、延島未亡人の正枝さんが、逸枝の手紙を秘蔵しているのではないかといつて来られた。

それまで私に示されていたのとは全くちがう憲三氏があらわれた。私は憲三氏のショックが以外でもあり、意外でもないような気がして、複雑な想いとらわれた。正枝さんから私はそういうものは見せられていないといつても、信じてもらえないようであった。……

私は正直いつて、憲三氏の次第にヒステリックになる追及をもてあまし気味になり、「日月ふたり」を書きつづける意欲を失っていった⁷³。

前述していましたが、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」を掲載した、四月発売予定の『文芸展望』第五号が筑摩書房の村上彩子から憲三のもとに送られてくるのは一九七四（昭和四九）年三月二六日のことで、憲三が瀬戸内にはじめて手紙を書くのは、その二日後の二八日でした。したがって、「『日月ふたり』を書きはじめると、憲三氏はたいそう喜ばれ、毎月懇切な批評や、誤りの訂正をして下さった。こまごましたお手紙で私にはすべて有難かった」といったような事実は、おそらくなかったものと考えられます。次に瀬戸内は、「延島未亡人の正枝さんから、逸枝の手紙を秘蔵しているのではないかと行って来られた」と書いていますが、確かにこのときの手紙で、憲三はこのことについて、こう触れています。「次号で私の知らないことで、たとえば彼女の手紙などで私にとって最悪なことを知らされるような事態になろうとも、私の信念はかわらず、かくれてみえないところにあり、私は災禍、受難ととるだろうと思います」⁷⁴。しかしながら、「俄然神経質になられて異常なほどしつこく」という瀬戸内の表現には、それ以降も数回にわたって憲三からの問い合わせが続いたことを連想させるものがありますが、その後に続く手紙類は現存していないようですので、確認することはできません。したがって、この手紙が最初で最後だった可能性もあります。

では、本当に瀬戸内は、「憲三氏の次第にヒステリックになる追及をもてあまし気味になり、『日月ふたり』を書きつづける意欲を失っていった」のでしょうか。この点をここで吟味しなければなりません。といいますのも、本人がそう語っている以上、そのことはそのとおりであるにちがいないと思われませんが、それだけが理由となって「『日月ふたり』を書きつづける意欲を失っていった」わけではないのではないかと考えられる余地が、他方で残されているからです。

瀬戸内晴美と筑摩書房の村上彩子が、はじめて憲三を水俣に訪ねたとき、石牟礼道子も立ち会っています。おそらくそのとき、憲三がつくる『高群逸枝雑誌』のことが話題になり、道子も、この雑誌に逸枝と憲三の評伝である「最後の人」を連載していることを話したにちがいません。それから一年が過ぎた一九七四（昭和四九）年の四月に、瀬戸内の「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」が『文芸展望』に登場するのですが、ちょうど同じ月に、「最後の人 第十一回 第一章 残照2」も世に出るのです。道子の「最後の人」の連載が順調に進んでいることに、このとき瀬戸内は気づいたにちがいません。ふたりは、まさしく競合するテーマで執筆しています。瀬戸内の連載回数は、いまだ三回で、道子のそれは、すでに一回を数えます。扱っている資料は、松本正枝などからの聞き取りもありますが、主に瀬戸内が利用しているのは、逸枝と憲三が著わした『火の国の女の日記』です。一方の道子は、「森の家」での憲三との同居生活の実際から「最後の人」を書き起こすという、極めて有利な立場にありました。

それとは別に、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」から五箇月後の九月、鹿野政直と堀場清子の夫婦が憲三を訪ねてきました。鹿野は、日本近代史を専門とする早稲田大学の教授で、堀場は女性史家です。ともにふたりは、逸枝の生き方と業績に共鳴していました。翌一〇月に「日月ふたり（第四回）——高群逸枝・橋本憲三——」が出た二箇月後の一二月から、いよいよ憲三と堀場清子のあいだで、郵便を介した一問一答形式による「おたずね通信」がはじまります。憲三の一二月三十一日の「共用日記」には、

「堀場さんの『おたずね第一信』41項を書きあげる」⁷⁵とあります。

除夜が明け一九七五（昭和五〇）年の幕が上がりました。一月四日「午後一時すぎ鹿野堀場夫妻みえる。6時ごろ天水荘へ帰泊」⁷⁶、一月五日「午前九時すぎ夫婦みえる。ナポレオンで昼食のごちそうになる。明日午後五時の汽車にて帰郷とのこと。そのとき立ち寄られるとのこと。それまで資料をお借りになる。資料をおもちになって夫妻天水荘へ」⁷⁷。一月六日「午後5時すぎ夫婦みえる。おわかれ」⁷⁸、一月一〇日「私の誕生日。78歳。……石牟礼さんみえる。誕生日祝いの赤飯と折をもらう」⁷⁹。「日月ふたり（最終回）——高群逸枝・橋本憲三——」が『文芸展望』（第八号）に掲載されたのは、それから五日後の一月一五日のことでした。文末には、「（了）」の文字が記されていました。

憲三が瀬戸内に宛てて送った手紙のなかには、「固有名詞——地名人名などの誤植は校正者にはわからないと思われるものがありますから、『日月ふたり』完結後に、正誤表をつくってみて、差し上げようと思っています」⁸⁰という記述がありました。仮にこのまま連載を続け、今後そうした「正誤表」が『高群逸枝雑誌』などにおいて発表されることになれば、瀬戸内の立場はどうなるのでしょうか。ましてや、固有名詞だけに止まらず、内容についての「正誤表」も公開されるならば、瀬戸内の文の信憑性や信頼性が厳しく問われることになりかねません。あるいはまた、同じくこの先、道子の「最後の人」や堀場の「おたずね通信」が書籍化されるようなことになれば、どうでしょう。もしそうしたことが現実のものとなれば、自分の書く「日月ふたり」は、その実証性と論証性において明らかに劣り、そのことによって作家としての名声に傷がつく可能性に、瀬戸内は思いを巡らせたかもしれません。そうであったとすれば、そのことが、主たる要因であったかどうかは別にして、「『日月ふたり』を書きつづける意欲を失っていった」まさしく別の大きな要因ということになります。さらには、それとは全く異なる要因があった可能性も指摘することができます。すでに引用した文から明らかなように、瀬戸内は、「憲三氏と逸枝の愛のかたちを知りたかった」と書いています。もしそれだけが執筆の目的であったとするならば、五回の連載をとおして、一九二五（大正一一）年の九月、逸枝が置き手紙を残して、当時自宅に寄宿していた憲三の友人男性と家を出た「事件」と、『婦人戦線』時代の逸枝と延島英一との恋愛を巡る「事件」とを書き終えたいま、もはや瀬戸内の関心は完全に燃焼してしまい、その後に続く、逸枝の女性史学の完成へ向けての物語まで書く意欲は最初からなく、五回目のここがちょうど連載の「（了）」にふさわしい時期だったのかもしれない。瀬戸内がこう書いているところが印象的です。「堀場さんが熱心に憲三氏に取材しているという噂が聞こえてきた。私は内心ほっとした。そして憲三氏が堀場さんの方へ向いてくれ、私を釈放してくれたら有難いとさえ思った」⁸¹。以上のように見てゆきますと、「憲三氏の次第にヒステリックになる追及をもてあまし気味になり、『日月ふたり』を書きつづける意欲を失っていった」という言葉には、少なからず疑問符がつくことになります。

以上ここまで、「憲三氏の次第にヒステリックになる追及をもてあまし気味になり、『日月ふたり』を書きつづける意欲を失っていった」という瀬戸内の言説に対しまして、それ以外の理由で「『日月ふたり』を書きつづける意欲を失っていった」可能性はないか、その点を検討してきました。瀬戸内のこの言説は、一九八三（昭和五八）年に筑摩書房から刊行された『人なつかしき』に所収されています「『日月ふたり』のひとり 橋本

憲三」から引用したものです。しかしながら、「『日月ふたり』のひとり 橋本憲三」には、幾つかの誤謬が含まれています。たとえばこのなかで、瀬戸内は、「『日月ふたり』を書きはじめると、憲三氏はたいそう喜ばれ、毎月懇切な批評や、誤りの訂正をして下さった。こまごましたお手紙で私にはすべて有難かった」⁸²と、書いていますが、すでに憲三の「共用日記」から引いて示していまのように、憲三がはじめて瀬戸内に手紙を送るのは、一九七四（昭和四九）年三月二八日のことで、「日月ふたり」の第三回を読んだあとのことでした。これをもって判断しますと、この言説は、明らかに誤謬ということになります。またもう一例を挙げますと、瀬戸内は同じこの文のなかで、「私は堀場さんの質問と答えを読みながら、憲三氏の答えを語る表情まで目に浮かぶようであった。憲三氏は私にも、私が望むなら、どこまでも取材に協力しようという姿勢を見せて下さった」⁸³と、書いています。これは、前述していますように、一九七三（昭和四八）年二月一日に、瀬戸内が憲三を訪ねたときに交わされた会話の場面です。しかし、よく考えてみますと、鹿野と堀場が憲三を訪ねるのは、それから二年後の一九七五（昭和五〇）の一月四日であり、堀場と憲三の一問一答形式の「おたずね通信」が、ふたりの共著のもと『わが高群逸枝』（上下二巻）という書題で朝日新聞社から上梓されるのは、さらに遅れて一九八一（昭和五六）年九月のことでした。これを根拠に判断しますと、「私は堀場さんの質問と答えを読みながら、憲三氏の答えを語る表情まで目に浮かぶようであった。憲三氏は私にも、私が望むなら、どこまでも取材に協力しようという姿勢を見せて下さった」という言説が、誤謬であることは疑いを入れません。そこで、これらふたつの事例を基に推し量るならば、同じくこの文に書かれてある、瀬戸内の「憲三氏の次第にヒステリックになる追及をもてあまし気味になり、『日月ふたり』を書きつづける意欲を失っていった」という一語自体もまた、同じく虚偽であった可能性を残すのです。そうなりますと、『人なつかしき』に所収されています「『日月ふたり』のひとり 橋本憲三」における記述内容はもとより、『文芸展望』に連載された「日月ふたり——高群逸枝と橋本憲三——」における物語の内容についても、その信憑性に大きな揺らぎが生じることになります。その結果、瀬戸内の言説に必ずしも信頼を置くことができなくなったうえは、逸枝と延島のあいだに見受けられた、いわくありげな「事件」についても、本当にそれが、瀬戸内が断定するような「情事」であったのかは疑わしく、いまや一種の戯言として聞き流すしかないように思料されるに至ります。

それはさておき、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」を読んで、誤りを指摘するために瀬戸内に手紙を書いた一九七四（昭和四九）年の三月以降の憲三は、心身ともにさらに悪化が進み、一進一退の状態にありました。それから半年後に憲三を訪問した堀場清子は、そのときの様子を、こう描写します。

朝日評伝選『高群逸枝』の取材のために、鹿野政直と私とが、はじめて橋本氏を訪ねた昭和四十九年九月、氏は「事件」の衝撃の渦中にあった。それ以外のことを聞こうとする私達の質問に対し、氏の答えはいつもその点にたちもどって、少なからず困惑させられた。逸枝との愛の一体化と、女性史の大成とに生涯をかけ、女性一般の未来のために多大の貢献をされた氏の、最晩年での傷つけられ方が、いたましかった

⁸⁴。

堀場は、訪問当日の憲三の様子について、「『事件』の衝撃の渦中にあった。……最晩年での傷つけられ方が、いたましかった」と、表現しています。しかし、その「いたましさ」は、「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」によってのみもたらされていたというわけではありませんでした。もうひとつの憲三にとっての「いたましさ」が、鹿野と堀場の水俣訪問二箇月前に、すでにもたらされていたのでした。それは、『文學界』に掲載された戸田房子の「献身」と題された小説で、逸枝の臨終の際に起こったある「事件」が主題化されていました。ここでもまた、憲三の認識とは大きく異なる描写が至る所で闊歩していたのです。その物語は、こうしてはじまります。

昭和三十九年晩春の朝のことである。二人の男が彼女の寝室に入って行き、ベッドの中の綿のはみ出た蒲団と色褪せて毛のすり切れた毛布にくるまっている鷹子を、そっと担架に移した。……門の前に待機していた白い救急車に鷹子を運び入れた。

鷹子の夫の楠昌之は、萎えた開襟シャツとズボンで担架のあとから歩いていた。彼は七十歳にはまだ間のある年齢であったが、老年に特有の黄ばんだ艶のない顔をして、額と鼻のわきに彫り込んだような皺をつくっていた。……

彼のあとから、かなりおくれで、坂本滋子が両手に紙バックと風呂敷包みをさげて、急ぎ足で救急車の方へ近づいて来た⁸⁵。

〔本城〕鷹子が高群逸枝で、楠昌之が橋本憲三、坂本滋子が、市川房枝の側近のひとりの女性、おそらくは画家の高良真木であることは明白で、医師の竹内茂代が発案し参議院議員の市川の紹介で入院が決まった国立東京第二病院に、一九六四（昭和三九）年五月一二日の朝九時過ぎ、逸枝が搬送されるところを描いている場面であることは、その事情を知る者にとっては、これもまた、容易に判断がつくことでした。そして、この物語には、市川房枝と竹内茂代が、脇田さつきと山下照代という仮名で登場しますし、石崎せつ子という婦人が、おそらくは平塚らいてうのことでしょう。

この小説では、全編にわたって、楠昌之つまり橋本憲三は、妻の気持ちを理解しない、横暴で利己主義に凝り固まった、腹黒い風采の上がない男として描かれています。逸枝が息を引き取ったあとの霊安室での様子についての描写にも、その一例を見ることができます。それは、次のような会話で構成されています。

「実は脇田先生にお願いがあるのですが、お聞きいただけないでしょうか？」

「どういうことでしょうか？」

「新聞に妻の死亡広告を出したいのですが、先生にお名前を出していただきたいのです。いかがでしょうか？」……

「新聞広告をするとすれば、二、三十万は覚悟しなければなりませんよ」

「金はいくらかかってもかまいません」

「失礼なことを伺うようですが、ご用意があるのですか？」

「沢山ではありませんが、銀行預金が四百万ございます。亡き妻のために出来る限りのことをしたいと思います」

女たちはあッという愕きでいっせいに楠昌之に視線を集中した。四百万円！ いったいどこから得たお金なのだろう。鷹子の悲惨な生活を見かねて授けつづけてきた女たちは、自分たちにすら縁遠い巨額な金を昌之が持っていたと知って茫然となった⁸⁶。

続けて脇田さつきは、こういうのでした。

「私はね、楠さん、そんなにお金をお持ちでいながら、皆さんから金銭的な援助を平気で受けていらしたあなたのお気持ちがわかりません。私は、あなたがたお二人をいままで貧乏だとばかり思っていました。そのように事を運んできました。いま考えますと、貧乏でなかったあなたがたに対して大変失礼なことであったと思います。お詫びいたします。——死亡広告のことは、私の素志と相容れない点がありますので、私の名前を出すのは遠慮いたします。どうかあしからず」⁸⁷。

「献身」が『文學界』に発表されたのは、一九七四（昭和四九）年の七月でした。ちょうどそのとき、村上信彦から、一〇月一日刊行予定の『高群逸枝雑誌』第二五号のための「私のなかの高群逸枝8」の原稿が送られてきました。そのなかで村上は、「最近出たモデル小説」⁸⁸という用語を使って、その小説に触れていました。驚いた憲三は、「最近出たモデル小説」の詳細を問い合わせます。すぐにも返信がありました。八月三十一日に書かれた村上からの返事は、以下のようなものでした。

ある雑誌のモデル小説というのは、「文学界」7月号の戸田房子の「献身」です。一読して、市川房枝たちの側からの考えだということが分かります。高群さん入院前後をめぐるあなたと一部の女たちとの対立をえがいたもので、私はあなたから事情を聞いていたのですぐ見当がついたのです。私としては、よむことをすすめるべきかやめることをすすめるべきか判断がつきません。たゞ、よんだら不快を感じただけでしょう⁸⁹。

そのあと憲三は、この小説を入手し、取り急ぎ読んだでしょう。もっとも、憲三の読後感は、調べる限り、資料には残されていないようです。しかし、「不快」どころか、実際には、突然背後から鈍器のようなもので頭を殴られたような、激しい衝撃を憲三は感じたにちがいありません。というのも、現に実在する人物が、小説という虚構空間に連れ込まれ、あることないこと、おもしろおかしく、罵倒され中傷されている場面に出くわしたとき、それに怒りを覚えない人はいないと思われるからです。「小説」である限り、そこに描かれている内容に、著者は責任をもつ必要はないかもしれませんが、名誉を棄損された「モデル」は、いかばかりの傷を負うことでしょうか。それにしても、「小説」という隠れ蓑をうまく使って、一〇年前の出来事がなぜいまになって蒸し返されなければならないのでしょうか。発表された時期を考えますと、瀬戸内春美の「日月ふたり」に誘発されたとも考えられます。

逸枝の臨終を主題にした「献身」は、憲三にとりまして、細部の事実関係には承服しが

たい箇所が多々含まれていたにしても、出来事自体は実際にあったことですので、憲三をそう驚かすものではなかったかもしれません。しかし、実際の出来事に事寄せて、個人を攻撃する態度には、憲三は、許しがたく耐えがたいものを感じ取ったにちがいありません。それは、次のような、霊安室での楠昌之と脇田さつきの、死亡広告と金銭を巡る会話をそばで聞いていた坂本滋子の心情を描写した箇所によく表われています。

坂本滋子は昌之から金話を聞いた瞬間から、打ちのめされた気持ちになっていた。……

昌之の行為はずるくきたくない。どこまで男らしくない男であろうと、滋子は彼を心の底から軽蔑した。そういう男と半世紀近くも一緒に暮してきた鷹子のことを思うと、だまされつづけた鷹子が可哀想でならない。なぜ昌之との共同生活を解消しなかったのかと、いまさら言ってみても仕方がないが……日常生活をとりしきってくれる便利な男として目をつぶっていた間に、すっかり昌之にしてやられたではないか⁹⁰。

しかしここで、高良真木がモデルではないかと思われる坂本滋子や著者の戸田房子を責めることはできません。男性を清算して女性を新生させようとする思考は、もとをたせば、逸枝が創案したともいえるからです。逸枝が主導した無産婦人芸術連盟の標語であった「強権主義否定」「男性清算」「女性新生」を想起すれば十分でしょう。しかしながら、上で引用した、坂本滋子の心情を戸田房子が描いた表現部分、つまり、「だまされつづけた鷹子が」「日常生活をとりしきってくれる便利な男として目をつぶっていた間に、すっかり昌之にしてやられたではないか」の箇所は、明らかに事実とは異なっています。それにしても、事実を曲げてまで、男にだまされた女の哀れさという虚構をつくり上げ、そのうえに立って女性を擁護し男性を断罪するところに、潜在的に定型化されたこの時代の女性の固定的視点がにじみ出ているようにも感じ取れます。果たしてこれが、どうあろうとも男性を悪の化身として措定し、それを標的に闘おうとする、同時代の女性解放運動家たちにとっての日常活動の常套手段というものだったのでしょうか。あるいは、それとの関連が深い女性史やモデル小説（あるいは伝記小説）と呼ばれるものにおける当時の際立つ記述手法のひとつだったのでしょうか⁹¹。こうして「献身」は、書かれていることの真偽はともかく、市川房枝とその周辺の女たちに秘められていた不満の大きさと執念の深さだけでなく、自らが確信する女性擁護／男性断罪の定式をも、自ずと表出した「女性史」的一幕となったのでした。

それでは、これに対して憲三は、どう向き合ったのでしょうか。それを見るためには、一九六四（昭和三九）年六月七日に逸枝が死去した直後の、周囲の人間の動きへとさかのぼらなければなりません。逸枝を慕う村上信彦のそのときの体験は、こうでした。

取るものもとらずあえず、国立東京第二病院に駆けつけ、霊安室に直行した。室の中央の台の上に遺体が安置され、顔に白布をかけてある。一方に一段高い畳敷の小さな部屋があって、先客が集まっている。平塚らいてう、市川房枝、浜田糸衛、高良真木、熊本から来られた友人の五人である。……だが私は興奮していた。「なぜもっと前に知らせてくれなかったのです」と廊下で橋本氏に食ってかかり、こんなことにな

るなら面会謝絶を無視して押し入ってでもいま一度会っておきたかった。面会謝絶を忠実に守ったばかりに唯一無二の機会を逸してしまった。おれはばかだった……。無念と怒りが渦巻いて、私は強く詰め寄った。さだめし血相を変えていたにそういない⁹²。

このとき村上は、憲三から、東京では密葬のみとし、その後本葬儀を熊本で執り行なう予定であることを聞かされ、この日が事実上の最後の別れとなりました。しかしその後、周囲の意見に押されて、自宅の「森の家」で葬儀が行なわれることになり、案内状が送られてきたものの、村上は出席しませんでした。葬儀も終わった、六月一八日に村上は、らいてう宅を訪ねます。この日の話題は、主に逸枝のことでした。村上は、こう書いています。

いろいろ話しているうちに、らいてうが高群さんをどのように評価していたかも分かり、この二人の女性の関わりを興味ふかく感じた。そのとき私は十日前の霊安室でのはしたない振舞を詫びたのであるが、私がまず詫びねばならなかったのは橋本氏だったと分かる日が、やがてやって来るのである⁹³。

村上が霊安室で顔をあわせた「熊本から来られた友人」というのは、当時鎌倉に住んでいた熊本出身の志垣寛だったかもしれません。志垣は、逸枝と憲三の古くからの友人で、逸枝の葬送の儀に際しては葬儀委員長を務めました。次の引用は、七月七日に橋本静子宛てに出された志垣の私信にある末尾からの一節です。

平塚さんのきもいりで、近く例の女子連と会見することになっています。私が近く雑誌に逸枝さんのことを書くというのが評判になって、向うから会見を申込んできました。よく説明して納得させようと思っています⁹⁴。

ここでいう「例の女子連」とは、逸枝の入院等で立ち回った、市川房枝の取り巻きの浜田糸衛や高良真木たちを指すものと思われます。次も、同じく志垣から静子に宛てて書かれた七月一二日のはがきの一部です。「市川女史一派の人々数人とあい、くどくど不平談をきゝました。要するに橋本君が金持ちだった事が不満の種でした」⁹⁵。当時志垣が書こうとしていた文は、「高群さんと橋本君」と題されて、『日本談義』の八月号（一六五号）誌上の「高群逸枝女史追悼特集」に掲載されました。内容の一部は、第一章の「夫の姉妹からの援助、『望郷子守唄』の建碑、そして最期」においてすでに引用していますので、ここでは割愛します。一方、この特集に憲三が寄稿したのは、「終焉記」という題の文でした。内容的は、逸枝の最期の入院に至るまでの経緯について、時系列に沿ってその様子が記述されています。さらに、その雑誌が刊行された直後に、今度は「高群追悼特集に添えて」という一文を起草します。擱筆日は、八月一五日です。この文を書かねばならなかった理由について、憲三は、こう記しています。

『日本談義』（165号）高群追悼特集のなかにみえる一グループと私とのことに

ついて、グループの方では早く志垣氏に申し込んでらいてう家で会見、一方的な談話発表が行われたそうであるが、私はまだ誰にも深くは語っていない。私からみればすでに誤謬だらけといていい風説が伝えられており、『談義』によっても誤伝をうみそうな危惧があり、この際私からの「真実」を明らかにすることは私のつとめの一つではないかと考えられてきた⁹⁶。

この文は、A（市川房枝）、B（浜田糸衛）、C（高良真木）、D（初見の人）、E（市川みさを）と明記したうえで、「終焉記」のなかの論争点となるにちがいない重要な箇所を一つひとつ取り上げ、それについてより具体的に捕捉し釈明したもので、かなりの長文となっています。末尾の一節を、以下に引用します。

A（市川）は私が当然にも病人の身柄一切に責任を負って個室をとったり、葬儀を正したり、死亡広告を出したりしようとすることを迷惑がっているという実感を私に与え、しばしばあなた（私）はそれでよいだろうが、自分の面目は丸つぶれだという意味のことをいわれるのだが、私はそのつどけげんに思い、考えても見るが氷解できなかった。一つの実例をいえば、私は霊安室で主治医からの解剖希望をことわった。故人は肌身を人目にさらすことを極端にきらっていたから私はそれを尊重したのである。するとA（市川）はあなたはそれでよいだろうが病院にたいして自分の面目は丸つぶれだといったものである。……

私はいま妻の霊前にぬかずいて一切のことがらをかなしく反芻し、彼女の声聞こうとしている⁹⁷。

市川房枝は、希代の女性史学者である高群逸枝の戦前からの後援者のひとりでした。そのため、逸枝の最期の入院に際して市川は、参議院議員という立場から、「清貧の学者」として、つまりは「施療患者」に準じる者として逸枝を受け入れられないか国立東京第二病院と掛け合っていたようです。また、葬儀に要するおおかたの費用についても、自身が負担する心づもりができていたかもしれません。その前提として、市川とその取り巻きには、逸枝と憲三は乞食同然の「貧民」であるというひとつの思い込みが、疑うことなく、長年意識下で形成されていたのです。ところが憲三の口から、多額の資金が用意されていることを聞かされたのです。かくして、彼女たちがもつ暗黙の「貧民」像が崩れ落ちてしまいました。たとえて表現すれば、いつも餌を与えてかわいがっていた病弱の飼い犬が、最後の死に際になって飼い主に逆らい、自力で立ち上がると、元気な姿で大声を出して、周りを威嚇するかのように自身で自身の死に場所を決めようとした、といったところでしょうか。ここに、市川グループと憲三との反目の原因があったといえます。市川にしてみれば、自身が中心となってこれまで逸枝支援を要請してきた友人たちに対して、そしてまた、自身が仲介の労をとった病院に対して、「自分の面目は丸つぶれ」ということになるのかもしれません。一方の憲三は、なぜ自分の自由意思で妻の死に向き合うことができないのかという疑念に、そのときさいなまれたものと推量されます。そこで、異例ではありますが、それらのことも踏まえながら、この問題につきましての私見を以下に少し述べることにします。結論的にいえば、たとえどんなに生前故人に多大な援助を与えていた

といえども、入院や葬式は、最終的には、遺された親族の判断にゆだねられるべき事柄であって、仮に親切心からであろうとも、あるいはまた、たとえ「貧民」とみなす思い込みがあったにせよ、強引にそのなかに割り込み、差配しようとする行為は厳に慎むべきことではなかったろうかと理解します。他方、憲三が貯えていた金融資産についてですが、逸枝は自由業ですので、退職金があるわけでも、年金が保証されているわけでもなく、年をとり筆が細れば執筆料の収入も細くなり、かといって、ときおり恵まれる支援の金品もあくまでも相手次第で、いつ途切れるかわからず、そのような家計環境のなかにあって、常にその日暮らしをするわけにもゆかず、老後の生活や、医療や葬式などのために将来必要となるであろうと思われるしかるべき資金を用意していたからといって、必ずしもそれは、非難に値する事柄ではなかったのではないかと思います。逸枝が亡くなる日まで、着るものも貧相、家具や食器も貧弱、口にするものも粗食であったこのふたりの、貧しさに甘んじた暮らしぶりを考えたとき、また、たとい日ごろはそうであろうとも、愛する妻との最後の別れのときだけはできる限りの贅を尽くして見送りたいという夫の心情を考えたととき、日常的にはその支援行為に深い謝意を捧げながらも、このとき市川が示した言動ばかりは「考えても見るが氷解できなかった」状況に立たされてしまった憲三のつらさは、いかばかりのものであったろうかと推察されます。総じていえば、この対立には、明らかに個人的問題に対する過剰介入が災いしているように思われますし、加えれば、男性の行為のすべてを強権行使の結果とみなすような、ひとつの強固な女性固有の視点が、さらに問題を複雑化させているとも、感じられないわけではありません。社会的経験を積んだ今日にあっては、著名人の場合、近親者による本葬儀と、その後の「お別れの会」が切り分けられて営まれるようになってきていますが、当時にあってははまだその線引きは明確でなく、あたかも遺族と後援者との綱引きを見るかのような、そのときの混乱と双方の不信は、誠に不幸な出来事であったとしかいいようがありません。

憲三は、「高群追悼特集に添えて」を書き上げると、この一文を、『日本談義』と一緒に、らいてうに送りました。すると、このような返事が返ってきました。

また本日は追悼号の「日本談義」ならびに委しい解説御送り頂き、早速ルンベを使って、少しずつ拝読しております。今迄一方的にのみきかされてはありましたが、私なりの解釈、受けとり方はしてありますが、あなた様から直接いろいろかがいまして更に深く考えさせられ、遺憾に存じます点も少くありません。私もこんなに弱り込まず、今少し気力が出ましたら高群さんについて、ほんとに書きたいとおもいます。「火の国の女の日記」命あるうちに拝見したいものです⁹⁸。

それから一〇年の歳月が流れた一九七四（昭和四九）年の七月、戸田房子の「献身」が突如として『文学界』に出現したのです。このとき、筆舌を超える表現しがたい鈍い波動が憲三を襲ったにちがいありません。戸田房子という作家は、逸枝の入院や臨終に立ち会った形跡はありませんので、浜田糸衛や高良真木のような人に取材したか、あるいはそうした人が、戸田を使って書かせたのではないかと、憲三は即座に直感したことでしょう。一〇年前のらいてう宅が「例の女子連」による「不平談」の場と化したように、今回の「献身」においても、さながら彼女たちの怨念の吹き溜まりとなっていたのです。そこで

憲三は、少しでも自身と妻に科せられた、いわれなき汚名を晴らすために、過去に『日本談義』に書いていた「終焉記」のコピーに、未発表のまま手もとに残しておいた「高群逸枝特集に添えて」のコピーを添付し、「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」という題をつけて、身近な人に配布したのです。いまとなつては、どれだけ多くの人が過去のこの出来事を覚えていたか、そこまではわかりません。また、このふたつの文が、どれだけ汚名解消に役立ったか、それも知ることはできません。しかしながら、当時の憲三にしてみれば、一〇年もの時が経過したいまになって、再び受難に遭遇することになった妻の名誉を救い出し、その夫たる自分自身を慰謝する方法は、これ以外に残されていなかったのではないのでしょうか。かくして、「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」が、憲三にとっての最後の抗弁となりました。この間、病魔に侵された憲三の心身は、さらに深刻度を増していたのです。

注

- (1) 『高群逸枝全集』第七巻／評論集・恋愛創生、理論社、1971年（第3刷）、374頁。
- (2) 橋本憲三「『火の国の日記』の後」『高群逸枝雑誌』第1号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968年10月1日、5頁。
- (3) 同「『火の国の日記』の後」『高群逸枝雑誌』第1号、7頁。
- (4) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、156頁。
- (5) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (6) 前掲「『火の国の日記』の後」『高群逸枝雑誌』第1号、7頁。
- (7) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、159頁。
- (8) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (9) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (10) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (11) 石牟礼道子「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、101頁。
- (12) 「たより」『高群逸枝雑誌』第1号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968年10月1日、32頁。
- (13) 石牟礼道子「高群全集に思う」『高群逸枝雑誌』第1号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1968年10月1日、裏表紙見返し（ノンブルなし）。
- (14) 石牟礼道子「母への手紙」『高群逸枝雑誌』第2号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年1月1日、23頁。
- (15) 「たより」『高群逸枝雑誌』第3号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年4月1日、28頁。
- (16) 同「たより」『高群逸枝雑誌』第3号、同頁。
- (17) 同「たより」『高群逸枝雑誌』第3号、同頁。
- (18) 渋谷定輔「高群逸枝記念碑除幕式の経過」『高群逸枝雑誌』第5号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1969年10月1日、6頁。
- (19) 石牟礼道子『苦海浄土 わが水俣病』講談社、1969年、289頁。

(20) 橋本憲三「題未定——わが終末期 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970年7月1日、22頁。

(21) 同「題未定——わが終末期 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、23頁。

(22) 石牟礼道子からの手紙文。『高群逸枝雑誌』第8号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970年7月1日、13頁。

(23) 石牟礼道子『天の魚』筑摩書房、1974年、205頁。

(24) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、165-166頁。

(25) 前掲「題未定——わが終末期 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、21頁。

(26) 同「題未定——わが終末期 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、24頁。

(27) 「たより」『高群逸枝雑誌』第11号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1971年4月1日、30頁。

(28) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、167頁。

(29) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、170頁。

(30) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。

(31) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、171頁。

(32) 前掲『天の魚』、219-220頁。

(33) 同『天の魚』、169-170頁。

(34) 同『天の魚』、6-7頁。

(35) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、175頁。

(36) 『石牟礼道子全集・不知火』第六巻／常世の樹・あやはべるの島へほか、藤原書店、2006年、539頁。巻末の「後記」によれば、初出は、『西日本新聞』（1974年4月6日）に掲載された「まだ灯らぬ闇の中から」のようですが、その日の紙面にはその形跡を確認することができませんでした。

(37) 『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、創刊号、1973年秋季号、167頁。

(38) 同『暗河』創刊号、168頁。

(39) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』第六巻／常世の樹・あやはべるの島へほか、540頁。巻末の「後記」によれば、初出は、『西日本新聞』（1974年4月6日）に掲載された「まだ灯らぬ闇の中から」のようですが、その日の紙面にはその形跡を確認することができませんでした。

(40) 同『石牟礼道子全集・不知火』第六巻／常世の樹・あやはべるの島へほか、497頁。巻末の「後記」によれば、初出は、『九重華』（1973年9月11日）に掲載された「未完なる叙事詩を書くこと」のようですが、この雑誌の存在を確認することができませんでした。

(41) 同『石牟礼道子全集・不知火』第六巻／常世の樹・あやはべるの島へほか、497-498頁。巻末の「後記」によれば、初出は、『九重華』（1973年9月11日）に掲載された「未完なる叙事詩を書くこと」のようですが、この雑誌の存在を確認することができませんでした。

(42) 橋本静子「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、16頁。

(43) 石牟礼道子「最後の人 第十二回 第一章 残像3」『高群逸枝雑誌』第24号、1974年7月1日、27頁。

(44) 「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』第16号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1972年7月1日、30頁。

(45) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、181頁。

(46) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。

(47) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。

(48) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。

(49) 秋山清『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』思想の科学社、1973年、8-9頁。

(50) 同『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』、9頁。

(51) 同『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』、同頁。

(52) 同『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』、同頁。

(53) 同『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』、10頁。

(54) 同『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』、同頁。

(55) 同『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』、11頁。

(56) 同『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』、156頁。

(57) 同『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』、同頁。

(58) 石牟礼道子「最後の人 第六回 序章 森の家日記6」『高群逸枝雑誌』第6号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970年1月1日、27-28頁。

(59) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、178頁。

(60) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。

(61) 瀬戸内晴美『人なつかしき』筑摩書房、1983年、68頁。

(62) 同『人なつかしき』、69頁。

(63) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、184頁。

(64) 橋本憲三「瀬戸内晴美様への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、52頁。

(65) 瀬戸内晴美「日月ふたり(第三回)——高群逸枝・橋本憲三——」『文芸展望』第5号、1974年4月号、424頁。

(66) 前掲「瀬戸内晴美様への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、59頁。

(67) 同「瀬戸内晴美様への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、54頁。

(68) 同「瀬戸内晴美様への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、同頁。

(69) 松本正枝につきまして、ここで少し検討しておきます。高群逸枝が主宰する『婦人戦線』が創刊されたのは、一九三〇(昭和五)年三月でした。それから七箇月遅れてその年の一〇月に、松本正枝(本名は延島治)の夫の延島英一が『解放戦線』を発刊しました。逸枝は、自身の『婦人戦線』だけでなく、延島の『解放戦線』にも寄稿します。一方延島は、松本正枝の筆名で逸枝の『婦人戦線』に論考を書きます。堀場清子は、『婦人戦線』の同人であった住井すゑに、『婦人戦線』における松本正枝名の論考は、自伝特集号の際の文以外はすべて延島英一の代作であったことを確認したうえで、自著の『高群逸枝の生涯 年譜と著作』(ドメス出版、2009年、58-59頁)のなかで、次のように自身の見解を述べていますので、ここに紹介します。

〔『解放戦線』は〕延島英一の主宰で、解放社から5冊まで出た。逸枝は毎号力作の論文を寄せ、その高揚感から、英一との間に稀有の思想的共鳴があったと感じさせる。彼の妻松本正枝（本名延島治）は、1970年代になって瀬戸内晴美氏に、『解放戦線』は「二人の恋の記念碑」と語り、故事を白日の下に曳き出した。二人が“恋愛関係”だったか否かを、私は審かにしない。……英一の側に恋愛感情のあったのは事実であろう。『婦人戦線』最後の2冊（2巻5号・6号）の「松本正枝」書名の論文は、あげて高群攻撃である。振られた男の恨み節とでもいうべきか。それにしても、代作によって『婦人戦線』同人になっていた（晩年に至るも同様の姿勢だった）、延島治という人の心理が、私には解りにくい。

その「松本正枝」が、『埋もれた女性アナキスト 高群逸枝と「婦人戦線」の人々』（国立国会図書館デジタルコレクション個人送信にて閲覧可能）に、「『婦人戦線』時代の思い出——高群逸枝のある恋愛事件——」という題で一文を載せています。この冊子は、城夏子、望月百合子、八木秋子、大道寺房、松本正枝、大塚せつ子の六名の論考に加えて、秋山清の『婦人公論』初出の旧稿が再録されて構成されています。発行されたのは、一九七六（昭和五一）年の九月、『婦人戦線』の最終号から四五年が経過していました。また、瀬戸内晴美の「日月ふたり——高群逸枝と橋本憲三——」の連載が終了して一年が、『婦人戦線』の刊行に深くかかわっていた橋本憲三が死去して四箇月が立っていました。このときの自身の境遇を、松本正枝はこう語ります。「わたしは男の子二人。都の老人ホームに入っています。子どもたちは大きくなればみんな家をとび出して家庭を作っていますから。延島英一が死んでからあとは、本当に解放されました。生きているうちはやっぱり、なにかとしばられますから。くだらないことを言って叱られたり」（17頁）。それでは、「『婦人戦線』時代の思い出——高群逸枝のある恋愛事件——」のなかで、松本正枝は、その「事件」について、実際にどう書いているのでしょうか。

ラブレターを先に女性から手渡されてどうして男性がそれを受けないでいられましょう。「据膳食わぬは男の恥」という言葉を英一が教えられたのはその時だったでしょう。思想的に大いに共鳴しあいしかも肉体的に喜びを分かちあえる友はそうざらにいないでしょう。彼女は橋本氏にないものを彼に見出したのでしょうか（31・32頁）。

こうして、自分の夫の英一と逸枝のあいだに、肉体関係があったことを、誰にはばかることもなく、明言するのです。そして、瀬戸内の「日月ふたり」については、次のように言及します。

一つの事件を三人三様にいい立てるのですから、「日月ふたり」を文芸展望に発表されて橋本氏を高群氏という素材を名器に仕上げた人と評する瀬戸内さんの多大な研究・取材は実に大きいと思います（33・34頁）。

最後にこの文を、松本正枝はこのような言葉で結ぶのでした。

故人となった高群氏の「婦人戦線」時代を高く評価する人々、反面「実り少ない時期であった」と過小評価する、むしろ否定する橋本氏。しかし、高群氏をあの当時私が尊敬していた事、また今でも尊敬している事はわかりありません（34 頁）。

この三つの引用文から見えてくるものは何でしょうか。「思想的に大いに共鳴しあいしかも肉体的に喜びを分かちあえる友はそうざらにいないでしょう。彼女は橋本氏にないものを彼に見出したのでしょう」と書く松本正枝のこの言説をもって、英一と逸枝のあいだに「情事」あるいは「恋愛関係」が存在していたことを例証する重要な根拠（エヴィデンス）であるとみなす人もいるでしょう。本文で紹介していますように、たとえば瀬戸内晴美は、はっきりと「情事」という言葉を使っています。

しかし、その一方で、自分の夫と「肉体的に喜びを分かちあえる友」であった逸枝を、「あの当時私が尊敬していた事、また今でも尊敬している事はわかりありません」と述べ、自らがこの情報を提供した「瀬戸内さんの多大な研究・取材は実に大きいと思います」と語る松本正枝の心理と人間性に、疑問を投げかける人もいるかもしれません。たとえば堀場清子は、上で引用したように、「二人が“恋愛関係”だったか否かを、私は審かにしない。……それにしても、代作によって『婦人戦線』同人になっていた（晩年に至るも同様の姿勢だった）、延島治という人の心理が、私には解りにくい」と書きます。

つまり、松本正枝（本名は延島治）による、自身の夫延島英一にかかわる四五年前の不倫の暴露は、人によって受け止め方が違うのではないかということです。このように受け止め方に違いがある言説は、最終的事実確認がいまだできていない以上、証拠としての有効性や信頼性に乏しく、一般的に言えば、伝記を執筆するに際しては、参考までに紹介することはあっても、事柄の断定に用いられるべきではないものと思料します。私も、そうした立場をとって、いま本文執筆に当たっていることを、ここに書き添えます。

あえていうならば、この言説は、不倫をしたであろうと思われる夫の、その妻の言説だということです。必要とされる証拠（エヴィデンス）は、あくまでも、不倫をした当事者の、日記か書簡に記された言説に求められなければなりません。そうした物証が現時点で存在しないのであれば、何らかの利害関係があることを排除できない妻の言説のみをもって、英一と逸枝の関係を「情事」ないしは「恋愛関係」と決定づけるのは困難ではないかと思われます。もし仮にこの言説が、何らかの理由から真実性を欠くものであったとするならば、どうでしょうか。夫の英一の名誉はいうまでもなく、その相手とその夫の名誉もまた、損なわれることになるのです。そこで、この「事件」を記述の素材にするに当たっては、極めて慎重な配慮が必要になるのではなからうかと愚考します。

私自身には、一般論としての観点からいえば、この世の中には、「情事」や「恋愛事件」に異常にも関心をもつ著述家や記者がいて、その人に、極端に誇張された「事件」を吹聴し、それを嬉々として文にする書き手の姿と、それを読んで端無くも歓喜する読者の姿とを、遠くから眺めては愉快的感情に浸る人間がいても、決しておかしくはないのではないかという、否定しがたい思いがあり、そのことを率直にここに書き記しておきます。

（70）すでに本文において示していますように、一九七四（昭和四九）年の三月二六日に、橋本憲三は、瀬戸内晴美の「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」が

掲載された、四月に発売予定の『文芸展望』第五号の見本誌が、筑摩書房の村上彩子から事前に送られてくると、二日後の二八日に、瀬戸内に宛ててはじめての手紙を書きます。その手紙のなかで憲三は、瀬戸内が書いた内容について、「……というのはちがいます」「……混同ではないでしょうか」「……といったおぼえはありません」「……のことは私はしりません」「……全く考えられないことです」などといった表現を使って、幾つもの誤謬を指摘するのです。このとき憲三は、自分と自分の妻が、事実と異なる姿でもって世間に公表されたことに、耐えがたい無念と憤慨を感じたのではないかと推量されます。

さらにそれから四箇月が過ぎた、八月七日と翌八日の憲三の「共用日記」には、次のような文字が書き込まれています。堀場清子の『高群逸枝の生涯 年譜と著作』（ドメス出版、2009年、186頁）からの引用です。

八月七日「石牟礼氏に電話。夕方みえる。みやげものもらう。お茶も。10時に辞去。辺境五と瀬戸内氏の談談談をもらう。睡眠薬服しすぐ就寝」。

八月八日「けさ、談談談を散見したら、一項目、さんたんたる事実無根の記事あり。……」。

瀬戸内晴美の『談談談』が大和書房から出たのは、そのおよそ半年前のことでした。こうして、憲三は、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」のなかだけでなく、『談談談』においても、事実無根の記述を見出すのでした。その箇所は、小沢遼子と中山千夏を相手に語る、おそらく次に引用する部分（瀬戸内晴美『談談談』大和書房、1974年、②⑥頁）であったのではないかと思います。

瀬戸内 ……だから私は男性で、内助の夫の系列というのを書こうと思って、岡本かな子と一平、高群逸枝と橋本憲三がいいと思って水俣へ行ってみたの。ところがだんだんいろんなことがことがわかってきてね。仲がいいかと思っていたら、その逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくるんですって。

中山 普通との反対みたいね。

憲三は、こうした部分を読んで、「さんたんたる事実無根の記事」と「共用日記」に書き付けたものと思われます。瀬戸内が水俣の憲三宅を訪ねたとき、本当に憲三は、このようなことを瀬戸内に話したのでしょうか。憲三が瀬戸内に会ったのは、一九七三（昭和四八）年の二月一日のことで、このときがはじめてです。しかも、面談したのは、「共用日記」によれば、午後の八時三〇分から一〇時五〇分までの二時間と二〇分です。「その逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくるんですって」といった内容のことを、憲三が初対面の瀬戸内に二時間余の短い会話のなかにあって語ったとは、とても信じがたいことです。瀬戸内のこの一文に接した憲三は、おそらく仰天したにちがひありません。

続けて瀬戸内は、小沢と中山に対して、こんなことも話題にします。

瀬戸内 ……きのう私が訪ねて行ったおばあちゃまのところできいてみたの。「婦人戦線が潰れたところがよくわからないんですけど、逸枝さんはよく聞いてみると、男を作って、しょっちゅう逃げ出していたそうですが、ほんとうですか?」「ええ、ほんとうですとも。われわれの時代のアナキストは恋愛に対してもアナキーで、逸枝さんはそれを実行なさいました。人の亭主でもなんでもおかまいございませんの」

「だれか逸枝さんの相手で覚えている方ございませんか?」「はあ、ございますとも」そのおばあさんはそれからちょっと出ていってお茶を入れて、「うちの人です」(笑い)。

小沢・中山へえー(笑い)。

瀬戸内は、「きのう私が訪ねて行ったおばあちゃまのところできいてみたの」といっていますが、この「おばあちゃま」というのは、たぶん松本正枝(本名は延島治)のことでしょう。そして、瀬戸内は、小沢遼子と中山千夏を相手にしたこの対談について、「本書のための語り下ろし 昭和四十八年五月十日赤坂にて」(同書、②④頁)と書いています。それであれば、「おばあちゃま」を訪ねたのは、前日の五月九日で、水俣訪問から三箇月後のことになります。そこから類推しますと、「その逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくるんですって」と語ったのは、橋本憲三本人ではなく、松本正枝だった可能性が派生します。もしそれが真実であったとするならば、瀬戸内は、小沢遼子と中山千夏のみならず、多くの読者に対して、憲三にかかわっての虚偽の印象を植え付けたことになるのです。

昨日人から聞いた醜聞を、真偽を確かめることもなく、さもおもしろそうに他人に吹聴し、さらにそのうえに、それを自慢げに文字に書く、瀬戸内晴美という作家は、どのような人物だったのでしょうか。私は瀬戸内の専門家ではありませんし、ほとんど彼女の作品も読んでいけませんので、それを語る資格は全くありません。しかし、これまでの私の富本一枝研究において、瀬戸内晴美という小説家の存在については気づいていました。そこで、一枝のいとこの尾竹親と、一枝の古き友人の丸岡秀子の言説を引き、瀬戸内作品の含み持つ特殊性の一端をここで紹介し、あわせて、それについて検討しておきたいと思います。

富本一枝のいとこの尾竹親は、自著の『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』(東京出版センター、1968年、217頁)のなかで、次のようなことを書いています。

人間の言動というものは、決して一つの情景のみに定着して語られるべきものではなくして、その人間が生きた全存在の一環に組み込まれてこそ、はじめて、よりよくその映像を伝え得るものだとは私は信じている。

瀬戸内氏にしても、それが史実をもとにした小説であってみれば、フィクションとしてのある種の無責任さに救われているのだろうが、時間の経過というものは、得てして、伝説という神話をつくり上げたがるもので、いつかはそれが事実とまではならぬとしても、史実に欠けた情緒の補足としてのさばり返ることがよくあるものだ。私が、実名、或いは史実にもとづいた小説の安易さを恐れる理由が、ここにもあるわけである。

以上の引用は、瀬戸内晴美の『美は乱調にあり』（文藝春秋、1966年）という本のなかで描写されている、青鞆社時代に紅吉（一枝の筆名）が引き起こした、いわゆる「吉原登楼」事件における竹坡（親の父親）の役割を巡っての論点が念頭に置かれて書かれている箇所であろうかと思われます。はっきりと「フィクションとしてのある種の無責任さ」、そして「小説の安易さ」が指摘されているところに、注目する必要があります。

次に、丸岡秀子の場合を見てみます。以下の引用は、自身の『田村俊子とわたし』（中央公論社、1973年、239頁）の「あとがき」の冒頭の一文です。

なぜ、いまごろになって、これを書いたのだろう、と書いてしまっと思う。やっぱり、書かないではいられなかったからだった、というよりない。

だが、ひとつには瀬戸内晴美さんが、『田村俊子』をまとめられたとき、わたしとしては俊子について思う存分、語れば語れる機会だった。瀬戸内さんからはそのために、何度かその機会を作るように依頼されたのだが、わたしは大病つづきのために、それができなかった。もしあの日、健康で俊子を語っていたら、長いあいだの胸悶^{つみ}えは、ずっと前にとれていたかもしれない。

瀬戸内晴美の『田村俊子』（文藝春秋新社、1961年）は、その一二年前に上梓されました。それでも、丸岡は、田村（佐藤）俊子について書かざるを得ない思いにあったようです。丸岡を田村に紹介したのは富本一枝でした。一枝にとって田村は青鞆社時代以来の友人で、一方丸岡は、奈良女子高等師範学校の生徒であったときからよく知る若き知り合いでした。田村が海外生活を終えて帰国した一九三六（昭和一一）年の富本憲吉の窯開きのある日、ふたりは招待されて、面識を得ることになります。田村にとって、それからの三年というものは、思うように作品が書けず、金銭の管理が甘いがゆえに友だちを失い、窪川いね子（のちの佐多稲子）の夫である窪川鶴次郎との道ならぬ恋にも陥り、満たされぬ苦悶の歳月でした。田村は、何かにつけて丸岡を頼ります。丸岡も悪い気はしません。いつも寄り添うように、田村を支えます。こうして田村が中国に発つまでのおよそ三年間、田村と丸岡は誰よりも親しい間柄にありました。丸岡にとって、瀬戸内が書いた『田村俊子』には、自分の知る田村俊子が十全に反映されていなかったのでしょうか。あるいは、丸岡の目からすれば誤謬が含まれていたのかもしれませんが。田村と丸岡のふたりがこの時期に交わし合った書簡という一次資料を全面的に援用して、何とかその移ろえる像を修正し、より正確で真実に肉薄した田村像を、どうしてもここで書かなければならないという切迫した状況に、丸岡は立たされていたものと思量します。

以上見てきましたように、私の研究の極めて狭い範囲においても、瀬戸内晴美（寂聴）が書いた「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」（『文芸展望』に五回連載）、『談談談』、『美は乱調にあり』、そして『田村俊子』には、記述の対象となっている人物の、まさしくその人本人、あるいは、その親族や関係者にとっては、承服しがたい、事実無根ないしはそれに近いと思われる内容が随所に含まれていたのです。

そこで以下に、そのことに関連して、少しばかりの愚見を述べることにします。

『瀬戸内寂聴全集 第二巻』（新潮社、2001年、836頁）の巻末に収められている「解

題」は、次の文ではじまります。「本巻は、著者の伝記小説の分野の口火を切った『田村俊子』と、つづく大作『かの子繚乱』とを収録した」。私は文学史も文学論についても、知識がありませんが、ここで使用されている「伝記小説」という用語に遭遇したとき、強い違和感に襲われました。といいますのも、「伝記」はあくまでも「事実」に沿って記述されるものであり、ところが「小説」はそれとは異なり、書き手の自由な構想力ないしは想像力にゆだねられるものであると承知していたからです。つまり、私の理解では、「伝記」と「小説」では向かう方向が正反対であるはずなのです。ところが、それにもかかわらず、そのふたつが合体し、あろうことか一語になっていることに、私は違和感を覚えたのでした。

私の専門分野は、歴史学の一分野であるデザイン史学です。デザインの通史にも興味がありますが、個別デザイナーにも関心を寄せ、英国のデザイナーで、詩人にして社会主義者でもあったウィリアム・モリスと、その思想と作品に影響を受けて英国に渡り、のちに陶工として世に出た富本憲吉について研究してきました。その成果が、著作集3と4の『富本憲吉と一枝の近代の家族』であり、著作集6の『ウィリアム・モリスの家族史』です。それを著わすにあたっては、二度の英国での長期滞在を通じて、伝記執筆にかかわる多くの知見を現地の同僚研究者から得ていたことが、大いに役立ちました。彼らが考える「伝記」とは、おおよそ以下のようなものでした。それをここに箇条書きにします。

(1) 歴史上の人物の生涯を第三者である研究者ないしは伝記作家が書く場合は、本人や遺族のプライバシーや人権を絶対的に尊重して、少なくとも没後五〇年の歳月が経過しない限り、着手してはいけない。

(2) 一般に英国の場合、著名人が死去すると、その人の書簡類や日記は、しかるべき図書館かまたは博物館に寄贈され、少なくともおよそ五〇年は非公開となるため、いずれにしても、定められた時を経て実際に一般公開された暁に、研究者や伝記作家は筆を執ることになる。

(3) 執筆に当たっては、根拠となりえない、単なる思いつきや思い込みは排除し、すべて一次資料をもって論述の証拠（エヴィデンス）として実証に努め、あらゆる読者がのちに検証することが可能となるように、それを注および出典という書式でもって、巻末に加える。

(4) このように、伝記というものは、記述内容の検証が将来的になされることを前提に、完全なる一次資料に基づいて執筆されることになる以上、決して書いてはいけないというタブーの領域はいっさい存在せず、歴史の真実を知りたいという、人類に共通する普遍的な知的欲求の観点に立ち、たとえ夫婦の性生活であろうと、夫婦外の恋愛事件であろうと、すべての事象が論述の対象となる。

(5) つまり伝記は、かつて実在した個人の生涯についての、換言すれば、その人の家族、生活、教育、仕事、恋愛、結婚、性、育児、友人、イデオロギーなどにかかわる、厳密なる歴史書なのである。そこには、苦悩や喜びに満ちた、その人の生きたあかしが叙述されることになり、当然ながら、真実に肉薄しなければならないし、決して虚偽であってはならない。ただ、同じ個人について、ほぼ同じ一次資料を使って叙述しようとも、書かれるときの社会的文化的状況に違いがあり、そして、書く人の人

間に対する興味や観点に違いがあり、さらにその一方で、新しい資料の発掘が進行し、また、学問全体の求める主題や文脈が推移するため、そうした要因によって伝記それ自体も日々進化する。その意味において書かれた伝記は、すぐれて独創性の産物であり、人類全体にとっての希求されるべき共通知となる。

私が、これまでに英国で学んだ伝記書法の原理は、だいたい以上のようなものでした。そこで次に、その具体例として、私の研究の対象であるウィリアム・モリスと、加えて、モリスの親友で、モリスの妻の愛人でもあった、画家で詩人のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティについての、直近のフル・スケールの伝記を紹介します。発行年は少し古いのですが、フル・スケールの伝記というのは、研究に多くの時間を要し、一〇年から二〇年くらいのピッチで刊行されるのが通例です。しかしそれだけに、十全に論証と実証がなされた信頼に足るだけの重厚さがあります。その二冊のデータは、以下のとおりです。

Fiona MacCarthy, *William Morris: A Life for Our Time*, Faber and Faber, London, 1994, 780pp.

Jan Marsh, *Dante Gabriel Rossetti: Painter and Poet*, Weidenfeld & Nicolson, London, 1999, 592pp.

この注釈において取り上げた、瀬戸内晴美の「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」、『美は乱調にあり』、そして『田村俊子』の「伝記小説」は、こうした英国における伝記にかかわる執筆の原則や書法とは大きく異なる相に位置します。なぜ瀬戸内は、いまだ存命中の、あるいは死去して日が浅い人物について、いっさいの証拠を示すことなく、したがって、プライバシーや人権への配慮もなく、そのために、その人の名誉と人格を傷つけかねない状況のなかにあって、あえて「伝記小説」という独自の領域を設定して描くに及んだのでしょうか。本人はもとより遺族や関係者からの反発を招いたのは、そのことに起因していたものと思料します。

それでは最後に、「伝記」と「小説」の分離を促した、ある書き手の一例を紹介して、この稿を終わります。

以下の文は、吉永春子の『紅子の夢』（講談社、1991年、274-275頁）の「あとがき」から一部を引用したものです。吉永は、富本一枝との学生時代の一瞬の出会いが忘れられず、その強い衝撃が動機となって筆を執ることになりました。「紅子」が、尾竹紅吉こと富本一枝であることはいうまでもありません。

ふとした機会から私は、彼女について書くことになり、改めて調査に入ったが、すぐに戸惑ってしまった。

事実と、私の脳ミソに焼きついた存在とが、時には重なり、時には遠く離れ、複雑な線となって、縦横に走りまくり始めた。これはいけない、どっちかにしなければ。

選択の結果が〈小説・紅子の夢〉ということになった。

歴史上の人々の名前は実名にしたが、あくまでもそれは時代背景を生かすためで、人物表現はフィクションをベースにした。

これを読むと、執筆に際しての吉永に、明らかに、「事実と、私の脳ミソに焼きついた存在と」の激しいせめぎ合いが発生していることがわかります。つまりこれが、「事実」を基礎とする「伝記」と、「脳ミソに焼きついた存在」を描く「小説」の違いとなります。瀬戸内の「伝記小説」は、真実と虚構とがない交ぜになった、つまり「伝記」であるようで「小説」でもあるような、あるいは「伝記」でもなければ「小説」でもない、いまだ未分化の状態が存在していたものと思われます。その結果それは、何をもたらしことになるのでしょうか。

橋本憲三からの誤謬を指摘する手紙を受け取った瀬戸内晴美は、後年、自著の『人なつかしき』（筑摩書房、1983年、69頁）のなかで、こうも書いています。

それまで私に示されていたのとは全くちがう憲三氏があらわれた。私は憲三氏のショックが意外でもあり、意外でもないような気がして、複雑な想いにとらわれた。

「ショックが意外でもあり、意外でもない」と書く以上は、ほぼ間違いなく、執筆に当たって当初瀬戸内は、自身の「伝記小説」は「真実」を描いたものであり、そのため、そのなかで描写された人物は、すべてその記述内容に同意するはずであり、いわんや、それにより傷つくようなことなどありえない、と思いつ込んでいたのでしょうか。しかし、存命中の人間が、いきなり「伝記小説」という舞台に引っ張り出され、まさに著者の「脳ミソに焼きついた存在」として脚色されて踊らされていたとしたらどうでしょうか。そのとき、その登場人物が、実際の自分との違いに気づき、ショックと憤りを感じたとしても、それは、何ら不自然なことではないように思われます。他方で、観客である読者はどうでしょうか。おそらく演じられている物語を、虚構世界のそれとして楽しむのではなく、実名で語られている以上は、真実世界のそれとして誤認することでしょう。さらに加えて、その書き手が、これは事実ではなく、読み物という作り話ですからという弁明を残して、その場を立ち去ったとしたらどうなるのでしょうか。描かれた人間は、行き場を失い、そこに倒れ込むしかありません。そして一方の読者は、与えられた虚飾の物語を真実として信じ込んでこれから生きてゆくことになるのです。いま一度、前述の、尾竹親が指摘した「フィクションとしてのある種の無責任さ」と「小説の安易さ」を、ここで想起しなければなりません。「伝記小説」のもつ限界と罪悪は、まさしくこの点にあったものと理解します。

(71) 前掲『人なつかしき』、69-70頁。

(72) 前掲「瀬戸内晴美様への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、56頁。

(73) 前掲『人なつかしき』、69-70頁。

(74) 前掲「瀬戸内晴美様への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、56頁。

(75) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、188頁。

(76) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。

(77) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。

(78) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、189頁。

(79) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。

(80) 前掲「瀬戸内晴美様への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、58-59頁。

(81) 前掲『人なつかしき』、70 頁。

(82) 同『人なつかしき』、69 頁。

(83) 同『人なつかしき』、68 頁。

(84) 橋本憲三・堀場清子『わが高群逸枝 下』朝日新聞社、1981 年、183 頁。

(85) 戸田房子「献身」『文学界』文藝春秋、1974 年 7 月号、80-81 頁。

(86) 同「献身」『文学界』、114-115 頁。

(87) 同「献身」『文学界』、115-116 頁。

(88) 村上信彦「私のなかの高群逸枝 8」『高群逸枝雑誌』第 25 号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1974 年 10 月 1 日、21 頁。

(89) 橋本憲三「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号(第 32 号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980 年 12 月 25 日、25 頁。

(90) 前掲「献身」『文学界』、116-117 頁。

(91) 概略、私は本文におきまして、戸田房子の「献身」を例にとり、同時代にあつては、女性を擁護し男性を断罪することが先験的に定型化されており、そうした枠組みのなかで、女性史やモデル小説（あるいは伝記小説）と呼ばれるものの記述手法は、固定化されていたのではないかと、述べました。

一方で私は、本稿「火の国の女たち」の第二章「平塚らいてうと尾竹紅吉の『同性の恋』の顛末」、および第四章「富本憲吉・一枝夫妻に蔵原惟人がかくまわれる」におきまして、富本一枝（旧姓は尾竹で、青鞞社時代のペンネームは紅吉）と、夫で陶工の富本憲吉に言及しました。

一枝についての評伝は、すでに二冊世に出ています。ひとつは、高井陽・折井美那子の『薊の花——富本一枝小伝』（ドメス出版、1985 年）で、もうひとつが、渡邊澄子の『青鞞の女・尾竹紅吉伝』（不二出版、2001 年）です。このふたつの評伝におきましても、いかなる実証も論証もなく、一枝を擁護し、憲吉を断罪する記述の手法がとられています。とくに、大正末年、奈良の安堵村を離れ、東京の千歳村に移転する際の記述に、このことはよく表われています。双方の本とも、転居は、憲吉の「女性問題」に原因があったと、断定されています。しかし、事実は違います。のちの私の研究によれば、原因は一枝の「女性問題」にありました。一枝は、性的少数者（本人は明確にカミング・アウトしていませんので、断定はできませんが、数々の傍証からほぼ間違いなくトランスジェンダー男性）だったのです。

そこで、この二冊における該当箇所をつまびらかにすることによって、参考までに、私が気づいた、いわれなき「女性擁護／男性断罪」にかかわる事例の一端をここに紹介したいと思います。

それでは、それぞれの評伝にあつて、富本一家の安堵村生活の終焉と東京移転に関して、どのように書かれてあるのかを、ここで見ておきたいと思います。まず、高井陽・折井美那子の『薊の花——富本一枝小伝』においては、このように記述されています。共著者の高井陽は、富本憲吉・一枝夫妻の長女で、この本が上梓されるときはすでに世を去っていました。

「この頃になると長女の陽も成長し、中等教育をどうするか考えねばならなくなっていた。理想をもって始めた小さな学校は、十全とはいえなかったし、子どもたちに一層よい教育環境をと考えた時、それは安堵村では無理だった。子どもたちのために東京へ、そんな話が夫婦の間で何度か出たが、容易に解決できないでいた。そんな時、憲吉の起こした女性問題に

よって、一枝は東京への移転を決意する。憲吉にとってはほんの一瞬の気の迷いであつたろうし、当時の男性にとっては、ありがちのことだったかも知れない。しかし一枝は深く傷ついた。一カ月に及ぶ、二人の夜ごとの話し合いの末、大正一五年三月、東京への移転が決められた。……しかしほかの仕事とちがって、陶芸家の場合は、簡単に転居ができなかった。土や松薪を求める便宜と、窯がどうしても必要であつた。四月から移転の準備を始めたが、一枝は身重の身体でありながら、土地の選定や金策などにも奔走した。……こうして、柿も色づきはじめた秋半ばの一〇月一五日、住みなれた安堵の村をあとに一家は東京へと出立した」(149-150 頁)。

このような記述をするに際して、著者の折井は、いっさい注釈を施していませんし、また、最も肝心な証拠となる資料も明示していません。したがって、ここに述べられていることが真実なのかどうかを再検証する方が完全に奪われているのです。

共著者である陽が、生前に、このような内容を折井に漏らしていた可能性がないことはありません。しかし、たとえば、別の箇所では、「……と陽さんは語っている」(126 頁)とか、「陽さんの回想に詳しく書かれているが……」(137 頁)とか、「……という陽さんの記憶で」(147 頁)といった表現形式でもって、情報の提供者が明らかにされているにもかかわらず、この箇所に関しては、陽によって情報が提供されたことをうかがわせる注釈は残されていないのです。そのことから判断しますと、この記述内容は、折井の独断的な想像と判断によって練り上げられたストーリーであるといわざるを得ません。

記述の内容にも疑問が残ります。「憲吉の起こした女性問題によって、一枝は東京への移転を決意する」と、著者の折井は書いていますが、その相手は誰だったのであるのか、いつのことであつたのか、これらについては、何も語っていません。さらに、「当時の男性にとっては、ありがちのことだったかも知れない」「女性問題」がなぜ、「東京への移転」という、一般的にはあまりありがちとは思えない特殊な「決意」を一枝にさせてしまったのか、その理由についての言及もありません。

仮に、憲吉の身に「女性問題」が存在したとして、なぜそのことが、家族そろっての東京移住につながるのか、裏を返せば、なぜ一枝は離婚を考えなかったのか、あるいは、なぜ娘たちを連れての一枝単身の移住とはならなかったのか——こうした一般的に考えられそうな対応についても、何ひとつ説明がなく、ひたすら疑問だけが残ります。もしふさわしい資料が手もとにあるのであれば、もっと積極的にそれらの資料に真実を語らせるべきだったのではないかと考えます。

しかし、私がこれまでに調査した範囲でいえば、憲吉の「女性問題」を示す資料は、いっさい存在しません。したがって、東京移転の理由としての憲吉の「女性問題」は、いまだ折井個人の仮説の域に止まっていると判断するのが妥当でしょう。このことを実証するためには、たとえば、憲吉と一枝の当事者たちを含め、周りの関係者たちの手紙や日記などに記述されているかもしれない、動かすことのできない何か新しい資料の発掘が必須の要件となるにちがひありません。もしそのことができれば、憲吉にかけられた「女性問題」の嫌疑は、誰ひとりとして事実かどうかの再検証ができないまま独り歩きし、今後永遠に語り継がれていくことになります。これでは「冤罪」を構成しかねません。すでに鬼籍に入っているとはいえ、実在した人物である以上、その人権と名誉は、当然ながら、尊重されなければなりません。

この記述問題につきまして、私は、次のように推量しています。

この情報は、おそらくは母親から娘に伝えられた内容でしょう。こうしたストーリーを持ち出すことによって、一枝は子どもたちに東京移転の理由を説明したものだと思います。それが折井に伝わり、折井はその真偽を検証することもなく、そのまま、情報の提供者名を伏せたうえで、文にしたのではないのでしょうか。

それでは、なぜ一枝は虚偽のストーリーをつくらなければならなかったのでしょうか。すでに、著作集4『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』において詳しく論述していますように、性的少数者であることをカミング・アウトできないことに起因して、やむを得ず、真実とは異なるストーリーを捏造しなければならなかったものと考えます。そうした事例は、ほかの場面にも幾つか見受けられ、一枝の言説のひとつの特徴を形成しているのです。

それでは次に、『青鞞の女・尾竹紅吉伝』における記述内容を検討します。この本のなかで、著者の渡邊澄子は、安堵村から東京への移転の理由について、折井がすでに示した憲吉の「女性問題」をそのまま踏襲したうえで、こう述べます。

「一家は一九二六年一〇月、東京へ移住することになるが、それには、晩年にまで水面下で尾を曳き、結局、二人の間を離隔させることになったが、その根に憲吉の女性問題をみることができる。私が紅吉に魅せられ、紅吉の生涯を書きたいと願って準備に入ってからすでに二〇年になる。私はこの間、生前の二人を知る人を訪ねては聞き書きをとる作業を仕事の合間の折々に続けてきたが、憲吉の女性問題の相手は井出秀子が世話したお手伝いさんだった、と複数の方の証言を得た。子どもも生まれていてこの子は里子に出されたはずと明言した人もいた。しかし一方で、そんな事実はない、田舎は狭いのでもしそのようなことがあったら、誰知らぬ者なく広まってしまうはずだ、という人もいた。しかし、夫である男性が妻とは別の女性と特別の関係を持つ例は、ほとんど日常茶飯事としていわば公認されていた時代状況下では、事実があってもそれは大問題にならないということもあるのではないだろうか。夫を愛している妻である女性がそのことでどれほど傷つくか、その痛みの深さを感じ取れない男性社会だったのだ」（210-211頁）。

残念ながら、本書にも注などは存在せず、そのように断言するうえでの根拠となる証拠も何ひとつ示されていません。「生前の二人を知る人を訪ねては聞き書きをとる作業」をしているのであれば、いつ、どこで、誰に、何を聞き、その聞き取った内容を相手に確認してもらったうえで公表の了解を得て、そのすべてを開示すべきであったと思考されるものの、そのような学問的配慮に欠けるため、このままでは、憲吉の「女性問題」は単なる風聞か噂話の域を出ない状態に置かれているといわざるを得ません。

井出秀子とは、丸岡秀子のことを指しているのであれば、紹介者としての当事者である丸岡に、事の真相を直接問い合わせるべきだったのではないのでしょうか。「紅吉の生涯を書きたいと願って準備に入ってからすでに二〇年になる」と著者は書いていますが、この本が出版されたのが二〇〇一（平成一三）年、そこから逆算すれば、一九八一（昭和五六）年ころから聞き取り調査をはじめていたことになります。丸岡が亡くなるのが一九九〇（平成二）年であることを勘案すれば、著者の渡邊は、その意思さえあれば、丸岡本人へ直接インタビューを試みることも、あるいはまた、書簡による問い合わせも十分可能だったのではないのでしょうか。

丸岡秀子自身は、生涯、憲吉の生き方に強い共感を示し、敬愛の念を持ち続けました。晩

年に至ってまでも、丸岡はこういつています。「いま、若い人たちにとって、二人〔憲吉と一枝〕は名前さえ知られてはいないであろう。だが、京都、奈良めぐりの旅行の中に、“世紀の陶工” 富本憲吉美術館を入れてもらいたいと、私は願う。法隆寺からすぐなのだから」（丸岡秀子『いのちと命のあいだに』筑摩書房、1984年、28頁）。

もし、「憲吉の女性問題の相手は井出秀子が世話したお手伝いさんだった」のであれば、紹介者自身も深い傷を負い、憲吉に強い怒りと不信を向けたにちががなく、晩年であって、こうした憲吉に寄せる信頼と讃美の言葉を丸岡が書き記すことは、おそらくなかっただろうと思われます。その意味で、渡邊の言説をそのまま受け入れるには、大きな違和感が生じます。もし仮に、それが真実であると主張するのであれば、どうしても、それを裏づけるにふさわしい証拠となる資料を明示すべきではないでしょうか。とりわけ、「井出秀子が世話したお手伝いさん」が、いつどのような経緯で富本家へ入り、いつ妊娠し、いつどこで出産し、いつどのような経緯でその子が里子に出されたのかを明確な根拠に基づき実証すべきであると思われます。

他方で、その情報を提供した複数の人物とは誰と誰なのか、これについても、歴史的証人として本人たちの了解を得たうえで、明らかにすべきだったのではないのでしょうか。「生前の二人を知る人」と渡邊はいいますが、「女性問題」が持ち上がった一九二六（大正一五）年前後のあいだの安堵の富本家の生活の様子を日常的に知ることができ、渡邊が「聞き書きをとる作業」をする時期まで存命していた人物は、そう多くはないはずです。この時期一枝も妊娠していました。一方、丸岡秀子の奈良女高師の先輩で友人と思われる若い女性教師が円通院で教鞭をとっていました。そうしたこととの混同や取り違えはないのか、あるいは、どこかの段階で誰かが、一枝の「女性問題」を憲吉の「女性問題」と聞き違えたり、伝え違えたりしているようなことはないのか、慎重な対応と吟味が必要とされなければなりません。

もし、以上に述べてきたような学問上の基本的手続きに立ち返ることができなければ、すでに高井陽・折井美那子の『薊の花——富本一枝小伝』にかかわって上で述べた指摘同様に、反論することも、弁明することも、真実を語ることも、何もいっさいできないまま、憲吉の「女性問題」は永久に歴史のなかに刻印されることになります。これによって、いまや事態は、憲吉の身に「虚偽の歴史」ないしは「歴史上の冤罪」が構成されかねない状況に立ち至っているのです。

以上、先行する既往評伝の二冊を取り上げ、そこで述べられている、富本一家の安堵村生活の崩壊と、それに伴う東京移住の理由について批判的に検討してきました。結論としていえることは、総じてどちらの評伝においても、渉猟された適切な一次資料を十全に駆使して論証ないしは実証するという、真実に近づくための学術上必要とされる手続きがほとんど、あるいは全く見受けられず、そのことに起因して、ともに、述べられている内容に絶対的信頼を置くことができない状態を露呈しているということでした。

私は本文におきまして、戸田房子の「献身」を例にとり、同時代にあっては、女性を擁護し男性を断罪することが先験的に定型化されており、そうした枠組みのなかで、女性史やモデル小説（あるいは伝記小説）と呼ばれるものの記述手法は、固定化されていたのではないかと、述べました。以上において論述したのは、富本一枝の伝記に見受けられる、その事例となる二点でした。ここに参考に供したいと思います。

(92) 前掲「私のなかの高群逸枝8」『高群逸枝雑誌』第25号、18頁。

(93) 同「私のなかの高群逸枝8」『高群逸枝雑誌』第25号、18-19頁。

(94) 前掲「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、22頁。

(95) 同「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、同頁。

(96) 同「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、21頁。

(97) 同「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、38-39頁。

(98) 同「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、22頁。

第一章 橋本憲三の死と遺された橋本静子と石牟礼道子

一. 橋本憲三の臨終に寄り添う橋本静子と石牟礼道子

橋本憲三の主治医は、近所で内科医院を営む女医の佐藤千里でした。佐藤の母の坂崎カオルは、幼き日、高群逸枝と机を並べた仲でした。佐藤は、熊本市内に住む八〇歳になる母親に聞いた話として、次のようなことを書き留めています。

逸枝さんと私は、久具尋常小學校で机を並べた仲ですたい。正確には私が逸枝さんより一年下級生でしたが、その頃の久具尋常小學校は寄田校とよばれ、一年と二年が一教室、三年と四年が一教室という小さな學校でしたけん。やっぱり机を並べとったわけですねあ。……

この小學校の校長が、高群勝太郎氏で、逸枝さんのお父さんに当たる小柄な人でした。……

それから別れ別れに何年か経ちまして。そして、その頃秀才の男女が進学するといわれた師範學校に逸枝さんも私も入學しました。

……そして一昨年機会があった水俣にある逸枝さんの墓参りをする事ができました。小高い山の山腹にある逸枝さんの墓は、夫君の書齋の窓から朝夕眺められ、ほんとうに逸枝さんらしいよい墓でした。……逸枝さんも生きとられたらもう数え八十一歳にならるっです¹。

今度は佐藤自身も、逸枝の墓参りをしました。一九七五（昭和五〇）年一〇月刊行の『高群逸枝雑誌』第二九号に、そのときの様子が記されています。墓前に立つ佐藤は、改めて逸枝と憲三の二人の出会いについて考えこんでしまったのでした。

男と女がひかれ合うということ、これは究極的には最も単純で原始的ともいえる反応ではなかろうかと思うのですが……高群逸枝の観音様のように可愛い口許や鼻に見とれていますと、あれだけの研究を科學的に積み上げていった天才のもう一つの面、つまり相手に何も要求しないのにしかも身の心もびったりと夫憲三に寄り添ってしか生きられなかった一人の女性の匂やかさが伝わってくるのでした。……

森の小動物に還った逸枝は今後も夫憲三の着物の懷で小さな寝息をたてているのではないでしょうか²。

逸枝が放つ香氣に包まれながら、一方で佐藤は、再び二匹の森の小動物となって生きられる日が、そう遠くない時期に訪れるかもしれないことを報告したかもしれません。佐藤が、憲三の死期が迫っていることを最初に告げたのは、憲三の実の妹の橋本静子ではなく、石牟礼道子でした。すでに第一章「夫による『高群逸枝全集』の編集と石牟礼道子の高群継承の決意」において詳述していますように、佐藤は、この間の付き合いのなかにあって、道子が憲三の実質的ないわゆる「後妻」であることをよく知っていたからにほかなりません。道子は、このように書いています。

最後の逸枝雑誌、三十一号の編集が終ってしばらくした頃、主治医の佐藤千里氏から、私は、もうあまりお互いの持ち時間がないことを具体的に知らされていた。つらいことだったが実妹の静子さんにその状態を理解してもらわねばならなかった。静子さんは東欧旅行を計画されていたが、それを中止された³。

編集作業が終わると、『高群逸枝雑誌』の第三一号が、予定どおり、一九七六（昭和五一）年四月一日に発刊されました。憲三にとってのおそらく最後になるであろう文が、この号の「編集室メモ」に残されました。以下はその文の一部です。

- ・私は大晦日に寝込んでしまい、一年の最後の食卓にもつけず、元日にも、10日の誕生日（79歳）にも起き上がれず、そのまま今日にいたっている。……雑誌31はこうしたなかで、かろうじて編集のみはできた。発送のことは運を天にまかせるしかない。
- ・主治医は佐藤千里先生。いつか“愛鶏日記”に取材した小説を書いて下さると。お医者さまには恵まれている⁴。

佐藤から「もうあまりお互いの持ち時間がないことを具体的に知らされていた」道子でした。憲三の方は、遺言書という公的形式により、通夜や告別式のあり方について、そして自身の遺産の処分の仕方について、さらには逸枝の著作権の継承の方策について、実妹である静子に伝える一方で、同じくその具体的内容について、自分たちの後半生を約していた道子にも口頭で明かし、自分の意思を遺そうとしました。このころ憲三は、道子にこう告げています。

遺言を静子にしたのですよ、元気なうちにしておいた方がよいのでね。もしや重態になっても誰にも知らせてはならない。旧友たちにも、身内にも。ましてジャーナリズムなどには。葬式などはいっさいしないこと、あなたも香典などもって来てはいけません。これは守って下さい。遺物などどこかに寄贈することも考えられるが、押しつけになるから一切を土に返すこと。それらいっさいを静子に託しました。あれは実行力がありますからね。……⁵。

最後の「……」に、道子に対する重要な遺志内容が、隠されている可能性があります。もはやそれは、想像するしかありません。憲三の体に痛みが走ります。「神経痛に似た痛みが襲ってくるのです。こいつがねえ、ゲリラみたいな奴で、どこを襲ってくるやら予想がつかないんです。もう追撃できないんですよ自分では。佐藤さんは本当に助かる。痛みについて、あの人は探求心があるから」⁶。その佐藤は、「一日に二度くらい招ばれるようになっていた。彼女は逸枝雑誌の会員であり、往診ついでに雑誌の発送を手伝ってくださったりする。痛み止めが使用されているらしかった」⁷。

「もしや重態になっても誰にも知らせてはならない」というのが憲三の意向でした。しかし道子は、悩みながらも、「静子さんには内密で、朝日評伝選に高群逸枝を執筆予定

の、鹿野政直、堀場道子夫妻に緊急事態がせまっていることを連絡した」⁸のでした。道子は、こう記します。「五月十八日、昨夜鹿野夫人二十時二十三分『有明』でおみえ。間にあってよかった。今朝の御面会よい結果であればよいがと思い、時間をずらしてゆく。十一時お見舞い。……五月二二日……朝十時半ごろ、鹿野政直先生もおみえ、間に合われた。ご夫婦で橋本邸へ。おともする。静子さん枕元にいらして先生おめざめ。ちょうど痛みが去っていて、ご夫妻にごあいさつがおできになる」⁹。

そのとき憲三は、ベッドのなかから、こう語りかけました。それは、妻逸枝への最後のメッセージとなるものでした。

「放蕩無類のぼくを（そこでちょっと苦笑して）いや、放蕩はしませんでした、よくここまでにして下さいました」

かたわらから静子さんが、「それはあの、鹿野先生におっしゃったのですか」とたしかめられた。

「いいえ、彼女にいったのです」¹⁰

こうした会話もありました。その部分を、鹿野と堀場は、のちに「朝日評伝選一五」として上梓した『高群逸枝』の「あとがき」のなかで、公開しています。

橋本憲三氏の死にようは、はればれとして、うつくしかった。亡くなる前日の午ごすこし前、私達は氏と長い握手をしてお別れした。死に臨んだ人とはとても思えない、力強い握力が心に残った。その時、こんなやりとりがあった。

「なにもかもおみせしました。『路地裏日記』も、『共用日記』もおみせした。三分の二がたは、ぶちまけた」。

「まあ！まだ三分の一も、とっていらっしゃるんですの？」

一座の笑い声がひびく中で、氏はいわれた。

「人には誰しも、他人にみせられない恥部があります。……必死の防衛だ」¹¹。

他方、そのころ、憲三は道子に対して、こう語りかけています。

秋晴れのよい日でしたね。あなたの古典的なあのお家にお伺いしたのは。かつてないことでしたが。ちょうど一〇年です。あれから。彼女が出発した頃にうりふたつでしたよ、本棚もなんにもない、しかし、本が二、三冊あって。うっかりすると世間にいれられない孤独な姿で……¹²。

明らかにこのときの憲三の脳裏には、一〇年前の一九六六（昭和四一）年の美しい秋晴れの日の出来事が映し出されています。第一二章「夫による『高群逸枝全集』の編集と石牟礼道子の高群継承の決意」において言及していますように、これが、静子を同伴させての二度目の石牟礼邸訪問でした。この日憲三は、東京の「森の家」をこれから解体するので、その様子を見ておいてほしい旨のことを申し出たのでした。しかしこれは、居場所を失っていた道子を救い出すための方便でもありました。九月、それぞれにふたりは水俣を

出て、「森の家」へと向かいます。

二度にわたる憲三と道子の「森の家」での共同生活は、静子の深い配慮のもとに実現しました。まさしく静子は、洞察力にあふれる縁結びの神女の役を担っているのです。逸枝没後の憲三、道子、静子の三人が共有する秘め事は、おそらくは女医の佐藤を除けば、誰も知ることはなかったものと思われます。臨終に際して憲三は、「うっかりすると世間にいれられない孤独な姿で……」といった言葉で道子を形容していますが、続く「……」に相当する部分の文言を知るのは、道子しかいません。このときふたりは、この間の自分たちにとっての愛と孤独の実相について、問わず語らず、まさしく恥じらいながら、手を重ねるかのようにして、触れて確かめあったにちがいありません。

それでは憲三が鹿野政直と堀場清子に最後に語った「人には誰も、他人にみせられない恥部があります」の意味は、一体何だったのでしょうか。想像するにそれは、恥ずかしくて人には簡単に話せない、あるいは、話しても容易に理解してもらえない、自分と道子とのあいだに生成した、傷を負った生身の人間の深淵なる再生にかかわる、あまりにも美しいがゆえに秘すべき男女の物語だったのではないかと思料します。他方、憲三が使った「必死の防衛」という言葉は、誰からの詮索も受けず、いわれなき罵声も耳に入れることもなく、ひたすら、悲しくも人が秘めるにふさわしい美しいままの物語の姿で、次の世で待つ逸枝のところへもってゆきたいという願いが表出された響きであるかのように、私には伝わってきます。この推論が正しければ、憲三がそれまでに鹿野と堀場に語っていた三分の二の部分とは、おそらくそのとおり、逸枝についての話であり、残る三分の一は、言わずもがな、道子との人間愛が生み出した内密物語の部分であったということになるのではないのでしょうか。鹿野夫妻と憲三との会話を横で聞いていた静子と道子のふたりは、そのことを十分に理解していたものと推量されます。

こうして、最期の兄の姿に接しながら、静子は道子に、かくのごとくに心情を吐露します。

涙も出ないんですよ。この心の底の方にある悲しみは、病気ではないのでしょうか。正常なんではないですか、涙も出ないんですよ。なんという人でしょうねえ、この兄は。こんなにうつくしくなっている人は¹³

鹿野と堀場が、部屋を出て、帰路につくと、いよいよその時が迫りました。

「寒椿が」

「はい……」

それは最後のおことばだった。静子さん上がっていらっしゃる。

佐藤先生がおみえ。朝日出版局（評伝選の係）の宇佐美さんご到着、五時頃。白菊を持って濡れておいでになる。それで雨が降っているんだと思う。もう、お話がおできにならない。

七時頃うすぐらくなり、先生の呼吸、ハーッ、ハーッと深く長くなる。

静子さんこの十日間ほとんどお睡りにならない。……

佐藤さん、午後からほとんどつきっきり、いよいよフェルバビタール打たねばなら

ぬようになったようですとおっしゃる。お悩みのご様子。

先生のお姉さんの藤野さんが、若主人におんぶされておいでになる。そしておんぶされたまま肩越しに、よく透る声で、

「憲さあん、憲さあん！姉さんが面会に来たばあい。もう、もの言わんとなあ」とおっしゃる。そのお声の愛情、哀切かぎりなく、先生の寝息と交互に、

「おお、思うたより、やせちゃおらんなあ。憲さあん、うつくしゅうしとるな」
静子さんも佐藤さんも髪ふりみだしている、たぶん私も。徹夜¹⁴。

道子の述懐は、続きます。

五月二十三日、先生こん睡さめやらず。深い呼吸続く。十二時頃ちょっと帰宅、ある予感持ちながら。追っかけるように佐藤さんから電話で、五十分でした。ダメでしたと¹⁵。

こうして女三人による懸命なる手厚い看取りのもと、憲三は帰らぬ人となりました。次は、佐藤の回想です。「やっと逸枝のもとに旅立った憲三の両手を組み合わせてやりながら、手の甲に私が無残につけた注射のあとが目にとまったとき、それまで張りつめていた肩の力が、一時にどっと抜けていくのをどうしようもなかった」¹⁶。憲三、享年七九歳。遺された静子は、六四歳、道子は、四九歳でした。その後のみんなの行動について、後年静子が、次のように語っています。

兄憲三の末期は、妹の私が看取りましたが、私は遺族を代表して服装をととのえて、五社の新聞社のインタビューを受けました。インタビューには、最後を看取ってくださいました佐藤千里様（主治医、「詩と真実」同人）、逸枝のことを調べてくださっていた石牟礼道子様、朝日新聞東京本社宇佐美承様のお介添えをいただきました。……兄の遺言書の第一條に「葬式ごとは一切しないこと」とあり、前記の御三方と親族が集まりまして、おくりのまつりごとをしました。兄の居室に柩を据え、兄夫婦の写真と献花を飾り、以前に「西日本新聞」でとられている兄夫婦のテープの声を聞きました。……ビールを開けての会食となりました¹⁷。

一九七六（昭和五一）年五月二四日、『熊本日日新聞』の一五面は、以下のとおり、憲三の死を一報しました。

橋本憲三氏（高群逸枝雑誌編集責任者）二十三日午後零時五十分高血圧性心不全のため水俣市幸町六―の自宅で死去。七十九歳。球磨郡球磨村一勝地出身。

大正八年、「女性史学」の高群逸枝と結婚。彼女の死後（昭和三十九年）に高群逸枝全集（全十巻）を編さんし、昭和四十三年から「高群逸枝雑誌」（季刊）を発行し続けてきた。同雑誌は 31 号（四月一日発行）で廃刊される。

葬儀、告別式は本人の遺言で行われぬ。

続く『熊日』の第二報は、「『高群逸枝雑誌』が終刊 31号 夫・橋本憲三さん死去で」の見出しで、五月二五日四面に現われました。

同誌は橋本さんが高群女史の死後、四十三年十月から発行している小冊子。……高群女史に一生をささげた橋本さんにとって、雑誌の編集は死後の妻に対する思慕でもあった。そのため発行形式も「有料広告不載、カンパ辞退、不足分は高群著作印税で補う」という純粹さだった。

わずか三十ページ前後の小冊子だが高群逸枝伝「最後の人」（石牟礼道子）のほか柳田国男と高群女史の比較研究などが掲載され高群研究者にとっては欠かせない雑誌となっていた。発行部数は当初五百部、その後一千部に増やされた。限定版のため、東京などでは同誌の“海賊版”も出ていた。……

橋本さんの実妹、橋本静子さん（六四）は「兄の死で終刊になるのはやむを得ません。雑誌は夫婦の愛から生まれたもので、兄の死で終わるのが自然だと思います」と話している。また作家石牟礼道子さんも「ほかの人がやっても意味がありません。終刊するのが遺志に沿ったものだと思います」と言っている。

さらなる続報として、「故高群逸枝さん夫妻の遺稿 水俣市立図書館『淇水文庫』に寄贈」という記事が六月一日の四面を飾ります。

贈られたのは高群さんのデビュー作「日月の上に」（大正九年、新小説発表）の元原稿をはじめ「女性の歴史」（一—四巻）、『招婿婚の研究』（一—六巻）などの原稿。それに「たっぷりとあまいいのちに身をやつし花と一枝 酒を一壺なり」という高群さんの直筆の書三点やアルバム五冊の計二十六点。……

橋本さんがさる五月二十五日死亡して以来、遺族は残された遺品の処置を検討していた。橋本さん自身の遺言もあって大部分の蔵書は高群さんを研究している早大文学部の鹿野直政教授などの研究者に渡される。

一九六四（昭和三九）年六月七日に亡くなった高群逸枝の一三回忌を前にして、六月五日の『熊日』は、「“高群時代”にひとつの帰結 逸枝・憲三夫妻を追悼、足跡をたどる」（一〇面）と題して特集を組みました。そのなかに、佐藤千里が寄稿した「激痛のなかでの雄々しく闘病 橋本憲三氏の最期」を見ることができます。

「……貧しさや世間の悪意の前にはくじけずがんばったつもりですが人生の終わりになって肉体の痛みという思わぬ伏兵に襲われてしまって……。僕にもどうか人間の威厳というものを保たせて下さい」

こう語りかける憲三氏の優しいながらも射るような視線の前で、あの時の私はまったく無能でぶざまな姿をさらしていたように思われるのです。……

「あなたは僕たち夫婦のことを森の小動物の一目惚（ぼ）れとからかったが、まったく今になってみると、僕は単に運がよかっただけかもしれない」

この憎らしいほど幸福な男の科白（せりふ）が、結局、憲三氏と私の最後のやりと

りになってしまいました。

かくして、「貧しさや世間の悪意の前にはくじけず」、「威厳」を保ちながら、「森の小動物」の残されていた一匹も、先の一体のもとへと隠れたのでした。

亡くなる二日前、憲三は、道子に、こういいました。

コップがふたつありましてね、ひとつの方には生命がはいっているんですけどね。もうひとつの方に真理をいれようとするんですけど、そいつがね（微笑して）なかなか、うまくはいらないんですよ¹⁸。

ひとつのコップに「生命がはいっている」とは、自分の死を受け入れたことを意味し、もうひとつのコップに真理が「うまくはいらない」とは、「世間の悪意の前には」どうしても自分の真実が伝わらない、その苦しみを言い表わしているのかもしれない。

二. 追悼文と追悼出版物の数々、そして石牟礼道子の追憶慕情

憲三が死去すると、新聞や雑誌に、その死を悼む文が多数寄せられました。ここでは、鹿野政直と石牟礼道子の事例を紹介します。

鹿野の追悼文は「女性史学を支えた人 橋本憲三氏の生涯」と題するもので、六月七日の『朝日新聞』夕刊五面に掲載されました。そのなかで鹿野は、憲三をこのように評しました。

わたくしは橋本氏に会って、氏がじつに編集者的な感覚に富んでいるのを発見したが、有能であったにちがいないその仕事をすてて、妻の仕事のささえ手にまわった。家事を一切ひきうけたばかりでなく、資料さがしにでかけ、生活設計をし、研究の方向に助言をあたえ、妻のかいたものの最初の読者となり批判者となった。さらに、おしよせる世間のまえに、一人でたちはだかった。彼女の作品には、今日ふつうに思われているよりはるかにふかく、その夫がかかわりあっている。橋本氏の編集者的な才能はその妻に向かって集中し、彼女のプロデューサーになった、というのがわたくしの観測である。

そして末尾を、以下の文で締めくくるのでした。

こういう生涯があったということに、やはりわたくしは、大正期のデモクラシーの機運の一端をみとめずにはいられない。そうして氏は、日本女性史に少なからず貢献をなしたのだ。と同時に、もし日本男性史というものが書かれるとしたら、橋本氏は、既成の男性像を身をもって否定した人間として（否定のかたちは、必ずしもそれが唯一ではないにせよ）、いわば「新しい女」にたいする「新しい男」として、位置づけられるのが至当ではなかろうかと、わたくしは、氏をいたむ念とともに夢想する。

この文が『朝日新聞』に載ったのは、奇しくも逸枝の一三回忌に当たる、その日のことでした。二週間前に逸枝のもとに逝った憲三、そして逸枝は、これをどう読んだでしょう

か、「氏をいたむ念とともに夢想する」ほかありません。

石牟礼の追悼文は、この年の『婦人公論』一〇月号に現われました。「橋本憲三先生の死」と題されたこの文は、表題のとおり、憲三の臨終の様子を再現する描写によって成り立っています。

じっさいこの先生を見ていれば、ご臨終までの経過には上代的ロマンとでもいうべきものが漂っていた。実妹の静子さんは、

「たのしかったですね、兄の死につきあったことは」

と美しいまなざしをされる。わたしときたら、ご生前から『最後の人』と題をつけてノートを書きはじめ、見てもらっていた。死に近づいてゆく先生の心理描写がそこにはいついて、読んでもらったあと、「どんな感想をお持ちですか」とおききすると、先生は父性的なお顔になられて、

「たいへんにおもしろいなあ」とおっしゃるのであった¹⁹。

この間道子は、「最後の人」を『高群逸枝雑誌』に、「椿の海の記」を『文芸展望』に、並行して連載していました。憲三が亡くなったことにより、『高群逸枝雑誌』は第三一号をもって終刊となりました。『高群逸枝雑誌』第三一号と「椿の海の記」の最終回が掲載された『文芸展望』第一三号とは、ちょうど同じ、一九七六（昭和五一）年四月一日に発行されます。それは、憲三が死去するおよそ一箇月前のことでした。そのようなわけで憲三は、『高群逸枝雑誌』の第三一号に掲載された「最後の人 第十八回 第四章 川霧 1」も、『文芸展望』第一三号に掲載された「椿の海の記（最終回）」も、襲ってくる激痛のなかにあって、何とかともに、目を通すことができたものと思われます。

しかし道子は、「最後の人」をすぐにも単行本にして、世に送り出すことはありませんでした。最後まで大事な「最後の人」を秘して自身の胸にしまい込もうとしたのかもしれない。つまり、一八回にわたり連載されたこの文は、思うに、道子から「最後の人」への恋文だったのです。

他方、連載が終了し、書き直しが進むと、「椿の海の記」は、朝日新聞社によって書籍化されます。このときこの本は、次のようなコピーでもって紹介されました。「時は流れ、自然はくるい、人は死んだ。『苦海浄土・水俣』の、椿咲く海辺にその昔どんな世界があったのか……〈不知火の語り部〉と呼ばれる女流がはじめてそのラディカリズムの原点を幽玄の文体で詩情豊かにつづる自伝の詩」²⁰。述べていますように、臨終の際に憲三は、道子に「寒椿が」といい、それに対して道子は、「はい……」と答えました。これが最後の言葉となりました。しかしながら、実際に出版されたのは、この年（一九七六年）の一一月のことで、残念ながら、憲三の存命中には、間に合いませんでした。道子は、『椿の海の記』の「あとがき」で、こう綴ります。

さらに脱稿間近には、高群逸枝さんの夫君橋本憲三先生のご死去をお見送りせねばなりません。出発作の「苦海浄土」のある部分は、この御夫婦の「森の家」で書かせていただいたものでした。御臨終前の幾週間、毎日、「椿の海」は、どれくらい進みましたか、見せて下さい」と朱書だらけのものを仰臥されたままご覧になり、微笑さ

れていました。いま少し生きていて下さったらよかったのにとおもいます。いろいろな方々に助けられて生きている不思議を思います²¹。

この「あとがき」には、この文の前に、こうした一行が、唐突にも挿入されています。

連載中、瀬戸内晴美氏の出家のことがあり、私の生涯にとって、意味の深い出来事となりました²²。

読者は、これをどう読んだでしょうか。字義どおりに読み、おそらくそれ以外の読みには、つながらなかったものと思われまふ。しかし、一九七三（昭和四八）年四月の『文芸展望』の創刊号に道子の「椿の海の記」が掲載されると、次の第二号から瀬戸内晴美の「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」の連載がはじまるも、わずか五回の連載で終了します。その間、瀬戸内は出家し仏門へ入り、他方で憲三は、「日月ふたり」の記載内容に苦しみます。いまや、その憲三は黄泉の客となり、連載を終えた「椿の海の記」が、こうして三年の歳月を経て世に出ようとしているのです。そうした背景に思いを巡らせながら、いま一度この一行に目を向けるならば、どうでしょう、道子の複雑な心情が浮かび上がってきます。瀬戸内の出家の情報は、道子にとって、自身の「森の家」への駆け込みと重なり、生き直しの苦しみにへのただならぬ共感として、重くその胸にのしかかってきたものと推量されます。しかしその一方でこのとき、「日月ふたり」の文が、自らが導師として仰ぐ憲三をいかに悲しませたかをまちかで見っていた道子は、自分の書く文は決してそうであってはならぬという強い思いを胸に深く刻んだものと思量します。生涯、道子は、自分のことや歴史上の人物を主題として書くも、決して存命中の実在人物をモデルにして書くことはありませんでした。しかも、自分が他者を語るのではなく、他者に語らせるところに道子の文の特徴がありました。最晩年に道子は、自伝『葎の渚』を書きますが、それさえも、「森の家」の生活を終えて水俣に帰ってきたところで途切れます。なぜでしょうか。もちろん、執筆を続けるうえでの体力や気力の問題もあったでしょうが、それだけではなく、それ以降のことを書こうとすれば、どうしても生きた他者のことに触れざるを得ず、その過程で、思いもよらぬかたちをとって傷つけ苦しませる事態へと避けがたく発展しかねないことを身に染みて知っていたからではないでしょうか。つまりまとめれば、家を出ることにかかわっては瀬戸内の行為を共有しつつも、書く文については瀬戸内を「反面教師」とすることを内に秘め、道子は、「連載中、瀬戸内晴美氏の出家のことがあり、私の生涯にとって、意味の深い出来事となりました」の一行を、前後の脈略を断って、あえてここに突如吐露したのではないか、これが、私の愚考するところです。

この「あとがき」の最後の語句が、さらに意味深長です。「ことばにうつし替えられないものは心にたまるばかり、わが胸に湧いて動かぬ黒い湖の底から、この一冊を送り出してしまふことになりました」²³。これをどう読めばよいのでしょうか。本文にある自身の生まれ育ちにかかわる黒い内容そのものについて語っているのかもしれませんが。その場合、この語句は、まだまだ書き足りないといった意味になるでしょう。しかし他方で、瀬戸内に対する背後に隠された自身の黒い思いを念頭に、語っているようにも読めます。それというのも、生前憲三が無念の思いで書いた、瀬戸内宛ての手紙を、道子は、発表する機会をいまかと待

しながら、このとき手もとに保持していたからです。これが公開されるのは、もう少し先になります。

年が改まり一九七七（昭和五二）年を迎えました。一月、新評論から河野信子の『火の国の女 高群逸枝』が、続く四月、大和書房から村上信彦の『高群逸枝と柳田国男——婚制の問題を中心に——』が、公刊されました。ふたりはともに、『高群逸枝雑誌』の常連執筆者で、両書とも、この雑誌への寄稿論文をもとにして、おおかた成り立っています。『高群逸枝雑誌』における河野の連載は、最初が「現代の喪失 『女性の歴史』覚書」、続いて「始原の時 『恋愛論』『恋愛創生』覚書」、最後が「女性史の方法覚書」といった連続する三つの主題に分けて、構成されていました。一方の村上は、前半の「高群逸枝と柳田国男」と後半の「私のなかの高群逸枝」というふたつの主題のもとに連載していました。

さらに七月になると、今度は、鹿野政直と堀場清子の共著になる『高群逸枝』が朝日新聞社から上梓されます。これは、「朝日評伝」シリーズのなかの一冊を占めるもので、逸枝に関する最初の評伝となりました。内容的には、「一．出発哲学」と「二．女性史学に立つ」の二部構成をとり、第一部を堀場が、第二部を鹿野が担当しました。「一九七七年六月七日逸枝の命日に」この本の「あとがき」は書かれています。以下の引用は、そこからの一部抜粋です。

この仕事の完成は、それを誰よりも楽しんで待っていて下さった橋本氏の終焉に、間にあわなかった。一周忌の御命日に、二日がかりのツメの仕事を終えたのは、何かの因縁でもあろうか。それにしても、氏から恵まれた信頼と御好意に、はたして私達は応ええたか。できあがってくる本の最初の一冊を、氏の墓前に捧げる瞬間を思う時、心のうちに、たじろぐ²⁴。

おそらく「最初の一冊を、氏の墓前に捧げる瞬間」があったものと思われます。逸枝や憲三に代わって、静子も道子も、深い謝意を表明したにちがいありません。しかしこのとき、静子は、憲三から受け取った遺言書に沿って書籍の整理をはじめていたものと推察されます。熊本県立図書館に所蔵されているこの『高群逸枝』には、寄贈印が押され、そこには、「寄贈 昭和五二年八月一九日 水俣市幸町六一四一 橋本静子殿」とあり、欄外に「憲三氏実妹」と記されています。出版されて、早くも一箇月後に寄贈されたことを意味します。蔵書印には「53. 3. 10」の算用数字が印字されています。この間館内の審議を経て、この日正式に蔵書されたものと思われます。一方、熊本市立図書館の逸枝関係の蔵書を調べてみますと、『東京は熱病にかゝつてゐる』（一九二五年、萬生閣）の蔵書印が「53. 1. 14」となっていることがわかりました。寄贈印はありませんが、蔵書印の日付がほぼ同じですので、『高群逸枝』が寄贈されたほぼ同じ日に、おそらく静子の手によって寄贈されたのではないかと考えられます。熊本市立図書館には、ほかに『黒い女』（一九三〇年、解放社）が所蔵されています。この本は、逸枝から静子に宛てた献呈本です。表紙裏の見返しに、次のような献呈の辞が自筆されています。

風がわりな小説です。散文詩的または寓話的小説とでもいえば、わかりがよいかもしれません。心理的には自叙伝ともいえましょう。私の愛の哲学が語られていると思います。ほんの芽生えにすぎませんが。

日付は、亡くなる二年前の「一九六二年五月」で、文中の「わかりがよい」という語句は、「わかりが早い」と読めなくもありません。

以上のことを勘案しますと、おそらく一九七七（昭和五二）年の八月一九日に静子は水俣から熊本市内に行き、県立図書館に、鹿野直政と堀場清子の共著の『高群逸枝』を、市立図書館に、逸枝の『東京は熱病にかゝつてゐる』と『黒い女』を寄贈したものと思われます。ただ、両図書館とも、このときの寄贈リストが残されていませんので、この日ほかにどのような本が寄贈されたのか、あるいは、実際に図書館を訪れ手続きをとったのが、正確に静子本人だったのか、道子か誰かが代行したのか、そこまでは、現在のところ特定することはできません。

すでに上で示しましたように、憲三が亡くなると道子は、『婦人公論』（一九七六年一〇月）に「橋本憲三先生の死」を書いて追悼し、一方、上梓した『椿の海の記』（一九七六年十一月）の「あとがき」のなかで、心からの謝意を表わしました。しかし、ただそれだけに止まらず、憲三に寄せる道子の追慕の情は、さらにその後も続くのでした。

一九七七（昭和五二）年一月に刊行された季刊雑誌『暗河』第一四号は、「小特集・高群逸枝」を組みました。そのなかに、道子の「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」が現われます。これは、『高群逸枝雑誌』の廃刊で余儀なく中断に追い込まれた「最後の人」の続編、ないしは補遺といった性格のもので、副題のとおり、「橋本憲三氏の死」に臨み、胸に去来する数々の思いが綴られていました。なかでも、憲三が道子に語った言葉として興味を引くのは、次の一節です。といたしますのも、逸枝と自身の関係を、ある視点から見事に告白しているからです。

彼女にしてみれば、知的レベルにおいて、資質そのものにおいて、あらゆる意味において、僕はよほど幼稚にうつって見えるでしょうからね。ただ僕の云うことすることが、どんなことがあっても彼女を裏切ることがない。いうなれば僕への信用ひとつで、彼女はどういたようなものです。

それをあえてしたのは、それがどうしても必要だったからです。必要だったからです。そうするとやはり、そこに一個の生き物が出来た形になって、彼女はその生きものを自分流に、なんと云ったって自分流に仕上げてゆくんです²⁵。

明らかに憲三は、「森の家」での逸枝と自分の関係が、「一個の生き物が出来た形になって」いることを自覚しています。想像するにこれは、二匹の蛇が互いに相手の尾を口にくわえた円形状の双頭の蛇（ウロボロス）のような状態に自分たちがあったことを告白するものではないかと思われます。その話を聞いたとき道子は、その後、逸枝の死によってできた抜け殻に、脱皮した自身が入り込み、三つの巴となって、三者の生命が蘇生し復活していったこの間の過程を、改めて認識したにちがいありません。一方、憲三について道子は、こうも描写します。

……その夫憲三もまた、馴れない人であったように思われる。この異質性については、同じ男性の側の理解者を待ってはじめて解明されるだろうけれど、橋本憲三の生き方は近代進歩主義が生み出したきわめて先駆的で特異な一ケースであったと思われる²⁶。

このように書いた道子には、すでに紹介しています、鹿野政直が憲三を追悼するために『朝日新聞』に寄稿した文のなかにある次の一節が、念頭にあったのかもしれませんが。「もし日本男性史というものが書かれるとしたら、橋本氏は、既成の男性像を身をもって否定した人間として……、いわば「新しい女」にたいする「新しい男」として、位置づけられるのが至当ではなかろうか」。

続く道子の「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」が掲載されたのは、同年（一九七七年）の六月に発刊された『暗河』の第一五号においてでした。そのなかで道子は、憲三をこう讃えます。

一人の妻に「有頂天になって暮らした」橋本憲三は、死の直前まで、はためにも匂うように若々しく典雅で、その謙虚さと深い人柄はせつしたもの的心を打たずにはいなかった²⁷。

この号が世に出るとき、すでに道子の身は、山梨県塩山市の病院にありました。渡辺京二は、このように書いています。憲三の一周忌を迎える一九七七（昭和五二）年の五月のことです。

この頃、道子は体調不良に悩んでいたが、五月上京し、山の上ホテルで雑誌「潮」のための原稿を執筆中ついに病臥、二十六日に山梨県塩山市の中村病院へ入院した²⁸。

他方、道子は、こう書いています。

なぜ山梨に出かけたかと言えば、いよいよ癒し難くなって来た心の病いを哀れんで、橋川文三先生が大菩薩峠の近くの病院に入るようすすめて下さったのである。精神科の病院かと思ひ込んで往ったところ、産婦人科の先生だったので驚いたが、じつはこの中村克郎先生こそが、『きけわだつみの声』の編集者であった。とどこおっている書き物を仕上げるよう、先生自ら机を抱えて来て辞書を引いて下さったり、奥さまも看護婦さんたちもお仕事の進み具合は如何ですかとおっしゃる。合間にかの地の名利を片端から案内して下さい、その間雨乞いの観音さまに出逢うことになった。この世には深い導きの糸というものがあると思うことである²⁹。

道子は、運命の糸に導かれて雨乞いの観音様に会います。そして、それをきっかけに、道子の関心は、沖縄の久高島に残るイザイホーの秘儀へ向かいます。

沖縄・久高島のイザイホウをなんとか垣間見たいと思い始めた直接のきっかけは、山

梨県塩山市の放光寺にある雨乞いの観音さまに出逢い、その無残な姿に激しくとらわれてしまったからだ³⁰。

道子がイザイホーの祭儀を見学するのは、翌年（一九七八年）の暮れのことでした。

ところで道子は、入院に至る症状を「いよいよ癒し難くなって来た心の病い」と書いています。憲三の死と直接関係があったのかどうかは、資料がなく、明らかにすることはできません。しかしながら、静子を立会人として憲三と後半生を誓っていた道子ですので、その喪失感は大しく、少なからぬ精神的な痛手を被っていたのではないかと想像されます。とはいえ、このとき大きな収穫が待ち受けていました。入院中道子は、「かの地の名刹を片端から案内して下さり」、新たに知る幻想世界へと導かれていたのです。このときの収穫は、のちに開花します。そういえるのは、その後道子は、『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）に、イザイホーを題材にした「朱をつける人」を書きますが、この文のなかにあって道子は、「朱をつける人」を憲三に憑依させて、憲三を神格化しようとしているようにも読むことができます。さらにはまた、最晩年に書く新作能「沖宮」にあっては、主人公として登場する、おそらく道子であろうと思われる童女が、雨乞いのための犠牲となって彼方の沖に流されてゆく場面がありますが、これは、このときに出会った雨乞いの観音様の故事に倣ったものではなからうかと思量されるからです。道子は、「この世には深い導きの糸というものがあると思う」という文言で言い表わしています。憲三の一周忌を迎える道子のこのときの心情を察すれば、この文言は「憲三による深い導きの糸」を含意するものであった可能性さえ残ります。

観音様との出会いに力を得て、次第に道子の心身は、回復に向かったものと思われます。それから一年が過ぎた翌年（一九七八年）の六月五日、道子の「忘れられない本」に関する文が『朝日新聞』（一〇面）に掲載されます。「忘れられない本」として道子を取り上げたのは、逸枝の『日月の上に』でした。その本にたどりつくまでの経緯が、前段において詳細に語られていますので、流れに沿って部分的に拾い上げ、つなぎ合わせてみたいと思います。

書物などというものと無縁なままに人生の半ばを過ぎて、気がついたら水俣病の渦中にいた。ほとんど同時にわたしは、高群逸枝の著書と、その生き方に出遭った。

それまでのわたしは新聞を読むことはおろか、読書というものを生活の中に持たない、あるいはそれを許されない南国の海浜の一主婦だった。……

庶民、といわれているその他大ぜい組の暮らし。一地域のそれを知るには、まず郷土史資料を勉強せねばと思ひ始めて、雨の降りなどの、村もおおやけに休む日に、図書館通いを始めた。……徳富蘇峰の寄贈になるその「淇水文庫」には、中野普という館長がおられた。篤実なこの館長に導かれて、入れてもらった資料室の一隅（いちぐう）に、高群逸枝著『女性の歴史』上巻の、ふるびた一冊が置いてあった。

背表紙を見ただけで、全身を痺（しび）れるようなものがつき抜けたのは、異常なことだったが、あまりの無学さと深い飢えのために、幻覚がおきたのだったろう。その時、三十六歳だった。……学問の書として書かれてあるのに、わたしにはむしろ、旧約聖書のように読めたのである。そして彼女の著作には、もっと予言の部分、つまり詩篇（しへん）のようなものがあるのではないかと思った。

こうして道子は、偶然にも、三六歳になる一九六三（昭和三八）年の夏に「淇水文庫」の片隅において逸枝の書物に遭遇しました。しかし翌年に逸枝は亡くなり、実際に会うことはありませんでした。それから月日が流れ、一九六六（昭和四一）年、ついに道子は、逸枝と憲三が長年住んでいた「森の家」に、自身の生き返りを図るために駆け込むのでした。道子の文は、後段へと続きます。

思いもかけず、惨憺（さんたん）たる家に御夫橋本憲三氏とお妹静子さんの訪問を受け、東京世田谷の〈森の家〉に行くことになった。

「心静かにここでお書きなさい。これがあなたのおっしゃる詩篇ですよ」と、憲三氏はおっしゃり、差し出されたのが、理論社から後に『高群逸枝全集』の第八巻として出されることになる、全詩集『日月の上に』の詩稿だった。それはまことに圧巻だった。文字の要る世界も、要らない世界も、いっしょくたの奔流となって、生命界の源をなしている。詩句の技巧などは、彼女の唄（うた）う力に破られて、可憐（かれん）な現代への予言者がそこにいた。

このとき道子が『朝日新聞』に書いたのは、「逸枝とのめぐりあい」についてでした。次の年（一九七九年）、今度は道子は、夢のなかでの「憲三とのめぐりあい」について『毎日新聞』に書きます。書き出しは、こうです。「今年の五月二十三日の朝方に夢を見た。その日は高群逸枝さんの夫君橋本憲三先生のご命日の前日に当たっていた」³¹。夢に出現した憲三は、古い表紙の大学ノート出道子に差し出しました。

「あなたにお渡ししようと思ひましてね、持って来たのですよ」。ご生前私は、彼女に関する資料をいただきたいとお願いしたことは一度もなかった。橋本先生ご死去の直前からそのあとにかけて、彼女の女性史研究の資料をめざして、多くの人たちが意思表示をはばからないのを知って、私はある困惑に包まれた。憲三先生が死の直前まで「彼女のゴミ類」を焼却しようと言われ、妹の静子さんに実行させられたのは周知のことである。そのノートの一冊をあげようといわれて、夢の中ではあり、私は嬉しくもあり、かの困惑にも包まれて、手を出しかねていた。

「彼女を読み解けますよ」と、先生はほほえまれ、インクの消えかかったノートを開いて手渡された。

そこで私は目がさめた。ご命日のことを気にかけていたから、先生が夢の中でノートをくださったのだろう。早く『最後の人』（評伝高群逸枝）を完成するようにとの、ご催促かもしれない³²。

憲三が死して、このとき、もう丸三年が経過していました。「ご命日のことを気にかけていた」道子の胸中は、このように、夢に出るまでの追慕の情でもっていまだ満たされていたのでした。

三. 橋本静子の受難と『高群逸枝雑誌』終刊号の発行

それでは、一方の静子の胸中は、どうであったでしょうか。そのことを見てゆきたいと思えます。

静子は、一九七〇年二月二三日に夫の橋本英雄を亡くしていました。そのときの様子を、生前憲三は、こう書き残しています。

朝食後市立病院に出かけた。妹の静子もあとからやってきた。静子は二月二十三日に夫英雄63歳を失った。英雄はゴルフが唯一の娯楽で一月一日も出水のゴルフ場に出かけてそれをたのしんだのだが翌日発病、たちまち骨髓腫に変じて急逝した。静子はちょうど私が妻を癌性腹膜炎で失った直後とほとんどひとしい状態となり、精密検査しても異常なく、ただ著しく心身の違和感を訴えての病院通いだ。私にも覚えがあることであわれだ³³。

憲三の静子をいたわる心情が、逸枝のことと絡み合いながら、次の文へと続きます。

東京第二病院にあなたを見舞いに航空機で飛んできてくれた夫妻、とりわけあなたが愛した静子。あなたの没後、医者通いをしながら自伝「火の国の女の日記」を整理したり、書き継いだしているひとりぼっちの私をみかねて、二た月のうちの二週間ずつ十回ぐらいやってきて何彼と援助してくれた静子。むろんまだ老齢というのでもないのだからそのうちたちなおるだろう³⁴。

それから六年が立ち、今度は兄の憲三の死を看取ることになりました。すでに引用により紹介していますように、そのときの静子の様子は、道子が記述するところによれば、こうでした。「静子さんこの十日間ほとんどお睡りにならない。……静さんも佐藤さんも髪ふりみだしている、たぶん私も。徹夜」。いよいよ、病床の身にあった姉の藤野が、母屋を出て憲三の部屋に姿を現わします。「若主人におんぶされておいでになる。そしておんぶされたまま肩越しに、よく透る声で、『憲さあん、憲さあん！姉さんが面会に来たばあい。もう、もの言わんとなあ』とおっしゃる。そのお声の愛情、哀切かぎりなく、先生の寝息と交互に、『おお、思うたより、やせちゃおらんなあ。憲さあん、うつくしゅうしとるな』」。

道子は、この藤野について、こう書き記しています。

「憲三夫婦はお国のために勉強しているのだから、わたしたちが養うてやらんばならん」とおっしゃって、水俣の店の収入を存分に森の家に送金しておられた由である。……

姉君は逸枝さんの本は読まれなかったそうだが、「憲三夫婦はお国のために勉強している」というお言葉には、はっとするものがある。人間は何のために勉強するのか、という問題に対して、文字をほとんど読まれなかった方が、「お国のために勉強する」と考えられたとは、深い問いかけをわたしたちに与えずにはいられない。私自身はお国のために勉強するという言葉は思い浮かばなかったけれども、そういう考え

方があったのか、と反省させられる。解釈はいろいろあるだろうけれども、深い説得力がある³⁵。

藤野が生まれたのは、一八九四（明治二七）年でした。一九二七（昭和二）年生まれのだ道子とは、三三歳の開きがあります。そうした世代の生活者たちについて、道子は、こう語ります。

当然ながら、わたしの属している世界の生活者の意識は、活字でものを考える人々のそれとは、ちがう。ここには、生きることを文字で考える作業を、一生しないですます種類の、言語世界が成り立っている。……

自分の育った世界を今おもえば、『遠野物語』や『今昔物語』に象徴されるような世界だった。それが、文字を通して思考せねば生きられぬ人たちと、別世界をなしているのはなぜだろう。そのことへの不思議が、わたしにとりついていた。無文字世界でもある水俣の意識は、ひょっとして、近代化したといわれているこの列島の意識の、大勢を占めているのではあるまいか³⁶。

「文字をほとんど読まれなかった」藤野が発する、「憲三夫婦はお国のために勉強している」という言葉に、道子は覚醒させられます。「生きることを文字で考える作業を、一生しないですます種類の、言語世界」がここにあるのです。つまり、読まなくても、そこに何が書いてあり、それが何を意味するのかがわかる、藤野が属する言語世界に、道子は驚いているのです。これが「無文字世界でもある水俣の意識」であるとするならば、「近代」という文字世界の太波によって、次第にそれは、消し去られる運命を避けがたく宿すことになります。作家としての石牟礼道子が生涯にわたって書いた文の原理は、本人の意思とは無関係に時代によって消し去られてゆく「無文字世界でもある水俣の意識」の蘇生、広く換言すれば、自分自身も含め、時の凶器によって苦しみと悲しみのなかに身を沈める民たちの存在の再生、まさしくその点にあるように思料されますが、その観点に立てば、藤野は、実に石牟礼文学の楚であり、妣としての役割を担ったのでした。藤野同様に、道子自身もまた、逸枝の著作が読めていませんでした。こう、道子は書いています。

彼女へのわたしの関心は、その業績にふれるには、あまりに無学、晩学で、これから勉強しなければならないけれど、水俣病にかかわっているうちに、最初の予定にはなかった左眼の失明や、残りの視力もおぼつかないので、それには触れられそうもない³⁷。

つまり道子は、藤野に遺る「無文字世界でもある水俣の意識」をいまに継承することにあずかって、実質的な「文盲」の立場から、弱き者たちの消えゆく生の実相を文字の内に代弁し続けた人だったように思われます。

藤野は、文字を読まなかっただけでなく、書くことにも困難を覚えていたものと推察されます。以下は、逸枝が死期迫るなか入院するときの見舞いの手紙の一部です。片仮名で書かれています。しかし、その心根は美しく、人を感動へと導きます。

マイニチカミホトケニ、ネンジテイマス。／ヒヨウノシンパイワ、イリマセン。イクラ
イツテモ、ミナマタカラオクリマス。／ビヨウキニ、マケズ、シツカリキバリナサイ、
クンゾ〔憲三〕モアナタモ、ミナマタデオセワシマスカラ、アンシンシテ、ヨウジョウ
ヲシテクダサイ／イツエサマ／フジノ／テガフルエテカゝレマセン³⁸。

憲三の死から二年後、藤野も世を去ります。憲三のときと同じく、立ち会ったのは、女医
の佐藤千里でした。

「憲さーん、逸枝さーん、もうすぐあたしも往くばーい」

「先生、もう何にも見えませんと。そろそろ帰ろうごとある」

こう言いながら昏睡状態に入った橋本ふじのは、昭和五十三年六月十一日、八十四歳
でその生涯を閉じた。……裸一貫から大八車を引いて、水俣市の食料品問屋橋本商店の
基礎を築いた人でもある。ここ十年余り、腎性高血圧で床に臥っていたが、床の中から
家族や従業員の一人一人にまで気を配る様は、憲三がよく口にしていた「家刀自」の呼
称がぴったりだった。

ふじのは、殊の他この弟を愛していたらしく、危篤の憲三を、家人の背に負われて見
舞った時、「憲さーん、憲さーん、がん張らんばなあ」としぼるような声で呼びかけて
いた様が、私には昨日のように思い出される³⁹。

二三年前のことでした。一九五五（昭和三〇）年の四月、「森の家」に憲三の兄弟が集ま
り、兄弟会が開かれました。橋本家には、男四人、女ふたりの六人の兄弟姉妹がいました。
そのとき、出席がかなわなかった水俣に住む藤野に感謝状を書くことになり、逸枝が毛筆し
ました。

感謝状

橋本ふじの様

あなたは、終始父母のために計

りその老後を楽しませること

につとめられました。

また私ども兄弟にも絶えず

愛情を頒たれました

ここに兄弟会東京開催

にあたり記念品を贈り感謝します。

昭和三十年四月十一日 兄弟会

球磨村 橋本秀吉

東京都 橋本憲三

福岡市 橋本武雄

人吉市 橋本袈義

水俣市 橋本静子⁴⁰

このとき作成された感謝状を、藤野は、亡くなるまでとても大事に部屋に飾っていました。続けて佐藤は、このように書きます。

眠っているようなふじのの胸に、妹の静子は壁の感謝状を下ろしてそっと抱かせてやった。野辺の送りをすませた後もその感謝状は、勲何等とやらの勲章よりもっとさん然たる光を放って私の目に灼きついている⁴¹。

こうして藤野は、深い姉妹愛に抱かれて、逸枝と憲三の待つ世界へと旅立ったのでした。藤野が亡くなる前後のことではないかと思われませんが、瀬戸内晴美が、橋本家を訪れてきました。その後に書かれた瀬戸内の文を見ると、このように書かれてあります。

憲三氏があんなに早く亡くなるとは思っていなかったので、その訃報に接した時はショックであった。何より、あれほど気に病んでいた憲三氏の疑いを、きっぱりと晴らす努力をしないまま憲三氏に逝かれたことが辛かったし、悔やんでもたりない後悔に臍を噛まされる思いであった。

私はやはり「日月ふたり」を最後まで書きあげるべきだと思った。そうすることで、憲三氏のこの世で最も気にいられた事柄の答えが出るだろうと考えた⁴²。

瀬戸内がここで、「あれほど気に病んでいた憲三氏の疑い」といっているのは、逸枝と延島とのあいだにあったとされる、瀬戸内が書くところの「情事」のことでしょう。瀬戸内は、連載五回目の「日月ふたり（最終回）——高群逸枝・橋本憲三」の末尾にすでに「（了）」の文字を付していたのですが、どうやらここへ来て、それを再開する気持ちになったようです。瀬戸内の文は続きます。

私はおくれればせながら水俣へ出かけ、憲三氏のお悔やみを静子さんに申しあげた。静子さんはとても喜んでくれて、全くおもいがけないことを私に申しつけられた。憲三氏の戒名をつけてくれといわれるのであった⁴³。

瀬戸内は何を目的に、水俣まで足を運んだのでしょうか。「『日月ふたり』を最後まで書きあげる」意思があることを、わざわざ伝えるためだったのでしょうか。静子は、「日月ふたり」の連載に、憲三がいかに苦しんでいたのかをみぢかに知っていたにちがいはありません。したがって、もし、そうした意向を示すために来水したのであれば、静子は決して「喜んで」瀬戸内を迎え入れることはなかったろうと思われます。あるいは、そのとき本当に静子が「とても喜んで」応対したのであれば、瀬戸内は、自分が書いた「日月ふたり」が憲三を苦しめたことに対しての弁明ないしは謝罪のために来たのかもしれませんが。瀬戸内は、静子が「憲三氏の戒名をつけてくれ」と要請したように書いていますが、しかし、もし自分の罪滅ぼしのために弔問に訪れたのであれば、瀬戸内自らが戒名を申し出た可能性が残ります。静子の書く文のなかにも、戒名のことに触れた箇所があります。「兄の遺言書の第一條に、『葬式ごとは一切しないこと』とあり……そういうことでしたので、兄には法名がなく、のちにおまいりをいただいた瀬戸内寂聴様をお願いして、贈っていただいております」⁴⁴。

しかしながら、兄の遺言を忠実に守ろうとしていた静子本人が、瀬戸内に戒名を願い出るとは、とても考えられません。そこで推測するのは、戒名がないことを静子から聞かされた瀬戸内の方から、憲三に与えた不快感を償うために、戒名を申し出たのではないかということです。そのとき静子は、遺言を理由に、おそらく固辞したにちがいありません。それでも、遠路わざわざ弔問に来た客の申し出をむげに断わることもできず、つい受け入れてしまったというのが真相で、「瀬戸内寂聴様をお願いして」の「お願いして」というのは、瀬戸内の厚意に配慮して、あえて自分が「お願いして」いるようにみせかけた、一種の擬態的な謙讓表現ではないかというのが私の考えるところです。

瀬戸内の文は、さらにこう続きます。

私は母屋の仏間に通されて、心から読経し、世にも不思議な稀有な愛に結ばれた夫妻のために回向した。

私は静子さんに「日月ふたり」を必ず完成すると誓った⁴⁵。

しかしながら、「日月ふたり」の執筆が再開され、完成した形跡はありません。これも、極めて不可解なことです。「必ず完成すると誓った」意思の弱さ、あるいは言葉の軽さだけが残ります。水俣訪問の様子は、次のような語句で終わります。

最も感動したのは、憲三氏の生家で憲三氏の御祖先の仏壇の前に坐った時であった。橋本家の人々の大らかさとあたたかさは、静子さんではほぼ想像できたが、橋本家の方々にお逢いして、いっそうそれが橋本家の家風から生まれるものだということを納得したことであった。この家族だから、逸枝のような人物が受け入れられたのだとうなずけた。神経質な憲三氏だけが、ひとり際立っているように感じられた⁴⁶。

やはり瀬戸内にとって憲三は、理解を超えた異質な人間だったのでしょう。あるいは、そうした憲三像を意図的につくり上げることによって、「日月ふたり」を「(了)」とした原因に仕立て上げようとしたのかもしれません。といえるのは、憲三と藤野の主治医として橋本家の人たちと日常的に接していた佐藤千里の、上でしばしば紹介したどの文のどこにも、「神経質な憲三氏だけが、ひとり際立っているように感じられた」といった瀬戸内の観察を立証するにふさわしい記述は、残されていないからです。「ひとり際立っている」神経質な男として憲三を見る瀬戸内のその異質なまなざしは、「橋本家の人々の大らかさとあたたかさ」が醸し出す接遇のなかにあって、橋本家の人びとに、とりわけ静子には伝わった可能性があります。いやそれどころか、「日月ふたり」のなかでの記述内容はいうに及ばず、瀬戸内の『談談談』における憲三についての描写それ自体についても、おそらくこの間、静子は、兄の怒りを自分のものとして受け止め、大いなる不満を抱き続けていたものと想像します。

それでは、静子の胸の内に隠されていた心情の一端を知るために、ここで少し、それまでの出来事を振り返ってみたいと思います。

一九七四（昭和四九）年の三月二六日に、橋本憲三は、瀬戸内晴美の「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」が掲載された、四月に発売予定の『文芸展望』第五号の見本誌が、筑摩書房の村上彩子から事前に送られてくると、二日後の二八日に、瀬戸

内に宛ててはじめての手紙を書きます。その手紙のなかで憲三は、瀬戸内が書いた内容について、「……というのにはちがいます」「……混同ではないでしょうか」「……といったおぼえはありません」「……のことは私はしりません」「……全く考えられないことです」などといった表現を使って、幾つもの誤謬を指摘するのです。このとき憲三は、自分と自分の妻が、事実と異なる姿でもって世間に公表されたことに、耐えがたい無念と憤慨を感じたのではないかと推量されます。

さらにそれから四箇月が過ぎた、八月七日と翌八日の憲三の「共用日記」には、次のような文字が書き込まれています。

八月七日「石牟礼氏に電話。夕方みえる。みやげものもらう。お茶も。10時に辞去。辺境五と瀬戸内氏の談談談をもらう。睡眠薬服しすぐ就寝」。

八月八日「けさ、談談談を散見したら、一項目、さんたんたる事実無根の記事あり。……」⁴⁷。

瀬戸内晴美の『談談談』が大和書房から出たのは、そのおよそ半年前のことでした。こうして、憲三は、「日月ふたり（第三回）——高群逸枝・橋本憲三——」のなかだけでなく、『談談談』においても、事実無根の記述を見出すのでした。その箇所は、小沢遼子と中山千夏を相手に語る、おそらく次に引用する部分であったのではないかと思います。

瀬戸内 ……だから私は男性で、内助の夫の系列というのを書こうと思って、岡本かな子と一平、高群逸枝と橋本憲三がいいと思って水俣へ行ってみたの。ところがだんだんいろんなことがことがわかってきてね。仲がいいかと思っていたら、その逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくるんですって。

中山 普通との反対みたいね⁴⁸。

憲三は、こうした部分を読んで、「さんたんたる事実無根の記事」と「共用日記」に書き付けたものと思われます。瀬戸内が水俣の憲三宅を訪ねたとき、本当に憲三は、このようなことを瀬戸内に話したのでしょうか。憲三が瀬戸内に会ったのは、一九七三（昭和四八）年の二月一日のことで、このときがはじめてです。しかも、面談したのは、「共用日記」によれば、午後の八時三〇分から一〇時五〇分までの二時間と二〇分です。「その逸枝さんが婦人戦線をやっている若い頃、しょっちゅう男を作って飛び出していくので、憲三さんはすたこら追いかけて、つれてくるんですって」といった内容のことを、憲三が初対面の瀬戸内に二時間余の短い会話のなかにあって語ったとは、とても信じがたいことです。瀬戸内のこの一文に接した憲三は、おそらく仰天したにちがひありません。

仰天したのは憲三だけではなく、静子も同じだったものと思われます。その瀬戸内が、憲三が亡くなったあとに、弔問に訪れるのです。静子の瀬戸内を見る目が厳しかったであろうことは、容易に想像されます。たとえ、「兄には法名がなく、のちにおまいりをいただいた瀬戸内寂聴様をお願いして、贈っていただいております」と静子書いているにせよ、そのこと自体憲三の遺志に背くものであり、法名が授けられたからといって、瀬戸内に向ける静

子の懷疑と不信の念が氷解したとは到底考えられません。生前憲三が道子に託していた瀬戸内宛ての手紙が、そののち、静子と道子の編集になる『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）に掲載されることからしても、それは明らかです。何といてもこの手紙は、「日月ふたり」の内容に関わる憲三の苦悩が凝縮したもので、瀬戸内へ向けた反駁であり、抗議でもあったのでした。

瀬戸内の弔問の目的が真に何であったのか、それに対して静子がどう対応したのか、瀬戸内の文以外に資料がなく、不明な点が多く残されているように感じられます。いずれにしてもこの時期、静子にとっては、夫の英雄、兄の憲三、そして姉の藤野の三人の肉親を立て続けに亡くし、傷心の日々が続いていたものと思われます。そうしたなか、一九八〇（昭和五五）年の秋のある日、一冊の本が集英社から送られてきました。見るとそれは、集英社刊の円地文子監修『文芸復興の才女たち』（近代日本の女性史 第二巻）でした。これは、女性史に関する論集で、そのなかにもろさわようこが執筆した「高群逸枝」がありました。読み通した静子に、体の震えが止まらない、大きな憤りが吹き出してきたにちがいありません。何ゆえに、こうまで兄が罵倒されなければならないのか——。さっそく静子はペンを取り、もろさわに宛てて手紙をしたためました。これが、すでに廃刊となっていたはずの『高群逸枝雑誌』が息を吹き返し、「終刊号（第三二号）」として発刊されなければならなかった動機となる部分でした。この誌面に、その手紙は掲載されます。

それでは、一九八〇（昭和五五）年一二月二五日に刊行された『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）の「編集室メモ」に目を向けてみましょう。ここに、橋本静子と石牟礼道子のそれぞれの名で、ふたつの文が所収されています。静子の文の前半部分に、この号を出すに至った背景が書かれてあります。長くなりますが、これこそが静子のころではないかと思われるので、そのまま引用します。

『高群逸枝雑誌』は兄がひとりの手作りをたのしんだもので、私は終始を門外に居ました。家の孫三人に続いて同居の従業員夫婦の三人の子守りをしなければならず、姉が倒れて寝たままとなったりの事情などもありました。兄の没後も四箇年を過ぎました今、集英社の本に触発されました形で不本意にも終刊号を借ります仕儀となりましたことをなにとぞお許しく下さいませ。また、兄生前をお支えいただきましたことを遅ればせながら深く御礼申し上げます。まことにありがとうございました。

『高群逸枝雑誌』を身近かにお支えくださいました石牟礼道子様お一人だけに事情を申し上げて終刊号を諒承していただきました。志垣寛様の御遺族の志垣美多子様、村上信彦様、鹿野政直様には、それぞれの玉稿の転載を御許可いただきましたことを厚く御礼申し上げます。編集は、水俣在住中の数少ない兄の知友であられた渡辺京二様をお願いしました。渡辺様は雑誌『暗河』の高群逸枝小特集の件で私宅をお訪ね下さったこともあり、その御縁を頼らせていただいた訳でございます。兄の主治医であられた佐藤千里様には、精神安定剤や栄養剤をおねだりしましたばかりでなく、おはげましや有益なご助言をいただきました。ただありがたく、御礼を申し上げる言葉もございません。失礼をいたしましたことはなにとぞ、御あわれみで御寛恕くださいますよう、臥してお願ひ申し上げます。

あたたかい陽ざしの此の頃を、兄夫婦の墓家と下段の私どもの墓家を毎日訪ねてい

ます。レリーフによりかかりますと、途端に私は八歳の少女になり「イツエねえちゃん。どうしよう？」とたずねます。「静子さん、もういいのよ。あなたもここにいらっしやい」と声が返って来たように思いました。人は皆、死ぬことに決まっているのに。「お手紙」を書いたことにところがいたみます⁴⁹。

一方、道子の文には、こうした文字が並びます。後半部分の一節です。

思えば逸枝が古事記伝一冊を机上に置いて、研究生活への第一歩とした三十七歳と同じ歳に、そこへゆくことを許された私は、小学校国語読本によって初めて文字と出逢ったものの、女学校にもゆけなかった。逸枝にくらべれば文盲に等しく、帰郷した後も勉強し表現することがはばかれる身であった。そのようであったゆえに、誰にも気兼ねせず、あまつさえ夫に助けられて学問をした女性がいた、そのことを知っただけで、わたしの内部に核融合反応のような事が起きた。

役に立たない同人を先生はお叱りにならず、水俣病のことで書くビラにお目を通され、失明寸前を発見して頂き、医者につれて行って下さった。

お言葉の数々をテープに採らせて頂けばよかったが、不器用で思いもつかなかった。後世の為に如何ばかり意味を持ったかと悔まれるが、堀場清子氏による「おたずね通信」が残されたことは私どもの喜びである。

折にふれて洩らされる御言葉を私は、卓越した思想家、批評家の言として拝聴した。真の意味のラジカルさを身をもって行った人の言葉はじつに透明であった。御臨終には主治医の佐藤千里氏が立ち合われた。その間のことは『草のことづて』（筑摩書房刊）に記したのでここでは割愛した⁵⁰。

この『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）は、次の論考で構成されていました。

もろさわよう子様へ 橋本静子
高群逸枝の入院臨終前後の一記録 橋本憲三
終焉記 橋本憲三
高群さんと橋本君 志垣寛
瀬戸内晴美氏への手紙 橋本憲三
橋本憲三氏の生涯 鹿野政直
高群逸枝の女性史学 村上信彦
朱をつける人 石牟礼道子

最初の「もろさわよう子様へ」と最後の「朱をつける人」に挟まれた論考は、いずれも旧稿からの転載であり、本稿においてもすでに引用も含めて言及していますので、ここでは、静子の「もろさわよう子様へ」と道子の「朱をつける人」に限定して、触れることにします。静子の文は、次の言葉ではじまります。

集英社から『近代日本の女性史』第二巻が贈られました。この本のもろさわ様の御担

当になる『高群逸枝』を拝見しましたので、初めてお手紙を差上げます。

兄憲三をいわれもなく侮辱されていますし、二人の四十五年の共生が憲三の卑しい志のゆえんであったと、意図してお書きになっているように思います。憲三には、いずれも「普選会館」のかかわりで二度の面識と言われながら、二回の瞥見で他人の七十九歳の生を斬られたことは無謀だと思いました。

昭和三十九年（一九六四）六月十日、逸枝の代々幡葬祭場における葬儀で、「憲三の妹静子」（二〇七頁）としてお見知りいただいているようでございますが、逸枝国立東京第二病院入院前後の時にも私はもろさわ様を存じあげていません。……

文章とは無縁で一行の活字ありません。性格は父母からの血が流れており、理不尽に対しては正直に腹を立てますから、おとなしい方だとは申されないかも知れません。生来、お茶目だと言われています。地位、名声、職業、風采などでは人を見ず、品性や志、それと人柄のあたたかさ、詩情などの情感にひかれます……

姉逸枝の国立東京第二病院前後にかかわりました遺族のうち、ひとりの生き残りでもありますので、兄憲三のことと合わせて、私の見たこと、感得したことをお伝えしたいと思います⁵¹。

こうした前書きのあと本論に入り、もろさわの文のもつ誤謬や偏見の数々を、その頁を明記しながら、指摘してゆくのでした。

それでは、もろさわとは、どのような人だったのでしょうか。もろさわ自身、この「高群逸枝」のなかで、自分のことをこう記しています。「橋本憲三を私が見知ったのは、『招婿婚の研究』を頒布するため、高群逸枝著作刊行後援会の事務局が、普選会館に設けられた昭和二十七年（一九五二）だった。そのころ私は、やはり普選会館に事務局を持つ日本婦人有権者同盟の事務局に勤務、機関紙の編集をしていた」⁵²。では、もろさわが書いた「高群逸枝」とは、どのような文だったのでしょうか。この文は、節の番号は付されてありませんが、「その死をめぐって」「詩と真実」「愛と自由」「所有被所有をこえて」の四節で構成され、後ろの三つの節が、逸枝に関する評伝になっています。もろさわ本人が書いていますように、使われている参考文献が、『高群逸枝全集』全十巻（理論社）、『高群逸枝』（鹿野政直、堀場清子著・朝日新聞社）、『娘巡礼記』（高群逸枝著・堀場清子校訂・朝日新聞社）、『火の国の女 高群逸枝』（河野信子著・新評論）といった、多くは既知の二次資料の類であるため、その記述内容に目新しさはほとんどありません。それだけではなく、第一節に相当する「その死をめぐって」が、なぜその後に続く評伝の導入に使われているのかも、その必然性と整合性に鑑みて疑問が生じます。ここに、もろさわ独自のある意図が隠されているように感じられます。静子の目を引いたのは、まさに、この「その死をめぐって」という一節でした。内容は、逸枝の入院と葬儀に際しての、市川房枝をはじめとして、もろさわ自身を含むその取り巻きが感じ取った憲三への不満であり、そのことが、憲三への恨みとなって現われているのです。両者間の確執については、すでに第一章「夫の姉妹からの援助、『望郷子守歌』の建碑、そして最期」の「四．葬儀後の残照」と第一三章「高群逸枝を顕彰する力とそれに水を差す力のはざま」の「四．高群逸枝巡礼者たちの水俣訪問と橋本憲三の最晩年の失意」において詳述していますので、もはやここで繰り返すことはしませんが、静子の目には、「兄憲三をいわれもなく侮辱されていますし、二人の四十五年の共生が憲三の卑し

い志のゆえんであったと、意図してお書きになっているように思います」と、映ったのでした。

そして静子は、「もろさわよう子様へ」を次の言葉で結びました。

何ヶ月か前に、郷土紙上の市川房枝様のお名前が出ている記事で、憲三のことがあしざまに書かれていてはらが立ったと、近親者からも聞いています。今回のことといい、何度もむしかえし活字になさねばならないお心が理解できません。

私は文筆とは無縁で、一行も活字にした経験はございませんが、亡兄の縁にせがみ、『高群逸枝雑誌』終刊号の誌面を借りて、当面した一人だけの生存者として、真意をお届けいたしました。

昭和五十五年十月二十五日記⁵³

それでは次に、道子の「朱をつける人」を見てみたいと思います。一九七八（昭和五三）年の暮れ、道子は、沖縄の久高島に行き、その地に残るイザイホーの名で知られる祭儀を見学しました。道子はこう書きます。「一二月一四日（昭和五十三年）初日の『夕神遊び』から始まった神事の第三日目、『花さし遊び』の日が、とりわけわたしには感銘深く思われた」⁵⁴。「『夕神遊び』から始まった祭儀は三日目に入り、『花さし遊び』の中の『朱つき』『朱つき遊び』へと展開してゆく」⁵⁵。

イザイホーは、三〇歳を超えた島の既婚女性が神女となるために行なわれる、一二年に一度開催される一種の通過儀礼で、そのなかのひとつの儀式が、根人と呼ばれる男性主人が、ナンチュと呼ばれる巫女の額と両頬に朱印をつける神事です。道子の論考の題に用いられた「朱をつける人」は、そこに由来します。

静子が、もろさわの「高群逸枝」について、その誤謬を正そうとして正面から論じたのに対して、道子は、背後に回り、そのなかで侮蔑的に描写されていた逸枝と憲三を救い出そうとして、論理的にというよりは、むしろ詩的に、ふたりに備わる幾多の美質を説こうとします。道子は、まず、こういいます。

……本稿は、『高群逸枝雑誌』の発刊と終刊に立ち会いながら、ただただ無力でしかなかったひとりの同人として、森の家と橋本憲三氏の晩年について、いまだ続いている服喪の中から報告し、読者の方々への義務を果たしたい⁵⁶。

憲三の死から四年が過ぎてなおも服喪に身を置く姿を見ると、単なる「ひとりの同人」の域を超えた道子の、「森の家」で静子を立会人として「高群夫妻とそして自分とに、後半生を誓った」⁵⁷決意が蘇ります。道子は何としてでも、敬愛する逸枝と憲三を、落とされた闇のなかから救済し、その名誉を回復せねばならないのです。それが、道子が自覚する、まさしく「義務」だったのでした。道子は、こう書きます。

死の数日前水俣から上京して、病院を見舞った義妹の静子さんに、「森の家に行ったら、ぜひ『留守日記』を読んで下さい」とわざわざ彼女がいったのは……森の家に帰りたいのを訴えていたのではあるまいかと思えてならない。

私どもが夫婦の生き方に心をゆすぶられてやまないのはなぜなのか、愛の形はいろいろあろうけれども、この二人においては徹底的に相手に対して真摯にむきあい、慢性的な弛緩やなれあいが、みじんも感ぜられないからであろう⁵⁸。

そして憲三については、こう書きます。道子は「森の家」で、自身の出発作となる『苦海浄土』の初稿となる「海と空のあいだに」を書いていました。

その後の著書はすべて『椿の海の記』に至るまで、師が最初の読者、批評者であった。いかに透徹し卓越した批評家であられたことか。水俣のせんすべない事情はえんえんにひき続き、今に至るも恩師から託された御志を果たせないでいる。御死去に逢い、はなはだしい気落ちからいまだに立ち直れないのである⁵⁹。

道子が「久高島で十二年に一回、^{うまどし}午年に行なわれるイザイホーの神事をまのあたりにした時、胸に去来してやまないことがあった」⁶⁰。それは道子にとって、「今は亡き森の家のふたりに、生命の奥の妙音を聴くような、あるいは生命の内なる宇宙の、光源の島にたどりついたような秘祭」⁶¹だったのでした。道子は、「朱をつける人」を、次の言葉で結びます。

深い感動の中において、「花さし遊び」^{アジ}の中の朱つけの儀式、素朴な木の臼に腰かけているナンチュと、その額にいましも朱をつけるようとしている根人の姿に、著者には高群逸枝とその夫憲三の姿は重なって見え、涙ぐまれてならなかった。

逸枝がいう憲三のエゴイズムは、男性本来の理知のもとの姿をそのように云って見たまでのことであつたろう。その理知とは究極なんであろうか。久高島の祭儀に見るように、上古の男たちは、懐胎し、産むものにむきあつたとき、自己とはことなる性の神秘さ奥深さに畏怖をもち、神だと把握した。そのような把握力のつよさに対して女たちもまた、男を神にして崇めずにはおれなかった。そのような互いの直感と認識力が現代でいう理知あるいは叡智ではあるまいか。

憲三はその妻を、神と呼んではばからなかった⁶²。

こうして、もろさわから憲三に浴びせられた罵声への反論として書かれた、道子の「朱をつける人」は終わります。

それでは、もろさわの文から引用して、少し検討を加えてみたいと思います。もろさわは、最初の節である「その死をめぐって」のなかで、普選会館ではじめて見知ったころの憲三の風采を、このように描写します。

憲三は少年のおり傷つけた左眼が失明しているため、首をいささか左にかたむけ、肩をいからせ勝ちにしていた。物資のない戦中に使われた粗末ななわ編みの古びた買い物袋をいつも下げて持ち、膝のつきでた古ズボンをはき、ちびた下駄をせかせか飛び石に鳴らして、普選会館へ入ってくる彼は、その気配に都会人のダンディズムはみじんもなく、野の少年のひねこびたなれの果てといったおもむきの人でもあった。それから絶えて会うことがなく、十年余の歳月があつたのだが、彼は当時と同じく、大人の男の気配

を相変わらずその身に宿してはいなかった⁶³。

さらにもろさわは、憲三の人となり、こう描きます。なかに出てくる「逸枝の業績と人柄を敬愛する人びと」とは、「逸枝の著作生活について、物心両面の支援を長くつづけてきた市川房枝や、逸枝が主宰した『婦人戦線』時代の同志鎌田貞子、晩年の逸枝のもとに繁く出入りしていた浜田糸衛と高良真木ら」⁶⁴を指します。

おもいを妻に密着させ、他者への配慮を欠く憲三の自己中心的な態度は、ことあるごとにあらわれたらしい。逸枝の業績と人柄を敬愛する人びとは、それを妻を愛するが故と、なかば苦笑しながら許していたらしいが、逸枝の亡くなった夜、それらの人びとと憲三との間におきた確執は、妻の死をコマーシャルベースにおいて広告しようとする憲三に対する反発からはじまった⁶⁵。

妻の死亡広告を新聞に出すことは、逸枝の両親の例に倣ったもので、妻の死に対する夫の最大の儀礼を示すものでした。その記述に続けてもろさわは、霊安室での市川房枝と憲三の言葉のやりとりと決裂に至る瞬間を詳述します。他方、最終節の「所有被所有をこえて」にあって、もろさわは、その末尾に、次の語句を当てます。

逸枝はらいてうの「忠実な娘」と自称しているが、その史的業績は、らいてうにまさるとも劣っていない⁶⁶。

すでに指摘していますように、「その死をめぐって」と、その後続く「詩と真実」「愛と自由」「所有被所有をこえて」とのあいだには、大きな断絶があります。前者において、夫憲三の野暮で自己中心的な態度が強調され、後者において、妻逸枝の史的業績が称讃されます。こうした叙述の構図に、夫と妻、つまりは男と女のあいだにくさびを打ち込もうとする、際立つもろさわの意図が感じ取れなくもありません。上で道子が述べていますように、逸枝と憲三は、「徹底的に相手に対して真摯にむきあい、慢性的な弛緩やなれあいが、みじんも感ぜられない」夫婦であったにちがいありません。ふたりは、理想とする「一体化」を目指し、完遂したのです。もろさわには、それへの理解が乏しかったように思われます。それが、「女性を善、男性を悪」とみなす、単純な図式が支配する、埋め込まれた固定概念、あるいは、刷り込まれた偏見に由来するものであったのかどうかはわかりませんが、少なくとももろさわは、逸枝と憲三の夫婦が見せたひとつの真実の愛のかたちを見誤っていたことだけは、確かでしょう。他方、このとき以来、市川房枝と、もろさわのような、彼女に忠誠を尽くすそのグループの女性たちは、憲三と絶交します。しかしながら、逸枝にとっての最大の支援者のひとりであった平塚らいてうは、自身の死が訪れるまで、憲三に寄り添います。その違いは一体何だったのでしょ。か。学者への援助のあり方、夫婦としての存在の仕方、人の死を洞察する力等にかかわって、一考に値するテーマかもしれません。

静子の「もろさわよう子様へ」と道子の「朱をつける人」を掲載した『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）は、千六百部印刷され、定期購読者のほかに「全国国公立大学の文学部法学部図書館、全国国公立図書館、全国主要新聞社本支社、主要雑誌社・図書出版社、女性

史関係機関」⁶⁷等に寄贈されました。

年が明け、一九八一（昭和五六）年を迎えました。終刊号発行に関する『朝日新聞』の取材に、道子は、次のように応じました。

同人は憲三先生と弟子の私のふたり。実際にはお手伝いもできぬままであった。終刊号をいつにするかと思っているうちに、妹さんがもろさわさんに長い手紙を書かれた。また憲三先生が書き残されたものもあった。この雑誌は逸枝ファンのための雑誌。それらを読者にお渡しするのが、遺族と、同人の義務と考え、ここに集録し、終刊号としました⁶⁸。

このインタビューは、一月一四日の「点描」欄において、「32号を発行して終刊『高群逸枝雑誌』」という見出し記事のなかで紹介されました。それに対抗するかのよう、今度はもろさわようこが、『毎日新聞』に寄稿します。以下は、二月二六日の「視点」欄に掲載された、もろさわの「市川房枝さん」の一部です。

市川さんとはまったく無関係に、私が執筆した文章が原因になり、昨年末、市川さんに対する誤解をもとに編集された小雑誌が出た。このことについて市川さんは、誤解にもとづく悪口は言われ馴れている、事実とはかならずあきらかになることを信じているので、気にしていませんと、潤達に笑っていた⁶⁹。

続く三月、今度は『朝日ジャーナル』が、この『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）を取り上げました。まず、このような導入の文からはじまります。

キラと光りつつ、はじらう風情で南九州の片すみから出されていた『高群逸枝雑誌』の終刊号が昨年末に出た。この雑誌は、女性史学の創始者・高群逸枝（一八九四—一九六四）と一体の存在であった夫の橋本憲三が、亡妻の魂を抱きつつ編集していたものであり、七六年五月、憲三の死後、妹の橋本静子がいち早く終刊を宣言していたから、あらためての終刊号に、おや？ と思った人も多かろう。

静子による「編集室メモ」によると、この刊行は「集英社の本に触発され」てのことだという。「集英社の本」とは『近代日本の女性史2 文芸復興の才女たち』で、静子を“触発”したのは終章の「高群逸枝」（もろさわようこ）の憲三認識のありようなのだが、いまはそれに触れる暇はない⁷⁰。

この記事の執筆者は、もろさわの「高群逸枝」に触れることはありませんでした。しかし、この間のこの雑誌を、以下のように、高く評価します。

雑誌は消えたが、そのなかからいくつかのすぐれた研究書が生まれた。『高群逸枝と柳田國男』（村上信彦、大和書房）、『火の国の女・高群逸枝』（河野信子、新評論）、『両の乳房を目にして』（石川純子、青磁社）は雑誌連載をもとにしてできたものであり、初の本格的評伝『高群逸枝』（鹿野政直・堀場清子、朝日新聞社）も、この雑誌な

くしては生まれなかった⁷¹。

最後に執筆者は、この記事をこう締めくくります。

そしてこの五月、橋本憲三・堀場清子による三千枚に及ぶ『わが高群逸枝』が朝日新聞社から出版される。石牟礼道子のライフワーク『最後の人』が一日も早く完成されることを祈る⁷²。

『朝日ジャーナル』に『高群逸枝雑誌』終刊号についてのこの書評が出たとき、静子は、七〇歳になっていました。あえて終刊号として『高群逸枝雑誌』を発行し、憲三が書き残していた「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」「終焉記」「瀬戸内晴美氏への手紙」の三つの文と、それに加えて自身の「もろさわよう子様へ」の手紙とを、広く世に公開したいと、静子には、これまでに受けた度重なる兄への攻撃に対して、少しは撥ね返すことができ、なすべきことはすべて成し得たという安堵の気持ちがあったにちがいません。またその一方でこのとき、「編集室メモ」に書かれてあるように、「イツエねえちゃん。どうしよう?」「静子さん、もういいのよ。あなたもここにいらっしゃい」というふたりが交わした会話を、深く胸にしまい込んだかもしれません。これ以降、逸枝や憲三にとって不名誉となる、他者が浴びせる言動に、もはや静子は口を開くことはありませんでした。

他方で道子は、このとき五四歳になっていました。『朝日ジャーナル』のこの記事は、道子のことを、「憲三が亡妻の幻影をそこにみてたよりにした同人・石牟礼道子」⁷³と形容しました。「朱をつける人」を書いた道子の方は、憲三のことを、逸枝に対してだけでなく、自分にも朱をつけてくれた人として受け止めていたにちがいません。道子にとって憲三は、「最後の人」であると同時に、「朱をつける人」だったものと思量します。

四．高群史学に対する批判と橋本静子の死

橋本憲三と堀場清子の共著『わが高群逸枝』（上下二巻）が、朝日新聞社から上梓されるのは、『朝日ジャーナル』にあるようにこの年（一九八一年）の五月ではなく、実際には、九月まで待たなければなりません。この『わが高群逸枝』は、神奈川県に在住する堀場が尋ね、熊本県の水俣に住む憲三が答えるという、距離を隔てた郵送による一問一答の形式で、憲三が死去する直前までの約一年半続けられた「おたずね通信」と呼ばれるものを集成したものでした。

すでに書いていますように、堀場清子と夫の鹿野政直が、はじめて水俣の憲三宅を訪問したのは、一九七四（昭和四九）年の九月のことでした。目的は、朝日評伝の一冊として『高群逸枝』を執筆するに当たっての基礎調査にありました。しかしそのとき、すでに憲三の体調は優れず、加えて、瀬戸内が『文芸展望』に連載していた「日月ふたり」の内容に苦しめられ、精神的に傷を負った状態にありました。そのため、十全に質問ができなかった堀場は、その後、質問状を書いていいかを憲三に問い合わせました。以下は、それへの返信内容です。

こんごいろいろご質問いただけますこと、大よろこびです。／ご質問は、ききづらい

こと、常識的？には意地悪いと考えられそうなことがらでも、いっさいごしんしゃくなくお願いいたします。ありのままを（私自身が知っていることなら）正直にお答えできると思っています。真実に近づくためには⁷⁴。

このとき、病床に臥す憲三には、死期が近づいているという意識があったでしょうし、一方で、瀬戸内の文にみられるような事実と異なる内容が今後次々と書き継がれてゆくことを恐れる気持ちもあったでしょう、そこで憲三は、堀場を信じ、自分の知る真実のすべてを伝え、いつの日か公開されることを望んだものと思われます。そうした憲三の思いは、瀬戸内へ宛てた手紙を道子に預けたことに、すでに現われていました。『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）に掲載された「瀬戸内晴美氏への手紙」の冒頭の注に、それを見ることが出来ます。

＊本稿は橋本憲三の瀬戸内晴美氏への私信の写しである。故人は石牟礼道子に「この写しはあなたに参考にしていただこうと、氣息えんえんながら起きて書いたものです。雑誌にいつかのせる気になるかも知れないとの潜在意識もあったらしくて」と書き添えて本稿を託した⁷⁵。

今度は、憲三は、「おたずね通信」を堀場に託すことを決意しました。こうして憲三と堀場の「おたずね通信」ははじまったのです。その間の事情を堀場は、『わが高群逸枝』（上）の「解説」のなかで、このように記しています。

昭和四十九年十二月のはじめ、四十一問の「おたずね第一信」を発送した。……こうしてはじまった一問一答を『おたずね通信』と名づけて、通し番号をふり、第一次目標を千問、第三次目標の三千問までは達したいとしたが、昭和五十一年五月二十三日の橋本氏の逝去によって、七百五問で中断した。亡くなる前日、別れの言葉とともに、氏は『おたずね通信』の束を私に托された⁷⁶。

一方、『わが高群逸枝』（下）の「あとがき」において堀場は、まずその冒頭で、あるひとりの女性に対して謝辞を書きます。

『おたずね通信』が交わされていたころ、橋本憲三氏のお手紙の中に、毎回のよう記されてくるお名前があった。「嫌な顔もせずにコピーしてくださるので、ほんとうに助かります。」「これからコピーをお願いに行くところです。」といったように。水俣市役所にお勤めの、新田とし子氏がその人である。当時水俣の町には、鮮明に写るコピー機が少なく、昼休みの一時間だけ、市役所のそれが市民の使用に開放されていた。新田さんは高群逸枝への共鳴者で、以前から橋本氏の編集事務のために、昼休み返上でコピー奉仕をしていられ、『おたずね通信』に関するいっさいのコピーもまた、新田さんのご好意に依存することとなった⁷⁷。

「あとがき」の最初に無名の女性の献身に謝意を示すところに、著者の人柄の一端を知る

ような気がします。続いて、堀場の謝辞は、静子へと向かいます。

橋本憲三氏の令妹、橋本静子氏からいただいたご協力に対しては、どんな言葉をもつてきても、私の謝意をあらわすに足りない。高群・橋本夫妻への、氏の愛と傾倒のおお^{ママ}いさを想い、黙して、ただふかく敬礼する⁷⁸。

その静子は、この、兄の遺作でもある『わが高群逸枝』をどのように読んだのでしょうか。最も知りたかったことは、兄が「瀬戸内晴美氏への手紙」のなかで、かくも苦しみを訴えていた、逸枝と延島の関係の真実だったのではないかと思います。堀場は、こう書いていました。

この「事件」について、断定的な発言をするだけの材料を、私はもたない。だから、私なりの疑問点と、高群逸枝という人間に対する私なりの解釈とを記すに止めたい⁷⁹。

このように前置きして、堀場は、疑問点を指摘します。それを短くまとめると、次のようになります。

(1) 農民自治会婦人部に加入する過程を見ても、『婦人戦線』に書いた主要論文が夫の延島英一による代作であったことからしても、松本正枝が語る、夫と逸枝の「恋愛事件」だけが、無作為のものであるとは、考えにくい。

(2) 「事件」が破局を迎える昭和六年の春までの半年間、連日延島は逸枝のもとに足を運び、性的関係があったように松本正枝は語っているが、住井すゑの証言によると、延島が毎日通っていたのは住井家であり、ましてや、憲三が在宅している家を、延島が頻繁に訪問することは、事実上不可能だったのではないかと思います。

(3) 一部のあいだで「憲三不能説」が根強く流布しており、これが原因で逸枝が延島に走ったという発想が導き出されている向きもあるが、夫との「一体化」を誓った妻が、それほど欲求不満を抱いていたとは考えにくい。

(4) 「恋愛事件」があったとされる半年間、同人の誰ひとりとしてそのことに気づかなかったのは、不思議に思える。他方、瀬戸内の「日月ふたり」でその「恋愛事件」が明るみに出ると、同人みな、一様に、それを事実として受け入れたらしい点が、印象深い。

(5) 昭和五年の年賀状に、逸枝は、これから研究生活に入ることを明言しており、この後の『婦人戦線』の刊行は、逸枝にとってはあくまでも「寄り道」であり、「恋愛事件」の破局が廃刊の原因であるとする意見には疑問が残る。

そして堀場は、「私の逸枝解釈としては、どうしても『事件』の否定へと傾かざるをえない」⁸⁰という言葉をもって、この問題の結論とします。

これを読んだとき、静子と道子は、胸のつかえが降りたような、晴れ晴れしい思いに駆られたにちがいません。静子は、さっそくこの本を瀬戸内に送りました。「瀬戸内晴美氏への手紙」が所収された『高群逸枝雑誌』終刊号(第三二号)も同梱したかもしれません。

道子も、満を持して一文を草しました。道子が着目したのは、瀬戸内の「日月ふたり（第三回）——高群逸枝と橋本憲三——」のなかの、逸枝を描写した次の箇所でした。松本正枝の視線から描かれています。

駅からわが家の方への一本道を歩いていくと、向うから逸枝が歩いてくる。今日もきれいに化粧して、袂の長い派手な着物を着た逸枝は、少女がするように、長い袂を両手で持ってひらひら蝶々のように両脇で躍らせながら、浮きたつような足どりでステップをふんでくるのだった。人の目も全く眼中にないように、その姿は何か抑えきれぬ喜びをそういうそぶりであらわしているとしか見えなかった。

よほど嬉しいことがあるにちがいない、まるで子供のような人だ。ずっとそんな逸枝の姿を見つめながら正枝が近づいて声をかけると、逸枝は雷に遭ったように硬直して路上に突っ立ってしまった。大きな目をうつろに見開き、息もとまったように正枝をみつめてあえいでいる。

「どうなさったの、うちへいらっしゃったんじゃないの、延島はいませんでしたかしら」

その道はわが家への一本道なので、正枝はこう問いかえした。逸枝はようやく夢からさめたように、

「あなた、まだ会社じゃなかったの、どうなすったの」

と訊いた。詰問するような調子に、正枝はふたたび驚かされた。逸枝はそんな正枝の横をすりぬけると、挨拶もせず駅の方へ走り去っていった。

家に帰ると英一が同じように愕いた表情で迎えた⁸¹。

道子が筆を執ったのは、『思想の科学』へ寄稿する「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」でした。それは、年が改まった一九八二（昭和五七）年の一月号に姿を現わしました。道子は、上の文を引用すると、それに続けてこう書きました。

逸枝亡きあとに書かれたこの作品を読まれて憲三氏の苦悩は深刻だった。長い袖を両手に抱え、蝶のようにひらひらゆくような逸枝をかつて見た覚えがないといわれるのである。……正枝氏はそのような逸枝を、ご自分の夫君と愛を交わした姿と受け取られ、瀬戸内氏も、憲三との一体的夫婦の伝説がやぶれ逸枝に恋人がいたとされているのだが、わたしはそこに立ち入る気はない。逸枝は憲三氏の眼に触れるように延島氏からの求愛の手紙を常にそれとなく机辺に置いており、その間の事情と処理については、憲三氏自身の手記が残されている。（『高群逸枝雑誌』終刊号）⁸²

そして道子は、逸枝のその姿に、表題のとおり「本能としての詩・そのエロス」を見ているのであって、最後にこの文をこのように結ぶのでした。

蝶のように浮き立つ足どりの逸枝はじつは詩の刻の人なので、健全な日常にいきなり出逢ってたちすくむ姿の背後には、彼女の詩篇のすべてが放電するように広がってゆくのをわたしは見る⁸³。

つまり、あえて換言すれば、この道子の結語は、詩人の情感は、文字や文のうえだけでなく、舞や踊りにみられるように、身体のもつたおやかさにも現われるものであり、そうした非日常な身体表現を見誤って、「愛を交わした姿」であるとか「恋人がいた」といった世俗用語に置き換えてしまうことに内在する虚しさのようなものを暗に示しているのではなからうかと、思料します。

『高群逸枝雑誌』のなかの憲三の「瀬戸内晴美氏への手紙」と『思想の科学』のなかの道子の「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」を目にしたかどうかは特定できませんが、静子から送られてきた『わが高群逸枝』を読んだ瀬戸内は、どうしても一稿を起こさなければならない窮地に立たされたものと推量されます。翌一九八三（昭和五八）年に瀬戸内は『人なつかしき』を刊行しますが、そのなかにあって、「『日月ふたり』のひとり 橋本憲三」の一文を収録することになるのです。以下は、その最初の一節です。

最近、水俣の橋本静子さんから『わが高群逸枝』という本の上下を贈っていただいた。著者は橋本憲三と堀場清子共著の体裁である。……

この本は、堀場さんが昭和四十九年九月から、水俣に隠棲されていた橋本憲三氏と接触を持ち、氏の全面的な協力を得て、研究途上の数々の質問を発し、それに憲三氏が答えるというユニークな方法を探り、その往復書簡や、口答らしいものを中心に据え、未発表の原稿、日記、書簡等々の貴重な資料を投入した文字通りの労作である。高群逸枝研究としては、空前絶後といつてはばからない、貴重で完璧に近い研究の見事な成果である⁸⁴。

このように前言を書き記したあと、本論として、最初の憲三宅訪問の様子、「日月ふたり」の連載を中断するに至った理由、加えて、憲三没後の静子宅再訪問の内容にかかわって、瀬戸内は筆を進めてゆきますが、それについては、本稿においてすでに詳細に検討したうえで、すでに私は、その記述内容の信頼性に疑問を投げかけています。したがって、再度ここで取り上げることはいたしません。瀬戸内は、その本論を叙したあと、結論として、こう書いていますので、以下に引用します。

堀場さんと憲三氏の問と答えを読了して、感じたことは、私が訊きたいすべてを堀場さんが克明に訊いてくれているにかかわらず、私の最も知りたかった答えは、憲三氏からはすべてはぐらかされているか、隠されているという感じがあった。そのもどかしさは、堀場さんの質疑の間にはさまった名解説にもよく滲んでいた⁸⁵。

そして、最後に加えて、瀬戸内はこう書きます。

鹿野、堀場両氏共著の『高群逸枝』のあとがきに、憲三氏が逝去の前日、お二人に向かって三分の二は話したといったことばが伝えられている。三分の一も隠しているのかという堀場さんたちの笑い声の中で、

「人には誰しも、他人にみせられない恥部があります。……必死の防衛だ」

と憲三氏が答えたという。氏が死ぬまで必死に隠されたものこそ恥部ではなく、聖なる秘密であったのに。「日月ふたり」を書きつぐとしたら、そこにだけ意味があるのかもしれない⁸⁶。

しかし瀬戸内は、「『日月ふたり』を書きつぐ」ことはありませんでした。そこから判断しますと、この箇所は、一種の「捨てぜりふ」の感がないわけではありません。『わが高群逸枝』で堀場は、憲三から聞き取ったものを正確に質問と回答に分けて収録し、その内容に対して、さらに別の資料を援用しながら自身の解釈を述べるという、実に研究者らしい手堅い手続きにあって、「高群逸枝」を再現しようとした。一方、「日月ふたり——高群逸枝と橋本憲三——」を書いた瀬戸内は、松本正枝から聞き取りをするや、情報提供者の品性や情報内容の真偽にかかわっての再検証という基本的手続きに立ち返ることもなく、逸枝の「恋愛事件」を興味深い主題としたうえで、ただ自分の筆力に任せて「高群逸枝と橋本憲三」を再現しようとした。同じ人物を記述の対象としていますが、明らかに両者には、違いがあります。前者の作品からは、実在した人間にかかわって信頼に足る真実に近い知見を得ることができますが、後者の作品からは、実在人物のプライバシーにかかわるのぞき見的な欲求は満たされても、生涯にわたる全体的な真実の人物像を手に入れることはできません。それどころか、後者のような記述手法にあっては、記述されている本人はいうまでもなく、遺族や関係者までもを傷つけることがあるのです。その一例を、あえてここに紹介しておきます。

富本一枝（旧姓尾竹一枝）のいとこの尾竹親は、自著の『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』のなかで、次のようなことを書いています。

人間の言動というものは、決して一つの情景のみに定着して語られるべきものではなくして、その人間が生きた全存在の一環に組み込まれてこそ、はじめて、よりよくその映像を伝え得るものだとは私は信じている。

瀬戸内氏にしても、それが史実をもとにした小説であってみれば、フィクションとしてのある種の無責任さに救われているのだろうが、時間の経過というものは、得てして、伝説という神話をつくり上げたがるもので、いつかはそれが事実とまではならぬとしても、史実に欠けた情緒の補足としてのさばり返ることがよくあるものだ。私が、実名、或いは史実にもとづいた小説の安易さを恐れる理由が、ここにもあるわけである⁸⁷。

以上の引用は、瀬戸内晴美の『美は乱調にあり』（文藝春秋、一九六六年）という本のなかで描写されている、青鞨社時代に紅吉（一枝の筆名）が引き起こした、いわゆる「吉原登楼」事件における竹坡（親の父親）の役割を巡っての論点が念頭に置かれて書かれている箇所であろうかと思われます。はっきりと「フィクションとしてのある種の無責任さ」、そして「小説の安易さ」が指摘されているところに、注目する必要があります。

すでに引用していますように、道子は、「日月ふたり」を読んだ「憲三氏の苦悩は深刻だった」と書き記しています。憲三もまた、尾竹親と同じ苦しみを味わい、そして死んでいったのでした。瀬戸内の『人なつかしき』のなかの「『日月ふたり』のひとり 橋本憲三」を読んだであろう静子も道子も、それについては、もはや何も語っていません。『わが高群逸

枝』の共著者の堀場からの言及もありません。こうして、「日月ふたり——高群逸枝と橋本憲三——」を巡っての著者と遺族のあいだにあった確執は、自然消滅したのです。しかし、これで静子と道子の苦悩が解消したわけではありませんでした。すでに新しい波が、ふたりに襲いかかろうとしていたのです。

瀬戸内の『人なつかしき』が上梓される三箇月前の一九八三（昭和五八）年の七月、岐阜経済大学教授の鷺見等曜による『前近代日本家族の構造——高群逸枝批判——』が世に出ました。鷺見は、その「はじめに」において、「日本家族史の研究における高群逸枝氏の業績は巨大である。私もはじめ氏の説に依拠して、勤務校で社会学の講義を行っていたが、氏の所論に多くの矛盾があることに気づきはじめた」⁸⁸と述べます。こうしてこの時期、これが最初ではなかったかもしれませんが、高群史学の再検証の道が開くのです。鷺見のこの本は、日本の平安時代の婚制が、東南アジア社会にみられる双系制に酷似している点を根拠に挙げ、高群が述べる母系原理に基づくものでないことを立証しようします。鷺見の視点は、次のようなところにありました。

柳田〔国男〕氏の、いわゆる「女性史」的観点のぬけた理論に対抗するためには、高群〔逸枝〕氏は、女性が太陽であったような母系時代の存在をかつて日本に証明せねばならなかったのであるが、上のようなあいまいな私造概念は、それを史料の豊富な奈良、平安、鎌倉にまで引下げて「実証」する可能性をつくり出したのである。そして高群氏は、あの膨大な著作のなかで思う存分に女性の黄金時代をうたいあげることができたわけである。高群氏のいう「母系原理」を問題としてとり上げる理由はここにある⁸⁹。

こうして鷺見は、平安時代の初期および中期の婚制が母系原理にもとづくものではないことへの証明に向かうのです。

これまでに書かれた、瀬戸内晴美による「日月ふたり」、戸田房子の「献身」、もろさわようこの「高群逸枝」は、いずれも憲三の品行にかかわって話題化していました。しかし、ここへきて、歴史家としての逸枝の研究内容そのものが疑問視されるようになったのです。鷺見等曜の『前近代日本家族の構造——高群逸枝批判——』を静子と道子が読んだことを示す資料はありませんが、読んでいたとしたら、あるいは、風聞などで耳にすることがあったとすれば、書かれてある内容については自ら専門的な判断を下すことはできなかったにしても、副題にある「高群逸枝批判」という文字を見ただけでも、息の詰まる思いをしたであろうことは、想像に難くありません。そのことと直接関係があったかどうかはわかりませんが、このころ道子は、死と向き合う日々を送っていました。といいますのも、一九八四（昭和五九）年の七月、道子は「いのちの切なさ 美しさ」と題して、北海道で講演をしています。そこで、このようなことを述べているからです。「自分一人で頑張ってみたり、絶望してみたりで、やっとやっと生きているんですけども、どうかした時に、ああ、今夜はもう死んでしまおうかしら、と思うこともあるんですよ」⁹⁰。そう述べたあと、道子は、このようなことを話題に取り上げるのです。

今晚は死んでしまおうかしら、とふたりする時に、私はちょっと山へ出かけるんです。ここへ来るまでに見たような、景色の所へ車をたのんで連れていってもらいます。

九州の屋根のようなところがありまして、その屋根の所に行きますとね、いろんな雑草がはえているのです。

そこで、葉っぱが美しいので机の上にも置こうかしらと思って、なんでもない、そこらへんのその葉っぱを持って帰りました。

最近、あーんなに嬉しかったことがないんですが、見たことのない草だったものですから、山の上から持って帰って来て鉢に植えておきました⁹¹。

すると驚いたことに、一週間で過ぎたころ、つぼみが現われ、小さな青紫色の花が咲き出したではありませんか。植物図鑑で調べてみると、その植物はどうやらハナシノブというらしい。続けて道子は、そのときの気持ちをこう語ります。「蕾がだんだんになっていて、どんどん花が咲いていくんですよ。はじめて見たものですから、もう嬉しくて嬉しくて。私が非常に落ち込んでいた時でしたから、今度は『はなしのぶ』という山の花に助けられました。私の場合は、おちこんでいる時に誰か助けてくれる神様『助け神様』が来て下さる——。それは、ある時には、誰か人が見えたり、ある時は草であったりしまして」⁹²。

「助け神様」を求めての山野歩きは、このころの道子の日常でした。次は、一九八六（昭和六一）年一二月刊行の『陽のかなしみ』の「あとがき」のなかの一節です。

そういう友人たちにここ数年機会を作ってもらっては、あちこちの山あいに連れて行ってもらっている。各自の時間や予算のこともあって、今のところは、鹿児島県や宮崎県近くや、多少の越境をして大分県九重高原に入りこんだりしているが、主に熊本県境を巡っているのである。

そのような山々は、たいてい川の源流でもある。川の源流へゆきたくて、山にゆくというのが本当かもしれない。……

色の調べをあらわすことばがむかしあった。かろうじて、まだその調べの残されている山野をゆく。自分の蘇生のため⁹³。

『陽のかなしみ』という書題から連想しますと、作家としては太陽の日差しのなかにあれども、心はいつも闇で閉ざされている、そのような道子の姿が浮かび上がってきます。『陽のかなしみ』が年末に刊行されると、翌年（一九八七年）の三月、道子は六〇歳の還暦を迎えました。

一方、静子の思いは、どのようなところにあったのでしょうか。この時期の静子は、逸枝と憲三の遺品を巡って、苦悩のなかにあったのではないかと想像されます。道子は、こう書いています。

〔橋本憲三先生〕ご生前私は、彼女〔高群逸枝〕に関する資料をいただきたいとお願いしたことは一度もなかった。橋本先生ご死去の直前からそのあとにかけて、彼女の女性史研究の資料をめざして、多くの人たちが意思表示をはばからないのを知って、私はある困惑に包まれた。憲三先生が死の直前まで「彼女のゴミ類」を焼却しようと思われ、妹の静子さんに実行させられたのは周知のことである⁹⁴。

その後も静子は、憲三が書き残した遺言の内容に従って極めて忠実に行動していたものと思われます。といいますのも、逸枝が『女人藝術』に寄稿した文のすべてが、一九八六（昭和六一）年に龍溪書舎から刊行された復刻版からは、「著作権継承者の了解が得られませんでした」という理由により、削除されているからです。静子自らが、自分のことを「遺言による高群逸枝著作権継承者」⁹⁵と書いていますので、『女人藝術』の復刻版が世に出るに当たって逸枝の文の掲載を見送る判断をしたのは、静子本人だったものと考えられます。憲三の遺言書は現存していないようですが、おそらくそのなかに、『高群逸枝全集』以外の著作物は、今後いっさい人の目に晒してはならぬといったような指示がなされていたのではないかと想像されます。

逸枝の手稿である「平安鎌倉室町家族の研究」が、栗原弘の手によって校訂され、国書刊行会から上梓されたのは、『女人藝術』の復刻版が出た前年（一九八五年）のことでした。この「平安鎌倉室町家族の研究」は、『高群逸枝全集』に未収録の原稿です。それへと至った経緯について、憲三は、最終回の配本となった第七巻「評論集・恋愛創生」の「解題／編者」のなかで、次のように書いています。

全集には、はじめ、もう一卷、「平安鎌倉室町家族の研究」を予定していたが、編纂の最終段階で検討の結果、この原稿には書き込みが非常に多くて接合不明の箇所なども少なくなく、ことに表類にいっそうその難があり、その他にも書き入れ指定が果たされていない等、そのまま活字製版に付することは可能でないため、やむをえず、これは除外されるにいたった。別に、「日本古代婚姻例集」の採録も一応考えられたのであったが、その成果の精髓は「平安鎌倉室町家族の研究」とともに「招婿婚の研究」に吸収されていることではあり、強いて採録するにもおよぶまいとして、同じく除外されることになった⁹⁶。

こうした背景に照らして考えますと、校訂本『平安鎌倉室町家族の研究』が刊行され、世に流布したことに、静子は、遺族として、また著作権継承者として、驚きを禁じえなかったものと推量されます。

校訂者である栗原弘は、生前の橋本憲三とどのような関係をもっていたのでしょうか、それを見てみたいと思います。憲三の一九七三（昭和四八）年七月一〇日の「共用日記」に、栗原弘・葉子夫妻の来水の様子について、こう記されています。

栗原弘・葉子さん、河野さんの紹介名刺をもってみえる。同志〔社〕大院生（3年）、高群研究（婚姻）をしているとのこと。6時ごろ水天荘へ。葉子さんは同大学美術科出身。また院生になって勉強したいとのこと⁹⁷。

続く七月二三日の「共用日記」には、「同志社大学院生（3年）栗原弘さんみえる。1月ぐらい下宿して、高群婚姻史についていろいろ質問したいとのこと。下宿について西条美代子さんを紹介する」⁹⁸、さらに七月三十一日の「共用日記」には、「栗原さん、『平安鎌倉室町家族の研究』コピーはじめ、市役所で（ゼロックス）」⁹⁹との記載があります。

一方、『日本古代婚姻例集』の「あとがき」で栗原葉子は、憲三との出会いについて、こ

のように書いています。

私達は水俣の図書館で道を尋ねて高群のお墓を詣でたあと、憲三氏を訪ねたのだった。そのとき何を語ったのかほとんど記憶がない。ただ氏は、「革命はおきませんかネ」とつぶやかれた。倉庫の二階のその部屋にはベッドのうえに高群の大きな写真が飾られていて、氏の部屋の窓から逸枝の眠る山の中腹を望みながら「自殺しようとは思いませんが生き永らえようとも思いません」とおっしゃるような生活を送っておられた。憲三氏はその三年後の昭和五十一年死去された。……

氏の葬儀の後、憲三氏の令妹橋本静子さんから高群の未完の遺稿「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」、高群の使っていた書物十冊ほど遺品分けのように譲り受けた¹⁰⁰。

栗原弘の校訂による『平安鎌倉室町家族の研究』が、一九八五（昭和六〇）年二月に国書刊行会から上梓されると、続いて、栗原葉子と栗原弘のふたりの校訂になる『日本古代婚姻例集』が、一九九一（平成三）年五月に高科書店から刊行されるに至ります。「平安鎌倉室町家族の研究」も「日本古代婚姻例集」も、「強いて採録するにもおよぶまいとして」、『高群逸枝全集』から除外されていた逸枝の草稿です。憲三にとっては、いわば「彼女のゴミ類」にすぎなかったものです。その遺志を継ぐ静子の目には、この二著の刊行は、どう映ったのでしょうか。静子は、何も語っていません。

それから三年が経過しました。一九九四（平成六）年の九月、『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』が、高科書店から世に出ました。著者の栗原弘は、その「はしがき」において、こう述べています。

高群逸枝は『母系制の研究』『招婿婚の研究』という大著を発表し、日本の原始古代社会に母系制が存在し、女性の地位が高かったことを主張した。今日、この高群学説には批判と賛同が複雑に交錯し、どちらかといえば、批判の方が多いいえであるであろう。しかし、婚姻史・女性史の分野では今なおその影響力は少なくないといえる。筆者は大学院生の頃、村上信彦の論文に影響を受け、高群学説に傾倒した。その当時は、同学説が正しいと信じて二、三の論文を執筆した。その後、高群の遺稿『平安鎌倉室町家族の研究』と『日本古代婚姻例集』の出版にたずさわって二著を世に送り出した。二著は、高群学説の実証部であった。筆者は二著の校訂作業の過程で、高群学説の実証には根本的な誤りがあることに気付いた。

高群学説の誤謬には洞富雄から鷺見等曜まで、実にさまざまな批判が行われてきた。筆者はそれらの多くが正しいことが理解できるようになった。しかしながら、従来の批判は、彼女がひたすら真実を追求した結果が不幸にも誤っていたとする見解に立っていたと思われる。ところが、筆者の追調査によれば、高群学説の誤謬は彼女の極めて意図的な操作改竄の産物であったことを確信するに至った¹⁰¹。

鷺見の『前近代日本家族の構造——高群逸枝批判——』は専門書であったこともあり、一般の人の目には留まらなかった可能性があります。栗原弘のこの本は、同じく学術書では

ありますが、地元紙である『熊日』の書評で取り上げられたということもあり、いやただそれだけではなく、評者が、逸枝の書は「極めて意図的な操作改竄の産物」であるとする著者の知見に言及していたこともあり、これまで逸枝の業績に全幅の信頼を寄せていたであろうと思われる多くの県民読者に、大きな驚きを与えたにちがいありません。おそらく、静子も道子も、この書評を読んだものと思われる。

書評の執筆者は、かつての『高群逸枝雑誌』への常連寄稿者であった、女性史研究家の河野信子でした。そのなかで河野は、この『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』を、次のように紹介しました。「高群逸枝の著作たちには魔力がある。読み始めたら、やめられなくなるのである。大著『招婿婚の研究』もまた例外ではない。本書はこの『招婿婚の研究』を〈だまし絵つき一大叙事詩〉とみなして、このだまし絵の図（だまし絵には地＝ぢ＝と図があって、そのいずれをとるかによって、人はそれぞれに異なった見解をもつ）を綿密に累積する手法で解析したものである」¹⁰²。続けて河野は、本書の特徴と、それが歴史学に及ぼしている影響について、以下のような見解を示します。

『日本霊異記』『今昔物語』『蜻蛉日記』をはじめとする数多くの文献史料の検討を経て、高群型抽出法には、ただの〈うっかりミス〉でない「意図された」抽出加工法が使われているといった結論を、栗原氏は提示した。……

本書は、母系反証の書というよりは、史料の密林のなかの抽出法検証としてのまとまりを持ったものである。だが、本書の図もまた反証法のスタイルをとっているために、既に女たちのなかから、栗原氏の反証に対する反証といった、反例探しがはじまっている¹⁰³。

それでは、『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』には、どのようなことが具体的に書かれてあったのでしょうか。その内容の中心となる部分を、幾つか以下に引用します。著者は、次のように、高群史学が「整然とした誤謬」によって成り立っていることを説きます。

このように、高群が、事実¹に反して、妻方提供型を主流として描いたことによる誤謬・説明不足には、実に明快な法則性がみられる。

婚姻の前半期（詳述）	婚姻の後半期（略述）
外祖父と外孫（詳述）	祖父と内孫（略述）
母子関係（詳述）	父子関係（略述）
両親と娘（詳述）	両親と息子（略述）
夫と妻方（詳述）	妻と夫方（略述）
家の女系伝領（詳述）	家の父系伝領（略述）

右のように、極めて意図的に、一方に偏った叙述構成となっている。このような「整然とした誤謬」こそ、高群自身が、自身の誤謬を認めていた、動かぬ証拠というべきである。意図の内容を一語でいえば、族制上の非父系的（高群によれば母系制）側面を前面に押し出して、父系的側面を無視したわけである¹⁰⁴。

それでは、こうした「整然とした誤謬」は、いかなることが原因となって生じたのでしょ

うか。高群史学にあつては、「男性史から女性史を自立させ、女性解放の歴史的根拠を打ち立てることが目標とされていた」¹⁰⁵とみなす著者は、「整然とした誤謬」の発生要因を、自身が抱く「理想」を優先させ、見出した「史実」を隠蔽したことに求めようとしします。

以上のような前提に立脚する高群の歴史研究は、避けて通ることができない難問を内包していた。一方で極めて実証的な作業を行いつつ、他方では、立証不可能な理想像を追いつめていたからである。ここでは、理想像への憧憬の強さが、客観的事実における整合性の範囲を逸脱し、過去の史実を改変させる危険性が内在していた。すなわち、高群史学とは、女性に関する歴史を、冷静にみようとすると存在史ではなく、女性に生きる希望を与えることを使命とした当為史であつたと言えよう。ここに、高群史学の特質（生命）があり、また問題点もあつたのである。高群が、歴史研究の全生活中で、最大のエネルギーを投入したのが、五〇〇家族の調査であつた。ところが、高群は、五〇〇家族の数量的分析結果をどこにも発表していない。五〇〇家族という膨大な事例を婚姻形態に分類し、それを各時代別に数量的に示せば、読者には、各時代の婚姻居住形態が一目瞭然で理解されるはずである。しかし、高群は、それらの正確な調査結果の報告を、明らかに拒否している。理由は、はっきりしている。高群が発見した史実と彼女の理想とが、齟齬していたからである¹⁰⁶。

さらに著者は、こうした「意図的な操作改竄」あるいは「創作原理」は、単に『母系制の研究』や『招婿婚の研究』といった学術の範囲を超えて、日記等を含む逸枝の全著述に共通する特徴であるとして、その敷衍化を試みます。

高群の誤謬問題について、参考になるのは、『火の国の女の日記』である。その中で、高群は、酒乱の父に苦悩した家族であつたにもかかわらず、「一体的同志的」結合を遂げた理想的夫婦であるかの如く描写している。これは、明らかに、自己の理想的夫婦像を、父母に投影した、事実と反する虚構である。彼女の場合は、通常一般の人間が、親族の恥を隠すために、事実を改竄する性質のものと一線を画さなければならない。というのは、自己の理想のために、事実が曲げられるのは、彼女の著作に共通しているからである。高群は、自分の父母の過去の事実を正確に把握しており、また叙述のための方法論上の錯誤があつたとは思われない。その上で、高群は、極端な事実の変容をおかしているのである。……ただし、『母系制の研究』『招婿婚の研究』は研究書であり、日記と同等に扱うことはできない。もちろん、それは通常の人ならばそうなのである。高群はそうではない。彼女には、詩も研究書も日記も同等の作品なのである。それ故に、すべてに共通した創作原理が存在している¹⁰⁷。

一九九四（平成六）年の九月に『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』が刊行されると、学問の世界へとその影響は広がってゆきました。その一例を、翌年（一九九五年）一〇月に福岡市女性センター「アミカス」を会場に比較家族史学会との共催によって開かれたシンポジウム「『国家』と『母性』を超えて——高群女性史をどう受け継ぐか」に求めることができます。発表者は、石牟礼道子、栗原弘（『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』の著者）、西川祐

子（『森の家の巫女 高群逸枝』の著者）の三人で、司会を上野千鶴子が務めました。各自の当日の発言内容をまとめた、このシンポジウムの報告書は、一九九七（平成九）年三月に、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』（シリーズ比較家族8）として、早稲田大学出版部から公刊されました。そのなかに、道子の「表現の呪術——文学の立場から——」を見ることができます。そのなかには、「当日のレジュメ」も再掲載されており、道子は、その冒頭に、こう書いています。

かの有名な、
われ日月の上に座す
詩人 逸枝

というのを、まだわたしは読めていないと近頃思う。栗原弘氏の提出された、高群逸枝の歴史改竄説以来、結構このあたりでも、藪の賑わいが聞こえてくるからである。逸枝の業績を一瞥もしないで「やっぱりそうか」と鬼の首でもとったような揶揄が聞こえてくるけれども、もとよりそれは栗原氏の望まれることではあるまい。私は、壮大な仮説の古典として高群史学を読みたい¹⁰⁸。

当日の道子の実際の発言がどうであったのかは再現できませんが、その後に起稿した「表現の呪術——文学の立場から——」のなかから幾つか以下に引用して、「高群女性史をどう受け継ぐか」という主題に対しての道子の考えを探ってみることにします。道子は、どのような観点に立って、栗原弘の説く「意図的な操作改竄」から逸枝を救難したのでしょうか。まず道子は、「詩人としての逸枝」について言及します。

栗原さんから投げかけられました高群さんの歴史歪曲説は大変ショックでございます。……

栗原説の事件で、わたくし、はっといたしましたのは、かの有名な、

汝洪水の上に座す神エホバ

われ日月の上に座す詩人逸枝

という詩を若年の折に、発表致しまして、大方の輦蹙を買いました。……

詩人、芸術家というものは、その現身は世俗の中にあるほどに、巷を歩けば千の矢が飛ん来るといふ事も作品に書き付けております。そういう風にしか生きられないのが詩人ではないのでしょうか。……

同時代の詩人たちにくらべて、熊本時代も処女詩集の時代も『婦人戦線』のときも、異性との家出事件も、「森の家」も、終始一貫、彼女は、一般社会からみれば、異様で、エキセントリックで、トラブルメーカーでさえありました¹⁰⁹。

次に道子は、「詩から学問へ」という文脈で、逸枝の業績を語ります。

詩というものは、その世に対して即効的で有効性のあることをいえるわけではない。表現と言うのはそういう宿命を持っています。ですから、その詩は、一種、呪術的に成らざるを得ない。古代呪術の力をもった詩人が希にいます。学術論文でそれをやろうとし

て、人跡未踏の女性史というものに取り組んだ時、彼女の内なる詩は点火されて……鳥瞰的な表現を幻視したのではないか。そういう欲求がせめぎ合ったのではないか。……高群さんは、こうあって欲しいという女たちの国を最高に良い形で作り上げてみせる、という詩と学問との刺激的調和を、誰も書いた事のない、一種の飛躍的新世界。神話劇みたいな大叙事詩を書こうとする衝撃が、噴火状態になって出てきたのだと思います。そのとき、彼女にはやはり歴史上の女たちが乗り移って、心象世界の核に成ったのだと思います。

そうすると、今まで調べてきた平安・鎌倉・室町の五百家族、藤原氏の日記の全部を読破するということで蓄積してきた資料の中から、彼女の詩的な欲求に応じて、資料の方が波頭を立てて彼女と呼応したのだと思います¹¹⁰。

このように道子は、まず最初に詩人の幻視があり、次に史料から聞こえてくる歴史上の女たちの声に耳を傾け、最終的にそれを歴史的時間軸に並べ直し全体が俯瞰できるようにしたものが高群史学ではないかと、いうのです。栗原学説が、「意図的な操作改竄」という用語を使って高群史学を否定的にみなしたのに対して、明らかに道子は、それを肯定的にとらえ、詩人のもつ創造的エネルギーの産物として理解したのでした。果たして逸枝は、日本史学上の「ペテン師」ないしは「犯罪者」だったのでしょうか。それとも、女性史という新しい学問の「創造主」ないしは「預言者」だったのでしょうか。道子は、憲三の言葉を紹介して、このようにまとめます。

橋本憲三先生は、常々、「あなたは、高群逸枝を信じなさい」とおっしゃっていました。私が聞こうとすると、早くも察知されて、「信じなさい、マルクスが、初期の頃に、人類の精神の富ということをいいましたが、高群が定説化した女性の為の精神の富は、みんな、実らせて行く価値があるとぼくはおもいます。だから信じなさい」、といわれたことが、今思い当たります。その後、私は、水俣の事情とか、視力の事情とかがあって物理的に時間がとれなくて、勉強ができていませんが、今までやれずに来たのも幸運と思います。皆さんの実りのある研究成果を頂戴する事ができて、有難いと思っています¹¹¹。

それでは最後に、再び「当日のレジュメ」から一節を、少し長くなりますが、引用します。これが、このシンポジウムにおいて、道子が最もいいたかったことではないかと、推量するからです。

人跡未踏であった女性史の原野にわけ入るのに、地母神たちの力に押されて、伏在する女たちの意識の総体に言葉を与えてきた逸枝を読みたいと思う。誰がこのことをなしえたらうか。壮絶である。お手本はなかった。創りあげてゆく仕事だった。創作というより創造であった。国づくりでさえあった。その体系は自ずから鉱脈の露頭がつながるようにあらわれたのではないだろうか。彼女自身「ボダ」をかぶりながらの仕事である。「一坑夫」の仕事だと謙遜している。

学問的業跡というものは、いつかは乗り越えられる運命にある。そして学問というも

のは、乗り越えられてこそ意味があるのではないだろうか。しかしながら、あとからあとから出現する学説が流砂のように去ったあと、その流砂に洗われて、古典となって発光しながら横たわる作品もある。

書かれる前から高群逸枝は古典として出現したのだった。それゆえ、稀なる介助者があらわれた。夫妻の業跡の意味を私はそうとらえたい。二人を洗う歳月の砂は、むしろ必要なのである¹¹²。

道子の「表現の呪術——文学の立場から——」が所収された『ジェンダーと女性』が発刊されたのは、一九九七（平成九）年の三月一〇日でした。逸枝が亡くなって三三年の歳月が、そして憲三が亡くなって二一年の月日が、そろそろ流れようとしていました。発刊の翌日、道子は七〇歳の誕生日を迎え、それからおよそ四箇月が立った七月二五日に、静子は八六歳になりました。この間道子は、決して変わることなく、憲三については「先生」の敬称をつけて「橋本憲三先生」と書き、他方で、道子と憲三の契りの「立会人」となった静子をしっかりと支えました。おそらく道子は、こころの慰めに、一部この本を静子に献呈したにちがいありません。そのなかに見出した、「書かれる前から高群逸枝は古典として出現したのだった。それゆえ、稀なる介助者があらわれた。夫妻の業跡の意味を私はそうとらえたい。二人を洗う歳月の砂は、むしろ必要なのである」という道子の予言に、静子は、何かところが洗われる思いをもったのではないかと推量します。

予言どおりに、さらに新しい「二人を洗う歳月の砂」が、それから二年後の一九九九（平成一一）年二月に、沖合からの流砂となって静子と道子の立つ渚にたどり着きます。それは、平凡社から刊行された『伴侶 高群逸枝を愛した男』という本でした。著者は、栗原弘の妻の栗原葉子で、静子にとって過去に面識のある女性でした。この本の「あとがき」で著者は、このように書いています。

橋本憲三については、夫との会話の中で度々話題にのぼっていたことだった。だが、私は自分で執筆するつもりはなく、堀場清子氏か石牟礼道子氏がいずれ書かれるであろう決定版憲三論の、ただ、読者でありたいと思っていた。で、待った。待って、待って、待ちくたびれて、とうとう大胆にも自分で筆を執ることを決意した¹¹³。

道子は先のシンポジウムで、こう語りました。「熊本時代も処女詩集の時代も『婦人戦線』のときも、異性との家出事件も、『森の家』も、終始一貫、彼女は、一般社会からみれば、異様で、エキセントリックで、トラブルメーカーでさえありました」。その高群逸枝を支え、生涯をとともに過ごしたのが、夫の橋本憲三でした。道子も静子も、はじめて目にする憲三に関する評伝ですので、その内容に強い関心を向けたものと思われます。とりわけ、著者の夫の栗原弘が指摘した、逸枝作品の「意図的な操作改竄」説について、そして、記述内容に関わる憲三からの執拗な追及によって「日月ふたり——高群逸枝と橋本憲三——」の連載が中止に至ったと語る著者の瀬戸内晴美の言説について、さらには、逸枝の入院と臨終に際しての市川房枝のグループと憲三とのあいだに生じた確執について、著者の栗原葉子が、それをどう書くのが、ふたりにとっての最大の関心事となったにちがいありません。そこで、ここではその三点について、紹介するに止めることにします。

それではまず、著者の夫の栗原弘が指摘した、逸枝作品の「意図的な操作改竄」説について、著者は、どう書いているのでしょうか。以下に引用します。

厩大な文献から練り出された高群史学の心臓部は、日本では平安中期になって夫婦の同居が開始され、その婚姻形態は夫が妻の家に住む妻方居住婚が一般的で、婿取式後の夫婦は絶対に夫の家に帰らないという点にあった。それを根拠にして、日本の婚姻制度は古代より一貫して家父長制であったのではなく、古代母系家族から家父長的家族へ移行したとするのが高群学説の骨格であった。だが、彼女とほぼ同じ一〇年をかけて原資料に当たって逐一検証した栗原弘によれば、高群が自説の根拠とした平安中期の妻方居住婚の事例は、高群が調査した五百家族中、藤原道長家族のたった一例のみ。道長家族は主流どころか例外の一例に過ぎなかった。が、問題点はこの次である。《女性の地位が高かった母系古代から、父系に移行して女性の地位は低下したのだ》という予めの構想のために、逸枝は調査結果そのままを提示するのではなく、史料操作や改竄まで行って婚姻史を体系化してしまったのである¹¹⁴。

それでは、そうした逸枝の行為を、憲三はどう見ていたのでしょうか。筆者は、このように推断します。

ところで、こうした逸枝の「意思的誤謬」を、夫の憲三が知らなかったということがありうるだろうか。逸枝の書く一行一句一字を余さず読み、書き過ぎた指の痛みや背の凝りまで体験を共有していた憲三が、これを知らなかったという方が不自然である。否、それどころか、憲三は隅から隅まで知り尽くしていたのであった。……あるがままの客観的史実の上に構築するのが、実証史学の学問的誠意と真理であるとするならば、憲三は、いわば歴史学の自殺行為にも等しい改竄の共犯者だったのである¹¹⁵。

次に、記述内容に関わる憲三からの執拗な追及によって「日月ふたり——高群逸枝と橋本憲三——」の連載が中止に至ったと語る著者の瀬戸内晴美の言説について、見てみたいと思います。著者の記述の主要部分は、以下のとおりです。

瀬戸内が発表した内容は、水俣で人生の最晩年にあった憲三にとって、古傷をえぐり出されるような痛恨事であった。当事者の胸奥深くに封印されたと思っていた事件が、白昼に引き出されたのであるから。憲三は瀬戸内宛に長い手紙をしたためた。この時の憲三との経緯を、後に『人なつかしき』に記した瀬戸内によれば、憲三の追及は執拗を極めたようである。松本に直接取材した瀬戸内に、松本が逸枝の手紙を秘蔵しているのではないかと疑心暗鬼となって問い、異常なほどしつこく言ってきて、瀬戸内が「見せられていない」と言っても信じなかったこと。怨念をこめて延島夫妻を悪く言う意固地さに凝り固まった気配のヒステリックな憲三の追及に、とうとう瀬戸内は憲三夫妻の評伝を書きつづける意欲を失ったという¹¹⁶。

最後に、逸枝の入院と臨終に際しての市川房枝のグループと憲三とのあいだに生じた確

執については、著者は、どう書いているのでしょうか。それを見てみたいと思います。

逸枝の入院と死をめぐる経緯は、逸枝の死後一〇年目に出た戸田房子のモデル小説「献身」（『文学界』）によって、さらに憲三の逝去後には、もろさわようこが「高群逸枝」（『近代日本の女性史』）を書いて広く世間の目に触れた。私はここでこれらの作品の出来を云々するつもりは全くないし、また、市川房枝ら高群逸枝著作刊行後援会のメンバーであった人々と憲三のどちらが正当であるかを論議するつもりはない。ただ、双方の齟齬のあまりの大きさに、憲三の生き方がいかに世間からは理解され難いものであったかを知るのみである。この点については後に触れる¹¹⁷。

そして著者は、この点について、再びこのように触れています。

精神も肉体も、まさにその最後の光芒を放つ瞬間に、逸枝が会いたいと望んだのは憲三ただひとりであったろう。森の家ではほぼ三〇年間、夫以外のほとんど誰にも会わずにきた逸枝にとって、何の身構えの必要なく向かい合えるのは憲三だけであった。逸枝自身が面会謝絶の隠棲生活を望み、憲三は世間通常の価値判断からいえば、自己中心的な男の、妻の占有物化と誤解されなくもない、その風変わりな望みを引き受けた。だが、実際に妻の肉体の死が目前に迫ってみれば、憲三とて狼狽する。嫌がる逸枝をなだめて医者に診せ、ためらう彼女を諭すようにして入院させる。失策だったと憲三は後悔するが、あとの祭りであった。入院してみて初めて失策に気がついた憲三は、病院で必死に抵抗したのだった。面会謝絶に、個室に、と。逸枝の柩を前にして霊安室は修羅場となった¹¹⁸。

こうした内容をもつ栗原葉子の『伴侶 高群逸枝を愛した男』を読んで静子と道子は、どのような感想をもったのでしょうか。明らかにこの三箇所は、栗原弘の『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』、瀬戸内晴美の『人なつかしき』、戸田房子の「献身」ともろさわようこの「高群逸枝」をなぞるようにして描写されており、ふたりはなぜ、『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）に掲載していた憲三の「瀬戸内晴美氏への手紙」も、憲三の「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」も、そして静子の「もろさわよう子様へ」も、同じように十全に検討の俎上に取り上げてもらえなかったのか、同様に、『ジェンダーと女性』のなかの道子の「表現の呪術——文学の立場から——」も、なぜ適切に拾い上げて検討してもらえなかったのかを思うにつけ、その一方的観点に立った、著者にとって都合のいい憲三批判の単なる羅列に、言葉が失ってしまったのではないかと愚考します。ふたりは、この本について、何も語っていません。これもまた、必要不可欠な、逸枝と憲三の「二人を洗う歳月の砂」であってみれば、多弁を勞せず無言のうちにそれを甘受し、いつかは、逸枝の作品同様に、ふたりの「一体化した近代の夫婦」像も、神話世界の「双頭の蛇」のごとくに、あらゆる歴史の流砂に耐え忍んだ古典像となって発光するにちがいないことを静かに夢想していたのかもしれない。

以下は、再び「あとがき」からの引用です。

で、待った。待って、待って、待ちくたびれて、とうとう大胆にも自分で筆を執ること

を決意した。だから、こうして書き上げた今も、大先輩の前に頭を垂れて審判が下されるのを待っている気分である¹¹⁹。

一見挑発とも受け止められかねないこの言葉を、堀場清子と石牟礼道子がどう受け止めたのかは明確にするだけの資料が残されていないようです。また、本人たちが「審判」を下す目的で上梓したのかどうかはわかりませんが、遅れること二〇〇九（平成二一）年に、堀場清子は『高群逸枝の生涯 年譜と著作』を世に問い、一方の石牟礼道子は、二〇一二（平成二四）年に『最後の人 詩人高群逸枝』を世に出すのでした。前者の作品は、これよりのちのさらなる実証研究になくてはならない、精緻を極めた、逸枝の「年譜と著作」が綴られ、後者の作品において、自身にとっての「最後の人」が橋本憲三その人であることを告白するものでした。

道子は、逸枝の死後、東京から水俣へ居を移した憲三の晩年の様子を、こう描写しています。

水俣に移られてから、全集の売行と比例して訪問者たちがこの部屋に「防ぎようもなく侵入し」はじめていた。森の家の原則はくずれかけていた。卒論を控えた学生たちとか、新聞の人たちとか、いわゆる逸枝ファンの人たちだったが、なぜ氏が逸枝の蔭の人として終始されたか、その秘密を知りたい、隠されているそれを直接氏の口からききたい、というのはその人たちのやみがたい希求のようであった。氏はたいてい寡黙に微笑して、例のように額の汗を拭きながら悪戦苦闘して答えられる¹²⁰。

「防ぎようもなく侵入し」てきた訪問者には、秋山清、瀬戸内晴美、鹿野政直、堀場清子、栗原弘、栗原葉子も含まれます。彼らはみな、憲三の「秘密を知りたい、隠されているそれを直接氏の口からききたい」と思って、憲三の住む水俣の「森の家」に侵入してくるのです。憲三にとっては、ありがたくもあり、反面、迷惑なことでもあったでしょう。そののち彼ら書いたもののなかには、憲三本人が自覚していた逸枝と自身の真実の姿とは大きく異なる内容でもって、世に発表されたものもありました。憲三は、いわれなきその苦しみのなかで、自身の死に向かうのでした。

憲三の死後、それでも、逸枝と憲三に関心をもつ人は絶えませんでした。もろさわようこは、風体貧しく、品行卑しき男として憲三を罵りました。瀬戸内晴美は、自身の小説の連載断念に至った原因を憲三の意固地でヒステリックな性格のせいにししました。栗原弘は、逸枝が書いたすべての著作が事実を隠蔽した偽造品であると推断しました。栗原葉子は、人前に仁王立ちし、ふたりの恥部を隠す熱演者として憲三を描写しました。こうした幾度となく押し寄せてくる受難のなかで、憲三同様に静子も、自身の晩年を過ごすのでした。静子にとっては、なぜここまで、兄夫婦が誹謗中傷の渦に巻き込まれなければならないのか、自分自身、理解ができなかったかもしれません。それは、道子も同じであったでしょう。といいますのも、道子が描く憲三像は、次のようなものだったからです。

一人の妻に「有頂天になって暮らした」橋本憲三は、死の直前まで、はためにも匂うように若々しく典雅で、その謙虚さと深い人柄は接したものの心を打たずにはいなか

った¹²¹。

誰しも人は最期を迎えます。静子も例外ではありません。憲三と藤野を看取ったのは、近所で開業する女医の佐藤千里でした。しかし、静子の死期が迫ったときは、すでに佐藤は水俣を離れて、熊本市内に居住していました。佐藤のもとに、静子の孫から電話がありました。「おばあちゃんが、三日前から何も食べんようになって……」¹²²。翌朝、さっそく佐藤は静子を訪ねます。以下は、佐藤が書く、そのときの静子の様子です。

半年前と何等変った様子もなく、にこやかに私を迎えたシズコに、一瞬私は狐にだまされたような気がして室内を見回した。古い肘掛椅子もベッドも元の位置で、壁にはシズコの両親や兄夫婦の写真が同じ位置に掛けてあり、机の端に重ねてある文庫本の数冊も変りなかった¹²³。

室内の様子に、何も変わりはありませんでした。そして同時に、食べ物を口に含まないという静子の強い意思にも変わりがなかったようです。

「手足の不自由な患者さんには、こうして食べてもらうのよ」と強引に粥の匙を運んだ私をシズコは苦笑しながら拒んだ。しかし遂には口を開いて飲み下し、ついでに押込んだ持参のチョコレートも食べて「ありがとう、おいしかった」と頭を下げた。しかし、二日目からはもう口を開いてくれなかった。そしてその後は飢えたように話を続けた。兄夫婦の質素だが愛に満ちた日常のこと、私が立会うことになった兄憲三の最後のこと、九十二歳まで楽しんだ外国旅行の思い出等である¹²⁴。

静子の絶食は続いていました。それを聞いた佐藤は、二度目の訪問をします。そのとき、ひとりの女性を誘いました。「『高群逸枝の作品を読む会』を主宰してた女性の来訪がよほど嬉しかったのだろう。百歳近い老女とは思えない位若やいでいた」¹²⁵。佐藤は、おそらく配慮のうえでのことではしょうが、実名を挙げていません。しかし、この女性が、石牟礼道子であることは、まず間違いないでしょう。そのときまでに道子はすでに水俣を出て、熊本市内に仕事場を設けていました。その女性に静子は、こう言葉をかけました。

枯木が倒れるように自然に朽ち果てたいと思うんだけど、周りの人達になるべく世話をかけたくないの。お金を出し合って飛行機をチャーターし、ゴビ砂漠の真中辺りに置いてきて欲しいなんて、貴女達と話したこともあったわね¹²⁶。

それに対して女性は、不満そうに、こう答えます。「厄介な病気で、何とかして一日でも長く生き延びたいと必死で療養している人も多いのに、ぜいたくだと思うわ」¹²⁷。佐藤とその女性が辞するとき、静子はふたりの手を握って、「私が死んだら抹香くさい事は止めにして、上等の酒でも飲んでお祝いしてね」¹²⁸と、告げました。

佐藤が三度目に水俣に行ったのは、静子の絶食が五十日以上も続いていた三月の中旬のことでした。暖かい陽ざしが新緑に降り注ぎ、ウグイスが鳴いていました。その日静子が、

「あとどの位したら母や兄達の所に行けるかしらね。せいぜい二・三週間と計算していたのは、私の大きな誤算だった」¹²⁹とって苦笑すると、佐藤には返す言葉がすぐに見つかりませんでした。その後佐藤は、持病のリウマチが悪化し、続くお見舞いは断念することになります。

そうしたなか、例の女性から連絡がありました。「ポータブルトイレに自力で移ることが困難になったと悲しそうでした。でも私が行くと嬉しそうに話され、不思議としか言いようがありません」¹³⁰。それから六日目の、二〇〇八（平成二〇）年四月一五日、静子は息を引き取りました。食を断って七五日が立っていました。享年九六歳でした。亡骸は、熊本大学医学部に献体することが事前に取り決められていました。見送った女性は、このように佐藤に報告しました。

大学から迎えに来たシンプルなワゴン車で、名残の桜がひらひら散りかかる中を、シズコさんは自分で望んだように、家族と友人二人に見送られてゆっくり水俣川の土手を上って行かれました¹³¹。

静子が遺していた紙片には、「生き抜いて、そして死んでいくことはこわくない。むしろ勇気リンリン」¹³²と、書き記されていました。

静子の遺体を乗せた車が、サクラの散るなか水俣川の堤を過ぎ去るとき、それを見送る道子の胸には何が去来したのでしょうか。かつて演題に使った「いのちの切なさ 美しさ」だったかもしれません。逸枝亡きあと、「森の家」の憲三の胸に飛び込んだのは、一九六六（昭和四一）年六月のことでした。ここで憲三と契りを結びます。立会人は、水俣に住む憲三の妹の静子でした。その静子が、いま亡くなり、帰らぬ人になりました。これで、「森の家」を知る、憲三、藤野、静子のみなが黄泉の客となって、道子から旅立っていったのでした。ひとり道子は遺されました。哀愁が忍び寄ります。そのとき道子は八一歳。その後続く道子の最晩年の物語は、次の最終章「志村ふくみ監修の能衣装による石牟礼道子の『沖宮』初演」で描くことにします。

注

（１）佐藤千里「寄田校の頃〈坂崎カオル聞き書き〉」『高群逸枝雑誌』第24号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1974年7月1日、11-12頁。

（２）佐藤千里「墓参り」『高群逸枝雑誌』第29号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1975年10月1日、15頁。

（３）石牟礼道子「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第15号、1977年春季号、56頁。

（４）橋本憲三「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』第31号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1976年4月1日、26頁。

（５）前掲「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、56-57頁。

(6) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、59頁。

(7) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、同頁。

(8) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、57頁。

(9) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、61-62頁。

(10) 石牟礼道子「橋本憲三先生の死」『婦人公論』第61巻第10号(第725号)、1976年10月、67頁。

(11) 鹿野政直・堀場清子『高群逸枝』(朝日評伝選一五)朝日新聞社、1977年、327頁。

(12) 前掲「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、62頁。

(13) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、64頁。

(14) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、63-64頁。

(15) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、64頁。

(16) 佐藤千里「優しきめぐり会い 逸枝と憲三と私」『西日本新聞』1976年8月5日、11面。

(17) 橋本静子「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、8頁。

(18) 前掲「橋本憲三先生の死」『婦人公論』第61巻第10号(第725号)、67頁。

(19) 同「橋本憲三先生の死」『婦人公論』第61巻第10号(第725号)、同頁。

(20) 『暗河』第一五号に掲載されている『椿の海の記』の広告文の一部。

(21) 石牟礼道子『椿の海の記』(朝日新聞社、1976年)の「あとがき」、ノンブルなし。

(22) 同『椿の海の記』の「あとがき」、ノンブルなし。

(23) 同『椿の海の記』の「あとがき」、ノンブルなし。

(24) 前掲『高群逸枝』(朝日評伝選一五)、328頁。

(25) 石牟礼道子「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会(編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二)、第14号、1977年冬季号、21頁。

(26) 同「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死——」『暗河』第14号、1977年冬季号、10頁。

(27) 前掲「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第15号、1977年春季号、53頁。

(28) 渡辺京二「Ⅱ詳伝年譜(1969-2013)」『石牟礼道子全集・不知火』別巻、藤原書店、2014年、329頁。

- (29) 石牟礼道子「悶え神とイザイホウの神」『西日本新聞』1979年2月20日、11面。
- (30) 同「悶え神とイザイホウの神」『西日本新聞』、11面。
- (31) 石牟礼道子「夢の中のノート」『毎日新聞』（夕刊）1979年10月17日、3面。
- (32) 同「夢の中のノート」『毎日新聞』（夕刊）、3面。
- (33) 橋本憲三「第未定——わが終末記 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、責任者・橋本憲三、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1970年7月1日、24-25頁。
- (34) 同「第未定——わが終末記 第一回」『高群逸枝雑誌』第8号、25頁。
- (35) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014年、275頁。
- (36) 石牟礼道子「忘れられない本 高群逸枝全集『日月の上に』 奔流をなす現代の予言」『朝日新聞』1978年6月5日、10面。
- (37) 『石牟礼道子全集・不知火』第六巻／常世の樹・あやはべるの島へほか、藤原書店、2006年、498頁。
- (38) 橋本憲三・堀場清子『わが高群逸枝』（下）朝日新聞社、1981年、350頁。
- (39) 佐藤千里「高群逸枝・橋本憲三を支えた人 その（一） 橋本ふじの（藤野）」『詩と眞實』通巻第350号 8月号、1978年7月、46頁。
- (40) 同「高群逸枝・橋本憲三を支えた人 その（一） 橋本ふじの（藤野）」『詩と眞實』通巻第350号 8月号、47頁。
- (41) 同「高群逸枝・橋本憲三を支えた人 その（一） 橋本ふじの（藤野）」『詩と眞實』通巻第350号 8月号、48頁。
- (42) 瀬戸内晴美『人なつかしき』筑摩書房、1983年、70-71頁。
- (43) 同『人なつかしき』、71頁。
- (44) 前掲「もろさわようこ様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、8頁。
- (45) 前掲『人なつかしき』、同頁。
- (46) 同『人なつかしき』、同頁。
- (47) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、186頁。
- (48) 瀬戸内晴美『談談談』大和書房、1974年、②⑥頁。
- (49) 橋本静子「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、100頁。
- (50) 石牟礼道子「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、101頁。
- (51) 前掲「もろさわようこ様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、3-4頁。
- (52) もろさわようこ「高群逸枝」、円地文子監修『文芸復興の才女たち』（近代日本の女性史 第二巻）集英社、1980年、204頁。
- (53) 前掲「もろさわようこ様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、19頁。
- (54) 石牟礼道子「朱をつける人」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、97頁。
- (55) 同「朱をつける人」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、98頁。
- (56) 同「朱をつける人」『高群逸枝雑誌』終刊号（第32号）、78頁。

- (57) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012年、247頁。
- (58) 前掲「朱をつける人」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、92-93頁。
- (59) 同「朱をつける人」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、94頁。
- (60) 同「朱をつける人」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、96頁。
- (61) 同「朱をつける人」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、同頁。
- (62) 同「朱をつける人」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、99頁。
- (63) 前掲「高群逸枝」、円地文子監修『文芸復興の才女たち』、204-205頁。
- (64) 同「高群逸枝」、円地文子監修『文芸復興の才女たち』、202頁。
- (65) 同「高群逸枝」、円地文子監修『文芸復興の才女たち』、205頁。
- (66) 同「高群逸枝」、円地文子監修『文芸復興の才女たち』、244頁。
- (67) 前掲、橋本静子「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、100頁。
- (68) 点描「32号を発行して終刊 『高群逸枝雑誌』」『朝日新聞』(夕刊)1981年1月14日、5面。
- (69) 視点「市川房枝さん」『毎日新聞』(夕刊)1981年2月26日、5面。
- (70) 談話室「『高群逸枝雑誌』の終刊」『朝日ジャーナル』第23巻第9号、通巻1150号、1981年3月6日、78頁。
- (71) 同、談話室「『高群逸枝雑誌』の終刊」『朝日ジャーナル』第23巻第9号、通巻1150号、79頁。
- (72) 同、談話室「『高群逸枝雑誌』の終刊」『朝日ジャーナル』第23巻第9号、通巻1150号、同頁。
- (73) 同、談話室「『高群逸枝雑誌』の終刊」『朝日ジャーナル』第23巻第9号、通巻1150号、同頁。
- (74) 橋本憲三・堀場清子『わが高群逸枝』(上)朝日新聞社、1981年、vii頁。
- (75) 橋本憲三「瀬戸内晴美氏への手紙」『高群逸枝雑誌』終刊号(第32号)、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980年12月25日、52頁。
- (76) 前掲『わが高群逸枝』(上)、viii頁。
- (77) 前掲『わが高群逸枝』(下)、363頁。
- (78) 同『わが高群逸枝』(下)、364頁。
- (79) 同『わが高群逸枝』(下)、183頁。
- (80) 同『わが高群逸枝』(下)、186頁。
- (81) 瀬戸内晴美「日月ふたり(第三回)——高群逸枝・橋本憲三——」『文芸展望』第5号、1974年4月号、427頁。
- (82) 石牟礼道子「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」『思想の科学』思想の科学社発行、1982年1月号(通巻349号)、44頁。
- (83) 同「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」『思想の科学』、同頁。
- (84) 前掲『人なつかしき』、66頁。
- (85) 同『人なつかしき』、71-72頁。
- (86) 同『人なつかしき』、同頁。
- (87) 尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、217頁。
- (88) 鷺見等曜『前近代日本家族の構造——高群逸枝批判——』弘文堂、1983年、i頁。

- (89) 同『前近代日本家族の構造——高群逸枝批判——』、108 頁。
- (90) 『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻／新作能・狂言・歌謡ほか、藤原書店、2013 年、433 頁。
- (91) 同『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻／新作能・狂言・歌謡ほか、433-434 頁。
- (92) 同『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻／新作能・狂言・歌謡ほか、434 頁。
- (93) 石牟礼道子『陽のかなしみ』朝日新聞社、1986 年、429-430 頁。
- (94) 前掲「夢の中のノート」『毎日新聞』（夕刊）、3 面。
- (95) 前掲「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、3 頁。
- (96) 『高群逸枝全集』第七巻／評論集・恋愛創生、理論社、1967 年、372 頁。
- (97) 前掲『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、180 頁。
- (98) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、181 頁。
- (99) 同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。
- (100) 高群逸枝編、栗原葉子・栗原弘校訂『日本古代婚姻例集』高科書店、1991 年、i 頁。
- (101) 栗原弘『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』高科書店、1994 年、i 頁。
- (102) 河野信子「著作を綿密に解析」『熊本日日新聞』、1994 年 11 月 13 日、11 面。
- (103) 同「著作を綿密に解析」『熊本日日新聞』、同面。
- (104) 前掲『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』、359 頁。
- (105) 同『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』、368 頁。
- (106) 同『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』、同頁。
- (107) 同『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』、364 頁。
- (108) 石牟礼道子「表現の呪術——文学の立場から——」、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』（シリーズ比較家族 8）、早稲田大学出版部、1997 年、213 頁。
- (109) 同「表現の呪術——文学の立場から——」、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』（シリーズ比較家族 8）、206-209 頁。
- (110) 同「表現の呪術——文学の立場から——」、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』（シリーズ比較家族 8）、209-211 頁。
- (111) 同「表現の呪術——文学の立場から——」、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』（シリーズ比較家族 8）、211 頁。
- (112) 同「表現の呪術——文学の立場から——」、田端泰子・上野千鶴子・服藤早苗編『ジェンダーと女性』（シリーズ比較家族 8）、214 頁。
- (113) 栗原葉子『伴侶 高群逸枝を愛した男』平凡社、1999 年、250 頁。
- (114) 同『伴侶 高群逸枝を愛した男』、189 頁。
- (115) 同『伴侶 高群逸枝を愛した男』、190-191 頁。
- (116) 同『伴侶 高群逸枝を愛した男』、156 頁。
- (117) 同『伴侶 高群逸枝を愛した男』、211-212 頁。
- (118) 同『伴侶 高群逸枝を愛した男』、219 頁。
- (119) 同『伴侶 高群逸枝を愛した男』、250 頁。
- (120) 前掲「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」『暗河』第 15

号、1977 年春季号、58 頁。

(1 2 1) 同「『最後の人』覚え書(二)——橋本憲三氏の死——」『暗河』第 15 号、1977 年春季号、53 頁。

(1 2 2) 佐藤千里「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、全作家協会、2008 年、11 頁。

(1 2 3) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。

(1 2 4) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。

(1 2 5) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。

(1 2 6) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、12 頁。

(1 2 7) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。

(1 2 8) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。

(1 2 9) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。

(1 3 0) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。

(1 3 1) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。

(1 3 2) 同「或る旅立ち」『全作家』第 72 号、同頁。

第一章 志村ふくみ監修の能衣装による石牟礼道子の「沖宮」初演

一. 石牟礼道子の『最後の人 詩人高群逸枝』の公刊

橋本静子の一周忌が巡ってきました。そして、その二箇月後の二〇〇九（平成二一）年の六月、堀場清子の『高群逸枝の生涯 年譜と著作』が世に出ます。その「あとがき」に堀場は、こう記しました。

橋本静子氏の死は、単にひとりの女性の死には止まらない。九歳のとき、兄の妻になった高群逸枝に会った最初の日から、逸枝を愛し、生涯変わることがなかった。逸枝・憲三夫妻の貧しい研究生活を、物心両面で支え、夫婦の没後もひたすら顕彰に努めて来られた。その深い愛と、豊かな記憶と、つねに支持を表明してやまない強靱な意思が、活動を終熄したのである。なんと大きな喪失であったことか¹。

そして堀場の記憶は、静子が亡くなる三年前の水俣訪問へと向かいます。

二〇〇五年一月、鹿野政直と私が水俣へ静子氏を訪ねたときの、彼女の言葉が蘇ってくる。

「憲三はね、いうなれば、普通ですよ。しかし、逸枝は天才です」。

高群逸枝に関する仕事では、いつも有りうる限りのご助力をいただいていた。本稿の完成を、終焉に近い日まで気にかけていられたという。静子氏が亡くなるなど、思ってもみなかった私の愚かさ。しかも仕事が遅く、その「旅立ち」に間に合わなかったことは、痛恨の極みというほかない²。

水俣に帰郷した橋本憲三のもとをしばしば訪れ、高群逸枝についての資料の収集に当たってきた堀場清子の手によって、静子没後一年目に、この『高群逸枝の生涯 年譜と著作』は上梓されました。高群と憲三に関する詳細かつ精緻な年譜と関連著作の一覧から構成されています。また、本書が対象とするのは、静子が亡くなる二〇〇八（平成二〇）年四月までで、そのなかには、憲三が書き残したそれまでの「共用日記」も随所に配置されていました。そうした意味において本書は、両人の生涯と業績を知るうえでの欠かせない貴重な文献が整理された有益な資料集成となっているのです。このとき堀場は七八歳になっていました。それではなぜ、自身の晩年にあって、堀場はこうした性格をもつ書物を公にしたのでしょうか。この本は、従来一部にみられた、独断的な多弁と能弁によって成り立つ逸枝や憲三についての評論や評伝とは大きく異なり、書き手の言葉は最小限度に抑制されています。そこから判断しますと、踏まえなければならない必須の一次資料（エヴィデンス）の全貌を開陳することによって逆に生まれてくる、事実から乖離した一部の独善的な既往研究への暗黙裡の抗議の表明だったのではないか——もしかしたら、そうした思いが込められていたかもしれません。

一方このころ、堀場より三歳年上の石牟礼道子も、自身の晩年と向き合っていました。憲三を亡くし、藤野と静子を見送ったいま、自分が蘇生した「森の家」を知る人は誰ひとりい

なくなりました。道子は、何を頼りに生きていけばいいのか、自問したにちがいありません。道子は、主治医の山本淑子に、こう語ったことがありました。山本は、次のように、それを紹介しています。

四年前私は長女を亡くしたが、その時、幼少期からの長女をご存じだった石牟礼さんから「これからはふっこさんを山本家の柱となさいませ。」と言われた。死者を柱にとはどういう事だろうとその時は解せない気持ちが強かったが、思い返すと石牟礼さんは、早逝した弟さんを始め水俣病患者さん達、屍累々のなかを、その魂を柱として生きてこられた³。

この証言から連想しますと、「早逝した弟さんを始め水俣病患者さん達、屍累々」のみならず、憲三を喪ってこのかた、道子は憲三を柱として生きてきたものと思われます。そしていよいよ、その思いをかたちにするときが巡ってきたのです。

『最後の人 詩人高群逸枝』が藤原書店から上梓されたのは、堀場の『高群逸枝の生涯年譜と著作』から遅れて三年のちの、二〇一二（平成二四）年一〇月でした。本書は、『高群逸枝雑誌』に連載した「最後の人」に加えて、補遺として、「森の家日記」「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死」「朱をつける人——森の家と橋本憲三」を含む旧稿の数編と、「〈インタビュー〉高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」とによって構成されていました。そのなかの「森の家日記」については、編集部によって、次のような注釈が記されています。

本稿は、「最後の人」執筆のもとになった、石牟礼道子が森の家に滞在した時の覚え書（取材メモ）である。「東京ノート」と題されたこのノートは近年渡辺京二氏によって発見された。重要かつ興味深い記述があるため、ここにそのまま収録する⁴。

ここに述べられている「重要かつ興味深い記述」とは、いかなる記述なのでしょう。次に挙げる箇所が、おそらくそれに該当する記述であることに疑いを入れる余地はないでしょう。「彼女」とは、高群逸枝を指します。

わたしは 彼女を
なんと たたえてよいか
ことばを選びすぐっているが
気に入った言葉が見つからないのに 罪悪感さえ感じる
……
わたしは彼女をみごもり
彼女はわたしをみごもり
つまりわたしは 母系の森の中の 産室にいるようなものだ⁵。

次に、七月三日のノートには、こう書かれてあります。

今晚更に高群夫妻とそして自分とに、後半生について誓った。それは橋本静子氏に対

する手紙の形で（つまり、静子氏を立会人として）あらわした。午前三時これを書き上げる⁶。

そして、神秘に包まれた聖夜が明け、帰郷する七月一日の朝が来ました。以下も、道子の「森の家日記」からの引用です。

六時目覚め。

木立の中の深い霧。

私の感情も霧の中に包まれてしまう。しかしそれは激烈で沈潜の極にあるものだ。

沐浴。

今朝の私は非常に美しい、貴女は聖女だ、鏡を見よと先生おっしゃる。悲母観音の顔になったと見とれる⁷。

「九時半、逸枝先生にお別れつげる。彼女は私の内部に帰る。切ない。玄関を出る」⁸。こうして道子は「産室」を出たのでした。

この一連の「森の家」での出来事とその意味については、第一二章「夫による『高群逸枝全集』の編集と石牟礼道子の高群継承の決意」のなかにおいて詳しく論述していますので、ここでは繰り返しません。しかし、書かれている内容は、極めて衝撃的なものでした。さらに加えて、衝撃的なことが、「〈インタビュー〉高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」のなかにも現われます。このインタビューは、二〇一二（平成二四）年八月三日に道子の自宅において行なわれました。聞き手は、藤原書店の藤原良雄です。

——憲三さんから逸枝さんのことをお聞きになって、憲三さんの姿もそばで見ておられて、[憲三さんのことを] そう思われたわけですね。

石牟礼 はい。憲三さんのような人、見たことないです。純粹で、清潔で、情熱的で、一瞬一瞬が鮮明でした。おっしゃることも、しぐさも。何かをうやむやにしてごまかすというところが感じられない。言いたいことははっきりおっしゃる。

——「最後の人」というのはどういう思いで。

石牟礼 こういう男の人は出てこないだろうと。

——憲三さんのことを。

石牟礼 はい。高群逸枝さんの夫が、「最後の人」でした⁹。

ここではっきりと道子は、「最後の人」が橋本憲三であることを、世に告白するのでした。それには、多くの人が驚愕したものと思われます。といいますのも、石牟礼研究者たちは、これまでに「最後の人」を、こう解釈していたからです。たとえば、西川祐子は、次のように書いています。

石牟礼道子は『高群逸枝雑誌』に「最後の人」の序章、第一章「残像」、第二章「潮」、第三章「風」を連載した。連載は編集責任者であった橋本憲三の死、雑誌の終刊によって中断されたままである。「最後の人」という題名は、文明の最後をみとどける人として

れる。高群逸枝は、人類はしだいに子どもを生まなくなり、やがて寂滅すると、終末を予言したのであった。「最後の人」とはまた、チッソの工場がはきだす産業社会の毒に汚染される水俣の海とさまざまな生命の死を見届ける石牟礼道子その人でもある¹⁰。

また河野信子は、「最後の人」を、このように推断していました。

高群逸枝の史料処理をめぐっては、いくつかの錯誤が指摘され、『母系制の研究』からは、十五年戦争中のヒメの力への期待が導き出され、女たちの原記憶の潜在性を浮上させた。これらの事実をめぐって、石牟礼道子は「鬼の首をとったように」（一九九五年十月福岡市アミカスで開かれた「高群逸枝をめぐるシンポジウム」のレジメ）はしゃぐものではなく、その最も内質である場にこそ、視線を集中させることを提言している。やはり、石牟礼道子にとって「最後の人」は高群逸枝であった¹¹。

上の事例からもわかるように、道子にとっての「最後の人」が橋本憲三であることを指摘した研究者はこれまでに存在せず、それだけに、この公言は、石牟礼研究の全面的刷新をも招来しかねない、激震を伴って受け入れられたものと思われます。

「最後の人」が所収された『石牟礼道子全集・不知火』の第一七巻の刊行が、二〇一二（平成二四）年の三月です。それから七箇月後に『最後の人 詩人高群逸枝』は世に出ます。道子は、こう書きます。「この度、『最後の人』を『全集』のなかから取り出して、わざわざ単行本にして下さるという。藤原良雄氏のご厚意にはお礼の申しあげようもない」¹²。それでは、あえて『全集』から取り出し、どうしても「最後の人」を単行本として世に送り出さなければならなかった、その目的とは一体何だったのでしょうか。「〈インタビュー〉高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」のなかの藤原良雄と道子のやり取りのなかに、その一端を見出すことができます。「最後の人」の連載は、憲三が亡くなる直前に刊行された『高群逸枝雑誌』第三一号における掲載を最後として、あえなく終了します。それから三六年が経過していました。藤原の「どうしてもずっと単行本にされなかったんですか」という質問に、道子は、こう答えます。

高群逸枝のファンはたくさんいますよね。ですから、慎んでいたという気持ちです。森の家に滞在する特典を与えられて、そこで『苦海浄土』まで書かせていただいて、『西南役伝説』の一部も書いているのです。それも全部、憲三先生の目を通して、とても大切な時間をいただきました¹³。

それに続けて、道子の意味深長な語句が並びます。「奇跡のような時間をいただきました。それをひけらかしたくない、と思っておりました。……そのうち、だれかが見つけて読んでくださるだろうと、そんな気持ちでした」¹⁴。評伝「最後の人」は、「森の家」で憲三と道子が交わした、静子を仲立ちとする「後半生の誓い」と、男女としての「聖なる夜」を含みます。掲載された『高群逸枝雑誌』は、はじめ五百部、のちに千部へ増刷されたとはいえ、少部数の、したがって必ずしも大きな影響力をもっているわけではない、地方発の雑誌でした。このことは、結果として道子にとっては、自身の「最後の人」をいたずらに人目に晒す

ことなく、実質的に封印することを意味していました。また、逸枝ファンのなかには、逸枝を玉座に祀り上げるも、その一方で憲三を、つまりは、自分が添い遂げようとしている「最後の人」を、足蹴にしては牢獄につなぎ止めようとする人も多くいました。道子にとってこれは、いわれのない耐えがたい仕打ちでした。それでも、寡黙を守り通しました。しかし、三六年の時は流れ、そろそろ死が迫ろうとするこの時期、道子の心情に大きな変化が生じたようです。思うに、「だれかが見つけて読んでくださるだろう」という、これまでの控えめな姿勢から、単行本にすることによって、自身と憲三の関係を、より多くの人にわかってもらいたいという解き放された思いへと、道子の心情は方向を変えたのではないかと判断されます。このとき道子は、すでに八五歳になっていました。これが、秘して死するよりも、生きて、真の愛の姿を広く世に告げることを、道子は望んだのではないかと考えるゆえんです。

しかし、別の考えも成り立つかもしれません。それは、執筆の当初から道子は、いつか来る最後の日まで待って、自身の「最後の人」を世間に紹介しようと、密かにこころに決めていたのではないかという解釈です。そうであるならば、「『最後の人』とはいいい題だ。こちら早く読みたい」という憲三の気持ちに、この最後の時期に至り、ついに満を持して、望みどおりに、添い遂げることができたことになります。

いずれにしても、「病氣になって、怪我をして、視力も落ちました」¹⁵と語る身体的状況にあって、もはや道子には、そう多くの時間が残されているわけではなかったのです。

二. 石牟礼道子の新作能「沖宮」の執筆

憲三は、ある日のことを忘れることなくよく覚えていて、死の前日、混濁する意識のあいまの一瞬に、道子に、こう語りかけました。

「秋晴れのよい日でしたね。あなたの古典的な家にお伺いしたのは。かつてないことでしたが。ちょうど一〇年です。彼女〔逸枝〕が出発した頃に、うりふたつでしたよ、本棚もなんにもない、しかし、本が二、三冊あって。うっかりすると世間にいられない孤独な姿で……。僕にはほんとうによくわかった。『椿の海』はまだですか。『最後の人』とはいいい題だ。こちら早く読みたいという願望は、止みがたいなあ」と割れた笛のような声でおっしゃった。氏がおっしゃった「あなたの古典的な家」とは、実家のとなりにあった、にわとり小屋を、かろうじて人間が住めるように父がしてくれた掘っ立て小屋のことである¹⁶。

一九六六（昭和四一）年の「秋晴れのよい日」、「掘っ立て小屋」に住む道子を訪ねて、「森の家」への同行を促したのは、憲三と静子の兩人でした。この「森の家」で、亡き逸枝の精霊を介して、道子の吐血していた魂が蘇ります。それから一〇年が立ち、道子は、静子とともに、主治医の佐藤千里を交えて憲三の臨終に立ち会うのでした。死に際において憲三は、「『最後の人』とはいいい題だ。こちら早く読みたいという願望は、止みがたいなあ」と、「割れた笛のような声で」発します。これが、「最後の人」である橋本憲三から石牟礼道子への、ひとつの遺言としての「最後の言葉」でした。この逸話が登場するのは、『最後

の人 詩人高群逸枝』の「あとがき」においてです。道子が亡くなる、およそ五年数箇月前に書かれたことを考えると、死期を前にしてまとめられたこの作品は、道子から「最後の人」憲三への「最後の返礼品」だったのかもしれませんが。

こうしたなか、いよいよ道子の情感は高まっていました。『最後の人 詩人高群逸枝』が刊行される前年（二〇一一年）ころから、道子の筆は、新作能「沖宮」へと向かいます。ちょうどその時期、染織家の志村ふくみから、一通の手紙が道子のもとに届きました。志村は、第九章「志村ふくみの染織家への道を支える富本憲吉・一枝夫妻」において詳しく述べていますように、富本憲吉と一枝の夫婦に背中を押されるようにしてこの道に入り、その後大成した工芸家です。道子は、平塚らいてうとは面識がありました。一枝もまた、青鞞の女です。その点で、道子にとって、志村との出会いは、間接的ではありますが、青鞞の女との最後の邂逅ということになります。志村ふくみと石牟礼道子の交流の様子は、その後、『遺言——対談と往復書簡』（筑摩書房、二〇一四年）となって公開されるに至ります。それでは、そこから数箇所を引用することによって、『遺言——対談と往復書簡』の出版企画の発端や「沖宮」の執筆過程について、加えて、そこで使われる能衣装の製作依頼にかかわって、再現してみたいと思います。

二〇一一（平成二三）年八月八日に志村から道子に出された手紙に、『遺言——対談と往復書簡』の出版企画の発端が、記されています。

先日、筑摩書房の N さん（長いつきあいです）とお話しておりますとき、思わず、今一ばんお話ししたい方は石牟礼さんです、と申しまして、思いがけずこのような企画を立てられました。石牟礼さんのご体調のこととか、いろいろおいそがしいことを充分存じ上げないまま、ご迷惑もかえりみずおたより申し上げました。ご無理のようでしたら [ら] どうぞおことわりくださいませ¹⁷。

九月八日に志村に宛てて、道子は次のような手紙を書きました。

わたくしは今、最後の作品と思う新作能「天草四郎」を構想中ございまして、シテの四郎の装束をこの「みはなだ色」で表現したいと思うに至りました。……

不躰に急な話を持ち出しまして恐縮でございますが、あいなるべくはお引き受け願いたいと思います。能の台本は三分の二くらいまでできております¹⁸。

しかし、ちょうどこの日に、筑摩書房の N さんから手紙が届いたため投函を見合わせ、九月一日に追伸として一筆を書き加えたうえで、志村に送りました。以下は、追伸に書かれてある一節です。

能装束についてご相談の手紙を書いた日に、筑摩書房の N さんから往復書簡のお話をいただきました。……

往復書簡のお申し入れ、望んでもめったに得られないご縁でございます。ただちにお引き受けすべきでございますけれども、このところ私、長年のパーキンソン病が進行しまして歩くのもままならず、箸とペンがうまく握れないのが一番苦痛でございます。こ

の度の新作能を最後の作品と思うのは、そのせいでございます。何としてもこれを仕上げてから往復書簡にとりかかれればと思いますが、それでよろしゅうございますでしょうか¹⁹。

道子は、この「新作能を最後の作品」と思っています。他方、能衣装の製作依頼を受けた志村は、一週間後の九月一五日、このような返信を道子へ書き送りました。

思いがけない新作能の能装束のおはなし、胸がとどろく思いで拝見いたしました。石牟礼さんが渾身の力をこめて「天草四郎」という新作能をおかきになっていらっしゃることは何という素晴らしいことでしょう。……能装束を織りたいのは私の終生の念願です。まして天草四郎という霊性の高い美しい男性の衣裳とは、私に果たして織れますかどうか不安な思いもいたしますが、何かあたえられた仕事のように思われ、心からよろこんで織らせていただきます²⁰。

一一月一三日の道子から志村への手紙の一部に、次のような文言があります。「これまで出来上がりかけの作品を人さまにお見せしたことはないのですが、予告してしまったのは生き急いでいるからだと思います」²¹。この一言から、近づいてくる死を道子が意識していることが見て取れます。年が変わると、二〇一二（平成二四）年一月二〇日に、再び道子は志村に宛てて、次のような内容の手紙をしたためました。

天草四郎の能装束を早々とお願いいたしましたけれども、その後体調を悪化させ、一度書いた台本を破棄して初めから書き直しております。……

その中で頭に閃いて止まらないのは、この世ならぬ恋の相手、四、五歳くらいの「あや」の装束の緋の色（紅の色）でございます。……

書き上がりましたら第一番にお目にかけます。

筑摩からお申し出の対談もこのことが終わってからにさせていただきます²²。

ここで注目されるのは、おそらく十代半ばの四郎の「この世ならぬ恋の相手」が「あや」という名の童女であるということです。つまりここから、この物語は、四郎とあやとの道行きを主題にしていることが連想されます。それから一箇月後の二月二四日の書簡の末尾に、道子は、いよいよこう記しました。「まだまだ不出来でございますが、『沖宮』をお送りいたします。御笑覧くださいませ」²³。

こうして、生前にあつて道子は、絶筆を意識した新作能「天草四郎」改め「沖宮」を書き進めるなか、主人公の天草四郎がまとう「みはなだ色（天青の色）」の装束と、五歳の童女・あやが身に着ける「緋の色（紅花の色）」の衣装とを志村に依頼したのでした。

「沖宮」の台本が一応完成したことにより、足踏み状態になっていた志村と道子の対談が、四月二二日に、実現しました。

志村　：お体調、いかがですか？

石牟礼：あまり良くはないですね。ですけど、もうちょっと書き残していることがございますので。もうでも、それも、もういいかという気もするんですがございますけど。

志村：例の、いま取り組まれておられる、新作能ですか？

石牟礼：はい。その新作能と高群逸枝論ですけれども。新作能は、書くことは書きましたけど、まあ、人さまが、どんなふうにお読みになるか。それで、その新作能について、志村さんに、衣装をお願いしているんですがございます。登場人物の童女「あや」の着る衣装を、紅色の衣装を……²⁴。

ここで道子が言及している「高群逸枝論」とは、もうすぐ出版される予定の『最後の人 詩人高群逸枝』が念頭にあったものと思われます。そしてまたこの手紙から、『最後の人 詩人高群逸枝』のみならず、「生き急いでいる」との自覚のなか「もういいかという」あきらめの気持ちももちながら、「沖宮」と向き合っている様子をうかがい知ることができます。明らかに道子にとって、この二作は切り離すことのできない一対のものであり、この世に遺す最後の作品であるとの強い思いをもって、このとき、是が非でも完成させようとしていたのです。ふたりの対談は続きます。

志村：はい、それで、今日、ちょっとお持ちしました。紅の色をお見せしようと思って、そめ糸を……あんまり、まだ染めていないんですけど、新作能を脱稿されて、いよいよよなったら、本格的に染めようと思っているんです。

石牟礼：まだ書き上げていないのに、早々と志村さんに発想を漏らしてしまって、ご迷惑じゃなかったかしらと思って。

志村：とんでもないです。私は本当に喜んで、やらせていただきたいです。

（染めた糸を卓上にひろげる）

石牟礼：まあ……きれいなこと……まあ……。

志村：なんか、今度の新作能、執筆の途中のお原稿を、何度か送っていただいて、読ませていただいて、こんな感じかしらと。

石牟礼：まあ……はあ……。

志村：いろいろ想像して。

石牟礼：まあ……まあ……。

志村：染めてみましたけど。

石牟礼：まあ……。

志村：これが、紅と、これが水縹^{みはなだ}の色²⁵。

こうして、四郎とあやの能装束を織る染め糸の見本が、志村から道子にもたらされました。しかしこれには、道子は不満だったようです。山本淑子が、こう明かします。

文学に限らず芸術全般に鋭い感覚の人だったから色に関しても非常なこだわりを示されていて、もう何年も前、志村ふくみさんから送られてきた糸束を素人の私にみせながら「この糸はきれいですが私のイメージとは少し違うんですよ。どうしたらいいでしょうか」と相談された。相談するというより又糸を手にも思案するという風だった。自分の

作品に対しては納得のいくまで推敲に推敲を重ねられる方だったから、色や形に対しても厳しかったのだと思う²⁶。

道子自身は、原作「沖宮」のなかで、「緋の色」を、次のように表現しています。

村の女房ら、寄り集まり、古き家の蔵から緋の色の旗さしものを見つけ出し、その古き布水流少なき川にて洗いあげたれば、古き煤、埃落ちて緋き色、花のごとくに現れ、かかる朱の色見しことなし²⁷。

原作の記述が示すように、村の古家の蔵に長くしまい込まれていた古い布切れを水で洗って縫い直してできたものであれば、この道行きに使われる衣装は、歓喜に満ちた婚礼などにみられる光り輝く新調の晴れ着のようなものではなく、生と死の、まさしく生まれ変わりのための巡礼の旅路にふさわしい、おそらくは歴史のなかで積み重なった血と涙の無念と悲痛とが無言のまま染み込んだ土着色の青紫と紅彩の衣であるにちががなく、おそらくそのことと、志村が持参した糸とのあいだに、道子の違和感があったのではないかと推量されます。

この対談から半年後の二〇一二（令和二四）年の一〇月、『最後の人 詩人高群逸枝』が藤原書店から上梓され、翌月に、「沖宮」が『現代詩手帳』（第五五巻第一一号）に掲載されます。その後「沖宮」は、『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻（藤原書店、二〇一三年）と、志村ふくみ・石牟礼道子『遺言——対談と往復書簡』（筑摩書房、二〇一四年）に所収されることになるのでした。

三．「沖宮」の象徴世界とその分析

それでは、「沖宮」の概要をまとめてみます。

原作に従うと、あらすじはだいたい次のようになります。場面は、過ぎし昔の彼岸花の咲くころの島原・原の廃城跡。先の島原・天草の乱で散った天草四郎が登場し、次に四郎の乳母のおもかさまとその夫の佐吉が現われ、さらに、その夫婦の娘のあやが続きます。あや以外はすべて霊界の人で、あやは、亡き四郎を慕う、わずか五歳に過ぎない童女です。あやは四郎のことを「兄しゃま」と呼ぶ。久しぶりの再会をみなで喜び、昔の思い出に浸る。こうして登場人物たちによる導入の会話が終わると、場面が切り替わり、いよいよ物語が進行します。天草下島の村人たちは、死に絶えんばかりに干ばつに苦しんでいました。そこで、雨を司る竜神への^{ひとみごころ}人身御供として選ばれたのが、乱で両親を失くし、もともと竜神の姫でもあった孤独の身の幼子・あやでした。村の女房たちが涙ながらに縫った緋の衣装に身を包み、彼岸花で飾られた小舟に乗せられたあやは、独り、夕陽が沈む茜色の沖へと波の合い間を進んでゆきます。浜辺では、「神代の姫となって、沖宮の美かところ」へ赴く「あやしゃま」を愛おしみ、雨乞いの村の衆が手をあわせる。やがて天空から恵みの雨粒が降り注ぐも、雷鳴がとどろき、稲妻が炸裂するや、ついにそこで舟影とともに緋の色が視界から消えてしまいます。するとそのとき、あやがひたすら心を寄せる、霊界の天草四郎が、みはなだ（水縹）色の衣をまとして、その姿を現わすのです。四郎の乳母の娘があやであることからして、ふ

たりは乳兄^{ちきょうだい}妹の關係にあります。こうして、雨水をこいねがう村の民を救うための人柱^{ひとばしら}となつてゆく悲運のあやと、受苦の身にあるあやを決然と迎え入れ、手をとって導いてゆく守護精霊者としての四郎との、切なくも美しいふたつの魂の道行きがはじまるのです。向かう先は、竜神と、いのちたちの大妣^{おおははぎみ}君とが住むという海底^{うなぞこ}の〈沖宮〉。ふたりの道行きの舞いを慰めるように、あるいは祝うかのように、何か読経や讃美歌にも似た音響が高らかに鳴り渡るなか、この物語は終わりを迎えます。

以上が、あらずじです。「沖宮」を書きながら、道子の脳裏には、どのような像（イメージ）が映し出されていたのでしょうか。以下に、思いつくままにそれらを、コラージュ風に合成してみます。したがってこれが、私の思う「沖宮」の、その象徴世界の分析ということになります。

場面として設定されている天草は、道子の実際の出生の地であり、対岸の島原にある原城は、道子が一九九八（平成一〇）年四月から『熊本日日新聞』に連載した「春の城」の舞台でもあります。天草と島原のあいだには海原が横たわります。そしてそれは、道子が日々日常的に目にしていた不知火海の外海でもあるのです。それではそこで、道子にとっての海、あるいは海底^{うなぞこ}のイメージを探ってみます。道子は、「陽のかなしみ」と題されたエッセイのなかで、このように書いています。

天草島あたりの、磯に露出している古生代の地層に出逢っても胸がとどろいた。地層の年齢にいきよに立ちあうはめになって、わたしはくらくらする感じだった。ああ最初はわたしたちは、海底の岩だったのでは、岩から生まれてきたのだとおもう。海がながい間、養ってくれたにちがいない、そう思われて泪ぐんだりした。……

不知火海はわたしの心の内部だった²⁸。

「海底の岩」こそが、道子が生まれ落ちた原郷であり、そして、最後に帰るべき場所と、道子はいつしか思い定めていたのかもしれませんが。〈沖宮〉が、天草灘沖の「海底の岩」であることは、間違いないでしょう。

島原・天草の乱では、総大将の天草四郎をはじめ、蜂起した数万の下層民たちが倒れ、加えて、親や兄弟を失い孤児となった子どもたちが大勢いました。さらに、日照りや干ばつが人びとを苦しめます。この乱の背後には、行き場を失くした多くのいのちたちが漂っています。そうした苦しみと悲しみのイメージを喚起してやまない体験が道子にありました。それは、水俣病患者たちとの出会いであり、チッソ本社前の路上での座り込みであつたろうと思われます。道子が編集した『水俣病闘争 わが死民』の自身の巻頭言に、次のような一節を読むことができます。

死民とは生きていようと死んでようと、わが愛怨のまわりにたちあらわれる水俣病結縁のものたちである。ゆえにこのものたちとのえにしは、一蓮托生にして断ちがたい。……

「一生かかっても、二生かかっても、この病は病み切れんばい」

わたくしの口を借りてそのものたちは呟く。

そのようなものたちの影絵の墜ちてくるところにかがまり座っていて、わたくしの生きている世界は極限的にせまい²⁹。

このなかの「わたくしの口を借りてそのものたちは呟く」という文言が、石牟礼文学の神髄であると思料されます。といいますのも、幻想のなかにあって、他者の、あるいは自分自身の、あえぐような嘆きが道子の耳に聞こえ、それを受け止めて文に書き留めたものが石牟礼文学ではないかと、考えるからです。たとえば、『西南役伝説』が他者の、『椿の海の記』が自分自身の、といった具合です。道子のなかでは、現実の「水俣病闘争」と、歴史上の「島原・天草の乱」は、ともに「死民」による闘いであるという点で重なり合い、両者を見る道子のイメージは避けがたく通底していたにちがいありません。

彼岸花についても、そして、四郎とあやの装束の色についても、それらの源泉となるイメージを、道子がすでに書き記している文に見出すことができます。道子は、川の源流を求めて、しばしば熊本県境の山々を訪ねました。つまり、道子にとっては、山から川が流れ、海に達する過程が、生から死を経て最後に再生される、いのちの歩みゆく道程を表わしているのです。以下のように道子は、ある日遭遇した山野の情景を描写しています。

道々、今年も彼岸花がうつくしかった。段々田んぼもみのりかけていて、暮れてゆく夕映えを谷の間にやどし、この世ならぬ色調で照り映えていた。……

能衣裳の沈金のような色や、藍の色の、藍から川の水にさらしうつすときの、古代緑とでもいおうか、息をのむような一瞬の緑が、さらに青になるときの神秘的な艶をみるときに、日本人の色彩感覚にすりこまれていた色調がおもわれる。それはたぶん、稲の色を主とする田園の美からなっていたのではあるまいか。

色の調べをあらわすことばがむかしあった。かろうじて、まだその調べの残されている山野をゆく。自分の蘇生のため³⁰。

彼岸花の美しさも、四郎とあやの衣装に使われる「みはなだ色」と「緋の色」のイメージも、どれもこれもおそらくは、こうした道子の山歩きのなかから感得されたものだったのではないのでしょうか。

それでは、「雨乞い」のイメージは、どこに由来するのでしょうか。体調を崩し、山梨の病院に入院していたとき、その土地の名利を巡るなかで、道子は「雨乞いの観音さま」に出会っており、そのときの様子を、道子は次のように書き留めています。

さてその観音像は二体で、日での池や川床に縄をつけてそびき廻されて何百年経ったのだろう。目も鼻も口も潰れはて、手も足ももげ落ち、雨乞い祈祷の火にあぶられて酸鼻な姿である。不思議なことに黒焦げの、損なう所はもうどこもないその姿が、えもいわれぬ豊饒と気品を、胸元や腰のあたりに漂わせていたのであった。一樹作りで平安以前のものらしいという。

たちどころにその姿は、見えない縄にそびかれ町中の晒し者となり続け、死狂した自分の祖母や、幼いころ私を膝の上に抱いてくれた女郎たちや、水俣病死者たちの姿と重なった³¹。

雨乞いのための人身御供^{ひとみごくう}となって、独り沖へ流されるのが五歳の幼子のあやです。道子は、この女童に自分自身を投影していると考えてよいのではないのでしょうか。つまり、「雨乞いの観音さま」こそが道子であり、道子こそが、あやなのです。いよいよ岸辺を離れ、あやを乗せた小舟は沖へと向かいます。すると雷鳴がとどろき、閃光が走り、恵みの雨が天空からこぼれ落ちてくる、まさにそのときです、帆影が消えるのでした。それを見ていた、あやのために緋色の衣を縫った村の女房たちの頭が、雨に打たれながらしゃくり上げて泣き、こうつぶやくのでした。

あやしやまは沖宮の美^よかところにゆかれしや。
むごきこの世に生きるより、いのちたちの大妣君^{おおははぎみ}のおらいます沖宮に行くがよい。あなかなしや。
四郎どのは、あやしやまを迎えに参られたまいしや。

(能管の低い音にて道行き始まる) ³²

かつて道子は、「森の家」から静子に宛てて出した手紙のなかで、このようなことを書いています。

うつし世に私を産み落とした母はおりまして、天来の孤児を自覚しております私には実体であり認識である母、母たち、妣たちに遭うことが絶対に必要でした。……

つまり私は自分の精神の系譜の族母、その天性至高さの故に永遠の無垢へと完成されて進化の原理をみごもって復活する女性を逸枝先生の中に見きわめ……そのなつかしさ、親しさ、慕わしさに明け暮れているのです。そして私は静子様のおもかげに本能的に継承され、雄々しいあらわれ方をしている逸枝先生のおもかげを見ます³³。

この言説から判断するとすれば、〈沖宮〉に住むいのちたちの大妣君は、まさしく逸枝その人であり、周りでそれを支えるいのちたちが、藤野であり静子であるということになります。つまり、〈沖宮〉は、道子にとっての「精神の系譜の族母」の住み家なのです。その家へ手をとって案内する四郎が、道子にとっての「最後の人」である憲三であることは、もはや言を俟たないでしょう³⁴。

加えれば、差し詰め竜神は、しばしばこの間原作者の道子を死に追い詰めようとした、現実世界の不条理を体現する死神の化身ということになるのではないのでしょうか。恋い慕う四郎に導かれ、晴れて道行きを成し遂げ、面影に宿す妣たちが待つ海底の美しき〈沖宮〉——。しかし、一方そこには、雨を支配する竜神が住み着いています。もともとは、あやは竜神の姫でもありました。道子は自分の実の父親について、かつてこう記述しています。

父は酒乱な上、泣き上戸でしたが、栗飯と茶碗が飛び散って、母が裸足で外に飛び出たあと、こわれた火鉢に「ちょく」という焼酎瓶を据え、「ミッチン、汝^{われや}、このお父ちゃんにつきあうか」といって、冷たい盃をぶるぶるこぼしながらつきつける。私は

……好かん、と思いながら、フーンと鼻で返事して、その盃を何べんも受けました。夜市で見たこわい「地獄、極楽」の中のやせた「餓鬼」たちが青い舌をたらんと出している、それを思い出し、父に似ていると思ったのです³⁵。

これが、道子が宿す実父のイメージです。したがって、この道行きは、「精神の系譜の族母」のもとへ帰るという意味だけではなく、「餓鬼」のもとに帰ることをも同時に示唆します。つまり、この道行きには、あやにとっては「雨乞いの観音さま」となって再生するしかほかにはない厳然たる宿命としての不条理が、一方で横たわっていたのでした。

かくして道子は、憲三に手を引かれ、逸枝と、藤野と静子が住む、そして「餓鬼」の幻影が居着く〈沖宮〉へと向かうことになります。道子が書いたもののなかに「道行」と題された一文があり、これが、道子にとっての道行きに寄せるイメージではないかと思われますので、ここで以下に引用します。

生死しょうじのあわいにあればなつかしく候
みなみなまぼろしのえにしなり

おん身の勤行に殉ずるにあらず ひとえにわたくしのかなしみに殉ずるにあれば道行のえにしはまぼろしふかくして一期の闇のなかなり³⁶

そして道子は、こう加えます。

〈ゆき女じょうらく環路〉という章を、苦海浄土第二部でいま想定しています。
わたくしの死者たちは遺言を書けませんか、死者たちにかわって、わたくしはそれを書くはめになるのです。
してみると、すでにわたくしは死者たちの側にいることになる。
いついつ、そのようなことになったのか。
どうもわたくしは心中をとげたい³⁷。

「沖宮」にあっては、あや以外はすべて霊界の人、つまり死者たちです。こうして、生死しょうじのあわいにあって、あやと四郎の道行きがはじまりました。次が、道子が書く「沖宮」のラストシーンです。

われらが縫いし緋の衣
海底うなぎにゆれる
林の中を
一輪の華となりて
四郎どのに手をひかれ
大妣おおはぎみ君と 竜神さまのおられます
沖宮へ 道行きはじまりしかな。

うなぞこ
海底色の幕がたれてくる。

その前を、二人が手を取り合ってゆっくりと舞いながら幕。

(余音 じょうじょう 嫋 嫋たる高音域の能管の音) ³⁸

雑駁な記述になりましたが、以上が、私が解釈する新作能「沖宮」をかたちづくっているイメージの総体です。著作集12『研究追記——記憶・回想・補遺』の第二部「わが肥後偉人点描」のなかの第四話「石牟礼道子の死去から一年——ハナシノブ考あるいは『沖宮』考」においても、これとは別の手法で、「沖宮」の構造と意味を分析しています。こちらをあわせてご参照ください。

さてその一方で、二〇〇八（平成二〇）年十一月から『熊本日日新聞』に連載されていた道子の自伝「葎の渚」が、二〇一三（平成二五）年五月の掲載を最後に中断に至ります。自伝は、道子が「森の家」を辞して水俣に帰り、『高群逸枝雑誌』の創刊号から「最後の人」を連載するも、水俣病闘争に全面的に関わろうとすると途中で途切れます。次は、自伝のラストシーンです。いつかは姿を消すことになるであろう、守護聖人たる憲三から巣立って、いよいよひとりになることを自覚せねばならなくなった道子の姿が、そこにありました。

しかし、何気なく取り掛かった水俣病問題は、容易ならぬ前途を含んでいた。これは世界史的な事件になるのではないか、社会史的な文明の大転換期に我から進んで飛び込んだのではなかろうか。そのことを橋本憲三氏に断片的にお話しした。憲三氏はこのころ、お体の異変が進みつつあった。私の話を聞かれて憲三氏は静かに頷かれ、「単なる地方の一事件ではないですね。僕にもわかりますが、逸っぺが生きていたら、もっとよりよく深くお話をうかがえるのにな」と静かにおっしゃってくださっていた。

憲三氏にお言葉をいただきながら、心の底で私は「一人であることを自覚せよ、これは容易ならざることをおっぱじめたぞ。一人であることを再々自覚せよ」と、自分に言い聞かせていた³⁹。

『熊日』に連載された「葎の渚」が単行本になり、さらに『石牟礼道子全集・不知火』の別巻に所収されるのが、二〇一四（平成二六）年の五月です。そのなかで道子は、「自伝『葎の渚』は『熊本日日新聞』に連載したのだけれど、水俣病第一次訴訟の頃まで書いて息切れしてしまった。病状もよろしくなかったし、訴訟提起後の錯綜した時期を整理して叙べるには、体力・気力ともに尽き果てていた」⁴⁰と書きました。

連載を中断する半年前の二〇一二（平成二四）年の一〇月に上梓した『最後の人 詩人高群逸枝』において、「最後の人」が橋本憲三であることを口外し、翌十一月に雑誌に発表した「沖宮」において、憲三との道行きを成就しました。さらに加えて、自伝「葎の渚」の最終場面にあっても、自分が尊師と仰ぐ憲三について触れることができました。未完ながらも新聞連載に幕を閉じようとするこのとき、何も、引き裂かれた自己のすべてが言葉への置き換えによって完全に救われることはなかったにしても、世に書き残すべきことは全部書き尽くしたという安堵感と充足感が、道子のところを包み込んでいたものと思量されます。しかしその一方で、道子の身体は、もはや回復の見込みのない、厳しい状態に置かれていたの

でした。

四. 石牟礼道子の死と水前寺成趣園での「沖宮」初演

道子の最期につきましては、渡辺京二が、道子の死後『アルテリ』に寄稿した「石牟礼道子闘病記」に詳しく、そこから断片的に引用するかたちで、以下に構成します。

二〇〇三年六月には、ヘルペスが起って坂本病院に四〇日ほど入院。しかし、退院時には血糖値は正常になっていた。問題は歩行を始め、日常の動作がかなり緩慢になっていることで、状態が進めばひとりで入浴するのもむずかしくなるのではと心配された。山本淑子さん（哲郎夫人、内科医）はずっとパーキンソン病と診断していたらしいが、私がそれを初めて彼女の口から聞いたのはこの年十一月一五日だった⁴¹。

このころ渡辺は、道子の食事づくりに励んでいました。

彼女の食事を全面的に私が作るようになったのは湖東時代から、以降「ユートピア」に入居するまで続いた。毎食四、五品は作り、栄養バランスも十分考えたつもりだ。「おいしい」とよろこんでもらったのも際々だが、手をつけようとしないうちはどうにもならなかった⁴²。

渡辺は、このようにも書いています。「私は二〇〇五年の初頭をもって河合塾福岡校の講師を辞め、その後は彼女の仕事場に日参していたのである」⁴³。

一六年間仕事場に使っていた、真宗時に隣接する健軍四丁目の借家を離れ、湖東二丁目に道子が転居したのは、一九九四（平成六）年四月でした。その後、二〇〇二（平成一四）年七月に、上水前寺二丁目に新築された知人宅を借り受けて住み、続いて二〇〇八（平成二〇）年五月に、京塚にある山本ビル四階に居を移すのでした。

この山本ビルは山本哲郎氏の父君の経営する病院で、四階は患者の入院室であったのだが、父君引退ののちの何年か経て、哲郎夫人淑子さんが心療内科を開院されたが、四階は使用しないで道子夫人に提供されたのである。ワンルームのひろびろとした使い易い空間であるのみならず、主治医がすぐそばに居てくれるのだから、願ってもないことだった⁴⁴。

翌年（二〇〇九年）、渡辺は、主治医からこう告げられました。

八月六日には山本淑子医師の話あり。右脚の骨も非常に細くなっているのです、いつ骨折してもおかしくない。咀嚼と嚥下も困難になって来ており、二十四時間の介護が必要で、作家活動も終わりだろうとのことで暗然となった⁴⁵。

二〇一三（平成二五）年の「一二月には幻聴が始まっていた」⁴⁶。翌年（二〇一四年）の

五月、道子は、秋津一丁目にある高齢者施設の「ユートピア熊本」に入居しました。「ここは看護師も四人おり、しっかりした介護をしてくれる上、雰囲気がとてもよかった。この施設については、真宗寺の佐藤薫人住職が教えてくれたのである。結局ここが終焉に至るまで、彼女の終の棲家となった」⁴⁷。

このころ水俣では、道子の夫の弘の体にも、異変が生じていました。息子の石牟礼道生は、こう書き記しています。

父の命がその時を迎えようとしていると主治医からの連絡を受けて母が熊本から水俣の病室に駆け付けた。

「作家としてこれたのは全てあなたのお蔭でした」

と、母が父の耳元で言った。僅かに父が苦笑いしてうなづいたような表情を見せた瞬間に父の生涯は報われたと思った⁴⁸。

二〇一五（平成二七）年八月に、弘が亡くなると、翌年四月、熊本地震が発生し、道子の施設も大きな被害を受けました。それから二年後の二〇一八（平成三〇）年の二月一〇日、道子は帰らぬ人となりました。享年九〇歳でした。渡辺は、そのときの様子を、このように書き表わしています。

逝かれたのは一〇日未明三時すぎ、道生さん、妙子さん、ひとみさん（姪）、大津円さんの四人が看とられた。ずっと昏睡状態だったのが、最後に眼をぱちりと開き、涙が一滴こぼれて、それが臨終だった由。私は最期を看とれずとも後悔はなかった。もう心中何度も別れを告げていた⁴⁹。

一方道生は、このように書いています。

三月二十四日、水俣で「おくりびとの集い」を催して頂いた後、水俣の実家の仏壇に母の遺骨と位牌を父のその横に並べて置いて手を合わせた⁵⁰。

道生はまた、渡辺京二と山本哲郎が創設した人間学研究会の機関誌である『道標』が企画した特集「追悼 石牟礼道子さん」にも寄稿しました。その「多くの皆様に助太刀されて母は生きて参りました」と題された一文のなかで、道子が「森の家」へ出て行ったときの様子についても触れていますので、以下に引用します。

普段は優しい母が突然、「東京へ行く」と言い出した。私としても進学のことやそれなりに青春の頃の悩みもあった。「大人になれば解かる時が来る」と言いながら「ほんとうの悲しみと言うことが解かるかおまえに」と何もこんな時に言わなくても良いではないかと思ったがそれ以上、何も問えなかった。母のただならぬ気配を私なりにその時感じた。「今、私はしんからおまえに伝えておきたいと思っていることがあるのよ」とも言い出した。父母から劣性の能力と感性しか遺伝しなかった私でもこのような「ものの言い」の境地に立ち至った時の母の凄味だけは感じる事が出来ていた。高群逸枝様

のご主人、橋本憲三様に導かれての「森の家」訪問は母にとって重要な契機となったと自ら記しているが父にも私にとっても大きな衝撃であったし今後のありようの契機となった⁵¹。

その後道生は、名古屋で学生生活を送り、その地で職を得て、所帯をもちました。道子が家を出たあとの自身と父親の生活を顧みて、道生はこのように記します。

父は見事に夫の役目を果たしました。父には睦子、母には妙子と言うそれぞれ妹がいます。私の叔母であるこの二人に父と私は「妻」と「母」の役割を何十年ものあいだ務めてもらいました。この二人の叔母に私は一生頭が上がりません⁵²。

そして、以下に引用するのが、道生に宿る父親像です。

ものを思うと取り憑かれたように書き始める母。何を言おうが通じない。囲碁や釣りや庭いじりを好み知人や親戚の面倒や相談にのり人柄の良い学校の先生だった普通で穏やかな父だった。そんな母に距離は置きながらも資金的援助を怠ってはいなかった⁵³。

石牟礼道子が死去したのは、二〇一八（平成三〇）年二月一〇日のことでした。この日、愛知県にある名都美術館では特別展「志村ふくみ——いのちの色に導かれて——」（平成三〇年一月一二日から三月一八日までの会期）が開催されていました。志村ふくみはこのとき、どのような思いで石牟礼の死亡の知らせを受け止めたのでしょうか。その喪失感、筆舌に尽くしがたいものがあつたものと思われます。

石牟礼の死去から四日が過ぎた二月一四日の『熊本日日新聞』（二八面）は、「沖宮」の公演について、こう報道しました。「一〇日に九〇歳で亡くなった作家の石牟礼道子さん原作の新作能『沖宮』が、初めて舞台化されることが一三日までに決まった。一〇月六日の水前寺成趣園能楽殿（熊本市中央区）を皮切りに京都、東京で上演。衣装は石牟礼さんの長年の友人である、染織家の志村ふくみさん（九三）＝京都市＝が手掛ける」。そして、続く七月一日の同紙五面は、「友人で人間国宝の染織家志村ふくみさんが二九日、京都市右京区のとつぎ都機工房で監修した衣装を報道陣に披露した」ことを伝えました。

それから三箇月後の一〇月六日、新作能「沖宮」が熊本市の水前寺成趣園能楽殿で上演されました。燃え盛る薪の明かりに照らし出された野外から、観客の目は舞台へと注がれます。第一部は朗読で、常味裕司さんのウッド演奏を背景に、アナウンサーの山根基世さんが「沖宮」を朗読しました。そして、金剛龍謹さんが天草四郎の霊を演じるシテとして、また、豊嶋芳野さんがあやを演じる子方として登場する第二部の新作能「沖宮」へと続き、物語が進んでゆきます。するとどうでしょう、くしくも途中で、小さな雨粒が一瞬降ってくるではありませんか。偶然ではありますが、まさしくこの物語のハイライトである「雨乞い」を強調するにふさわしい、天の配剤によるところの、見事なまでの演出でした。

「沖宮」を観劇した、道子の主治医だった山本淑子は、次のような感想を書きました。

衣が美しすぎると人の心は惑わされる。死や暗闇が見えなくなる。ケチをつけるつもりはもうとうないが、今回の能は美しすぎる衣装が主役になってしまっただけで石牟礼さんの影が薄くなっていた気がする⁵⁴。

果たして、あやに着せたいと道子が思い描いた「緋の色」とは、どのような色だったのでしょうか。それを知るためには、『潮の日録』の「あとがき」のなかで、若い道子が、この時期「魂が吐血した状態だったにちがいない」⁵⁵と告白していることを想起する必要があるかと思われます。私は、この「魂が吐血した状態」こそが、道子の生涯を支配した主旋律の色調だったのでないかと思量します。加えて私は、衣装に使われた華美な色彩だけでなく、最後の場面で、道行きのあやと四郎のふたりを迎えに出てきたのが竜神だったことにも、驚きを禁じえません。原作は、〈沖宮〉へ向かうふたりの道行きの場面で幕が降りることになっているのですが、そこに、原作には描かれていない、何と竜神が登場してきたのです。

当夜私が観覧した「沖宮」の物語は、一九六六（昭四一）年六月二九日の一五時一分、六九歳の憲三と三九歳の道子が国鉄水俣駅のホームに立ち、入線してきた西鹿児島発東京行きの急行「霧島」の一等車に乗り込み、逸枝の靈魂が宿る「森の家」へ向けての、一昼夜にわたる、生まれ変わりのための厳粛なる道行きと重なります。

道子は、逸枝が亡くなったときに『熊日』に寄稿した追悼文において、すでにこのようなことを書いていました。

高群逸枝氏が、その女性史の中で、まれな密度とリリズムをこめて、ほかに使いようもないことばで「日本の村」と書き、「火の国」と書き、「百姓女」と書き、「女が動くときは山が動く」と書いたとき、彼女みずからが、古代母系社会からよみがえりつづけている妣（ひ）であるにちがいない⁵⁶。

このときの、「魂が吐血した状態」にあった道子が、憲三に導かれて「森の家」へ向かう道行きは、「古代母系社会からよみがえりつづけている妣」である逸枝を求めての旅立ちでした。私は、この道行きが、道子にとっての新作能「沖宮」の原像であると確信しています。もしこの理解が正しければ、〈沖宮〉が「森の家」であり、天草四郎が憲三であり、そして、もしふたりを迎えるのであれば、家父長制の化身でもあるような竜神などでは決してなく、「大妣君」たる逸枝その人ということになります。

種々の解釈はともあれ、いずれにいたしましても、道子の死去から八箇月を経た、二〇一八（平成三〇）年一〇月六日の夜、水前寺成趣園能楽殿におきまして、あやと四郎の道行きは、多くの観客が見守るなか、無事に成し遂げられたのでした。そのとき降ってきた雨粒は、ひょっとすると、満願成就を果たした道子の喜びの涙だったかもしれません。

注

(1) 堀場清子『高群逸枝の生涯 年譜と著作』ドメス出版、2009年、249頁。

引用で示しましたように、『高群逸枝の生涯 年譜と著作』の著者の堀場は、「あとがき」

において、「なんと大きな喪失であったことか」という言葉で、ここから橋本静子の死を悼みました。他方、『伴侶 高群逸枝を愛した男』の著者の栗原葉子は、その「あとがき」のなかで、「橋本静子さんには、私にはどうしても確認できない点を教示いただき、感謝にたえません」（二五二頁）と、一言書いているのみで、いつ水俣を訪れたのか、あるいは、単に手紙などによる問い合わせだったのか、そして、何を確認したのかも、全く不明です。同じ「あとがき」にあって書かれてある、堀場清子と栗原葉子の、静子に対する思いの差は、歴然としています。ひょっとすると静子は、栗原葉子の問い合わせに冷たかったかもしれません。というのも、静子の胸のなかには、兄の橋本憲三が「ゴミ類」とみなしていた、逸枝の「平安鎌倉室町家族の研究」と「日本古代婚姻例集」が、栗原弘と葉子の夫婦の校訂によって上梓されたことに、著作権継承者としての不信感が残余していた可能性が残るからです。

また、『伴侶 高群逸枝を愛した男』のなかで、著者の栗原葉子は、橋本憲三に宛てた堀場清子の「おたずね通信」に触れたあとで、こうしたことも書いています。「しかし、そのような堀場や、その夫君である近代思想家・鹿野政直による研究であっても、憲三にはこれ以上の他人の介入を許すまいとする不可侵の壁があり、氏に対する遠慮や敬意が研究者にあればあるほど、不分明さを突き崩すことを断念させている」（一九頁）。こう断言するに当たって、著者は、いっさいの根拠も証拠も示していません。果たして本当に、憲三は、鹿野政直の調査に対して、「不可侵の壁」をつくっては、「不分明さを突き崩すことを断念させて」しまったのでしょうか。一方、堀場清子は『高群逸枝の生涯 年譜と著作』の「あとがき」のなかで、「二〇〇五年一月、鹿野政直と私が水俣へ静子氏を訪ねた」と述べています。このときのこの夫婦の水俣訪問は、静子が亡くなる三年前のことでした。ここから、憲三死去ののちも、この夫婦は、妹の静子と親密な交流を重ねていたことがわかります。その視点に立って判断しますと、鹿野政直に対して、「憲三にはこれ以上の他人の介入を許すまいとする不可侵の壁があり、氏に対する遠慮や敬意が研究者にあればあるほど、不分明さを突き崩すことを断念させている」という、栗原葉子の言説は、あまりにも独断的にすぎ、懐疑的にならざるを得ません。

さらに付け加えるならば、栗原葉子は、その本の「あとがき」の最後に、「小著を橋本憲三と高群逸枝の墓前に一冊……捧げます」（二五三頁）と、書きます。実際にふたりが眠る水俣の墓廟へ足を運んだのかどうか、それは知る由もありませんが、いずれにせよ、そうした内容をもつ『伴侶 高群逸枝を愛した男』を捧げられた橋本憲三と高群逸枝は、地底の泉にあって、怒り狂ったのではないかと、私は想像します。

（２）同『高群逸枝の生涯 年譜と著作』、同頁。

（３）山本淑子「『沖宮』を観劇して 死者を柱となさいませ」『道標』第 63 号、発行所・人間学研究会、2018 年、22 頁。

（４）石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012 年、244 頁。

（５）同『最後の人 詩人高群逸枝』、244-245 頁。

（６）同『最後の人 詩人高群逸枝』、247 頁。

（７）同『最後の人 詩人高群逸枝』、265 頁。

（８）同『最後の人 詩人高群逸枝』、266 頁。

（９）同『最後の人 詩人高群逸枝』、453-454 頁。

(10) 西川祐子「一つの系譜——平塚らいてう、高群逸枝、石牟礼道子」、脇田晴子編『母性を問う(下)——歴性的変遷』人文書店、1985年、188頁。

(11) 河野信子「『火の国』から『近代』を問い直す——高群逸枝と石牟礼道子」、加納実紀代編『リブという〈革命〉——近代の闇をひらく 文学史を読みかえる⑦』インパクト出版会、2003年、246頁。

(12) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、464頁。

(13) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、452頁。

(14) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。

(15) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、同頁。

(16) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、464頁。

(17) 志村ふくみ・石牟礼道子『遺言——対談と往復書簡』筑摩書房。2014年、12頁。

(18) 同『遺言——対談と往復書簡』、14頁。

(19) 同『遺言——対談と往復書簡』、15頁。

(20) 同『遺言——対談と往復書簡』、17-18頁。

(21) 同『遺言——対談と往復書簡』、23頁。

(22) 同『遺言——対談と往復書簡』、26-27頁。

(23) 同『遺言——対談と往復書簡』、31頁。

(24) 同『遺言——対談と往復書簡』、32頁。

(25) 同『遺言——対談と往復書簡』、33-34頁。

(26) 前掲「『沖宮』を観劇して 死者を柱となさいます」『道標』第63号、22頁。

(27) 『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻／新作能・狂言・歌謡ほか、藤原書店、2013年、155-156頁。

(28) 石牟礼道子『陽のかなしみ』朝日新聞社、1986年、377-378頁。

(29) 石牟礼道子編『水俣病闘争 わが死民』現代評論社、1972年、9頁。

(30) 前掲『陽のかなしみ』、430頁。

(31) 石牟礼道子「悶え神とイザイホウの神」『西日本新聞』1979年2月20日、11面。

(32) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻／新作能・狂言・歌謡ほか、158頁。

(33) 前掲『最後の人 詩人高群逸枝』、248-249頁。

(34) 私は本文のなかで、あやと四郎の道行きを、道子と憲三のそれと同定して、語りを進めました。しかし、四郎を渡辺京二とみなす意見もありますので、ここでそれを紹介し、検討したいと思います。

私がそもそも石牟礼道子の「沖宮」に興味をもったのは、その能装束の製作に携わったのが、染織家の志村ふくみであったという点にありました。これまで私は陶工の富本憲吉を主な研究の対象にしていました。その一連の研究から、私は、志村ふくみがある文のなかで、自分は富本憲吉の弟子であると語っていたことを知っていました。また、憲吉の妻の一枝(旧姓尾竹)の妹が福美といい、志村ふくみの母の小野豊と尾竹福美は、大阪の夕陽丘女学校で同級でした。一枝を含むこの三人は仲のよい友だち同士で、志村ふくみの「ふくみ」の名が一枝の妹の尾竹福美の「福美」から取られていることも、よく知られていました。その後一枝は、青鞨の社員に加わる一方、日本画家としても活躍しました。そこで、この能衣装

に憲吉なり一枝なりの面影を見出すことができるかできないか、それを確かめてみたかったのです。

そうしたなか、「新作能『沖宮』を語る～石牟礼道子と志村ふくみの世界～」というシンポジウムがあることを知り、さっそく申し込み、聴衆のひとりに加わりました。そのシンポジウムは、道子の死去から五箇月が立った、二〇一八（平成三〇）年七月一四日、熊本日新聞社本館二階ホールで開催されました。それまで私は、石牟礼の文はひとつも読んでおらず、何とかその日まで、『石牟礼道子全集・不知火』第一六巻に収められている「沖宮」と、志村ふくみと石牟礼道子の共著である『遺言——対談と往復書簡』に目を通すのが精一杯のあり様でした。広告のチラシによると、出演者は、司会として伊藤比呂美（詩人）、パネラーとして渡辺京二（思想史家）、跡上史郎（熊本大学准教授）、坂口恭平（作家）の計四氏でしたが、長いあいだ熊本を離れていたこともあって、どの方もはじめてお聞きするお名前でした。坂口恭平氏は、当日欠席でした。

開演すると、いきなり跡上氏から、「四郎は渡辺さんのことではないですか」という質問が飛び出しました。それを受けて渡辺氏は、「それを俺にいわせるのかい」と応じました。肯定でも否定でもありませんでしたが、それを聞いた、私を含む多くの人は、「おそらくそうなんだろう」という印象をもったにちがいません。この日のシンポジウムは、「沖宮」の構造なり意味なりをそれぞれがそれぞれの専門的な立場から語り、それを踏まえて相互に論議するという、シンポジウムに求められる本来の形式から程遠いものでした。たとえば、渡辺氏が「俺は、能はウーウーうなるだけでようわからん」と言い出すと、隣りに座っていた伊藤氏が、「それをいってはおしまいですよ」といって、いさめる一幕もあったくらいです。結局、石牟礼道子の人柄や作品にまつわる思い出話に終始し、本題である「沖宮」についても、染織家としての志村ふくみの芸術的世界についても、論議を欠く結果となりました。ただ、シンポジウムの最後に、前列に待機していた志村ふくみの娘の志村洋子氏が紹介され、持参していた能装束に使用する染め糸が紹介されたときには、私もつい身を乗り出して見入りました。同じくシンポジウムの最後に、『評伝 石牟礼道子 渚に立つひと』（新潮社、2017年）の著者として、米本浩二氏が紹介されました。のちに私は、この本を図書館で借りて読んでみました。それから、その続編である『魂の邂逅 石牟礼道子と渡辺京二』（新潮社、2020年）も。そこには、このような一節がありました。

生類との道行きがからだに染め込んでいる石牟礼道子が、『曾根崎心中』的な道行きをするとしたら、その相手は、魂の邂逅を果たした渡辺京二以外にありえない。……

道子と京二の関係は、いろいろな言葉で言い表されてきた。一番ポピュラーな言い方が「作家と編集者」であろう。「思想・文学的同志」もなかなか座りがいい。しかし、「心中の道行き」以上にふたりの関係を適切に言い表す言葉があるだろうか（『魂の邂逅 石牟礼道子と渡辺京二』、199頁）。

この本を読んだ、おそらくそのほとんどの人が、「沖宮」は石牟礼道子と渡辺京二の「心中の道行き」であると受け止めたにちがいません。ところが私は、本稿を書き進めるなかであって、その論証の結果として、「沖宮」におけるあやと四郎の道行きを、道子と憲三のそれであるとみなして叙述しました。たぶんそうした解釈に立つのは、現時点では私ひと

りではないかと思われます。そこで、この問題について、以下に私見を書き記します。すでに本文において、道子と憲三の関係につきましては詳述していますので、ここでは、石牟礼道子と渡辺京二の関係について触れてみたいと思います。

まず、道子本人は、渡辺京二をどう思っていたのでしょうか。

本文で述べていますように、石牟礼道子の『最後の人 詩人高群逸枝』（藤原書店、2012年）が上梓されるに当たり、道子へのインタビューがなされました。そのインタビューは、二〇一二（平成二四）年八月三日に道子の自宅において行なわれ、聞き手役を、藤原書店の藤原良雄が務めました。このとき道子は、八五歳でした。そしてその内容は、「〈インタビュー〉高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」と題して、『最後の人 詩人高群逸枝』に所収されます。以下は、そのなかで道子が語っている、高群逸枝と橋本憲三です。

——[「『最後の人』覚え書——橋本憲三先生の死」の執筆から]この三十年のあいだ、そして現在、高群さんをどういうふうに感じておられますか。

石牟礼 いよいよますます尊敬しています。あの時代に、よくまあ、こういう鋭い、純粋さで押し切っていくようなことができたものだ。そして、彼女の感じているこの世への感受性の熱いこと。純度も高いけれども、世間にたいする、人間にたいする思いの深さは、私のお手本で、大切にしたいと思っています。そして男女のあり方が、羨ましいですね。羨ましいけれども、羨望というのと違う。男と女は斯くあらねばならないと思っています。最敬礼です、お二人にたいしては。日本の古代にあったような、純粋な。

今はみんな、世間の垢にまみれずには生きていけない、どこかでまみれてしまいます。だけど、汚れない存在と生き方。存在の原郷をつくっている二人だと思う。これは何かの形で書いておかねばと、いつも意識していました。何を書くにも原郷というのがあります。こういうところにいたい、と夢見ています。言葉にすると、ちょっと気恥ずかしい。

——憲三さんから逸枝さんのことをお聞きになって、憲三さんの姿もそばで見ておられて、そう思われたわけですね。

石牟礼 はい。憲三さんのような人、見たことないです。純粋で、清潔で、情熱的で、一瞬一瞬が鮮明でした。おっしゃることも、しぐさも。何かをうやむやにしてごまかすというところが感じられない。言いたいことははっきりおっしゃる。

——「最後の人」というのはどういう思いで。

石牟礼 こういう男の人は出てこないだろうと。

——憲三さんのことを。

石牟礼 はい。高群逸枝さんの夫が、「最後の人」でした。

インタビューの最後に、こうしてはっきりと、八五歳になる道子は、自分にとっての「最後の人」が橋本憲三であることを、世に告知するのです。それに先立って道子は、藤原良雄の質問に対して、渡辺京二については、こう反応しています。

——石牟礼さんからすると渡辺京二の存在はすごく大きいですね。

石牟礼 とてもすごく大きいです。

実に短くそっけない返事です。そこでいま一度、質問がなされます。

——高群逸枝にたいする橋本憲三のように、石牟礼道子にたいする渡辺京二というすぐれた編集者がいて、今日の石牟礼道子があるという感じがしますね。二人三脚でね。渡辺さんが石牟礼さんを支えようという、これは橋本憲三と相通じるものがあるんじゃないかと思います。

石牟礼 そうですね。私はあんまり年月が頭の中にないものですから、何を尋ねられても、はてなと思って。そうすると渡辺さんはピタッと憶えておられる。どういう頭だろうかと思います。私はそういう方面は、まるで憶えていない。

おそらくこの発話も、藤原良雄が事前に期待していた思いを満たすものではなかったのではないかと推量されます。しかしこれが、紛れもない石牟礼が示した返答でした。明らかにこのやり取りから、道子の目からすれば渡辺京二は、「ありがたいよき編集者」以上でも以下でもないことがわかります。

それでは、渡辺京二は、石牟礼道子をどう見ていたのでしょうか。石牟礼亡きあと、渡辺は、道子に関する幾つかのエッセイを書いていますので、そこから抜き書きしてみます。まず、『現代思想』（5月臨時創刊号、第46巻第7号、2018年4月）に寄稿した「誤解を解く」の最後の一節からの引用です。

以上をかんがみるに、私は一編集者ないしヘルパーとして彼女と関わったにすぎぬのであって、彼女の遺した表現のすべては完全に彼女自身のものであり、私の助力など必要としなかったのである。私はただこの偉大な才能が発揮されるのに必要な環境作りにいささか役立ったかとは思うが、それは私生涯のしあわせであって、得るものは私の方がはるかに大きかった。渡辺がいなければ今日の彼女はなかった、などと言う人がいるとすれば、その人は真相を知らずに完全に間違っているのだ。彼女は私など存在しなくても、必ずやあれだけの仕事を残したに違いない。それだけのすさまじい創造力の持ち主だったのだ。このことは暮々誤解されてはならぬ。だからこの一文を草した。

次に、『藍生』（第333号、第29巻第6号、2018年6月）に寄稿した「カワイソウニ」の一節から引用します。

じゃ何でおまえは五十年間も原稿清書やら雑務処理やら、掃除片づけから食事の面倒までみたのかとお尋ねですか。好きでやっただけで、オレの勝手だよ。と答えればよいのですが、もちろん私は故人の仕事が単に大変な才能ということにとどまらず、近代的な書くという行為を超える根源性を持つと信じたからこそ、いろいろお手伝いしました。

その手伝いなんて誰でもやる気があればやれること。特筆に値しません。

私はその間ちゃんと家族も養い、自分の本も書きました。故人に捧げし一生という訳ではなかったのです。

しかし、そういう大変な使命感を担った詩人だからこそ、お手伝いに意義を感じたの

だと言え、もうひとつ本当ではありません。

私は故人のうちに、この世に生まれてイヤだ、さびしいとグズリ泣きしている女の子、あまりに強烈な自我に恵まれたゆえに、常にまわりと葛藤せざるをえない女の子を認め、カワイソウニとずっと感じておりました。カワイソウニと思えばこそ、庇ってあげたかったのです。

この言説からすると、道子に対して「カワイソウニ」という感情が渡辺にあったことは事実のようです。しかしながら、それが特別な愛のかたちへと発展し、それを道子と生涯共有していたかという、それを立証するにふさわしい資料（エヴィデンス）は残されていません。もし何か存在していたとすれば、それはあくまでも、単に渡辺から石牟礼への、一方的で内に秘められた憐憫の情感だったのではないかと思います。したがって、「沖宮」において道子は、道行きの相手として渡辺を選んだのではないかと、踏み込んで推断するには、あまりにも証拠が不足していて、どうしてもその実証に困難性が伴うのです。他方、そもそも論になりますが、「沖宮」にあっては、あや以外はすべて霊界の人であり、渡辺はそれに該当しません。さらにまた、もし道行きの相手が渡辺であったとするならば、〈沖宮〉でふたりを迎える「大妣君」は誰なのか、具体的に想定できる人物が見当たらず、ここでも、自ずと物語としての「沖宮」の構造は崩れ落ちてしまうのです。そうしたことに思いを巡らしますと、本文での論証のとおり、あやが原作者の石牟礼道子、天草四郎が橋本憲三、そして大妣君が高群逸枝であると想定することの方が、より合理的で妥当性があるのではないかと思います。本文で私がそのような観点に立って記述しているのは、以上に述べてきた、一連の論拠によるものであることを、少し長くなりましたが、ここに陳述させていただきました。

いわずもがなの蛇足になるかもしれませんが、最後に一言——。

先に『現代思想』（5月臨時創刊号、第46巻第7号、2018年4月）に渡辺京二が寄稿した「誤解を解く」の最後の一節を引用しましたが、以下に、その文の最初の一節を引用します。

『現代思想』誌が石牟礼道子特集をなさるといふ。ありがたいことである。私も一文を求められたが、いまは彼女について書くような気もちにはとてもなれない。ところが、一応辞退したあとで、愕然とするようなことに出会った。ある方が『苦海浄土』は渡辺との共作だと信じると、悔み状に書いて来られたのである。

共作とまではいかなくとも、『苦海浄土』の成立には渡辺の深い関与があったかのような風説は以前からあり、その度に私は打ち消して来た。私もあと長くは生きていないのだから、この際、このような推測を完全に一掃しておかなければ、とんでもない悔いを残すことになる。

周知のとおり、道子の出発作が『苦海浄土』です。上の言辞を、最終作の「沖宮」に置き換えてみますと、およそ次のようになります。「『沖宮』の道行きの相手は渡辺ではないかとの風説があるが、この際、このような推測を完全に一掃しておかなければ、とんでもない悔いを残すことになる」。思うにこれが、「一編集者ないしヘルパー」としての渡辺の矜持

であり美学ではなかったでしょうか。他方主人は、補助者の恭順に感謝はすれども、死へと向かう愛慕の道行きに決して従者を選ぶことなどありえないでしょう。かくあればこそ、道子を献身的に支えた渡辺の無償の行為は歴史に足跡を残すものと、私は信じるのです。渡辺京二が九二歳で世を去ったのは、道子の死からそろそろ五年が近づこうとする二〇二二（令和四）年の一二月のことでした。家族も仕事もあり、必ずしも道子に「捧げし一生という訳ではなかった」にしても、「カワイソウニと思えばこそ」庇護の志が芽生え、躊躇することなくそれを、誠実に全うした人生だったのではないかと推察いたします。

それでは、さらについでに、もう一言——。

この注の冒頭におきまして、私は、「新作能『沖宮』を語る～石牟礼道子と志村ふくみの世界～」というシンポジウムについて触れました。このシンポジウムでの発言内容をテープ起こしたものと思われる、渡辺京二の一文があります。「沖宮の謎」と題して『預言の悲しみ——石牟礼道子の宇宙Ⅱ』（弦書房、2018年）に所収されています。以下に引用するのは、その文の最後の箇所です。

もう少し正確にいうと、原城で死んだ人びと、その象徴としての四郎は、「沖宮」へ赴くあやの同行者、つまりあやを救済する案内者なんだね。お兄さんたちはもう美しい世界へ行ってるんだよ、そこへ連れて行ってあげようね、もともとあやはその世界の人だったんだものねというわけなの。「沖宮」は大妣君や竜神のいるところだけれど、そこにはもうちゃんと原城の死者二万数千人が先に行って待っているの。だから、あやを舟が送り出して、ありがたやありがたやとおがんでいる浜辺の村人は、原城の死者、つまり自分の仲間を吊っていることになるの。『沖宮』はそういう含意をもつ作品なんです。石牟礼さんは全文業をもって、この国の古きよき民と心中なさろうとした作家です。自分は今はもう亡きこの古い民たちと、妣神の待つ美しい世界へ道行きなさるつもりだった。だから『沖宮』という作品は、彼女の深いところにあるコンプレックスとか衝動とか、オブセッションとか、深いところにある思いが出ている作品なんです。自分なりにかなり強引にこじつけたところもありますが、そんなふうになんと読み解いてみたんですが、ほかにいろいろ読み解き方はあると思います。そういう意味で面白い、読みがいのある、解釈のしがいがある作品だと思います。

道子の文のすべてを読んでいたであろうと思われる渡辺は、あやとの道行きを果たす四郎のモデルが誰であるのか、おそらくは感知していたにちがいないというのが、私の推量するところですが、上の解釈からは、それは伝わってきません。この評論文の題名にありますように、たといみちかで見守っていた「一編集者ないしヘルパー」であろうとも、渡辺にとって「沖宮の謎」は、解き明かすことのできない、永遠のものであったのかもしれませんが。しかし私は、道子にとっての最後の作品の裏に隠された「沖宮の謎」が解明できない限り、石牟礼道子というひとりの人間の生涯は正しく理解できないのではないかと確信しているのです。

（35）石牟礼道子『潮の日録 石牟礼道子初期散文』葦書房、1974年、71頁。

（36）『石牟礼道子全集・不知火』第四巻／椿の海の記ほか、藤原書店、2004年、523頁。

（37）同『石牟礼道子全集・不知火』第四巻／椿の海の記ほか、524頁。

- (38) 前掲『石牟礼道子全集・不知火』第一六卷／新作能・狂言・歌謡ほか、158-159 頁。
- (39) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014 年、299-300 頁。
- (40) 同『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、410 頁。
- (41) 渡辺京二「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、編集責任・田尻久子、発行・アルテリ編集室、2018 年、16-17 頁。
- (42) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、17-18 頁。
- (43) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、19 頁。
- (44) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、同頁。
- (45) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、20 頁。
- (46) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、22 頁。
- (47) 同「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、24 頁。
- (48) 石牟礼道生「母のことそして父のこと」『魂うつれ』第 73 号、2018 年 5 月、36 頁。
- (49) 前掲「石牟礼道子闘病記」『アルテリ』六月号、33 頁。
- (50) 前掲「母のことそして父のこと」『魂うつれ』第 73 号、36 頁。
- (51) 石牟礼道生「多くの皆様に助太刀されて母は生きて参りました」『道標』第 61 号、発行所・人間学研究会、2018 年 6 月、7 頁。
- (52) 同「多くの皆様に助太刀されて母は生きて参りました」『道標』第 61 号、8 頁。
- (53) 前掲「母のことそして父のこと」『魂うつれ』第 73 号、36 頁。
- (54) 前掲「『沖宮』を観劇して 死者を柱となさいませ」『道標』第 63 号、22 頁。
- (55) 前掲『潮の日録 石牟礼道子初期散文』、255 頁。
- (56) 石牟礼道子「高群逸枝さんを追慕する」『熊本日日新聞』1964 年 7 月 3 日、6 面。

結 言

本稿「火の国の女たち——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞞の女たちとの友愛」の本文をいま書き上げて、ここでそのまとめの文を書きたいと思います。高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子のこの三人の火の国の女に何か共通点はあったでしょうか。あったようでもあり、それを明確に断定するには、こころもとない気がします。そこで、それについて高群が鮮明に発言していますので、それを以下に引用します。

火の国女性は野性的で強い。それが表面化してくると、どんな力にたいしてもびくともしない。世俗的なきはんなど物の数でもありえない。一顧にも値しない。十歳を越えたころから、私にもそうした稟性が、内部にはげしく燃え出したらしく、いろいろな妙な思い出をつくり出しているのでもそれはわかるのである¹。

逸枝がいうように、「野性的で強い」——これが火の国の女の特徴かもしれません。中村汀女にも石牟礼道子にも、当てはまるような気がします。汀女は、俳句は「第二藝術」とさげすまれ、女のつくる句は「台所俳句」とやゆされるも、決して動じることはありませんでした。まさしく二重の差別と闘ったのです。道子は、自分の苦しみを自分の体内から吐き出すかのようにして文をつくり、他方、水俣病で、西南役で、島原・天草の乱で、倒れた人びとが叫ぶ苦しみの内なる声を拾い集めました。

そうした女たちは、この「肥後の国」に、それぞれにどのような思いを重ねていたのでしょうか。逸枝の思いのなかには、「五木の子守歌」も含まれていました。

この歌は五木のみでなく、肥後一円で歌われた。私は熊本南部の水田地帯に育ったが、一〇人、二〇人とうち群れて、肥後の大平野をあかあかと染めている夕焼けのなかで、この歌を声高く合唱する子守たちのなかに私もよくまじっていた²。

熊本市内で生まれ育った汀女は、やはり阿蘇と熊本城、そして城内の一角に位置する自身の学び舎にも目がゆくようです。

西南役に焼けたままのお城が、先頃復元された。構成の美しい、雄大な石垣の上に、そびゆるお天守は見飽きない。城頭に立てば、東方真向きに阿蘇山が煙噴く。心をそそるものがある。……

その城内のよき場所に、私の昔の女学校、今の第一高校がある³。

そして道子の、自身の生国に抱く思いは——。おそらくそれは、不知火海の自然を犯す水俣病と切っても切り離すことのできないものでした。次の文言が、自伝「葭の渚」の最後の言葉です。ここに、道子の魂の基底をなす深き思いがあるように思量されます。

近代合理主義という言葉があるが、そういう言葉で人間を大量にゆるゆると殺され

てはたまらない。そういうことがゆるされていけば、次の世代へ行くほどに、人柱は「合理化」という言葉で美化されていくだろう⁴。

以上が、三人三様の、生まれし故郷「肥後の国」に寄せる思いです。そしていまや、みな黄泉の客となりました。

さて、稚拙な筆ではありましたが、何とかここに、三人の女の生きた足取りを書き残すことができました。これをもって、西に不知火海、東に大阿蘇に囲まれた火の国の中心部を占める熊本市の寺原町にて生を受け、近所の田端で「五木の子守歌」を聞いて育ち、熊本城を目の前に抱く信愛幼稚園に通い、多感な高校生のときに水俣病の惨劇を知り、出国後再び晩年に阿蘇の山野に隠棲し、文筆にいそしむひとりの男の務めとしての作業を完了します。

最後に、本稿「火の国の女たち——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞞の女たちとの友愛」の執筆の途中で、この主題に関連するふたつの論文に出会いましたので、以下に紹介しておきます。

西川祐子「一つの系譜——平塚らいてう、高群逸枝、石牟礼道子」、脇田晴子編『母性を問う（下）——歴性的変遷』人文書店、1985年。

河野信子「『火の国』から『近代』を問い直す——高群逸枝と石牟礼道子」、加納実紀代編『リブという〈革命〉——近代の闇をひらく 文学史を読みかえる⑦』インパクト出版会、2003年。

西川祐子は「一つの系譜——平塚らいてう、高群逸枝、石牟礼道子」を主題に、河野信子は「『火の国』から『近代』を問い直す——高群逸枝と石牟礼道子」を主題に「火の国の女たちの系譜」を書きましたが、私が本稿を書くなかで出会ったのが、橋本藤野と橋本静子のふたりの女でした。もしこのふたりがいなかったならば、いま私たちが知る高群逸枝の学問も石牟礼道子の文学も存在しない可能性さえあります。私は、彼女たちこそが、真に「野性的で強い」火の国の近代の女であったと確信します。そして、藤野と静子の両人が果たした歴史的役割に対しまして衷心より讃辞を献上したいと思います。

私は、本稿を書くに際しまして、熊本県立図書館、熊本市立図書館、鹿児島県立図書館、日本近代文学館、および国立国会図書館が所蔵する資料を利用させていただきました。おかげをもちまして、何とか脱稿するに至りました。末筆ながら、深甚なるお礼の言葉を、ここに申し添えます。

それではこれで、すべてを閉じさせていただきます。長々しい駄文となってしまいました。それでも根気強く最後までお付き合いいただきましたことに、こころからの謝意を捧げます。ありがとうございました。

注

- (1) 『高群逸枝全集』第一〇巻／火の国の女の日記、理論社、1976年（第8刷）、61頁。
- (2) 高群逸枝『女性の歴史』（中巻）、大日本雄弁会講談社、1955年、319-320頁。

著作集 14 『外輪山春雷秋月』

火の国の女たち

——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞞の女たちとの友愛

結 言

(3) 中村汀女『汀女自画像』日本図書センター、1974 年、188 頁。

(4) 『石牟礼道子全集・不知火』別巻／自伝、藤原書店、2014 年、303 頁。

索引

ア行

〈あ〉

愛国婦人会 139

青田五良 130

秋田雨雀 59

秋山清 222-224, 297

「小組のへそ」 222

『自由女論争 高群逸枝のアナキズム』 222, 224

朝倉響子 203, 210

『朝日ジャーナル』 279, 280

『朝日新聞』 216, 259, 264-266, 279

アジア・太平洋戦争 55, 92, 99, 114, 116, 137

麻生正蔵 89, 91

安宅福美（旧姓は「尾竹」、安宅安五郎の妻、富本一枝の妹） 110, 129

安宅安五郎（安宅福美の夫） 110

安宅良子（安宅安五郎と安宅福美の娘） 110

熱田優子 34, 36, 108

「小林多喜二氏へ」 36

アナーキズム（アナーキスト、アナーキズム派）anarchism 14, 35, 37, 39, 41, 42 45, 51,
53, 63-65, 67-69, 73, 75, 84, 106, 175, 222, 223, 226

アナ・ボル論争 35-37, 40-42, 63, 109

甘粕事件（→甘粕正彦）

甘粕正彦 27, 63, 106

天草四郎 135, 192, 310-317, 321, 322

荒木精之 154, 156, 158, 166, 169

『肥後民話集』 156

荒畑寒村 45, 53

有島武郎 7, 84, 106

『アルテリ』 309

〈い〉

家永三郎 140-143, 146-148, 165, 166

家永教科書裁判 142

「古代人の結婚生活と性道德」 147

「主として文献に拠る上代倭絵の文化史的研究」 142

「わざわざするモルガンの色眼鏡」 140

生田長江 5, 6, 67, 71

『資本論第一分冊』 6

『日月の上に』の著者に就て 5

生田花世 32, 34, 45, 59, 85, 113

イザイホー 264, 265, 276, 277

石垣綾子 45, 55

石川純子 279

『両の乳房を目にして』 279

石牟礼弘（石牟礼道子の夫） 179, 180, 188, 194, 198, 199, 320

石牟礼道生（石牟礼弘と石牟礼道子の息子） 180, 194, 195, 198, 199, 211, 320, 321

「多くの皆様に助太刀されて母は生きて参りました」 320

「母への手紙」 211

石牟礼道子（旧姓は「吉田」、石牟礼弘の妻） 3, 71, 73, 74, 84, 135, 146, 154, 167, 168, 170, 176-204, 210-221, 223-225, 228, 229, 253-268, 273, 274, 276-287, 290-294, 296-299, 305-322, 330, 331

「石の花」（1962年） 184

「高群逸枝さんを追慕する」（1964年） 166, 185

「海と空のあいだに」（『熊本風土記』に連載、1965-1966年） 186, 188, 197, 200, 277

「最後の人」（『高群逸枝雑誌』に連載、1968-1976年） 71, 189, 191, 198, 210, 211, 213, 215, 216, 220, 221, 228, 229, 258, 260, 306-309, 318

「高群全集に思う」（1968年） 211

『苦海浄土 わが水俣病』（1969年） 170, 186, 195, 197, 213, 216, 219, 260, 277, 308

『水俣病闘争 わが死民』（編著、1972年） 219, 314

『流民の都』（1973年） 219

『天の魚』（1974年） 219

『潮の目録 石牟礼道子初期散文』（1974年） 219, 224, 322

『椿の海の記』（1976年） 197, 220, 260, 261, 263, 277, 309, 315

『「最後の人」覚え書——橋本憲三氏の死——』（1977年） 263, 306

『「最後の人」覚え書（二）——橋本憲三氏の死——』（1977年） 264, 306

『西南役伝説』（1980年） 220, 308, 315

「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」（1980年） 190, 191, 265, 274, 276-278, 280, 306

「本能としての詩・そのエロス 高群逸枝の場合」（1982年） 283, 284

『陽のかなしみ』（1986年） 287, 314

「表現の呪術——文学の立場から——」（1997年） 292, 294, 296

「春の城」（『熊本日新聞』に連載、1998-1999年） 314

「葭の渚」（『熊本日新聞』に連載、2008-2013年） 261, 318, 330

『石牟礼道子全集・不知火』第17巻「詩人高群逸枝」（2012年） 308

『最後の人 詩人高群逸枝』（2012年） 189, 191, 192, 266, 280, 297, 305, 306, 308-310, 312, 313, 318

「沖宮」（2012年） 135, 192, 265, 299, 305, 309-314, 317-319, 321, 322

『石牟礼道子全集・不知火』第16巻「新作 能・狂言・歌謡ほか」(2013年) 313

『石牟礼道子全集・不知火』別巻「自伝」(2014年) 178, 318

『遺言——対談と往復書簡』(志村ふくみとの共著)(2014年) 310, 313

石牟礼睦子(石牟礼弘の妹) 321

板垣直子 32

市川房枝 28, 59, 85, 89, 99, 107, 112, 118, 142, 146, 161, 163-170, 231-236, 275, 276,
278, 279, 294-296

『だいこんの花』 170

市川ミサオ(市川房枝の養女) 161, 163, 166, 170, 235

『市川房枝おもいで話』 170

伊藤野枝 27, 84, 106, 107

井上美子 31, 123, 125

『私たちの成城物語』(中江泰子との共著) 31, 125

伊福部敬子 11, 34, 36, 37, 42, 63, 170, 226

「平塚明子氏へ」 36

今井邦子 34, 45, 84, 85

岩村透 51

〈う〉

ヴァランス、エイマ Vallance, Aymer 19, 50, 51

『ウィリアム・モリス——彼の芸術、彼の著作および彼の公的生活』*William Morris: His Art, his Writings and his Public Life* 19, 50

宇井純 192

上野千鶴子 292

上野英信(→谷川雁) 182

ウェブ、フィリップ Webb, Philip 48

宇佐美承 256, 257

内田魯庵 101, 102

「性慾研究の必要を論ず」 101, 102

梅原龍三郎 133

〈え〉

江上トミ 123, 124

江口渙 59

エリス、ハヴロック Ellis, Havelock 102-104

「女性間の同性戀愛——エリス——」 102, 103

円地文子(旧姓は「上田」) 32, 34, 85, 112, 113

『晩春騒夜』 32

エンゲルス、フリードリヒ Engels, Friedrich 34, 82, 148

『家族、私有財産、そして国家の起源』 82, 148

〈お〉

大石誠之介 55

大熊信行 57

『社会思想家としてのラスキンとモリス』 57

大杉栄 27, 45, 53, 54, 106

大田亮 90, 91

大谷藤子 108-121

「失われた風景」 119

大田洋子 32, 34, 45, 59

大津円 320

尾形明子 108

尾形乾山 135

岡田禎子 32, 85

岡田八千代 45, 113

岡本かな子 111

小川濤美子（中村汀女の娘） 126

小川晴子（中村汀女の孫） 126

荻野綾子 107, 118

奥むめお 7, 9, 28, 32, 85

奥村博（平塚らいてうの夫、のちに「博史」名を使用） 3, 24-29, 110, 157, 158, 159, 162,
173

『めぐりあい』 25

奥村暁生（奥村博史と平塚らいてうの長女） 28, 29, 31, 110, 111, 122, 216

奥村敦史（奥村博史と平塚らいてうの長男） 28, 29, 31, 122, 216

尾崎行雄 89, 91

小山内薫 32

小沢遼子 272

尾竹ウタ（尾竹熊太郎の妻） 18

尾竹一枝（→富本一枝）

尾竹きく（尾竹竹坡の妻） 18

尾竹熊太郎（雅号は「越堂」、尾竹ウタの夫） 18

尾竹國観 18

尾竹親（尾竹竹坡の子息） 285

『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』 285

尾竹竹坡（尾竹きくの夫） 18, 22, 285

尾竹福美（→安宅福美）

小樽高等商業学校（現在の小樽商科大学） 57

小野賢一郎 103

小野豊（志村ふくみの実母） 129, 131-135

小野元澄（志村ふくみの実父） 130, 131, 135

小原国芳 31

カ行

〈か〉

解放社 11, 64, 68, 75

『輝ク』（長谷川時雨の主宰紙、1933-1941 年） 108, 112

賀川豊彦 45, 55

鹿児島県立図書館 332

片山潜 55

活水女学校（現在の活水中学校・高等学校） 131

金子しげり（山高しげり） 84, 85, 89, 99, 107, 113, 118, 142

鐘紡紡績工場 4

鹿野政直（堀場清子の夫） 152, 228-231, 255, 256, 258, 259, 262-264, 273-275, 279, 280, 284, 297, 305

『高群逸枝』（堀場清子との共著） 230, 255, 262, 263, 275, 279, 280, 284

蒲池正紀 180

『南風』（蒲池正紀の主宰歌誌） 180

神近市子（鈴木厚の妻） 27, 28, 32, 34, 45, 57, 59, 85, 99, 111-113, 116, 120, 121, 126

軽部清子 119

軽部仙太郎（軽部なみの夫） 78

軽部なみ（軽部仙太郎の妻） 78, 162, 165

河崎なつ 59, 85

河田嗣郎 82

川本輝夫 216-218

河盛好蔵 122

関東大震災 27, 67, 106

管野スガ 51

〈き〉

喜田貞吉 90, 91

北里しう（終子） 46

北里柴三郎 46

『九州新聞』（『熊本日日新聞』の前身紙） 4, 165

『九州日日新聞』（『熊本日日新聞』の前身紙） 4, 165

『今日の花』（『風花』の後継誌、小川晴子の主宰句誌、2017 年-） 126

極東平和の友の會 59

『近代思想』 53

〈く〉

- 窪川稲子（窪川鶴次郎の妻）（→佐多稲子）
窪川鶴次郎（窪川稲子の夫） 112
熊本県師範学校女子部 4, 169, 253
熊本県尋常中学校（現在の熊本県立済々黉高等学校） 10
熊本県立高等女学校（現在の熊本県立第一高等学校） 121, 330
熊本県立図書館 262, 263, 332
熊本市立図書館 10, 262, 263, 332
熊本女学校 4, 45
『熊本日日新聞』（略称は『熊日』） 123, 157, 158, 160, 161, 165, 166, 170, 173, 175, 185,
210, 213, 214, 218, 257, 258, 290, 314, 318, 321, 322
熊日文学賞 213
『熊本評論』 10
『熊本風土記』（→渡辺京二）
『暗河』（石牟礼道子・松浦豊俊・渡辺京二による創刊誌） 219, 220, 263, 264, 273
蔵原惟人（中本たか子の夫） 3, 34, 45-47, 55-59, 63, 67
「生活組織としての藝術と無産階級」 46
「富本憲吉さんのこと」 55
「プロレタリア芸術運動の組織問題——工場・農村の基礎としてのその再組織の必要——」 57
「プロレタリア・レアリズムへの道」 46
「マルクス主義文藝批評の基準」 46, 58
蔵原惟郭 45 46
栗原弘（栗原葉子の夫） 288-297
『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』 289-291, 296
『日本古代婚姻例集』（高群逸枝編、栗原葉子・栗原弘校訂） 288, 289
『平安鎌倉室町家族の研究』（高群逸枝著、栗原弘校訂） 288, 289
栗原葉子（栗原弘の妻） 288, 289, 294, 296, 297
『日本古代婚姻例集』（高群逸枝編、栗原葉子・栗原弘校訂） 288, 289
『伴侶 高群逸枝を愛した男』 294, 296
クロポトキン Kropotkin 38, 39, 53, 65
桑谷定逸 101
「戦慄す可き女性間の顛倒性慾」 101
桑原武夫 124, 125
「第二藝術——現代俳句について——」 124, 125
桑原史成 192, 193
『群像』 147-149

〈け〉
啓明会 137, 138
ゲーテ Goethe 135

『現代詩手帳』 313

〈こ〉

小池みどり 34

幸徳秋水 10, 49, 51, 53

河野信子 215, 262, 275, 279, 288, 290, 308, 332

『火の国の女 高群逸枝』 262, 275, 279

高良真木 158, 163, 164, 166, 233-236, 278

国画会工芸部 110, 133

『國民新聞』 21-23

国立国会図書館 64, 332

古建築物保護協会 Society for the Protection of Ancient Buildings 49

国家総動員法 99

小林多喜二 46, 57, 59, 75, 110

「蟹工船」 46, 57, 110

小宮山量平 174-176

米騒動 55

金剛龍謹 321

近藤真柄（旧姓は「堺」、堺利彦の娘） 166

サ行

〈さ〉

堺利彦（雅号は「枯川生」） 49, 55, 66, 82

坂崎カオル（佐藤千里の母） 153, 253

坂本眞琴 59

『サークル村』（→谷川雁）

佐多稲子（窪川稲子） 45, 59, 85, 99, 109, 112

サップォー Sappho 118

佐藤薫人 320

佐藤千里 153, 156, 190, 253, 254, 256-258, 267, 269-271, 273, 274, 298, 299, 309

佐藤俊子（→田村俊子）

『番紅花』（尾竹一枝の主宰誌） 28, 32, 45, 126

澤田順次郎（→羽太鋭治） 105, 107

三・一五事件 33

『サンケイ新聞』 166

〈し〉

塩原事件（煤煙事件） 19, 23

志垣寛 85, 142, 165, 166, 169, 170, 234, 235, 273, 274

「高群さんと橋本君」 169, 170, 234

- 『思想の科学』 283, 284
渋谷定輔 193, 212, 222
『農民哀史』 222
『野良に叫ぶ』 193
島崎藤村 45
『詩と眞實』 184, 257
島田磬也 166, 169
嶋中雄作 48, 52, 85, 99, 100, 112
島中雄三 48, 85, 99, 100, 101
島村抱月 52
島原・天草の乱 135, 313-315
志村潤子（志村ふくみの次女） 132
志村哲（志村ふくみの養父） 130, 135
志村日出（志村ふくみの養母） 130, 135
志村ふくみ 129-135, 305, 310-313, 321
「志村ふくみ——いのちの色に導かれて——」展 321
《秋霞譜》 132
『伝書 しむらのいろ』 129
「富本先生にいただいたことば」 133
「母との出会い・織機との出会い」 129, 130
『遺言——対談と往復書簡』（石牟礼道子との共著）（2014年） 310, 313
志村洋子（志村ふくみの長女） 132, 134, 135
下中彌三郎 6, 7, 32, 85, 89, 99, 193
「読んで下さい——序にかへて」 6, 32, 89
社会主義（社会主義運動、社会主義者） 14, 36, 45, 47, 49-54, 66, 67, 129
社会主義同盟 Socialist League 49, 50
『コモンウィール』 *The Commonweal* 49
社会民主連盟 Social Democratic Federation 49, 51
『ジャスティス』 *Justice* 51
自由学園 55, 56
『週刊読書人』 174
『淑女畫報』 28
城しづか（城夏子） 11, 42, 63, 113, 226
城夏子（→城しづか）
昭和恐慌 10, 57
女子美術学校（現在の女子美術大学） 18
『女性日本人』 54
白樺派 53
信愛幼稚園 332
『新公論』 101, 102

著作集 14 『外輪山春雷秋月』
火の国の女たち
——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞞の女たちとの友愛
索引

『新小説』 5, 67

新匠美術工芸会（のちの新匠会） 133

新日本窒素肥料株式会社（その後「チッソ株式会社」に改称） 182, 195, 213-219, 208, 314

新婦人協会 14, 28, 31

〈す〉

水前寺成趣園能楽殿 135, 319, 321, 322

鈴木厚（神近市子の夫） 112

須世理媛（須勢理毘売） 7

ストリート、G・E Street, G. E. 48

住井すゑ子 11, 42, 63, 166, 170, 226, 282

鷺見等曜 286, 289

『前近代日本家族の構造——高群逸枝批判——』 286, 289

隅田龍子 37, 41, 42

「再びアナーキズムを駁す」 37, 42

「八木、高群両氏のアナーキズムに對する駁論」 41

〈せ〉

成城学園 31

清少納言 7

青鞞（青鞞社） 3, 6, 11, 12, 14-16, 18, 20, 22, 23, 26-29, 32, 45, 53, 55, 56, 59, 102, 104-106, 110, 111, 113, 135, 285, 310, 330, 331

『青鞞』（平塚らいてう、のちに伊藤野枝の主宰誌、1911-1916年） 6-8, 10, 18-22, 24-28, 32, 52, 53, 63, 65, 67, 90, 99, 102, 107, 112, 123, 126, 129, 146, 159

『世界』 124, 125

關鑑子 59

瀬戸内晴美（寂聴） 224-230, 232, 261, 270-273, 280-286, 294-297

『談談談』 271, 272

「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」 224, 225, 227-232, 261, 270-273, 280, 282, 283-286, 294, 295

「『日月ふたり』のひとり 橋本憲三」（瀬戸内晴美『人なつかしき』に所収） 229, 230, 284, 285, 296

『美は乱調にあり』 285

『戦旗』 46, 57, 58, 63

全国農民芸術連盟 14

全日本無産者芸術連盟（ナップ） 46, 58

〈そ〉

相馬御風 53

相馬黒光 91, 138

ゾラ、エミール Zola, Émile 49

タ行

〈た〉

第一次世界大戦 55

大逆事件 10, 51, 53, 55, 63

大政翼賛会 99

大日本国防婦人会 139

大日本産業報国会 99

大日本婦人会 139

『日本婦人』 139

大日本連合婦人会 139

高嶋（高島）米峰 89, 91, 138

高野芳子 116-118

『わが青春・深尾須磨子』 116

高群逸枝（本姓は「橋本」、橋本憲三の妻） 3-15, 18, 32, 37, 39, 40-42, 45, 58, 59, 63-78, 82-92, 99, 106, 107, 112, 113, 123, 124, 126, 137-149, 152-170, 173-178, 182-189, 191-194, 200-204, 209-214, 216, 219, 220, 222-236, 253-260, 262, 263, 265-297, 299, 305-309, 316-318, 320, 322, 330, 331

『十三才集』（c1906年） 4

「娘巡礼記」（1918年） 4

「愛の黎明」（1919年） 4

「民衆哲學」（c1921年） 5, 6

『日月の上に』（1921年） 4-6, 67, 71, 106, 212, 258, 265, 266

『放浪者の詩』（1921年） 6, 67, 72

『私の生活と藝術』（1922年） 6

『美想曲』（1922年） 6, 196

『妾薄命』（1922年） 6

『胸を痛めて』（1922年） 6

『東京は熱病にかゝつてゐる』（1925年） 6-8, 32, 37, 67, 89, 193, 262, 263

『戀愛創生』（1926年） 8, 9, 37, 39, 66, 73, 77, 99

「山川菊榮氏の恋愛観を難ず」（1928年） 39

「踏まれた犬が吠える——山川菊榮氏に——」（1928年） 39

「戀愛行進曲——月漸く昇れり」（1929年） 32, 33

「小ブル藤村成吉に與ふ」（1929年） 41

「お出になさつた——アナーキストの宣言——」（1929年） 41

『黒い女』（1930年） 10, 11, 42, 262, 263

「婦人戦線に立つ」（1930年） 12

「家庭否定論」（1930年） 13, 70

『強権に抗す』（未刊行、c1930年） 64, 75, 92

- 「みぢめな白百合花の話」(1931年) 75
- 『婦人生活戦線』(1931年) 78
- 『大日本女性人名辞書』(1936年) 73, 82-84, 86, 87, 107, 140
- 『大日本女性史 母系制の研究』(初版、1938年) 82, 83, 85-91, 99, 112, 113, 137-144, 147, 148, 153, 159, 167, 289, 291, 308
- 『大日本女性史 母系制の研究』(再版、1941年) 87, 92
- 『日本女性社会史』(1947年) 140, 142, 143, 146
- 『女性史学に立つ』(1947年) 140
- 「家永三郎氏の書評に答う」(1948年) 141
- 『戀愛論』(1948年) 165, 191, 201
- 『母系制の研究 大日本女性史第一巻』(改訂三版、1948年) 87, 124, 140, 143
- 『招婿婚の研究』(1953年) 83, 86, 90-92, 113, 137-144, 146-148, 153, 159, 161, 165, 166, 211, 258, 275, 289-291
- 「家永博士の書評を読んで」(1953年) 143
- 『母系制の研究』(新版、1954年) 88, 144
- 『女性の歴史』全4巻(1954-58年) 66, 83, 144, 145, 147-149, 155, 158, 159, 183, 185, 198, 258, 265
- 『孤独と愛と 学びの細道』(1958年) 157, 158
- 『今昔の歌』(1959年) 157, 158, 161, 165
- 『日本婚姻史』(1963年) 149, 159, 160
- 『高群逸枝全集』(全10巻、1965-67年) 73, 170, 173-177, 184, 188, 196, 204, 211, 222, 223, 257, 266, 275, 288, 289, 307
- 『高村逸枝自伝 火の国の女の日記』(1965年6月) 161, 162, 149, 173-176, 184, 185, 198, 222, 228, 236, 266, 291
- 『高群逸枝全集』第4巻「女性の歴史一」(1966年2月) 175, 184, 196
- 『高群逸枝全集』第5巻「女性の歴史二」(1966年3月) 196
- 『高群逸枝全集』第10巻「火の国の女の日記」(c1966年3月) 64, 90, 139, 160, 165, 167, 175, 196
- 『高群逸枝全集』第2巻「招婿婚の研究一」(1966年5月) 88, 196
- 『高群逸枝全集』第3巻「招婿婚の研究二」(1966年6月) 196
- 『高群逸枝全集』第8巻「全詩集・日月の上に」(1966年7月) 196
- 『高群逸枝全集』第1巻「母性系の研究」(1966年9月) 88, 89, 186
- 『高群逸枝全集』第9巻「小説／随筆／日記」(1966年10月) 196, 197
- 『高群逸枝全集』第6巻「日本婚姻史／恋愛論」(1967年1月) 196, 209
- 『高群逸枝全集』第7巻「評論集・恋愛創生」(1967年2月) 175, 196, 197, 200, 209, 288
- 『高群逸枝雑誌』(橋本憲三の主宰誌、1968-80年) 71, 189, 190, 191, 198, 209-212, 214-216, 221-223, 225, 228, 229, 232, 253, 254, 267, 258, 260, 262, 263, 265, 267, 273, 274, 276, 278-284, 290, 296, 306-308, 318
- 高群逸枝著作後援会(1937年、『大日本女性史 母系制の研究』刊行のための後援会) 59,

82, 85-87, 89, 99, 110, 113, 275

高群逸枝著作刊行後援会（1952年、『招婿婚の研究』刊行のための後援会） 142, 166, 296

高群勝太郎（高群逸枝の父） 4, 152, 165, 253

高群清人（高群逸枝の弟） 158, 209

高群登代子（高群逸枝の母） 4, 152, 165

高群元男（高群逸枝の弟） 158

竹内茂代 85, 89, 142, 161, 163, 166, 169, 231

竹中繁子 85, 99

瀧田樗陰 53

『多都美』 20

異画会絵画展覧会 20

帯刀貞代 57

谷川雁 182, 183

『サークル村』（谷川雁・上野英信・森崎和江らの主宰誌） 182

大正行動隊 183

田端泰子 292

田村俊子（佐藤俊子） 52, 85, 99, 111-113

『女作家』 112

『炮烙の刑』 112

『木乃伊の口紅』 112

〈ち〉

治安維持法 15, 33

チッソ株式会社（→新日本窒素肥料株式会社）

茅野雅子 110

『中央公論』 7, 27, 48, 52, 53, 106, 108, 119

中央公論社 112

『中央公論社七〇年史』 52

中條百合子（→宮本百合子）

〈つ〉

辻本勇 54

『近代の陶工・富本憲吉』 54

常味裕司 321

壺井栄 112

鶴見和子 131

〈と〉

『東京朝日新聞』（『朝日新聞』の前身紙） 85, 99, 109

東京外国語学校（現在の東京外国語大学） 46

東京教育大学（現在の筑波大学） 140, 142, 165, 166

東京高等師範学校（東京教育大学の前身校）（→東京教育大学）

東京女子高等師範学校附属高等女学校（現在のお茶の水女子大学附属高等学校） 19

『東京日日新聞』（『毎日新聞』の前身紙） 103

東京美術学校（現在の東京芸術大学） 19, 48, 50, 58, 120, 122

東京府立一中（現在の東京都立日比谷高等学校） 46

同志社英学校（現在の同志社大学の前身校） 45

『道標』（渡辺京二と山本哲郎が創設した人間学研究会の機関誌） 320

東方問題協会 Eastern Question Association 49

徳富蘇峰 89, 183, 265

洪水文庫 183, 258, 265, 266

徳永直 46

「太陽のない街」 46

戸田房子 231-233, 236, 286, 296

「献身」 231-233, 236, 286, 296

富本一枝（旧姓は「尾竹」、青鞞時代の雅号は「紅吉」、富本憲吉の妻） 3, 15, 16, 18-29, 31, 33-36, 40, 41, 45-47, 52-59, 85, 99, 102-106, 108, 110-113, 116, 117, 119-123, 125, 126, 129-135, 216, 285, 310

「最終の霊の梵鐘に」（1912年） 20

《太陽と壺》（1912年） 20

《陶器》（1912年） 20

「或る夜と、或る朝」（1912年） 20

「群衆のなかに交つてから」（1912年） 26

《アダムとイヴ》（1913年） 26

「藝娼妓の群に對して」（1913年） 52

「自叙傳を讀んで平塚さんに至る」（1913年） 27, 52

「結婚する前と結婚してから」（1917年） 54, 105, 106

「私達の生活」（1920年） 54

「子供と私」（1921年） 106

「貧しき隣人」（1923年） 31

「鮎」（1926年） 31

「東京に住む」（1927年） 31

「七月抄」（1928年） 45

「夜明けに吸はれた煙草——一九二九年の夢」（1929年） 33-36, 40, 45-47

「平塚雷鳥氏の肖像——らいてう論の序に代へて——」（1929年） 40

「女人藝術よ、後れたる前衛になるな」（1931年） 58

「福田晴子さん」（1935年） 108

「宇野千代の印象」（1936年） 108

「仲町貞子の作品と印象 手紙」（1936年） 108

「原節子の印象」（1937年） 108

富本憲吉（富本一枝の夫） 3, 15, 19, 20, 26, 28, 29, 45, 47, 48, 50-52, 54-59, 105, 110, 116-123, 126, 129, 130, 133-135, 310

「ウイリアム・モリスの話」 20, 50, 52, 55

作陶五十年展 47

富本憲吉氏圖案事務所 29

富本憲吉氏夫妻陶器展覧會 54

富本壮吉（富本憲吉と富本一枝の長男） 31, 33, 56

富本岱助（富本陽の息子） 118, 119

富本陶（富本憲吉と富本一枝の次女） 29, 31, 56, 111, 122

富本豊吉（富本憲吉の父） 134

富本陽（富本憲吉と富本一枝の長女） 29, 31, 55, 56, 110, 111, 118, 122, 123, 131

豊嶋芳野 321

ナ行

〈な〉

中江泰子（→井上美子）

中江昭男（中江百合子の息子） 122

中江百合子 122, 123

中川善之助 90, 91

中島和夫 148

中島幸子 37, 42

「アナーキズムの顛落」 37, 42

中野初子 22

中野普 183, 265

中村克郎 264

中村重喜（中村汀女の夫） 121

中村汀女（本名は「破魔子」、中村重喜の妻） 3, 116, 121, 122-126, 146, 212, 216, 330, 331

『春雪』 121

『汀女句集』 121

『汀女自画像』 124

中本たか子（蔵原惟人の妻） 32, 34, 45

中山千夏 272

奈良女子高等師範学校（現在の奈良女子大学） 55, 111

成美女子英語学校 19

〈に〉

新妻伊都子 34, 84, 85, 89

二・二六事件 86, 111

新美卯一郎 10

西川祐子 291, 307, 332

『森の家の巫女 高群逸枝』 292

『西日本新聞』 257

西村アヤ（西村伊作の娘） 131

西村伊作 55, 131

『我に益あり・西村伊作自伝』 131

西村英雄（→橋本英雄）

西村陽吉 24

ニーチェ Nietzsche 6

日支事変（日中戦争） 113, 114, 137

新田とし子 281

日本共産党 55, 56, 58, 181, 182

日本近代文学館 332

日本芸術院 58

日本女子大学校（現在の日本女子大学） 19, 123

『日本談義』（荒木精之の主宰誌、1938-1982年） 154, 158, 169, 170, 234-237

『日本読書新聞』 222

『女人藝術』（長谷川時雨の主宰誌、1928-1932年） 31-33, 35-37, 40-42, 45-47, 56, 58, 59,
63, 75, 85, 108, 109, 112, 126, 223, 288

〈ぬ〉

額田王 7

〈の〉

野上弥生子 45, 59, 85, 99, 107, 109, 111

延島英一（松本正枝の夫） 225-227, 229, 230, 270, 282, 283, 295

野村望東尼 7

ハ行

〈は〉

ハインドマン、ヘンリー・メイアズ Hyndman, Henry Mayers 49

バクーニン Bakunin 38, 65

橋川文三 264

橋本憲三（本名は「憲蔵」、高群逸枝の夫） 3, 4, 6, 9, 10, 42, 66-76, 78, 83, 84, 86, 88, 89,
139, 141, 152-154, 156, 157, 159-161, 163-170, 173-178, 182, 184-198, 200-204, 209-
216, 220-237, 253-285, 287-289, 293-299, 305-309, 316-318, 321, 322

「終焉記」 234, 235, 237, 280

「題未定——わが終末記」 215, 222

「高群逸枝の入院臨終前後の一記録」 168, 237, 280, 296

「高群追悼特集に添えて」 234, 236, 237

「瀬戸内晴美様への手紙」 225, 280-282, 284, 296

- 『わが高群逸枝』（堀場清子との共著） 230, 280-282, 284, 285
- 橋本静子（橋本憲三の妹、橋本英雄の妻） 10, 152, 153, 157, 158, 160, 163-165, 168, 174, 176-178, 184-187, 189, 190, 192, 194, 195, 197, 204, 210, 212, 221, 222, 224, 225, 234, 253-258, 260, 262, 263, 265-267, 269-276, 278-280, 282, 284-290, 294, 296, 297, 299, 305-309, 316, 317, 332
- 「もろさわよう子様へ」 225, 274, 276, 278, 280, 296, 298
- 橋本辰次（橋本憲三の父） 152
- 橋本英雄（旧姓は「西村」、橋本静子の夫） 152, 153, 158, 160, 165, 174, 184, 267, 273
- 橋本藤野（橋本憲三の姉） 152-154, 156, 160, 164, 178, 192, 221, 257, 267-271, 273, 298, 299, 305, 316, 317, 332
- 橋本万平 174, 175
- 「比類のない自叙伝 高群逸枝火の国の女の日記を読む」 174
- 橋本ミキ（橋本憲三の母） 152
- 長谷川時雨 32, 34, 45, 58, 59, 85, 99, 108, 112, 113, 126
- 長谷川如是閑 59
- 羽太鋭治 105, 107
- 『變態性慾論』（澤田順次郎との共著） 105, 107
- 波多野秋子 7, 84, 106, 107
- 服部報公会 137, 138
- 羽仁もと子 55, 56
- 浜田糸衛 158, 163, 166, 233-236, 278
- 林芙美子 32, 34, 59, 112
- 『放浪記』 32
- バーン＝ジョウonz、エドワード Burne-Jones, Edward 48

〈ひ〉

- 日蔭茶屋事件 27, 28
- 『美術新報』 20, 50, 51
- ヒトラー、アドルフ Hitler, Adolf 59, 110
- 平林たい子 34, 40, 45, 85, 112
- 「ロマンチズムとリアリズム——山川菊榮・高群逸枝両氏の論争の批評——」 40
- 平塚らいてう（本名は「明」、奥村博史の妻） 3, 4, 6-8, 11-16, 18-29, 31, 32, 34, 37, 40-42, 45 52, 53, 59, 63, 65, 67, 74, 84, 85, 89, 90, 99, 102-105, 109-111, 113, 122, 123, 126, 142, 146, 158, 159, 162, 165, 166, 168-170, 173, 174, 192, 210, 212, 216, 226, 231, 233, 234, 236, 278, 310
- 「獨立するに就いて両親に」（1914 年） 27
- 「砧村に建てた私たちの家」（1927 年） 31
- 「婦人戦線に参加して」（1930 年） 13, 14, 63

〈ふ〉

『風花』（中村汀女の主宰句誌、1947-2017 年） 116, 121-126
深尾須磨子 85, 107, 110, 112, 116-118, 121
服藤早苗 292
福田令寿 158, 169
藤森成吉 41
「公開状について一言、八木秋子氏へ」 41
藤原良雄 191, 307, 308
『婦女新聞』 59, 99-101, 107, 110
『婦人画報』 110, 131
『婦人公論』 39, 40, 52-54, 99, 107-110, 113, 118, 129, 131, 223, 260, 263
『婦人戦線』（高群逸枝の主宰誌、1930-1931 年） 4, 11, 14, 15, 37, 42, 58, 59, 63, 65, 67-70, 75, 78, 84, 85, 126, 223, 225, 226, 278, 282, 292, 294
『婦人展望』 166
『婦人之友』（羽仁もと子・羽仁吉一による創刊誌） 31, 106, 129
『婦人文藝』（神近市子の主宰誌、1934-37 年） 108, 112, 126
布施延雄 66
普通選挙法 33
プルードン Proudhon 38, 65
プロレタリア文学 3, 33, 34, 45, 46, 67
文化学院 55, 130, 131
『文学界』 231, 232, 236, 296
『文化評論』 55
『文芸戦線』 63
『文芸展望』 220, 224, 225, 227-230, 260, 261, 271, 280

〈へ〉

平凡社 6, 9, 73, 83, 89, 99, 169, 193
『大百科事典』 83
『平民新聞』 10, 48-52, 66
ベーベル Bebel 82

〈ほ〉

ホイッスラー、ジェイムズ Whistler, James 50
穂積重遠 90, 91, 138
『親族法』 91
『ホトトギス』 121
洞富雄 289
堀場清子（鹿野政直の妻） 152, 153, 174, 204, 228-231, 255, 256, 262, 263, 274, 275, 279, 280-282, 284-286, 294, 297, 305, 306
『高群逸枝』（鹿野政直との共著） 230, 255, 262, 263, 275, 279, 280, 284

著作集 14 『外輪山春雷秋月』
火の国の女たち
——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞵の女たちとの友愛
索引

『高群逸枝の生涯 年譜と著作』 152, 174, 204, 297, 305, 306
『娘巡礼記』（高群逸枝著、堀場清子校訂） 275
『わが高群逸枝』（橋本憲三との共著） 230, 280-282, 284, 285
本田顕彰 121

マ行

〈ま〉
『毎日新聞』 266, 279
マクレナン、ジョン・ファergusン McLennan, John Ferguson 86
真杉静枝 32
松井須磨子 64
松浦豊俊（→『暗河』） 219
松尾卯一太 10
松田解子 34, 36, 45, 85
「小林多喜二氏へ」 36
松本正枝（本名は「延島治」、延島英一の妻） 11, 42, 63, 225-228, 282, 283, 285, 295
丸岡秀子 55, 85, 99, 111, 112
『田村俊子とわたし』 112
『日本農村婦人問題』 112
マルクス、カール（マルクス主義） Marx, Karl (Marxism) 14, 34-36, 38-42, 45, 46, 49, 55, 63-65, 223

〈み〉
三上於菟吉 32
三木清 89, 90
水谷八重子 110
水原秋櫻子 122
「祖師谷の客間」 122
南薫造 48, 122
南健（南薫造の孫、南八枝子の夫） 122
南八枝子（柳田国男の孫、南健の妻） 122
『洋画家南薫造 交友関係の研究』 122
宮本百合子（旧姓は「中條」） 32, 107, 108, 112
民芸（民芸運動、民芸派） 130, 132, 133
民主連盟 Democratic Federation 49

〈む〉
無産婦人芸術連盟 11, 13-15, 37, 42, 63, 113, 226, 233
武者小路実篤 110, 121
無政府主義（→アナキズム）

村井知至 49

『社会主義』 49

村上彩子 224, 225, 228, 271

村上信彦 174, 215, 232-234, 262, 273, 274, 279, 289

『高群逸枝と柳田国男——婚制の問題を中心に——』 262, 279

村山籌子（村山和義の妻） 45, 55, 56, 59

「私を罵った夫に与ふる詩」 56

村山和義（村山籌子の夫） 56, 59

室生犀星 121

〈め〉

『麵麴』 108

〈も〉

モーガン、ルイス・ヘンリー Morgan, Lewis Henry 86, 140, 141, 143, 148

モダニズム Modernism 135

望月百合子 11, 34, 37, 42, 45, 59, 63, 113, 226

素川絹子 34

森鷗外 45

森崎和江（→谷川雁） 182

モリス、ウィリアム Morris, William 19, 20, 48-52, 57, 66, 67, 129, 135

『愛さえあれば』 *Love is Enough* 49

「いかにして私は社会主義者になったか」 'How I Became a Socialist' 51

『ヴォルスング族のシガード』 *The Story of Sigurd the Volsung and the Fall of the Niblungs* 49

『希望の巡礼者たち』 *The Pilgrims of Hope* 66

『芸術への希望と不安』 *Hopes and Fears for Art* 49

〈ケルムスコット・ハウス〉 Kelmscott House 49

ケルムスコット・プレス Kelmscott Press 49,

『社会主義——その成長と成果』（アーニスト・ベルファット・ベクスとの共著）
Socialism: Its Growth and Outcome (with Ernest Belfort Bax) 66

『ジョン・ボールの夢』 *A Dream of John Ball* 49, 66

「生活の小芸術」 'The Lesser Arts of Life' 49

『地上の楽園』 *The Earthly Paradise* 49

「パタン・デザインングの歴史」 'The History of Pattern Designing' 49

『変革の兆し』 *Signs of Change* 49

「民衆の芸術」 'The Art of the People' 49

モリス商会 Morris & Co. 48

モリス・マーシャル・フォークナー商会 Morris Marshall Faulkner & Co. 48

〈レッド・ハウス〉 Red House 48

『ユートピア便り』（「理想郷」「無何有郷だより」）*News from Nowhere* 49-51, 66
モリス、ジェイン（愛称は「ジェイニー」、旧姓は「バーデン」）*Morris, Jane (Janey, née Burden)* 48

森田草平 19

もろさわようこ（両沢葉子） 166, 225, 273-279, 286, 296, 297

「高群逸枝」（円地文子監修『文芸復興の才女たち』に所収） 225, 273, 275, 276, 279, 286, 296

ヤ行

〈や〉

八木秋子 11, 34, 36, 37, 41, 42, 63, 226

「簡単な質問（藤森成吉氏へ）」 41

「隅田の妄論を駁す」 42

「藤森成吉氏へ」 36

矢田津世子 32, 59

保持研子 24-26

柳沢政太郎 31

柳田国男 90, 91, 122, 137, 149, 258, 286

『遠野物語』 268

「智入考——史學對民族學の一課題——」 91

柳田為正（柳田国男の息子、南八枝子の父） 122

柳兼子（柳宗悦の妻） 133

柳宗悦 130, 132, 133

『工藝の道』 132

山川菊榮 7, 32, 37, 39, 40, 67, 85, 111, 112, 146, 223

「ドグマから出た幽霊——高群逸枝氏新発見の『マルクス主義社會』について——」 39, 40

山川均 37

やまさきさとし 56

山高しげり（→金子しげり）

山根基世 321

山本哲郎 309, 320

山本淑子 306, 312, 309, 321

鍵田研一 142

鍵田貞子 11, 42, 63, 166, 226, 278

〈ゆ〉

湯浅芳子 59, 107, 108, 110

夕陽丘高等女学校（現在の大阪府立夕陽丘高等学校） 18, 129

〈よ〉

横田文子 108

与謝野晶子 7, 84

吉岡彌生 84, 85, 87, 89

吉田亀太郎（旧姓は「白石」、石牟礼道子の父） 177-181, 199

吉田妙子（石牟礼道子の妹） 214, 320

吉田一（石牟礼道子の弟） 181

吉田ハルノ（石牟礼道子の母） 177-179, 181

吉田松太郎（石牟礼道子の祖父） 177, 179

吉田モカ（石牟礼道子の祖母、通称は「おもかさま」） 177-179, 218

米本浩二 182

『評伝石牟礼道子——渚に立つひと』 182

『讀賣新聞』 110, 111

ら行

〈ら〉

ラファエル前派 Pre-Raphaelites 48,

〈り〉

リーチ、バーナード Leach, Bernard 54, 134

〈る〉

ルクリュ Reclus 65

〈れ〉

レーニン Lenin 65

〈ろ〉

盧溝橋事件 137

ロシア革命 55

ロセッティ、ダンテ・ゲイブリエル Rossetti, Dante Gabriel 48

ワ行

〈わ〉

和歌森太郎 166

『早稲田文学』 53

渡辺京二 186, 197, 200, 215, 219, 264, 273, 306, 319, 320

「石牟礼道子闘病記」 319

『熊本風土記』（渡辺京二の主宰誌） 186, 197, 200, 219